

西原大塚遺跡Ⅱ

西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合

埼玉県志木市遺跡調査会

西原大塚遺跡Ⅱ

西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合

埼玉県志木市遺跡調査会

目 次 (2)

目 次	i
挿図目次	iii
表 目 次	xvi
第 4 章 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物	1
第 1 節 住居跡	1
第 2 節 掘立柱建築遺構	459
第 3 節 方形周溝墓	459
第 4 節 溝跡	507

(第1分冊)

卷頭図版／はじめに／発刊によせて／例 言／
凡 例／調査組織／目 次／挿図目次／表 目 次
第1章 発掘調査の概要
 第1節 調査に至る経過
 第2節 遺跡の位置と環境
 第3節 発掘調査の経過
第2章 旧石器時代の遺構と遺物
 第1節 石器集中地点
第3章 縄文時代の遺構と遺物
 第1節 住居跡
 第2節 土坑
 第3節 埋甕
 第4節 集石
 第5節 炉穴
 第6節 遺構外出土の遺物

(第3分冊)

第5章 古墳時代後期、奈良・平安時代の遺構と遺物
 第1節 住居跡
第6章 中世以降の遺構と遺物
 第1節 土坑
 第2節 溝跡
 第3節 井戸跡
 第4節 配石遺構
第7章 発掘調査をおえて
附 編 自然科学分析
 I 胎土分析
 II 土壌分析
 III 樹種分析
 IV 顔料分析
参考文献
報告書抄録
図版

插图目次

第1图	26号住居跡 (1/60)	1
第2图	26号住居跡出土遺物 (1/4)	2
第3图	27号住居跡 (1/60)	3
第4图	28号住居跡 (1/60)	4
第5图	29号住居跡 (1/60)	5
第6图	30号住居跡 (1/60)	6
第7图	30号住居跡出土遺物 (1/4)	7
第8图	31号住居跡 (1/60)	7
第9图	26~31号住居跡出土遺物 (1/3)	9
第10图	32号住居跡 (1/60)	10
第11图	38号住居跡 (1/60)	11
第12图	38号住居跡出土遺物 (1/4)	11
第13图	39号住居跡 (1/60)	12
第14图	39号住居跡出土遺物 (1/4)	13
第15图	40号住居跡 (1/60)	14
第16图	41号住居跡 (1/60)	15
第17图	41号住居跡出土遺物 (1/4)	16
第18图	42号住居跡 (1/60)	17
第19图	32・38~42号住居跡出土遺物 (1/3)	18
第20图	43号住居跡 (1/4)	19
第21图	43号住居跡出土遺物 (1/4)	20
第22图	44号住居跡、82号土坑 (1/60)	21
第23图	46号住居跡 (1/60)	22
第24图	48号住居跡 (1/60)	22
第25图	43・44・46・48号住居跡出土遺物 (1/3)	23
第26图	49・51号住居跡、88号土坑 (1/60)	24
第27图	50号住居跡 (1/60)	25
第28图	50号住居跡出土遺物 (1/4)	25
第29图	52号住居跡 (1/60)	26
第30图	52号住居跡出土遺物 (1/4)	26
第31图	49~52号住居跡出土遺物 (1/3)	27
第32图	53・55号住居跡 (1/60)	28
第33图	53号住居跡出土遺物 (1/4)	29
第34图	54号住居跡 (1/60)	29
第35图	54号住居跡出土遺物 (1/4)	30
第36图	56号住居跡、90号土坑 (1/60)	38
第37图	56号住居跡出土遺物 (1/4)	38
第38图	58号住居跡 (1/60)	39

第39图	58号住居跡出土遺物 (1/4)	39
第40图	53・54・56・58号住居跡出土遺物 (1/3)	41
第41图	59号住居跡 (1/60)	42
第42图	59号住居跡出土遺物 (1/4)	42
第43图	60・61号住居跡 (1/60)	43
第44图	60号住居跡出土遺物 (1/4)	44
第45图	62号住居跡 (1/60)	45
第46图	62号住居跡出土遺物 (1/4)	45
第47图	63・64号住居跡 (1/60)	47
第48图	59~63号住居跡出土遺物 (1/3)	48
第49图	65号住居跡 (1/60)	49
第50图	66・67・421号住居跡、80・92号土坑 (1/60)	50
第51图	66号住居跡出土遺物 (1/4)	51
第52图	64~67号住居跡出土遺物 (1/3)	52
第53图	68号住居跡、94号土坑 (1/60)	54
第54图	68号住居跡出土遺物 (1/4)	55
第55图	69号住居跡 (1/60)	56
第56图	69号住居跡出土遺物 (1/4)	58
第57图	68・69号住居跡出土遺物 (1/3)	59
第58图	70号住居跡、93号土坑 (1/60)	60
第59图	71号住居跡 (1/60)	61
第60图	71号住居跡出土遺物 (1/4)	62
第61图	70・71号住居跡出土遺物 (1/3)	62
第62图	73号住居跡 (1/60)	63
第63图	73号住居跡出土遺物 1 (1/4)	64
第64图	73号住居跡出土遺物 2 (1/3)	64
第65图	74号住居跡 (1/60)	65
第66图	75号住居跡 (1/60)	67
第67图	75号住居跡遺物分布 (1/60)	68
第68图	75号住居跡出土遺物 (1/4)	69
第69图	76号住居跡 (1/60)	70
第70图	74~76号住居跡出土遺物 (1/3)	71
第71图	77・80号住居跡 (1/60)	72
第72图	78号住居跡 (1/60)	73
第73图	79号住居跡 (1/60)	75
第74图	79号住居跡出土遺物 (1/4)	75
第75图	80号住居跡出土遺物 (1/4)	77
第76图	77~80号住居跡出土遺物 (1/3)	78
第77图	81号住居跡 (1/60)	79
第78图	82号住居跡 (1/60)	79

第79图	83号住居跡 (1/60)	80
第80图	83号住居跡出土遺物 (1/4)	80
第81图	84号住居跡 (1/60)	82
第82图	85号住居跡 (1/60)	82
第83图	85号住居跡出土遺物 (1/4)	83
第84图	82・83・85号住居跡出土遺物 (1/3)	86
第85图	86号住居跡 (1/60)	87
第86图	86号住居跡出土遺物 (1/4)	87
第87图	87号住居跡 (1/60)	88
第88图	87号住居跡出土遺物 (1/4)	88
第89图	88号住居跡 (1/60)	89
第90图	88号住居跡出土遺物 (1/4)	90
第91图	89・98号住居跡 (1/60)	90
第92图	90号住居跡 (1/60)	91
第93图	91号住居跡 (1/60)	92
第94图	92A・92B号住居跡 (1/60)	93
第95图	86~90・92号住居跡出土遺物 (1/3)	94
第96图	93号住居跡 (1/60)	95
第97图	94号住居跡 (1/60)	97
第98图	95号住居跡 (1/60)	98
第99图	96号住居跡 (1/60)	99
第100图	96号住居跡出土遺物 (1/4)	99
第101图	97号住居跡 (1/60)	100
第102图	93・94・96~98号住居跡出土遺物 (1/3)	102
第103图	99号住居跡 (1/60)	103
第104图	100号住居跡 (1/60)	104
第105图	100号住居跡出土遺物 (1/4)	104
第106图	101号住居跡 (1/60)	106
第107图	101号住居跡出土遺物 (1/4)	106
第108图	102号住居跡、131号土坑 (1/60)	107
第109图	103号住居跡 (1/60)	108
第110图	104号住居跡 (1/60)	109
第111图	104号住居跡出土遺物 (1/4)	110
第112图	105号住居跡 (1/60)	111
第113图	106号住居跡 (1/60)	111
第114图	109号住居跡 (1/60)	111
第115图	109号住居跡出土遺物 (1/60)	112
第116图	110号住居跡 (1/60)	112
第117图	99~101・104・110号住居跡出土遺物 (1/3)	114
第118图	111号住居跡 (1/60)	115

第119回	111号住居跡出土遺物 (1/4)	116
第120回	112号住居跡 (1/60)	117
第121回	112号住居跡出土遺物 (1/4)	118
第122回	113号住居跡 (1/60)	118
第123回	113号住居跡出土遺物 (1/4)	119
第124回	114号住居跡 (1/60)	119
第125回	115号住居跡 (1/60)	120
第126回	116号住居跡 (1/60)	121
第127回	116号住居跡出土遺物 (1/4)	122
第128回	111・112・115・116号住居跡出土遺物 (1/3)	123
第129回	117号住居跡 (1/60)	124
第130回	117号住居跡出土遺物 (1/4)	125
第131回	118号住居跡 (1/60)	126
第132回	119号住居跡 (1/60)	127
第133回	119号住居跡出土遺物 (1/4)	128
第134回	120号住居跡 (1/60)	129
第135回	120号住居跡出土遺物 (1/4)	129
第136回	121号住居跡 (1/60)	130
第137回	122号住居跡 (1/60)	131
第138回	117～122号住居跡出土遺物 (1/3)	132
第139回	123号住居跡 (1/60)	134
第140回	124号住居跡 (1/60)	136
第141回	124号住居跡出土遺物 (1/4)	137
第142回	125号住居跡 (1/60)	138
第143回	126号住居跡 (1/60)	139
第144回	126号住居跡出土遺物 (1/4)	140
第145回	123・124・126号住居跡出土遺物 (1/3)	142
第146回	127号住居跡 (1/60)	143
第147回	127号住居跡出土遺物 (1/4)	144
第148回	128号住居跡 (1/60)	144
第149回	128号住居跡出土遺物 (1/4)	145
第150回	129・130号住居跡 (1/60)	146
第151回	134号住居跡 (1/60)	147
第152回	134号住居跡出土遺物 (1/4)	148
第153回	135号住居跡 (1/60)	148
第154回	136号住居跡 (1/60)	149
第155回	136号住居跡出土遺物 (1/4)	149
第156回	137号住居跡 (1/60)	150
第157回	138号住居跡 (1/60)	152
第158回	138号住居跡出土遺物 (1/4)	152

第159图	127・128・130・134・136~138号住居跡出土遺物 (1/3)	154
第160图	139号住居跡 (1/60)	155
第161图	139号住居跡出土遺物 (1/4)	156
第162图	140号住居跡 (1/60)	156
第163图	149号住居跡 (1/60)	157
第164图	149号住居跡出土遺物 (1/4)	157
第165图	150・153号住居跡 (1/60)	158
第166图	150号住居跡出土遺物 (1/4)	159
第167图	151号住居跡 (1/60)	160
第168图	152号住居跡 (1/60)	161
第169图	139・140・149~152号住居跡出土遺物 (1/3)	162
第170图	154~156号住居跡 (1/60)	165
第171图	155号住居跡出土遺物 (1/4)	166
第172图	157・158号住居跡 (1/60)	168
第173图	158号住居跡出土遺物 (1/4)	168
第174图	159号住居跡 (1/60)	169
第175图	160・162号住居跡 (1/60)	170
第176图	160号住居跡出土遺物 (1/4)	171
第177图	161号住居跡、242・243号土坑 (1/60)	172
第178图	161号住居跡出土遺物 (1/4)	173
第179图	163号住居跡 (1/60)	174
第180图	163号住居跡出土遺物 (1/4)	175
第181图	153・154・156・158~161・163号住居跡出土遺物 (1/3)	176
第182图	164号住居跡 (1/60)	177
第183图	172号住居跡 (1/60)	178
第184图	172号住居跡出土遺物 (1/4)	178
第185图	173号住居跡 (1/60)	179
第186图	174号住居跡、279号土坑 (1/60)	180
第187图	176号住居跡 (1/60)	181
第188图	178号住居跡 (1/60)	182
第189图	179号住居跡 (1/60)	182
第190图	179号住居跡出土遺物 (1/4)	183
第191图	259号住居跡 (1/60)	184
第192图	260号住居跡 (1/60)	185
第193图	261号住居跡、380号土坑 (1/60)	186
第194图	261号住居跡出土遺物 (1/4)	187
第195图	262号住居跡 (1/60)	188
第196图	262号住居跡出土遺物 (1/4)	189
第197图	263号住居跡 (1/60)	189
第198图	264号住居跡 (1/60)	191

第199回	265号住居跡 (1/60)	192
第200回	265号住居跡出土遺物 (1/4)	192
第201回	266号住居跡 (1/60)	194
第202回	266号住居跡出土遺物 (1/4)	196
第203回	172・179・259・260・262・263・266号住居跡出土遺物 (1/3)	197
第204回	267号住居跡 (1/60)	198
第205回	268号住居跡 (1/60)	199
第206回	269号住居跡 (1/60)	199
第207回	270号住居跡 (1/60)	200
第208回	270号住居跡出土遺物 (1/4)	200
第209回	271号住居跡 (1/60)	201
第210回	272号住居跡 (1/60)	201
第211回	273号住居跡 (1/60)	202
第212回	273号住居跡出土遺物 (1/4)	203
第213回	274号住居跡 (1/60)	204
第214回	274号住居跡出土遺物 (1/4)	205
第215回	275号住居跡 (1/60)	205
第216回	276号住居跡 (1/60)	206
第217回	278号住居跡 (1/60)	207
第218回	278号住居跡出土遺物 (1/4)	208
第219回	279号住居跡 (1/60)	209
第220回	280号住居跡 (1/60)	210
第221回	267・269・270・273・274・276・278~280号住居跡出土遺物 (1/3)	211
第222回	281号住居跡 (1/60)	212
第223回	282号住居跡 (1/60)	213
第224回	283・285号住居跡 (1/60)	214
第225回	286号住居跡 (1/60)	215
第226回	287号住居跡 (1/60)	216
第227回	289号住居跡 (1/60)	218
第228回	290号住居跡 (1/60)	219
第229回	290号住居跡出土遺物 (1/4)	219
第230回	291号住居跡 (1/60)	221
第231回	291号住居跡出土遺物 (1/4)	223
第232回	292号住居跡 (1/60)	225
第233回	295号住居跡 (1/60)	226
第234回	296号住居跡 (1/60)	226
第235回	296号住居跡出土遺物 (1/4)	226
第236回	297号住居跡 (1/60)	227
第237回	298号住居跡 (1/60)	228
第238回	299号住居跡 (1/60)	229

第239图	299号住居跡出土遺物 (1/4)	229
第240图	300号住居跡 (1/60)	230
第241图	301号住居跡 (1/60)	230
第242图	302号住居跡 (1/60)	231
第243图	302号住居跡出土遺物 (1/4)	231
第244图	303号住居跡 (1/60)	232
第245图	304・305号住居跡 (1/60)	232
第246图	305号住居跡出土遺物 (1/4)	233
第247图	306号住居跡 (1/60)	234
第248图	308号住居跡 (1/60)	234
第249图	309号住居跡 (1/60)	235
第250图	309号住居跡出土遺物 (1/4)	235
第251图	282・289・291・295・297・304・306・309号住居跡出土遺物 (1/3)	236
第252图	310号住居跡 (1/60)	237
第253图	311号住居跡 (1/60)	238
第254图	312号住居跡 (1/60)	238
第255图	313号住居跡 (1/60)	239
第256图	313号住居跡出土遺物 (1/4)	240
第257图	314号住居跡 (1/60)	241
第258图	315号住居跡 (1/60)	241
第259图	316号住居跡 (1/60)	242
第260图	317号住居跡 (1/60)	242
第261图	318号住居跡 (1/60)	243
第262图	318号住居跡出土遺物 (1/4)	243
第263图	319号住居跡 (1/60)	245
第264图	319号住居跡出土遺物 (1/4)	245
第265图	321号住居跡 (1/60)	246
第266图	322号住居跡 (1/60)	247
第267图	323号住居跡 (1/60)	248
第268图	324号住居跡 (1/60)	249
第269图	325号住居跡、417号土坑 (1/60)	250
第270图	325号住居跡出土遺物 (1/4)	250
第271图	326号住居跡 (1/60)	252
第272图	326号住居跡出土遺物 (1/4)	252
第273图	329号住居跡 (1/60)	253
第274图	330号住居跡 (1/60)	254
第275图	331号住居跡 (1/60)	255
第276图	332号住居跡 (1/60)	255
第277图	333号住居跡 (1/60)	256
第278图	303・318・322・324・325・330・331・333号住居跡出土遺物 (1/3)	258

第279图	334号住居跡 (1/60)	259
第280图	334号住居跡出土遺物 (1/4)	259
第281图	335号住居跡 (1/60)	260
第282图	336号住居跡 (1/60)	261
第283图	336号住居跡出土遺物 (1/4)	261
第284图	337号住居跡 (1/60)	262
第285图	337号住居跡出土遺物 (1/4)	262
第286图	338号住居跡 (1/60)	263
第287图	339号住居跡 (1/60)	264
第288图	339号住居跡出土遺物 (1/4)	264
第289图	340号住居跡 (1/60)	265
第290图	341・342号住居跡 (1/60)	266
第291图	341号住居跡出土遺物 (1/4)	267
第292图	342号住居跡出土遺物 (1/4)	267
第293图	343号住居跡炭化材出土状態 (1/60)	268
第294图	343号住居跡出土遺物 (1/4)	268
第295图	344号住居跡 (1/60)	269
第296图	345号住居跡 (1/60)	270
第297图	345号住居跡出土遺物 (1/4)	270
第298图	346・347号住居跡 (1/60)	271
第299图	334~337・339・341・343・346・347号住居跡出土遺物 (1/3)	273
第300图	348号住居跡 (1/60)	274
第301图	349・352号住居跡 (1/60)	275
第302图	349号住居跡出土遺物 (1/4)	277
第303图	350号住居跡、423号土坑 (1/60)	279
第304图	351号住居跡 (1/60)	280
第305图	352号住居跡出土遺物 (1/4)	281
第306图	353号住居跡 (1/60)	282
第307图	354号住居跡 (1/60)	283
第308图	354号住居跡出土遺物 (1/4)	284
第309图	355号住居跡 (1/60)	284
第310图	355号住居跡出土遺物 (1/4)	285
第311图	348~350・352・354・355号住居跡出土遺物 (1/3)	286
第312图	356号住居跡 (1/60)	287
第313图	358号住居跡 (1/60)	288
第314图	359・360号住居跡 (1/60)	289
第315图	359号住居跡出土遺物 (1/4)	290
第316图	360号住居跡出土遺物 (1/4)	290
第317图	361号住居跡 (1/60)	292
第318图	361号住居跡出土遺物 (1/4)	292

第319回	362号住居跡 (1/60)	293
第320回	363号住居跡 (1/60)	294
第321回	363号住居跡出土遺物 (1/4)	294
第322回	356・359～363号住居跡出土遺物 (1/3)	295
第323回	364号住居跡 (1/60)	297
第324回	364号住居跡出土遺物 (1/4)	297
第325回	365号住居跡 (1/60)	298
第326回	365号住居跡出土遺物 (1/4)	300
第327回	366号住居跡 (1/60)	302
第328回	367号住居跡 (1/60)	303
第329回	368号住居跡 (1/60)	304
第330回	368号住居跡出土遺物 (1/4)	304
第331回	369号住居跡 (1/60)	305
第332回	369号住居跡出土遺物 (1/4)	305
第333回	370号住居跡 (1/60)	306
第334回	370号住居跡出土遺物 (1/4)	306
第335回	374号住居跡 (1/60)	307
第336回	374号住居跡出土遺物 (1/4)	308
第337回	375号住居跡 (1/60)	310
第338回	375号住居跡出土遺物 (1/4)	310
第339回	376号住居跡 (1/60)	311
第340回	376号住居跡出土遺物 (1/4)	311
第341回	377号住居跡 (1/60)	312
第342回	378号住居跡 (1/60)	313
第343回	379号住居跡 (1/60)	314
第344回	380号住居跡 (1/60)	315
第345回	380号住居跡出土遺物 (1/4)	315
第346回	364・369・370・374・375・378・380号住居跡出土遺物 (1/3)	317
第347回	381号住居跡 (1/60)	318
第348回	382号住居跡 (1/60)	319
第349回	383号住居跡 (1/60)	320
第350回	384号住居跡 (1/60)	321
第351回	384号住居跡出土遺物 (1/4)	321
第352回	385号住居跡 (1/60)	322
第353回	385号住居跡出土遺物 (1/4)	322
第354回	386号住居跡 (1/60)	323
第355回	395号住居跡 (1/60)	324
第356回	395号住居跡出土遺物 (1/4)	325
第357回	410号住居跡 (1/60)	325
第358回	410号住居跡出土遺物 (1/4)	325

第359回	411号住居跡 (1/60)	326
第360回	411号住居跡出土遺物 (1/4)	326
第361回	412号住居跡 (1/60)	328
第362回	412号住居跡出土遺物 (1/4)	328
第363回	413号住居跡 (1/60)	329
第364回	413号住居跡出土遺物 (1/4)	329
第365回	414号住居跡 (1/60)	330
第366回	422号住居跡 (1/60)	331
第367回	410~412・422号住居跡出土遺物 (1/3)	332
第368回	423号住居跡 (1/60)	333
第369回	424号住居跡 (1/60)	334
第370回	425号住居跡 (1/60)	335
第371回	426号住居跡 (1/60)	336
第372回	426号住居跡出土遺物 (1/4)	337
第373回	427号住居跡 (1/60)	338
第374回	427号住居跡出土遺物 (1/4)	339
第375回	428号住居跡 (1/60)	341
第376回	429号住居跡 (1/60)	342
第377回	431号住居跡 (1/60)	343
第378回	431号住居跡出土遺物 (1/4)	343
第379回	425~429・431号住居跡出土遺物 (1/3)	345
第380回	432号住居跡 (1/60)	346
第381回	433・463号住居跡 (1/60)	347
第382回	435号住居跡 (1/60)	348
第383回	437号住居跡 (1/60)	350
第384回	437号住居跡出土遺物 (1/4)	350
第385回	438号住居跡 (1/60)	352
第386回	438号住居跡出土遺物 (1/4)	352
第387回	440号住居跡 (1/60)	353
第388回	440号住居跡出土遺物 (1/4)	353
第389回	441号住居跡 (1/60)	355
第390回	442号住居跡 (1/60)	356
第391回	443号住居跡 (1/60)	358
第392回	432・433・437・438・440~443号住居跡出土遺物 (1/3)	359
第393回	444号住居跡 (1/60)	361
第394回	444号住居跡出土遺物 (1/4)	361
第395回	445号住居跡 (1/60)	363
第396回	445号住居跡出土遺物 (1/4)	364
第397回	444・445号住居跡出土遺物 (1/3)	365
第398回	446号住居跡 (1/60)	366

第399回	447号住居跡 (1/60)	367
第400回	447号住居跡出土遺物 (1/4)	367
第401回	448号住居跡 (1/60)	368
第402回	448号住居跡出土遺物 (1/4)	368
第403回	449号住居跡 (1/60)	370
第404回	450号住居跡 (1/60)	372
第405回	451号住居跡 (1/60)	372
第406回	452号住居跡 (1/60)	373
第407回	453号住居跡 (1/60)	374
第408回	446・448～453号住居跡出土遺物 (1/3)	376
第409回	454号住居跡 (1/60)	377
第410回	455号住居跡 (1/60)	378
第411回	457号住居跡 (1/60)	378
第412回	458号住居跡 (1/60)	378
第413回	459号住居跡 (1/60)	379
第414回	460号住居跡 (1/60)	382
第415回	460号住居跡出土遺物 (1/4)	382
第416回	459・460号住居跡出土遺物 (1/3)	383
第417回	461号住居跡 (1/60)	385
第418回	461号住居跡出土遺物 (1/4)	386
第419回	462号住居跡 (1/60)	386
第420回	462号住居跡出土遺物 (1/4)	387
第421回	464号住居跡 (1/60)	388
第422回	465号住居跡 (1/60)	388
第423回	466号住居跡 (1/60)	390
第424回	466号住居跡出土遺物 (1/4)	391
第425回	461・462・466号住居跡出土遺物 (1/3)	392
第426回	468号住居跡 (1/60)	393
第427回	468号住居跡出土遺物 (1/4)	394
第428回	469号住居跡 (1/60)	396
第429回	469号住居跡出土遺物 (1/4)	397
第430回	471号住居跡 (1/60)	398
第431回	472号住居跡 (1/60)	398
第432回	473号住居跡 (1/60)	399
第433回	473号住居跡出土遺物 (1/4)	399
第434回	474号住居跡 (1/60)	400
第435回	474号住居跡出土遺物 (1/4)	401
第436回	475号住居跡 (1/60)	402
第437回	476号住居跡 (1/60)	404
第438回	477号住居跡 (1/60)	406

第439图	477号住居跡出土遺物 (1/4)	406
第440图	468・469・473・475~477号住居跡出土遺物 (1/3)	407
第441图	478号住居跡 (1/60)	408
第442图	478号住居跡出土遺物 (1/4)	408
第443图	479号住居跡 (1/60)	409
第444图	480号住居跡 (1/60)	409
第445图	481号住居跡 (1/60)	410
第446图	482号住居跡 (1/60)	412
第447图	482号住居跡出土遺物 (1/4)	413
第448图	483号住居跡 (1/60)	414
第449图	484号住居跡 (1/60)	415
第450图	485号住居跡 (1/60)	416
第451图	486号住居跡 (1/60)	417
第452图	487号住居跡 (1/60)	417
第453图	478~487号住居跡出土遺物 (1/3)	418
第454图	488・493号住居跡 (1/60)	419
第455图	489号住居跡 (1/60)	420
第456图	489号住居跡出土遺物 (1/4)	422
第457图	490号住居跡 (1/60)	423
第458图	491号住居跡 (1/60)	424
第459图	492号住居跡 (1/60)	425
第460图	492号住居跡出土遺物 (1/4)	425
第461图	495号住居跡 (1/60)	427
第462图	496号住居跡 (1/60)	428
第463图	489・491~493・495・496号住居跡出土遺物 (1/3)	429
第464图	497号住居跡 (1/60)	430
第465图	498号住居跡 (1/60)	431
第466图	499号住居跡 (1/60)	432
第467图	499号住居跡出土遺物 (1/4)	432
第468图	500号住居跡 (1/60)	434
第469图	501号住居跡 (1/60)	434
第470图	501号住居跡出土遺物 (1/4)	434
第471图	502号住居跡 (1/60)	435
第472图	502号住居跡出土遺物 (1/4)	435
第473图	503・504号住居跡 (1/60)	437
第474图	505号住居跡 (1/60)	437
第475图	506号住居跡 (1/60)	438
第476图	506号住居跡出土遺物 (1/4)	438
第477图	507号住居跡 (1/60)	439
第478图	497~502・505~507号住居跡出土遺物 (1/3)	440

第479图	508·509号住居跡 (1/60)	441
第480图	508号住居跡出土遺物 (1/4)	441
第481图	510号住居跡 (1/60)	444
第482图	510号住居跡出土遺物 (1/4)	445
第483图	511号住居跡 (1/60)	446
第484图	512号住居跡 (1/60)	447
第485图	513号住居跡 (1/60)	447
第486图	516号住居跡 (1/60)	449
第487图	516号住居跡出土遺物 (1/4)	449
第488图	531号住居跡 (1/60)	450
第489图	531号住居跡出土遺物 (1/4)	450
第490图	534号住居跡 (1/60)	451
第491图	534号住居跡出土遺物 (1/4)	452
第492图	535号住居跡 (1/60)	452
第493图	535号住居跡出土遺物 (1/4)	453
第494图	536号住居跡 (1/60)	454
第495图	536号住居跡出土遺物 (1/4)	454
第496图	510~512·531·534~536号住居跡出土遺物 (1/3)	457
第497图	2号掘立柱建築遺構 (1/60)	460
第498图	1号方形周溝墓 (1/120)	461
第499图	1号方形周溝墓出土遺物 (1/3)	463
第500图	4号方形周溝墓 (1/60)	465
第501图	4号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)	468
第502图	4号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)	469
第503图	7号方形周溝墓 (1/60)	470
第504图	8号方形周溝墓 (1/60)	471
第505图	8号方形周溝墓出土遺物 (1/4)	472
第506图	9号方形周溝墓 (1/60)	473
第507图	10号方形周溝墓 (1/60)	475
第508图	10号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)	478
第509图	10号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)	478
第510图	11·12号方形周溝墓 (1/60)	479
第511图	11号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)	482
第512图	11号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)	482
第513图	13号方形周溝墓 (1/60)	483
第514图	14号方形周溝墓 (1/60)	484
第515图	14号方形周溝墓出土遺物 (1/4)	484
第516图	15号方形周溝墓 (1/60)	485
第517图	16号方形周溝墓 (1/60)	487
第518图	16号方形周溝墓出土遺物 (1/4)	489

第519図	18・20号方形周溝墓 (1/60)	491
第520図	18号方形周溝墓出土遺物 (1/3)	493
第521図	20号方形周溝墓出土遺物 (1/3)	493
第522図	21号方形周溝墓 (1/60)	494
第523図	21号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)	495
第524図	21号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)	495
第525図	22号方形周溝墓 (1/60)	496
第526図	22号方形周溝墓出土遺物 (1/4)	496
第527図	23号方形周溝墓 (1/60)	497
第528図	23号方形周溝墓出土遺物 (1/3)	498
第529図	24号方形周溝墓 (1/60)	499
第530図	24号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)	500
第531図	24号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)	501
第532図	25・26号方形周溝墓 (1/60)	503
第533図	25号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)	505
第534図	25号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)	505
第535図	27号方形周溝墓 (1/60)	506
第536図	27号方形周溝墓出土遺物 (1/3)	506
第537図	28号方形周溝墓 (1/60)	507
第538図	28号方形周溝墓出土遺物 (1/4)	507
第539図	4号溝跡・方形周溝墓出土遺物 (4/5)	508
第540図	13号溝跡 (1/60)	509
第541図	24号溝跡 (1/60)	510
第542図	40・44号溝跡 (1/60)	511
第543図	44号溝跡出土遺物 (1/4)	514
第544図	13・24・40・44号溝跡出土遺物 (1/3)	515

表 目 次

表 1	弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覽表	516
-----	---------------------	-----

第4章 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

第1節 住居跡

26号住居跡（第1図）

〔位置〕 1地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）楕円形。（規模）不明×374cm。（主軸方位）N-23°-W。（壁高）25~34cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北に偏って位置する。65×56cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）3ヵ所のコーナーに近い3本が主柱穴の一部になるうか。南壁下中央から僅かに北に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東コーナー壁下に位置する。径43cmの円形を呈し、深さ13cmを測る。周囲には幅30~35cm・高さ3~4cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕 床面上に土器片が点在している。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

26号住居跡出土遺物（第2図、第9図1~8）

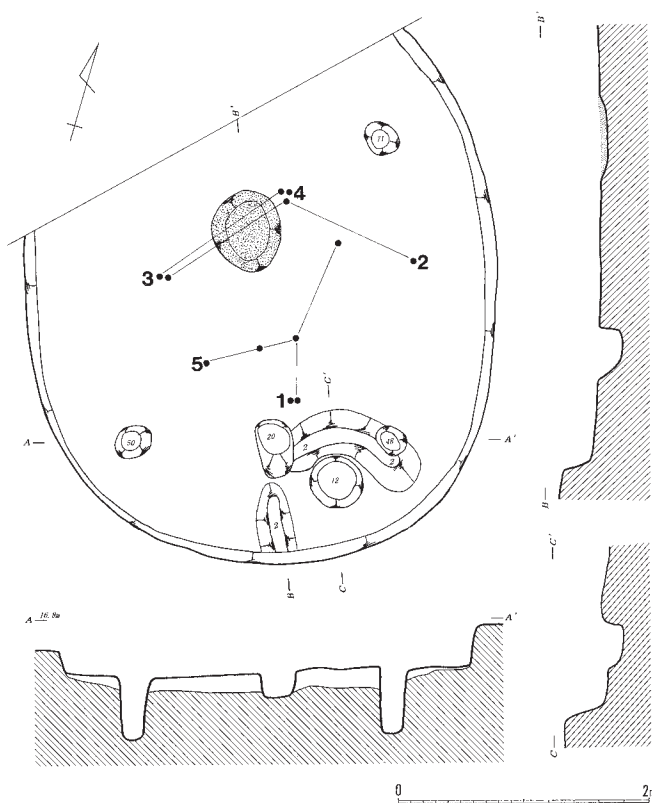
壺形土器（第2図1・2、第9図1・6・7）

第2図1は体部上半以上が残存する。口径は14.2cmを測る。球状を呈すると推測される体部から、頸部は「く」字状に屈曲し、複合口縁部は外反する。口縁部内外面共にヘラミガキされるが、外面には縦位、内面には横位の消しきれないハケ目痕が残る。体部外面はヘラミガキされるが工具痕が残る。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むがきめ細かい。貯蔵穴付近からの出土である。

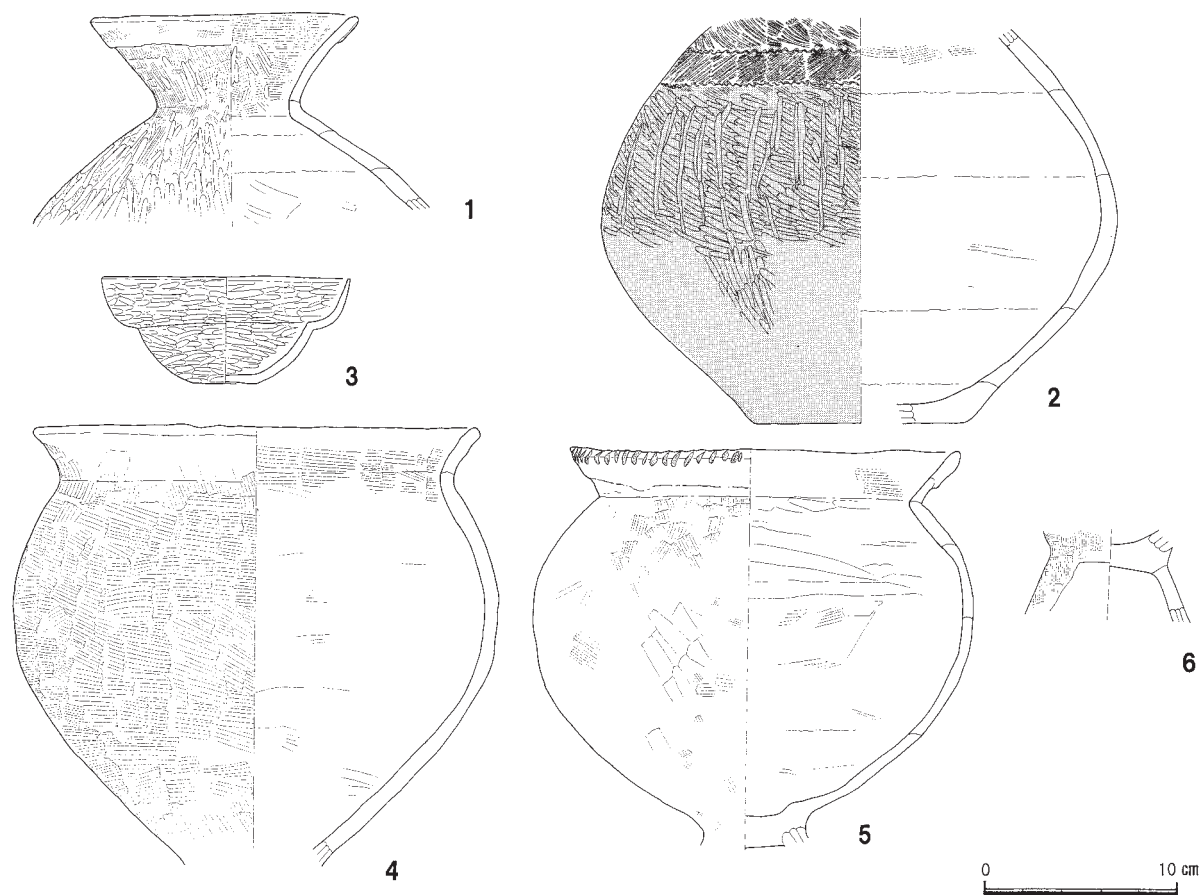
2は口縁部と体部の1/2程度を欠損する。平底の底部から大きく開きながら立ち上がり、体部中位に最大径をもつ張りの強い球状の体部を呈する器形である。肩部文様帯には、1段目には無節Rの端末結節、2段目には無節Lの端末結節縄文が施される。縄文帯の中央には、直径約1cmの円形赤彩文が8個みられる。外面縄文帯以外は斜位、縦位にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされるが、器面の荒れが激しく不明瞭。底部には木葉痕がみられる。色調は橙色（7.5YR7/6）、赤彩部が赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉周囲の覆土中からの出土。

第9図1は複合口縁部破片。外面はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央付近からの出土。

6は肩部破片。外面にはRLの単節縄文が羽状に



第1図 26号住居跡（1/60）



第2図 26号住居跡出土遺物 (1/4)

施され、縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

7は頸部破片。ゆるやかにくびれ、外面には刻みが巡る。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。炉付近から出土。

埴形土器（第2図3）

全体の1/2程度が残存。底径3.4cm・器高5.7cm・推定口径13.2cmを測る。僅かに上げ底の小さな底部から内湾して立ち上がり、碗状を呈する体部を作出する。頸部は強く外屈し、口縁部は内湾しながら開く。口唇部内外面共にヨコナデ、以下は横位にヘラミガキされる。底部はヘラケズリされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。住居跡中央からの出土。

甕形土器（第2図4～6、第9図2～5・8）

第2図4・5は台付甕形土器の甕部の1/2程度が残存する。4は口径13.5cmを測る。最大径を体部上半にもち、体部下半から脚台部にかけて急にすぼまる器形である。頸部は屈曲し口縁部は外反する。口唇部内外面共にヨコナデ、以下ヘラナデされるが、体部外面と、口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。炉付近床面上からの出土。5は口径13.5cmを測る。体部中位に最大径をもつ球状の体部から立ち上がり頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には柂目の板の小口部分でやや左よりから刺突された刻みが巡る。口縁部内外面共にヘラナデされるが、外面には整形時の輪積痕が一部分にみられる。体部内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が僅かに残る。内面には工具痕が残るが、器面の剥離が激しく不明瞭。色調はにぶい橙色（5YR7/4）、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。炉と貯蔵穴の間の床面上からの出土。

6は台付甕形土器の脚台部破片。接合部のみ残存する。甕部下端でくびれて裾部へかけて広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが、外面には縦位のハケ目痕が残る。色調は外面がにぶい橙色（7.5YR7/4）、内面が橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には粗砂を含む。覆土中からの出土。

第9図2～5は口縁部破片。2は口唇部外面に先端の鋭い工具により押捺された刻みが巡る。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。3・4は口唇部外面に浅く刺突された刻みが巡る。色調は3が灰褐色（7.5YR4/2）、4はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。共に胎土には細礫・粗砂を含む。5は内湾気味に開く口縁で、内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中から出土した。

8は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

27号住居跡（第3図）

〔位置〕 1地点。

〔構造〕 南側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）32～37cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に平坦で遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から数点の破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

27号住居跡出土遺物（第9図9～12）

壺形土器（9～11）

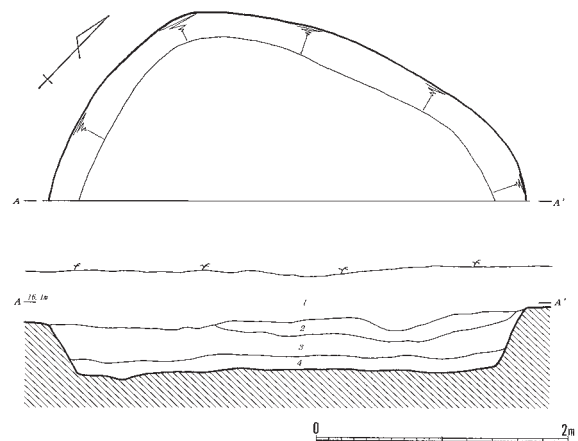
9は口縁部破片で、複合口縁部が大きく外反する。口唇端部と、口縁部内面には無節Rの端末結節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

10・11は肩部破片。10はLRの単節縄文を羽状に施し、縄文帯の境目には円形赤彩文が施される。文様帯上端には円形浮文が貼付され、下端には鋸歯文がみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。11はLRの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中からの出土。

鉢形土器（12）

12は鉢形土器と思われる口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈す



第3図 27号住居跡（1/60）

る。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

28号住居跡（第4図）

〔位置〕 1地点。

〔構造〕 南東コーナー部調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）395×296cm。（主軸方位）N-12°-E。（壁高）15～20cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全面に軟弱で遺存状態は不良である。（炉）住居中央から北に偏って位置する。径40cmの円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）南壁下東側に偏って位置する。径36cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土の単一土層である。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 短軸が主軸との住居跡である。

28号住居跡出土遺物（第9図13～15）

壺形土器（13）

頸部破片。内外面共にヘラミガキされるが、ハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（14・15）

14は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。2の色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

15は台付甕形土器の脚台部破片。裾端部には粘土のはみだしがみられる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中から出土した。

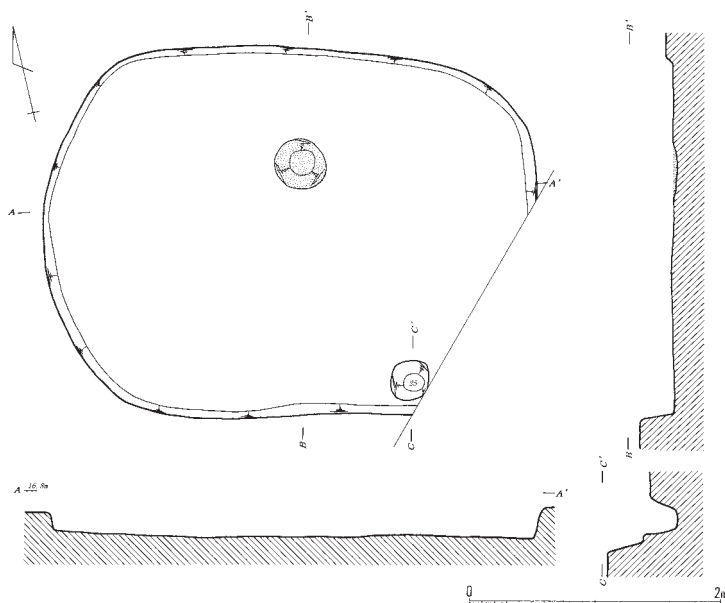
29号住居跡（第5図）

〔位置〕 1地点。

〔構造〕 東側・南側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）33～39cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 3層 黒色土。ローム粒子を含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子・ロームブロックを含む。
- 5層 黒色土。ローム小ブロックを含む。
- 6層 暗褐色土。ロームブロックを含む。



第4図 28号住居跡（1/60）

貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

29号住居跡出土遺物（第9図16～19）

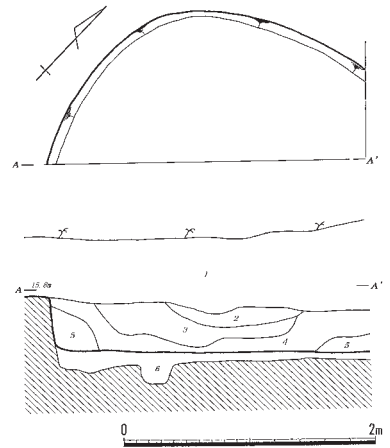
壺形土器（16～18）

いずれも体部破片。外面はヘラミガキされるが、内面はヘラナデされる。色調は16が橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には礫・粗砂を含むがきめ細かい。17が浅黄褐色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。18が灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。

いずれも覆土中から出土した。

甕形土器（19）

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第5図 29号住居跡（1/60）

30号住居跡（第6図）

〔位置〕 1地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×450cm。（主軸方位）N-65°-E。（壁高）50～54cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅16～23cm・下幅4～7cm・深さ2～10cmを測り全周すると思われる。（床面）硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。（炉）住居中央から西に偏って位置する。62×46cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。（柱穴）3ヵ所のコーナーに近い3本が支柱穴の一部と思われる。東壁下中央から僅かに西に偏って凸堤を切った1本は入口施設になるうか。（貯蔵穴）東壁下の北東コーナーに位置する。43×39cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。周囲には幅29cm前後・高さ4cm前後の凸堤を鍵状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 暗黄褐色。ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 褐色土。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

不規則な堆積状態で、埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕 貯蔵穴付近と南西コーナー付近と覆土中から比較的多く出土。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

30号住居跡出土遺物（第7図、第9図20～25）

壺形土器（第7図1、第9図20～23）

第7図1は肩部以上1/2程度が残存し、推定口径4.3cmを測る。頸部はやや強くくびれて複合口縁部は外反する。口唇部内外面共にヨコナデ。口縁部内外面共にヘラミガキされるが、外面口縁部直下には消しきれないハケ目痕が残る。内面は斑点状の剥離が激しく不明瞭。色調はにぶい黄褐色（10YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を

含むがきめ細かい。住居跡南西コーナー壁溝内より出土した。

第9図20は複合口縁部破片。口縁端部には、無節Lの縄文が横方向に施文される。口縁部内面は同じ原体で縦回転に施文され、内部には直径1cmの円形赤彩文が5ヵ所にみられる。口縁部以下ヘラミガキされ赤彩される。色調は明赤褐色(5YR5/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

21は複合口縁部破片。外面には棒状浮文が貼付され、内面はヘラミガキされる。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

22~23は同一個体と思われる肩部破片。外面にはRLの単節縄文の端末結節が羽状に施される。内面は横方向にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

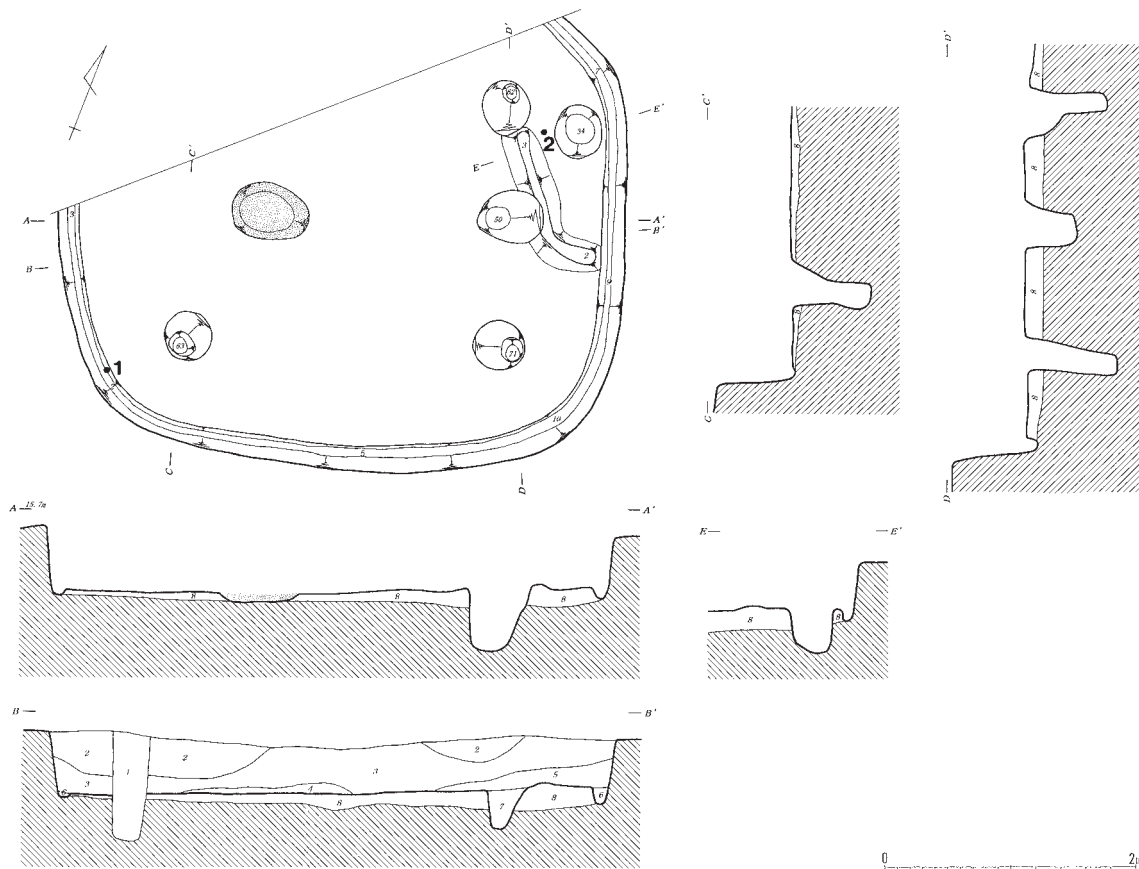
20~23は覆土中からの出土。

甕形土器(第7図2、第9図24・25)

第7図2は台付甕形土器の脚台部。裾部径9cm。接合部でくびれて直線的に広がる器形である。脚裾端部には粘土のはみだしがみられる。甕部内面はヘラナデされるが、表面に炭化物の付着がみられる。脚台部内外面共にヘラナデされるが、外面と内面下位にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴付近から出土。

第9図24は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は褐灰色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中より出土した。

25は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土である。



第6図 30号住居跡(1/60)

31号住居跡（第8図）

〔位置〕 1地点。

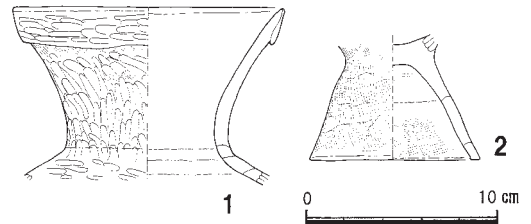
〔構造〕（平面形）不整形円形。（規模）420×415cm。（主軸方位）N-66°-E。（壁高）27~35cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。被熱を受けて赤化している部分を検出する。（炉）住居中央から東に偏って位置する。67×54cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。（柱穴）支柱穴は検出されなかった。西壁下中央から僅かに東に偏った位置の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西コーナーに位置する。径36cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。周囲には幅39cm前後・高さ2~5cmの凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

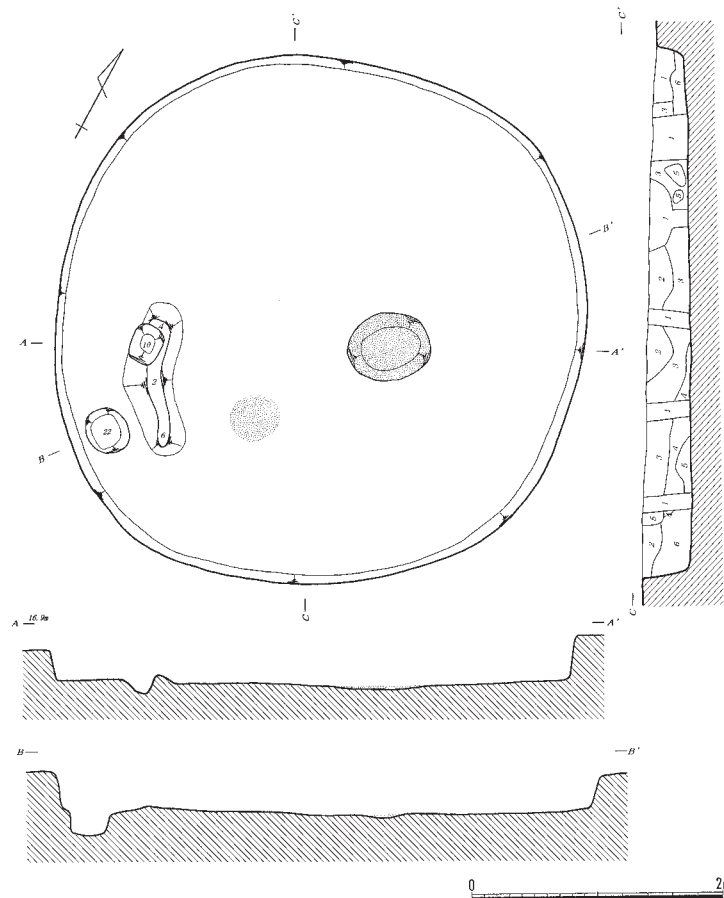
- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 暗黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 ロームブロック。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子を含む。

堆積状態が不規則で、埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。



第7図 30号住居跡出土遺物（1/4）



第8図 31号住居跡（1/60）

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

31号住居跡出土遺物（第9図26～28）

壺形土器（26）

複合口縁部破片。外面には棒状浮文が貼付される。内面はヘラミガキされ赤彩される。色調は浅黄橙色（7.5YR 8/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むがきめ細かい。覆土中から出土した。

鉢形土器（27）

口縁部破片で、内湾気味に立ち上がる器形と思われる。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（28）

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

32号住居跡（第10図）

〔位置〕 1地点。

〔構造〕 南側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）38～49cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全面軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）西側コーナーの柱穴が支柱穴の1本と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。焼土粒子を含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

〔遺物〕 覆土中から数点出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

32号住居跡出土遺物（第19図1～4）

壺形土器（1）

複合口縁部破片。外面はヘラミガキされるが、ハケ目痕が残る。内面にはLRの単節縄文の端末結節が施され、縄文帯内部には直径1cm程度の円形赤彩文が2ヵ所にみられる。縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

鉢形土器（2）

口縁部破片。口唇部は面取りされ、角状を呈する。内外面共にヘラミガキされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

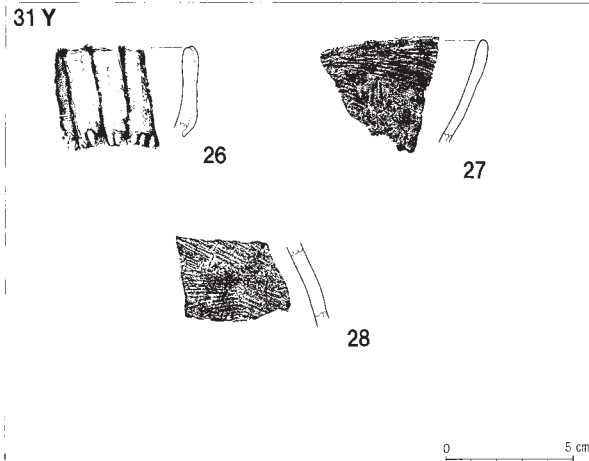
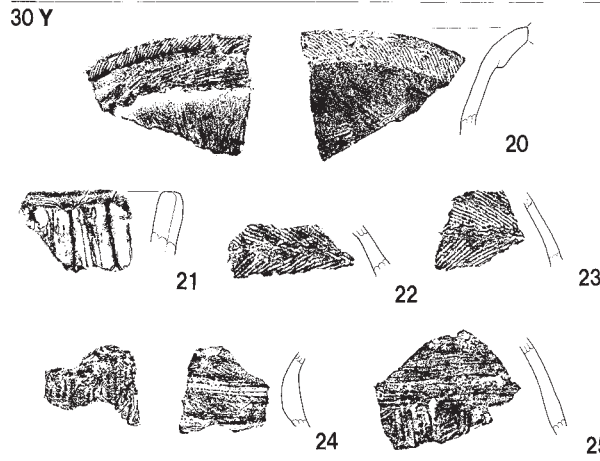
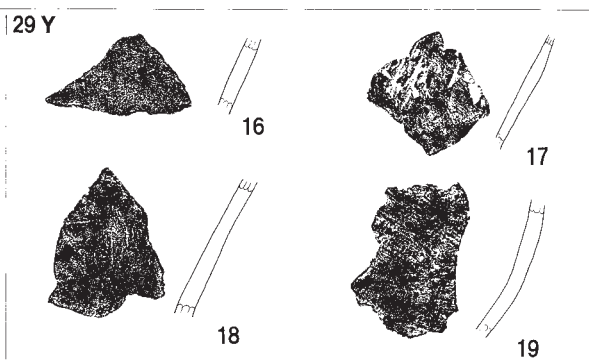
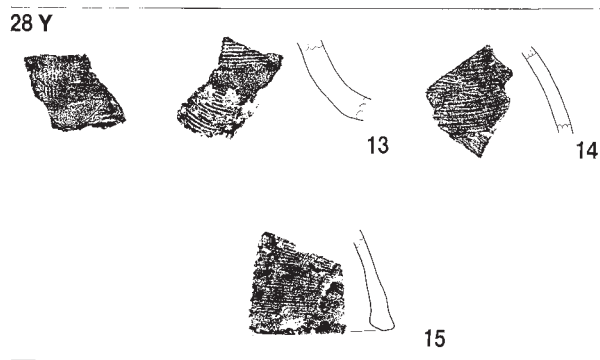
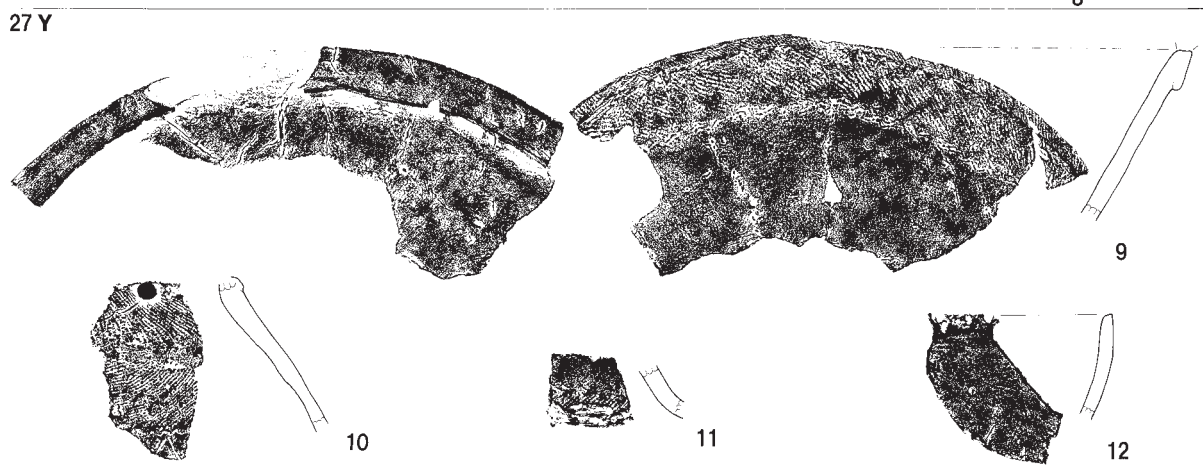
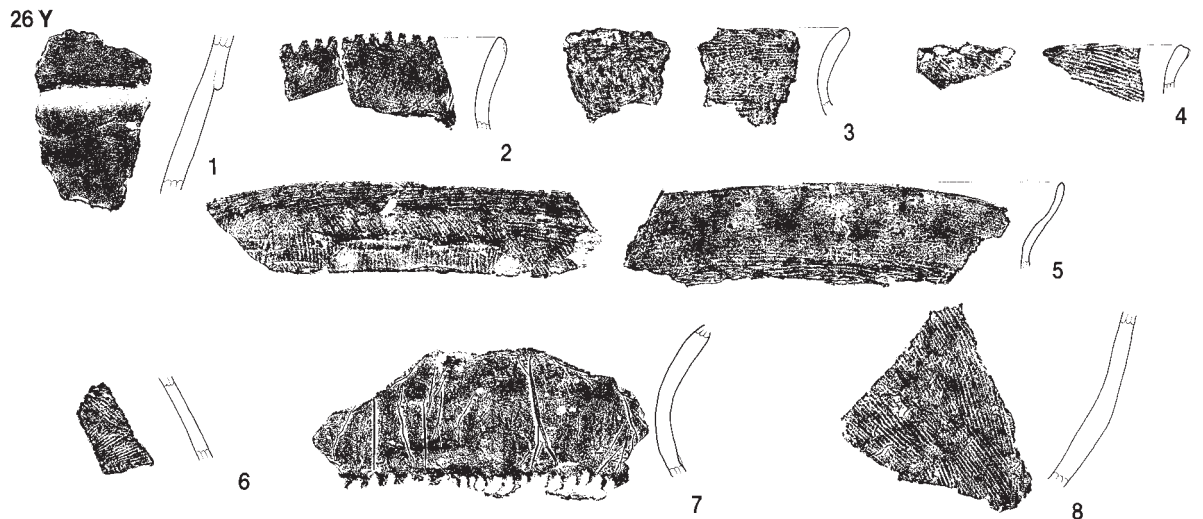
甕形土器（3・4）

いずれも体部破片で、内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は3は黒褐色（7.5YR3/1）、4は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。共に覆土中からの出土。

38号住居跡（第11図）

〔位置〕 3地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）373×340cm。（主軸方位）N-60°-E。（壁高）10～15cmを測り、80°前



第9図 26~31号住居跡出土遺物 (1/3)

後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に平坦だが、遺存状態は不良である。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。径56cmの円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 支柱穴は検出されなかった。西壁下中央の東に傾斜をもって穿たれている柱穴は、梯子穴を想定させる。(貯蔵穴) 南西コーナー付近に位置する。43×37cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む暗褐色土を基調にする。

南コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 貯蔵穴と覆土中から出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

38号住居跡出土遺物 (第12図、19図5～10)

壺形土器 (第12図1、第19図5～7)

第12図1は頸部・体部の1/3程度が残存。現存高18cm。球形の体部から立ち上がり、頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。頸部外面は縦方向、頸部内面は横方向にヘラミガキが施される。体部外面は斜方向にヘラミガキされるが、体部内面はヘラナデされる。体部内面以外は赤彩が施される。色調は外面がにぶい赤褐色(2.5YR4/4)、内面はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂含むがきめ細かい。貯蔵穴からの出土。

第19図5～7は体部破片。外面はヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は5が明赤褐色(5YR5/6)、6はにぶい褐色(7.5YR6/3)、7はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。いずれも覆土中からの出土。

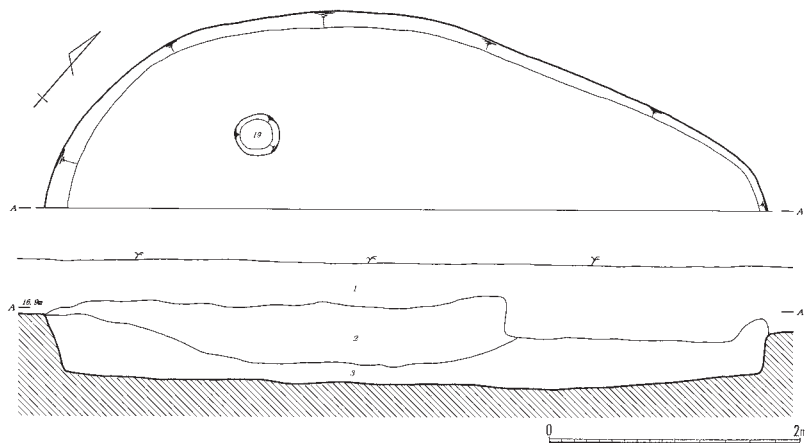
甕形土器 (第12図2・3、第19図8～10)

第12図2・3は台付甕形土器で甕部の1/2程度が残存。2は張りのない体部から頸部でくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と内面口縁部にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR6/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。3は体部上半に最大径をもち、脚台部へかけてすぼまる器形である。頸部はゆるやかにくびれている。内外面共にヘラナデされるが外面と口頸部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。

第19図8は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。

9は口縁部破片で口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

10は口頸部破片。頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には先端の鋭い工具で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は暗赤褐色(5YR3/4)を呈する。胎土には細礫・



第10図 32号住居跡 (1/60)

粗砂・白色粒子を含む。

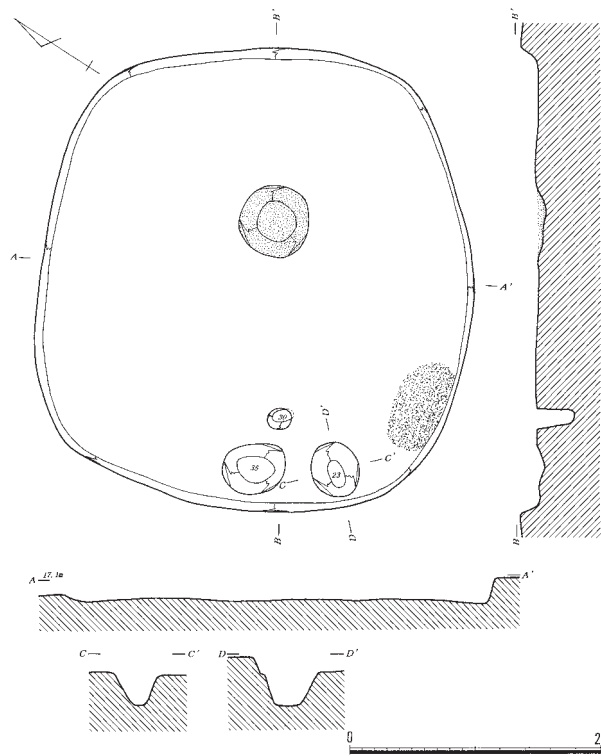
いずれも覆土中からの出土。

39号住居跡（第13図）

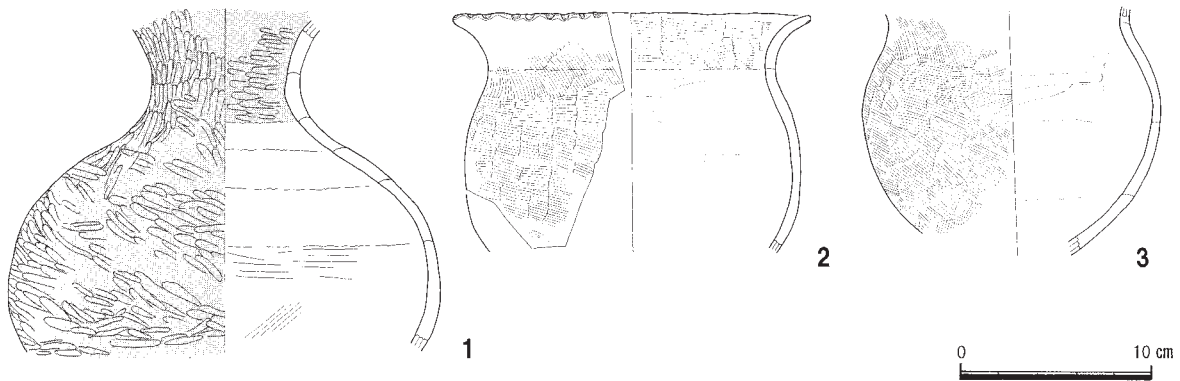
〔位置〕 3地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）525×513cm。（主軸方位）N-29°-W。（壁高）36～45cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好だが、硬化面は認められなかった。（炉）住居中央から北に偏って位置する。74×46cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ40cmを測る。（柱穴）比較的多く検出するがいずれも浅く、後世のものか。従って深度のある各コーナー付近の4本が主柱穴と思われる。南壁下中央からやや東に偏った1本は入口施設にならうか。（貯蔵穴）南東コーナー付近に位置する。50×40cmの楕円形を呈し、重複した形態をしている。深さ52cmを測る。

〔覆土〕



第11図 38号住居跡 (1/60)



第12図 38号住居跡出土遺物 (1/4)

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

南コーナーに厚さ6cm前後の砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕住居跡南側寄りに多く出土。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

39号住居跡出土遺物（第14図、第19図11～19）

壺形土器（第14図1、第19図11～16）

第14図1は口頸部1/2程度が残存する。口径19.5cmを測る。頸部からゆるやかにくびれて、口縁部は弧状に外反して複合口縁を呈する。口唇端部には無節Lの縄文が施され、棒状浮文が6本1単位で貼付される。口縁部内面には1段目に無節R、2段目に無節Lの端末結節縄文が施され、1段目と2段目の境目には円形浮文が5個一単位で



第13図 39号住居跡 (1/60)

施される。肩部外面には上から順に2条のS字状結節文、無節Lの端末結節縄文、無節Rの縄文が施される。最下の無節R縄文帯の中には5個一単位の円形浮文が施され、間には赤彩文が4ヵ所施される。口縁部外面は縄文帯以外縦方向、内面は横方向にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)、赤彩部がにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。西コーナー支柱穴付近床面上から出土した。

第19図11～16は複合口縁部破片。11と16は同一個体。口唇端部にはLRの単節縄文が施された上に、口縁部にかけて短い棒状浮文が6本貼付される。外面はヘラミガキされるがハケ目痕が残り、口縁部以外は赤彩される。内面には上から、RLの単節縄文とLRの単節縄文の端末結節縄文を羽状に施す。縄文帯内部には、2ヵ所に直径1.5cmの円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキが施され赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。12・13は同一個体。外面口縁部はナデ、以下ヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残り赤彩が施される。内面にLRの単節縄文の端末結節が施され、下端には円形浮文が2ヵ所にみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。14の外面口縁部はヘラナデされるがハケ目痕が残る。口縁部以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。15は内面にLRの単節縄文が施文される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。11～14、16は貯蔵穴、15は覆土中からの出土。

甕形土器(第14図2、第19図17～19)

第141図2は小型の台付甕形土器で完形。口径12.8cm・裾部径7.5cm・器高11.4cmを測る。最大径は口縁部と体部中位が拮抗する。体部は球状を呈し、頸部で屈曲し、口縁部は外反する。脚台部は直線的に広がり脚裾端部には粘土のはみだしがみられる、内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。南コーナーの支柱穴内より出土した。

第19図17～19は体部破片で、17・18は同一個体。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は17・18がにぶい橙色(7.5YR6/4)、19はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも貯蔵穴から出土した。

40号住居跡(第15図)

〔位置〕3地点。

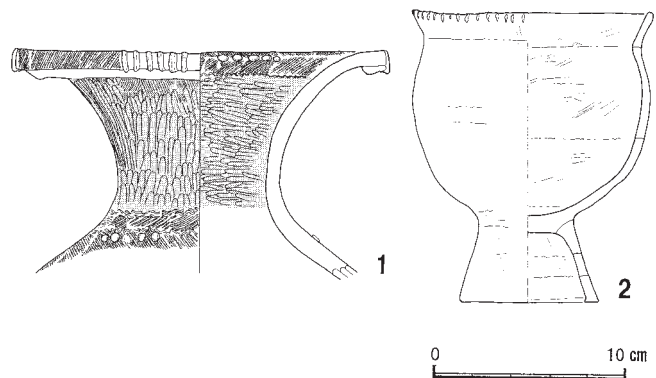
〔構造〕(平面形)隅丸長方形。(規模)494×462cm。(主軸方位)N-35°-E。(壁高)25～33cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)硬質ロームを床面とし、平坦で遺存状態は良好である。

(炉)住居中央から北に偏って位置する。54×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmを測る。(柱穴)各コーナーに近い4本が支柱穴と思われる。南壁下中央からやや東に偏って位置する1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)検出されなかった。

〔覆土〕ローム粒子を多く含む明褐色土を基調とする。

南コーナーに厚さ1cmの砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。



第14図 39号住居跡出土遺物(1/4)

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

40号住居跡出土遺物 (第19図20～24)

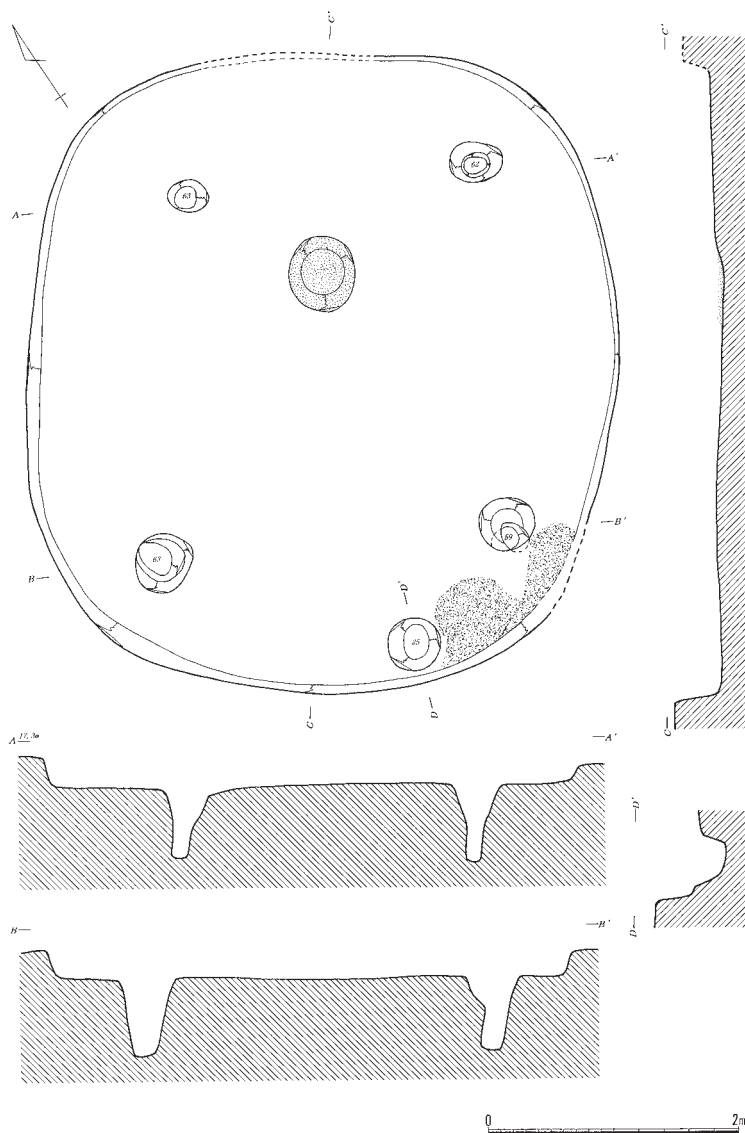
壺形土器 (20・21)

20・21は同一個体と思われる口縁部破片。内面には無節Rの縄文が施され、縄文帯内部には同じ原体によるS字状結節文が施される。外面はヘラミガキされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (22～24)

22・23は口頸部破片。頸部で屈曲し、口縁部は外反する。22は口唇部外面には柂目の板の小口部分で左寄りから浅く刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。23は内外面共にヘラナデされるが、粗く幅広のハケ目痕が残る。色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。いずれも覆土中からの出土。

24は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。



第15図 40号住居跡 (1/60)

41号住居跡（第16図）

〔位置〕 4 I 地点。

〔構造〕 住居北東側と北西側が攪乱により破壊されている。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明。（主軸方位） $N-36^{\circ}-W$ 。（壁高）9～15cmを測り、 80° 前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱で遺存状態は不良である。（炉） 61×48 cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmを測る。（柱穴）南西側の2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）東側壁下に位置する。 68×57 cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子を僅かに含む暗褐色土を基調とするが、攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕 貯蔵穴内から完形の壺形土器が出土した。

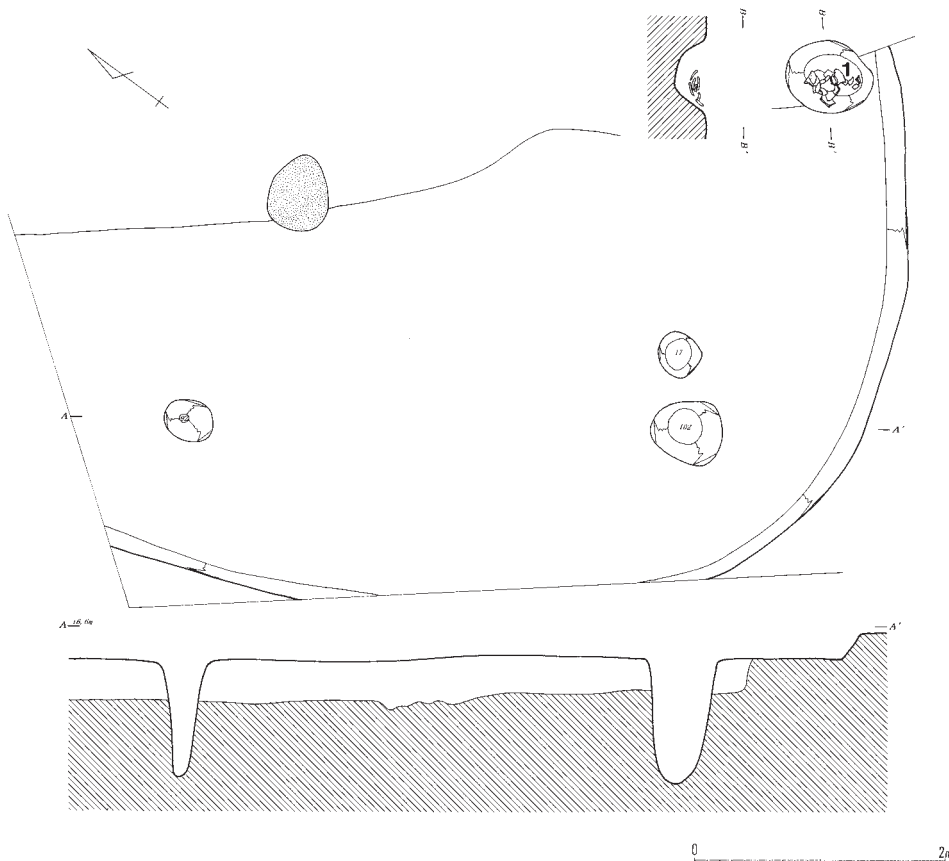
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

41号住居跡出土遺物（第17図、第19図25～29）

壺形土器（第17図1、第19図25）

第17図1は単純口縁の土器でほぼ完形。口径12.5cm・底径8.5cm・器高24.4cmを測る。体部下半に最大径をもち、玉葱形を呈する。頸部のくびれはそれほど明瞭ではなく、口縁部は直立気味に開く。口唇部は面取りされ、粘土のはみだしがみられる。口唇端部には無節Rの縄文が巡る。口縁部内面にも無節R縄文が二段施される。肩部には無節Rの縄文が3段施され、1段目と2段目の縄文帯の境目には3個を一単位とする円形浮文が4ヵ所に施される。文様帯下端には2条のS字状結節文が施される。体部は横方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が体部上半に残る。体部には焼成時の直径約15cmの黒斑がみられる。底部には木葉痕が残る。色調にはぶい褐色（7.5 YR5/3）、黒斑部は褐灰色（10YR4/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴からの出土

第19図25は肩部破片。外面にはLRの単節縄文が施され、下端には3条のS字状結節文が施される。縄文帯内部



第16図 41号住居跡（1/60）

には円形浮文が貼付される。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。貼床から出土。

甕形土器（第17図2、第19図26～29）

第17図2は台付甕形土器の脚台部。裾部径9.3cm。甕部と脚台部の接合部でくびれて、裾部にかけて直線的に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが、外面と内面下半にはハケ目痕が残る。甕部内面には炭化物の付着がみられる。色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子含む。

第19図26は口頸部破片。頸部は強くくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

27～29は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中からの出土。

42号住居跡（第18図）

〔位置〕 4 I 地点。

〔構造〕 55～67・102・108Dに切られる。（平面形）楕円形。（規模）623×528cm。（主軸方位）N-48°-E。（壁高）10～17cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11～20cm・下幅3～7cm・深さ3～8cmを測り部分的に確認された。（床面）大部分が土坑に切られ攪乱も著しく、遺存状態は不良である。（炉）住居中央から東に偏って位置する。径70cmの円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）東コーナー近い深度のあるピットが支柱穴が一部であろうか。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とするが、攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

42号住居跡出土遺物（第19図30～40）

壺形土器（30・31）

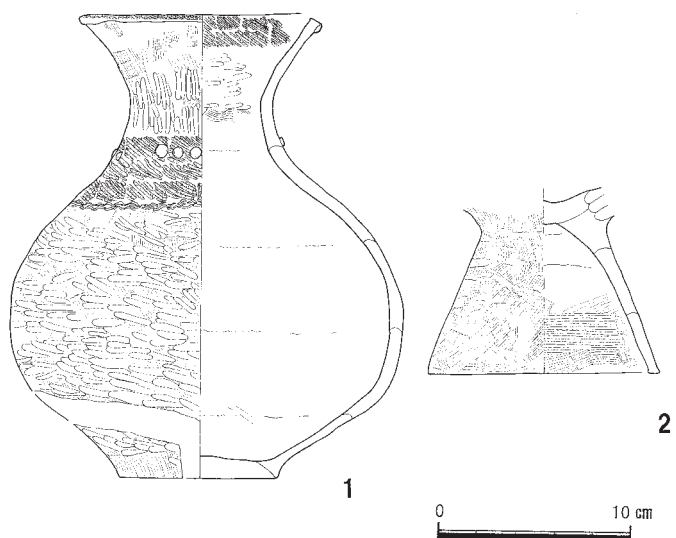
30・31は口縁部破片。複合口縁外面には棒状浮文が貼付される。内面はヘラミガキされ赤彩される。色調は灰黄褐色（10YR6/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むがきめ細かい。31は単純口縁。内外面共にヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には粗砂を少量含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

甕形土器（32～40）

32～34は口頸部破片。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は32・34が黒褐色（7.5YR3/1）、33は灰褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

35～40は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は35がにぶい赤褐色（5YR5/4）、36が橙色（5YR6/6）を呈し、37・40は灰褐色（7.5YR4/2）、38が灰褐色（7.5YR5/2）、39が褐色（7.5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土であった。



第17図 41号住居跡出土遺物（1/4）

43号住居跡（第20図）

〔位置〕 4 I・12 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）673×530cm。（主軸方位）N-44°-E。（壁高）21～28cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北に偏って位置する。83×76cmの円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が支柱穴になろう。（貯蔵穴）東コーナー付近に位置する。46×44cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。

〔覆土〕 ロームブロックを多く含むなど、埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕 東側の床面上に土器片を多く出土した。床面近くの覆土に炭化材を多く出土した。

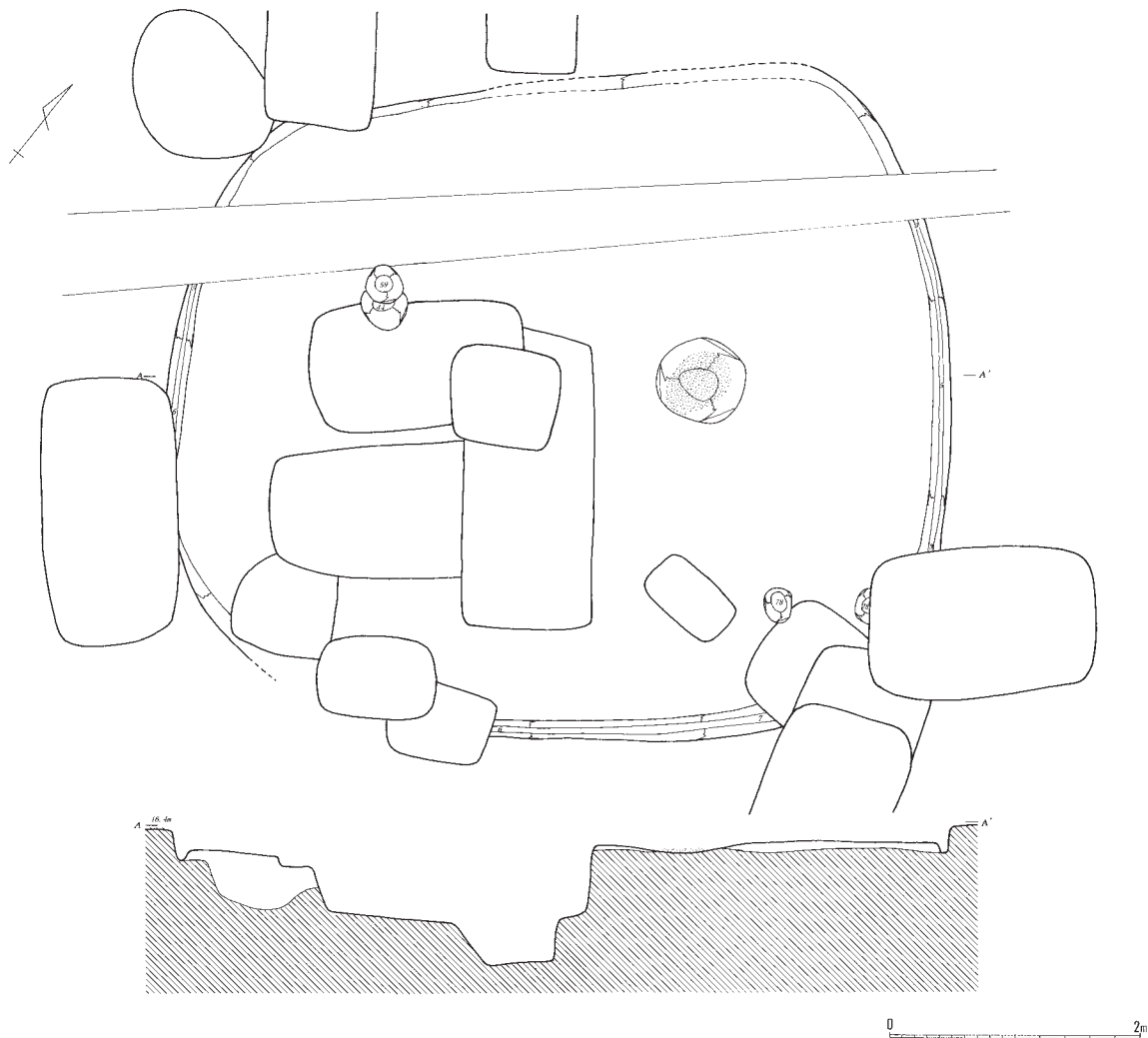
〔時期〕 弥生時代後期。

〔所見〕 床面上に炭化材が点在するため、焼失家屋の可能性はある。

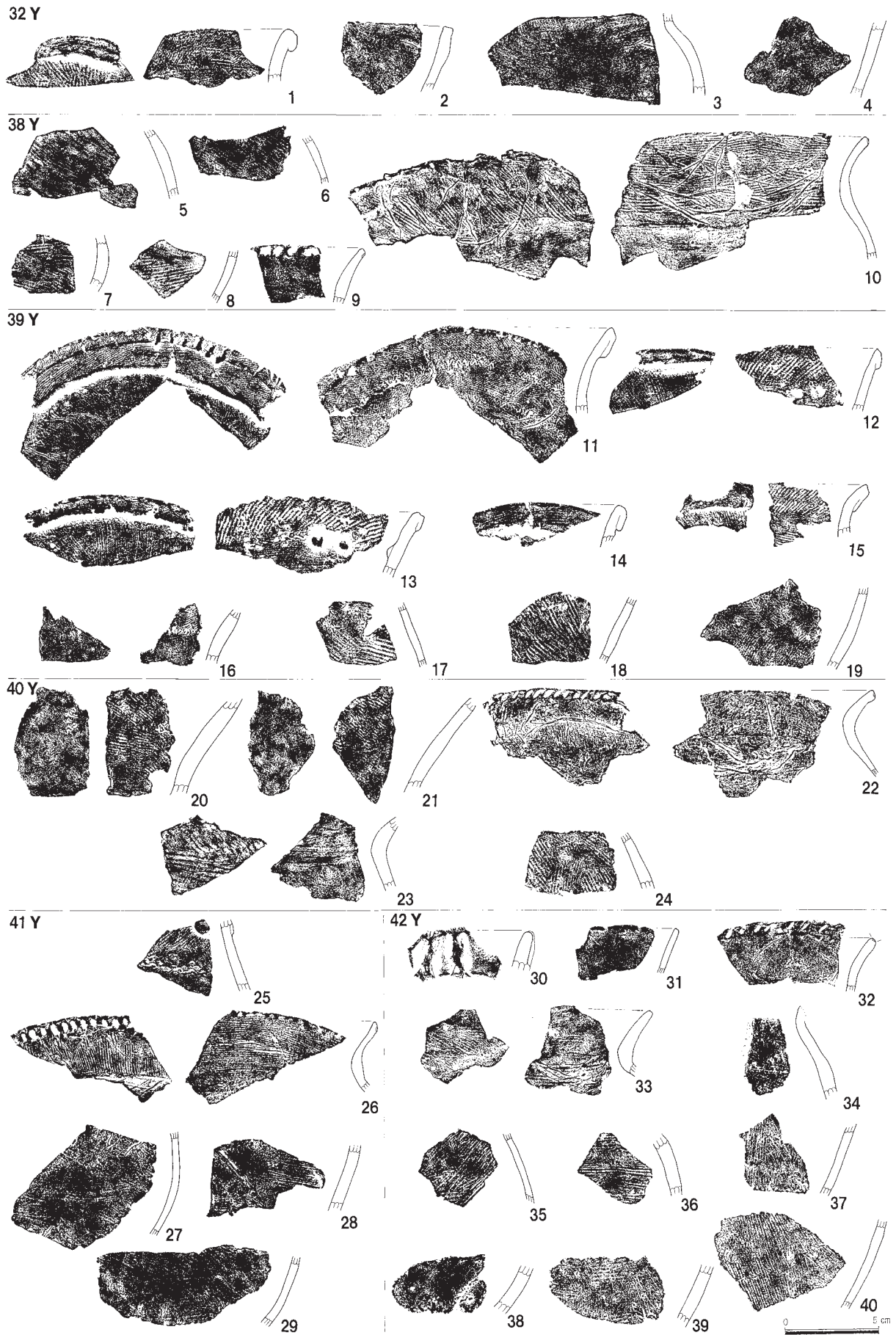
43号住居跡出土遺物（第20図、第25図1～14）

壺形土器（第25図1～6）

第25図1・2は複合口縁部破片。1は口唇端部と口縁部にはLRの単節縄文が施され、口唇部直下には先端の丸い工具で正面から刺突した刻みが巡る。口縁部下端には柁目の板の小口部分でやや左方向から刺突された刻みが巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。床面上から出土した。2は口唇端部と口縁部にRLの単節縄文が施され、口唇端部には円形浮文が3ヵ所に貼付されている。口縁部下端には



第18図 42号住居跡（1/60）

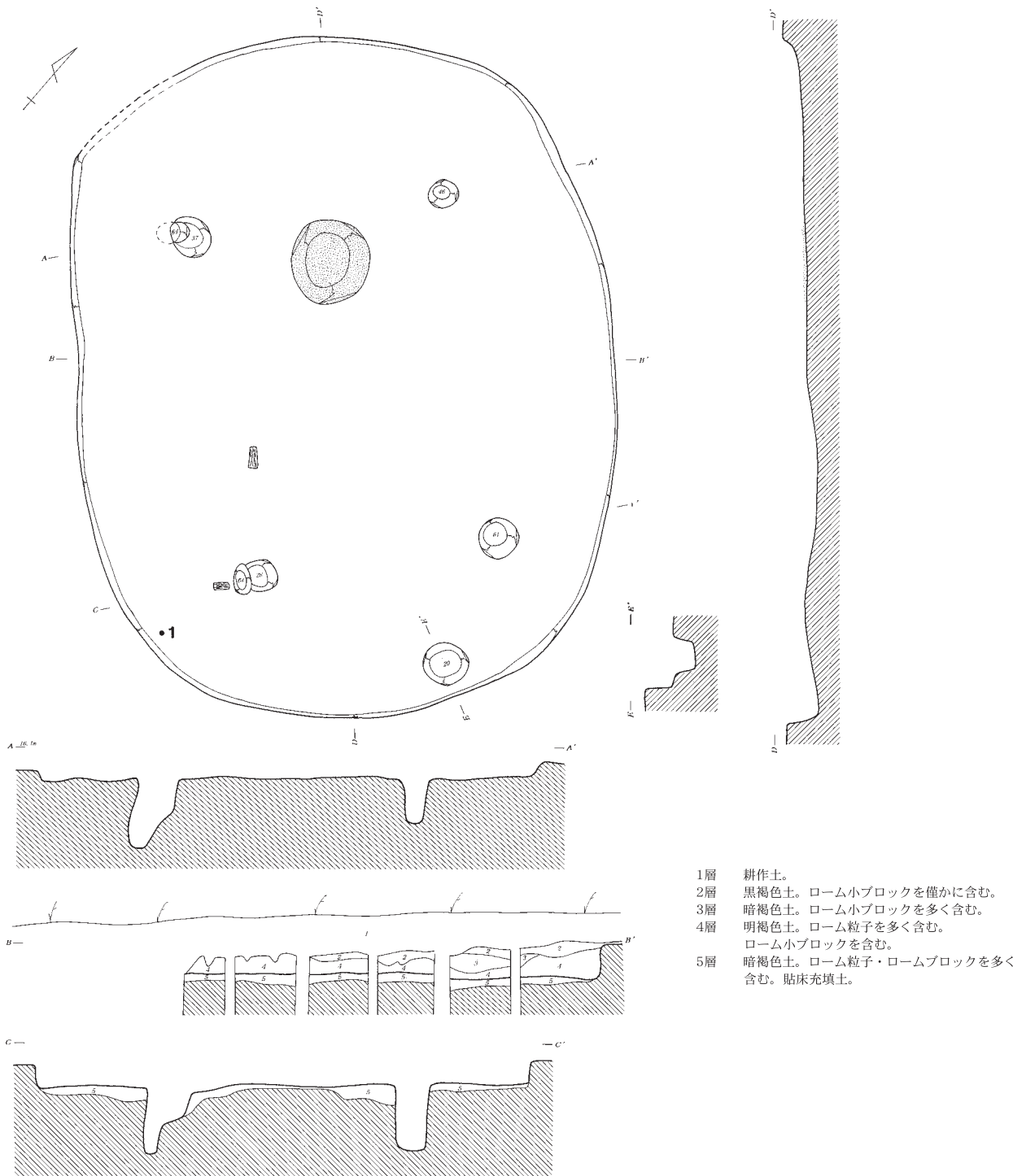


第19図 32・38～42号住居跡出土遺物 (1/3)

柱目の板の小口部分でやや左よりから刺突された刻みが巡る。内面はへらミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。南コーナー壁際より出土した。

3は口縁部破片。内湾しながら立ち上がる。口唇部外面には薄い粘土紐を貼り付けて、短い複合口縁状に作出する。内外面共にへらミガキされるが外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、極めて精選されきめ細かく堅緻である。貼床内から出土。

4～6は同一個体で頸部から肩部の破片。RLの単節縄文の端末結節が羽状に3段に施文される。縄文帯の上部には円形浮文が貼付される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

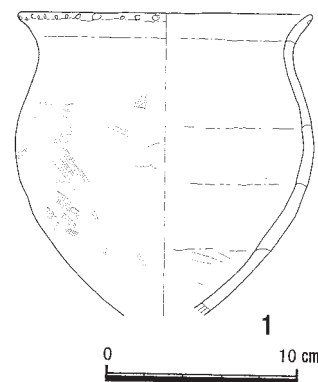


第20図 43号住居跡 (1/4)

貯蔵穴付近から出土。

甕形土器（第21図1、第25図7～14）

第21図1は台付甕形土器の甕部1/2残存。口径15.4cmを測る。最大径が体部中位と口縁部で拮抗する。頸部はゆるやかにくびれ、口縁部は広がる。体部下半は脚台部に向かいすぼまる器形である。口唇部外面には柂目の板の小口部分で浅く刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。内面はヘラナデされるが、器面の磨耗が激しい。外面体部中位付近には炭化物が付着している。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂含む。住居南コーナー壁際より出土した。



第21図 43号住居跡出土遺物(1/4)

第25図7～11は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。7・9は左方向から棒状工具で押捺された刻み、8・10・11は柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は7は灰褐色（7.5YR4/2）、8が灰褐色（7.5YR4/3）、9は灰褐色（7.5YR4/2）、10は灰褐色（7.5YR5/2）、11はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂含む。7・9は貯蔵穴付近から、8・10・11は覆土中から出土した。

12～14は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は12が黒褐色（7.5YR3/1）、13・14は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。12・14は住居跡南コーナー壁際、13は覆土中から出土している。

44号住居跡（第22図）

〔位置〕 4 I 地点。

〔構造〕 東側調査区外。トレンチャーによる攪乱が著しい。82Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）12～31cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）攪乱が著しく遺存状態は不良である。東側は斜面で確認出来なかった。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

44号住居跡出土遺物（第25図15～22）

壺形土器（第25図15・16）

15は複合口縁部破片。口唇部内外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

16は頸部破片。RLの単節縄文が施され、円形浮文が貼付される。にぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第25図17～22）

17・18は同一個体と推測される口頸部破片。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるが、粗いハケ目痕が残る。外面には炭化物が付着する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含むが、非常に精選されきめ細かく堅緻である。

19は口縁部破片。口唇部外面には柾目の板の小口部分で浅く刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

20・21は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。20は黒褐色（7.5YR3/1）、21は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

22は脚裾部破片。内外面共にヘラナデされる。裾部内面には粘土のはみ出しがみられる。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中からの出土。

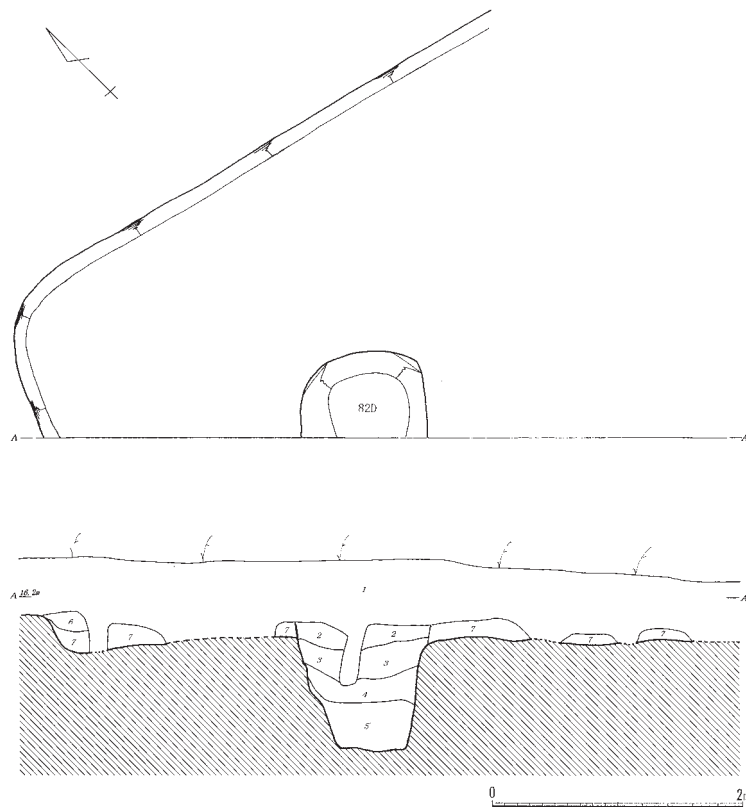
46号住居跡（第23図）

〔位置〕 4Ⅱ地点。

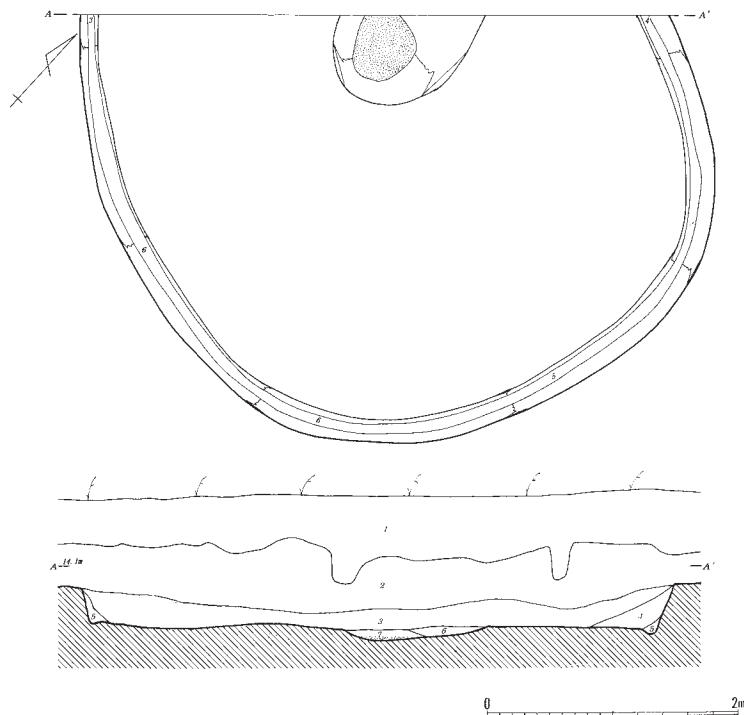
〔構造〕 北側調査区外。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×458cm。（主軸方位）N—48°—W。（壁高）30～41cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～24cm・下幅6～12cm・深さ3～8cmを測り全周すると思われる。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北寄りに位置する。不明×110cmの地床炉で、深さ9cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

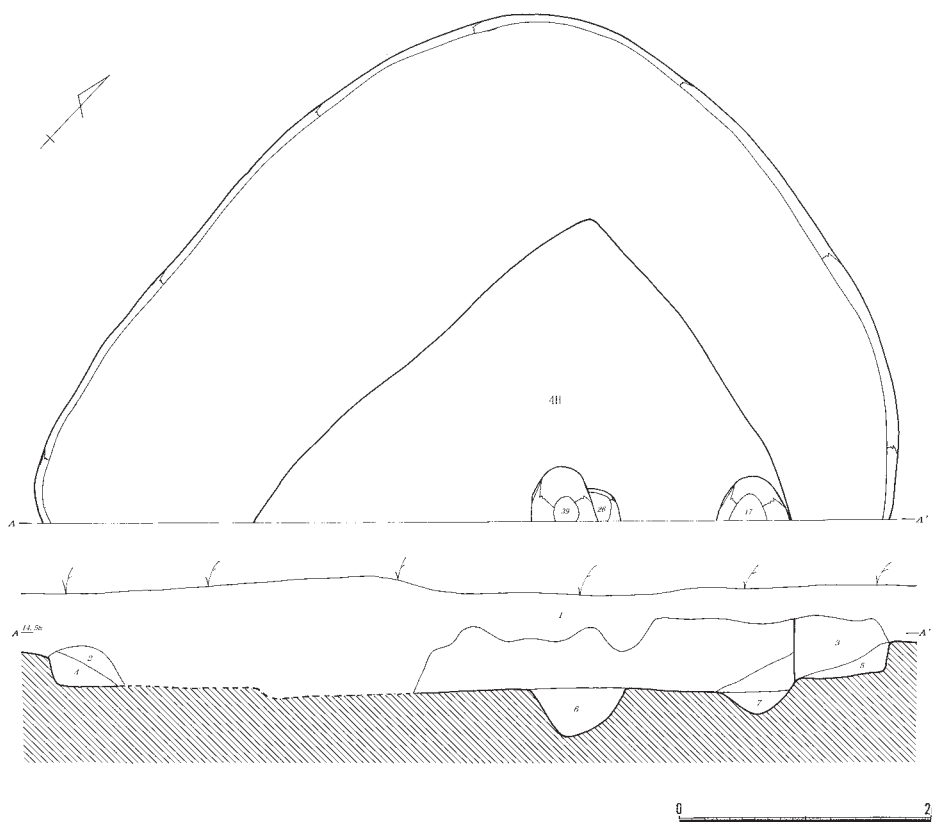
- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。



第22図 44号住居跡、82号土坑（1/60）



第23図 46号住居跡 (1/60)



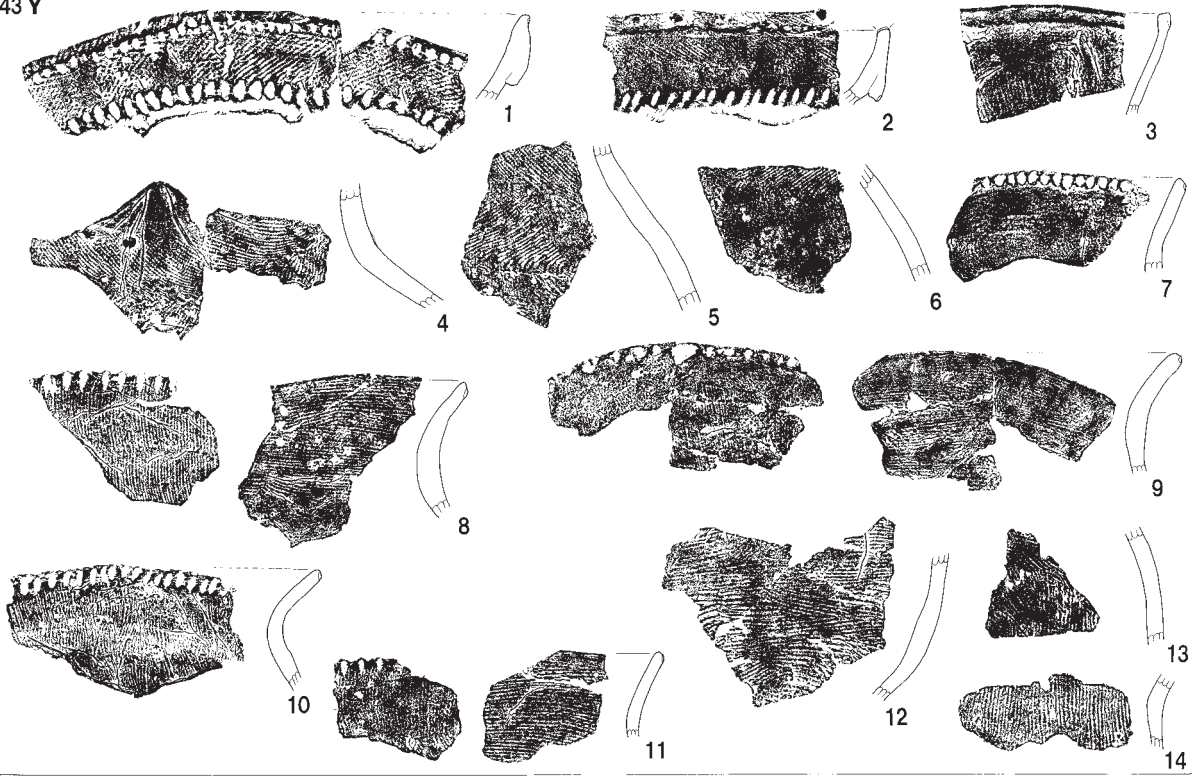
第24図 48号住居跡 (1/60)

7層 暗赤褐色土。焼土粒子を多く含む。

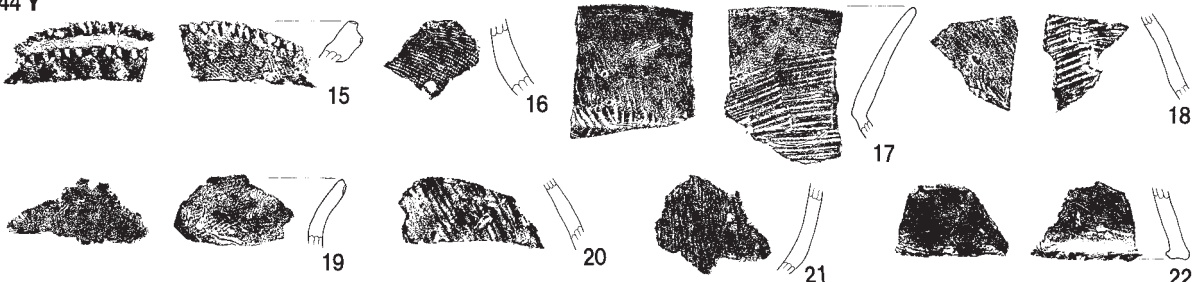
〔遺物〕 覆土中より僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期後半。

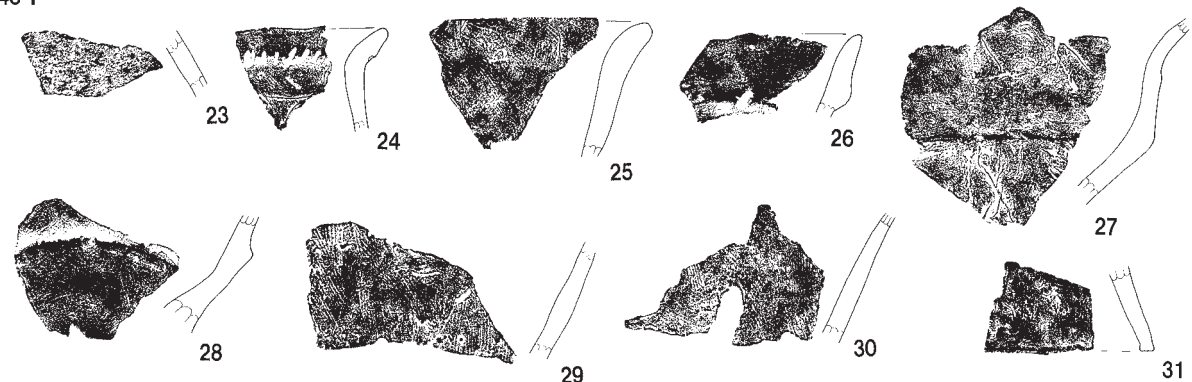
43 Y



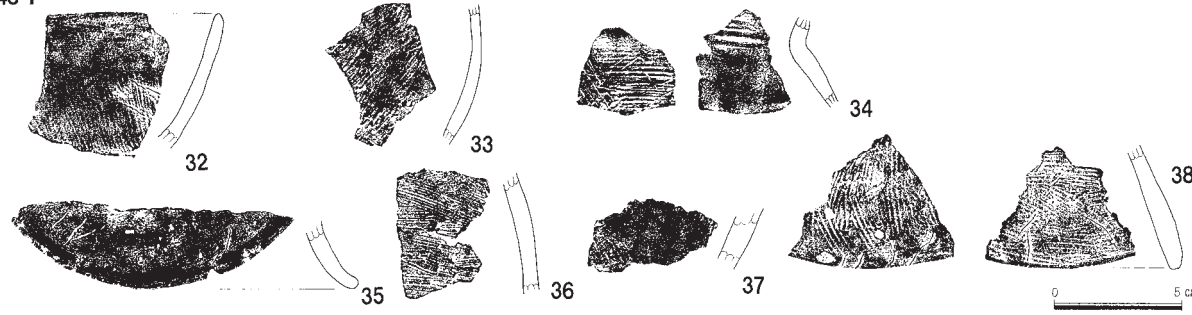
44 Y



46 Y



48 Y



第25図 43・44・46・48号住居跡出土遺物 (1/3)

46号住居跡出土遺物 (第23図23~31)

壺形土器 (第23図23~26)

23は肩部破片。LRの単節縄文の末端結節縄文が施される。縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

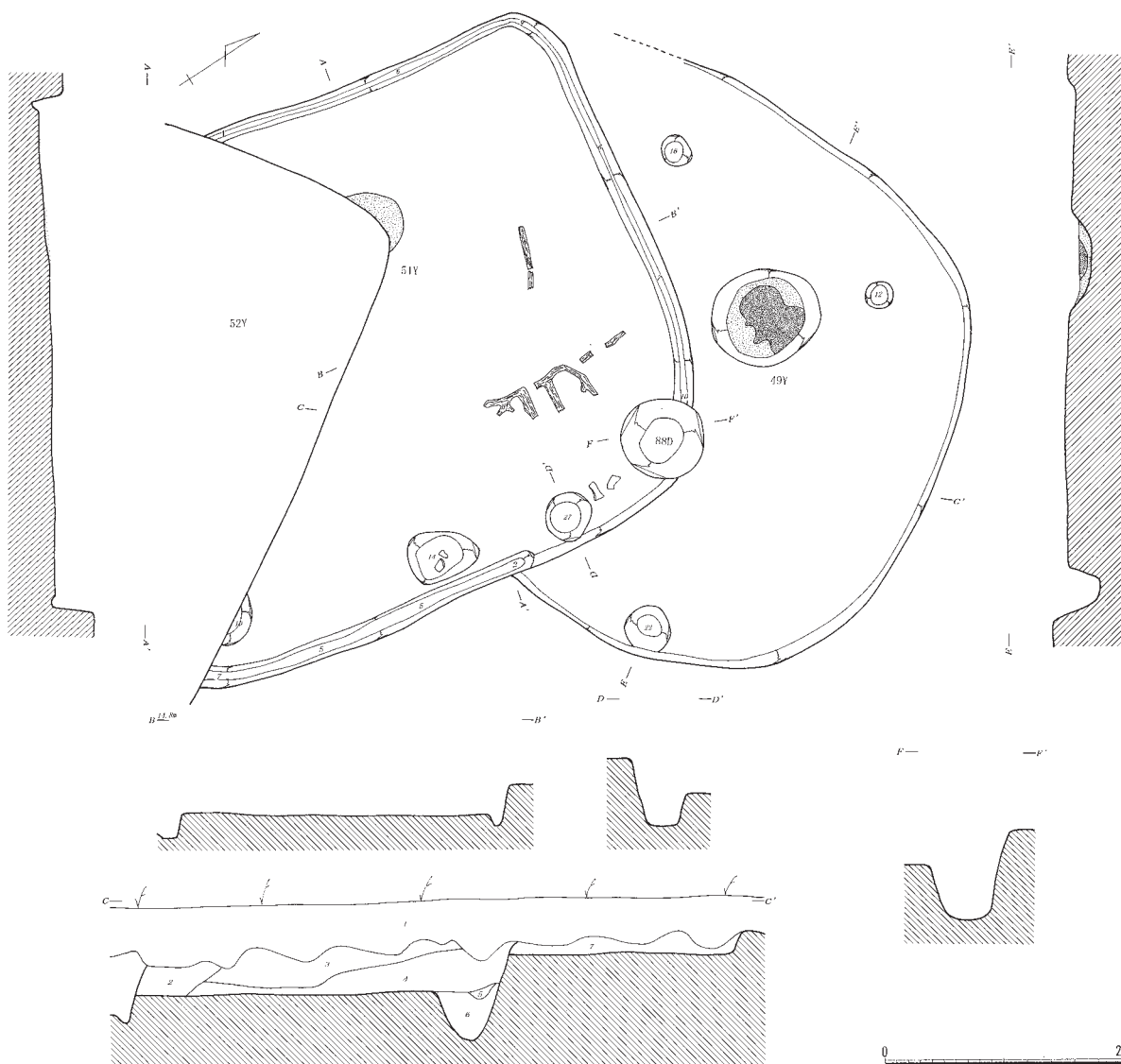
24~26は口縁部破片。24は薄く貼り付けた粘土の下端に刻みが巡る。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。胎土には粗砂を含むがきめ細かい。25は内外面共にヘラミガキされるが外面にはハケ目痕が残る。26は二重口縁壺。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂・輝石を僅かに含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

高坏形土器 (第23図27~28)

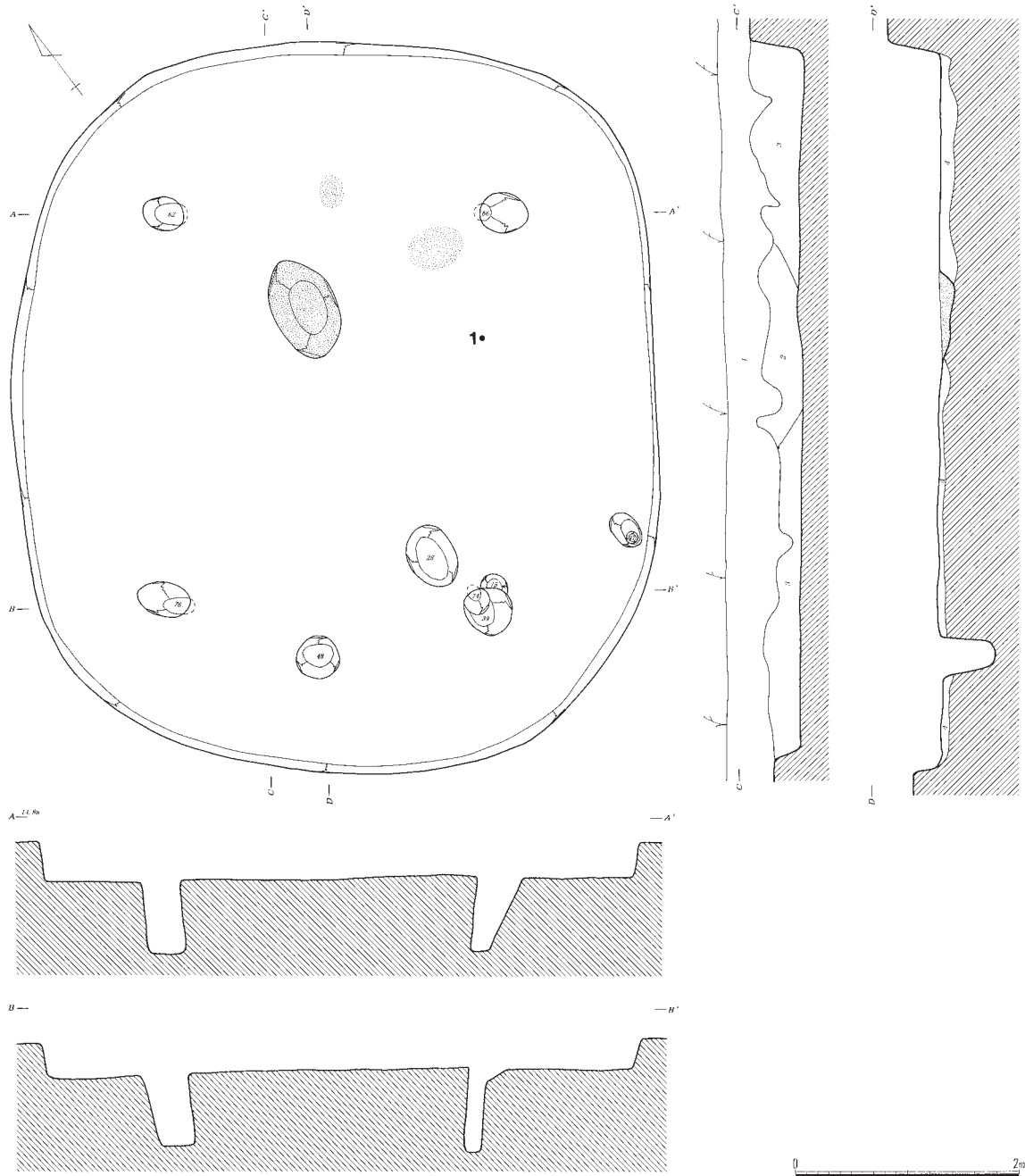
東海西部に系譜を持つ、有段高坏の坏部破片。内外面共に丁寧にヘラミガキされる。色調は27が明赤褐色(5YR5/6)、28がにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・輝石を僅かに含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

いずれも覆土中から出土した。

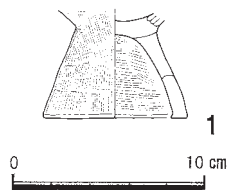
甕形土器 (第23図29~31)



第26図 49・51号住居跡、88号土坑 (1/60)



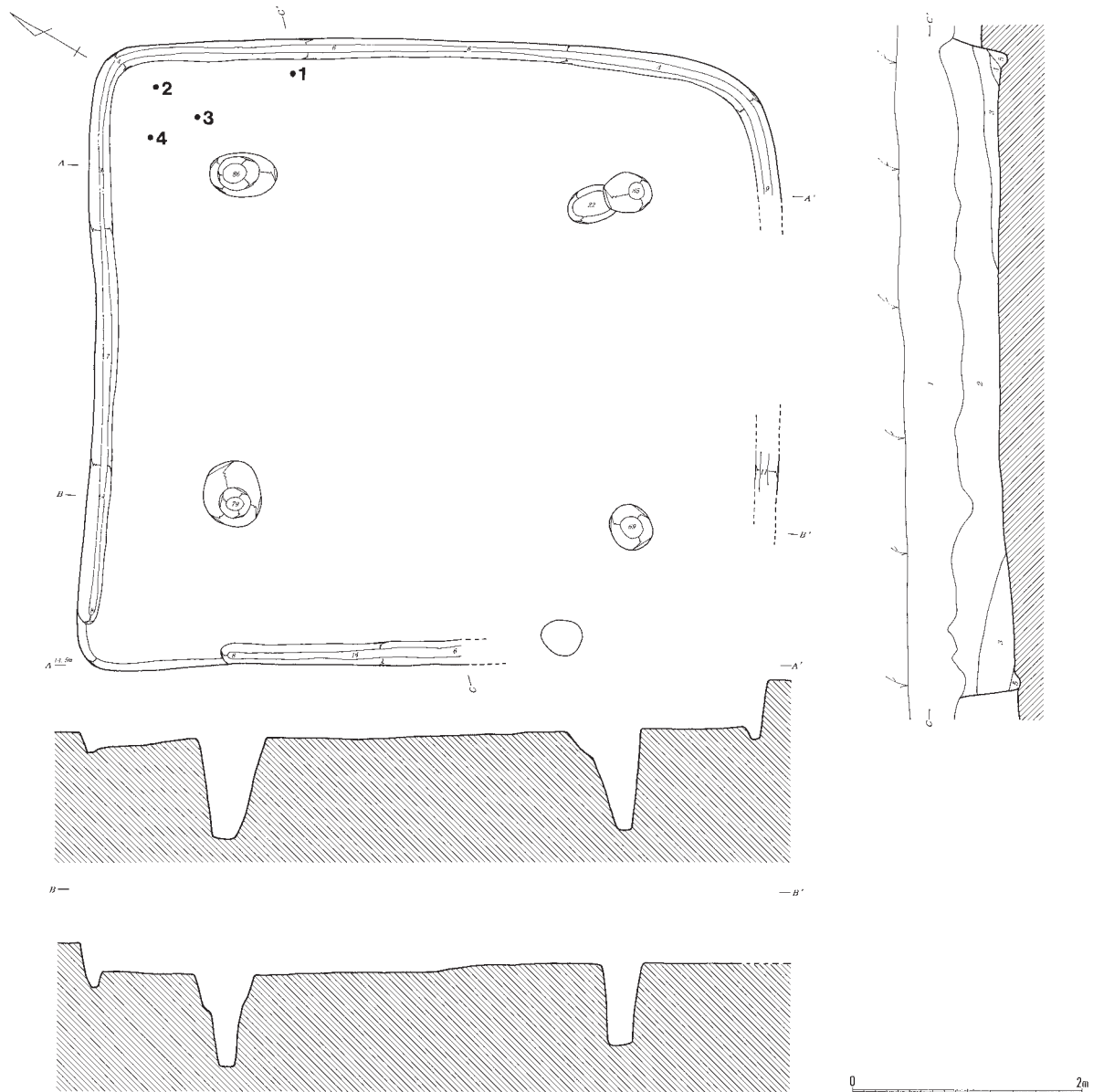
第27図 50号住居跡 (1/60)



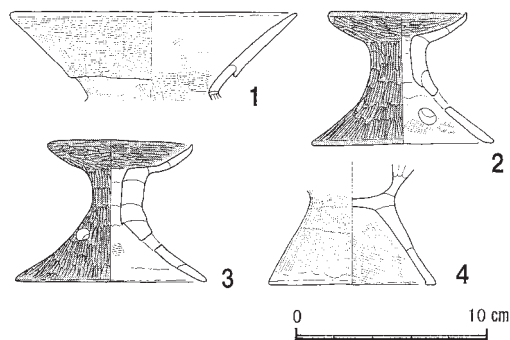
第28図 50号住居跡出土遺物 (1/4)

29・30は同一個体と思われる体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

31は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。裾部内面には粘土のはみだしがみられる。色調

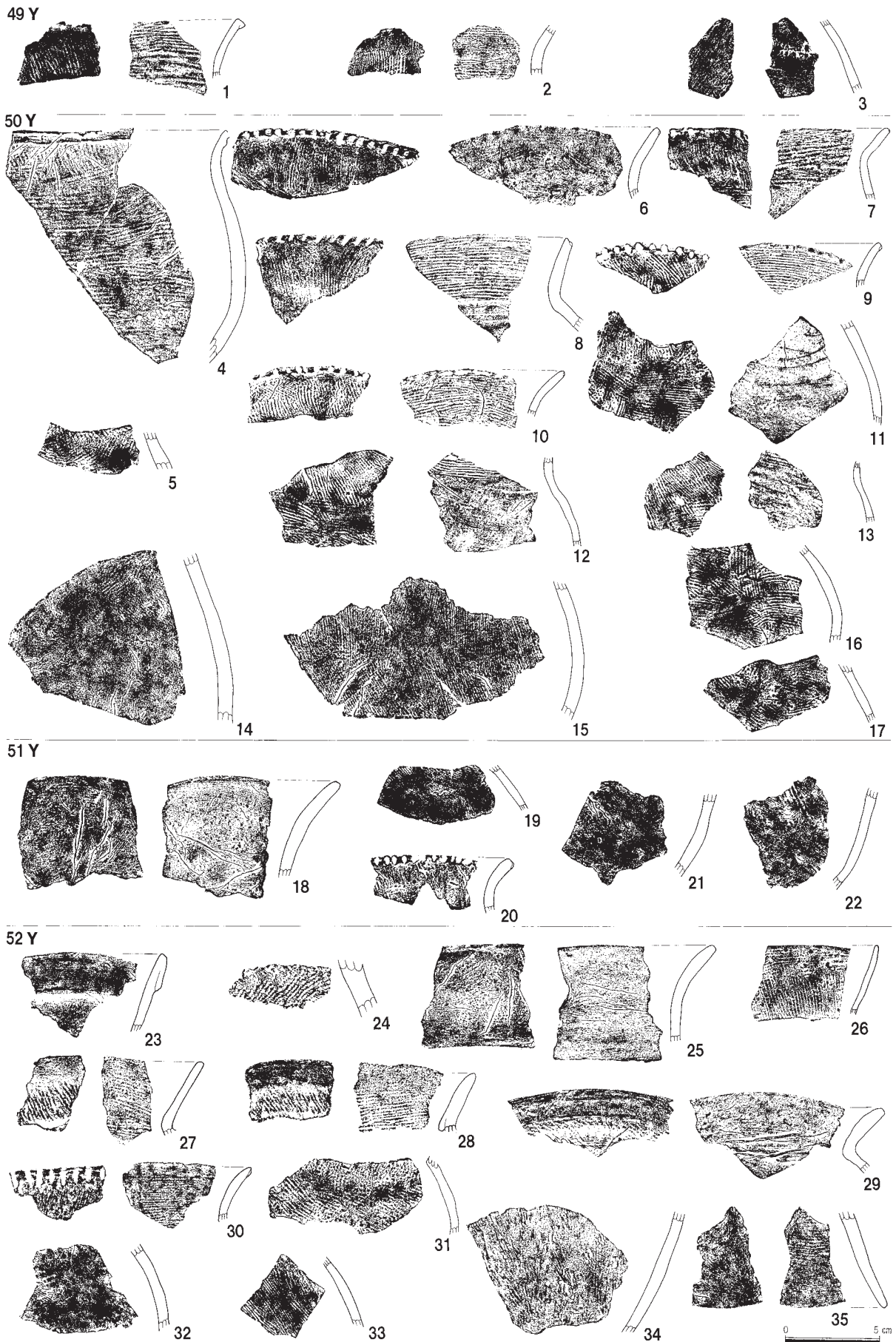


第29図 52号住居跡 (1/60)



第30図 52号住居跡出土遺物 (1/4)

は黄橙色 (10YR7/2) を呈する。胎土には細礫・粗砂・軽石と思われる白色粒子を含む。
いずれも覆土中からの出土。



第31図 49~52号住居跡出土遺物 (1/3)

48号住居跡（第24図）

〔位置〕 4Ⅱ地点。

〔構造〕 4日に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）15～35cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）攪乱により遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。貼床充填土。
- 7層 にぶい黄褐色土。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

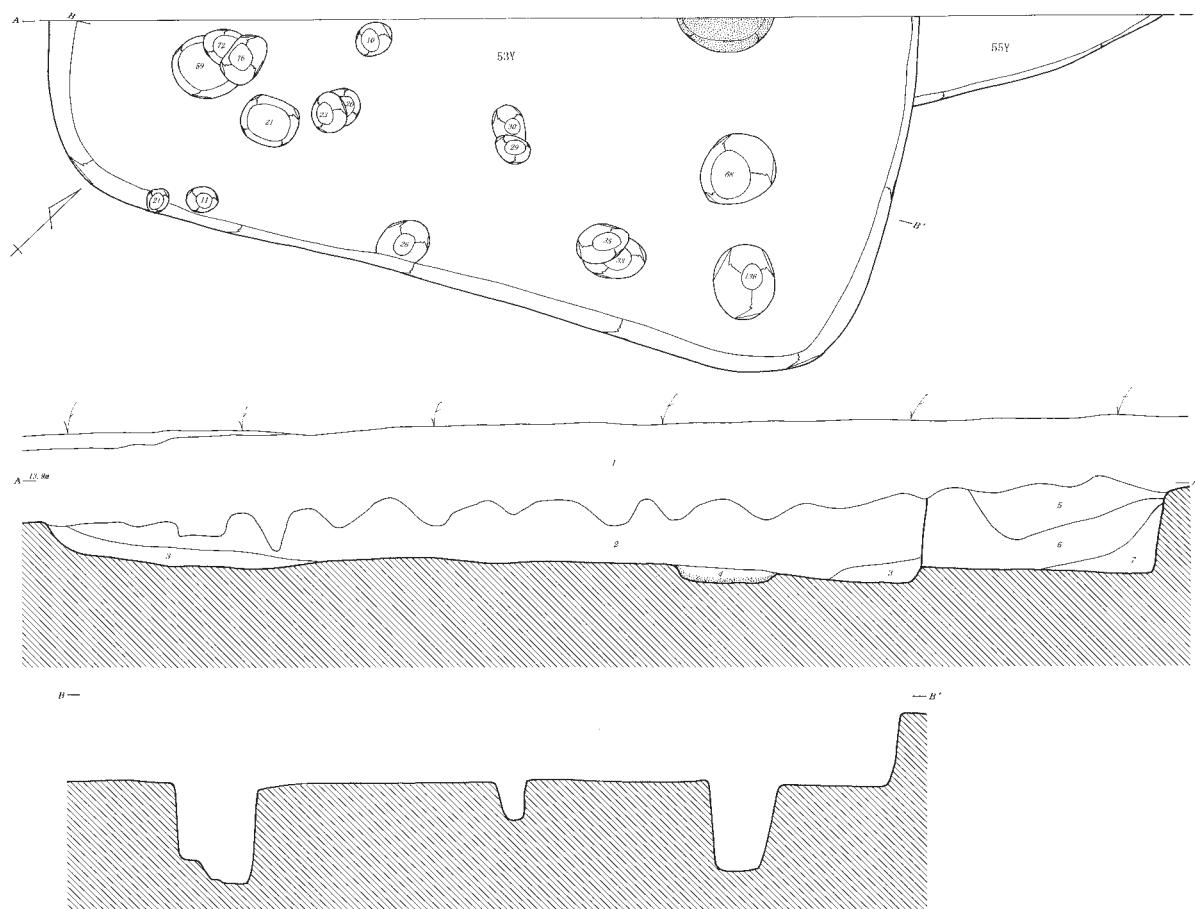
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

48号住居跡出土遺物（第25図32～38）

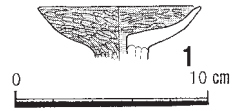
壺形土器（32～34）

32は口縁部破片。内湾しながら立ち上がる器形。内外面共にヘラミガキされるが外面には消しきれない粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。



第32図 53・55号住居跡（1/60）

33は体部破片。内外面共にヘラミガキされるが、外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中の出土。



第33図 53号住居跡出土遺物 (1/4)

34は頸部破片。内外面共にヘラミガキされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

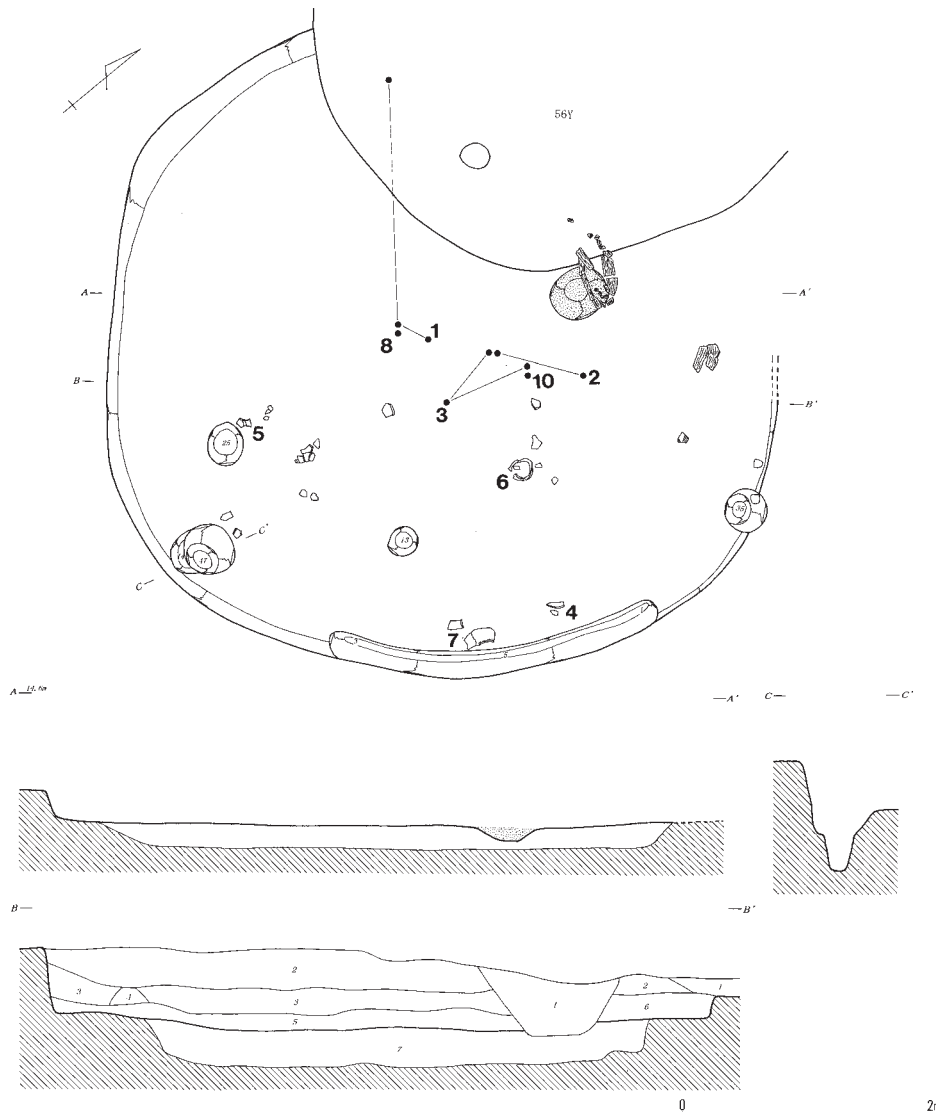
高坏形土器 (35)

東海西部地方に系譜をもつ、高脚高坏の脚裾部破片。裾部外面にはY字を○で囲んだような沈線がみられる。内外面共に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中の出土。

甕形土器 (36~38)

36~38は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。36・37は褐灰色（7.5YR4/1）、38はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中の出土。

39は脚台部破片。内外面共にミガかれたように丁寧にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には際礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第34図 54号住居跡 (1/60)

49号住居跡（第26図）

〔位置〕 6 I・12 I 地点。

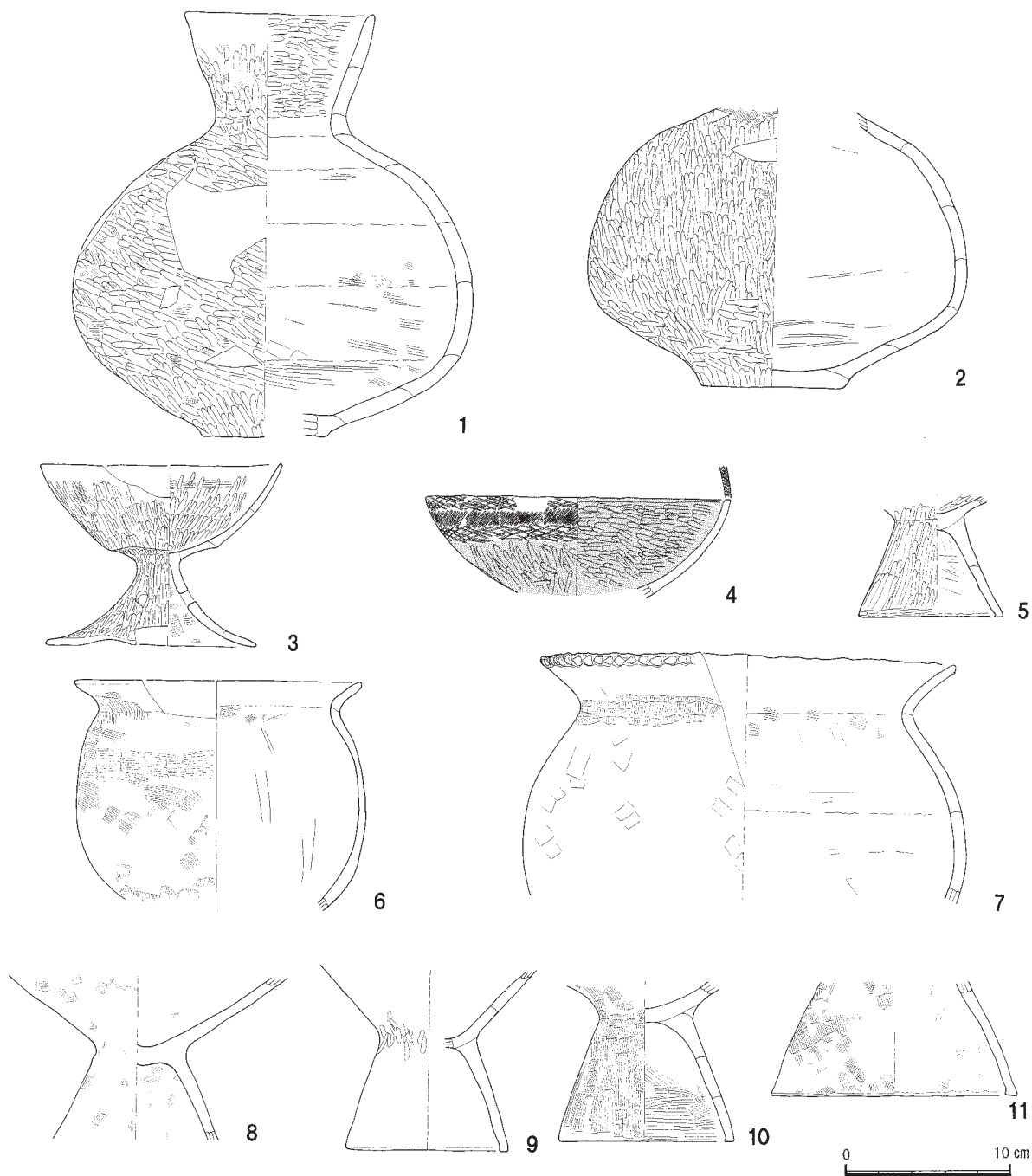
〔構造〕 51 Yに切られる。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×450cm。（主軸方位）不明。（壁高）10～12cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）南側は壁際を除き硬化面を認める。（炉）95×85cmの楕円形を呈する粘土火皿で、深さ16cmの掘り込みをもつ。（柱穴）ピット3本を検出するが支柱穴と特定することはできない。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

7層 黒褐色土。ローム粒子・ロームブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土したのみである。



第35図 54号住居跡出土遺物（1/4）

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

49号住居跡出土遺物（第31図1～3）

壺形土器（1・2）

1は口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

2は体部破片。内外面共にヘラミガキされ外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。いずれも覆土中からの出土。

甕形土器（3）

3は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

50号住居跡（第27図）

〔位置〕 6 I・12 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）654×573cm。（主軸方位）N-43°-E。（壁高）33～38cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。焼土が1ヵ所認められる。（炉）住居中央から東に偏って位置する。88×59cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が支柱穴と思われる。西壁下中央からやや東に偏った1本は入口施設になるうか。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
南コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 破片が多数出土したが、特に南コーナーからの出土が多い。

〔時期〕 古墳時代前期。

50号住居跡出土遺物（第28図、第31図4～17）

壺形土器（第31図4・5・14）

4は広口壺破片。球状を呈する体部から頸部でゆるやかにくびれて、短い複合口縁部は広がる器形。内外面共にヘラミガキされるが外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナーから出土。

5・14は肩部破片。5はRLの単節縄文が羽状に施され、下端には2条のS字状結節文がみられる。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には粗砂を含む。14はLRの単節縄文が羽状に施され、下端には2条のS字状結節文が巡る。外面はヘラミガキされ赤彩されるが、磨耗がはげしく不明瞭。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

5は覆土中、14は床面上から出土した。

甕形土器（第28図1、第31図6～13・15～17）

第28図1は台付甕形土器の脚部。裾部径7.5cmを測る。脚部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面縦位、内面横位のハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子含む。住居跡中央付近床面上から出土。

第31図6～10は口縁部破片で内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。6は口唇部外面には柱目の板の小口

部分で刺突された刻みが巡る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。7は口唇端部にもハケ目痕がみられ、口唇部外面には浅い刻みのような痕がみられるが不明瞭。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。8は口唇部外面に先端の鋭い工具で押捺された刻みが巡る。色調は黒褐色（10YR3/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。9・10は同一個体で口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。いずれも覆土中からの出土。

11～17は頸部から体部にかけての破片。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。11と17は同一個体。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には粗砂を含む。住居跡中央から東寄り床面上から出土した。12・13・16は9・10と同一個体。15は6とは同一個体である。南コーナーから出土。

51号住居跡（第26図）

〔位置〕 6 I・12 I 地点。

〔構造〕 49Yを切る。52Y・88Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明×435cm。（主軸方位）N-12°-E。（壁高）27～34cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅10～20cm・下幅5～13cm・深さ1～10cmを測る。東側コーナーでは検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から西に偏って位置する。不明×50cmの地床炉で、僅かな掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）北東コーナーに位置する。径40cm前後の円形を呈し深さ27cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・焼土粒子を含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 炭化材と共に僅かに土器片が出土している。

〔時期〕 古墳時代前期。

〔所見〕 主軸が短軸の可能性はある。床面に炭化材が点在しているため、焼失家屋の可能性はある。

51号住居跡出土遺物（第31図18～22）

壺形土器（18・19）

18は単純口縁。口縁部はゆるやかに開く器形。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

19は肩部破片。LRの単節縄文の縦回転が施され、その下端にはS字状結節文がみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（20～22）

20は口縁部破片。口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

21・22は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は21が黒褐色（7.5YR3/1）、22は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

52号住居跡（第29図）

〔位置〕 6 I・12 I 地点。

〔構造〕 51・350 Y を切る。54 Y に切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）600×545 cm。（主軸方位）N-29°-W。（壁高）22～53 cm を測り、80° 前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅20 cm 前後・下幅 5～8 cm・深さ 3～14 cm を測る。西コーナー部分では検出されなかった。（床面）平坦だが全面軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）各コーナーに近い 4 本が主柱穴と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1 層 耕作土。
- 2 層 明褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3 層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。
- 4 層 褐色土。ローム粒子・ロームブロックを含む。
- 5 層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 北コーナー床面上から多く出土した。

〔時期〕 古墳時代前期後半（古墳 I 新）。

52号住居跡出土遺物（第30図、31図23～35）**壺形土器（第30図 1、第31図23～29・32）**

第30図 1 は複合口縁部のみ残存。口径15.2 cm を測る。頸部で「く」字状に屈曲し、複合口縁部は外反する。口縁部外面はヘラナデされるが、横位のハケ目痕が残る。口縁部内面はヘラナデされるが、僅かにハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・軽石と思われる白色粒子を含む。北東壁際からの出土。

第31図23～29は口頸部破片。23は複合口縁部内外面共にヘラミガキされるが、口縁部直下には消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には粗砂を含むがきめ細かい。24は頸部破片。外面にはLRの単節縄文の端末結節が施される。色調はにぶい黄褐色（10YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。25はゆるやかに開く単純口縁破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。26は内湾する単純口縁破片。内外面共にヘラミガキされるが、外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。27・28は単純口縁破片。頸部で屈曲し、口縁部は直立気味に開く器形である。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は27がにぶい赤褐色（5YR4/3）、28はにぶい橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。29は頸部が「く」字状に屈曲し、単純口縁部は外反する。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。32は体部破片。内外面共にヘラミガキされるが、外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。すべて覆土中からの出土。

器台形土器（第30図 2・3）

2・3共に完形。2は口径7.7 cm・裾部径10.1 cm・器高7.5 cm を測る。受け部は頸部からゆるやかに内湾する。接合部は細くくびれて、脚台部は裾部にかけてゆるやかに大きく開く。受け部中央には上から下へ直径1 cmの受け部孔があげられている。脚台部中位には円窓が3個外から内へあげられている。口縁部内外面共にヨコナデ、受け部内外面共に横方向に丁寧にヘラミガキされる。脚台部外面は縦方向にヘラミガキされる。脚台部内面はヘラナデされるが僅かにハケ目痕が残る。脚台部内面以外は赤彩される。色調は赤彩部がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、脚台部内面はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。北コーナー付近より出土した。

3は口径7.2cm・裾部径9.7cm・器高7.1cmを測る。受け部は頸部からゆるやかに内湾し、口唇端部は面取りされる。口唇部外面には幅約2mmの浅い沈線が一周する。脚台部は頸部からゆるやかに外反して裾部へかけて広がる器形である。受け部孔は径1cmで、上から下へと鋭く穿たれている。脚台部には外から内へ円窓が3ヵ所穿たれているが、不均等な位置にある。口縁部内外面共にヨコナデ、受け部内外面共に横方向に丁寧にヘラミガキされる。脚台部外面は縦方向にヘラミガキされる。脚台部内面はヘラナデされるが僅かにハケ目痕が残る。脚台部内面以外は赤彩される。色調は赤褐色(10YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を2の土器よりも多く含むが、精選されておりきめ細かく堅緻である。北コーナーより出土した。

甕形土器(第30図4、第31図30・31・33~35)

第30図4は台付甕形土器の脚台部のみ残存。裾部径8cm。裾部へ向かって直線的に開く器形である。甕部内面はヘラナデされるが、縦位のハケ目痕が残る。脚台部内外面共にヘラナデされるが、外面には不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。北コーナー付近から出土した。

第31図30は口唇部外面には柁目の板の小口部分で浅く刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。31・33・34は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。31は色調は明褐色(7.5YR5/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。33が黒褐色(7.5YR3/1)、34はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

35は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中からの出土。

53号住居跡(第32図)

〔位置〕6Ⅰ・6Ⅱ地点。

〔構造〕北側調査区外。55Yを切る。(平面形)隅丸正方形か。(規模)不明。(主軸方位)N-36°-E。(壁高)55~58cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)全体に軟弱である。(炉)東側に位置する。不明×80cmの地床炉で、深さ10cmの掘り込みをもつ。(柱穴)比較的多くピットを検出するが、北及び東コーナーに近い深度のある2本が支柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴)検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 3層 暗褐色土。ロームブロックを含む。
- 4層 赤褐色土。焼土粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から破片と勾玉が出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

53号住居跡出土遺物(第33図、第40図1~15、第539図2)

壺形土器(第40図1~4・6~7・10)

1は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

2は頸部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

3・4は体部破片。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は3が赤褐色(5YR4/6)、4はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から

の出土。

7・10は口頸部破片。7の複合口縁部は外反する。8は頸部で「く」字状に屈曲し、単純口縁部は外反する。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は7が橙色(7.5YR7/6)、8がにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

器台形土器(第33図1)

受け部のみ残存する。口径8.8cmを測る。頸部からゆるやかに内湾する器形。受け部孔は直径8mmで、上から下へ鋭くあけられる。口唇部内外面共にヨコナデ、以下横方向に丁寧にヘラミガキされる。外面と受け部内面は赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器(第40図8・9・11~15)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。8・9は同一個体で、色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。11の色調は灰褐色(7.5YR4/2)、12・13も同一個体で、色調は黒褐色(7.5YR3/1)、14・15はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。すべて覆土中からの出土である。

勾玉(第539図2)

蛇紋岩製の勾玉。小型で完形。長さ2.2cm・幅1.5cm・孔径0.3×0.2cm・重量は2.2gを測り、C字形を呈する。色調は黒色(10YR2/1)を呈する。覆土中からの出土である。

54号住居跡(第34図)

〔位置〕 I・12Ⅱ地点。

〔構造〕 52Y・350Dを切る。西側が56Yに切られる。(平面形)隅丸正方形(規模)不明×580cm。(主軸方位)N—42°—E。(壁高)51~57cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅20~25cm・下幅7cm前後・深さ5cm前後を測り、東壁下に部分的に確認された。(床面)全体に軟弱だが南側に硬化面を部分的に認める。(炉)住居中央から北に偏って位置する。径42cmの円形を呈する地床炉で、深さ10cmの掘り込みをもつ。(柱穴)検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴)南コーナーに位置する。径40cmの円形を呈し、深さ49cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 攪乱。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土(5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(7.5YR2/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。貼床充填土。硬質。

〔遺物〕床面上にやや大きめの土器片が点在する。北東側に炭化材が検出された。

〔時期〕古墳時代前期前半。

〔所見〕焼失家屋の可能性がある。

54号住居跡出土遺物(第35図、第40図16~28)

壺形土器(第35図、第40図16~25)

第35図1は全体の1/2程度が残存。口径26.9cm・底径7.5cm・器高26.9cmを測る。口縁部は頸部で屈曲し、直線的に開く。体部下半に最大径をもつ体部はほぼ球状を呈し、底部はやや凹面をなすと推測される。体部下位には明瞭

な輪積痕がみられ、整形時に下位以下の粘土を積み上げた後、ある程度乾燥させてから残る部分を積み上げている事が推測される。口唇部内外面共にヨコナデされる。外面はヘラミガキされるが、一部分に消しきれないハケ目痕が残る。内面は口縁部横方向にヘラミガキされるが、以下ヘラナデされる。体部下位にはハケ目痕が僅かに残る。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央付近床面上からの出土。

2は口縁部と体部1/2を欠損する。底径8.5cm。平底の底部から立ち上がり、体部下半に最大径をもつやや下膨れの器形である。外面は丁寧にヘラミガキされるが内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央付近の覆土中から出土。

第40図16・17・19は複合口縁部破片。16は口唇端部と口縁部以外はヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。口縁部外面にLRの単節縄文を施し、棒状浮文と円形浮文を貼付する。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。17は口唇端部と口縁部に網目状撚糸文を施し、下端には刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むがきめ細かい。19は口縁端部と口縁部にLRの単節縄文を羽状に施す。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を含むがきめ細かい。いずれも覆土中からの出土。

18・20は単純口縁部破片。18は直立気味に立ち上がる。内外面共に丁寧にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。外面は赤彩される。色調は橙色(2.5YR6/6)を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。20は内湾しながら立ち上がる。内外面共に内外面共にヘラミガキされる。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央付近床面上から出土。

21・22は体部破片。21はRLの単節縄文の端末結節が羽状に施され、22はLRの単節縄文の端末結節が施される。色調は22がぶい橙色(7.5YR7/4)、23はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも住居跡中央付近床面上からの出土。

23は体部破片。外面ヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は褐灰色(5YR4/1)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央付近床面上からの出土。

高坏形土器(第35図3～5)

3は有段高坏。全体の1/2程度が残存。口径15cm・裾径13cm・器高11cmを測る。坏部下端に稜をもち、僅かに内湾しながら開く。脚台部は末広がりになり、中位には3孔が外から内へとあけられている。坏部内外面共に縦方向に丁寧にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が僅かに残る。脚台部外面は丁寧にヘラミガキが施されるが、内面はヘラナデされ、横位のハケ目痕が残る。脚台部内面以外は赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。住居跡中央付近覆土中からの出土。

4は埴形高坏で坏部1/2程度が残存する。口径は推定18.5cmを測る。体部は浅く大きく開き口縁部で僅かに内湾する器形である。口唇端部は面取りされLRの縄文が施される。口縁部外面にも口唇端部と同じLR縄文が施され、その上下には網目状撚糸文が施される。縄文帯の内部には3個一単位の円形赤彩文がみられる。縄文帯以外は丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)、赤彩部は赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。南東壁際付近床面上からの出土。

5は脚台部の1/2程度が残存する。裾部径推定8.8cm。接合部は屈曲し坏部は直線的に開く器形である。脚台部内面以外はヘラミガキされる。色調は黒褐色(5YR3/1)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。住居跡南南西寄りのピット脇から出土。

甕形土器（第35図6～11、第40図24～28）

第35図6は台付甕形土器の甕部のみ残存するが、口縁部は3/4を欠損する。推定口径17.5cm。あまり張らない体部から頸部で強くくびれて口縁部は外反する。口唇部内外面共にヨコナデ、以下ヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。内面には全体的に炭化物の付着がみられる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央やや南東寄り床面上からの出土。

7は台付甕形土器の甕部1/4程度が残存。推定口径25cm。球状と推測される体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面には頸部付近にハケ目痕が残る。体部外面の中位より上には炭化物の付着がみられる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。南東壁際床面上からの出土。

8は台付甕形土器甕部下半と脚台部上半のみ残存。接合部で屈曲し、脚台部は直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが、外面縦位、内面横位のハケ目痕が残る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央付近覆土中からの出土。

9は台付甕形土器の体部下半以下1/3程度が残存。裾部径10cm。裾部へかけて直線的に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが、接合部には縦方向にミガかれたように強くナデられた痕がみられる。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

10・11は台付甕形土器の脚台部。10は裾部径10.5cmを測る。裾部へかけて直線的に開く器形である。脚裾端部には粘土のはみだしがみられる。内外面共にヘラナデされるが外面と内面下半にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。11は裾部径15cmを測る。裾部へかけてやや内湾気味に開き、裾端部には粘土のはみだしがみられる。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は黄橙色（10YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。10は南東壁際床面上からの出土。11は覆土中からの出土。

第40図24・25は口縁部破片。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。24の色調はにぶい褐色（7.5YR6/4）、25は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

26～28は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は26がにぶい橙色（7.5YR6/4）、27が黄褐色（10YR6/3）、28が褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

55号住居跡（第32図）

〔位置〕 6 I 地点。

〔構造〕 北側調査区外。53Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）55～58cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 7層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

56号住居跡（第36図）

〔位置〕 6 I・12 II地点。

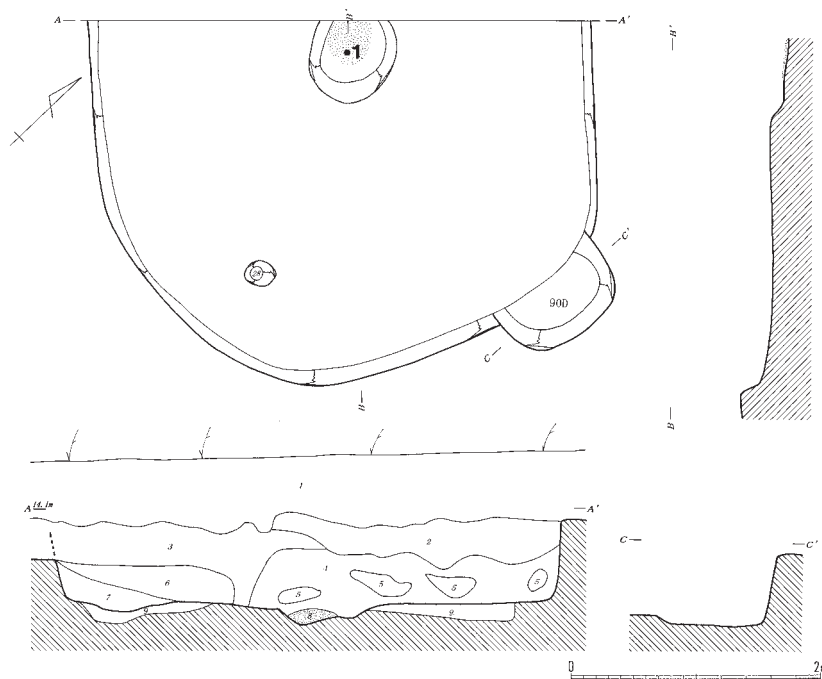
〔構造〕 北側調査区外。54 Y・90 Dを切る。(平面形) 不明。(規模) 不明×392 cm。(主軸方位) N-46°-W。(壁高) 49~59 cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅18~25 cm・下幅8 cm前後・深さ30 cmを測る。(床面) 遺存状態は不良だが一部硬化面を認める。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。不明×66 cmの地床炉で、深さ6 cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 8層 暗赤褐色土。焼土粒子を多く含む。
- 9層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。貼床充填土。

不整合な堆積状態で、埋め戻された可能性が大きい。

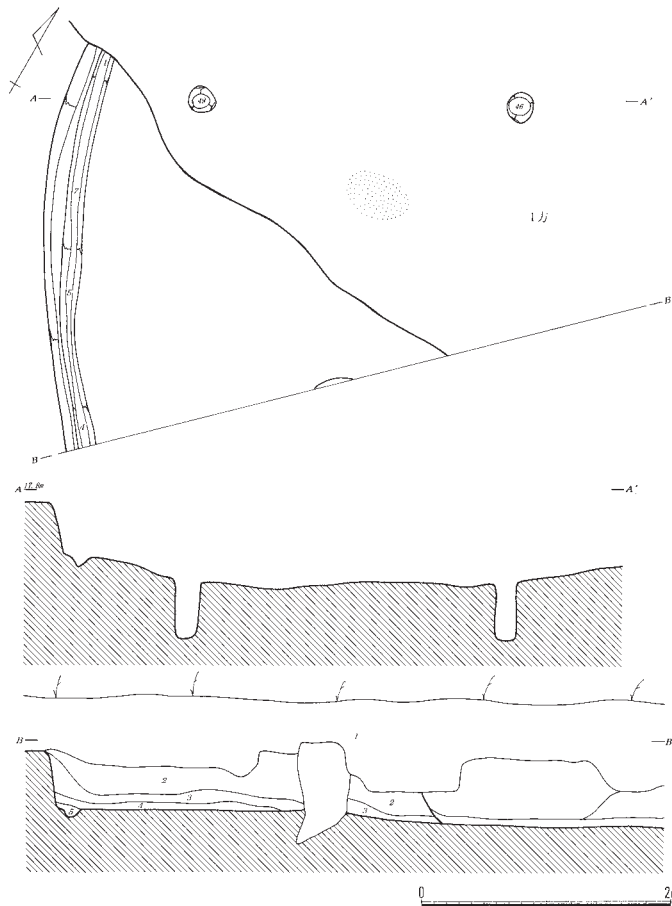
〔遺物〕 炉内と覆土中から土器片が出土した。



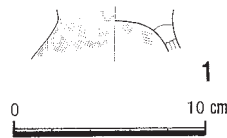
第36図 56号住居跡、90号土坑 (1/60)



第37図 56号住居跡出土遺物 (1/4)



第38図 58号住居跡 (1/60)



第39図 58号住居跡出土遺物 (1/4)

〔時期〕古墳時代前期。

56号住居跡出土遺物 (第37図、40図29~31)

壺形土器 (第40図29・30)

29・30は口縁部破片で同一個体である。直立しながら開く器形。内外面共にヘラミガキされる。口唇部には面をつくるために粘土を貼り付けたような痕がみられる。色調は橙色 (7.5YR7/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。いずれも覆土中からの出土。

鉢形土器 (第37図1)

口頸部1/3程度が残存。口径推定22cm。口唇部はやや角ばっている。体部から頸部で屈曲し、口縁部は外反する。頸部内面に稜をもつ。内外面共にヘラミガキされるが、外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調は灰褐色 (7.5YR7/2) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。炉内から出土。

甕形土器 (第40図31)

31は口頸部破片。頸部で強くくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調は灰褐色 (7.5YR5/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子

を含む。覆土中からの出土。

58号住居跡（第38図）

〔位置〕 8 I 地点。

〔構造〕 南側調査区外。一方に切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）45～60cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅9～15cm・下幅4～7cm・深さ1～6cmを測る。（床面）遺存している部分では全面軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）一方の溝底から支柱穴と思われるピット2本を検出する。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。
- 4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

58号住居跡出土遺物（第39図、第40図32～37）

壺形土器（第40図32～34）

32は複合口縁部破片。口縁部下端には粘土のはみだしがみられる。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中の出土。

33・34は肩部破片で同一個体。撚りの異なる無節縄文が羽状に施される。境目には縄文の下端の結び目の痕がみられる。縄文帯の内部には円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（第39図1、第40図35～38）

第39図1は台付甕形土器の接合部。裾部へかけて直線的に広がる器形と推測される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。

第40図35は口縁部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい黄褐色（10YR 4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

36～38は体部破片。37・38は同一個体。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は37が黒褐色（7.5YR3/1）、37・38はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中からの出土。

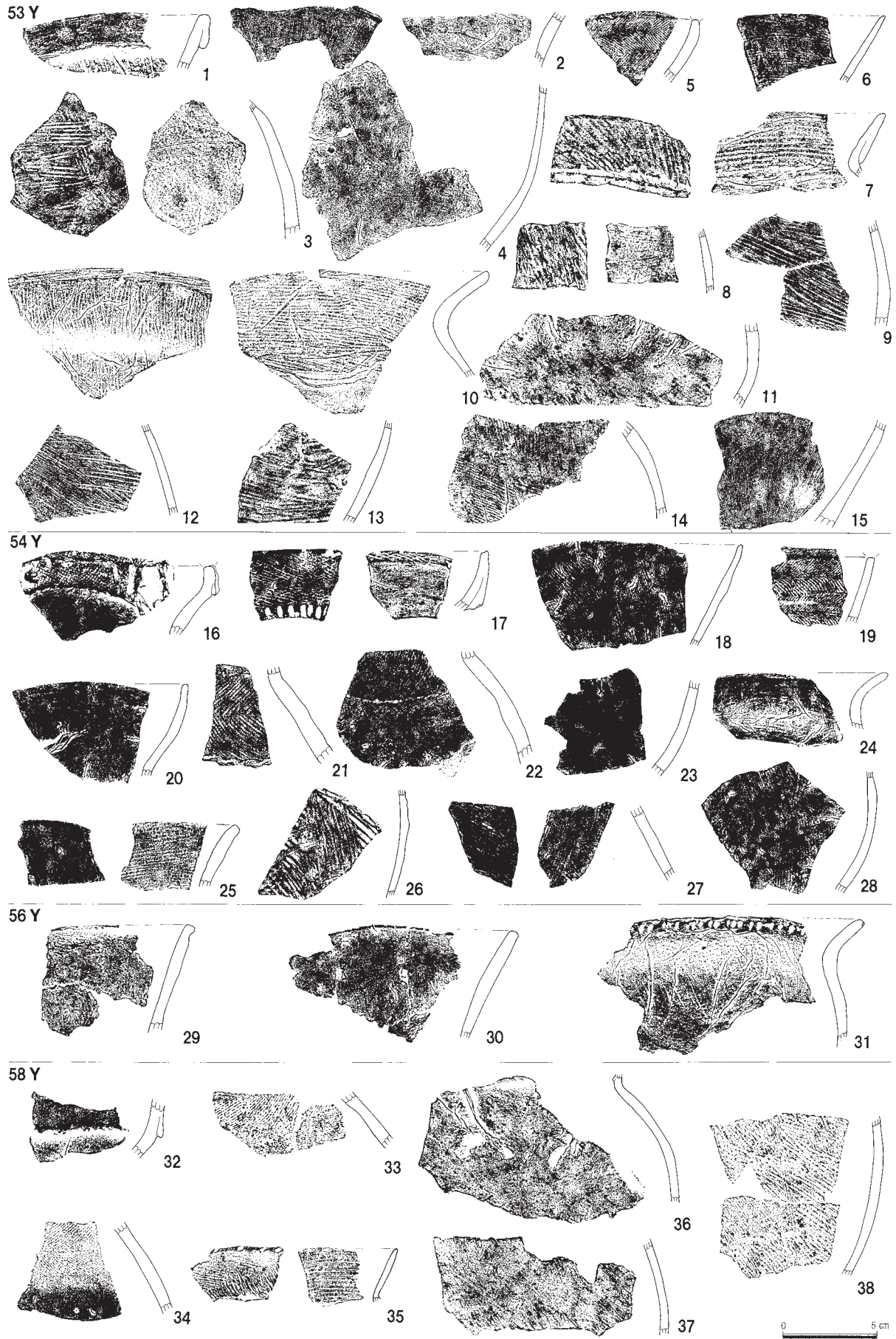
59号住居跡（第41図）

〔位置〕 8 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）340×314cm。（主軸方位）N—35°—W。（壁高）11～19cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する。径50cmの円形を呈する地床炉で、僅かな掘り込みが認められる。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調にする。

〔遺物〕 南東壁際床面上から壺形土器が出土した。



第40図 53・54・56・58号住居跡出土遺物 (1/3)

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

59号住居跡出土遺物（第42図、48図1・2）

壺形土器（第42図1・2）

1は小型の複合口縁壺で口縁部1/2と肩部の1/4が残存する。口径9.8cmを測る。頸部は屈曲し、複合口縁部は内湾気味に立ち上がりながら開く器形である。口縁部外面には棒状浮文が4本一単位で貼付され、下端には左方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。口唇端部には地文にRLの単節縄文が施され、その上に円形浮文が付される。肩部文様帯は1段目に先端の鋭い櫛歯状工具で刺突された文様が一周する。以下、RL端末結節縄文が施される。外面文様帯以外と口縁部内面は赤彩される。口縁部と縄文帯の中には円形赤彩文が施される。外面は文様帯以外はヘラミガキされるが口縁部外面と口縁部直下にはハケ目痕が残る。口縁部内面はヘラミガキされる。体部内面はヘラナデされるが、輪積痕が明瞭に残る。縄文帯以外と口縁部内面は赤彩される。色調は灰黄褐色（10YR5/2）、赤彩部がにぶい赤褐色（5YR5/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

2は体部下半以下が残存する。底径7cmの平底の底部から立ち上がり広がる器形である。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。底部には木葉痕、体部外面には赤彩痕がみられる。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）、赤彩面はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも南東壁際からの出土。

甕形土器（第48図1・2）

1・2は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は1が暗褐色（7.5YR3/3）、2が灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。共に覆土中からの出土。

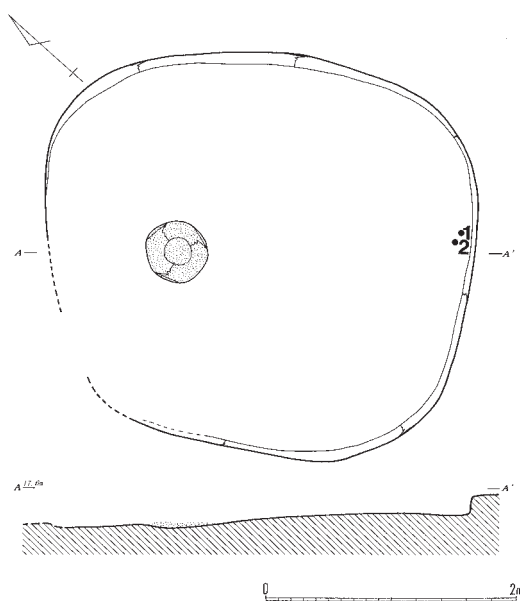
60号住居跡（第43図）

〔位置〕 9地点。

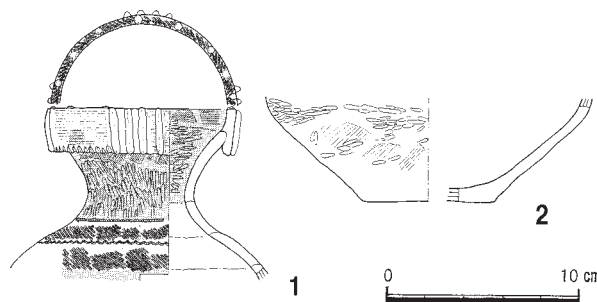
〔構造〕 北西側調査区外。61Yに切られる。（平面形）隅丸正方形か。（規模）不明。（主軸方位）M-85°-E。（壁高）16～22cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12～21cm・下幅4～11cm・深さ2～6cmを測る。（床面）硬質ロームを床面とする。西側コーナー付近に被熱のため赤化している部分がある。（炉）不明×50cmの地床炉で深さ3cmを測る。（柱穴）北及び南コーナーに近い2本が主柱穴の一部であろうか。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。



第41図 59号住居跡（1/60）



第42図 59号住居跡出土遺物（1/4）

7層 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。部分的に黒色土を含む。貼床充填土。

〔遺物〕 炉の付近に炭化材を出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

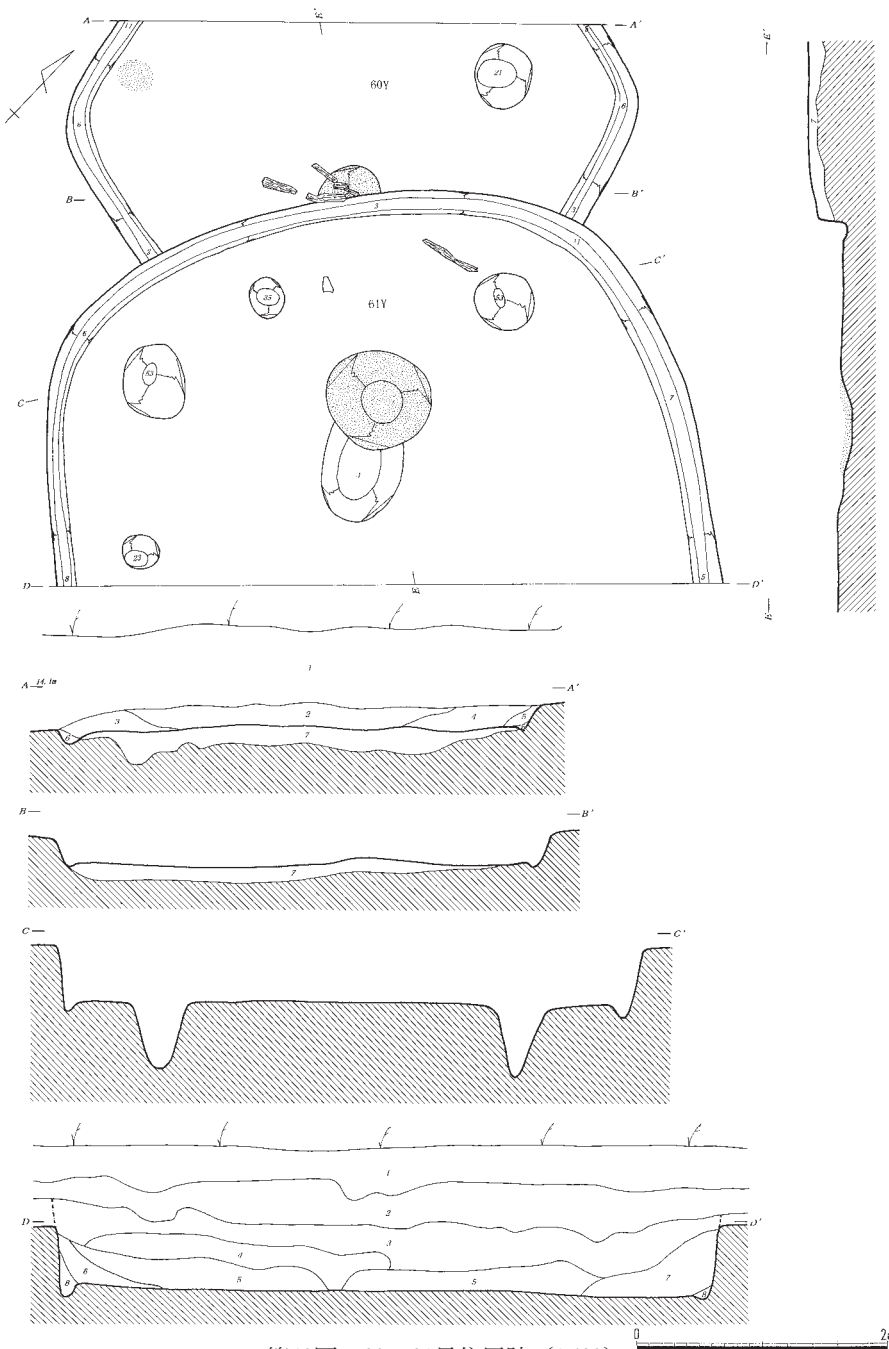
〔所見〕 焼失家屋の可能性ある。

60号住居跡出土遺物 (第44図、第48図3～12)

壺形土器 (第44図1、第48図3・4・7・8)

第44図1は小型壺形土器の底部のみ残存する。底部は小さくくぼんでいる。体部は球状を呈する。外面はヘラミガキされるが、内面はヘラナデされる。色調は浅黄橙色 (10YR8/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

第48図3・4は口縁部破片。3はR Lの単節縄文を羽状に施し、口縁部下端には刻みがみられる。内面はヘラミ



第43図 60・61号住居跡 (1/60)

ガキされ赤彩される。色調はにぶい黄橙色（10YR5/3）を呈し、胎土には細・粗砂・橙色粒子を含む。4は直立気味に立ち上がる単純口縁破片。内外面共にヘラミガキされる。色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

7・8は体部破片。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は7がにぶい橙色（5YR6/4）、8が明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（第48図5・6・9～12）

5・6は口縁部破片。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は5が黒褐色（7.5YR3/1）、6は黒褐色（10YR3/2）を呈し、胎土には細・粗砂・橙色粒子を含む。

9～12は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は9・10・12は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細・粗砂・白色粒子を含む。11は灰黄褐色（10YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土。

61号住居跡（第43図）

〔位置〕 9地点。

〔構造〕 南側調査区外。60Yを切る。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×517cm。（主軸方位）N—51°—W。（壁高）44～51cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅16～24cm・下幅6～12cm・深さ4～12cmを測り、遺存している部分では全周する。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北に偏って位置する。85×77cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。炉の北側に径65cm・深さ1cm前後の掘り込みが確認されたが、灰の掻き出し口と思われる。（柱穴）南西及び北東コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。

〔覆土〕

- 5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 7層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 8層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

ロームブロックを多く含む層があり、また不整合な堆積状態から埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から破片が少数出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 覆土中に炭化材が出土したので、焼失家屋と思われる。

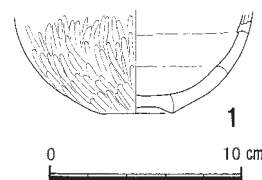
61号住居跡出土遺物（第48図13～19）

壺形土器（第48図13・14・15・16）

13・14は口縁部破片。13は外面にLRの単節縄文を羽状に施す。14は単純口縁でゆるやかに外反する。色調は13がにぶい黄橙色（10YR6/3）、14はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

15は体部破片。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデされる。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

16は底部破片。体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデされる。底部は平底。色調は灰黄褐色（10YR3/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。



第44図 60号住居跡出土遺物（1/4）

壺形土器 (第48図17~19)

17・18は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は17が灰褐色(7.5YR4/3)、18が褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。

19は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土である。

62号住居跡 (第45図)

〔位置〕 9地点。

〔構造〕 南東側調査区外。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 428×358cm。(主軸方位) N-86°-W。(壁高) 10~13cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅10~25cm・下幅4~9cm・深さ6~14cmを測り、南西コーナーを除き全周する。(床面) 西側に硬化面を部分的に認める。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。66×42cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 3カ所のコーナーに近い3本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 西壁下南西コーナーに位置する不明×65cmの長方形を呈し、深さ23cmを測る。南側のピットは後世のものである。

〔覆土〕 上層はローム粒子を含む黒褐色土。下層はローム粒子を多く含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

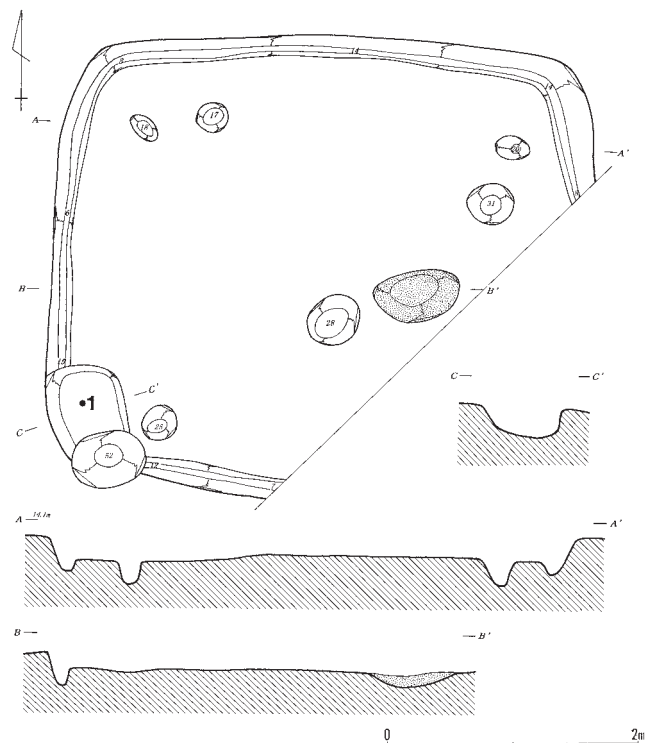
62号住居跡出土遺物

(第46図、第48図20~23・25・27)

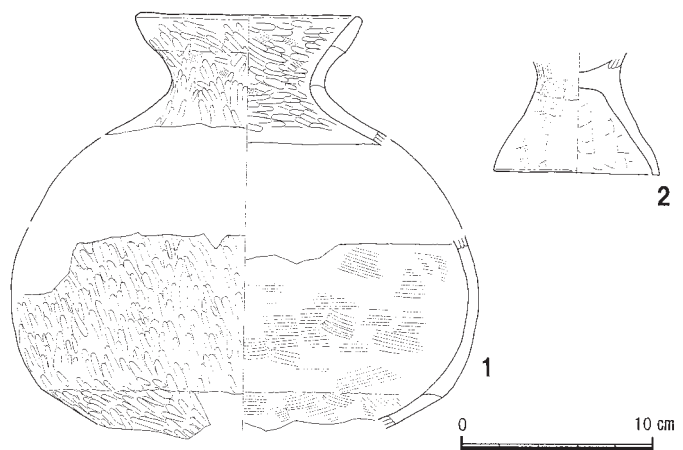
壺形土器 (第46図1、第48図20~23、25・27)

第46図1は口縁部と体部の中位以下1/4程度が残存。推定口径12cm。やや下膨れを呈する体部から頸部でくびれて肥厚した口縁部は外反する。外面は縦方向にヘラミガキされる。口縁部内面は横方向にヘラミガキされ、以下ヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴からの出土。

第48図20・21・25は口縁部破片。20は口唇部に稜をもつ。21・22は単純口縁。共に内外面共にヘラミガキされるがハケ目痕が残る。25は沈線状の文様がみられるが磨耗が激しく詳細不明。色調は20がにぶい黄橙色(10YR6/3)、21は浅黄橙色(10YR8/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙



第45図 62号住居跡 (1/60)



第46図 62号住居跡出土遺物 (1/4)

色粒子を含むが、きわめて精選されきめ細かく堅緻である。25はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

22・23は同一個体と推測される体部破片。外面はヘラミガキされ、内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

27は底部破片。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデされる。色調は橙色（7.5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（第46図2、第48図24・26）

第46図2は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径8.9cmを測る。裾部へかけて内湾気味に広がり、裾端部が内湾する。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。内面には工具痕が残る。甕部内面はヘラナデされる。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含み雲母を僅かに含むが、きめ細かい。

第48図24・26は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は24が黒褐色（7.5YR3/1）、25は褐色（7.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

第46図1を除き、覆土中の出土。

63号住居跡（第47図）

〔位置〕 9地点。

〔構造〕 北西側調査区外。64Yを切る。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）48～67cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～21cm・下幅9～11cm・深さ4～6cmを測る。（床面）全面軟弱で遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。
- 3層 褐灰色土。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。部分的に焼土粒子を含む。
- 5層 暗褐色土。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム小ブロックを多く含む。
- 7層 褐色土。ローム小ブロックを多く含む。
- 8層 黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から比較的少数出土したのみ。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

63号住居跡出土遺物（第48図28～34）

壺形土器（28～30・33）

28～30は肩部破片。28はR Lの単節縄文が施され、円形浮文が貼付される。29は撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端には2条のS字状結節文が施される。いずれも色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

33は体部下半破片。外面はヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

34は体部破片。外面はヘラミガキされ赤彩される。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

高坏形土器 (32)

脚台部破片。外から内へ円窓が空けられる。外面はヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。色調は橙色 (7.5 YR7/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器 (31・34)

31は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが内面は工具痕が残る。色調は橙色 (7.5 YR6/6) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

34は台付甕形土器の甕部下半の破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は橙色 (7.5 YR7/6) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

すべて覆土中からの出土。

64号住居跡 (第47図)

〔位置〕 9 地点。

〔構造〕 北西側調査区外。63 Y に切られる。(平面形) 隅丸正方形か。(規模) 不明×270 cm。(主軸方位) 不明。(壁高) 11~19 cmを測り、60° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦だが遺存状態は不良である。(炉) 住居南側に偏って位置する。38×28 cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ 3 cmの掘り込みを持つ。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

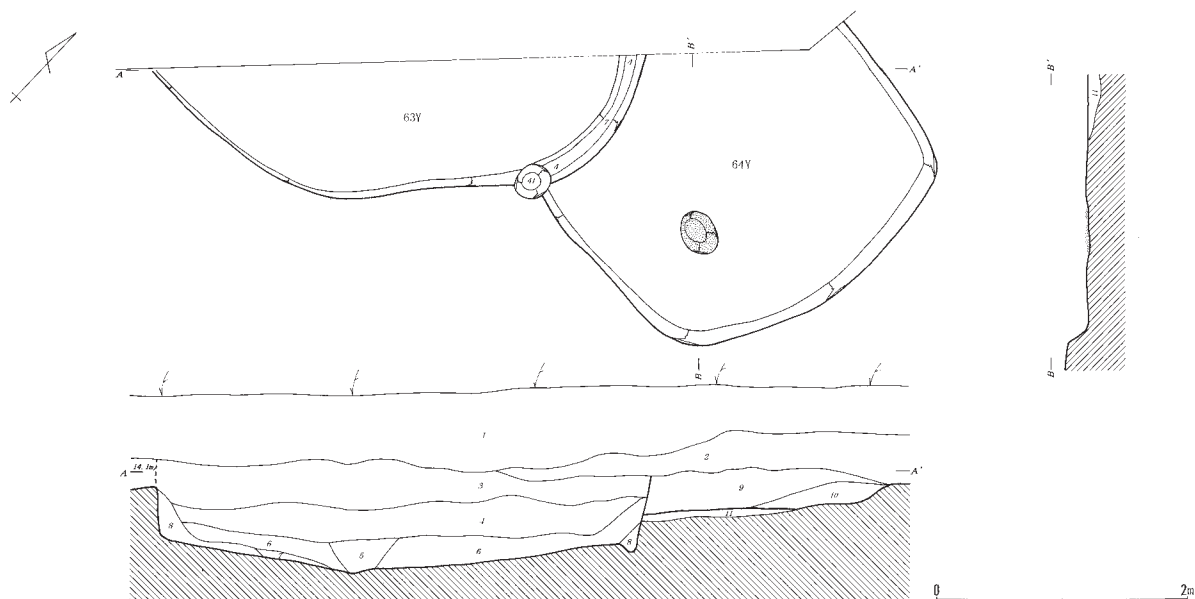
- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。
- 9層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 10層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 11層 にぶい黄褐色土。ローム小ブロックを含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

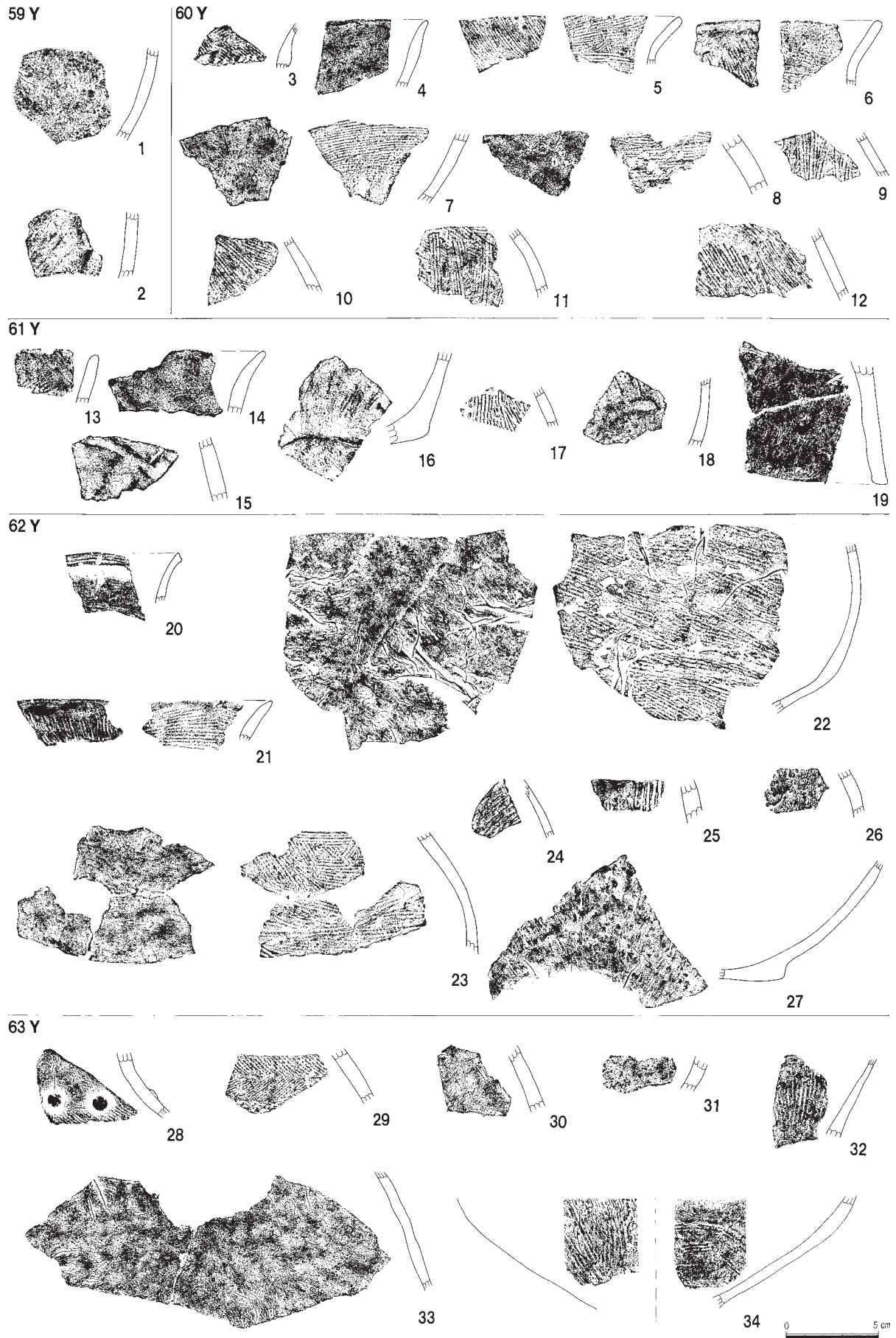
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

64号住居跡出土遺物 (第52図 1~5)

壺形土器 (1・2)



第47図 63・64号住居跡 (1/60)



第48図 59～63号住居跡出土遺物 (1/3)

1は単純口縁部破片。口唇端部は面取りされる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

2は体部破片。外面はヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

甕形土器(3~5)

いずれも体部破片。ヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は(5YR3/1)を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。

すべて覆土中からの出土。

65号住居跡(第49図)

〔位置〕9地点。

〔構造〕南東側調査区外。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)51~56cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)掘り込みの深い良好な遺存状態である。(炉)検出されなかった。(柱穴)検出されなかった。(貯蔵穴)検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ボソボソした感じで遺跡内に部分的に分布。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土したのみ。

〔時期〕弥生時代後期~古墳時代前期。

65号住居跡出土遺物(第52図6)

壺形土器(第52図6)

体部破片。外面はヘラミガキされ、内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

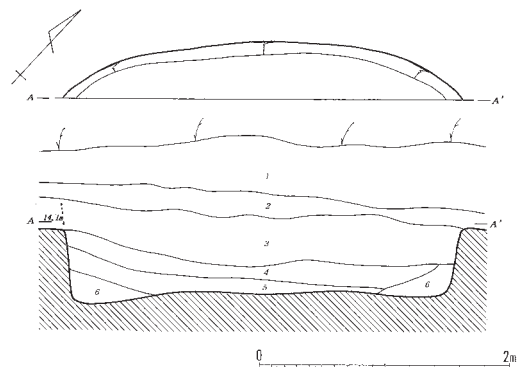
66号住居跡(第51図)

〔位置〕10I地点。

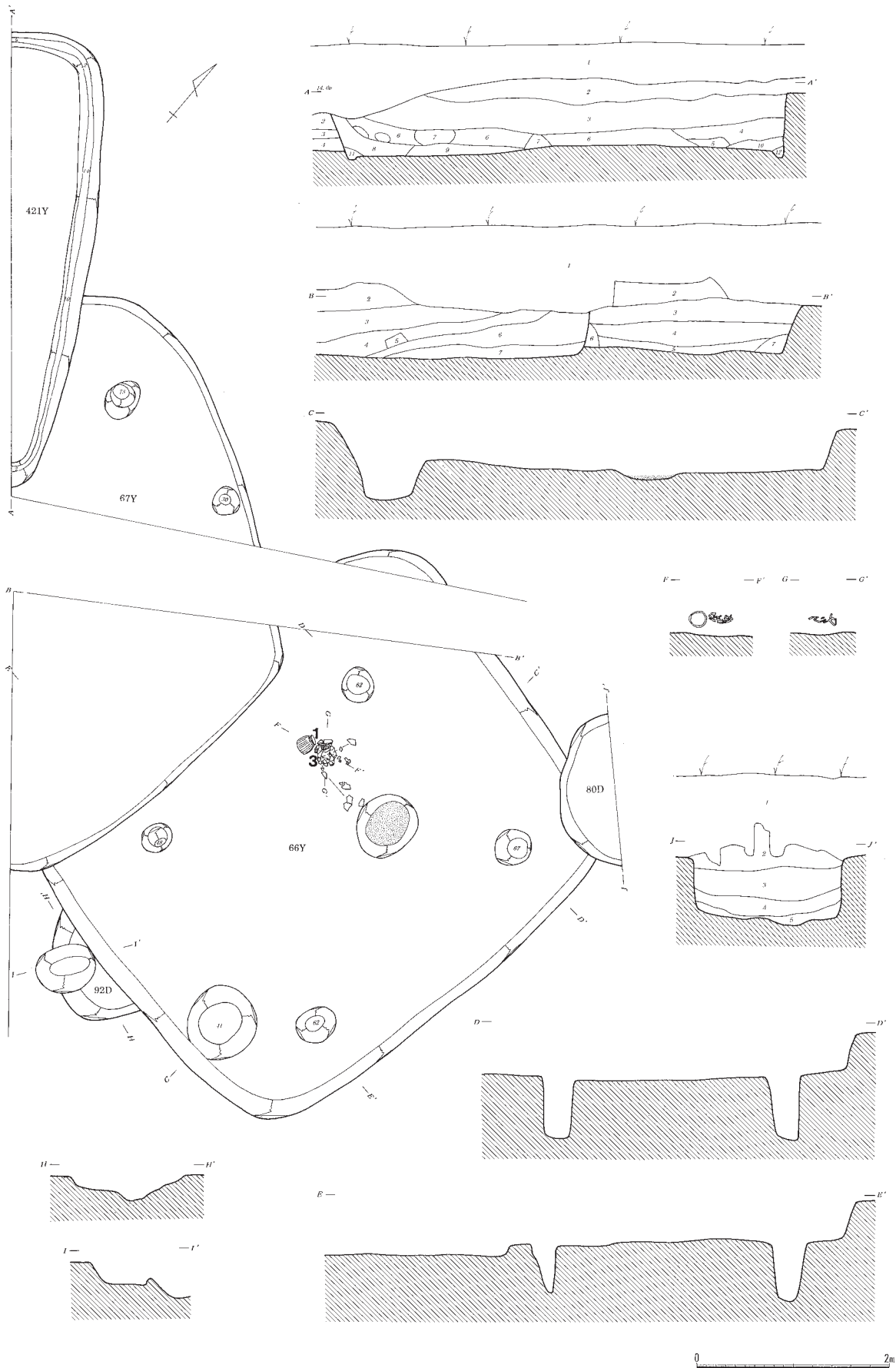
〔構造〕67Y、80・92Dに切られる。(平面形)隅丸長方形。(規模)不明×520cm。(主軸方位)N-14°-E。(壁高)40~54cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。平坦で遺存状態は良好である。(炉)住居中央から僅かに北に偏って位置する。70×60cmの不整楕円形を呈する地床炉で、深さ9cmの掘り込みをもつ。(柱穴)各コーナーに近い4本が主柱穴である。(貯蔵穴)南壁下中央からやや東に偏って位置する。80×70cmの楕円形を呈し、深さ41cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。



第49図 65号住居跡(1/60)



第50図 66・67・421号住居跡、80・92号土坑 (1/60)

- 2層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 3層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 4層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 5層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
 7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 炉の西側の床面上にまとまって完形品1点、破壊されているが同一固体と思われる土器片を多数出土した。

〔時期〕 古墳時代前期後半。

66号住居跡出土遺物（第51図、第52図7～20）

壺形土器（第52図7～9）

7は複合口縁部破片。RLの単節縄文が羽状に施され、境目にはS字状結節文が巡る。複合口縁外面はナデられるが口唇部には粘土のはみ出しがみられる。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

8・9は体部破片。外面は内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は8がにぶい赤褐色（5YR5/4）、9はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

高坏形土器（第52図16）

脚台部破片。外面と坏部内面はヘラミガキされ、脚台部内面はヘラナデされる。色調は明黄褐色（10YR7/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

鉢形土器（第51図2）

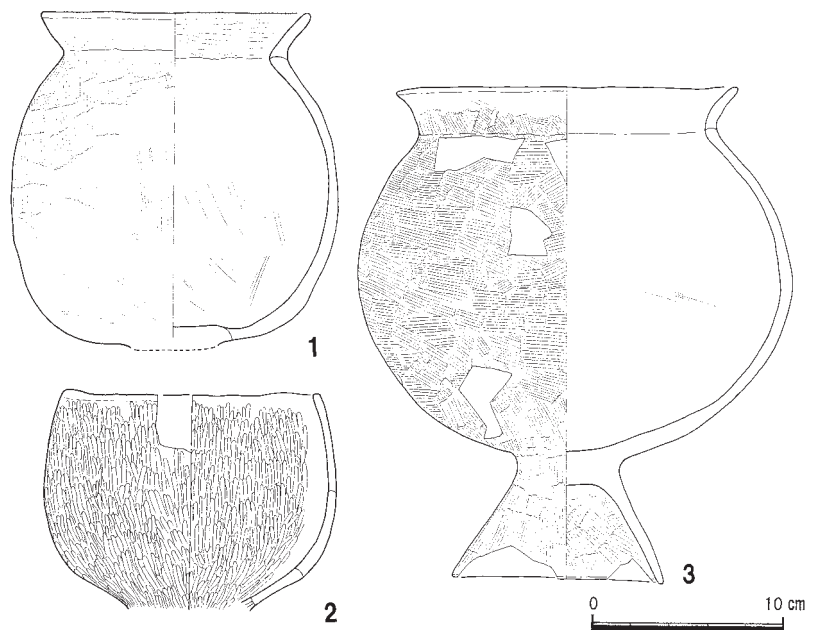
無頸壺ともみられる器形で底部を欠く。口径13.5cm・現器高11.5cmを測る。体部下半に僅かに陵をもち、内湾しながら立ち上がる器形である。口唇部内外面共にヨコナデ、以下、丁寧に縦方向にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（第51図1・3、

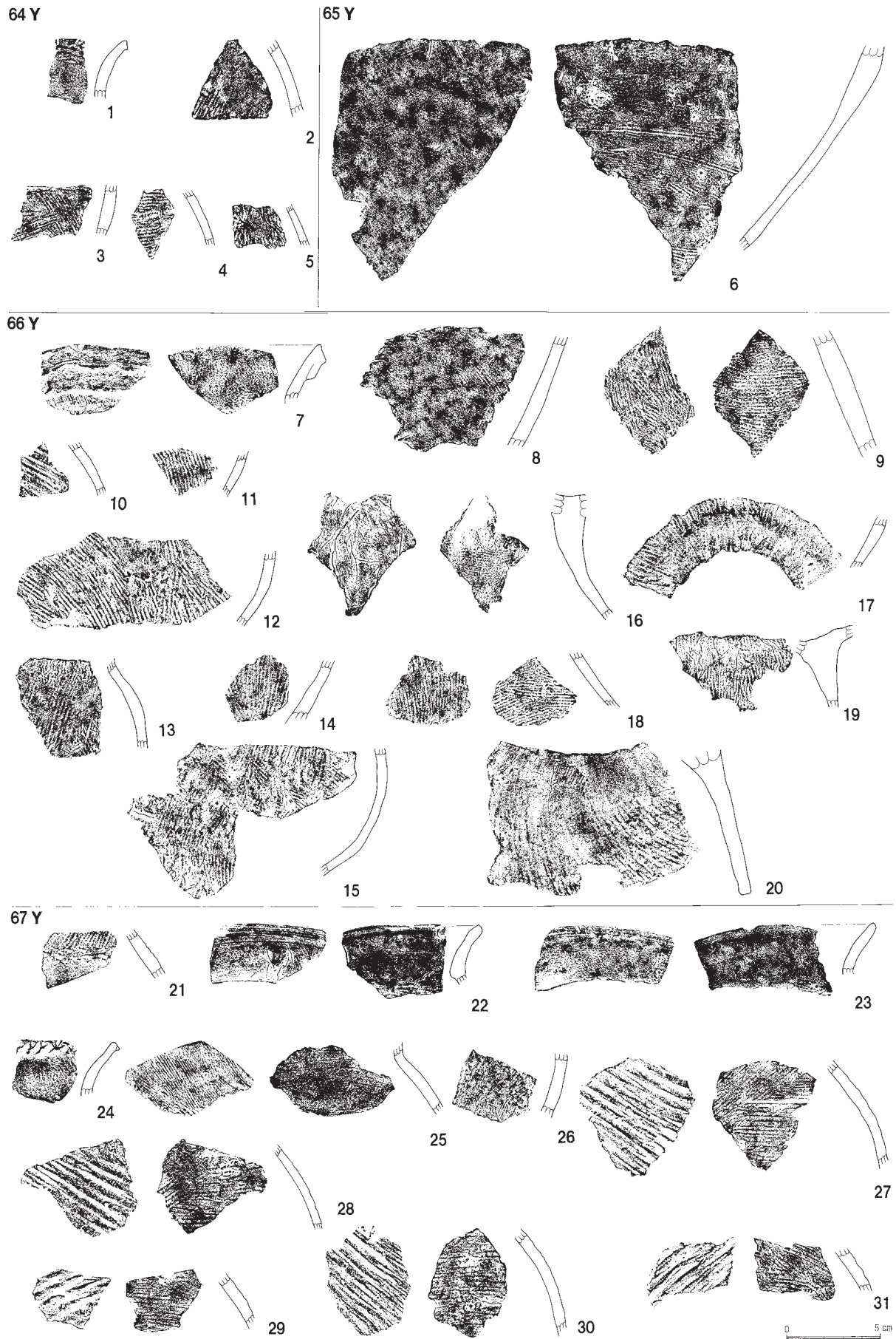
第52図10～15・17～20）

第51図1は台付甕形土器の甕部であろうか。口径14.2cm・現器高17.8cmを測る。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。体部は張りのない偏球状を呈し、底部は直径5cm程度円形に剥離しており、平底であるか脚台部が付くのかは不明である。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。内面には工具痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉西側床面上から横転した状態で出土した。

3は完形の台付甕形土器。口径



第51図 66号住居跡出土遺物（1/4）



第52図 64~67号住居跡出土遺物 (1/3)

17.5cm・推定裾径11cm・器高26.5cmを測る。体部中位に最大径をもつ球状の体部から頸部で強くくびれて口縁部は外反する。脚台部は直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。脚台部内面には体部より幅広く粗いハケ目痕が残る。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、外面体部中位より上と内面には炭化物の付着がみられる。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。1と同位置からつぶれた状態で出土した。

第52図10～18は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は10が灰褐色（7.5YR7/4）、11はにぶい黄橙色（10YR7/4）、12は黄橙色（10YR6/3）、13は灰褐色（7.5YR4/2）、14は（10YR6/3）、15はにぶい赤褐色（5YR5/4）、17は浅黄橙色（10YR8/6）、18はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中からの出土。

19・20は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は19がにぶい褐色（7.5YR6/3）、20は灰褐色（7.5YR6/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。いずれも覆土中からの出土。

67号住居跡（第50図）

〔位置〕 10 I 地点。

〔構造〕 66Yを切る。421Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）46～50cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全面軟弱だが遺存状態は良好である。（炉）2期にわたっての調査のため空隙ができ、その部分に存在したと思われる。（柱穴）北西コーナーの1本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ロームブロック。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

67号住居跡出土遺物（第52図21～31）

壺形土器（21）

21は肩部破片。RLの単節縄文が施され、下端には2条のZ字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（22～31）

22・23・27～31は同一個体。22・23は口縁部破片。口縁部は外反する。27～31は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には幅広く粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。いずれも覆土中からの出土。

24は口縁部破片。口唇部外面には左方向から先端の鋭い工具により押捺された刻みが巡る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

25・26は同一個体の体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には細かいハケ目痕が残る。色調は（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。いずれも覆土中からの出土。

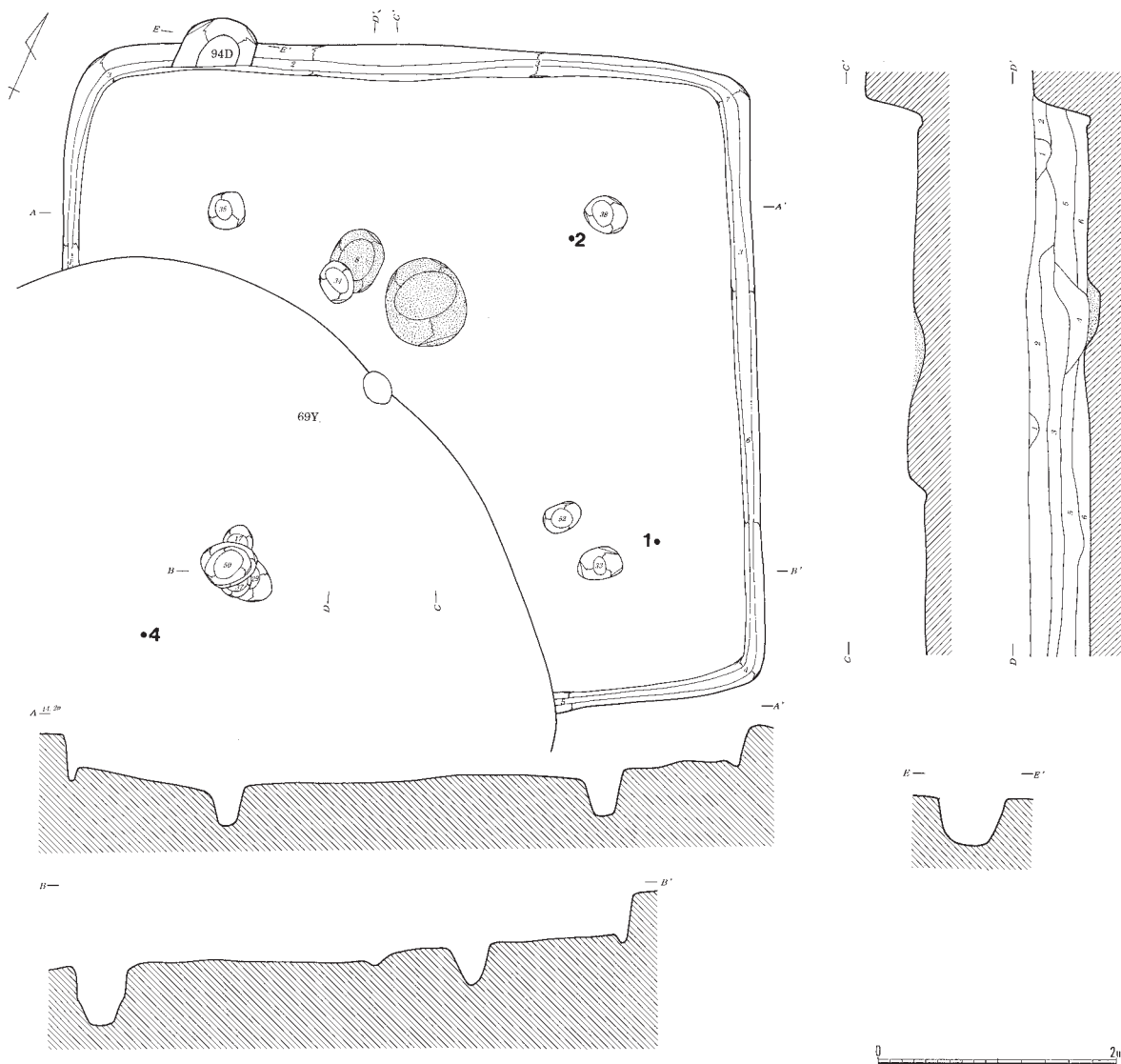
68号住居跡（第53図）

〔位置〕 4 I 地点。

〔構造〕 94Dを切る。69Yに切られる。（平面形）隅丸正方形。（規模）580×547cm。（主軸方位）N-27°-W。（壁高）37~55cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11~28cm・下幅5~11cm・深さ2~6cm測り、遺存している部分では全周する。（床面）硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。（炉）住居中央から東に偏って位置する。径66cmの円形を呈する地床炉で、深さ9cmの掘り込みをもつ。掘り込み外の西側に焼土が存在する。（柱穴）3ヵ所のコーナーに近い部分にある3本と、69Yの床面から検出した1本が主柱穴である。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土。粒子が粗い。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。



第53図 68号住居跡、94号土坑（1/60）

6層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕床面上に遺物が点在する。

〔時期〕古墳時代前期後半。

68号住居跡出土遺物（第54図、第57図1～24）

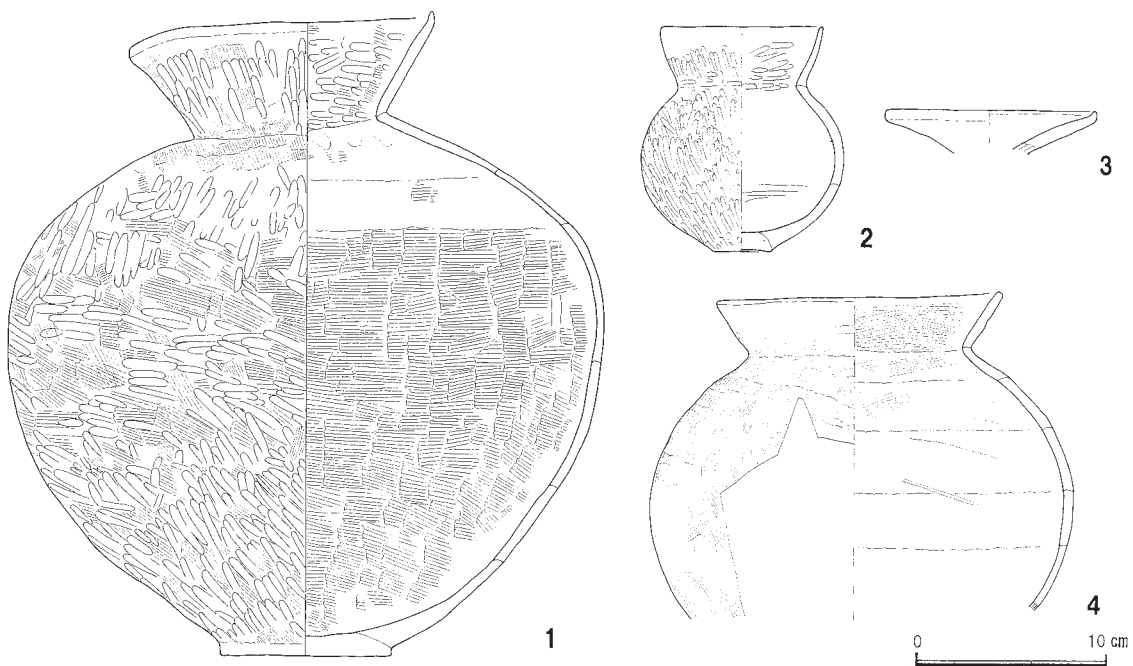
壺形土器（第54図1・2、第57図1・2・5・6・10・14・15）

第54図1は大型ではほぼ完形。口径16.5cm・底径9cm・器高23.5cmを測る。体部はややつぶれた球形を呈する。底部は平底。最大径を体部中位にもち、頸部は「く」字状を呈し、口縁部は外反する。全体に著しくゆがんでいる。口唇部内面はヨコナデされ、僅かにくぼんでいるのが観察される。口唇部内外面共にヨコナデ、以下外面と口縁部内面はヘラミガキされるが消しきれない不規則なハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが横位のハケ目痕が残る。口縁部、体部上・中・下と4分割で作成し、ある程度乾燥してから接合して整形したと思われる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。東コーナー寄り床面上から出土した。

2は口径8.6cm・底径3cm・器高11.9cmと小型で口縁部の1/2程度が欠損する。体部は球状を呈し、頸部は屈曲し、口縁部は内湾気味に外傾する器形である。底部は僅かにくぼんでいる。口唇部内外面共にヨコナデ、外面と口縁部内面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが工具痕が残る。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。北コーナー、ピット傍床面上から出土した。

第57図1・2・15は複合口縁破片。1は口唇端部に棒状浮文が貼付され、口唇部内外面共に刻みが施される。口縁部内面にはRLの単節縄文が施され下端にS字状結節文が施される。色調は浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。2は口縁部にハケ目痕がみられ、斜めに細い棒状浮文が貼付される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。15は内外面共にヘラミガキされるが、口縁部下半には消しきれないハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

5は小型の単純口縁壺の破片。体部は球状を呈し頸部は屈曲し、口縁部は外反する器形である。口縁部内面と外面はヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されき



第54図 68号住居跡出土遺物（1/4）

め細かく堅緻である。住居跡南寄りピット内から出土した。

6・10は同一個体で単純口縁破片。頸部は屈曲し口縁部は外反する。外面と口縁部内面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

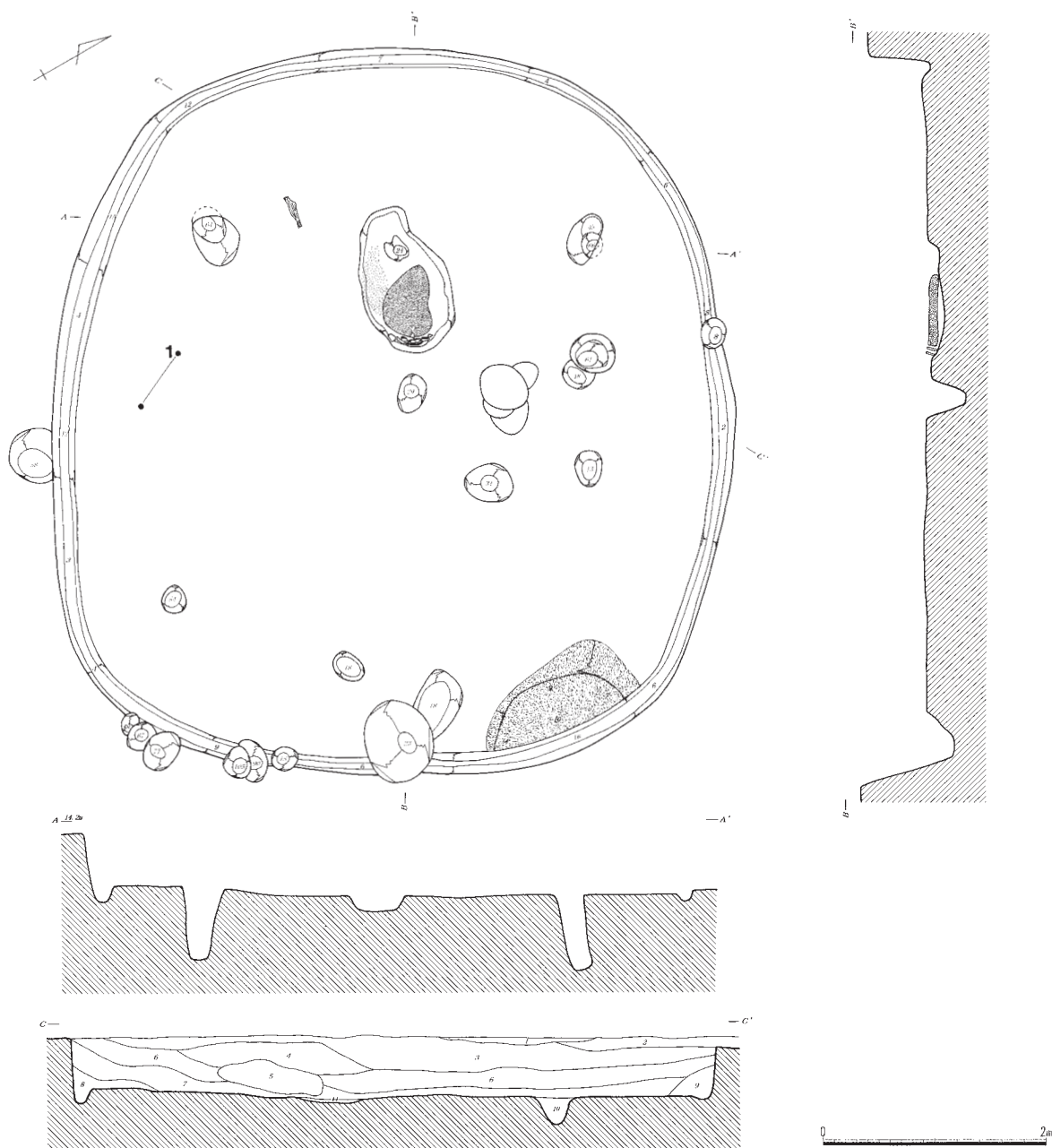
14は口縁部破片で内面に櫛描波状文が施される。文様帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

いずれも覆土中からの出土。

鉢形土器(第57図3・4・16)

3は有段口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが頸部にハケ目痕が残る。内外面共に赤彩痕がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

4は口縁部に複合口縁状に粘土が貼り付けられている。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。



第55図 69号住居跡(1/60)

16は内外面共にヘラミガキされるが、外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

器台形土器（第54図3）

受け部の1/2程度が残存する。口径推定11.5cmを測る。口縁部は湾曲せずまっすぐ開き、口唇部は僅かに内湾する。内外面共にヘラナデされる。口唇部内外面共にヨコナデ。全体に粗雑な調整である。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第54図4、第57図7～9・11～13・15・17～24）

第54図4は台付甕形土器で甕部1/2程度が残存する。口径約15cmを測る。体部は球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部内外面共にヨコナデ。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部内面には不規則なハケ目痕が残る。色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。南コーナー床面上から出土。

第57図7～13・20は口縁部破片。13と20は口唇部外面に刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は7がにぶい橙色（7.5YR6/4）、8はにぶい赤褐色（5YR5/3）、9は灰褐色（7.5YR4/2）、11はにぶい褐色（7.5YR5/3）、12は橙色（5YR6/4）、13はにぶい橙色（7.5YR6/4）、20は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。19の胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

17・18・22～24は体部破片。ヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。17はにぶい黄橙色（10YR6/4）、18はにぶい褐色（7.5YR5/4）、22～24は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

19・21は同一個体。内外面共にヘラナデされるが、外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい黄褐色（10YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中からの出土。

69号住居跡（第55図）

〔位置〕 4 I 地点。

〔構造〕 68Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）640×591cm。（主軸方位）N—68°—W。（壁高）46～58cmを測り、65°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～28cm・下幅5～12cm・深さ2～16cmを測り全周すると思われる。（床面）硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。130×80cmの不整楕円形を呈する粘土火皿で、15cm前後の掘り込みをもつ。粘土は被熱して赤化している。厚さ15cm前後を測る。東側に土器片を検出する。（柱穴）比較的多く検出されたが3ヵ所のコーナー付近の3本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土。粒子が粗い。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 8層 黒褐色土。ローム粒子を含む。小礫を多く含む。
- 9層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 10層 黒褐色土。ローム粒子を含む。

11層 暗褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。
東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色が堆積している。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上に遺物が点在する。

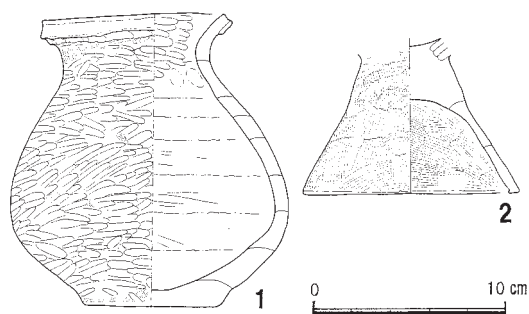
〔時期〕古墳時代前期。

69号住居跡出土遺物（第56図、第57図25～37）

壺形土器（第56図1、第57図25～28）

第56図1は口径9.5cm・底径7cm・器高15cmと小型ではほぼ完
形。体部下半に最大径をもちやや玉葱形を呈する体部から立ち

上がり、頸部で強くくびれて短い複合口縁は大きく外反する器形である。口唇部内外面共にヨコナデ。口縁部は内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。複合口縁直下にはなんらかの工具による圧痕が連続して見られる。体部外面は横方向にヘラミガキされる。焼成時の黒斑がみられる。体部内面はヘラナデされるが、頸部直下には指頭による押圧痕が残る。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）、黒斑部は褐灰色（10YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。南西壁寄り床面上から出土した。



第56図 69号住居跡出土遺物（1/4）

第57図25～28は口縁部破片。25・28は複合口縁部破片。25は口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。内面にはLRの単節縄文を羽状に施し、下端にはZ字状結節文が施されるが磨耗が激しく不明瞭。28は口唇端部と口縁部にRLの単節縄文が施される。25の色調は橙色（5YR7/6）、28はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。26は輪積痕が残り、下端には先端の鋭い工具で押捺された刻みが巡る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。27は有段口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には粗砂を含むが、非常に精選されきめ細かく堅緻である。いずれも覆土中からの出土。

甕形土器（第56図2、第57図29～37）

第56図2は台付甕形土器の脚台部。裾部径11.5cm。脚裾部にかけて大きく開く器形である。内外面共にヘラナデされるが、細密なハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

第57図29～34は口縁部破片。29～32・34は口縁部破片。29～31の口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は29が橙色（5YR5/4）、30がにぶい褐色（7.5YR6/3）、31はにぶい橙色（7.5YR6/4）、32はにぶい黄橙色（10YR7/3）、34は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。29は北コーナーから出土した。他はいずれも覆土中からの出土。

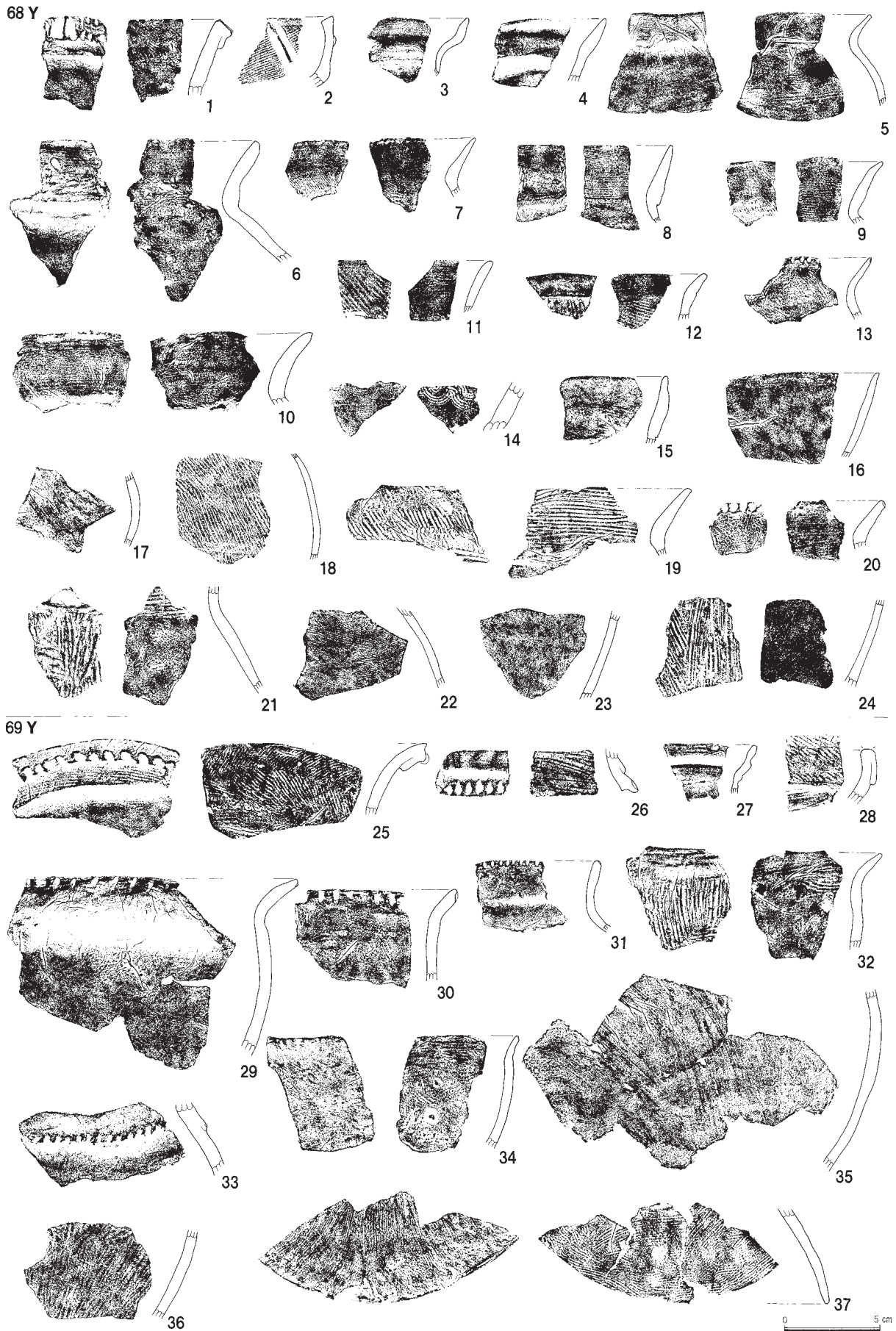
33・35・36は体部破片。33は輪積痕が残り、下端には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は33が灰褐色（7.5YR5/2）、35が灰褐色（5YR4/2）、36は褐灰色（5YR4/1）を呈する。33・35の胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。36の胎土には細礫・粗砂を含む。33は炉内から出土。35は中央ピット内、36は覆土中からの出土。

37は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

70号住居跡（第58図）

〔位置〕9地点。

〔構造〕北側調査区外。93Dを切る。27方に切られる。（平面形）不明。（規模）不明×387cm。（主軸方位）N—50°—E。（壁高）41～52cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅14～22cm・下幅4～9cm・深さ1～7



第57図 68・69号住居跡出土遺物 (1/3)

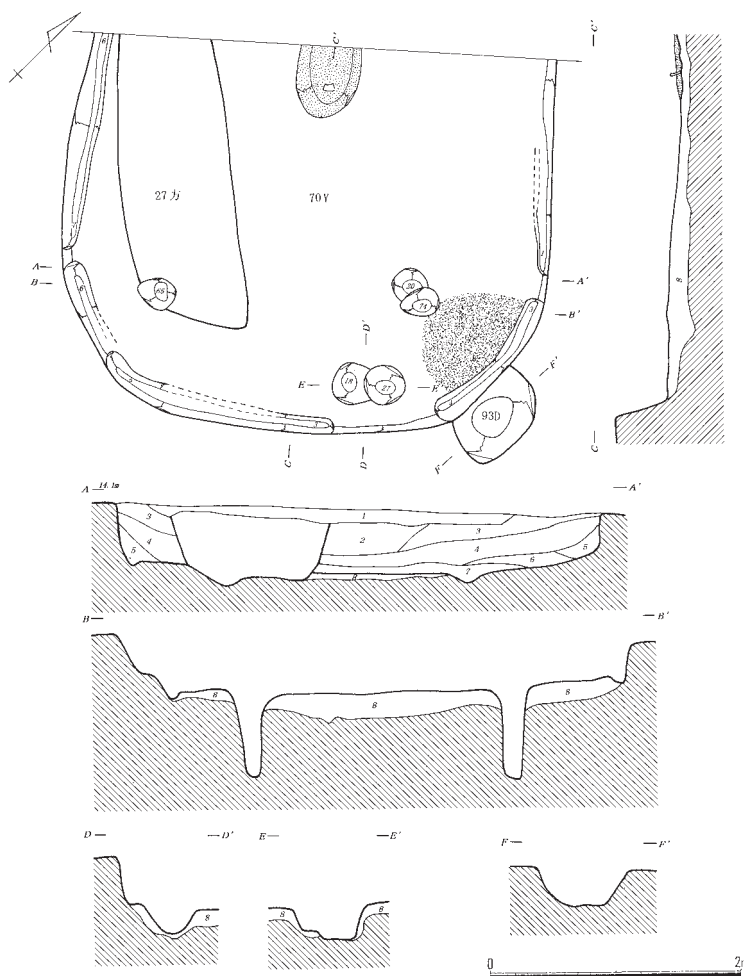
cmを測り全周すると思われる。(床面) 硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。不明×47cmの地床炉で深さ2cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 北及び東コーナーに近い2本が主柱穴の一部である。(貯蔵穴) 南壁下中央から東に偏って位置する。58×32cmの重複した形をなし、深さは東側が27cm、西側は17cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 - 2層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 - 3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
 - 4層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 - 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
 - 6層 暗褐色土。暗赤褐色粒子を多く含む。
 - 7層 黒褐色土。ローム小ブロックを僅かに含む。
 - 8層 暗褐色土。ロームブロックを含む。貼床充填土。
- 東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。
- 堆積状態が不整合で、埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。



第58図 70号住居跡、93号土坑 (1/60)

70号住居跡出土遺物 (第61図1~17)

壺形土器 (1~6・8)

1・2・5は複合口縁部破片。2は外面に棒状浮文が貼付される。3は内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は1が灰黄褐色 (10YR6/2)、2がにぶい黄橙色 (10YR7/2)、5がにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

3・6は単純口縁部破片。3は直立気味に立ちあがり、6は外反する。色調は3が褐灰色 (7.5YR4/1)、6がにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

4は肩部破片。外面にはR Lの単節縄文の端末結節が羽状に施される。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/4) を呈する。胎土には礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

8は体部破片。外面はヘラミガキされ赤彩される。色調は8が赤褐色 (5YR4/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器 (7・9~17)

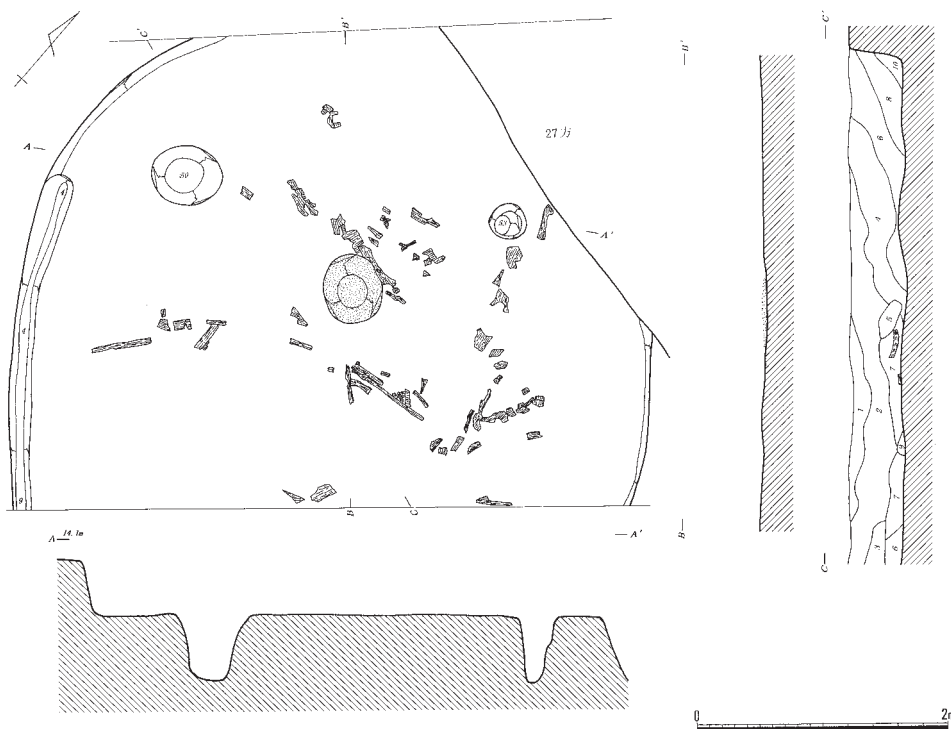
9は口縁部破片。口唇部外面には右方向から先端の鋭い工具で浅く押捺された刻みが巡る。色調はにぶい黄橙色 (10YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

10は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

7・11~15は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は7がにぶい橙色 (7.5YR6/4)、11・13・14は褐灰色 (7.5YR4/1)、12は灰褐色 (7.5YR6/2)、15はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

16・17は同一個体と思われる脚台部破片。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

7のみ炉内部から出土。他は覆土中からの出土。



第59図 71号住居跡 (1/60)

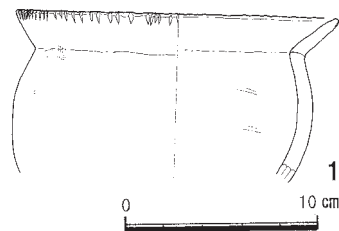
71号住居跡 (第59図)

〔位置〕 9地点。

〔構造〕 南側・北側調査区外。27方に切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×570cm。(主軸方位) N-43°-W。(壁高) 48~53cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅15~21cm・下幅5~9cm・深さ4~8cmを測り、遺存している範囲では西側で止まる。(床面) 南側の床面に硬化面を認める。(炉) 住居中央から北西に偏って位置すると思われる。54×46cmの楕円形を呈する地床炉で深さ1cmを測る。(柱穴) 住居北側に位置する2本が主柱穴の一部であろうか。(貯蔵穴) 検出されなかった。

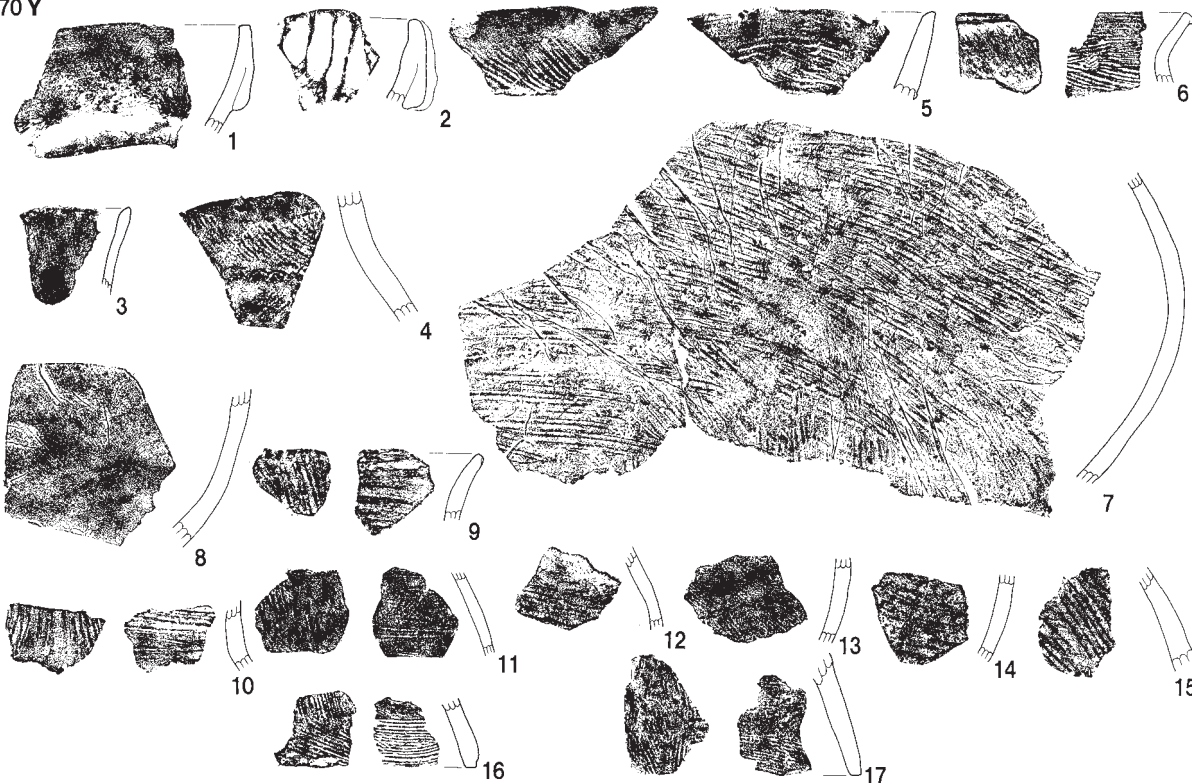
〔覆土〕

- 1層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 黄褐色土。ロームブロック。
- 6層 褐色土。ローム粒子を含む。

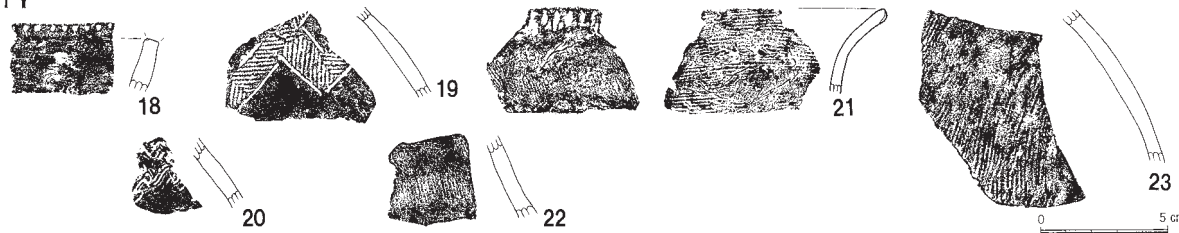


第60図 71号住居跡出土遺物 (1/4)

70 Y



71 Y



第61図 70・71号住居跡出土遺物 (1/3)

- 7層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。炭化材を含む。
- 8層 明褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 9層 暗赤褐色土。焼土粒子を多く含む。
- 10層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上に炭化材が多量に出土した。

〔時期〕古墳時代前期前半。

〔所見〕焼失家屋と思われる。

71号住居跡出土遺物（第60図、第61図18～23）

壺形土器（第61図18～20）

18は口縁部破片。内外面共にヘラミガキされされる。口唇部内面には刻みが巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR 5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

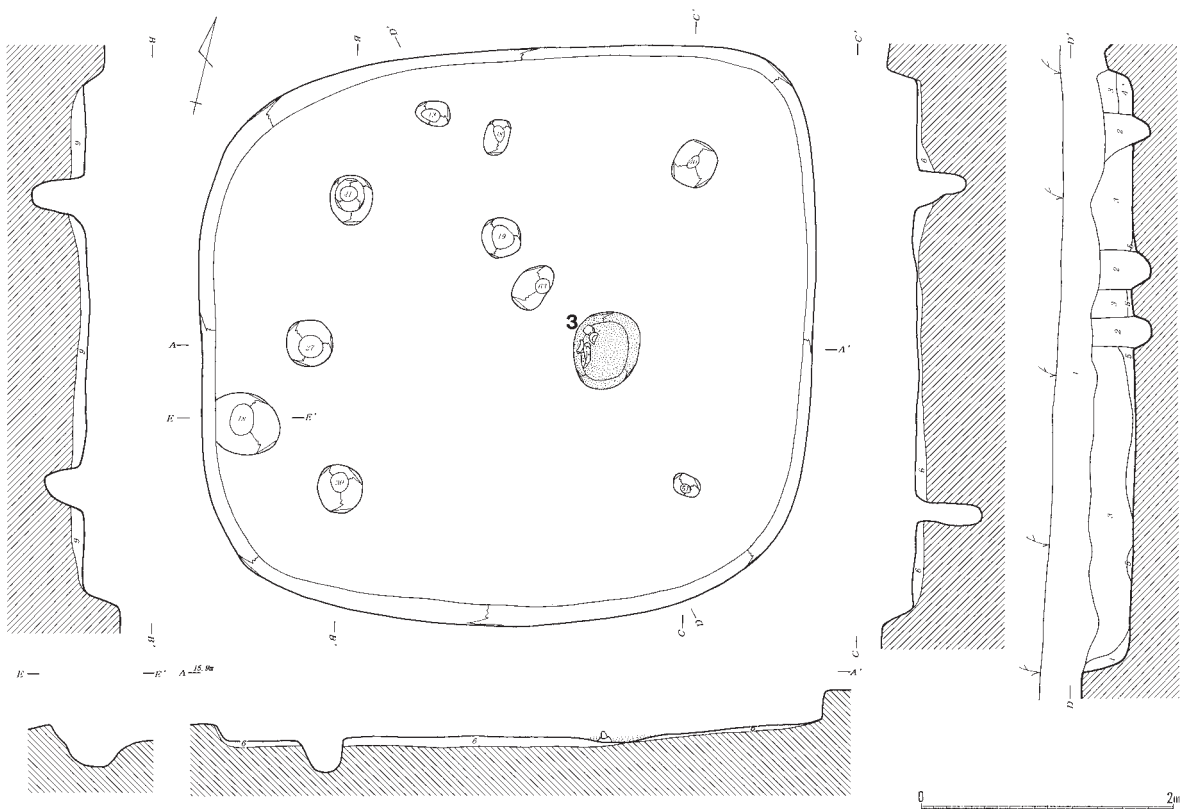
19・20は肩部破片。19はRLの単節縄文を山形沈線で区画した文様がみられ、20は櫛描波状文が施される。色調は19が灰褐色（7.5YR4/2）、20はにぶい橙色（7.5YR6/4）、赤彩部はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

高坏形土器（第61図22）

脚台部破片。円窓がみられる。内外面共に内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

甕形土器（第60図1、第61図21・23）

第60図1は甕部の2/3程度が残存する。推定口径10cm。あまり張りのない体部から立ち上がり、頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には右方向から先端の鋭い工具により浅く押捺された刻みが巡る。色



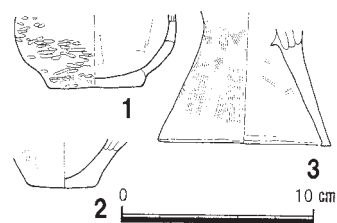
第62図 73号住居跡 (1/60)

調はにぶい橙色 (5YR7/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。

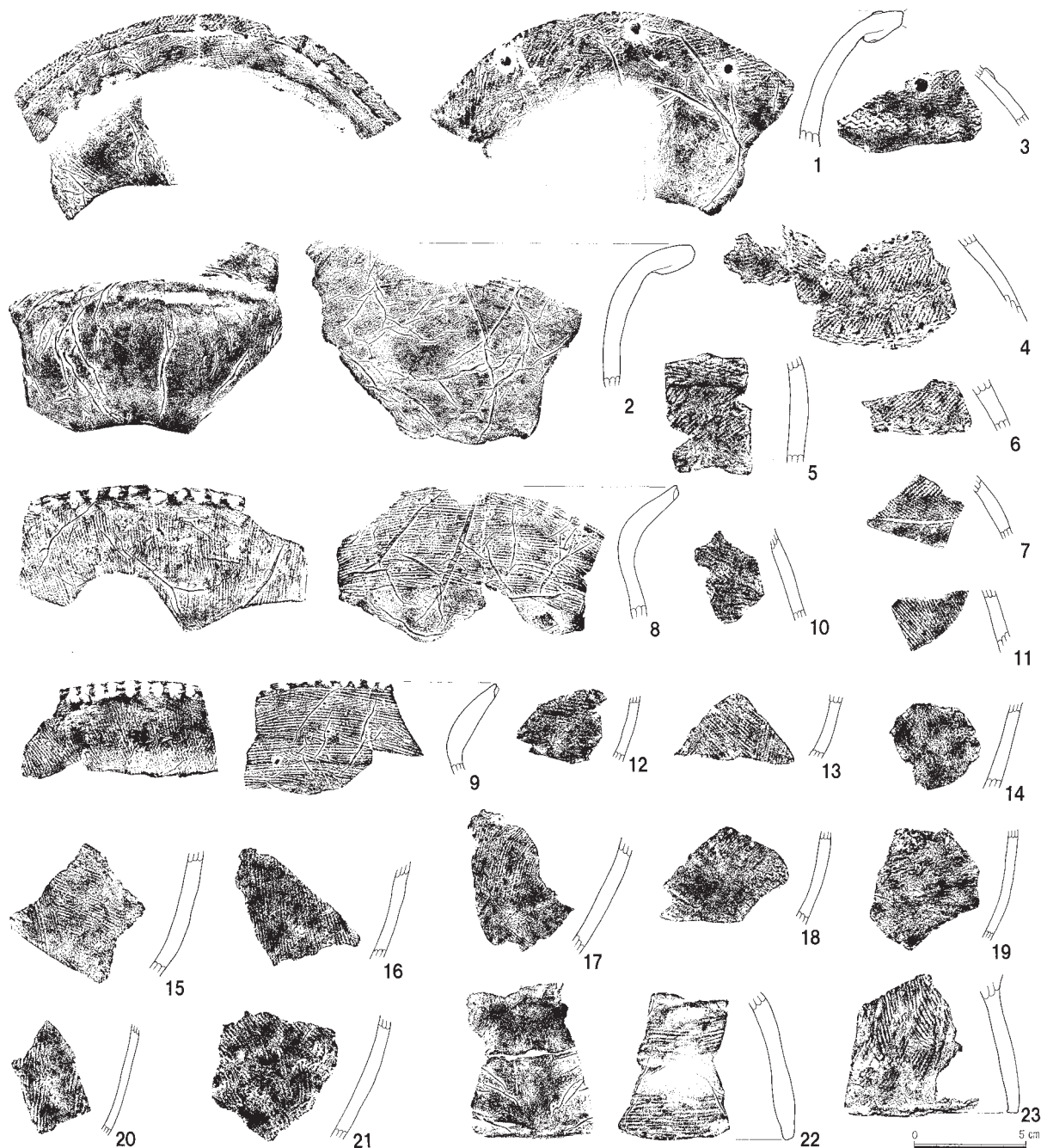
第61図21は口縁部破片。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

23は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

すべて覆土中からの出土。



第63図 73号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第64図 73号住居跡出土遺物 2 (1/3)

73号住居跡（第62図）

〔位置〕 8 IV地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）490×460cm。（主軸方位）N—78°—E。（壁高）17～24cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。64×50cmの楕円形を呈する地床炉で深さ4cmを測る。掘り込み内側に土器片を検出する。（柱穴）各コーナーに近い4本が支柱穴と思われる。西壁下中央から東に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）住居中央西壁下から南に位置する。57×50cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

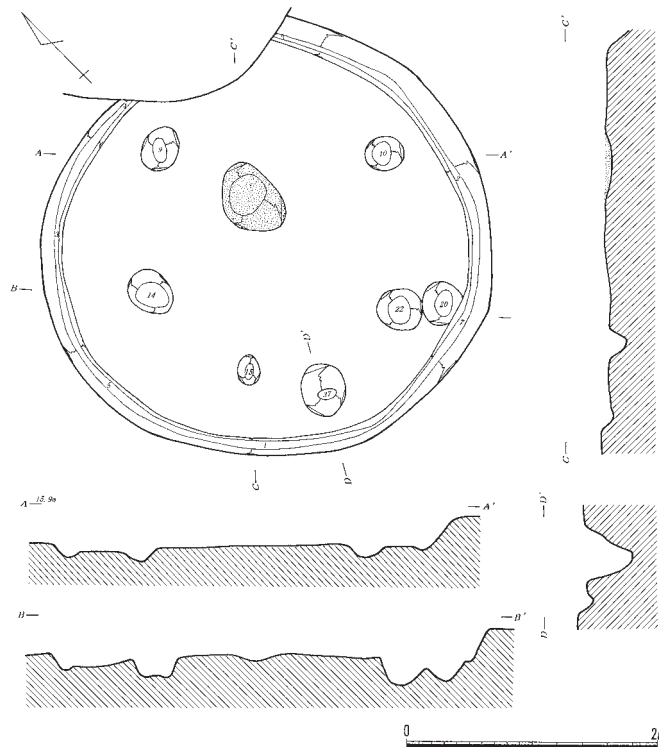
〔遺物〕 炉内部と覆土中から比較的多く出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

73号住居跡出土遺物（第63・64図）

壺形土器（第64図1～7）

1・2は複合口縁部破片で同一個体。口唇端部にはLRの単節縄文がみられる。口縁部内面にはLRの単節縄文の端末結節が施され、縄文帯内部には円形浮文と直径1cm程度の円形赤彩文が交互に施される。縄文帯以外はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。



第65図 74号住居跡（1/60）

3～7は体部破片。3～6は同一個体で網目状撚糸文の間に二段のLRの単節縄文が施され、単節縄文の境と下端には3条のS字状結節文が施される。縄文帯内部には円形浮文が貼付され、円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は内面がにぶい黄橙色(10YR4/1)、外面は暗赤褐色(5YR3/2)を呈する。7はRLの単節縄文を羽状に施し、沈線文で区画される。色調はにぶい黄橙色(10YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

いずれも覆土中からの出土。

甕形土器(第63図3、第64図8～23)

第63図3は台付甕形土器の脚台部。裾部径9cmを測る。裾部へかけて開く器形である。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。全体に器面の磨耗が激しい。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉内部からの出土。

第64図8・9は口縁部破片で同一個体。口唇部外面には柎目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。共に覆土中からの出土。

10～21は体部破片。22・23は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は10がにぶい橙色(7.5YR5/4)、11はにぶい黄橙色(10YR6/4)、13・15は褐灰色(7.5YR4/1)、14は灰褐色(7.5YR5/2)、16はにぶい黄橙色(10YR6/3)、17はにぶい褐色(7.5YR5/4)、18・23はにぶい橙色(7.5YR6/4)、19はにぶい黄橙色(10YR7/3)、20は褐灰色(7.5YR4/1)、21・22は同一個体で灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。いずれも覆土中からの出土。

ミニチュア土器(第63図1・2)

1・2はミニチュア土器の底部。手づくねでつくられている。1は底径約3.5cm、2は5cmを測る。平底の底部から開きながら立ち上がる器形である。外面は粗いミガキが施され、内面はナデられる。色調は1が橙色(5YR6/6)、2が灰黄褐色(10YR5/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。共に覆土中の出土。

74号住居跡(第65図)

〔位置〕 8Ⅲ地点。

〔構造〕 75Yに切られる。(平面形)円形。(規模)径355cm。(主軸方位)N-15°-W。(壁高)9～16cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅11～25cm・下幅3～9cm・深さ1～5cmを測り全周する。(床面)全体に軟弱だが東側に硬化面を認める。(炉)住居中央から北東よりに偏って位置する。62×41cmの不整楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmを測る。(柱穴)各コーナーに近い4本が支柱穴と思われる。南壁中央から東に偏って位置するピットは入口施設と思われる。(貯蔵穴)南壁下に位置する。41×35cmの楕円形を呈し、深さ38cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

74号住居跡出土遺物(第70図1)

壺形土器(第70図1)

1は複合口縁部破片。口唇端部にはRLの単節縄文が施され、口縁部外面にはRLの単節縄文が羽状に施され、下端には刻みが巡る。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は暗赤褐色(5YR3/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

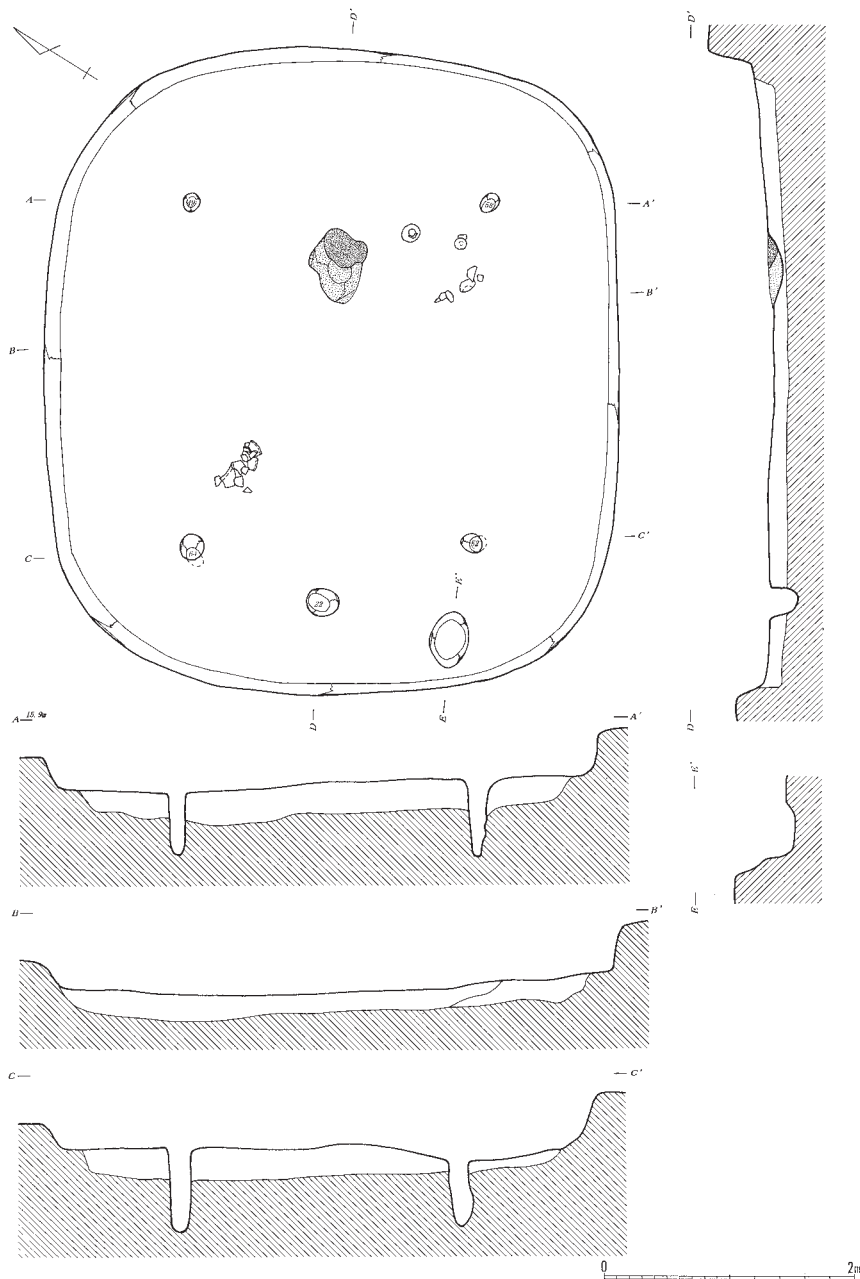
75号住居跡（第66図）

〔位置〕 8Ⅲ地点。

〔構造〕 74Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）505×455cm。（主軸方位）N—60°—E。（壁高）25～40cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。52×43cmの不整楕円形を呈する粘土火皿で深さ9cmの掘り込みをもつ。粘土は被熱のため赤化し、厚さ10cmを測る。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。西壁下中央から僅かに東に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）西壁下中央から南に偏って位置する。45×30cmの楕円形を呈し、深さ50cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とするが、壁際はローム粒子を多く含む褐色土である。貼床充填土はローム粒子・ロームブロックを多く含む黒褐色土である。

〔遺物〕 覆土中に土器片を多量に出土した。



第66図 75号住居跡（1/60）

〔時期〕 古墳時代前期前半。

75号住居跡出土遺物（第68図、第70図2～21、第539図5）

壺形土器（第68図1～3、第70図2～4）

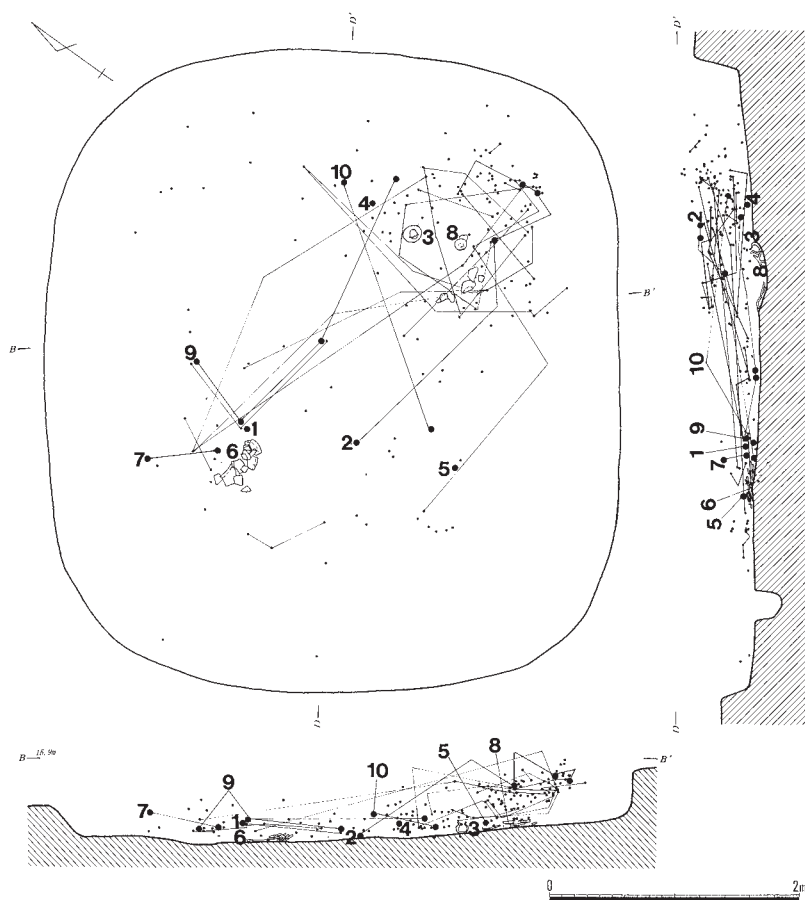
第68図1は口縁部のみ残存。口径12.2cmを測る。肩部から鋭く屈曲し、口縁部は直線状に開く器形である。口縁部内外面共にヘラミガキされる、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央やや西寄り床面上から出土した。

2は全体の2/3程度が残存する。口径約8.5cm・底径5.5cm・器高17.3cmを測る。底部は僅かに張り出している。体部は球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。口縁部内外面共にヨコナデ、以下ヘラナデされる。体部はヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。住居跡中央付近床面上から出土した。

3は口径7.8cm・底径6cm・器高12.2cmと小型の短頸壺でほぼ完形。体部は強く張り出し、球状を呈するが体部下半に僅かに稜をもつ。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。器面の荒れが激しく不明瞭であるが、体部外面はヘラミガキされるが粗いハケ目痕が残る。口縁部内面には沈線状の工具痕がみられる。底部には木葉痕が残る。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から北寄りの床面上から出土した。

第70図2は複合口縁破片。口縁部外面にはR Lの単節縄文が羽状に施される。縄文帯内部には直径1cmの円形赤彩文がみられ、棒状浮文が貼付される。口縁部下端には刻みが施される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

3は単純口縁破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。胎土



第67図 75号住居跡遺物分布 (1/60)

には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

4は肩部破片。山形沈線で区画され網目状捺糸文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器(第68図6)

ほぼ完形の高坏形土器。口径19.6cm・裾部径11.7cm・器高15.3cmを測る。坏部は接合部からゆるやかに内湾し、大きく広がる器形である。脚台部はゆるやかに外反し、裾部へ至る。円窓は3ヵ所に穿たれる。坏部内外面共に丁寧縦位にヘラミガキされる。脚台部外面は縦位にヘラミガキされるが、内面は横方向にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。脚台部内面以外は赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。住居跡中央から西寄りの床面上から出土した。

鉢形土器(第68図4・5)

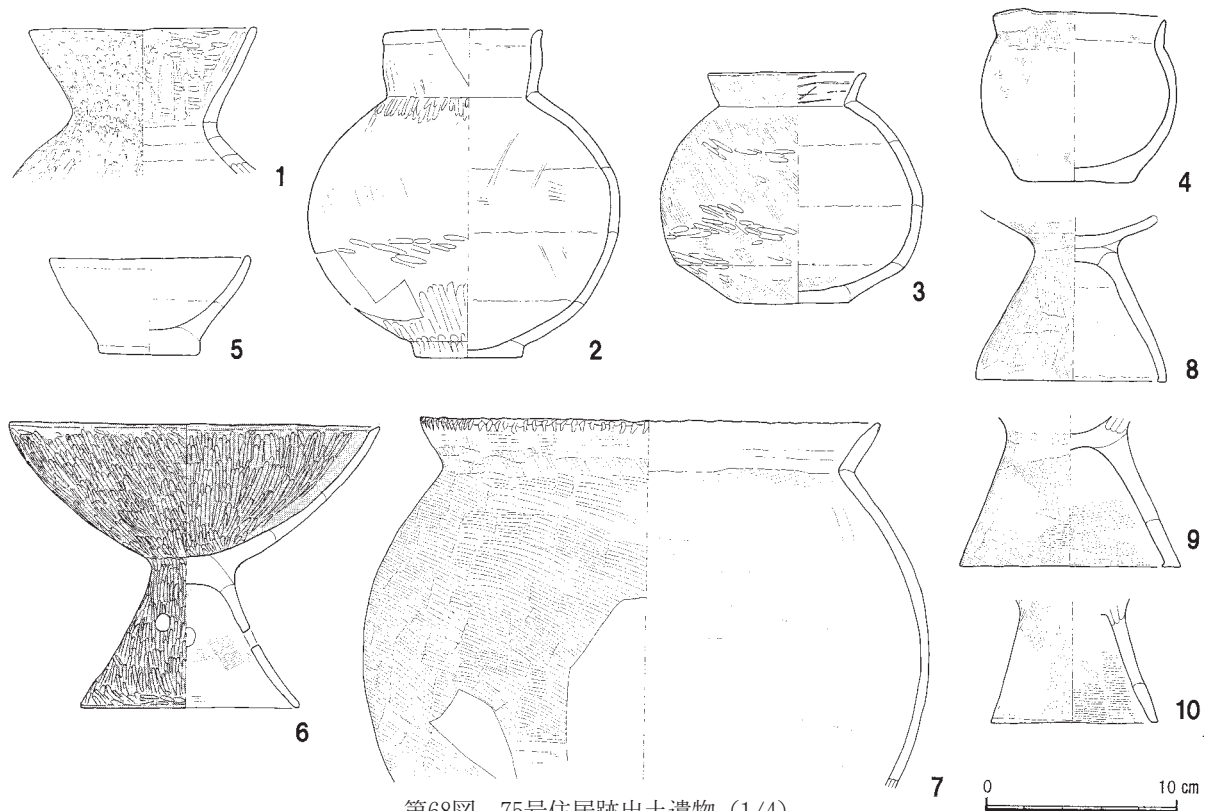
4は底径6cm・口径9.2cm・器高9cmと小型で完形。平底の底部から立ち上がり球形の体部を作出する。頸部は屈曲し、口縁部は直立気味に外反する。内外面共にヘラナデされるが、頸部には僅かにハケ目痕が残る。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居中央から東寄りの床面上から出土。

5は底径5.4cm・口径10.7cm・器高5cmと小型で2/3程度が残存する。張り出した平底の底部から内湾気味に立ち上がり、丸い口唇部に至る器形である。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央から北西寄り床面上から出土した。

甕形土器(第68図7~10、第70図5~21)

第68図7は台付甕形土器の甕部1/3程度が残存。推定口径14.5cmを測る。球状の体部から立ち上がり、頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調は浅黄褐色(7.5YR8/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央からやや西寄りの床面上から出土した。

8は器台形土器の可能性はある。口径8.1cm・裾部径10cm・器高8.3cmを測る。口縁部は直線的に広がり、台部は



第68図 75号住居跡出土遺物(1/4)

大きく開く。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡東寄り床面上から出土した。

9・10は台付甕形土器の脚台部。9は裾部径11.5cm、10は9cmを測る。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は9が橙色（7.5YR7/6）、10は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。いずれも覆土中からの出土。

第70図6～14は口縁部破片。6～12には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。9・11は同一個体。色調は6がにぶい褐色（7.5YR6/3）、7が灰褐色（7.5YR4/2）、8は橙色（7.5YR7/4）、9は明赤褐色（5YR5/6）、10は褐灰色（5YR4/1）、11はにぶい褐色（7.5YR6/3）、12はにぶい褐色（7.5YR5/4）、13は黒褐色（7.5YR3/1）、14が褐灰色（7.5YR5/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。いずれも覆土中からの出土。

5・15・16は頸部から肩部の破片。17～21は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は5・15・16は橙色（5YR6/6）、17～21は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。胎土には細礫を含む。覆土中から出土した。

土玉（第539図5）

球形を呈する。径1cm・穴径0.2cm・重量1g。色調はにぶい橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土に粗砂・白色粒子を僅かに含む。住居跡中央から南西寄りの床面上から出土した。

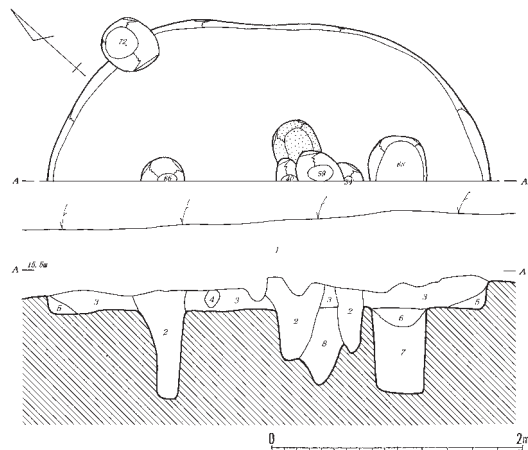
76号住居跡（第68図）

〔位置〕 8Ⅲ地点。

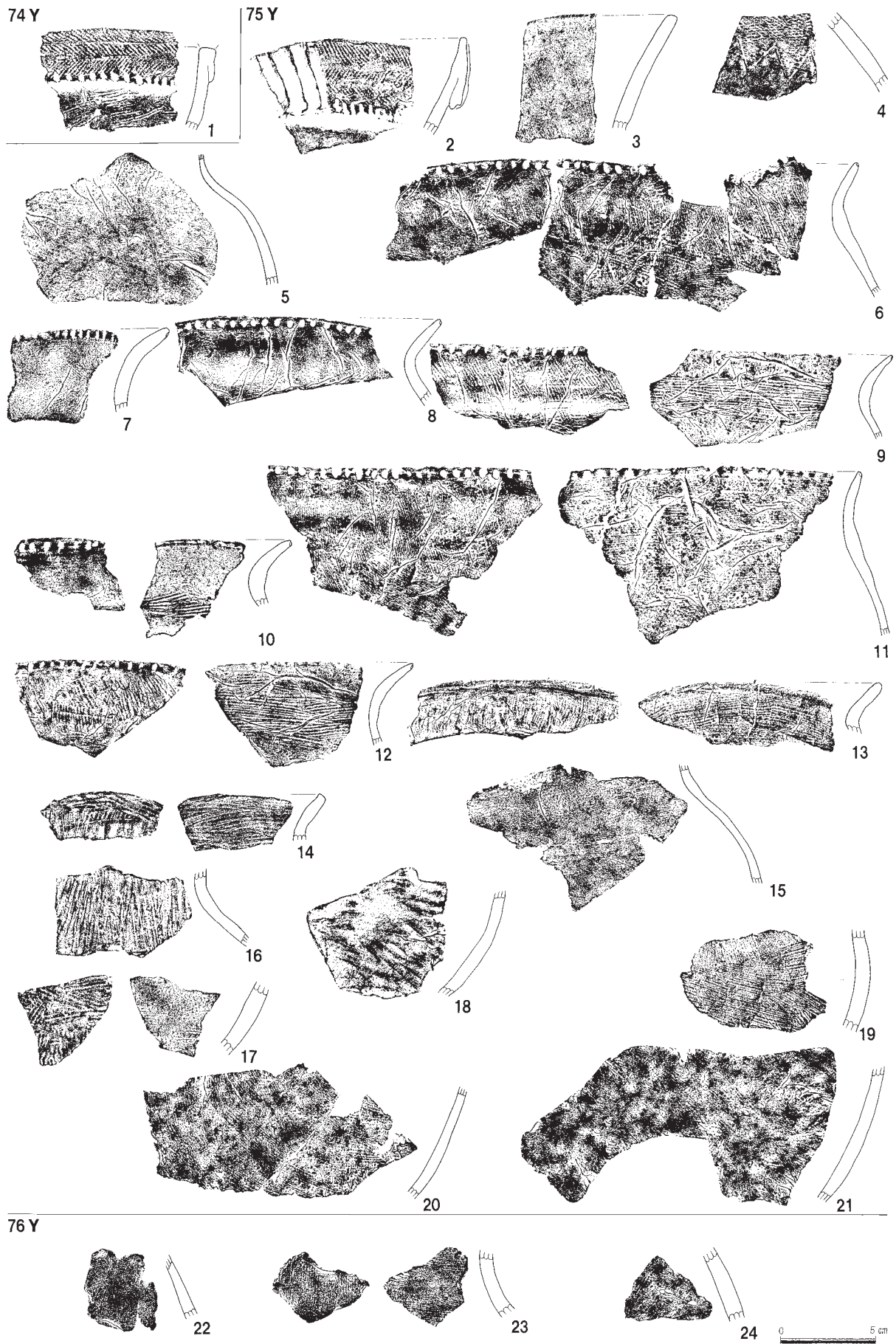
〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）22～25cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）部分的に硬化面を認める。遺存状態は不良である。（炉）不明×36cmの地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。



第69図 76号住居跡（1/60）



第70図 74~76号住居跡出土遺物 (1/3)

- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 8層 黒褐色土。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

76号住居跡出土遺物 (第70図22～24)

壺形土器 (22)

体部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩さるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中の出土。

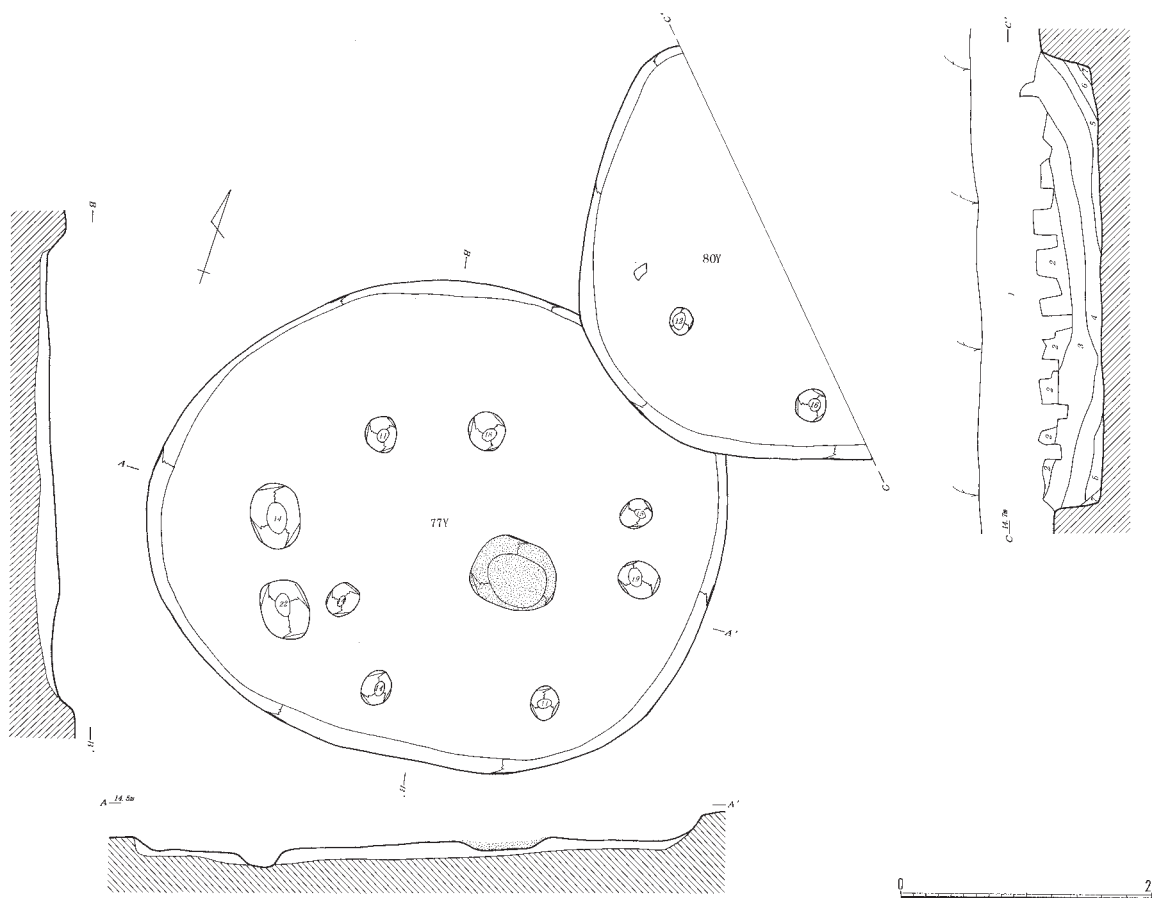
甕形土器 (23・24)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

77号住居跡 (第71図)

〔位置〕 8 I 地点。

〔構造〕 80Yに切られる。(平面形) 不整楕円形。(規模) 465×380cm。(主軸方位) N-78°-E。(壁高) 8～18cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に軟弱であるが一部硬化面を認める。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。68×54cmの不整楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みを



第71図 77・80号住居跡 (1/60)

もつ。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含み、焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。貼床充填土はローム粒子・ロームブロックを多く含む黒褐色土である。

〔遺物〕 覆土中からの僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

77号住居跡出土遺物 (第76図1～9)

壺形土器 (1・3)

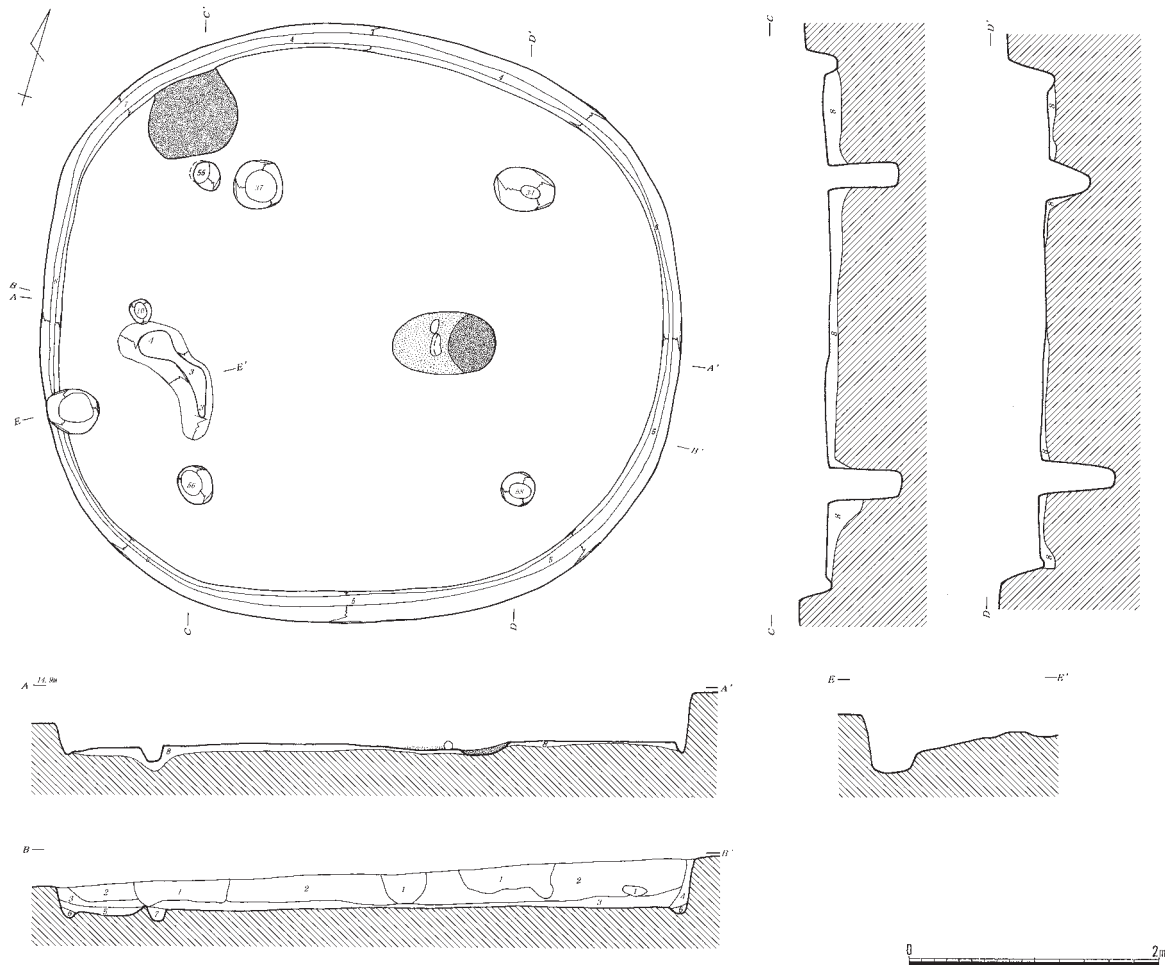
1は複合口縁部破片。口縁部下端には刻みが施される。口縁部以外はヘラミガキされる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中の出土。

3は頸部破片。外面にはループ状の縄文がみられる。内外面共にヘラミガキされる。色調は浅黄橙色 (10YR 8/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器 (2・4～9)

2・4は口縁部破片。4には右方向から先端の鋭い工具により押捺された刻みが巡る。色調は2がにぶい浅黄橙色 (10YR7/4)、4は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

5～9は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は5が明赤褐色 (2.5YR4/6)、6・9は黒褐色 (7.5YR3/1)、7は灰褐色 (7.5YR7/4)、8が灰黄褐色 (10YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。



第72図 78号住居跡 (1/60)

78号住居跡（第72図）

〔位置〕 8Ⅲ地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）505×473cm。（主軸方位）N—82°—E。（壁高）28～31cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11～25cm・下幅1～10cm・深さ2～7cmを測り全周する。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。82×50cmの楕円形を呈する粘土火皿で、深さ5cmの掘り込みをもつ。炉の中央に礫を埋設している。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。西壁下中央から僅かに東に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）西壁下中央から南に偏って位置する。42×36cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。東側に幅32cm前後・高さ4cm前後の凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

1層 にぶい黄褐色土。ロームブロックを多く含む。

2層 黒褐色土。ローム粒子・小ブロックを含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

5層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

6層 黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

北西コーナーに粘土が堆積していた。

ロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

78号住居跡出土遺物（第76図10～24）

壺形土器（10・11・12・14）

いずれも口縁部破片。10は複合口縁を呈し、内面にはR Lの単節縄文が施される。11・14は内面に櫛描波状文がみられる。12は単純口縁破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。10の色調は橙色（7.5YR7/6）、11は灰白色（10YR8/2）、12がにぶい赤褐色（5YR5/4）、14は浅黄橙色（10YR8/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（13・19～24）

13・19～22は口縁部破片。13・21・22は同一個体。19は口唇部外面に刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は13・21がにぶい黄橙色（10YR7/3）、22が明赤褐色（5YR5/6）、19が褐灰色（5YR4/1）、20が灰褐色（7.5YR6/2）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。13・21・22は床面上から出土。他は覆土中から出土した。

15～18・23は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は15がにぶい黄橙色（10YR5/3）、16・18が褐色（7.5YR4/3）、17が灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。23は特に白色粒子が多く観察される。

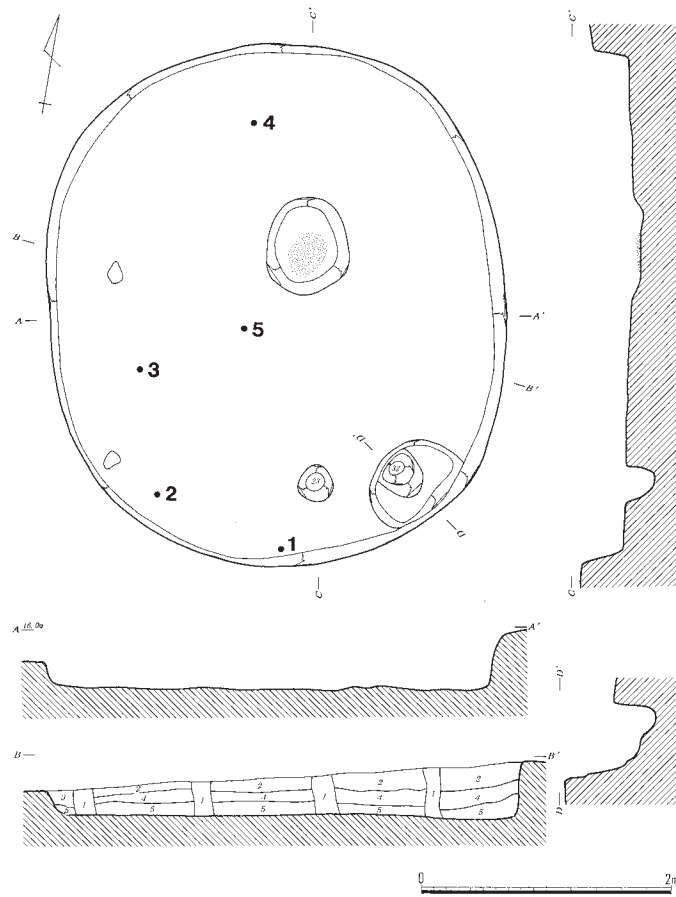
24は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

23は床面上から出土した。他はいずれも覆土中からの出土。

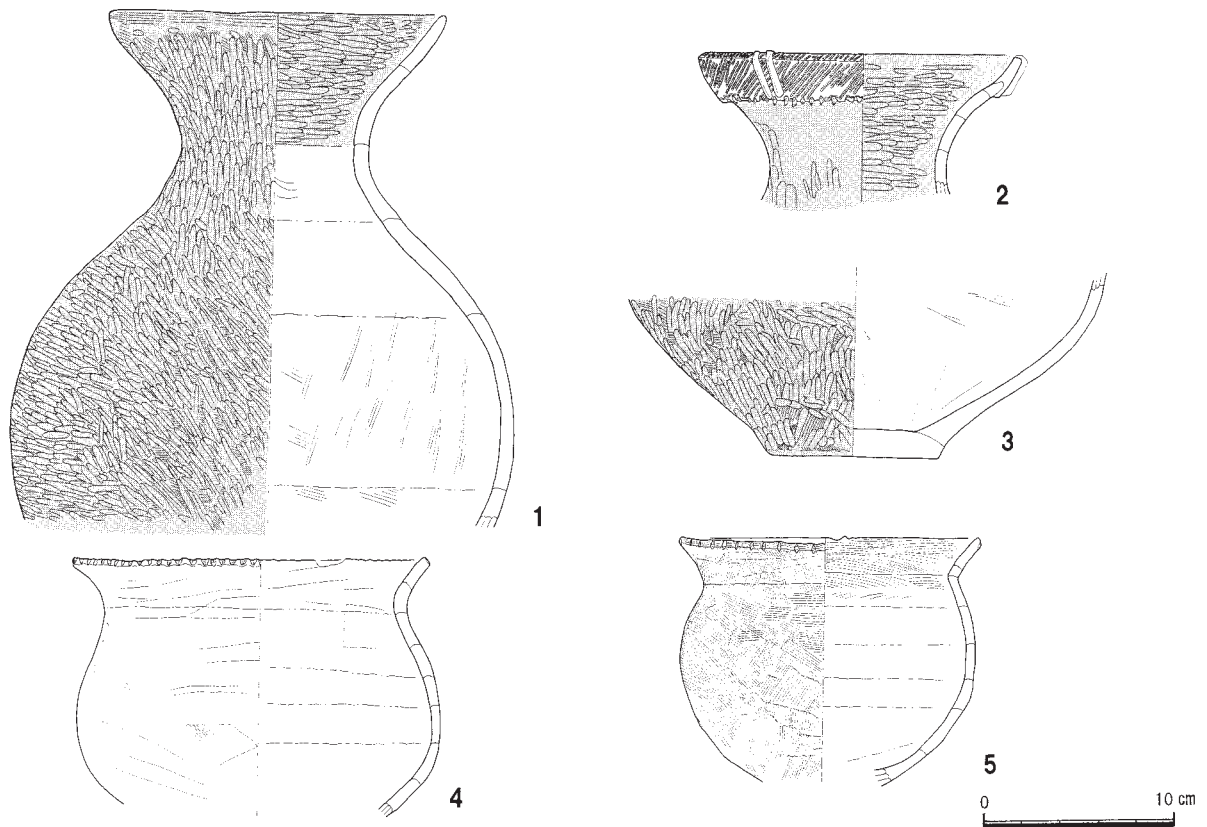
79号住居跡（第73図）

〔位置〕 8Ⅳ地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）414×365cm。（主軸方位）N—13°—W。（壁高）23～33cmを測り、85°の角度



第73図 79号住居跡 (1/60)



第74図 79号住居跡出土遺物 (1/4)

で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。79×66cmの楕円形を呈する地床炉で深さ6cmを測る。(柱穴) 支柱穴は検出されなかった。南壁下中央から東に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 住居南壁下中央から東に偏って位置する。74×55cmの楕円形を呈し、深さ31cmを測り段をもつ。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 床面上に土器片が点在する。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

79号住居跡出土遺物 (第74図、第76図25～30)

壺形土器 (第74図1～3、第76図25・26)

第74図1は1/2程度が残存。口径9cmを測る。球形と推測される体部から頸部でくびれ、口縁部は内湾しながら開く器形である。外面と口縁部内面は丁寧にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南壁際から出土した。

2は口縁部の1/3を欠く。口径17.5cmを測る。ゆるやかにくびれた頸部から内湾しながら開く器形である。口唇端部から口縁部にかけてLRの単節縄文の端末結節が施され、2本一単位の棒状浮文が貼付される。口縁部下端には刻みが施される。縄文帯以外は丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色(5YR4/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。南西壁際から出土した。

3は底部のみ残存。底径9.8cm。平底の底部から大きく開く器形である。外面はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調は内面がにぶい橙色(7.5YR7/4)、外面赤彩部はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中の出土。

第76図25は口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが消し切れないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

26は肩部破片。外面にはLRの単節縄文の端末結節が施される。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中の出土。

甕形土器 (第74図4・5、第76図27～30)

第74図4・5共に台付甕形土器の甕部のみ残存する。4は甕部の1/2程度が欠損し、推定口径19cmを測る。5は口径15.7cm。4は体部中位に最大径をもつ扁球状の体部から頸部は強くくびれて、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。5は球状の体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。4の色調は褐灰色(7.5YR4/1)、5はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。4は住居跡北寄り床面上出土。5は炉南側床面上から出土した。

第76図27～30は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は27が灰黄褐色(10YR5/2)、28が橙色(5YR6/6)、29が黒褐色(7.5YR3/1)、30が橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中の出土。

80号住居跡（第71図）

〔位置〕 8 I 地点。

〔構造〕 東側調査区外。77Yを切る。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）40～48cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と中央を除き硬化している。遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

ロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 床面上と覆土中から出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

80号住居跡出土遺物（第75図、第76図31～43）**壺形土器（第75図1、第76図31～38）**

第75図1は全体の1/4程度が残存する。口径9.5cmを測る。球状の体部から立ち上がり、頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外反する。外面と口縁部内面はヘラミガキされ赤彩される。体部内面はヘラナデされる。しかし全体に器面の荒れが激しく不明瞭。色調は外面がにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

第76図31～34は口縁部破片。31は複合口縁外面に棒状浮文が貼付される。32は内面にLRの単節縄文が施され、下端にはZ字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。33と34は単純口縁破片。色調は31が橙色（5YR6/6）、32・33が明赤褐色（5YR5/6）、34がにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

第76図35～38は体部破片。35は器面は剥離が激しく不明瞭であるが、LRの単節縄文と山形沈線がみられる。36は外面にはLRの単節縄文が山形沈線文に区画された文様が施される。37はRLの単節縄文の端末結節、38はLRの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は35がにぶい橙色（7.5YR6/4）、36がにぶい橙色（7.5YR7/4）。37・38は褐灰色（7.5YR4/1）、赤彩部がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（第76図39～43）

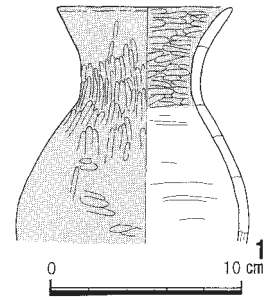
39・41は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は39が黒褐色（7.5YR3/1）、41はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

40・42・43は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は40・43が灰褐色（7.5YR7/4）、42は灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

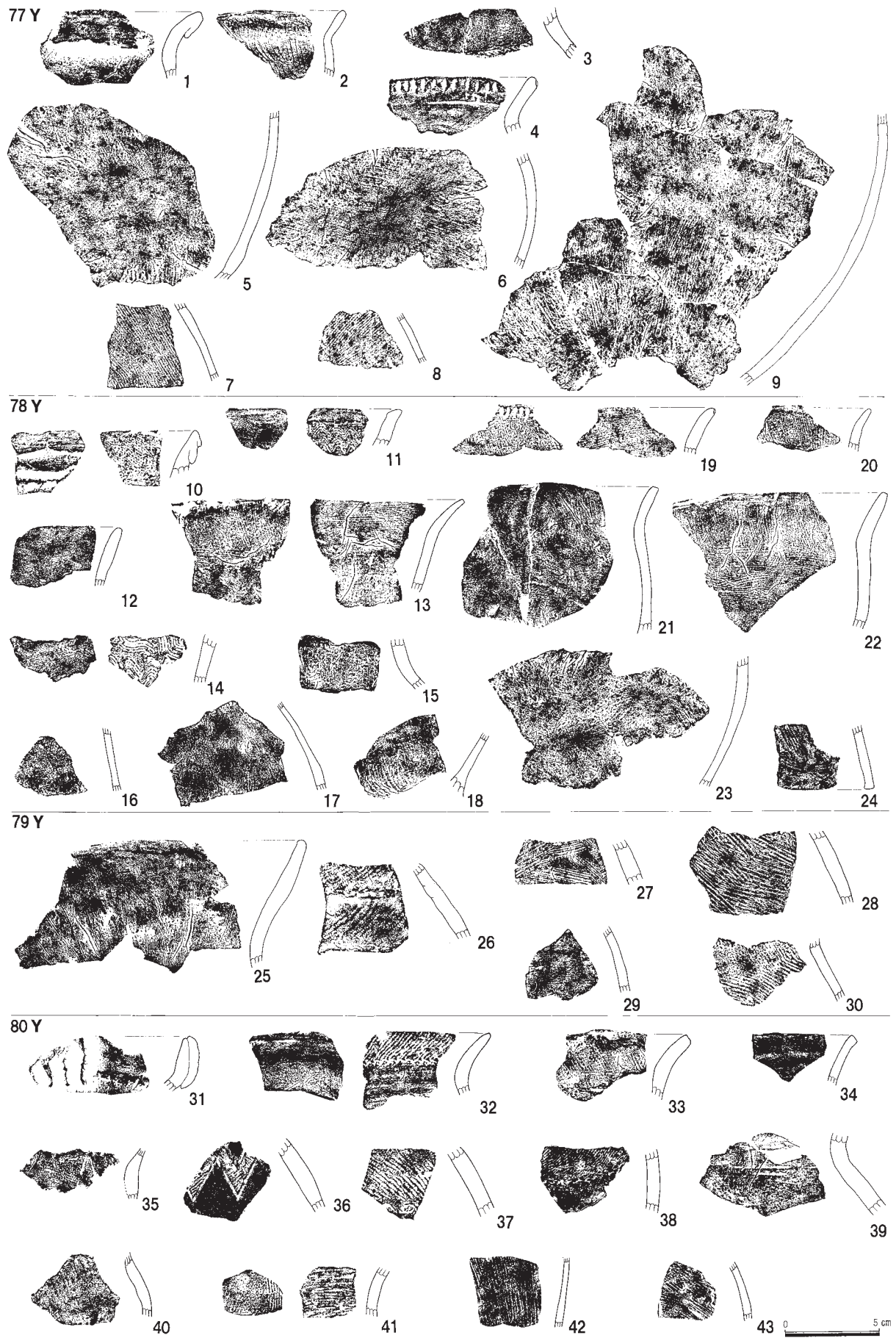
1のみ床面上から、他はいずれも覆土中から出土した。

81号住居跡（第77図）

〔位置〕 11地点。



第75図 80号住居跡出土遺物（1/4）



第76図 77~80号住居跡出土遺物 (1/3)

〔構造〕 南側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 16~32cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に軟弱で遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

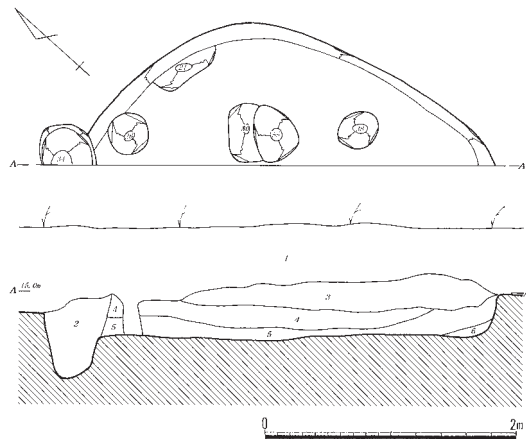
- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子を含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 小破片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

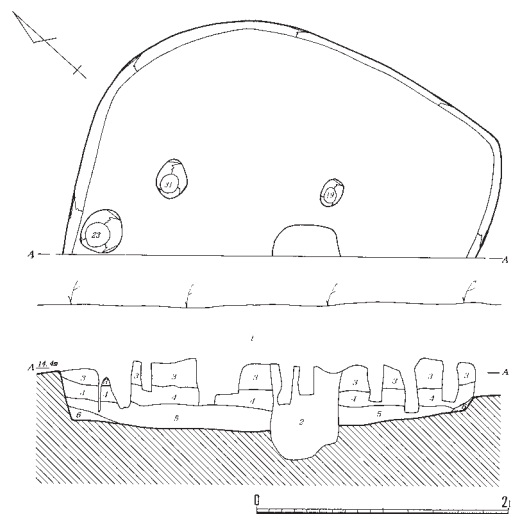
〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

82号住居跡 (第78図)

〔位置〕 11地点。



第77図 81号住居跡 (1/60)

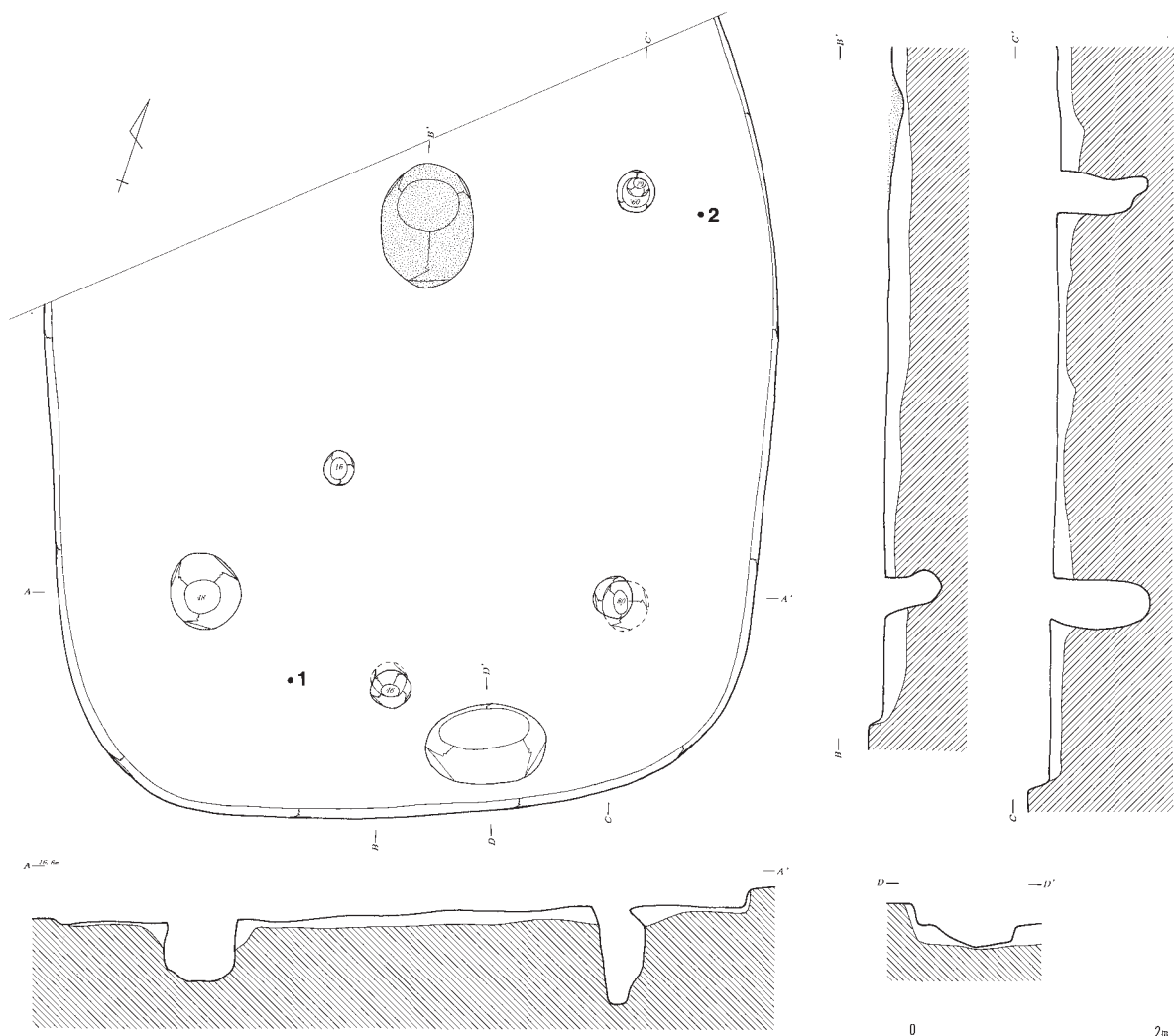


第78図 82号住居跡 (1/60)

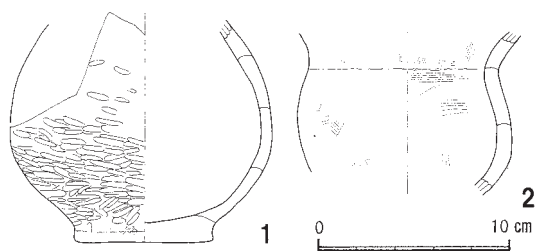
〔構造〕 西側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 5~11cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦で軟弱だが、部分的に硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。



第79図 83号住居跡 (1/60)



第80図 83号住居跡出土遺物 (1/4)

6層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

82号住居跡出土遺物（第84図1～5）

甕形土器（1～5）

1は口縁部破片。口唇部外面には先端の鋭い工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。2～5は体部破片。3・5は同一個体で、内外面共にヘラナデされる。4は内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は1～3が灰褐色（7.5YR4/2）、4がにぶい褐色（7.5YR5/3）、5がにぶい褐色（5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。3・5は東コーナー床面上から出土。他はいずれも覆土中からの出土。

83号住居跡（第79図）

〔位置〕 8 I 地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×575cm。（主軸方位）N-13°-W。（壁高）7～14cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で軟弱だが遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北に偏って位置する。86×73cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。（柱穴）3ヵ所のコーナーに近い3本が支柱穴の一部と思われる。南壁下中央から僅かに北に偏った位置の1本は住居内側に傾斜をもって穿たれていて、梯子穴を想定させる。（貯蔵穴）南壁下、東に偏って位置する。97×61cmの楕円形を呈し、深さ17cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む黒褐色土を基調とするが、耕作による攪乱が著しく詳細は不明。貼床充填土はロームブロックを多く含む暗褐色土。

〔遺物〕 床面上から数点図示できる遺物が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

83号住居跡出土遺物（第80図、第84図6～15）

壺形土器（第80図1、第84図6・7・13）

第80図1は体部と底部1/2程度が残存。底径約7cm。張り出した底部から立ち上がり、球形の体部を作出する。外面はヘラミガキされ、内面はナデられると推測されるが器面の荒れが激しく不明瞭。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。住居跡南寄り床面上から出土。

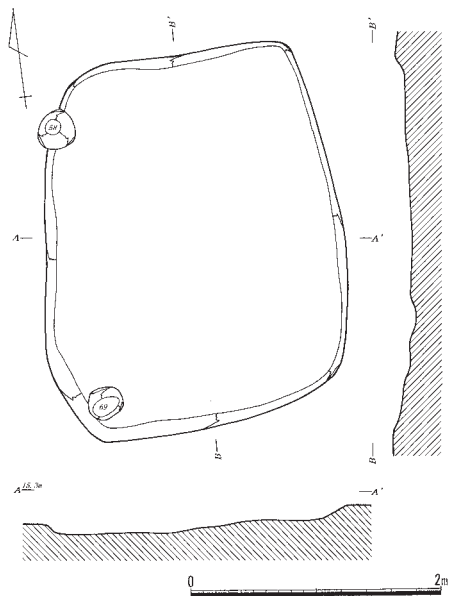
第84図6・7は同一個体。複合口縁部と肩部破片。端面にはLRの単節縄文が、口縁部には撚りの異なる単節縄文が羽状に施文され、4本一単位の棒状浮文が貼付される。口縁部下端には刻みが施される。肩部外面には撚りの異なる縄文が羽状に施される。縄文帯内部には円形浮文が貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。東コーナー床面上から出土。

13は体部破片。山形沈線文で区画されRLの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

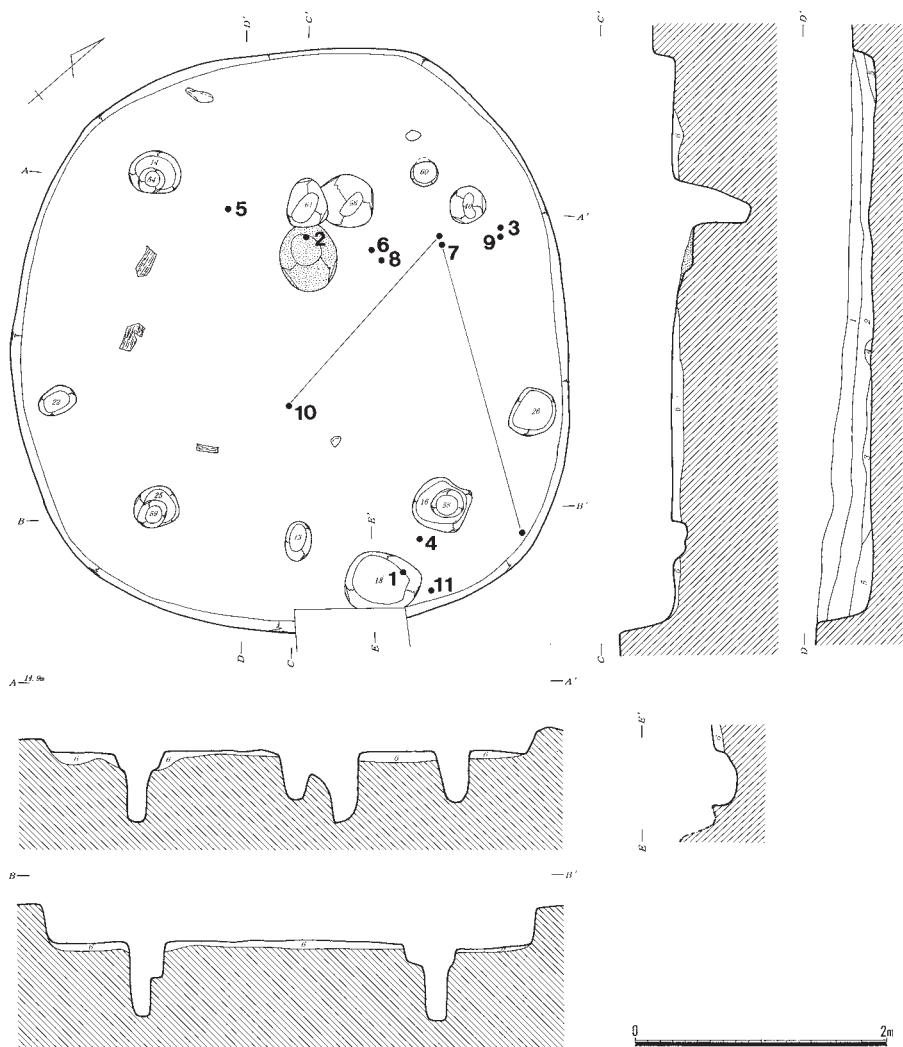
甕形土器（第80図2、第84図8～15）

第80図2は口縁部と脚台部を欠く小型の台付甕形土器。内外面共にヘラナデされると推測されるが器面の荒れが激しく不明。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡北北東床面上から出土した。

第84図8・9は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。10～14は体部破片。15は脚台部破片。いずれも内



第81図 84号住居跡 (1/60)



第82図 85号住居跡 (1/60)

外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。色調は8が灰褐色(7.5YR7/5)、9がにぶい赤褐色(5YR5/4)、10が褐色(7.5YR5/3)、11がにぶい赤褐色(5YR5/3)、12がにぶい赤褐色(5YR5/4)、13が暗赤褐色(5YR3/3)、14がにぶい褐色(7.5YR6/3)、15が灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

84号住居跡(第81図)

〔位置〕 11地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 296×238cm。(主軸方位) N-S。(壁高) 4~12cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に軟弱で遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とするが、耕作による攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕 図示できる遺物は出土しなかった。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

〔所見〕 炉も検出されず住居跡とするには躊躇を覚えるが、一応住居跡として扱った。



第83図 85号住居跡出土遺物(1/4)

85号住居跡（第82図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕 一部攪乱に破壊される。（平面形）隅丸長方形。（規模）460×438cm。（主軸方位）N-48°-W。（壁高）11~45cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する。不明×46cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。南壁下中央から北に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南壁下中央から東に偏って位置する。不明×59cmの不整楕円形を呈し、深さ16cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 4層 暗赤褐色土。焼土ブロック。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕 床面上に多量の土器片を出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

〔所見〕 焼失家屋の可能性がある。

85号住居跡出土遺物（第83図、第84図16~19）

壺形土器（第83図1~3、第84図16）

第83図1は複合口縁部のみ残存する。口径8.8cmと小型で、3の肩部破片と同一個体と思われる。球状を呈すると推測される体部から頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部はゆるやかに開く器形である。複合口縁外面と肩部にはLRの単節縄文が施される。口縁部下端には刻みが施される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。1は貯蔵穴、3は北コーナーから出土した。

2は頸部のみ残存する。肩部外面にはLRの単節縄文が施される。口縁部内面にはLRの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉内部から出土した。

第84図16は体部破片。肩部にはLRの単節縄文の端末結節が施される。外面は縄文帯以外はヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。色調にぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。貯蔵穴北側床面上から出土した。

甕形土器（第83図5~11、第84図17~19）

第83図5・6は台付甕形土器の甕部のみ残存する。5は口径20.4cm、6は口径21cmを測る。体部中位に最大径をもつ球状の体部から立ち上がり、頸部でくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には左方向から板状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。体部外面下半以下を除き炭化物の付着がみられる。色調は5がにぶい橙色（7.5YR6/4）、6がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。5は炉西側、6は炉北側の床面上より出土した。

7は台付甕形土器の甕部2/3程度が残存する。口径19cmを測る。口唇部外面には正面から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。体部中位に最大径をもつ球状の体部から、頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが、外面体部中位以下に粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を多く含む。住居跡北から東にかけて散乱した状態で出土した。

8は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径26cmを測る。体部は球状を呈し、頸部はくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。炉北側床面上から出土した。

9は口縁部と体部上半のみ残存する。口径推定19.5cm。あまり張りのない体部から直立気味に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子・白色粒子を含む。北コーナー付近床面上から出土。

10は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径17cmを測る。あまり張らない体部からすぼまる器形である。頸部はゆるやかにくびれて口縁部は開く。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央と炉北側から散乱した状態で出土した。

11は台付甕形土器の脚台部。裾部径9.4cm。裾部へかけて僅かに内湾気味に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴脇から出土した。

第84図17・18は体部破片。19は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。17はにぶい褐色（7.5YR6/4）、18は褐灰色（5YR4/1）、19はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。17は東コーナーから、18・19は覆土中からの出土。

ミニチュア土器（第83図4）

鉢形を呈する。約1/4程度が残存する。口径7.6cm・器高3cmを測る。平底の底部から立ち上がり、内湾気味に広がる器形である。手づくねで作られている。内外面共に粗くヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴北側床面上から出土した。

86号住居跡（第85図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）349×338cm。（主軸方位）N-45°-E。（壁高）1～17cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅9～20cm・下幅3～8cm・深さ1～6cmを測り、東側の一部を除き全周する。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する。50×44cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子・焼土粒子を多く含む褐色土を基調とする。貼床充填土はロームブロックを多く含む暗褐色土である。

〔遺物〕 床面上と覆土中から少数出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

86号住居跡出土遺物（第86図、第95図1・2）

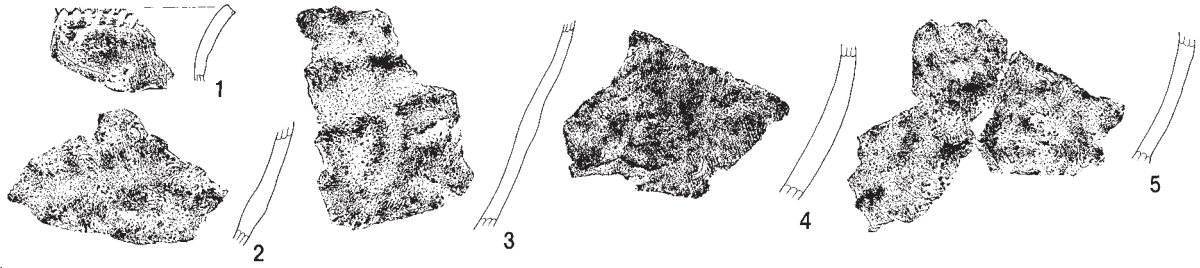
壺形土器（第95図2）

肩部破片。RLの単節縄文が施され、下端にはZ字状結節文がみられる。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

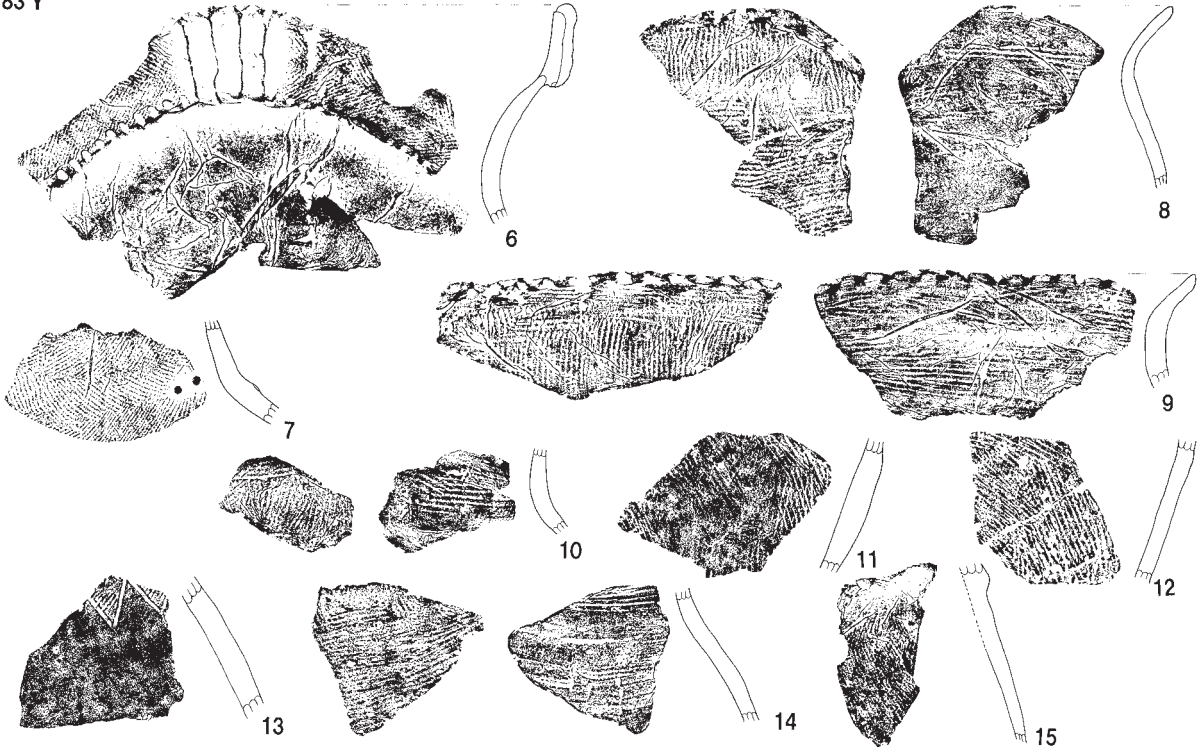
甕形土器（第86図1、第95図1）

第86図1は脚台部のみ残存する。裾部径8.6cm。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含

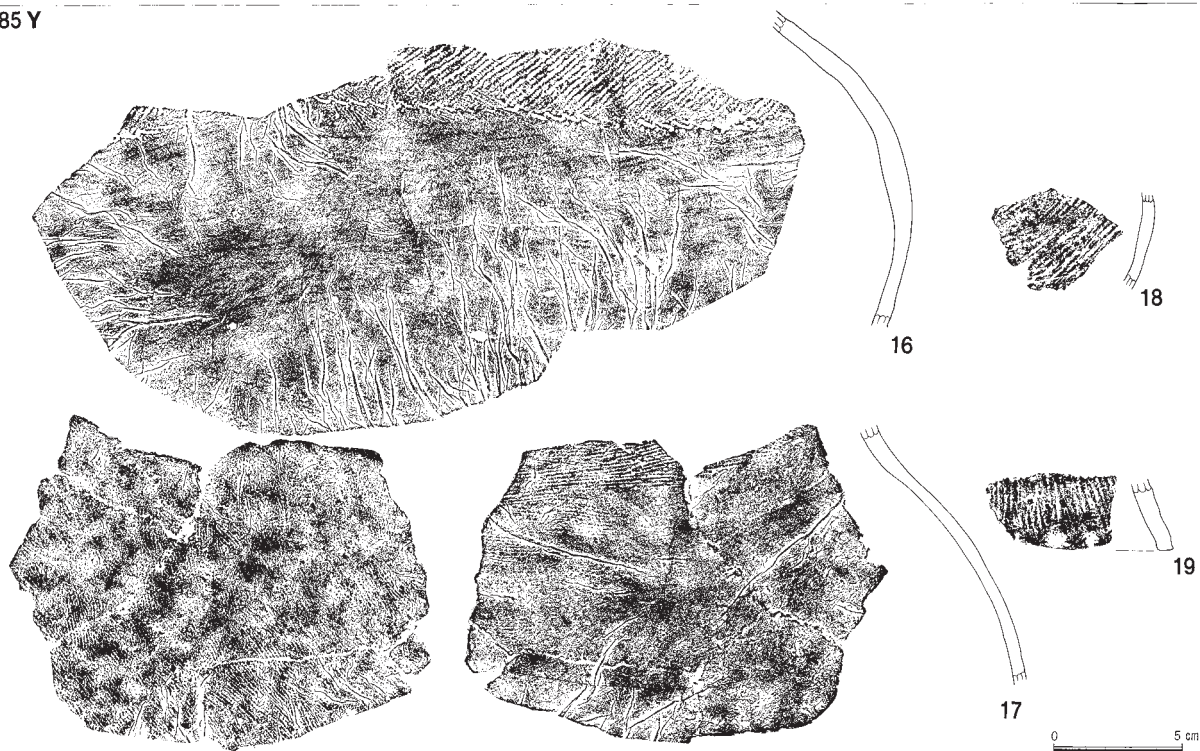
82 Y



83 Y



85 Y



第84図 82・83・85号住居跡出土遺物 (1/3)

む。炉北側床面上から出土した。

第95図1は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。色調は褐灰色（10YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

87号住居跡（第87図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×479cm。（主軸方位）N-51°-E。（壁高）0～29cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。北側は斜面のため確認できなかった。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱だが遺存状態は良好で東側に硬化面を認める。（炉）住居中央から東側に偏って位置する。64×49cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。掘り込み内側に礫と土器片を検出する。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。南壁下中央から僅かに北に偏った1本は入口施設になるうか。（貯蔵穴）南コーナーに位置する。43×38cmの楕円形を呈し、深さ27cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 床面上と覆土中に土器片を多量に出土した。

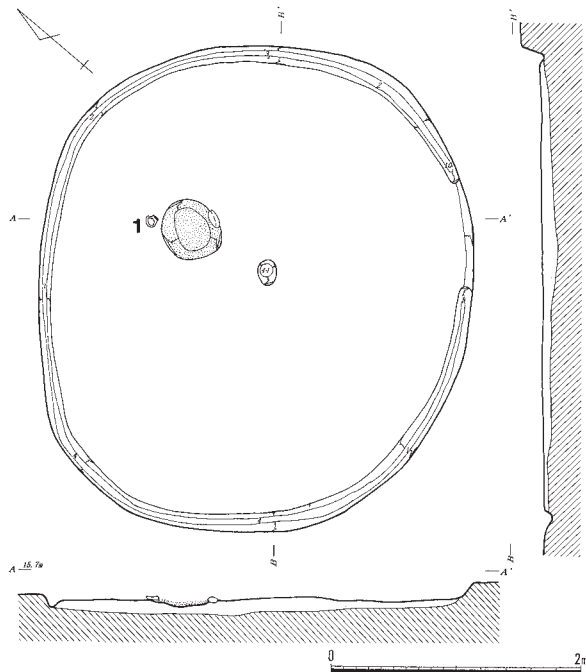
〔時期〕 古墳時代前期前半。

〔所見〕 焼失家屋と思われる。

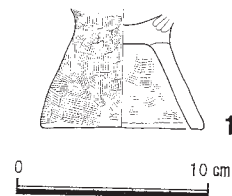
87号住居跡出土遺物（第88図1、第95図3～9）

壺形土器（第95図3・4）

3・4は口縁部破片。直線的に外反する器形。内外面共にヘラミガキされる。色調は3が明赤褐色（5YR5/6）、4がにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。3は炉内部から



第85図 86号住居跡（1/60）



第86図 86号住居跡出土遺物（1/4）

出土した。4は覆土中からの出土。

高坏形土器（第88図1）

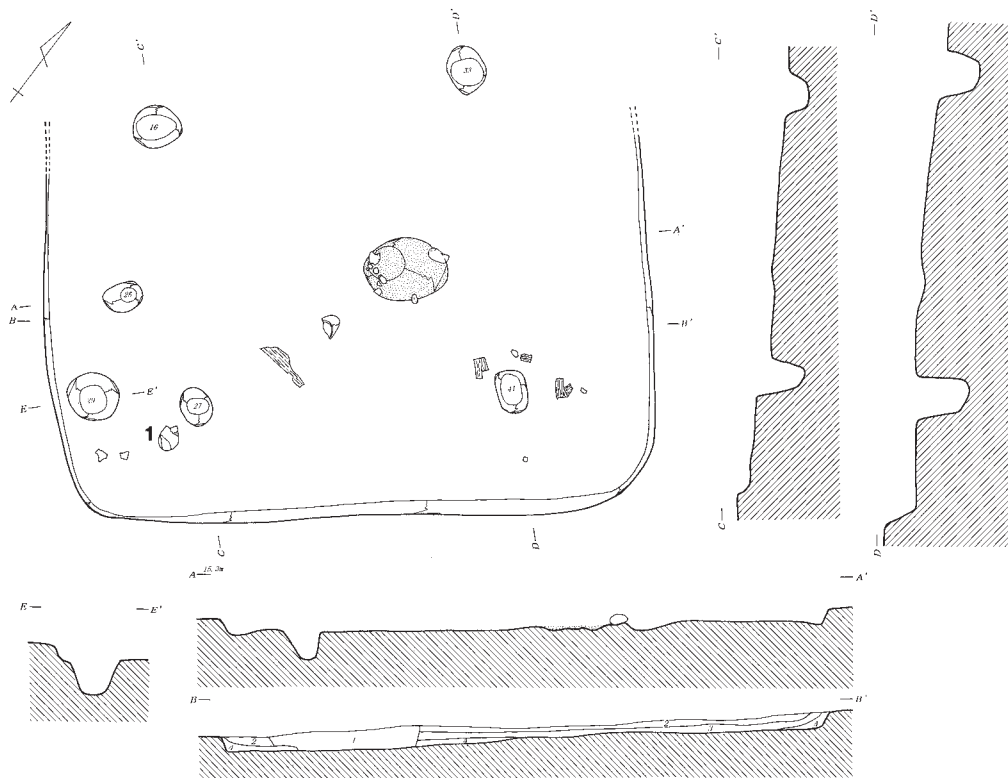
碗状の坏部のみ残存する。口径19cmを測る。半円状の坏部は内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー付近床面上から出土した。

甕形土器（第95図5～9）

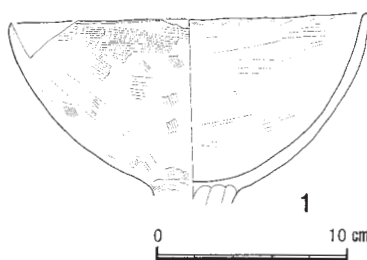
5・7は口縁部破片。6・8は体部破片。9は脚台部破片。5・7は口唇部外面に刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は5がにぶい赤褐色（5YR5/4）、6が黒褐色（7.5YR3/1）、7がにぶい赤褐色（5YR5/3）、8が灰褐色（5YR4/2）、9がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。5・6は東コーナーより出土し、他はいずれも覆土中からの出土。

88号住居跡（第89図）

〔位置〕12I地点。



第87図 87号住居跡（1/60）



第88図 87号住居跡出土遺物（1/4）

〔構造〕北側が攪乱で破壊されている。(平面形)隅丸長方形。(規模)487×440cm。(主軸方位)N-52°-E。(壁高)2~16cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅12~18cm・下幅3~11cm・深さ5~9cmを測り全周する。(床面)平坦で軟弱だが遺存状態は良好である。(炉)住居中央から北東に偏って位置する。不明×53cmを呈する地床炉で2cmの掘り込みをもつ。(柱穴)3ヵ所のコーナーに近い3本が支柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴)南コーナー下に位置する。47×39cmの楕円形を呈し、深さ74cmを測る。覆土中に土器を検出する。

〔覆土〕ローム粒子を多く含む褐色土が僅かに残されていた。

〔遺物〕貯蔵穴や覆土中から少数出土した。

〔時期〕古墳時代前期前半。

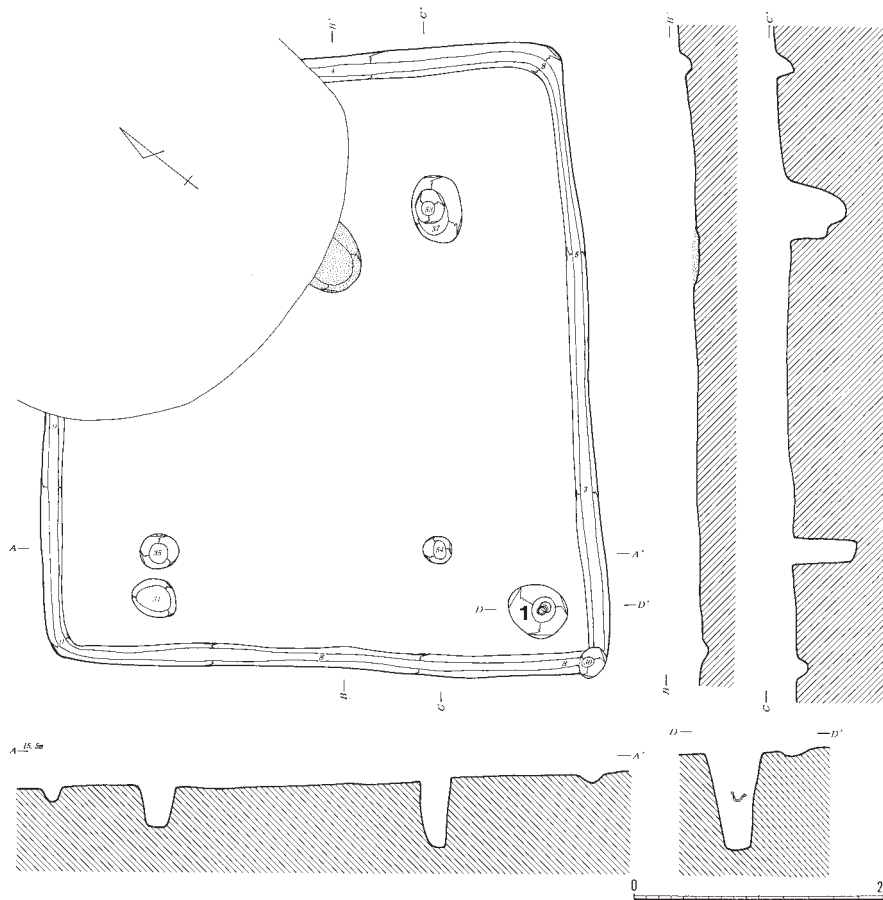
88号住居跡出土遺物 (第90図、第95図10~13)

埴形土器 (第90図1)

丸底の埴形土器でほぼ完形。口径9.3cm・器高9.3cmを測る。底部は丸底で安定しない。体部中位に最大径をもつ球形の体部から頸部で屈曲し、口縁部は直立気味に開く器形。外面と口縁部内面へラミガキされるが口縁部には消しきれないハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされる。色調は明赤褐色(5YR4/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。貯蔵穴から出土した。

甕形土器 (第95図10~13)

10は口縁部破片。11~13は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。10は褐灰色(5YR4/1)、11~13は黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中からの出土。



第89図 88号住居跡 (1/60)

89号住居跡（第91図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕 大部分が攪乱されている。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）8～17cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）部分的に硬化面を認めるが、遺存状態は不良である。（炉）45×38cmを呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む褐色土が僅かに残されていた。

〔遺物〕 覆土中から出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

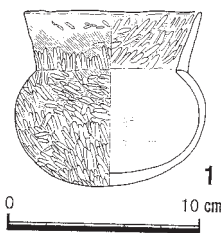
89号住居跡出土遺物（第95図14～34）

甕形土器（14～34）

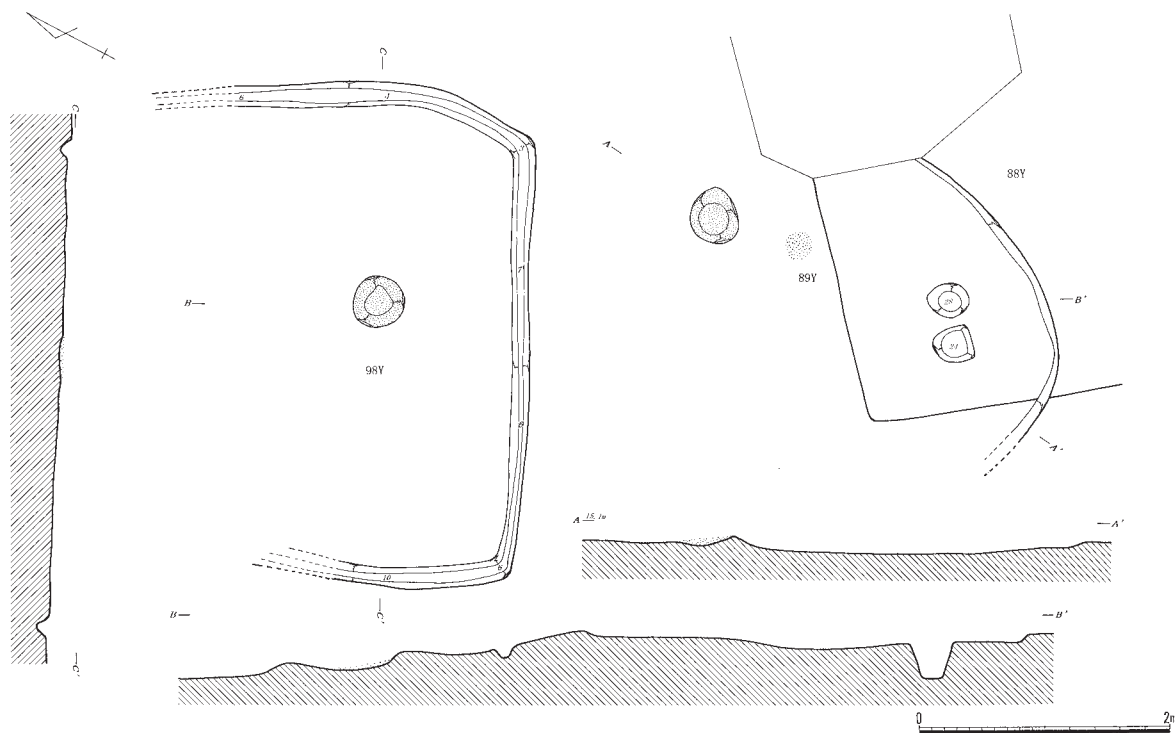
14～17は口縁部破片。14は受け口状口縁。東海西部の系譜をもつ甕形土器と思われる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土は粗砂を含むが、非常にきめ細かく堅緻である。15～17は内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は15が黒褐色（7.5YR3/1）、16・17はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

18～25・27～34は体部破片。6は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調は18～20・24・25・28～31・33が黒褐色（7.5YR3/2）、21がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、22・32が灰褐色（7.5YR4/2）、23が明赤褐色（5YR5/6）、23が明赤褐色（5YR5/6）、26・27がにぶい赤褐色（5YR4/3）、34がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土。



第90図 88号住居跡出土遺物 (1/4)



第91図 89・98号住居跡 (1/60)

90号住居跡（第92図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸正方形。（規模）486×477cm。（主軸方位）N—60°—E。（壁高）12～33cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に平坦で遺存状態は良好である。壁際周辺に厚さ4～8cmの黒色土が巡っている。何らかの敷物があったと思われる。のちに残留物が黒色土となり残ったのではないか。（炉）検出されなかった。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。（貯蔵穴）検出されなかった。

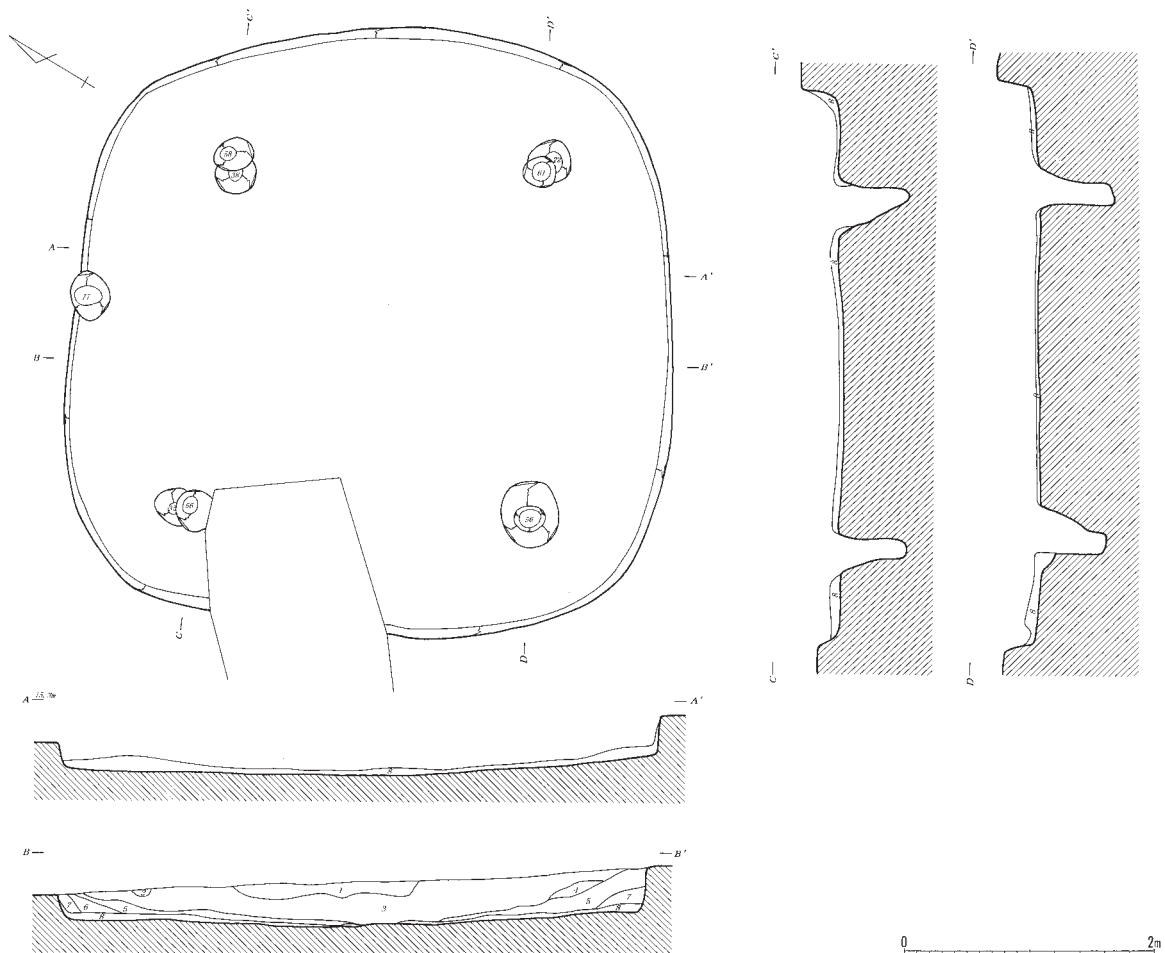
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 弥生時代98号住居跡壁溝。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 7層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 8層 黒色土。ローム粒子をごく僅かに含む。

堆積状態が不整合で、ロームブロックを多く含むなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。



第92図 90号住居跡（1/60）

90号住居跡出土遺物 (第95図35~44)

壺形土器 (36・37)

36は口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。37は体部破片。外面はヘラミガキされるが、ハケ目痕が残る。いずれも色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器 (35・38~44)

35は口縁部破片。38~44は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、不規則なハケ目痕が残る。色調は35が褐灰色 (7.5YR4/1)、38がにぶい赤褐色 (5YR5/4)、39・41・43・44が灰褐色 (5YR4/2)、40・42がにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。

91号住居跡 (第93図)

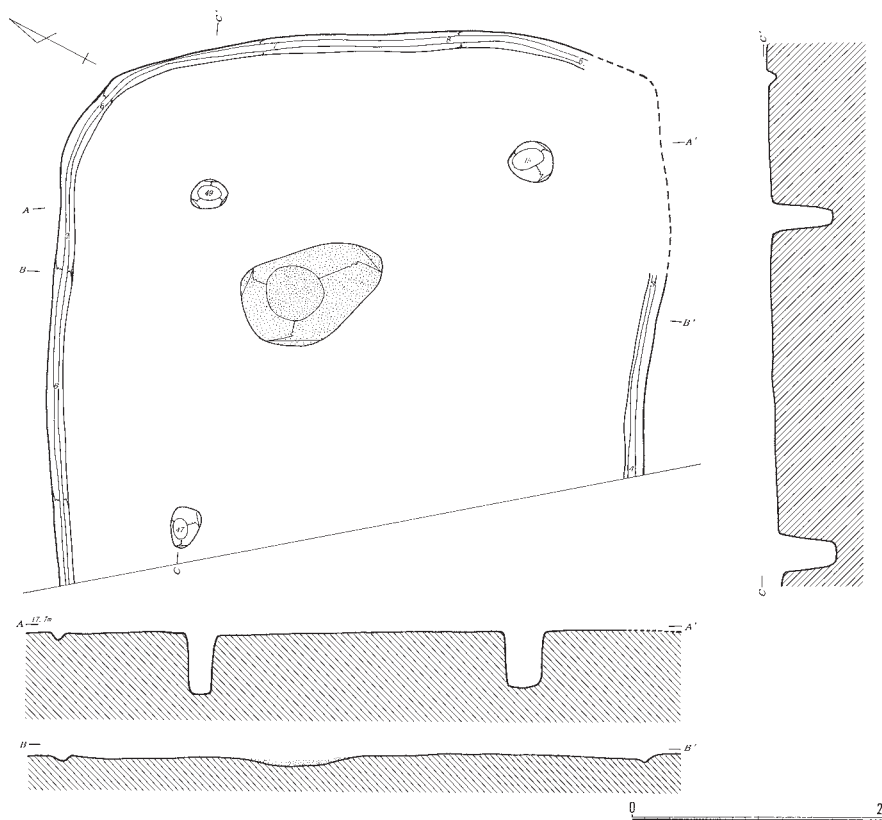
〔位置〕 8 IV・21地点。

〔構造〕 西側が攪乱により破壊されている。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×480cm。(主軸方位) N-60°-E。(壁高) 2~19cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅10~15cm・下幅3~7cm・深さ3~9cmを測り全周する。(床面) 平坦で全体に軟弱である。遺存状態は不良である。(炉) 住居北東コーナーに寄って位置する。116×70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出された3本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む褐色土が僅かに残されていた。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。



第93図 91号住居跡 (1/60)

92A号住居跡（第94図）

〔位置〕 8 IV地点。

〔構造〕 北側調査区外。92BYを切る。（平面形）不明。（規模）不明×380cm。（主軸方位）N-60°-E。（壁高）3～11cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅10～20cm・下幅5～10cm・深さ3～17cmを測り、遺存している部分では全周する。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。被熱のため赤化している部分を検出する。（炉）南壁側に70×50cmの楕円形を呈する地床炉を検出した。深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

92A号住居跡出土遺物（第95図45～47）

壺形土器（第95図45）

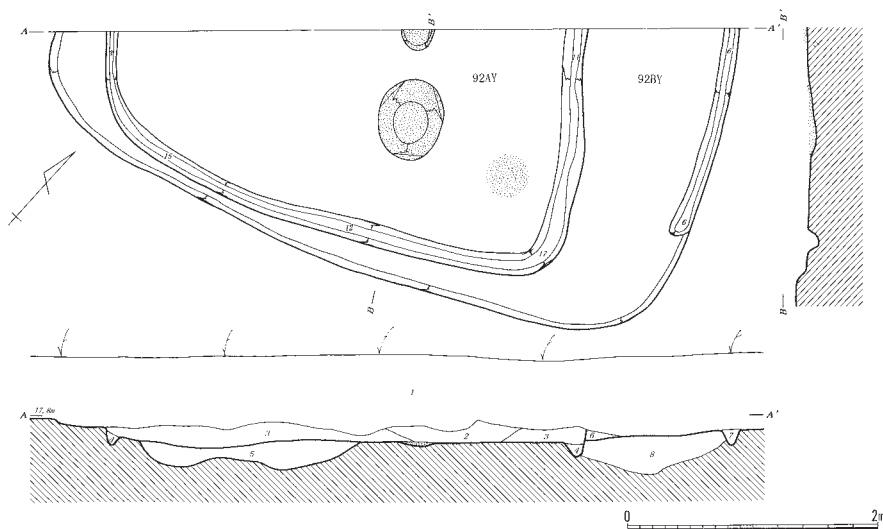
複合口縁破片。口唇端部と口縁部外面にはLRの単節縄文が羽状に施され、棒状浮文が貼付される。内面はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第95図46・47）

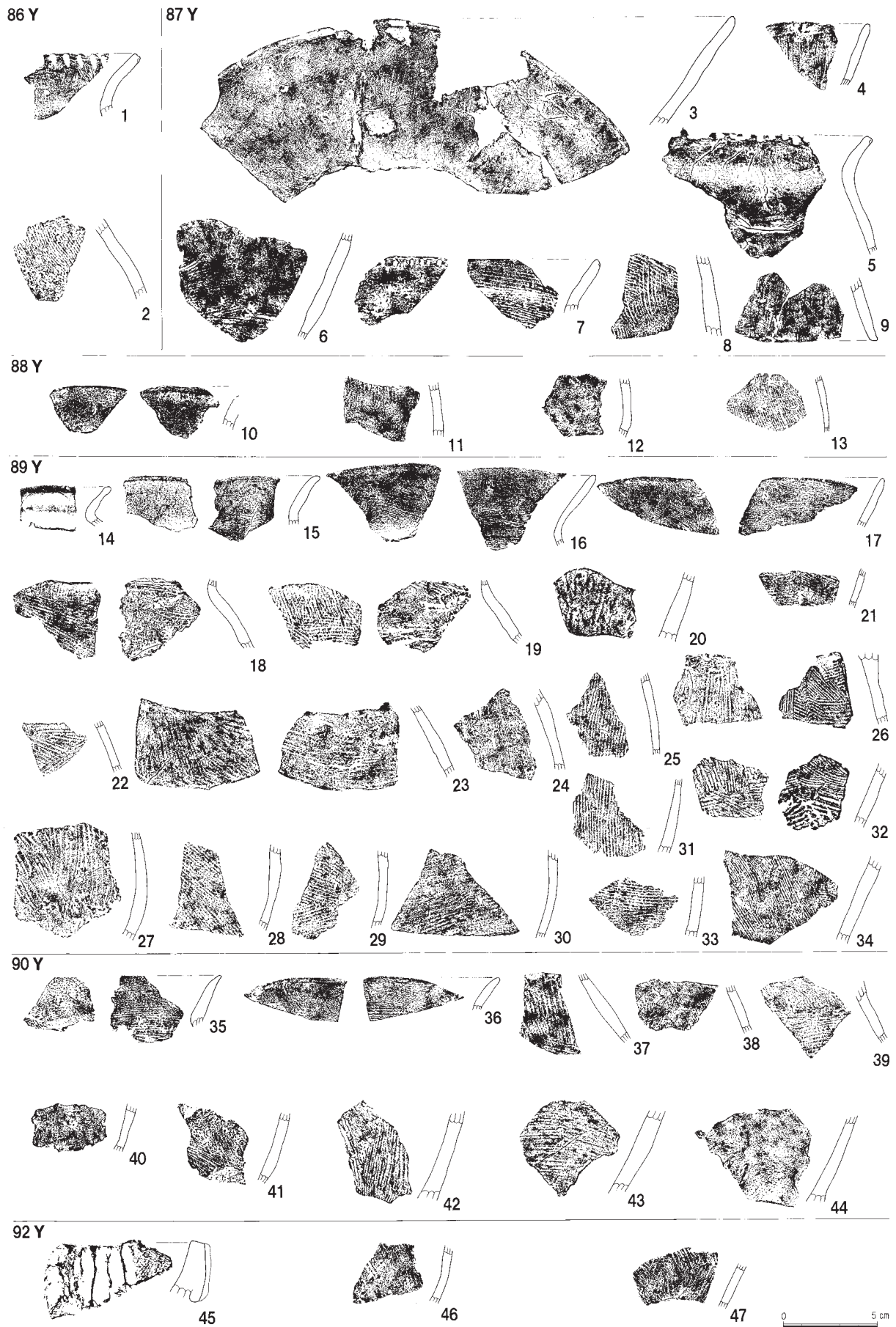
いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。共に覆土中からの出土。

92B号住居跡（第94図）

〔位置〕 8 IV地点。



第94図 92A・92B号住居跡（1/60）



第95図 86~90・92号住居跡出土遺物 (1/3)

〔構造〕 北側調査区外。92AYに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×530cm。(主軸方位) 不明。(壁高) 3～9cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅10～15cm・下幅5cm前後・深さ7cm前後を測り、東側コーナーで止まる。(床面) 全体に軟弱で遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

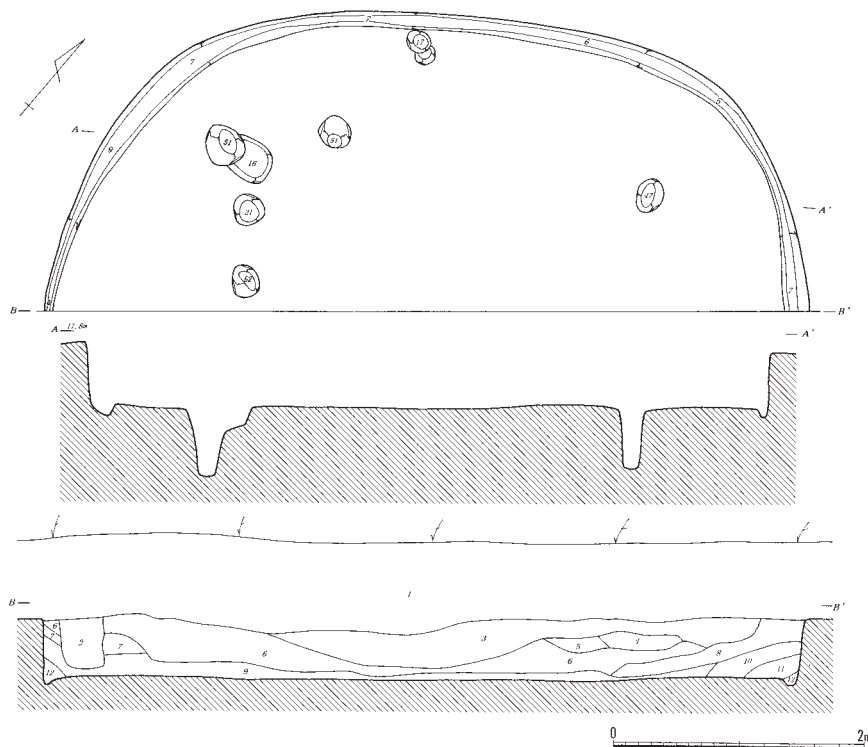
93号住居跡 (第96図)

〔位置〕 8IV地点。

〔構造〕 南側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 46～48cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅7～21cm・下幅3～11cm・深さ2～8cmを測る。(床面) 硬質ロームを床面とする。平坦で遺存状態は良好である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 南西及び北東にコーナーに近い2本が支柱穴となるうか。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を含む。



第96図 93号住居跡 (1/60)

- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 7層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 9層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 10層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 11層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 12層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

堆積状態が不整合で、ロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から破片のみ出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

93号住居跡出土遺物（第102図1～15）

壺形土器（1～6）

1は複合口縁破片。外面には網目状撚糸文が施され、内部には直径約1cmの円形赤彩文がみられ、縦方向に沈線が確認できる。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

2は短い複合口縁を呈する。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

3～6は肩部破片。3・6は撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。4は撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端に3条のS字状結節文が施される。5はRLの単節縄文の下に3条のS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は3がにぶい黄橙色（10YR5/3）、4・5は橙色（7.5YR7/4）、6はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。

すべて覆土中からの出土。

鉢形土器（7）

口縁部破片。弱い稜がみられる。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（8～15）

8・9は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。10は輪積痕が残る頸部破片。輪積痕の下端には刻みが施される。11～15は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残り、特に15には炭化物の付着が顕著である。色調は8・9・11・12が褐灰色（7.5YR4/1）、10が灰褐色（7.5YR4/2）、13がにぶい褐色（7.5YR5/4）、14・15が暗赤褐色（5YR3/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中から出土した。

94号住居跡（第97図）

〔位置〕 8IV地点。

〔構造〕（平面形）隅丸正方形。（規模）径320×310cm。（主軸方位）N-23°-W。（壁高）9～13cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で軟弱だが東側に硬化面を認める。（炉）住居中央から僅かに北に偏って位置する。径40cmの円形を呈し、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。（貯蔵穴）南東壁下に位置する。42×33cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含み、焼土粒子・炭化物粒子を含む褐色土を基調とする。貼床充填土はロームブロックを多く含む黒褐色土である。

〔遺物〕 貯蔵穴と覆土中から僅かに出土。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

94号住居跡出土遺物 (第102図16・17)

甕形土器 (16・17)

16・17は台付甕形土器の脚台部破片。裾部へかけて直線的に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。共に二次的な加熱をかなり受けている。色調は16がにぶい赤褐色 (5YR5/4)、17がにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

95号住居跡 (第98図)

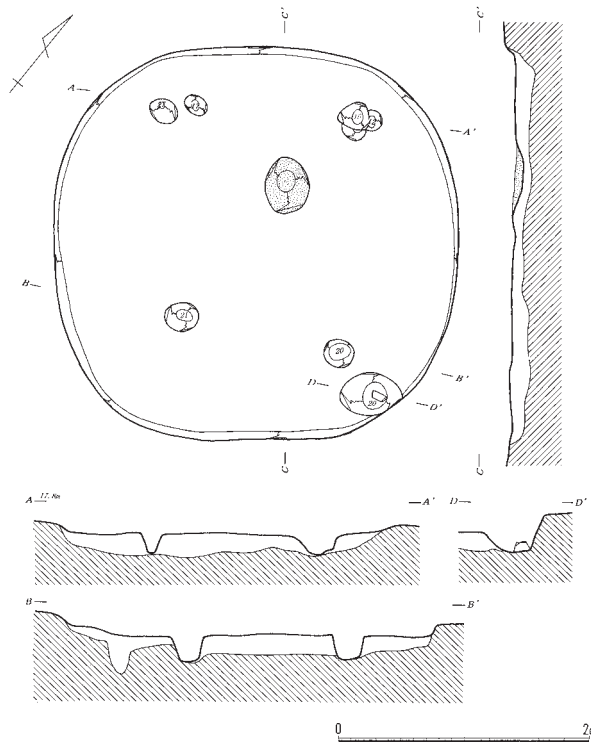
〔位置〕 8 IV地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 284×230cm。(主軸方位) N-30°-W。(壁高) 13~21cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に軟弱で遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。
- 7層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。



第97図 94号住居跡 (1/60)

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 炉や柱穴が検出されず、住居跡とするには躊躇を覚えるが、一応住居跡として扱った。

96号住居跡（第99図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕 攪乱が著しい。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）N-53°-E。（壁高）24cm前後を測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11~14cm・下幅3~5cm・深さ2~5cmを測る。遺存状態は不良である。（床面）東側に硬化面を認めるが全体に遺存状態は不良である。（炉）住居中央から西に偏って位置する。57×54cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。（柱穴）3ヵ所のコーナーに近い深度のある3本が主柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しいため詳細は不明であるが、ローム粒子を多く含む黒褐色土が部分的に確認できた。

〔遺物〕 南東側の床面上に土器片が点在する。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

96号住居跡出土遺物（第100図、第102図18~22）

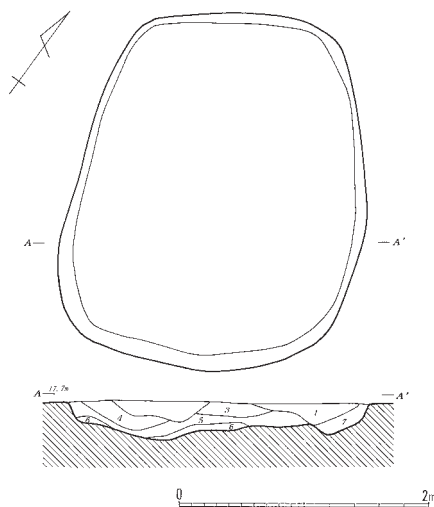
壺形土器（第102図18）

複合口縁破片。口唇端部にはRLの単節縄文、口縁部には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、棒状浮文が貼付される。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

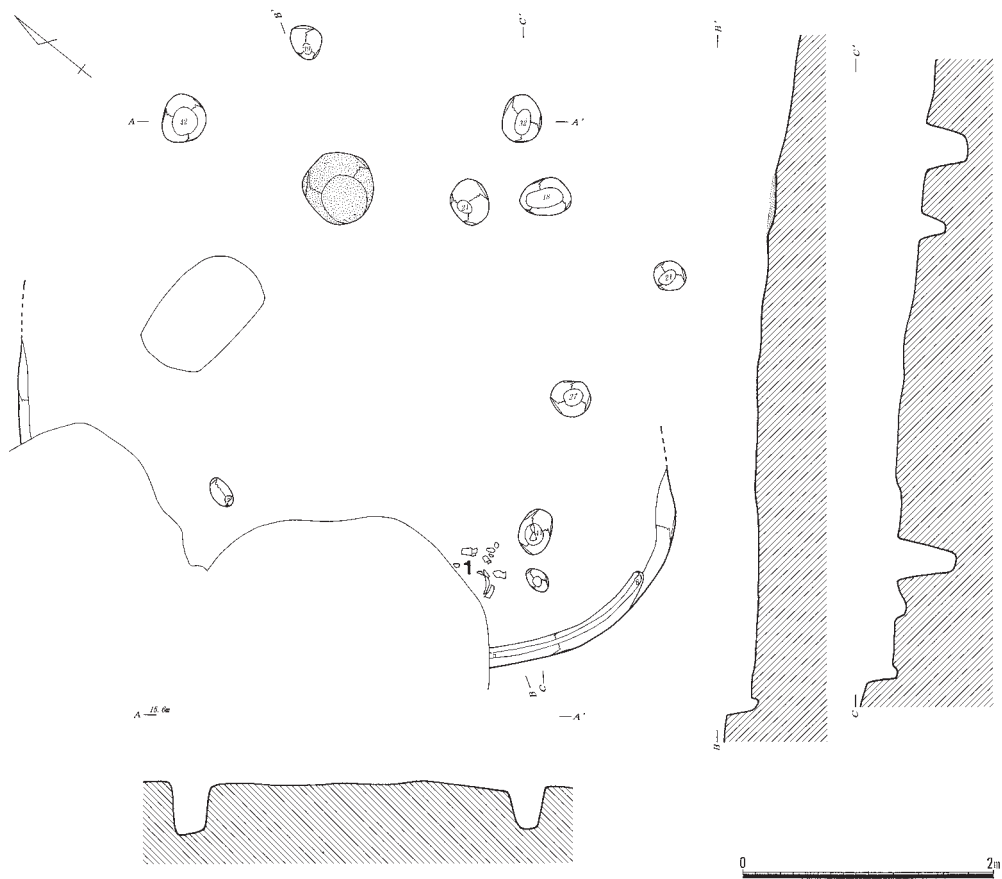
甕形土器（第100図1、第102図19~22）

第100図1は台付甕形土器。甕部の1/2程度が残存する。口径22.4cmを測る。あまり張らない体部から頸部でくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には左方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡南西より床面上から出土した。

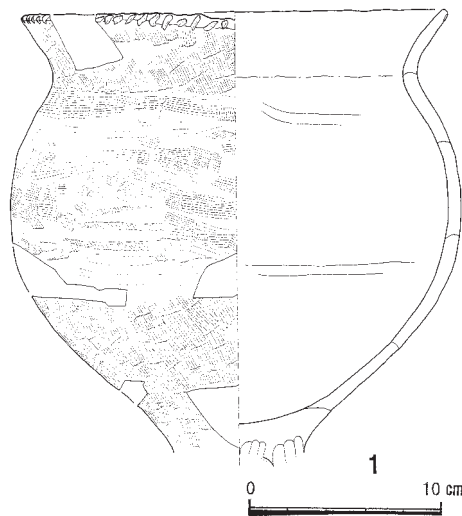
第102図19は口縁部破片。口唇部外面には左方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。20~22は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は19・22が灰褐色（7.5YR5/2）、20が黒褐色（7.5YR3/1）、21が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。



第98図 95号住居跡（1/60）



第99図 96号住居跡 (1/60)



第100図 96号住居跡出土遺物 (1/4)

97号住居跡（第101図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕 北側調査区外。一部攪乱に破壊される。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）N-41°-W。（壁高）17cm前後を測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱で西側は斜面のため確認できなかった。東側に僅かに硬化面を認める。（炉）攪乱中に存在したであろう。僅かな痕跡を残す。（柱穴）各コーナーに近い4本が支柱穴である。（貯蔵穴）東側コーナー壁下に位置する。36×30cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含む褐色土を基調とするが、攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土したのみである。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

97号住居跡出土遺物（第102図23～28）

壺形土器（23・24）

23・24は同一個体。23は頸部破片で24は底部破片。頸部から肩部にかけてLRの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされると推測されるが、器面の荒れが激しく不明瞭。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

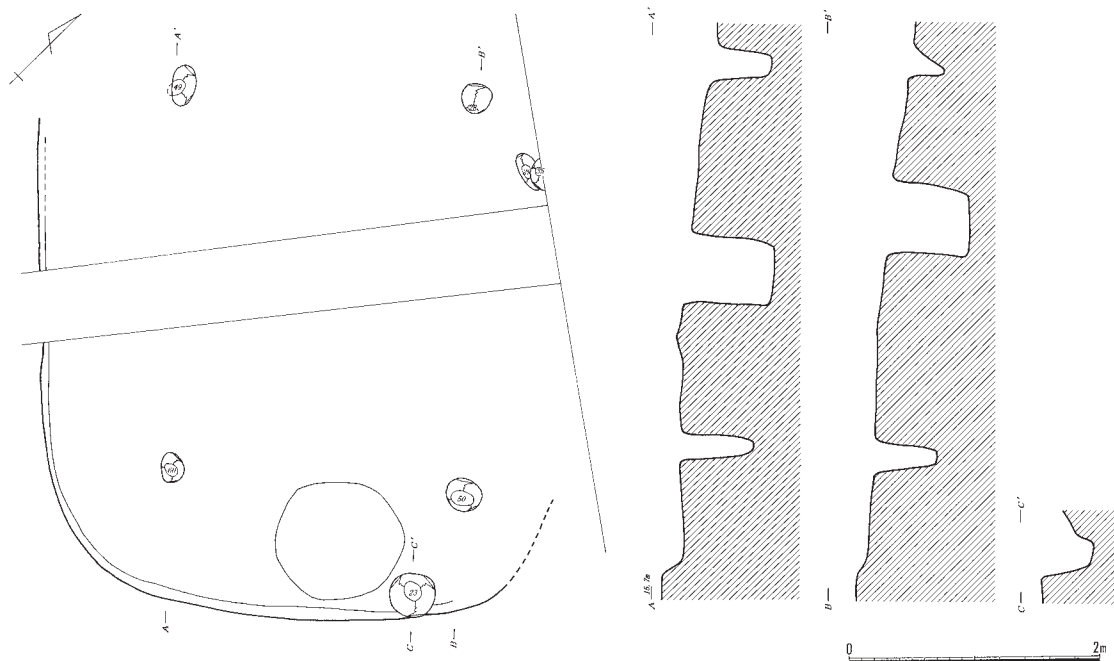
甕形土器（25～28）

25・27・28は体部下半の破片。26は脚台部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。27・28には炭化物の付着がみられる。色調は25・27・28が黒褐色（7.5YR3/1）、26は灰黄褐色（10YR5/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含み、覆土中から出土した。

98号住居跡（第91図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕（平面形）不明。（規模）不明×397cm。（主軸方位）不明。（壁高）1～5cmを測り、70°前後の角度で立



第101図 97号住居跡（1/60）

ち上がる。北側は斜面のため確認できなかった。(壁溝) 上幅9～20cm・下幅2～11cm・深さ3～9cmを測り全周すると思われる。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居南側に位置する。径40cmの円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕ローム粒子を多く含む暗褐色土を基調とするが、攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕覆土中から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

98号住居跡出土遺物 (第102図29・30)

壺形土器 (30)

底部破片。平底を呈する。内面にはハケ目痕が残るが器面は荒れている。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

甕形土器 (29)

口縁部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。頸部内面には粘土のはみだしがみられる。内外面共にヘラナデされるが口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

いずれも覆土中からの出土。

99号住居跡 (第103図)

〔位置〕12 I 地点。

〔構造〕(平面形) 不明。(規模) 不明×590cm。(主軸方位) N-45°-W。(壁高) 4～10cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅9～28cm・下幅6～12cm・深さ3～12cmを測る。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。不明×47cmの地床炉で、深さ1cmを測る。(柱穴) 各コーナーに近い4本が支柱穴である。(貯蔵穴) 南東コーナーに位置する。北側は攪乱により破壊されているため詳細は不明であるが、不明×90cmを測る。

〔覆土〕ローム粒子を含む黒褐色土を基調とするが、攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕貯蔵穴や覆土中から少数の破片が出土したのみである。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

99号住居跡出土遺物 (第117図1～8)

壺形土器 (1～4)

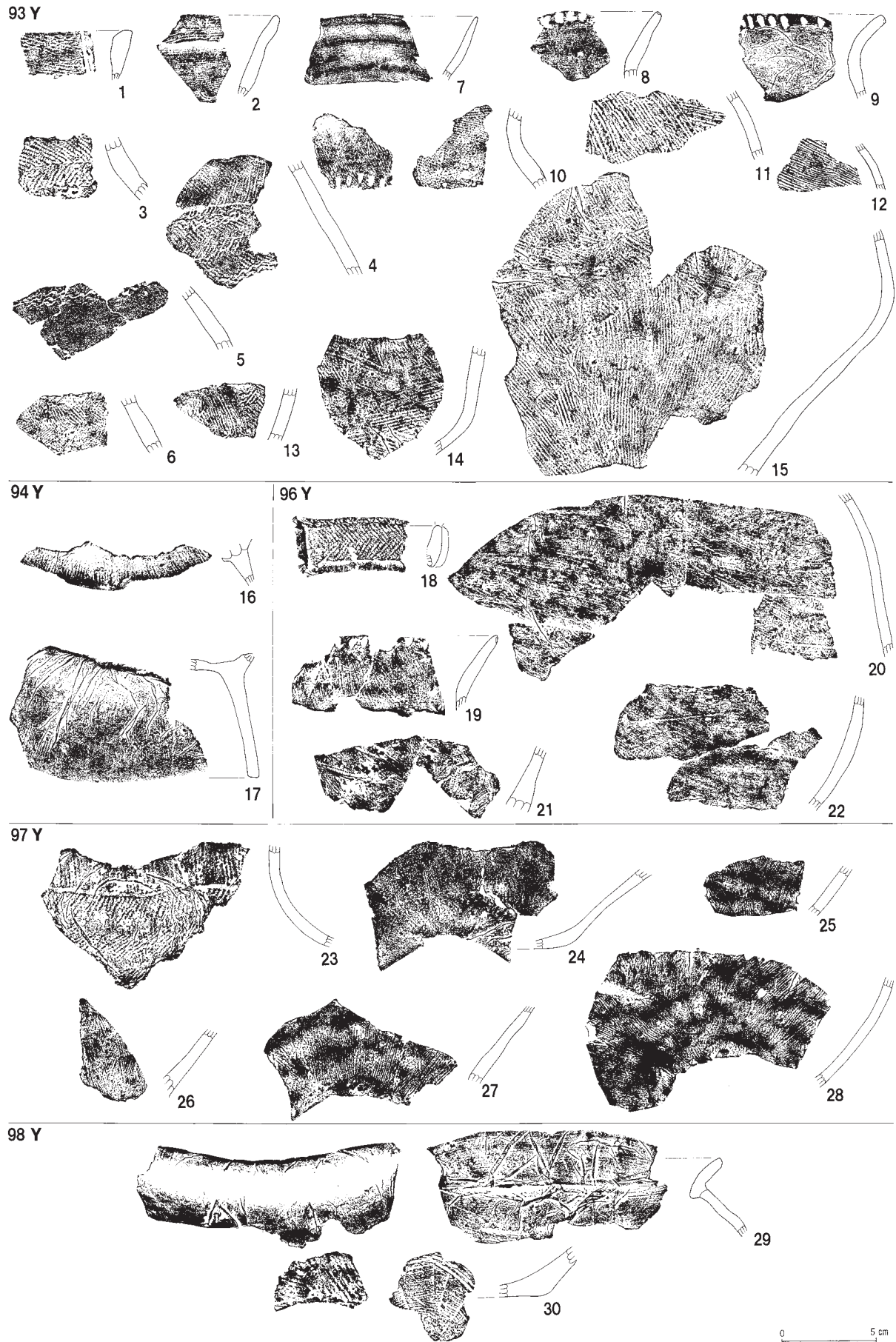
1～4は口縁部破片。1は複合口縁を呈し、口唇端部と口縁部外面にはLRの単節縄文が施され、口縁部の縄文帯内部には直径約1cmの円形赤彩文が施され、下端には刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。2～4は単純口縁破片。内外面共にヘラミガキされる。色調は1がにぶい赤褐色(2.5YR4/3)、2が灰黄褐色(10YR4/2)、3・4がにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。1・3・4の胎土には粗砂を含むが、極めて精選されきめ細かく堅緻である。2の胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中からの出土。

高坏形土器 (8)

脚台部破片。外面は縦方向にヘラミガキされる。内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、粗砂を僅かに含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (5～7)

5・6は口縁部破片。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。7は体部破片。共に内外面共にヘラナデされる。6の外面には炭化物の付着が顕著である。色調は5がにぶい褐色(7.5YR5/3)、6が黒褐色(7.5YR3/1)、7が灰褐色(10YR4/2)、8がにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色



第102図 93・94・96～98号住居跡出土遺物 (1/3)

粒子を含む。5・7は覆土中から、6は床面上から出土。

100号住居跡（第104図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕 105・106・109・119・122Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）N-40°-W。（壁高）検出されなかった。（壁溝）検出されなかった。（床面）確認面が床面となるが、部分的に硬化面を認める。（炉）56×51cmの楕円形を呈する地床炉で、3cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）検出された4本が主柱穴である。（貯蔵穴）住居南側に位置する。48×38cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。覆土中に土器片を検出する。

〔覆土〕 大部分が削平しているため詳細は不明。

〔遺物〕 貯蔵穴から実測できるものが1点出土したのみで、他は破片で覆土中から出土した。

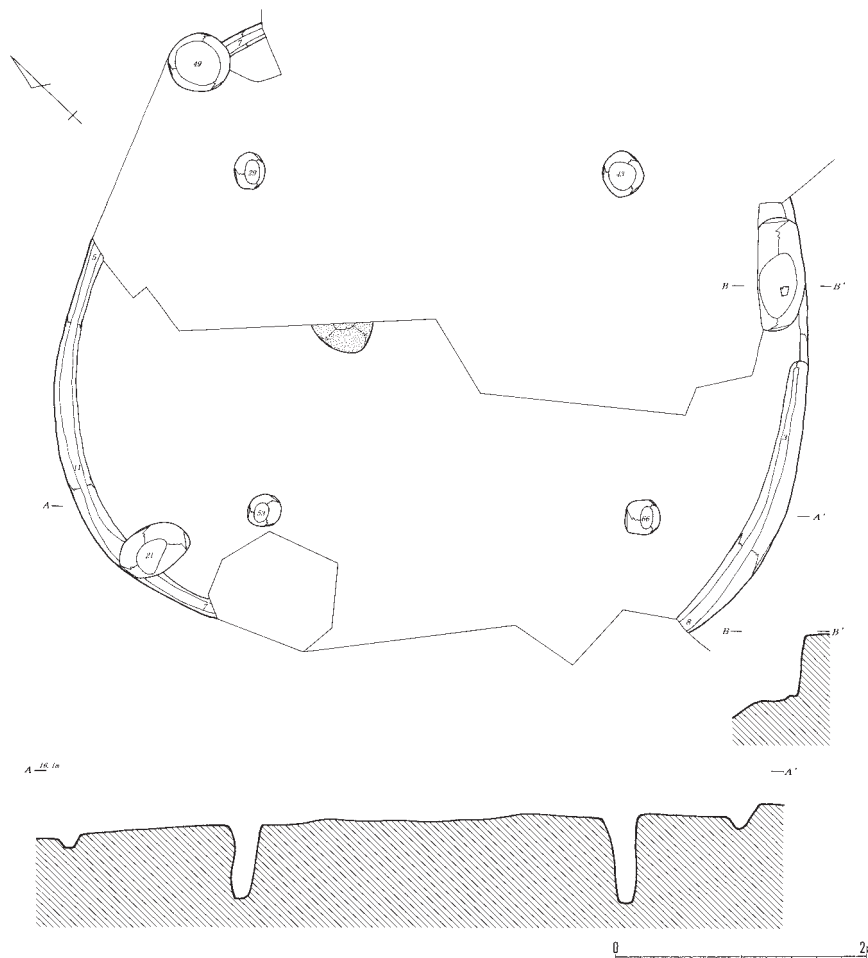
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

100号住居跡出土遺物（第105図、第117図9～13）

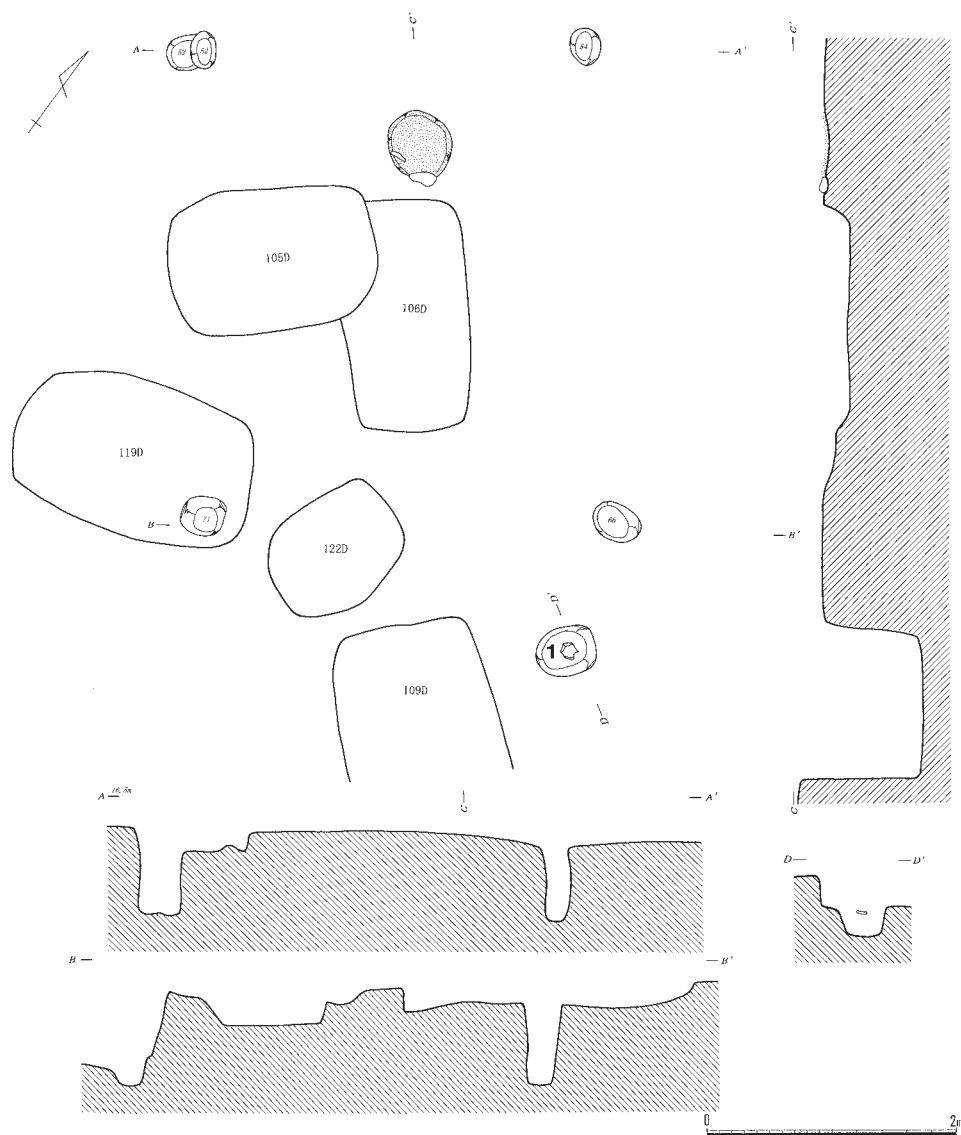
壺形土器（第105図1、第117図9～12）

第105図1は底部のみ残存する。底径5.5cm。平底の底部から内湾しながら立ち上がる器形。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土。

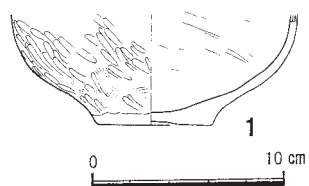
第117図9は複合口縁破片。口唇端部と口縁部にはRLの単節縄文が施され、口縁部外面には棒状浮文が貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色



第103図 99号住居跡（1/60）



第104図 100号住居跡 (1/60)



第105図 100号住居跡出土遺物 (1/4)

粒子を含む。覆土中からの出土。

10・11は単純口縁破片。外面はヘラナデ、内面はヘラミガキされる。いずれも色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

12は肩部破片。LRの単節縄文が施され、下端には3条のS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（第117図13）

脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

101号住居跡（第106図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）684×606cm。（主軸方位）N-40°-W。（壁高）4～33cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅7～23cm・下幅4～10cm・深さ2～10cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際を除き硬化面を認める。全体に遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。93×53cmの楕円形を呈する粘土火皿で、深さ7cmを測る。掘り込み以外の被熱は灰の掻き出しのためか。（柱穴）各コーナーに近い深度のある4本が主柱穴である。（貯蔵穴）攪乱中か。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 黄褐色土。ロームブロック。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 9層 黒褐色土。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

101号住居跡出土遺物（第107図、第117図14～17）

壺形土器（第117図14～16）

いずれも肩部破片。14は2条のS字状結節文がみられる。15はLRの単節縄文、16はLRの単節縄文の端末結節が施される。色調は14がにぶい褐色（7.5YR5/4）、15が褐灰色（5YR4/1）、16がにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。

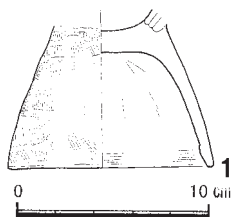
甕形土器（第107図1、第117図17）

第107図1は台付甕形土器の脚台部。1/2程度が残存する。裾部へかけて僅かに内湾しながら開く器形。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

第117図17は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂含む。覆土中から出土した。



第106図 101号住居跡 (1/60)



第107図 101号住居跡出土遺物 (1/4)

102号住居跡（第108図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕 南側調査区外。125・131Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明×490cm。（主軸方位）不明。（壁高）2～4cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅9～17cm・下幅4～8cm・深さ4～5cmを測る。（床面）全面軟弱で遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）北側の2本が主柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 暗赤褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

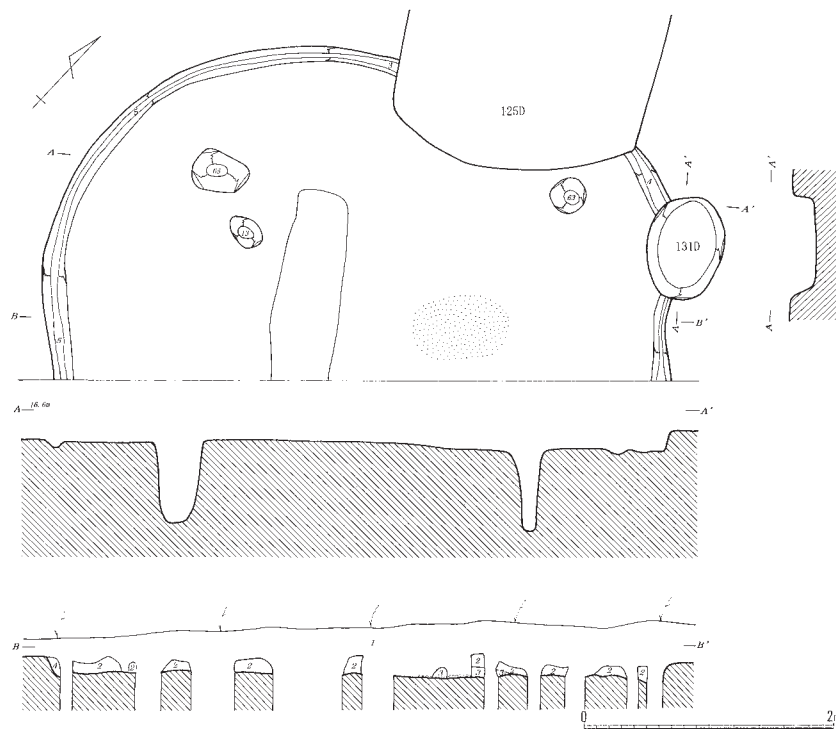
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

103号住居跡（第109図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×503cm。（主軸方位）N-27°-W。（壁高）12～18cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）住居中央から東側が攪乱で大きく破壊されている。平坦で軟弱だが北西側に硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。攪乱により大きく破壊されている。地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。南壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明。



第108図 102号住居跡、131号土坑（1/60）

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

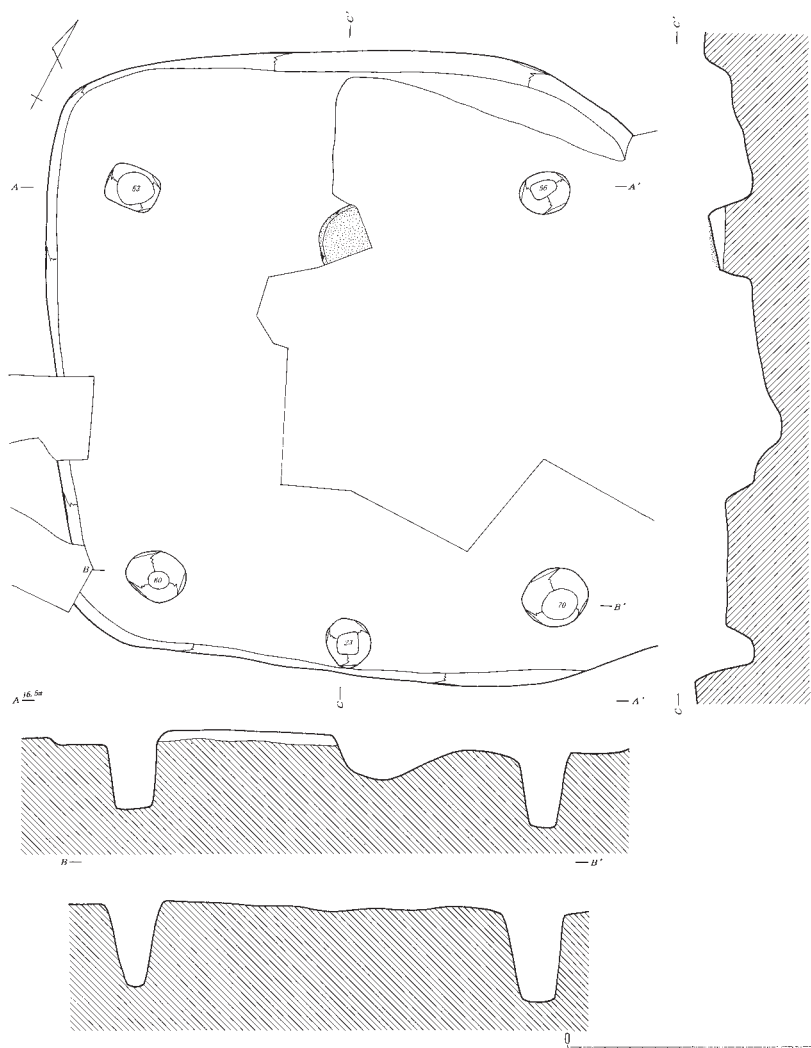
104号住居跡（第110図）

〔位置〕 12 I 地点。

〔構造〕 北コーナー部分は攪乱により破壊されている。（平面形）楕円形。（規模）506×463cm。（主軸方位）N—40°—W。（壁高）4～26cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅9～17cm・下幅3～7cm・深さ2～9cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。西側は攪乱で破壊されている。不明×40cmの地床炉で、深さ4cmを測る。掘り込み外に礫を検出する。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。（貯蔵穴）南東壁下中央から北東に偏って位置する。49×42cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。



第109図 103号住居跡（1/60）

5層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。

6層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

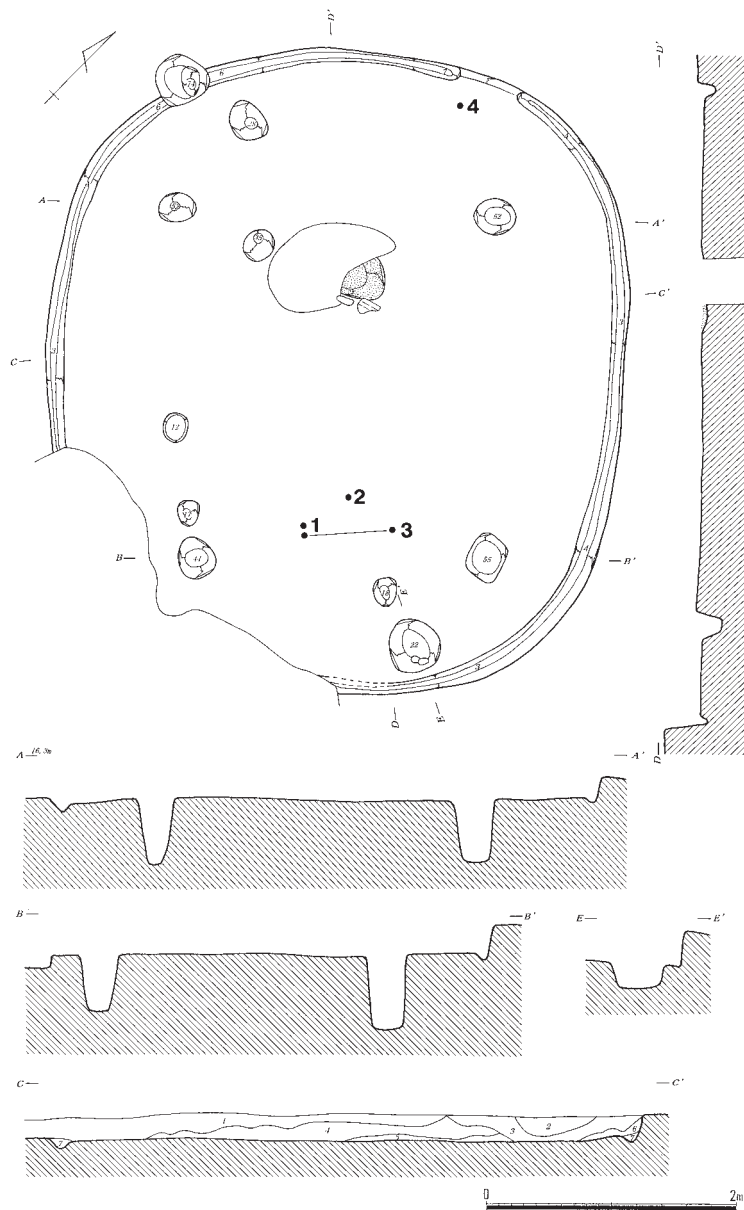
〔遺物〕 覆土中から僅かな破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

104号住居跡出土遺物（第111図、第117図18～21）

壺形土器（第111図1・2）

1・2共に小型でほぼ完形。1は口径10.8cm・底径8.5cm・器高18.5cm。2は口径7.5cm・底径4.9cm・器高14cmを測る。いずれも平底の底部から球状の体部に至り、頸部でゆるやかにくびれて口縁部は外反する器形であるが、1のほうが大きく開く。外面と口縁部内面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面体部はヘラナデされるが工具痕が残る。色調は1がにぶい褐色（7.5YR5/4）、2がにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。住居跡中央からやや南東寄り床面上から出土した。



第110図 104号住居跡 (1/60)

甕形土器（第111図3～5、第117図18～21）

第111図3・4は台付甕形土器の甕部のみ残存。3は甕部1/2程度が残存し、口径9cmを測る。口唇部外面には先端の丸い棒状の工具により押捺された刻みが巡る。体部は下半にかけてすぼまり、頸部はゆるやかにくびれて口縁部は開く器形。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（5YR 6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から東南寄り床面上から散乱した状態で出土した。4は甕部1/3程度が残存し、口径13.5cmを測る。体部は球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には先端の鋭い工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北コーナーより出土。

5は台付甕形土器の接合部のみ出土。接合部は強く屈曲し裾部へかけて広がる器形である。内外面共にヘラナデされる。色調は灰白色（7.5YR8/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

第117図18～20は口縁部破片。21は脚台部破片。18・19は同一個体。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。20は口唇部外面に右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされる。色調は18・19が浅黄橙色（7.5YR8/3）、20・21がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。すべて覆土中から出土した。

105号住居跡（第112図）

〔位置〕 12 I 地点。

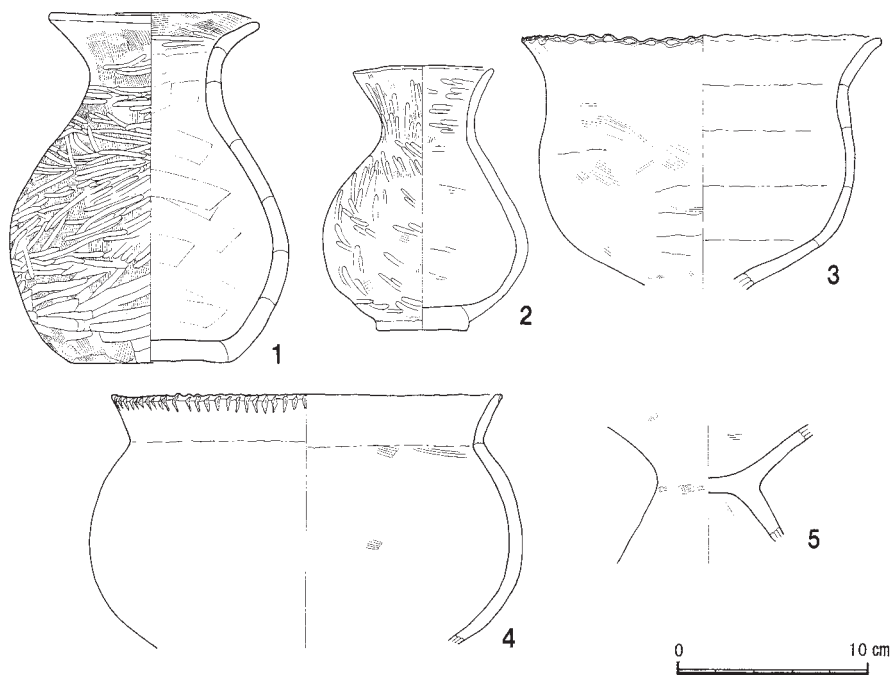
〔構造〕（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）N-35-W。（壁高）確認面が床面となるため詳細不明。（壁溝）検出されなかった。（床面）部分的に硬化面を残す。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出された3本が主柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）南東側に位置する。60×56cmの楕円形を呈し深さ14cmを測る。

〔覆土〕 耕作土直下に検出されたため詳細は不明。

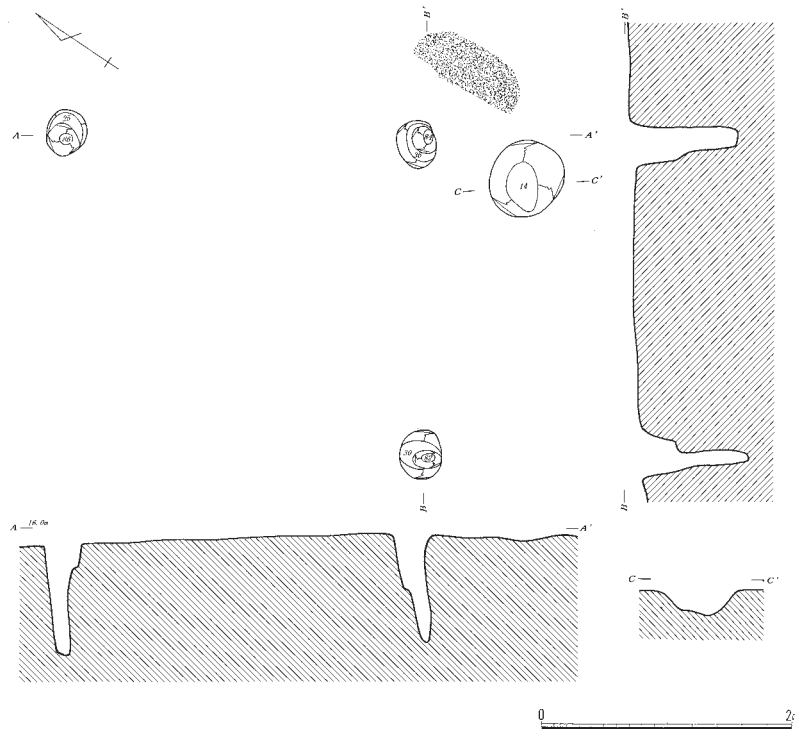
北西コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第111図 104号住居跡出土遺物（1/4）



第112図 105号住居跡 (1/60)

106号住居跡 (第113図)

〔位置〕 13 I 地点。

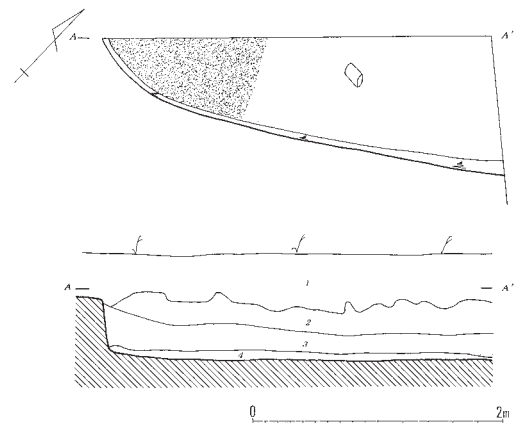
〔構造〕 北及び東側は調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 40cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 硬質ロームを床面とし遺存状態は良好である。住居壁際に硬化面を部分的に認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 - 2層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 - 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
 - 4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。壁際に細礫を多く含む。
- コーナー部に砂粒混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 今回の調査では図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

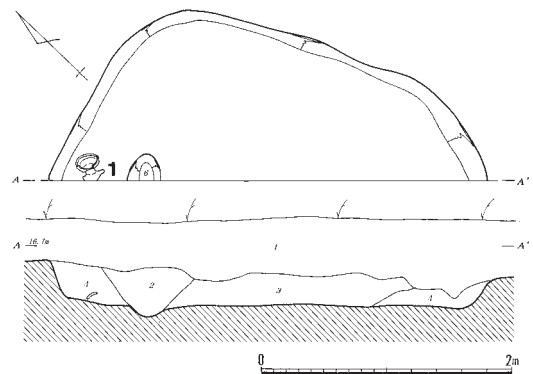


第113図 106号住居跡 (1/60)

109号住居跡 (第114図)

〔位置〕 17地点。

〔構造〕 南西側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 26～33cmを測り、70° 前後の角度で立

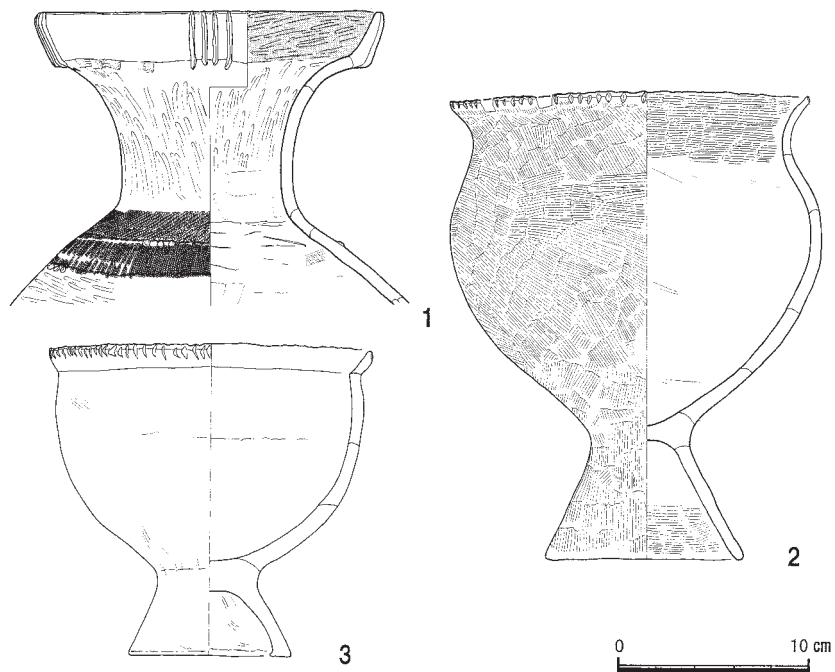


第114図 109号住居跡 (1/60)

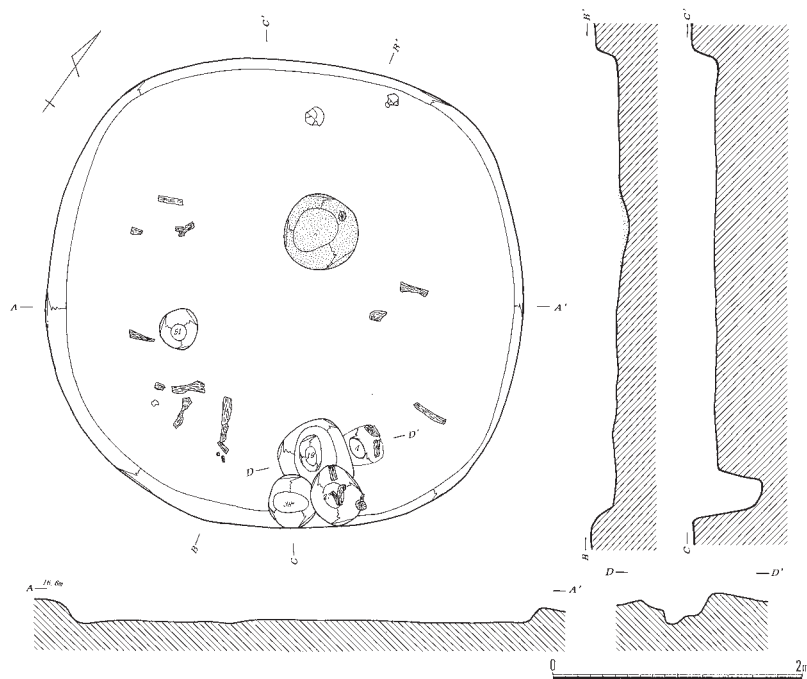
ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦だが軟弱で遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。
 (柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。



第115図 109号住居跡出土遺物 (1/60)



第116図 110号住居跡 (1/60)

〔遺物〕北西壁際に土器が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

109号住居跡出土遺物（第115図）

壺形土器（1）

肩部より上が残存する。口径17.5cm。頸部でくびれて複合口縁部は直立しながら開く器形。口縁部外面はナデられ、4本一単位の棒状浮文が貼付される。肩部外面には2段のLRの単節縄文の端末結節縄文が施される。縄文帯の境目と下端には3個一単位の円形浮文が施される。口縁部内面と頸部はヘラミガキされる。色調は橙色（5YR 6/8）を呈する。胎土には細礫・粗砂含むが、きめ細かく堅緻である。北西壁際付近床面上から出土した。

甕形土器（2・3）

2・3は完形。2は口径17cm・底径8.5cm・器高16.5cmを測る。口縁部に最大径をもち体部は下半にかけてすぼまる器形である。頸部は屈曲し、短い口縁部は外反する。口縁部内面は面取りされる。口唇部外面は先端の鋭い工具で左方向から押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。3は口径19.2cm・底径10.5cm・器高24.8cmを測る。脚台部は「ハ」字状に広がる器形。体部上半に最大径をもち体部上半にかけてすぼまる器形である。頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外反する。口唇部外面は板状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と脚部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。北西壁際付近より出土した。

110号住居跡（第116図）

〔位置〕17地点。

〔構造〕21・22Jを切る。（平面形）隅丸正方形。（規模）370×369cm。（主軸方位）N-30°-W。（壁高）10～15cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）遺存状態は良好で、住居中央に硬化面が確認された。（炉）住居中央から北に偏って位置する。59×58cmの円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みを有する。（柱穴）主柱穴と思えるものは検出されなかった。（貯蔵穴）南西壁下ほぼ中央に位置する。不明×76cmの楕円形で、深さ19cmを測る。北東側に高さ4cmの小規模な凸堤が検出された。

〔覆土〕ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を含む黒褐色土を基調とする。炭化材は住居中央に向けて、傾斜をもって出土する。

〔遺物〕北コーナー付近壁際、覆土中から破片が出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

〔所見〕炭化材が出土するなど、焼失家屋の可能性はある。

110号住居跡出土遺物（第117図22）

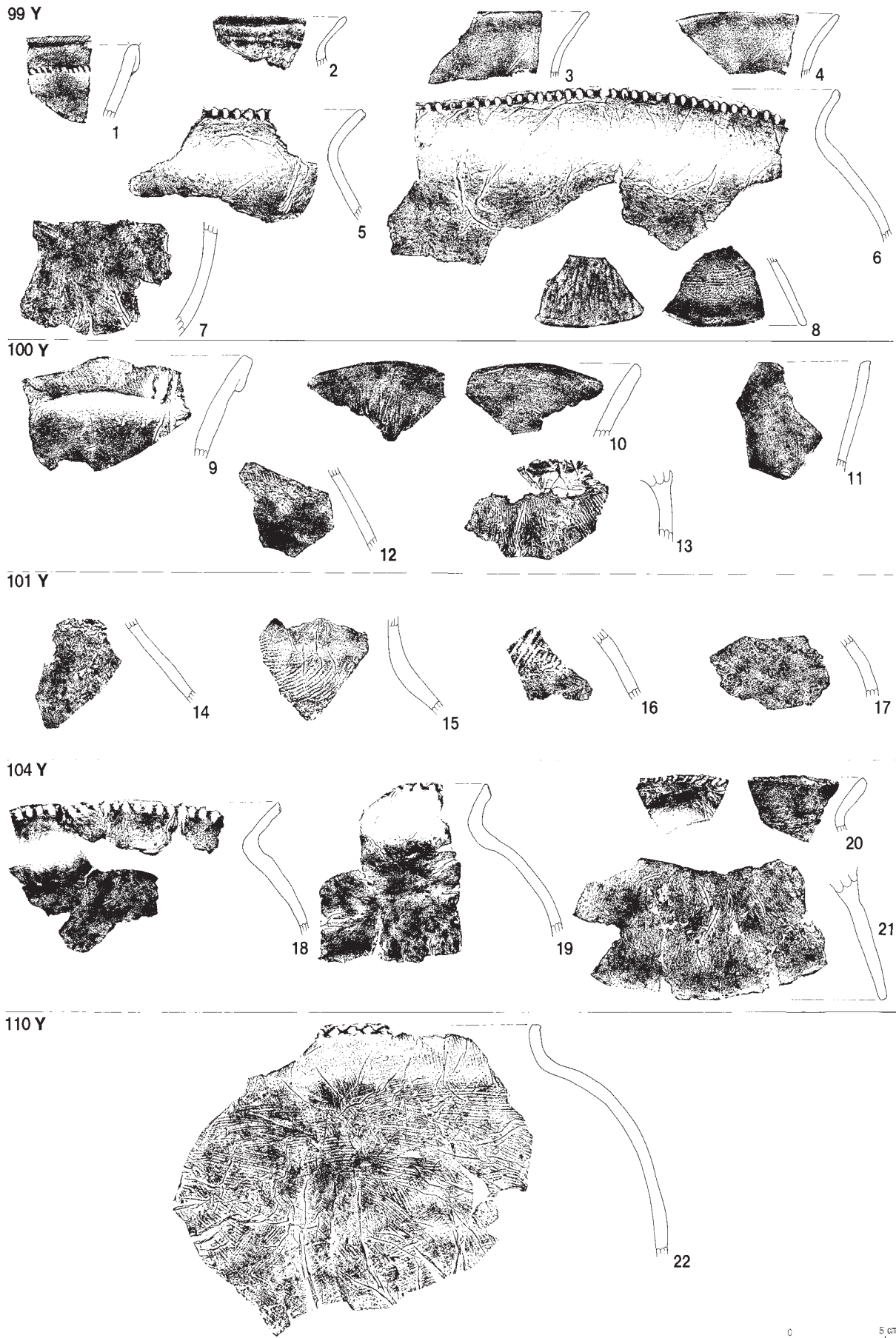
甕形土器（22）

甕部破片。体部は球状を呈し、頸部でくびれて口縁部は直立する。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

111号住居跡（第118図）

〔位置〕17地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）585×509cm。（主軸方位）N-28°-W。（壁高）2～9cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12～24cm・下幅2～12cm・深さ2～8cmを測り全周する。（床面）平坦で遺存

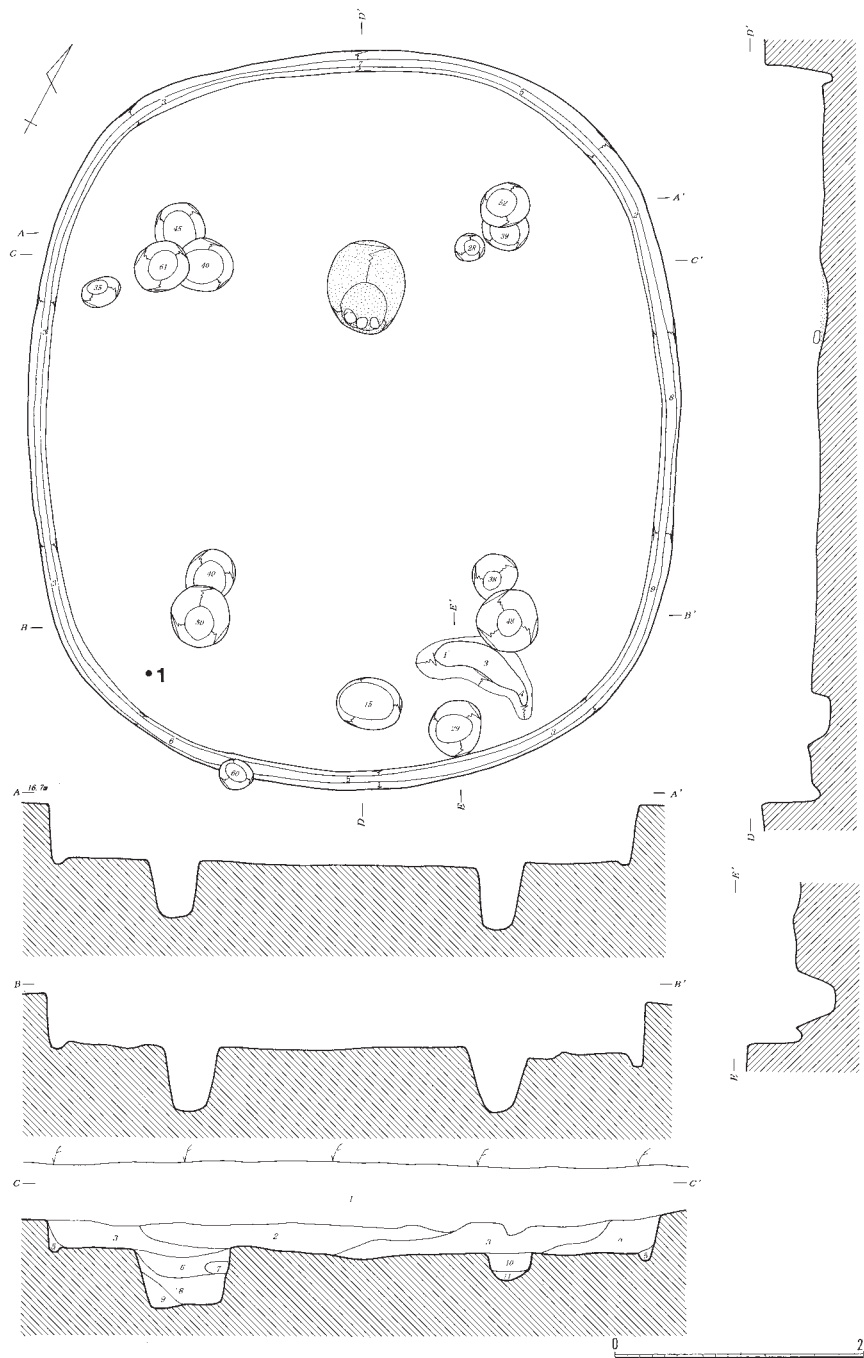


第117図 99~101・104・110号住居跡出土遺物 (1/3)

状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。74×62cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmを測る。掘り込みの外の南側に礫を検出する。(柱穴) 各コーナー部の4本が支柱穴である。南壁下中央から僅かに北に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 住居南壁下中央から東に偏って位置する。径43cmの円形を呈し、深さ28cmを測る。北側に幅35cm前後・高さ1～3cmの凸堤を弧状に構築する。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を含む。



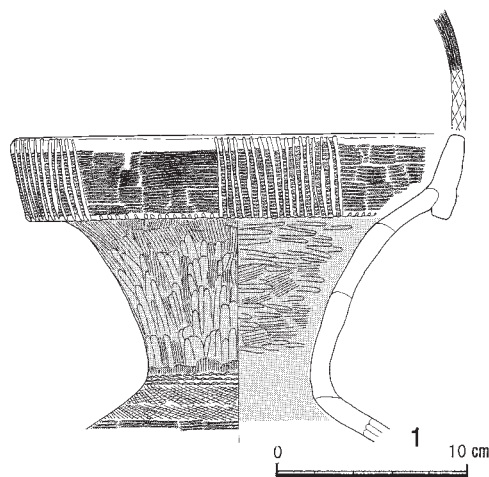
第118図 111号住居跡 (1/60)

- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土。ロームブロックを多く含む。
- 7層 黄褐色土。ロームブロック。
- 8層 黒褐色土。ローム小ブロックを含む。
- 9層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 10層 黒褐色土。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 11層 にぶい黄褐色土。ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕床面上に僅かに土器片が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕主柱穴が重複していて、建替えの可能性がある。



第119図 111号住居跡出土遺物(1/4)

111号住居跡出土遺物(第119図、第128図1～11)

壺形土器(第119図1)

口頸部のみ残存する。口径24cm。頸部は強く屈曲し、口縁部は外反する。口唇端部の3/4程度には網目状捺糸文が施文され、残りにはRの捺糸文が施される。口縁部外面にはRの捺糸文が横位に施され、15～18本一単位の集合沈線が5ヵ所に施される。捺糸文内には2個一単位の直径1cmの円形赤彩文が施される。口縁部下端には刻みが巡る。頸部から肩部にかけての縄文帯には上から順番に3段のZ字状結節文、網目状捺糸文が2段、Rの捺糸文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)、赤彩部はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。南コーナー床面上から出土した。

甕形土器(第128図1～11)

1・2は台付甕形土器の甕部破片。体部は球状を呈し、頸部は屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は1が灰褐色(7.5YR4/2)、2がにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

3～6は口縁部破片。7～11は体部破片。3・4は口唇部外面に棒状の工具により押捺された刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は3がにぶい橙色(7.5YR7/4)、4がにぶい赤褐色(5YR4/3)、5がにぶい橙色(5YR5/4)、6・8がにぶい赤褐色(2.5YR5/4)、7が褐色(7.5YR5/3)、9・11が灰褐色(5YR4/2)、10がにぶい黄橙色(10YR6/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中から出土した。

112号住居跡(第120図)

〔位置〕17地点。

〔構造〕北側調査区外。24Jを切る。7Hに切られる。(平面形)隅丸長方形。(規模)不明×455cm。(主軸方位)N-39°-W。(壁高)8～25cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。(炉)住居中央から北西に偏って位置する。径52cmの円形を呈する地床炉で、深さ19cmを測る。炉床の中心に礫と土器片を円形に配置している。(柱穴)コーナー部の4本が主柱穴である。南壁中央から僅かに北に偏った位置の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。炭化材片を含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

112号住居跡出土遺物（第121図、第128図12～15）

壺形土器（第128図12・13）

12は複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面にはLRの単節縄文が施される。口縁部外面には棒状浮文が貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

13は口縁部破片。RLの単節縄文の端末結節縄文が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中より出土した。

甕形土器（第121図、第128図14～15）

第121図1は脚台部のみ残存する。裾部径12.5cm。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

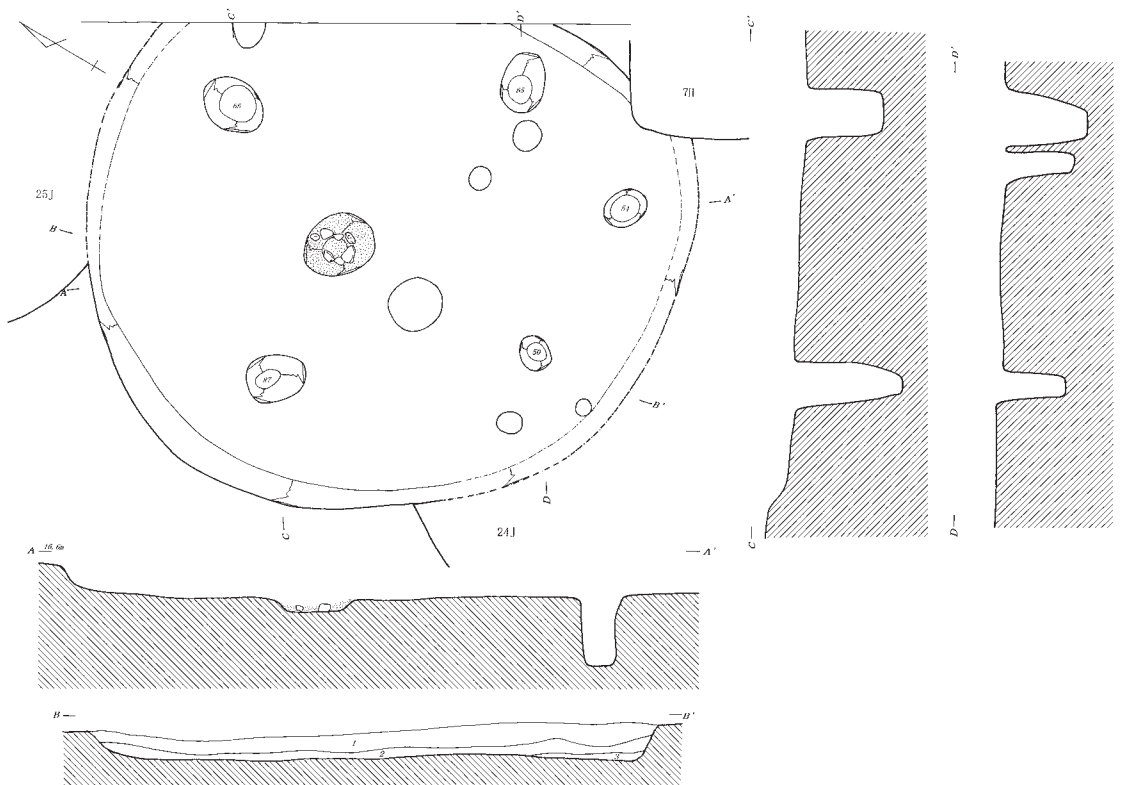
第128図14は口縁部破片。頸部は強くくびれて口縁部は外反する。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

15は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中からの出土。

113号住居跡（第122図）

〔位置〕 19地点。



第120図 112号住居跡 (1/60)

〔構造〕 南側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 23～28cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 攪乱で破壊されている。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 2本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 床面上に土器片が数点出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

113号住居跡出土遺物 (第123図1)

甕形土器 (第123図1)

小型の台付甕形土器。口径14.6cm・底径7.3cm・器高15.5cmと小型である。口縁部に最大径をもち頸部は屈曲し、口縁部は外反する。体部下半にかけてすぼまる器形である。脚台部は甕部に比べて小さく内湾しながら広がる。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。北西壁付近の床面上から出土した。

114号住居跡 (第124図)

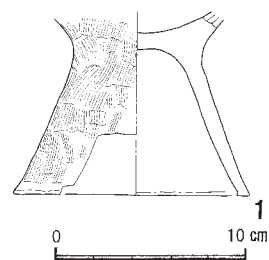
〔位置〕 18地点。

〔構造〕 西側調査区外。(平面形) 円形。(規模) 径375cm。(主軸方位) N-25°-W。(壁高) 2～7cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅7～17cm・下幅2～8cm・深さ5～7cmを測り全周すると思われる。(床面) 攪乱が著しいが部分的に硬化面を認める。(炉) 住居北西側に位置する。86×64cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

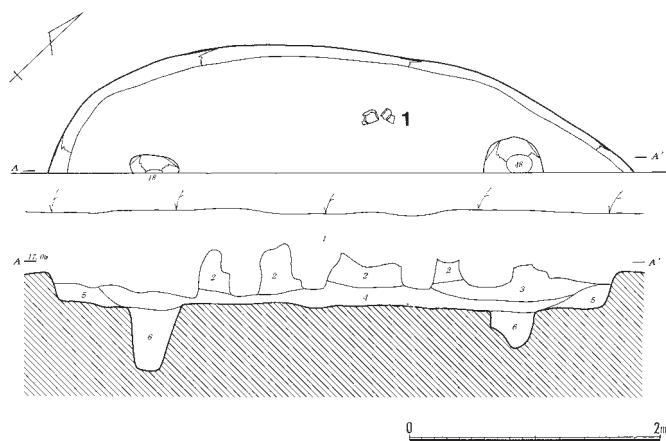
〔覆土〕 耕作による攪乱が著しく詳細は不明であるが、ローム粒子を多く含む暗褐色土を基調とする。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第121図 112号住居跡出土遺物 (1/4)



第122図 113号住居跡 (1/60)

115号住居跡（第125図）

〔位置〕 18地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）626×480cm。（主軸方位）N-28°-W。
（壁高）20～25cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅7～22cm・下幅2～11cm・深さ1～5cmを測りほぼ全周する。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。153×115cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ11cmの掘り込みをもつ。掘り込み内の南側に礫を検出する。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。南壁下中央から僅かに北に偏って位置するピットは、入口施設と思われる。（貯蔵穴）南壁下北東に偏って位置する。49×43cmの楕円形を呈し、深さ32cmを測る。幅40cm前後・高さ6～9cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。焼土小ブロック・炭化物粒子を含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から土器片が僅かに出土した。

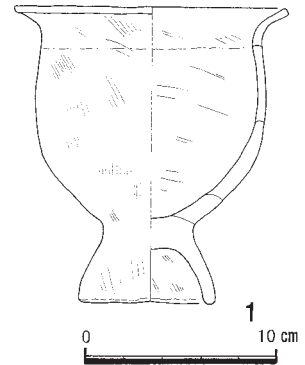
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

115号住居跡出土遺物（第128図16～21）

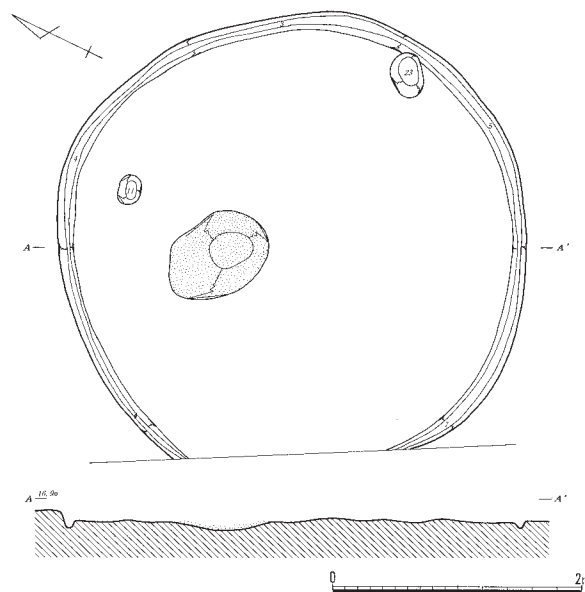
壺形土器（16・17・20）

16は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

17は肩部破片。上からまずRLの単節縄文の端末結節が施され、無文帯・S字状結節文・RLの単節縄文端末結



第123図 113号住居跡出土遺物（1/4）



第124図 114号住居跡（1/60）

節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

20は体部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

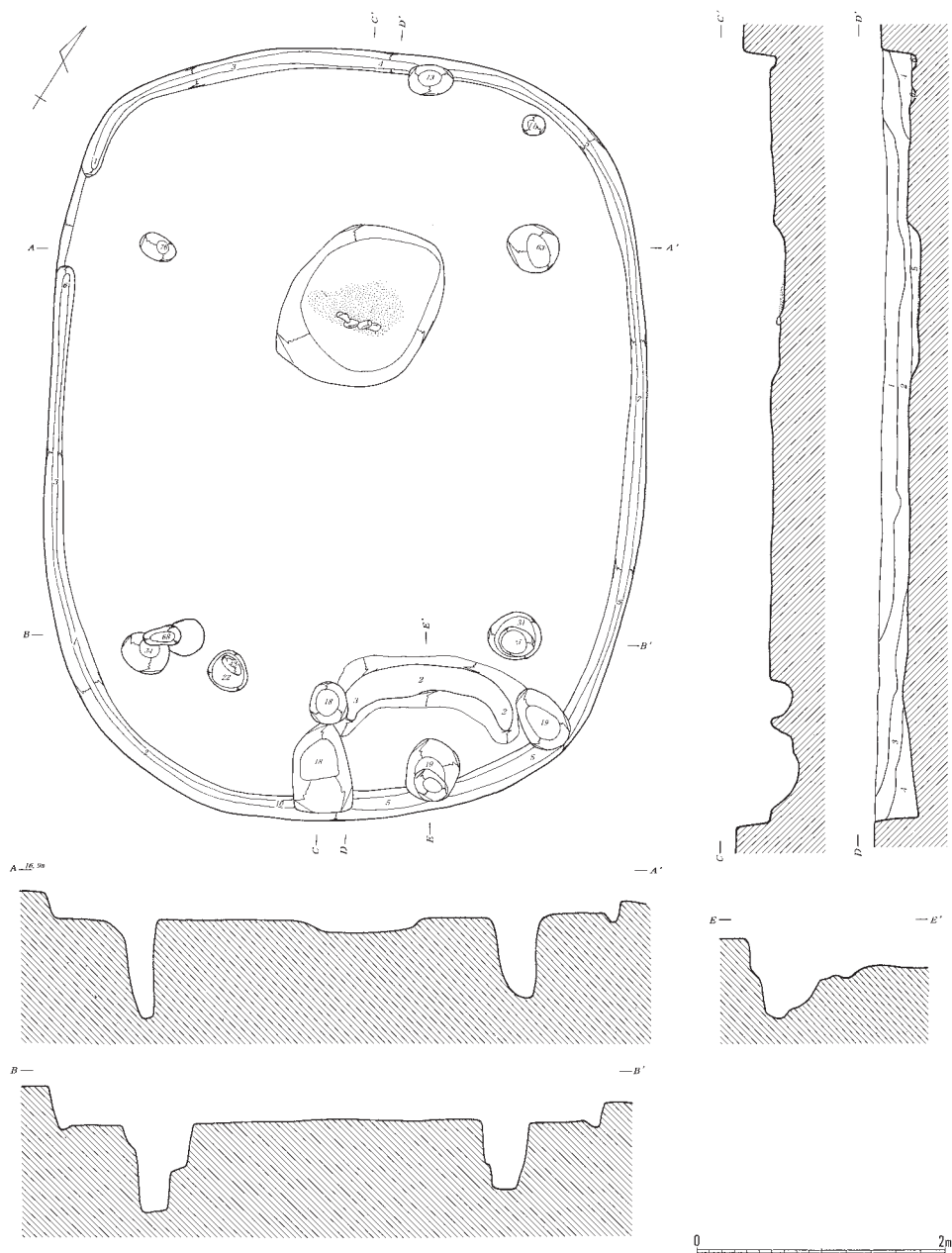
鉢形土器(18)

小型の鉢形土器の破片。口縁部は内湾しながら立ち上がる器形。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい褐灰色(10YR4/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。

甕形土器(19~21)

19は体部破片。21が脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが、19は外面にハケ目痕が残る。色調は19が黒褐色(7.5YR3/1)、21はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

以上の遺物はすべて覆土中から出土した。



第125図 115号住居跡(1/60)

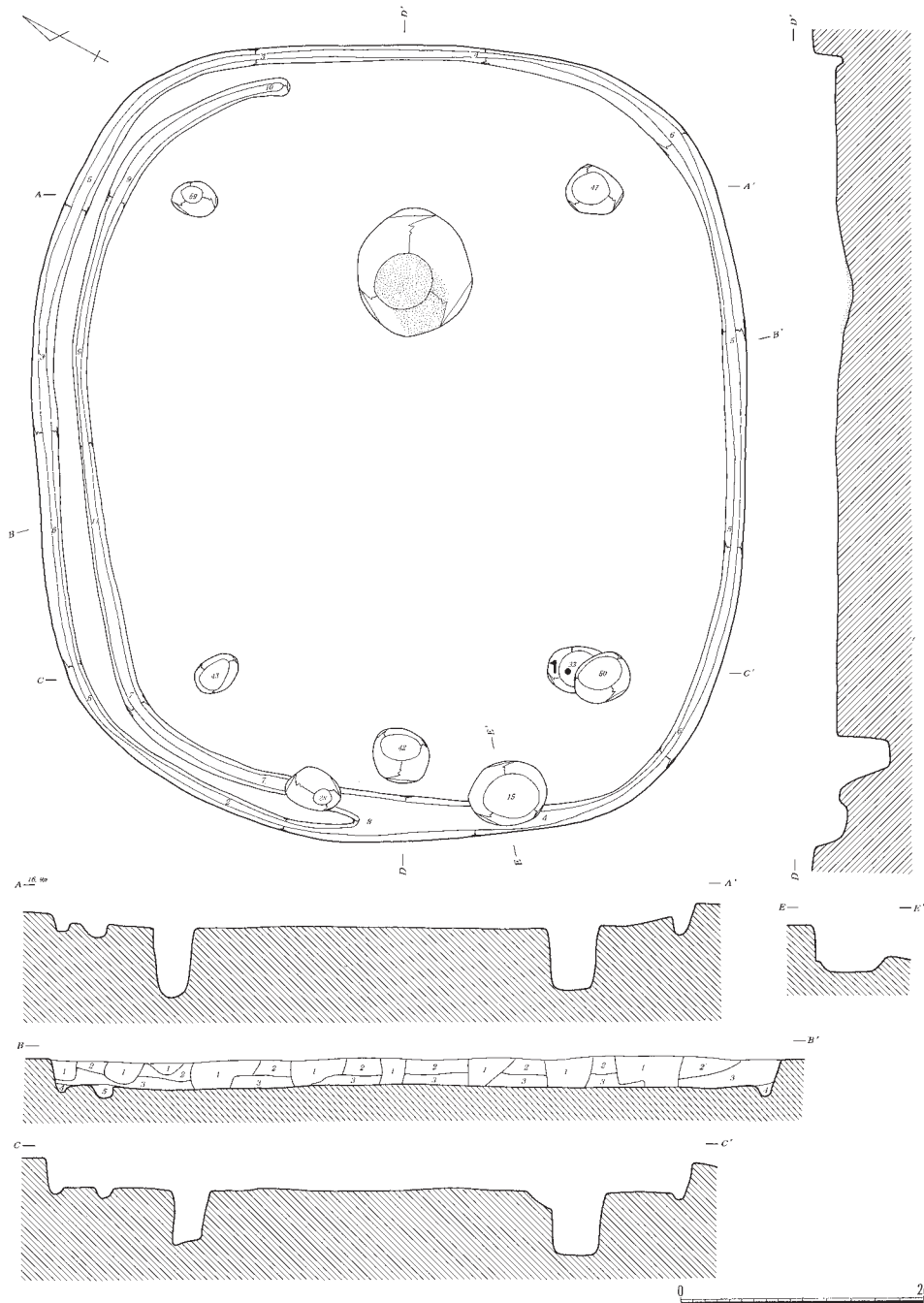
116号住居跡（第126図）

〔位置〕 18地点。

〔構造〕 117Yに切られる。（平面形）楕円形。（規模）660×584cm。（主軸方位）N-63°-E。（壁高）19~23cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12~40cm・下幅3~27cm・深さ4~11cmを測り全周する。北側は二重に巡っているため拡張されている可能性がある。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。106×93cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）西壁下中央から南に偏って位置する。63×54cmの楕円形を呈し、深さ8cmを測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。



第126図 116号住居跡 (1/60)

- 2層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土。上面はロームブロックを貼る。

〔遺物〕南西側の床面に土器片が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

116号住居跡出土遺物（第127図、第128図22～28）

壺形土器（第128図22）

22は頸部破片。内面にはR Lの単節縄文の端末結節が施され、下端には円形浮文が貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第127図1、第128図23～28）

第127図1は台付甕形土器の甕部1/2程度が残存する。第128図25・28も同一個体。体部は球状を呈し、頸部で強くくびれて、口縁部は大きく外湾する。口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は外面が灰褐色（5YR4/2）、内面がにぶい褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南コーナー寄りピット内から出土した。

第128図23・24は口頸部破片。26・27は体部破片。24は口唇部外面に刻みが施される。23・24は頸部で屈曲し、口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされる。色調は23がにぶい赤褐色（5YR5/4）、24が灰褐色（7.5YR6/2）、26・27が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。

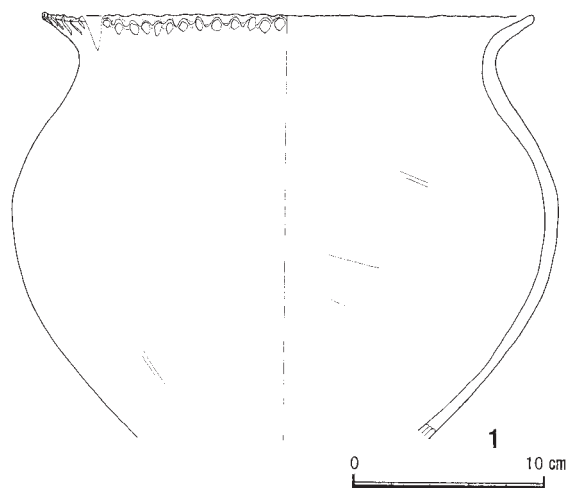
117号住居跡（第129図）

〔位置〕18地点。

〔構造〕116Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）490×440cm。（主軸方位）N-54°-E。（壁高）35～46cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅10～17cm・下幅3～8cm・深さ2～8cmを測り全周する。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。55×42cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。炉の中央に礫を検出する。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。南壁下中央から僅かに北に偏った位置の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南壁下中央から北東に偏って位置する。46×43cmの楕円形を呈し、深さ29cmを測る。

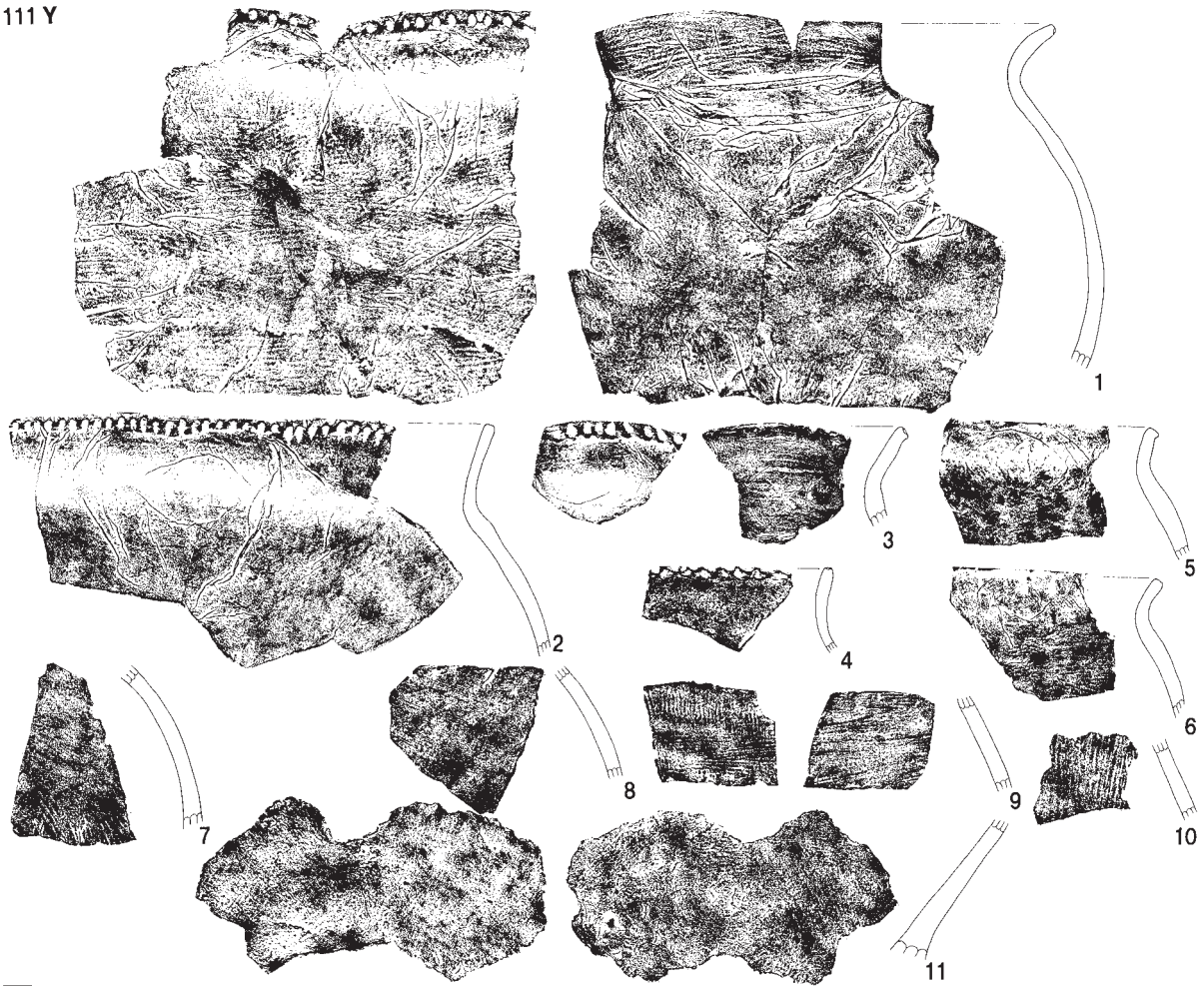
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 暗赤褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。
- 8層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。貼床充填土。

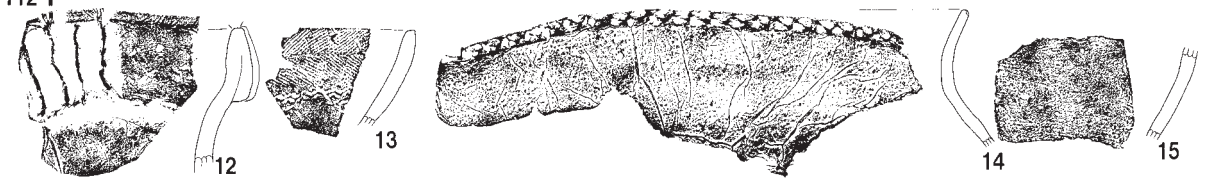


第127図 116号住居跡出土遺物（1/4）

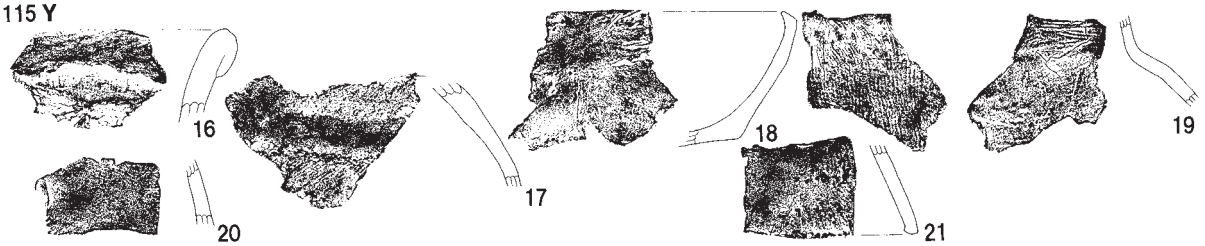
111 Y



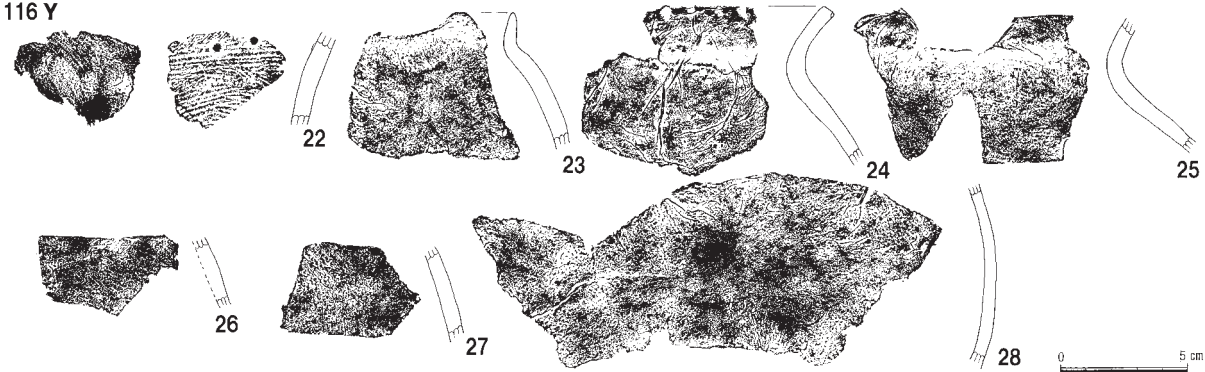
112 Y



115 Y



116 Y



第128図 111・112・115・116号住居跡出土遺物 (1/3)

〔遺物〕 覆土中から土器片を多数出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

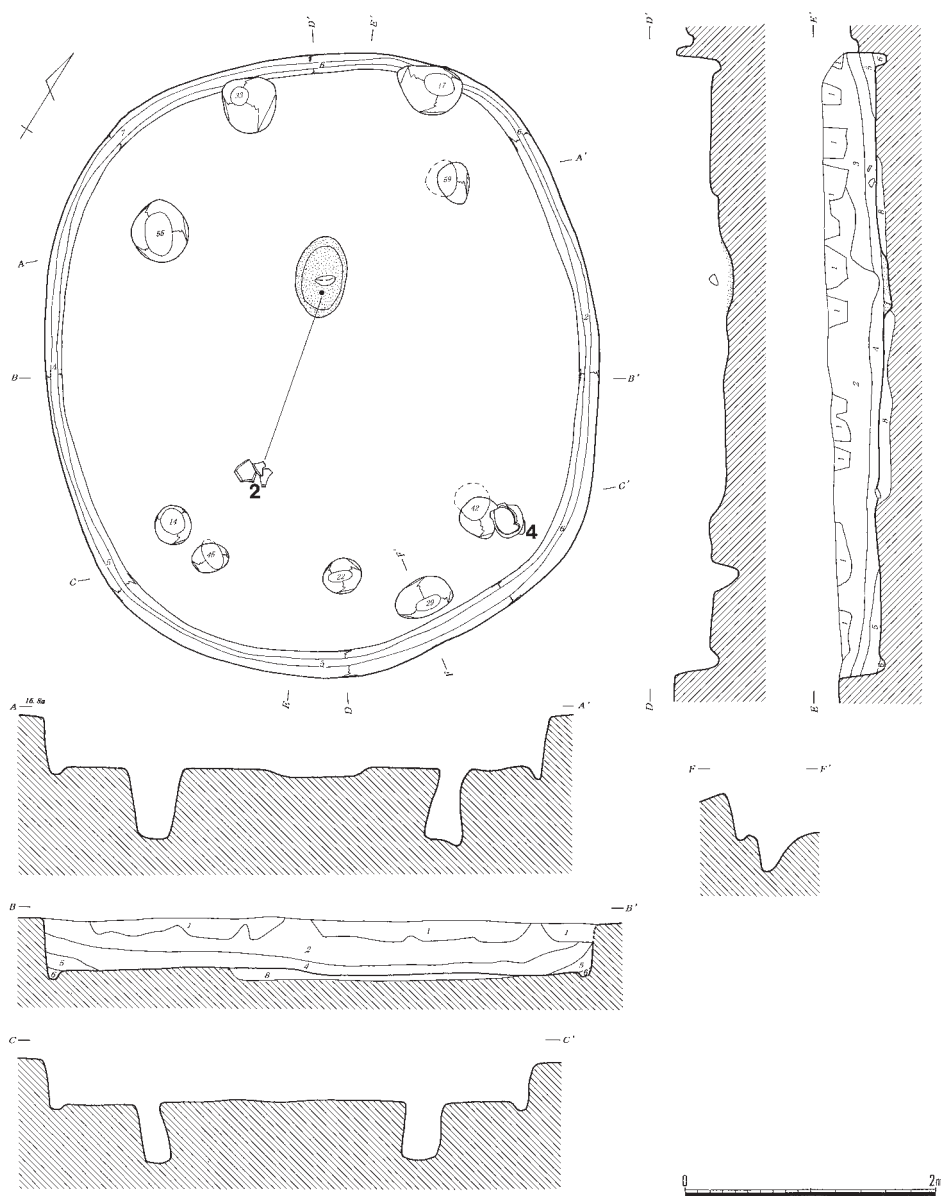
117号住居跡出土遺物（第130図、第138図1～11）

壺形土器（第130図1・2、第138図1～5）

第130図1は口頸部が1/2程度が残存する。頸部は強く屈曲し、複合口縁部は内湾しながら開く器形である。複合口縁部外面は横方向にヘラミガキされるが、ハケ目痕が残る。以下横方向にヘラミガキされるが横位のハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR5/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

2は底部を欠損する。口径15cm・器高22.2cmを測る。体部は球状を呈し、頸部は屈曲し口縁部は外反する。口唇部ヨコナデ。口縁部は内外面共にヘラミガキされる。体部は外面がヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。所々にハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。炉内部と住居跡中央から南寄りの床面上から出土した。

第138図1～3は複合口縁部破片。1は口縁部外面にRLの単節縄文を羽状に施し、棒状浮文が貼付され、下端



第129図 117号住居跡 (1/60)

には刻みが巡る。2は磨耗が激しく不明であるが、同じく口縁部外面に羽状縄文を地文とした上に棒状浮文が貼付され、下端には刻みが巡る。3は口縁部外面にLRの単節縄文を羽状に3段施文している。色調は1がにぶい黄橙色(10YR7/2)、2が浅黄橙色(7.5YR8/3)、3がにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。いずれも覆土中からの出土。

4・5は肩部破片。4はRLの単節縄文を羽状に2段施している。5は3条のS字状結節文が施され、沈線による鋸歯文で区画を作り、RLの単節縄文の羽状文が充填される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は4は灰褐色(7.5YR4/2)、5がにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器(第130図3)

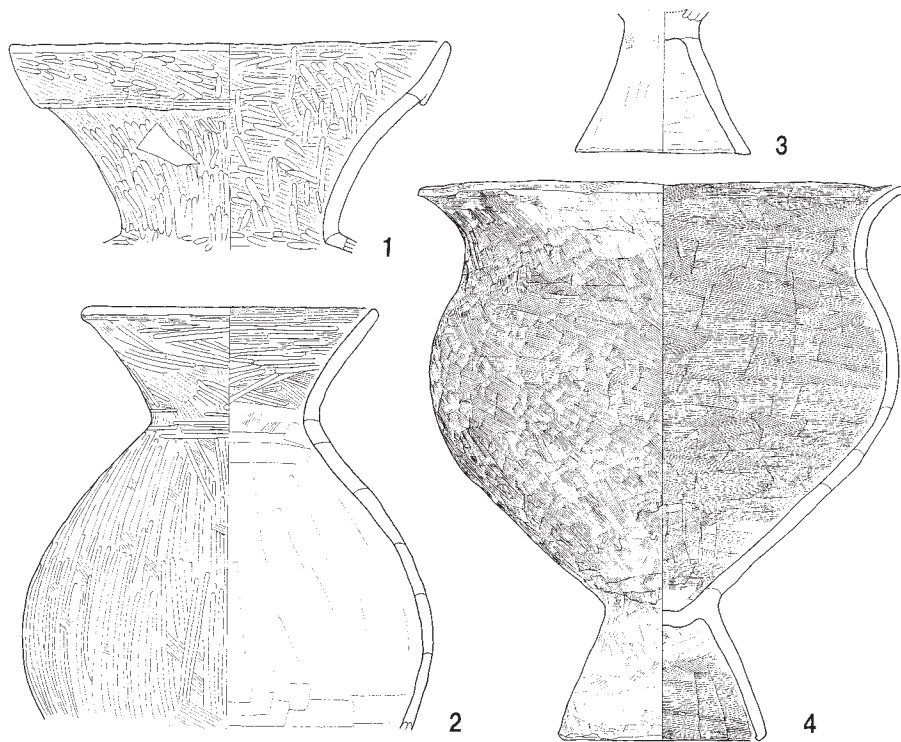
脚台部破片。裾部へかけて「ハ」字状に広がる器形である。脚台部外面は粗くヘラミガキされるが内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中から出土。

甕形土器(第130図4、第138図6~11)

第130図4は甕部2/3程度が残存する。口径25.5cm・器高29.5cm・底径11.0cmを測る。張りのある球状の体部から頸部でくびれて口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるが細密なハケ目痕が残る。甕部内面下位と、外面中位より上には炭化物の付着がみられる。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。東コーナー床面上から出土した。

第138図6~10は口縁部破片。6の口唇部外面には直径2mmの円形刺突文が2段に施され、口唇部内面には同じ工具により押捺された刻みが巡る。7は口唇部外面に棒状の工具により押捺された刻みが巡る。8~10には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は6がにぶい黄橙色(10YR7/2)、7が灰褐色(7.5YR4/2)、8が褐灰色(5YR4/1)、9がにぶい褐色(7.5YR6/3)、10がにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

11は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土



第130図 117号住居跡出土遺物(1/4)

0 10 cm

には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

118号住居跡（第131図）

〔位置〕 18地点。

〔構造〕 119Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）663×612cm。（主軸方位）N-70°-E。（壁高）1~21cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅8~24cm・下幅2~9cm・深さ3~10を測り全周する。（床面）全体に軟弱で遺存状態は不良である。（炉）住居中央から東に偏って位置する。不明×65cmの楕円形を呈する地床炉で、僅かな掘り込みをもつ。（柱穴）支柱穴は検出されなかった。西側壁に近い柱穴は入口施設であろう。（貯蔵穴）北コーナー近く。62×58cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。

〔覆土〕 耕作による攪乱が著しく詳細は不明であるが、僅かに残されている部分には、ローム粒子を多く含む暗褐色土が堆積する。

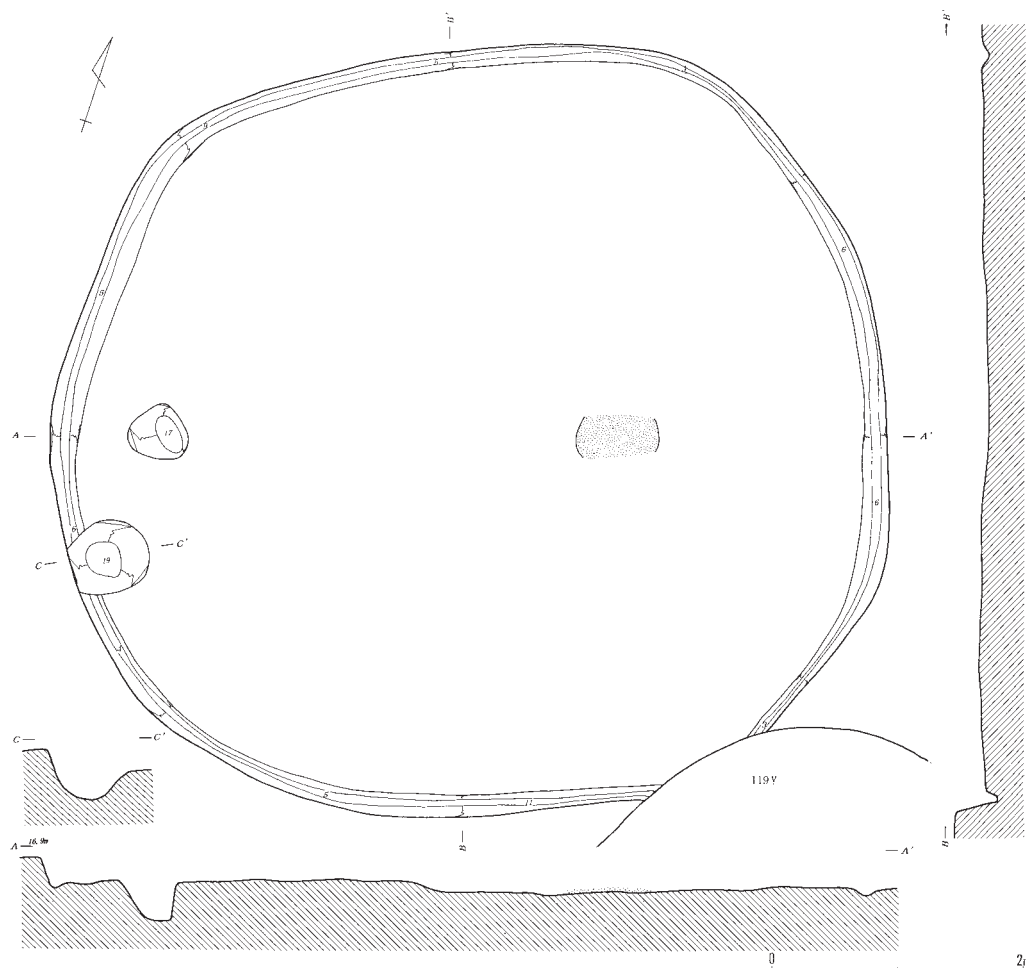
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

118号住居跡出土遺物（第138図12~15）

甕形土器（12~15）

12・13は口頸部破片。14・15は体部破片。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は12がにぶい赤褐色（5YR5/3）、13が灰黄褐色（10YR5/2）、14がにぶい褐色（7.5YR5/3）、15がにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第131図 118号住居跡 (1/60)

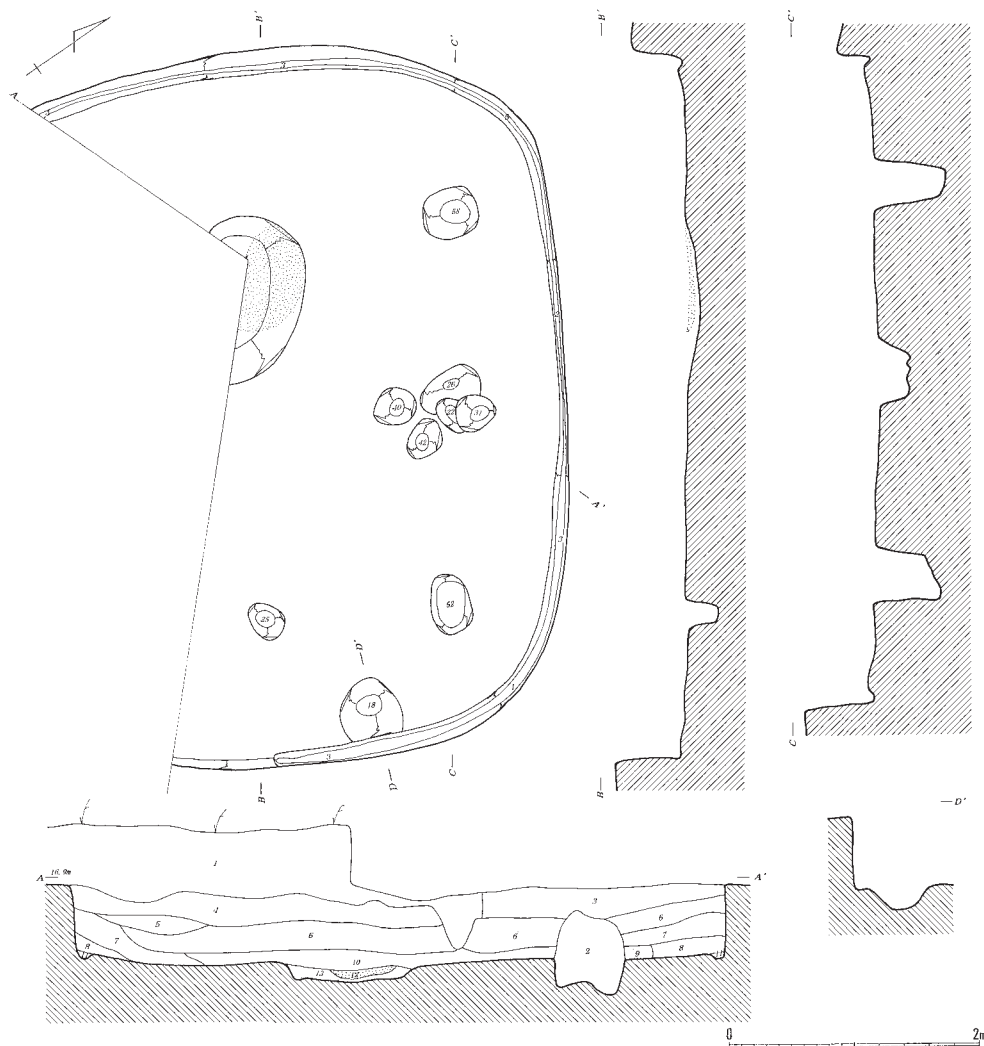
119号住居跡（第132図）

〔位置〕 18地点。

〔構造〕 南西側調査区外。118Yを切る。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×567cm。（主軸方位）N—56°—W。（壁高）50～57cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅4～21cm・下幅2～8cm・深さ1～5cmを測る。（床面）硬質ロームを床面とする。平坦で遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。不明×128cmの地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。東壁下中央からやや西に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）北東コーナー近く位置する。径50cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 7層 褐色土。ローム粒子を多く含む。



第132図 119号住居跡（1/60）

- 8層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 9層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 10層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 11層 黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 12層 暗赤褐色土。焼土ブロック。上面が炉面。
- 13層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。被熱したローム小ブロックを多く含む。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 東コーナー、ピット覆土上より土器片が多量に出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

119号住居跡出土遺物（第133図、第138図16～22）

壺形土器（第138図16～19）

16は単純口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・細砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

17～19は肩部破片。17は山形沈線文による区画内に、撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。18はR Lの単節縄文の端末結節とL Rの単節縄文の端末結節を上から順に3段羽状に施す。1段目の縄文帯内部には円形浮文が貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。19は撚りの異なる単節縄文を羽状に4段施し、4条のZ字状結節文を一段目と下端に施す。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は17がにぶい赤褐色（2.5YR4/3）、18が浅黄橙色（10YR8/3）、19がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。すべて覆土中からの出土。

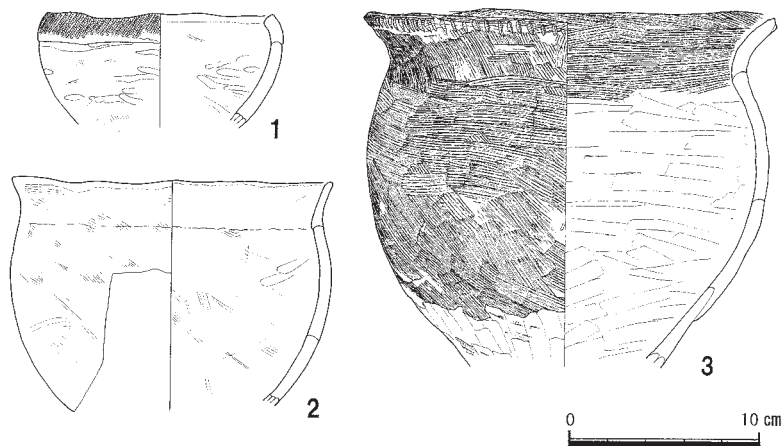
鉢形土器（第133図1・2）

1は1/3程度が残存する。推定口径12cmと小型である。複合口縁部は内湾する。口縁部にはL Rの単節縄文が施される。縄文帯以外は粗くヘラミガキされる。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。東コーナー、ピット覆土上から出土した。

2は1/4弱が残存する。推定口径17cm。張りの弱い体部から頸部で僅かに屈曲し、口縁部は外傾する器形。内外面共にヘラミガキされる。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むがきめ細かい。覆土中より出土。

甕形土器（第133図3、第138図20～22）

第133図3は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径21.5cm。球状を呈する体部から頸部で屈曲し、口縁部は外反する、口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラミガキされるが外面と口縁部



第133図 119号住居跡出土遺物（1/4）

内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色（10YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。東コーナー、ピット覆土上より破片状態で出土。

第138図20は口縁部破片、21・22は体部破片。20の口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は20が浅黄橙色（10YR8/3）、21がにぶい褐色（7.5YR6/3）、22が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

120号住居跡（第134図）

〔位置〕 18地点。

〔構造〕（平面形）隅丸正方形。（規模）363×347cm。（主軸方位）N-32°-E。（壁高）21～26cmを測り、64°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って置する。不明×30cmの地床炉で、僅かな掘り込みをもつ。（柱穴）支柱穴は検出されなかった。南壁下の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 耕作による攪乱が著しく詳細は不明であるが、上層はローム粒子を含む黒褐色土。下層は炉を多く含むにぶい黄褐色土である。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

120号住居跡出土遺物（第135図、第138図23～26）

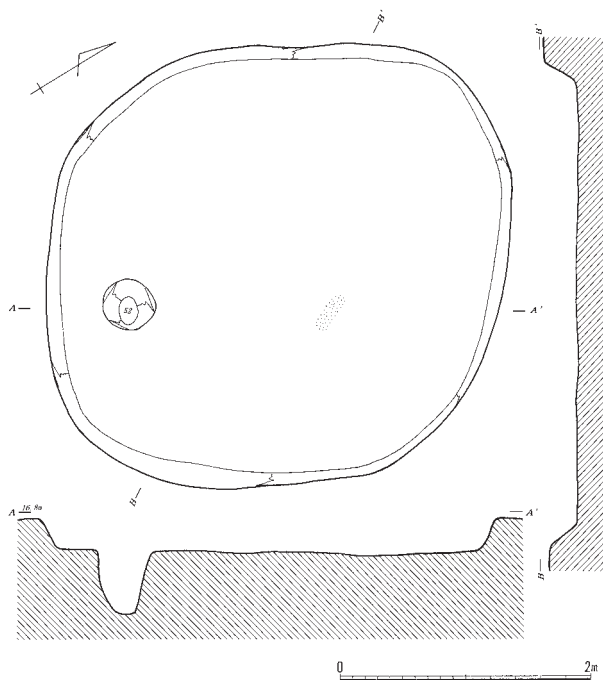
壺形土器（第135図1、第138図23）

第135図1は甕形土器とも考えられる。底部のみ残存する。底径7.3cm。平底の底部外面には隆帯を巡らしている。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。

第138図23は張りのある肩部から屈曲し、短い口縁部は外湾する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈する。胎土に粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

高坏形土器（第138図24）

脚台部破片。外面下端には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、その上端には刺突文が巡る。縄文帯内部には



第134図 120号住居跡（1/60）

第135図 120号住居跡出土遺物（1/4）

直径1cmの円形赤彩文が2個みられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR 5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器(第138図25・26)

25・26は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は25が灰褐色(5YR4/2)、26が灰褐色(7.5YR5/2)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土である。

121号住居跡(第136図)

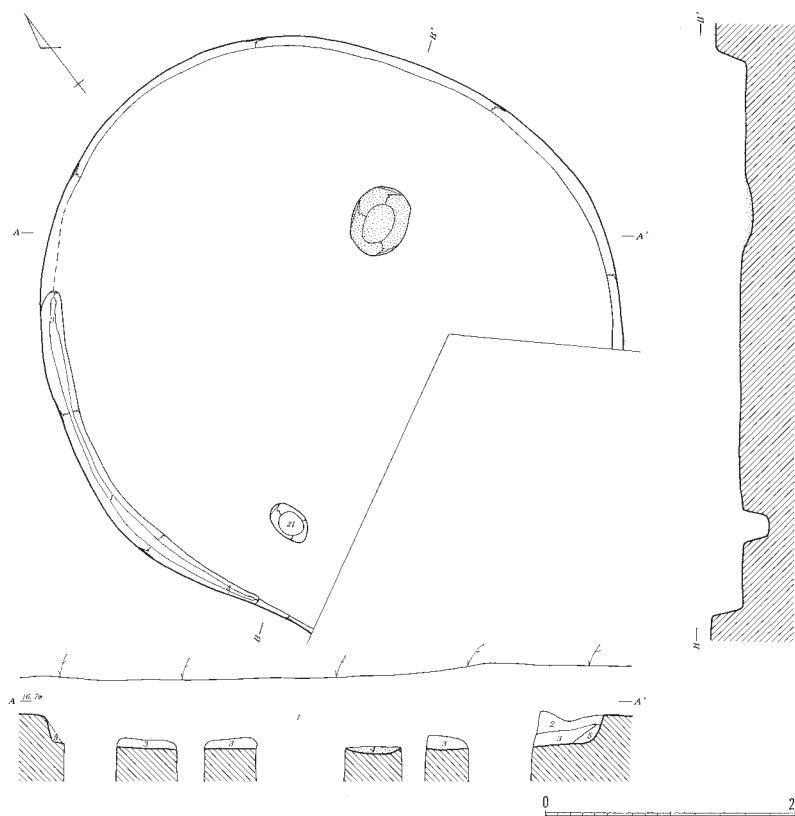
〔位置〕 18・67Ⅱ地点。

〔構造〕 南東側調査区外。(平面形) 楕円形。(規模) 不明×410cm。(主軸方位) N-64°-E。(壁高) 20~23cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅6~21cm・下幅2~7cm・深さ1~5cmを測る。東側は確認されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。55×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 主柱穴は検出されなかった。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(2.5Y3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗赤褐色土(5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。



第136図 121号住居跡(1/60)

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

121号住居跡出土遺物（第138図27～30）

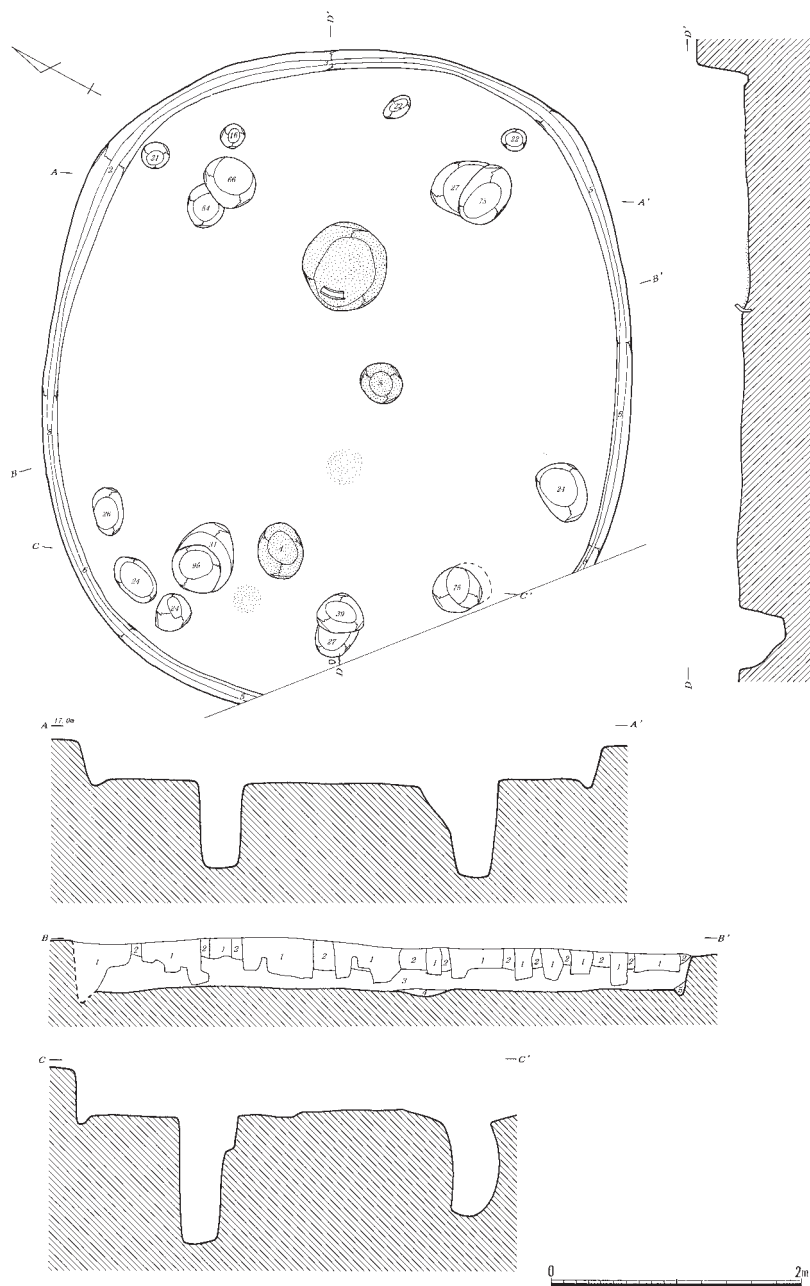
壺形土器（27・28）

27・28は口縁部破片。27は複合口縁部破片。口唇端部と口縁部には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、棒状浮文が貼付される。口縁部下端には刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。28は単純口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。頸部には沈線がみられる。色調は27がにぶい赤褐色（5YR5/4）、28はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

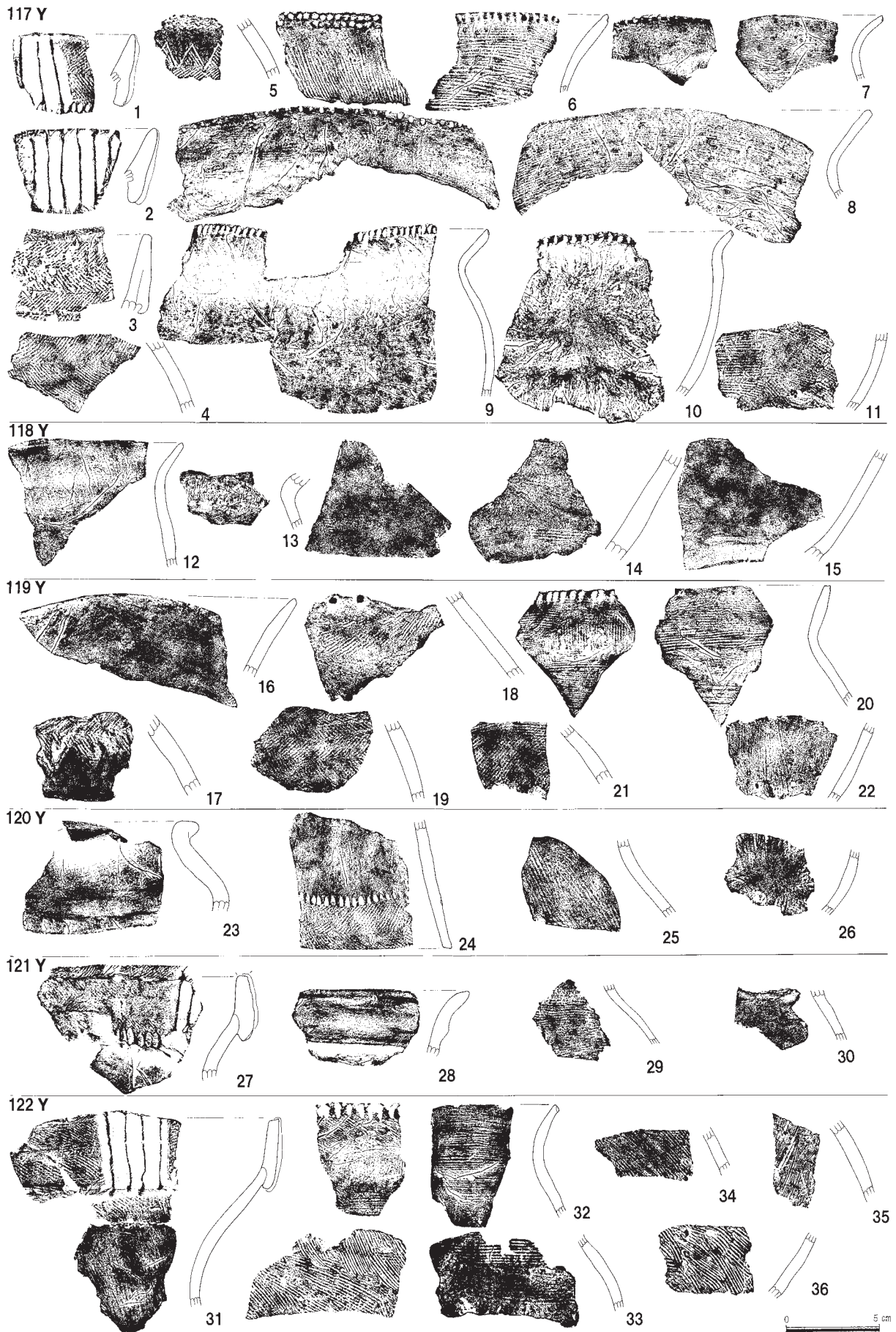
高坏形土器（30）

脚台部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（29）



第137図 122号住居跡（1/60）



第138図 117~122号住居跡出土遺物 (1/3)

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中からの出土。

122号住居跡（第137図）

〔位置〕 18地点。

〔構造〕 北西側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×468cm。（主軸方位）N—64°—E。（壁高）36～42cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅8～13cm・下幅3～7cm・深さ3～6cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。70×65cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmを測る。（柱穴）各コーナーに近い深度のある4本が主柱穴である。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 黒褐色土。被熱したローム小ブロックを多く含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 犬を模したと思われる土製品が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

122号住居跡出土遺物（第138図31～36、第539図9・10）

壺形土器（第138図31）

複合口縁部破片。口縁部外面にはLRの単節縄文が2段施され、棒状浮文が4本貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第138図第32～36）

32は口縁部破片。33～36は体部破片。32の口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は32～35が灰褐色（5YR4/2）、36がにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

動物形土製品（第539図1）

犬と推測される小型の動物形土製品。完形。長さ4.9cm・高さ3.1cm・重量10.5gを測る。手づくねで全体に非常に丁寧に作られている。頭部は長く、口は頬まできちんと刻まれている。耳部分は短く立ち耳、背は長く、巻尾で、日本犬の特徴をよく表現している。きちんと揃えられた脚部は全体に左に傾いており、足底は僅かに凹状に湾曲していることから、おそらくは土器の口唇部などに貼付されていたと推測される。背面と胸部はヘラナデされる。他は指でナデられていると推測される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には粗砂を含むがきめ細かい。住居跡南東寄りの床面上から出土した。

細形管状土錘（第539図9・10）

9は片側端部の一部を欠損する。長さ4.1cm・径1cm・穴径0.4cm・重量2.5gを測る。手づくねで作られている。外面は丁寧にナデられる。色調は橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には粗砂を含むがきめ細かい。床面上から出土した。

10は両端を欠損する。径1cm・重量2.9gを測る。手づくねで作られている。外面は丁寧にナデられる。色調は

橙色（5YR7/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。床面上から出土した。

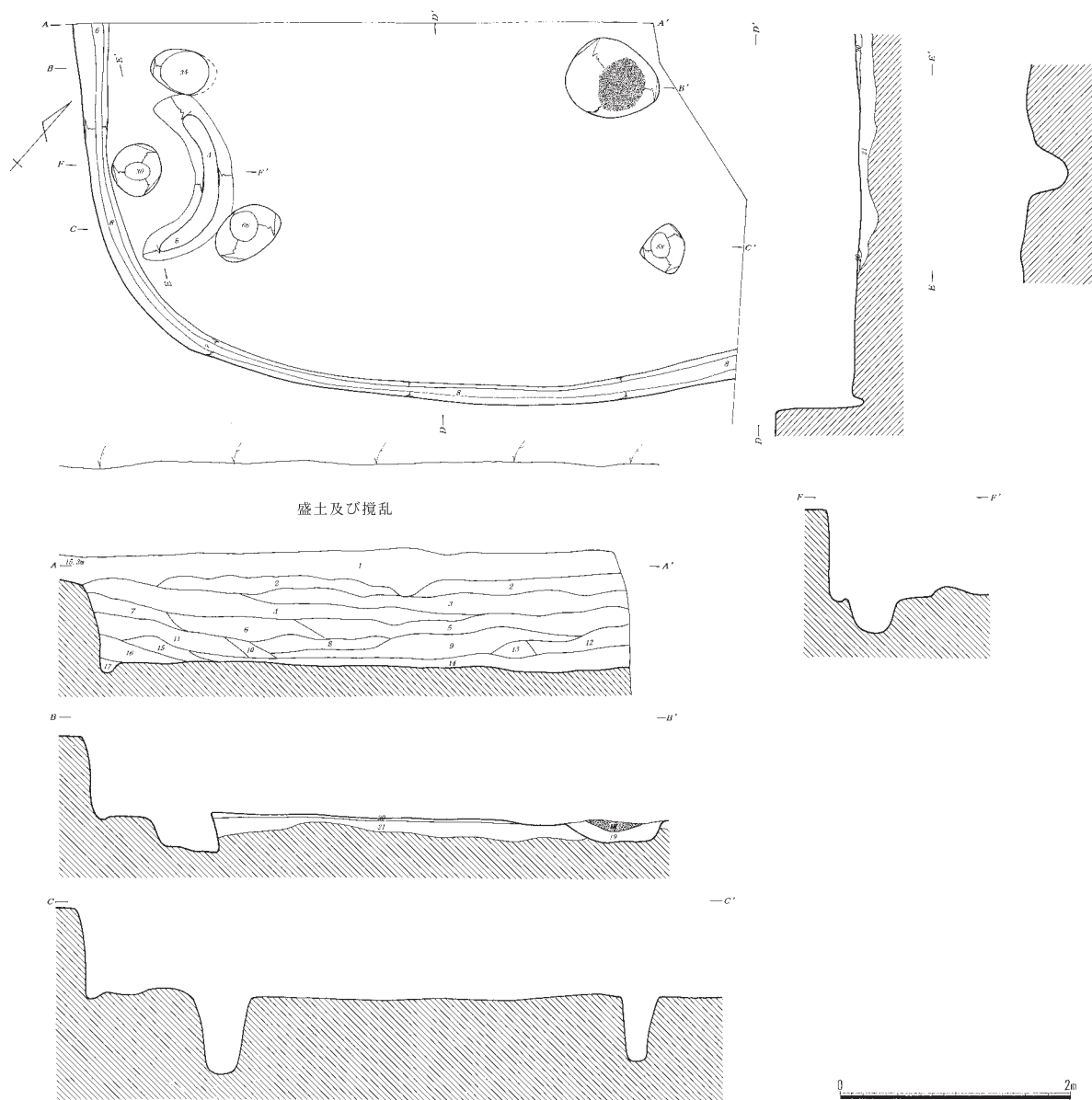
123号住居跡（第139図）

〔位置〕 8V地点。

〔構造〕 北西側及び北東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）68～83cmを測り、80°前後の角度で上がる。（壁溝）上幅12～32cm・下幅4～12cm・深さ1～8cmを測る。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居北東に偏って位置する。75×70cmの楕円形を呈する粘土火皿で深さ20cmの掘り込みをもつ。火を受けた粘土の厚みは10cm前後である。（柱穴）北及び東コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。南西壁下の1本は住居内側に傾斜をもって穿たれていて、梯子穴を想定させる。（貯蔵穴）南コーナーに位置する。径40cmの円形を呈し、深さ27cmを測る。周囲には幅30cm前後・高さ4cm前後の凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。



第139図 123号住居跡（1/60）

- 3層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 7層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 9層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 10層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 11層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 12層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 13層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 14層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 15層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 16層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 17層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 18層 黄橙色土。粘土火皿。
- 19層 黒褐色土。ローム・焼土・粘土ブロックを含む。
- 20層 にぶい黄褐色土。ロームブロック。貼床。
- 21層 黒褐色土。ロームブロックを含む。貼床充填土。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

123号住居跡出土遺物（第145図1～9）

壺形土器（2～4）

2は頸部破片。外面にはLRの単節縄文が施され、右方向からハケ状の工具で連続して押し引きされた文様が巡る。色調はにぶい褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

3・4は肩部破片。3はLRの単節縄文が施される。4はLRの単節縄文の下端に2条のZ字状結節文が施され、縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は3がにぶい黄橙色（10YR6/3）、4がにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが精選され、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（1・5～9）

1・5・6は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。色調は1が灰褐色（5YR4/2）、5が黒褐色（5YR3/1）、6がにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

7～9は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。7はにぶい褐色（7.5YR6/3）、8はにぶい赤褐色（5YR5/3）、9は灰褐色（5YR5/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。すべて覆土中からの出土。

124号住居跡（第140図）

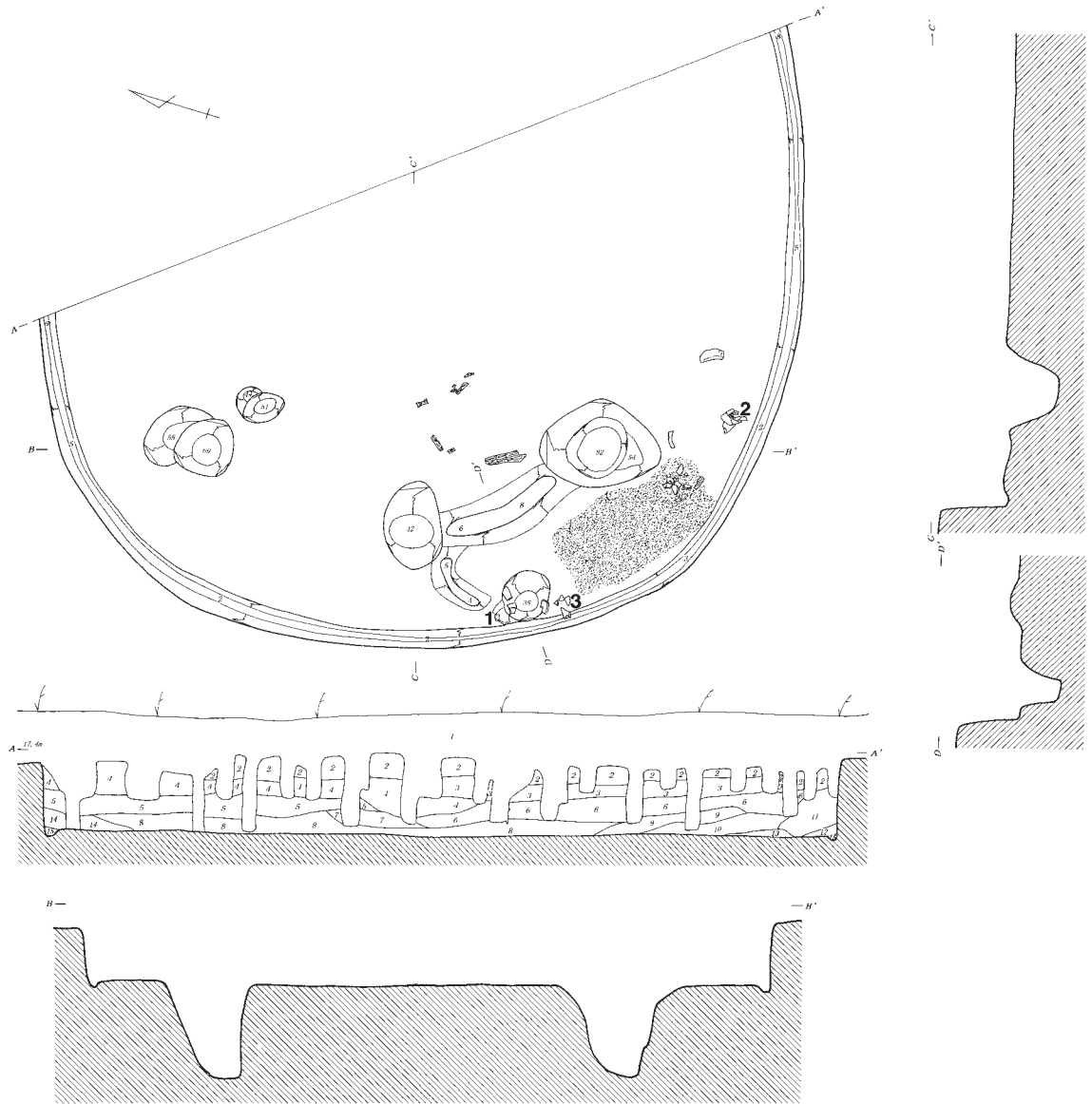
〔位置〕 21地点。

〔構造〕 東側調査区外。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×631cm。（主軸方位）N-65°-E。（壁高）54～59cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12～20cm・下幅3～11cm・深さ2～7cmを測り全周すると

思われる。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 西及び南コーナーに近い2本が主柱穴と思われる。西壁下中央から僅かに東に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 西壁下中央から南に偏って位置する。50×45cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。上幅38cm前後・高さ6～8cm前後鍵状の凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。
- 6層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 8層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 9層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。



第140図 124号住居跡 (1/60)

10層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

11層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

12層 暗褐色土。ロームブロックを含む。

13層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

14層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

15層 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。

南西コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 壁際に沿って土器片を出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 焼失家屋と思われる。

124号住居跡出土遺物（第141図、第145図10～21）

壺形土器（第141図1～3、第145図10～15）

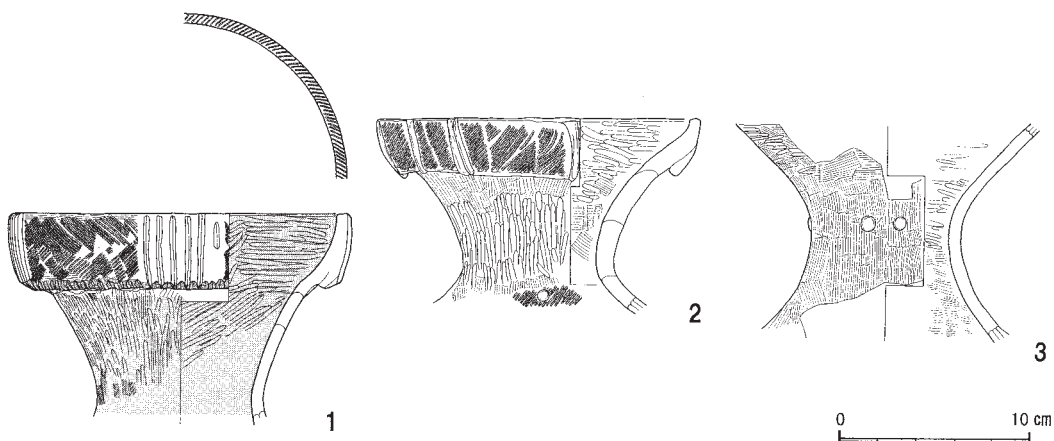
第141図1は口縁部のみ残存。口径17.7cmを測る。口唇端部と口縁部には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、6本一組の棒状浮文が貼付される。口縁部下端には、柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は外面がにぶい赤褐色（2.5YR4/4）、内面が赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南西貯蔵穴側の床面上から出土した。

2は口頸部1/2程度が残存する。推定口径17cm。頸部は強く屈曲し、口縁部にかけて外反する。複合口縁部はやや受け口状を呈する。口縁部外面にはL Rの単節縄文が施され、棒状浮文が貼付される。色調は外面が橙色（5YR6/4）、内面は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー壁際床面上から出土した。

3は頸部1/2程度が残存する。頸部はくびれて口縁部は外反する。頸部外面には2個一組の円形浮文が施される。内外面共に粗くヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。貯蔵穴南側床面上から出土した。

第145図10～12は口縁部破片。10・11の口縁部外面にはL Rの単節縄文を施し、棒状浮文を貼付する。縄文帯以外は内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。12は口唇端部と内面に撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。縄文帯内部には円形赤彩文が施される。いずれも色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。10は南コーナー、11は南寄り床面上、12は覆土中からの出土。

13～15は肩部破片。13はR Lの単節縄文が施される。14が撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。15はR Lの



第141図 124号住居跡出土遺物（1/4）

単節縄文の端末結節が施される。色調は13がにぶい赤褐色（5YR5/4）、14がにぶい褐色（7.5YR6/3）、15が褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。13・15は貯蔵穴そばから、14は床面上から出土した。

甕形土器（第145図16～21）

16～20は体部破片。21は台付甕形土器の脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は16が褐灰色（7.5YR4/1）、17～21がにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。

125号住居跡（第142図）

〔位置〕 7V地点。

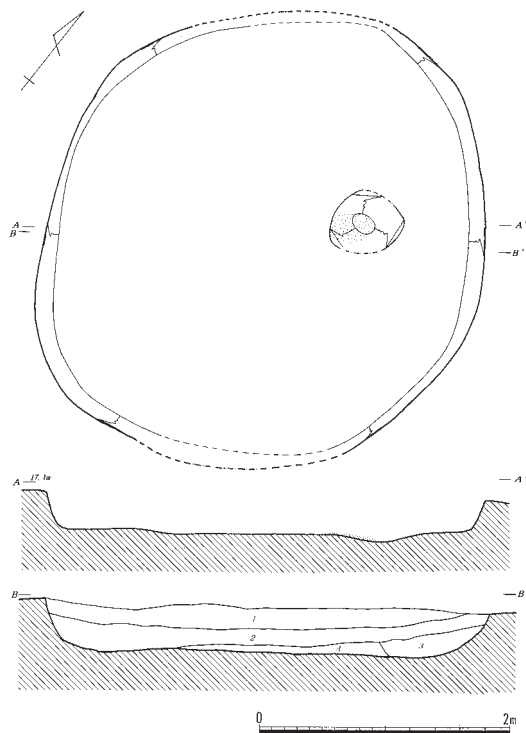
〔構造〕 北側と南側は攪乱で破壊されている。（平面形）楕円形。（規模）不明×350cm。（主軸方位）N-62°-E。（壁高）20～26cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）大部分が攪乱で破壊されているが、一部硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。55×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第142図 125号住居跡 (1/60)

126号住居跡（第143図）

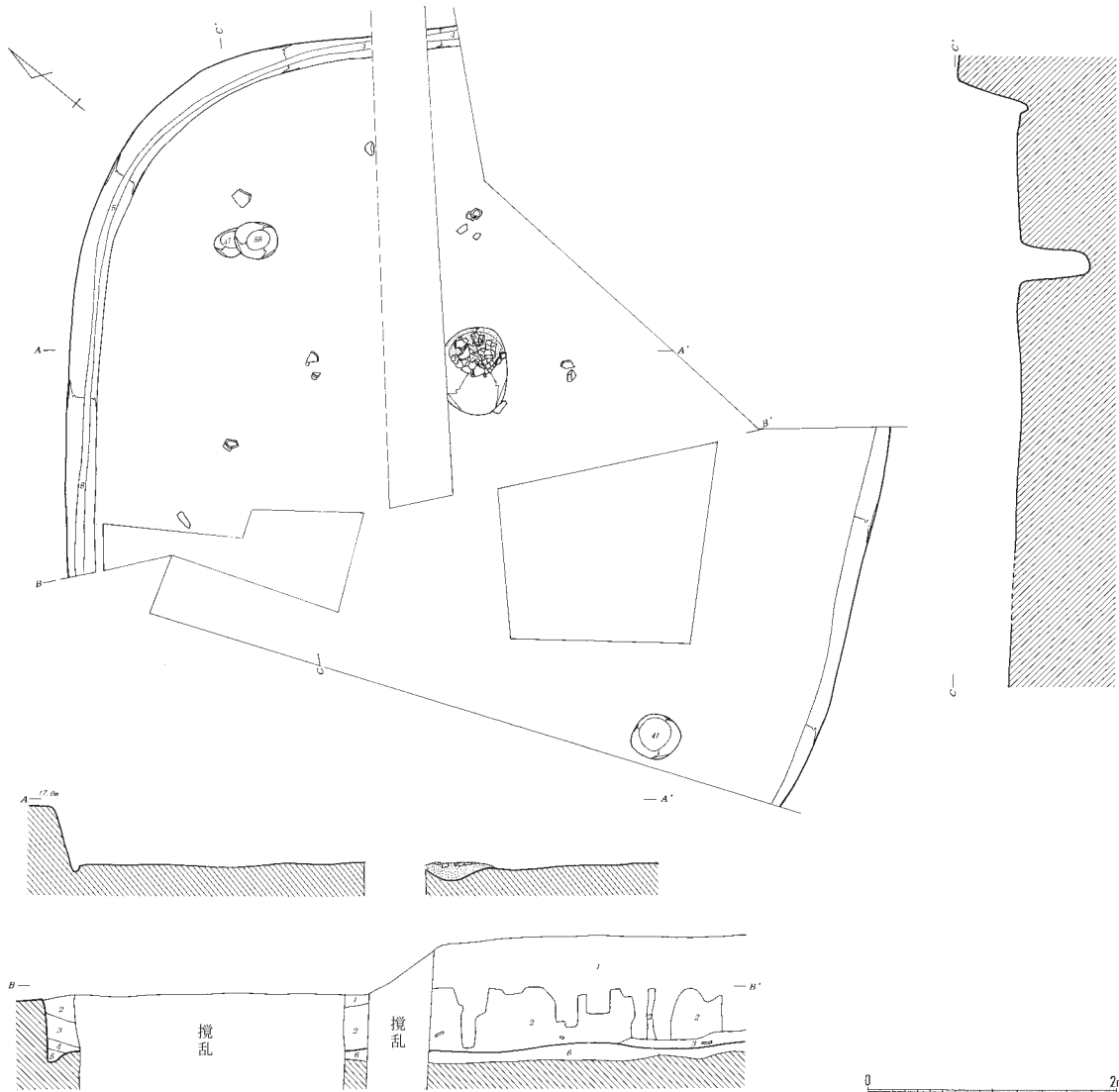
〔位置〕 7 V・25 II 地点。

〔構造〕 東・南西側調査区外。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×655cm。（主軸方位）N-55°-E。（壁高）42~48cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅16~26cm・下幅4~8cm・深さ3~6cmを測る。（床面）硬質ロームを床面とする。平坦で遺存状態は良好である。北西コーナーに硬化面を認める。（炉）住居北東に偏って位置する。不明×37cmの楕円形を呈する粘土火皿で、深さ15cmの掘り込みをもつ。粘土は2~5cmの厚みをもつ。（柱穴）北及び南コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中や床面上から土器片が比較的多く出土した。



第143図 126号住居跡 (1/60)

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

126号住居跡出土遺物（第144図、第145図22～36）

壺形土器（第144図1、第145図22・23・27・28）

第144図1は口頸部を欠損する小型の壺形土器。底径4.5cmを測る。粗く削られた底部から偏りの無い球形の体部を作出する。肩部文様帯は上から3条のS字状結節文が3段施され、2段目と3段目の間にはLRの単節縄文が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。内面はヨコナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）、赤彩部はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

第145図22・23は複合口縁部破片。22は口縁部に棒状浮文が施される。23は口縁部に撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、内部には直径約1cmの円形赤彩文がみられる。共に縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は22が浅黄橙色（7.5YR8/3）、23がにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。いずれも胎土には礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

27・28は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、境目にはZ字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。いずれも色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

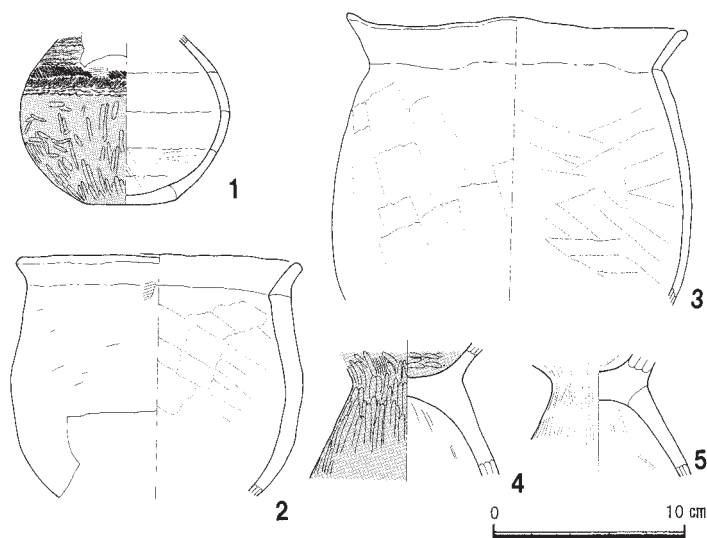
鉢形土器（第144図4、第145図29～31）

第144図4は脚台部破片。脚裾部へかけて直線的に広がる器形である。坏部内面と外面はヘラミガキされ赤彩される。脚台部内面はヘラナデ。色調はにぶい黄橙色（10YR5/3）、赤彩部はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。

第145図29～31は口縁部破片。29・30は同一個体で口縁部にはLRの単節縄文が施され、下端には刻みが巡る。縄文帯内部には直径1cmの円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。31は内外面共にヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。内面には赤彩痕が残る。色調は29が褐灰色（7.5YR4/1）、30がにぶい赤褐色（2.5YR5/3）、31がにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

甕形土器（第144図2・3・5、第145図24～26・32～36）

第144図2は甕部1/3程度が残存する。推定口径12.5cm。張りのない体部から立ち上がり、頸部は屈曲し、短い口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされる。色調は外面がにぶい赤褐色（5YR5/3）、内面が褐灰色



第144図 126号住居跡出土遺物（1/4）

(7.5YR4/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

3は甕部1/4程度が残存する。推定口径約18cm。最大径を体部中位にもち頸部は屈曲し、口縁部は外反する器形。口唇部は指などで押さえられているのであろうか、指頭痕が明瞭に残る。内外面共にヘラナデされる。色調は外面褐灰色(5YR4/1)、内面はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

5は台付甕形土器の脚台部。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

第145図24～26は口頸部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。特に24は受け口状を呈している。口縁部内外面共にヘラミガキされたように強くナデされている。色調は24・25が灰褐色(7.5YR4/2)、26はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈する、いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

32～36は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は32が黒褐色(5YR3/4)、33・36が灰褐色(7.5YR4/2)、34がにぶい赤褐色(5YR5/4)、35がにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土。

127号住居跡(第146図)

〔位置〕 7V地点。

〔構造〕 南西側調査区外。8Hに切られる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明。(主軸方位) N-48°-W。(壁高) 46～52cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅13～23cm・下幅5～11cm・深さ4cm・深さ6cmを測る。(柱穴) 検出された4本が支柱穴である。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 8Hに切られているため詳細は不明であるが、上層はローム粒子を多く含む明褐色土。下層はローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む褐色土である。

〔遺物〕 住居跡中央付近の床面上と覆土中から出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

127号住居跡出土遺物(第147図、第159図1～9)

壺形土器(第159図1～4・6)

1は口縁部破片。口唇端部にはRLの単節縄文が施され、口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、棒状浮文が貼付される。口縁部下端には刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は灰褐色(10YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

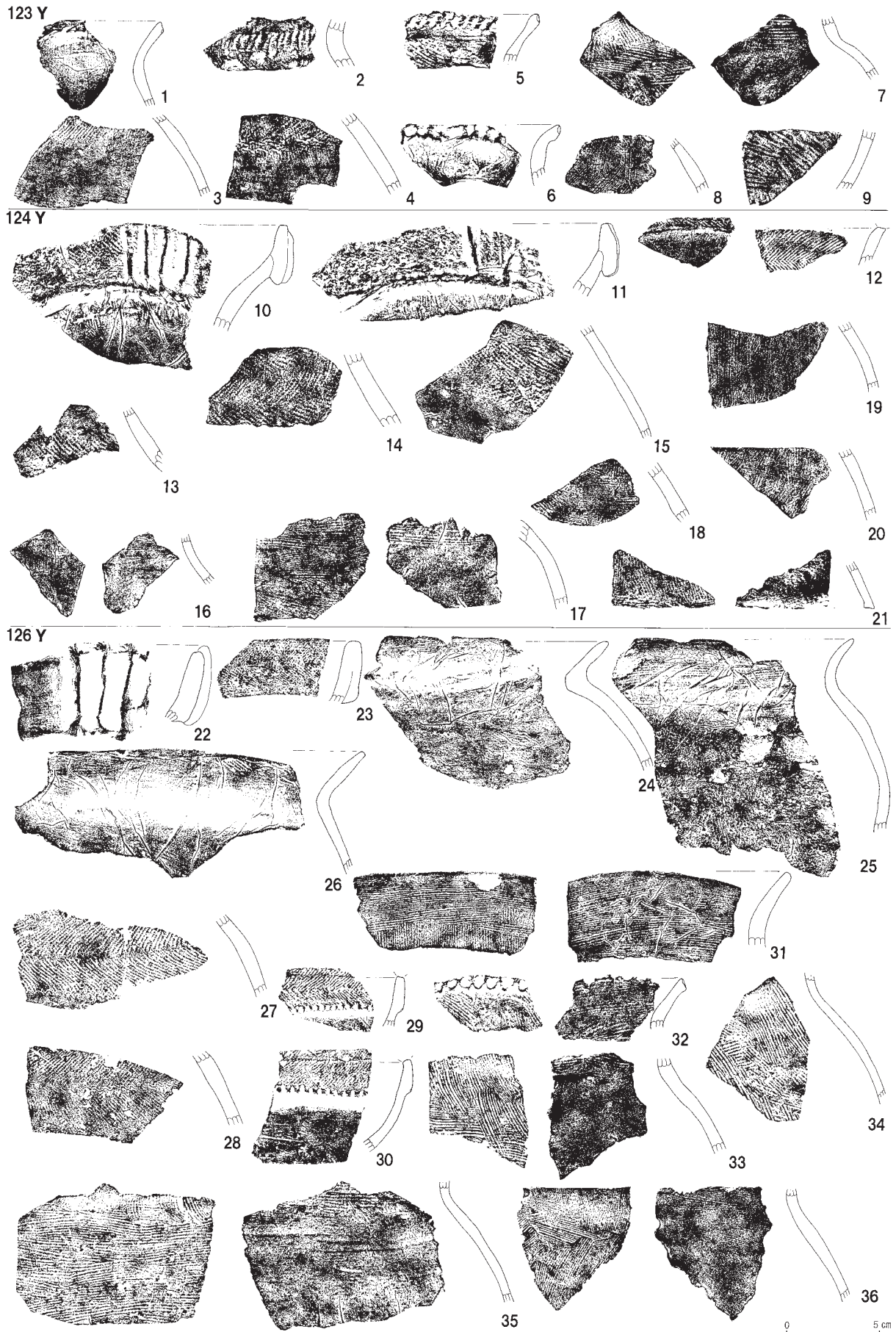
2～4は体部破片。2は肩部にLRの単節縄文が羽状に施され、下端には2条のS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。3は肩部にLRの単節縄文が施され、縄文帯内部には直径約1cmの円形赤彩文がみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。4はRLの単節縄文が2段に施され、境目にはS字状結節文が施される。6はRLの単節縄文が施され、下端にはS字状結節文が施される。色調は2・3がにぶい赤褐色(2.5YR4/3)、4が黒褐色(5YR3/1)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。いずれも覆土中からの出土。

鉢形土器(第159図7・8)

いずれも口縁部破片。7は内外面共にヘラミガキされ赤彩される。8は内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。いずれも色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。いずれも覆土中からの出土。

甕形土器(第147図1、第159図5・9)

第147図1は小型でほぼ完形。口径14cm・底径8.3cm・器高16cmを呈する。球状を呈する体部から頸部で屈曲し、



第145図 123・124・126号住居跡出土遺物 (1/3)

短い口縁部は外反する。脚台部は裾部へかけて内湾気味に開く器形である。全体に粗雑な造りである。口唇部には粘土のはみ出しがみられる。内外面共にヘラナデされるが外面には縦位のハケ目痕が残る。脚端部には粘土のはみ出しがみられる。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

第159図5は体部破片、9は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は5が灰褐色（7.5YR4/2）、9がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。共に覆土中の出土。

128号住居跡（第148図）

〔位置〕 22地点。

〔構造〕 北西側調査区外。（平面形）楕円形か。（規模）不明×400cm。（主軸方位）N-30°-W。（壁高）12~17cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱で遺存状態は不良であるが、一部硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。60×48cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。

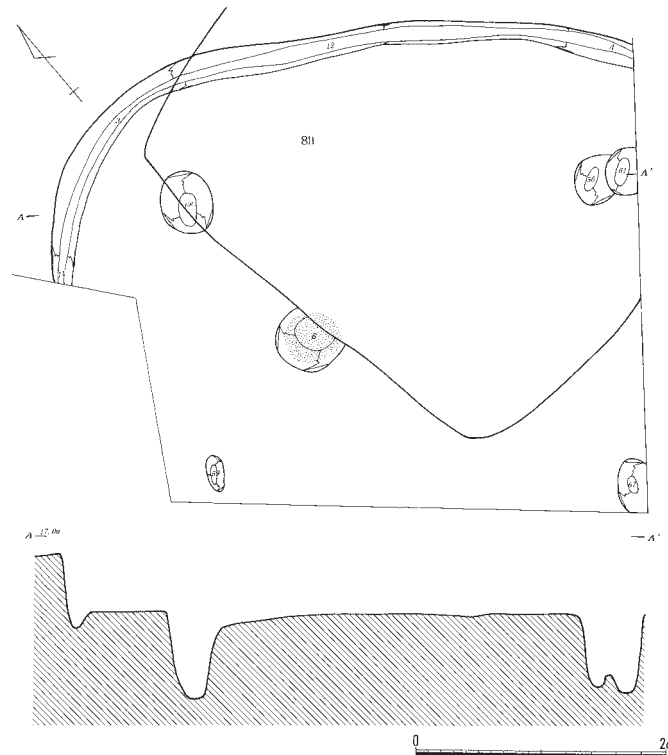
〔遺物〕 床面上に土器片が多量に出土した。

〔時期〕 弥生時代後期後半。

128号住居跡出土遺物（第149図、第159図10~13）

壺形土器（第149図1・2）

1は底部と体部の約1/3程度が残存する。底径8.5cm。肩部にはR Lの単節縄文を羽状に施し、文様帯下端には3



第146図 127号住居跡（1/60）

条のS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩されるが、磨耗が激しく不明瞭。内面はヘラナデされる。色調は橙色（7.5YR7/6）、赤彩部はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南西壁寄りの床面上から出土した。

2は広口壺で1/2程度が残存する。底径9.5cm。平底の底部から立ち上がり下膨れの体部を作出する。頸部はくびれて口縁部は広がる器形である。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から南西寄り床面上から出土した。

甕形土器（第149図3、第159図10～13）

第149図3は甕部2/3程度が欠損する。推定口径19cm。口唇部外面には棒状の工具により浅く押捺された刻みが巡る。頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外反する。体部はあまり張らずにすぼまる器形である。脚台部は「ハ」字状に広がる。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。住居跡中央から南寄り床面上から出土した。

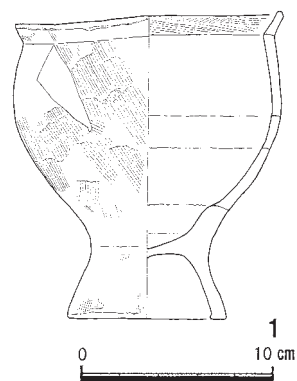
第159図10・11は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。10は内面にハケ目痕が残る。色調は10が灰褐色（5YR4/2）、11はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。特に11には白色粒子が多い。共に覆土中からの出土。

12・13は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。共に色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。特に13には白色粒子が多い。共に覆土中から出土した

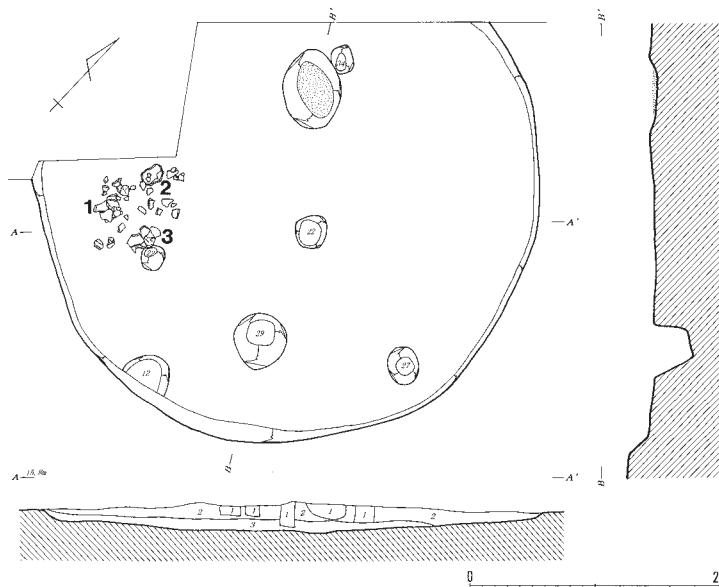
129号住居跡（第150図）

〔位置〕 24 I 地点。

〔構造〕 183Dに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）392×364cm。（主軸方位）N-33°-W。（壁高）1～23cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11～19cm・下幅4～17cm・深さ1～9cmを測り全周すると思われる。（床面）攪乱により破壊されている部分もあるが、遺存している部分では良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。58×43cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナー



第147図 127号住居跡出土遺物（1/4）



第148図 128号住居跡（1/60）

に近い4本が主柱穴である。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 褐色土。ロームブロックを含む。貼床充填土。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

130号住居跡 (第150図)

〔位置〕 24 I 地点。

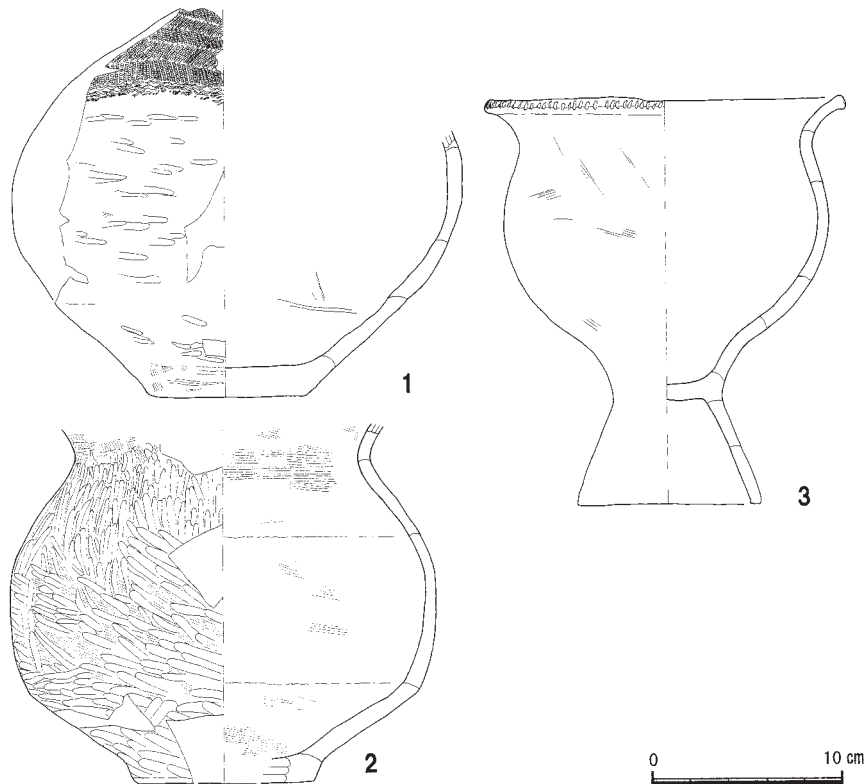
〔構造〕 南東側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明×285cm。(主軸方位) N-40°-W。(壁高) 5~29cmを測り、80°の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅15~18cm・下幅7cm前後・深さ2~18cmを測る。北側を除き遺存している部分では全周する。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。径50cmの円形を呈する地床炉で、深さ7cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 6層 褐色土。ローム粒子・ロームブロックを含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第149図 128号住居跡出土遺物 (1/4)

130号住居跡出土遺物 (第159図14~15)

壺形土器 (14)

体部破片。外面はヘラミガキされる。色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。覆土中から出土。

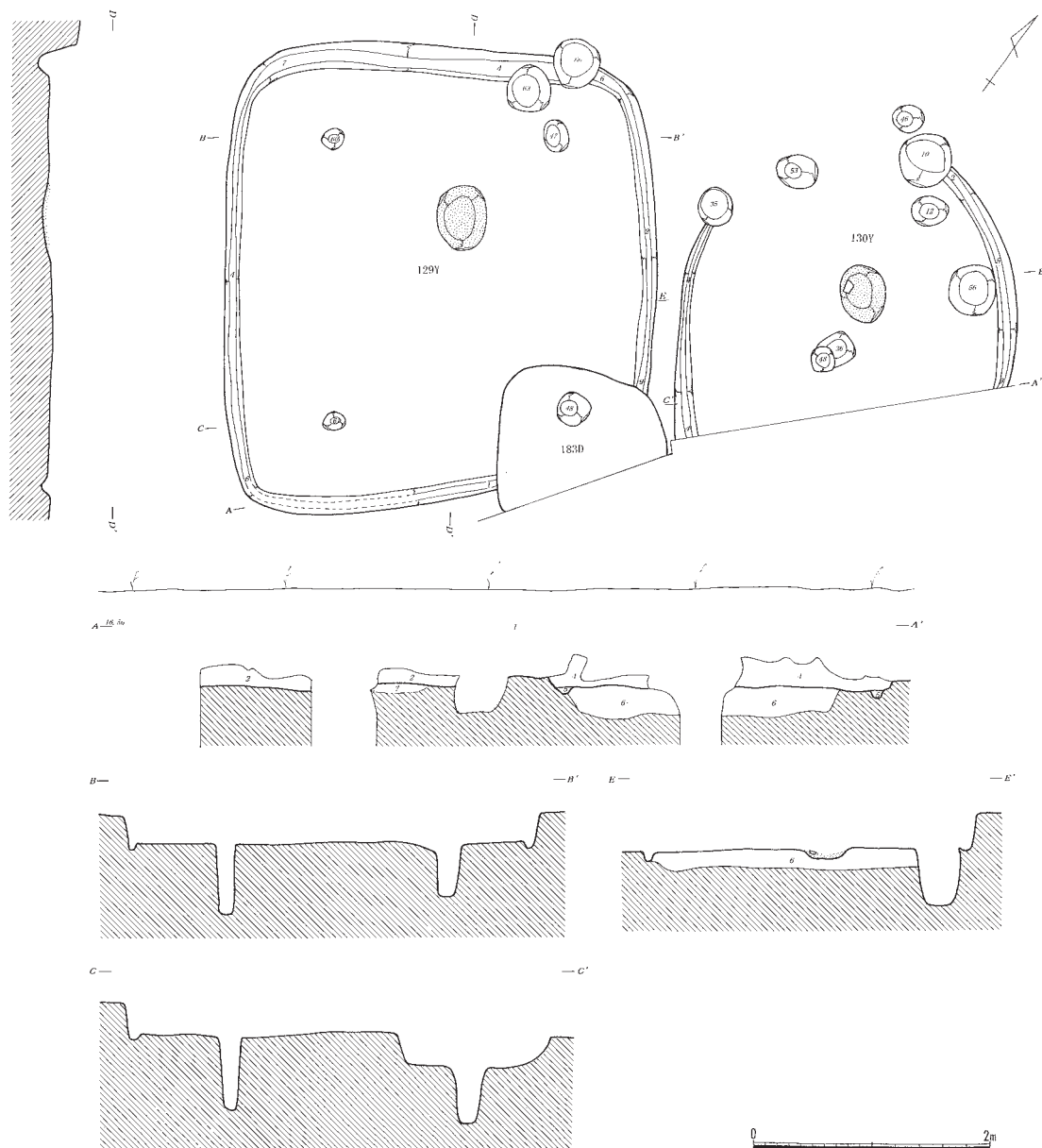
甕形土器 (15)

脚台部破片。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。覆土中から出土した。

134号住居跡 (第151図)

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 不整正方形。(規模) 459×450cm。(主軸方位) N-45°-W。(壁高) 1~13cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅13~24cm・下幅5~10cm・深さ3cm前後を測る。東側は攪乱で破壊されている



第150図 129・130号住居跡 (1/60)

る。(床面) 遺存状態は不良である。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。55×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されたピット後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 耕作による攪乱が著しく詳細は不明であるが、ローム粒子を多く含む褐色土を基調とする。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

134号住居跡出土遺物 (第152図、第159図16~21)

壺形土器 (第159図16)

16は単純口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

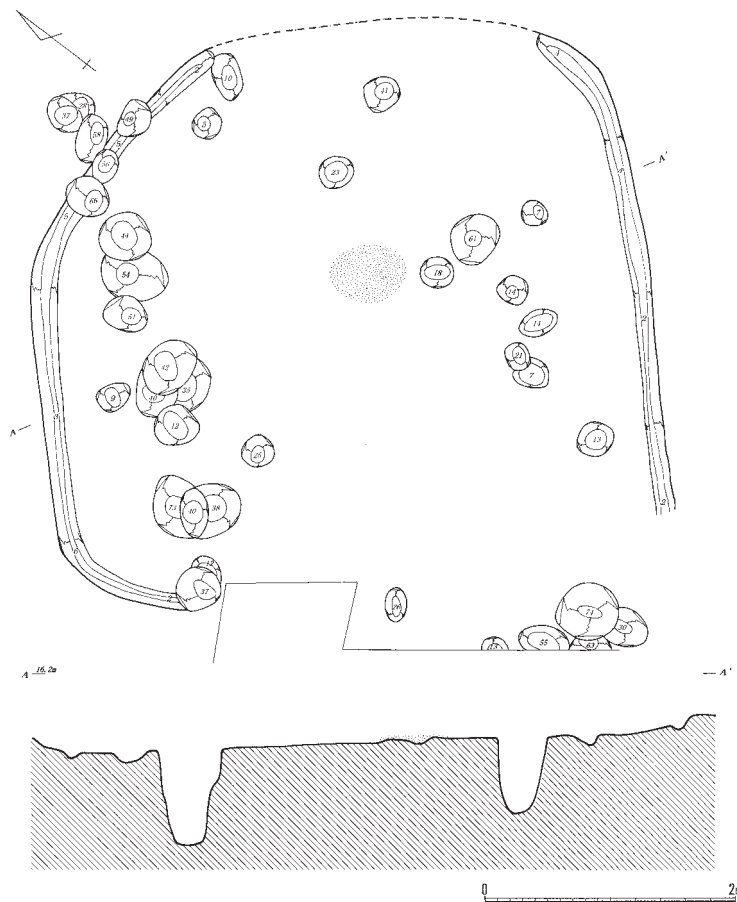
台付甕形土器 (第152図1、第159図17~21)

第152図1は脚台部のみ残存する。裾部径9.4cm。脚裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

第159図17~19は同一個体の甕部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

20・21は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には幅広で不規則なハケ目痕が残る。色調は20が灰褐色(7.5YR4/2)、21がにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中から出土した。



第151図 134号住居跡 (1/60)

135号住居跡（第153図）

〔位置〕 23 I 地点。

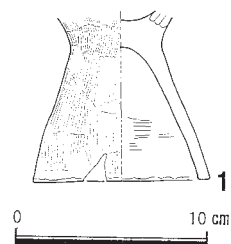
〔構造〕 南西側調査区外。北東側は耕作により破壊されている。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）N—48°—E。（壁高）11～18cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）攪乱で著しく破壊されているが、炉の周辺に硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第152図 134号住居跡出土遺物（1/4）

136号住居跡（第154図）

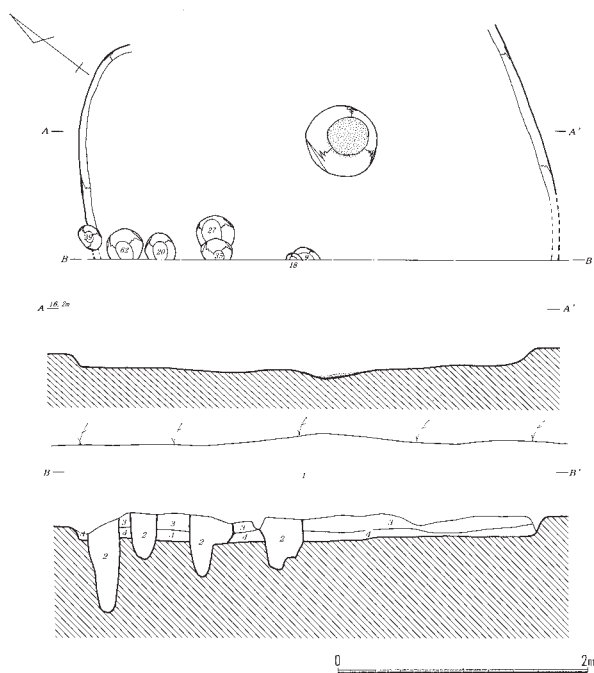
〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸正方形。（規模）300×297cm。（主軸方位）N—43°—W。（壁高）8～12cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。55×42cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。炉の中央に土器を配置している。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第153図 135号住居跡（1/60）

136号住居跡出土遺物（第155図、第159図22・23）

高坏形土器（第155図1）

台付鉢形土器か。脚台部と坏部下半のみ残存する。坏部は深めで口縁部は開く器形である。接合部外面には幅広の凸帯が巡る。坏部内外面共にヘラミガキされ赤彩される。脚台部外面は縦方向にヘラミガキされ赤彩されるが、僅かにハケ目痕が残る。脚部内面はヘラナデされるが、下半にはハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。炉内部から出土した。

甕形土器（第159図22・23）

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。全面に炭化物の付着が顕著である。いずれも色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

137号住居跡（第156図）

〔位置〕 23 I 地点。

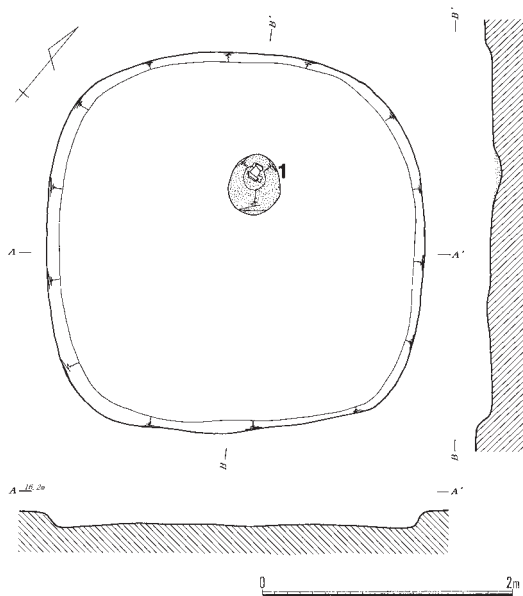
〔構造〕 東側を残し大部分調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）23～28cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅21～30cm・下幅5～7cm・深さ16cm前後を測る。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。（炉）110×63cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ13cmの掘り込みをもつ。掘り込み内側には土器を埋設している。東側に礫を配置している。（柱穴）検出された2本が支柱穴の一部か。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

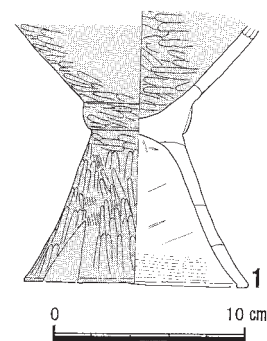
- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第154図 136号住居跡（1/60）



第155図 136号住居跡出土遺物（1/4）

137号住居跡出土遺物（第159図24～33）

壺形土器（第159図24～28）

24・25は単純口縁部破片。24は直立気味に広がる器形で、内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。25は口唇部内外面共にヨコナデされる。以下ヘラミガキされる。色調は24がにぶい橙色（7.5YR7/3）、25がにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

26・27は肩部破片。26は9本一単位の横線文と櫛描波状文が施される。27は10本一単位の横線文が2段に施され、下端には同じ工具による刺突文が施される。文様帯以外はヘラミガキされる。共に色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

28は体部破片。外面はヘラミガキされ赤彩される。底部は突出していると推測される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂含む。覆土中の出土。

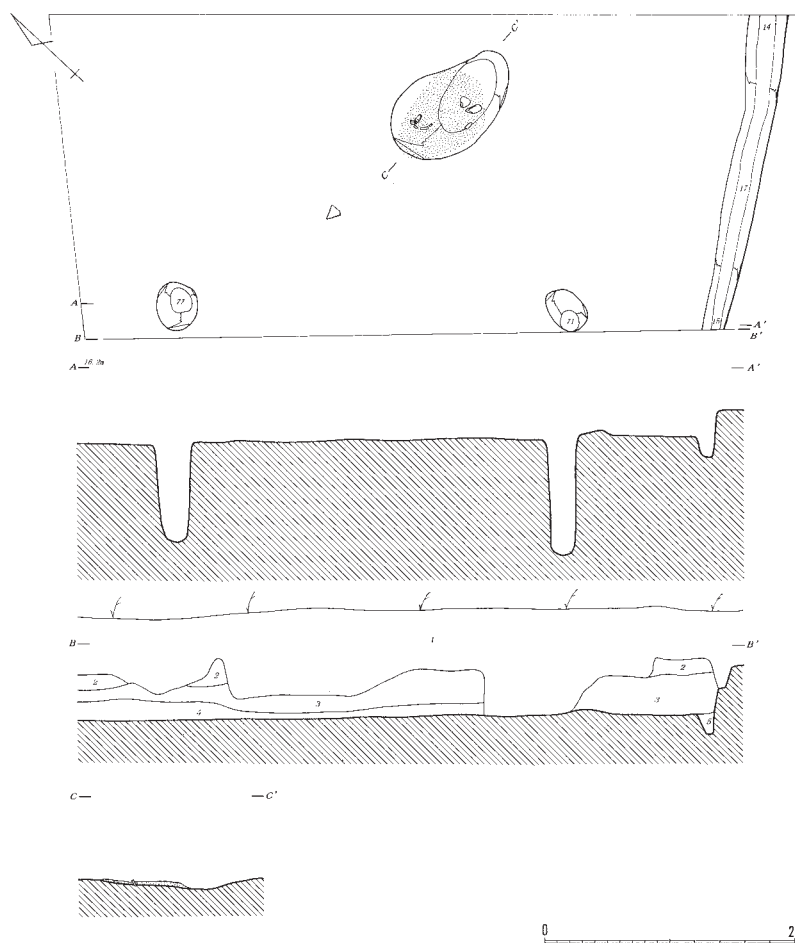
高坏形土器（第159図29）

脚台部破片。外面はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中の出土。

甕形土器（第159図30～33）

30は脚台部破片。31～33は体部破片。32・33は同一個体。いずれも内外面共にヘラミガキされるが外面にはハケ目痕が残る。32・33の外面には炭化物の付着が顕著である。色調は30がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、31～33が灰褐色（5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。

すべて覆土中からの出土。



第156図 137号住居跡 (1/60)

138号住居跡（第157図）

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）550×484cm。（主軸方位）N—57°—W。（壁高）20～28cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅8～28cm・下幅5～10cm・深さ2～8cmを測り、西壁の一部を除き確認された。（床面）北側壁際に沿って硬化面を確認する。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。66×55cm・深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴になろう。（貯蔵穴）南東壁北東に偏って位置し、径45cmのほぼ円形を呈し、深さ26cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 - 2層 黒色土。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。
 - 3層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
 - 4層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 - 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
 - 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。
 - 7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。

〔遺物〕 住居跡中央床面上と覆土中から出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

138号住居跡出土遺物（第158図、第159図34～38）

壺形土器（第159図34・35）

34は単純口縁部破片。口縁部は外傾する。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

35は瓢壺になろうか。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は内湾気味に直立する器形である。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。共に覆土中からの出土。

高坏形土器（第158図1）

坏部のみ残存する。口径14.2cmを測る。碗状を呈し、口縁部は大きく開く器形である。口唇部内外面はヨコナデされる。以下、内外面共に縦方向に丁寧にヘラミガキが施されるが、消しきれないハケ目痕が残る。全体に剥離が激しい。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には2～5mmの細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央床面上から出土した。

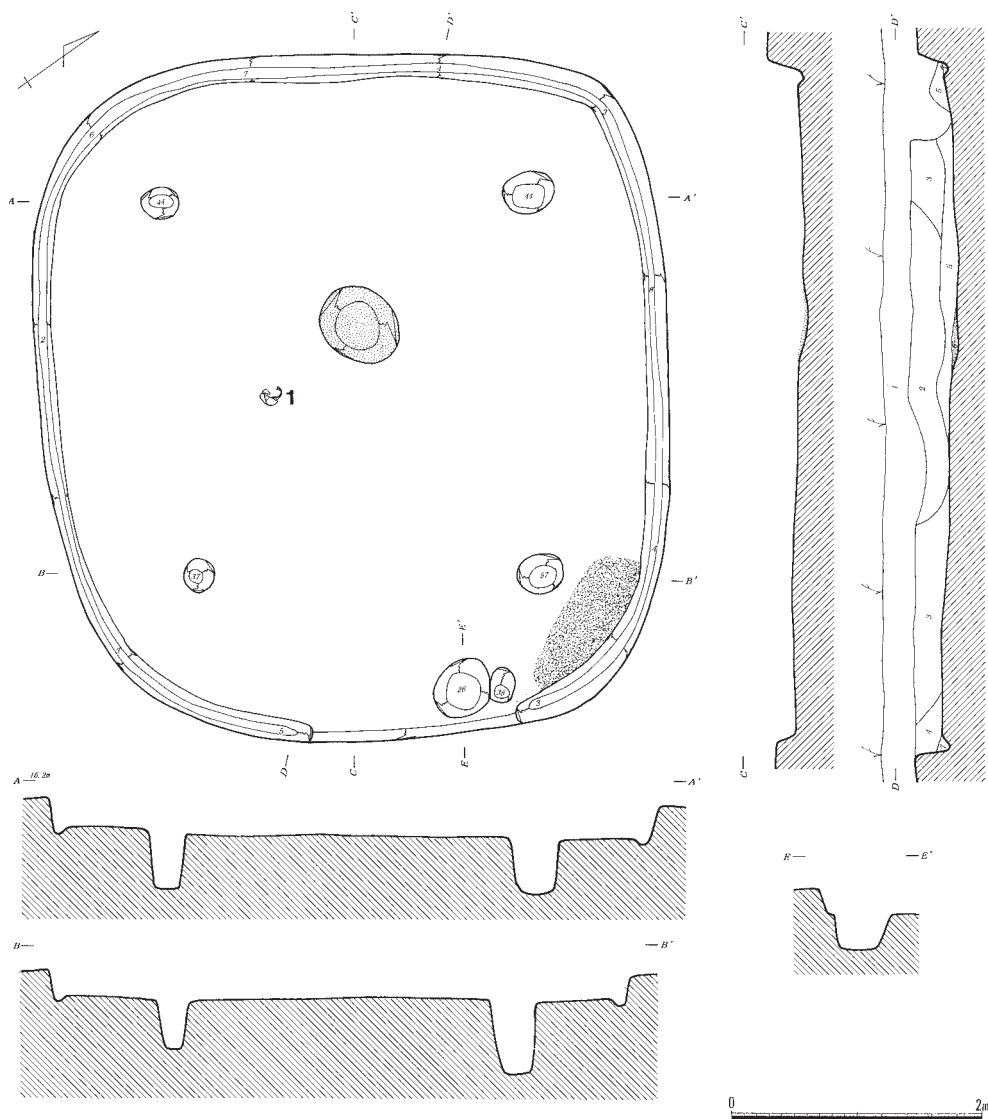
甕形土器（第159図36～38）

36は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面には斜方向のハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。

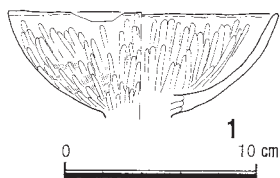
37は体部下半破片。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物の付着がみられる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

38は脚台部破片。脚裾部へかけて開く器形である。脚裾部内面には粘土のはみ出しがみられる。内外面共にヘラナデされるが、外面と内面下半にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中から出土した。



第157図 138号住居跡 (1/60)



第158図 138号住居跡出土遺物 (1/4)

139号住居跡（第160図）

〔位置〕 23 I 地点。

〔構造〕 北西側調査区外。149Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×524cm。（主軸方位）N-47°-W。（壁高）39～42cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～25cm・下幅5～8cm・深さ9～13cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際を除き硬化面を認め、遺存状態は良好である。（炉）調査区外にあるものと思われる。（柱穴）3ヵ所のコーナーに近い3本が主柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）東コーナー壁下に位置する。63×61cmの円形を呈し、深さ25.5cmを測る。周囲には幅42cm前後・高さ1～3cmの凸堤を弧状に構築する。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 8層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 9層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 10層 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 南コーナー付近床面上を中心に出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

139号住居跡出土遺物（第161図、第169図1～16）

壺形土器（第169図1～4）

1は複合口縁部破片。内外面共に非常に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

2は単純口縁部破片。器厚は非常に薄く、受け口状に内湾しながら立ち上がる器形である。内外面共にヨコナデされ、口唇部外面には櫛描状の横線がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

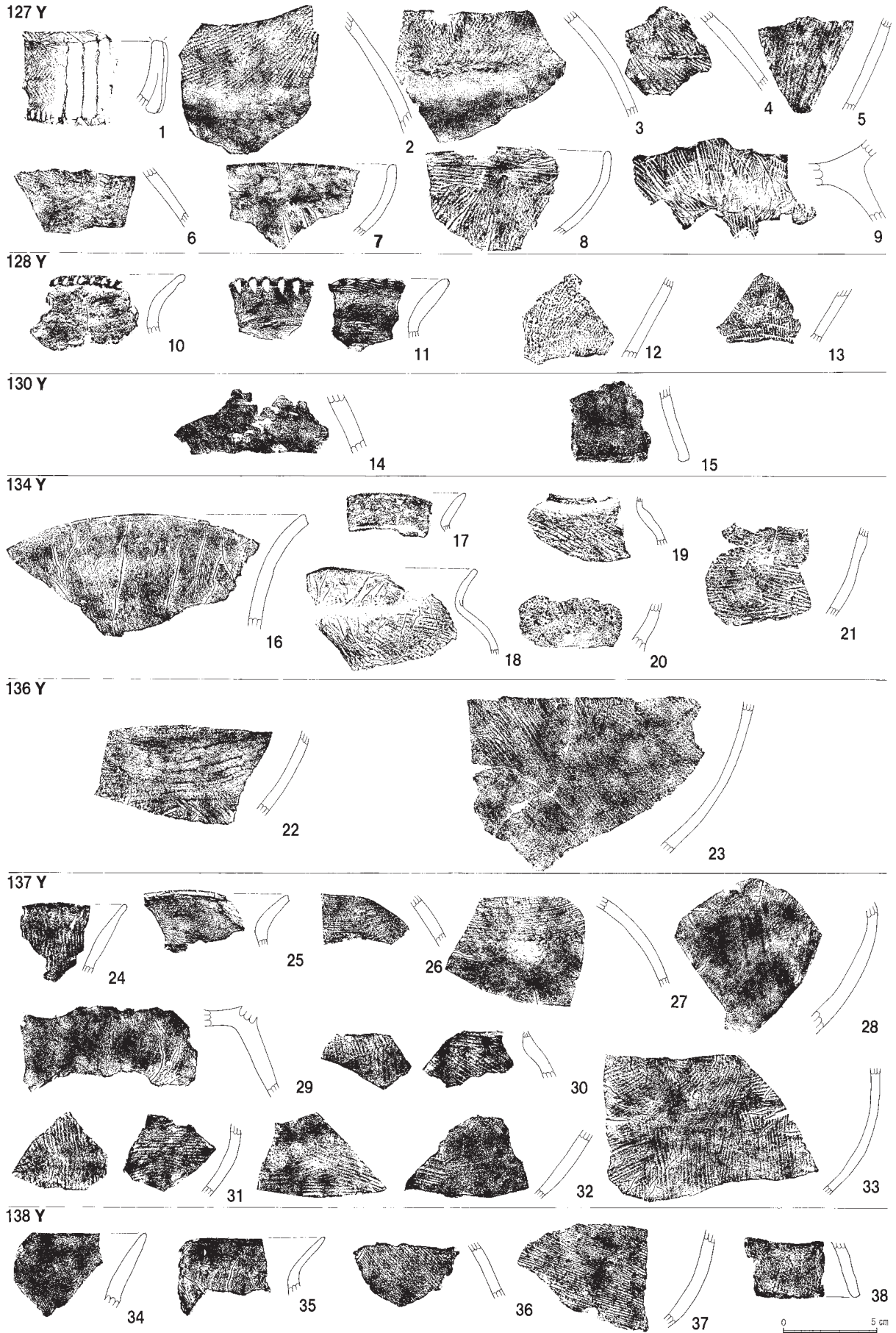
3・4は肩部破片。3はS字状結節文が施され、RLの単節縄文が羽状に施される。4はRLの単節縄文が施される。色調は3が灰褐色（7.5YR4/2）、4がにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。共に胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中から出土した。

高坏形土器（第161図1、第169図5・6）

第161図1は坏部のみ残存する。口径18cm。坏部は深く半球状を呈する。内外面共に丁寧にヘラミガキされ赤彩されるが、口縁部外面には僅かにハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。南コーナー付近の床面上から出土した。

第169図5・6は東海西部地方に系譜をもつ高脚高坏の坏部破片。5は胎土や調整技法、器形の特徴が、10号方形周溝墓の東海西部系高坏形土器と酷似しており興味深い。内外面共に縦方向に非常に丁寧にヘラミガキされる。色調は5がにぶい橙色（7.5YR6/4）、6がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には粗砂を含むが、極めて精選され緻密で堅緻である。覆土中からの出土。



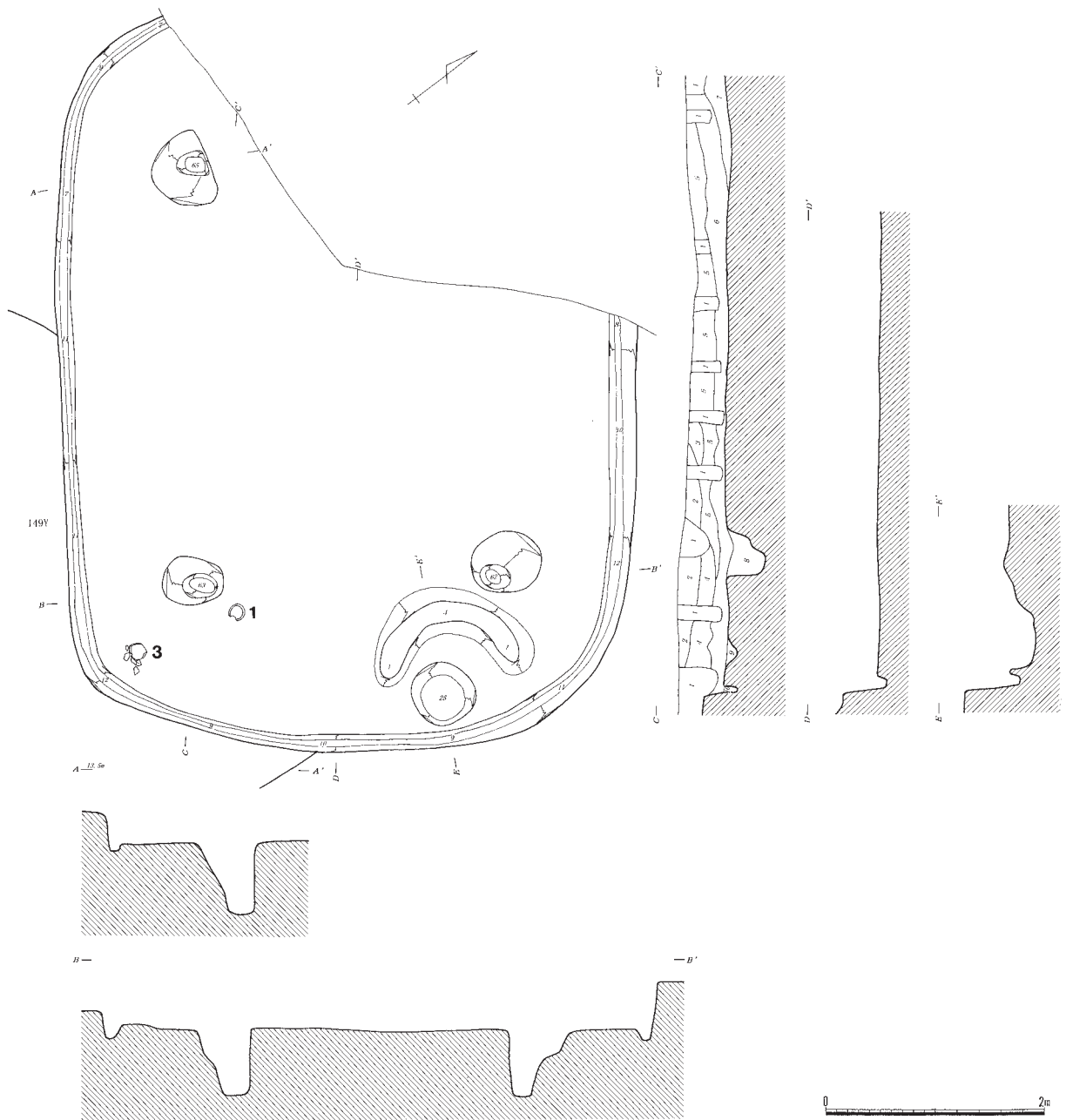
第159図 127・128・130・134・136～138号住居跡出土遺物 (1/3)

甕形土器 (第161図3～5、第169図7～16)

第161図3は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径14cmと小型である。最大径を体部中位にもつ球状の体部から立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は直立気味に外傾する。内外面共にヘラナデされるが、外面と内面口縁部にはハケ目痕が残る。色調は外面褐灰色(5YR6/1)、内面はにぶい橙色(5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南コーナー床面上から出土した。

4・5は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径は4が10cm、5が9.2cmを測る。共に裾部へかけて「ハ」字状に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面と内面下位には不規則なハケ目痕が残る。色調は5がにぶい橙色(7.5YR7/2)、6が明褐灰色(7.5YR6/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

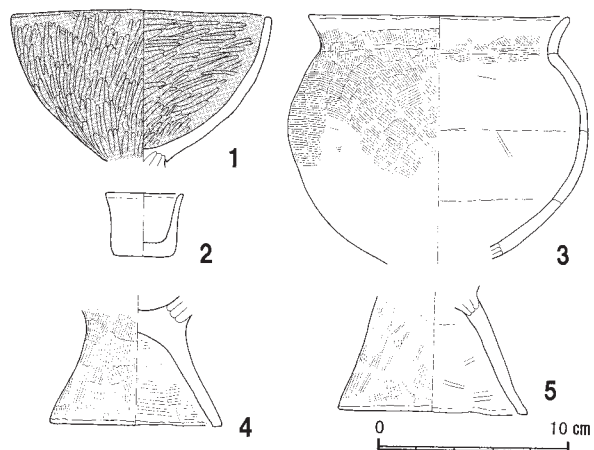
第169図7は脚台部破片。内湾気味に開く器形である。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第160図 139号住居跡 (1/60)

8～10は口縁部破片。8・9は口唇部外面に刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は8が褐灰色(5YR4/2)、9・10が灰褐色(5YR4/2)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

11～16は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は11・16が灰褐色(7.5YR4/2)、12が黒褐色(5YR3/1)、13がにぶい橙色(7.5YR6/4)、14が褐灰色(7.5YR4/1)、15がにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第161図 139号住居跡出土遺物(1/4)

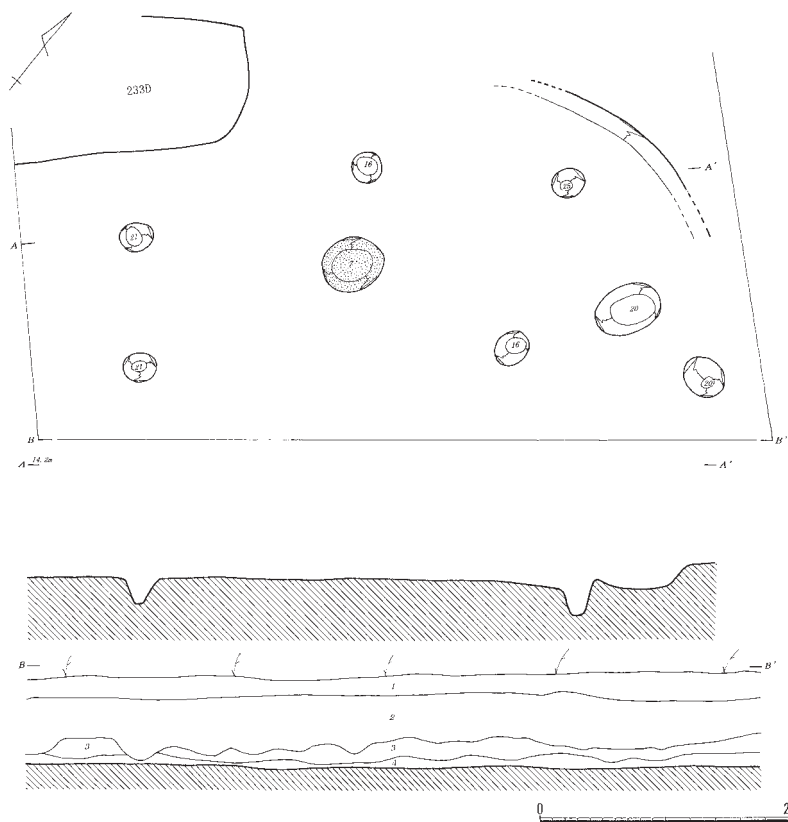
ミニチュア土器(第161図2)

コップ形土器。口径4.2cm・底径3.2cm・器高3.3cmを測る。平底の底部から立ち上がり、口縁部へかけて直線的に開く器形。内外面共にナデられる。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。覆土中からの出土。

140号住居跡(第162図)

〔位置〕10Ⅱ地点。

〔構造〕北東・北西・南西側調査区外。233Dに切られる。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)3～10cmを測り、50°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)炉の南側に一部硬化面を認める。(炉)49×42cmの円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴)北西側の2本が主柱穴の一



第162図 140号住居跡(1/60)

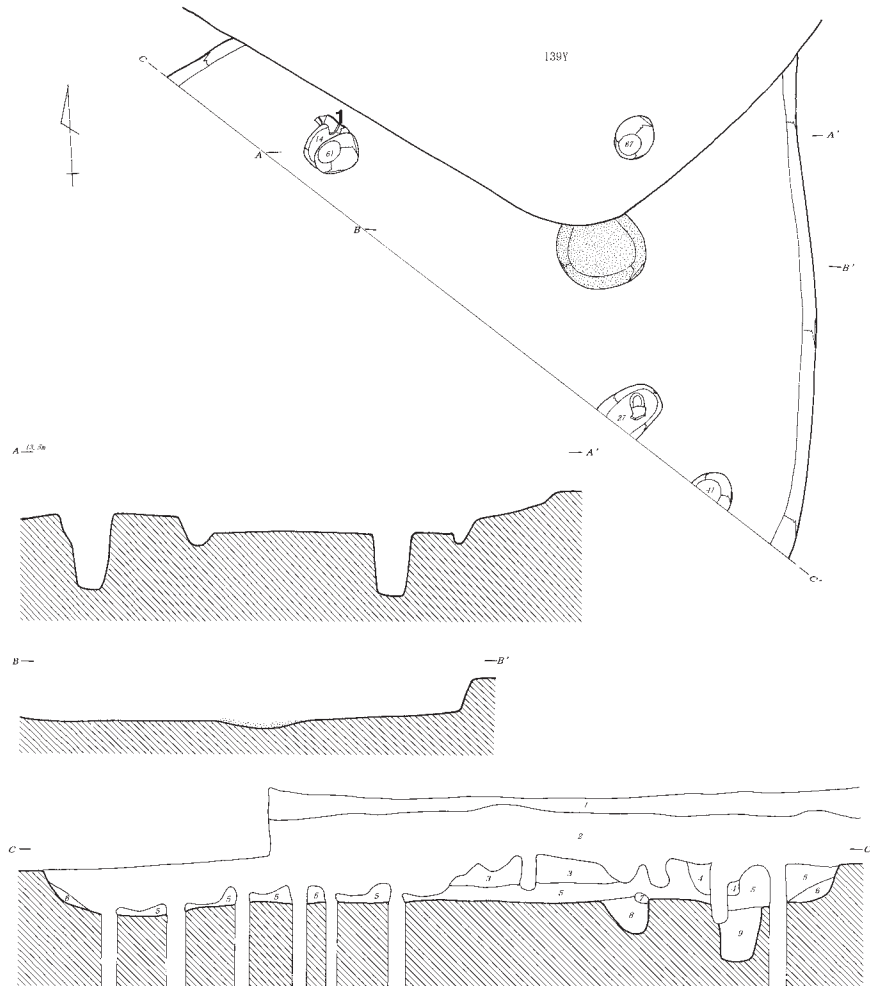
部が思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

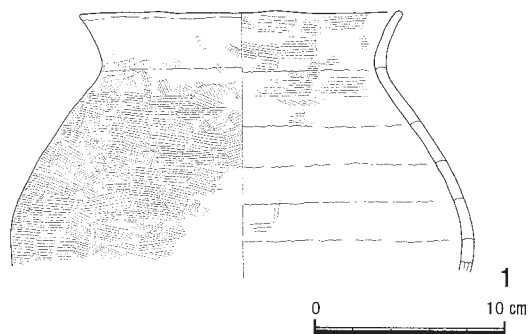
- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第163図 149号住居跡 (1/60) 0 2m



第164図 149号住居跡出土遺物 (1/4)

140号住居跡出土遺物 (17・18)

甕形土器 (17・18)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は17が灰褐色 (7.5YR4/2)、18が黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

149号住居跡 (第163図)

〔位置〕 23 I 地点。

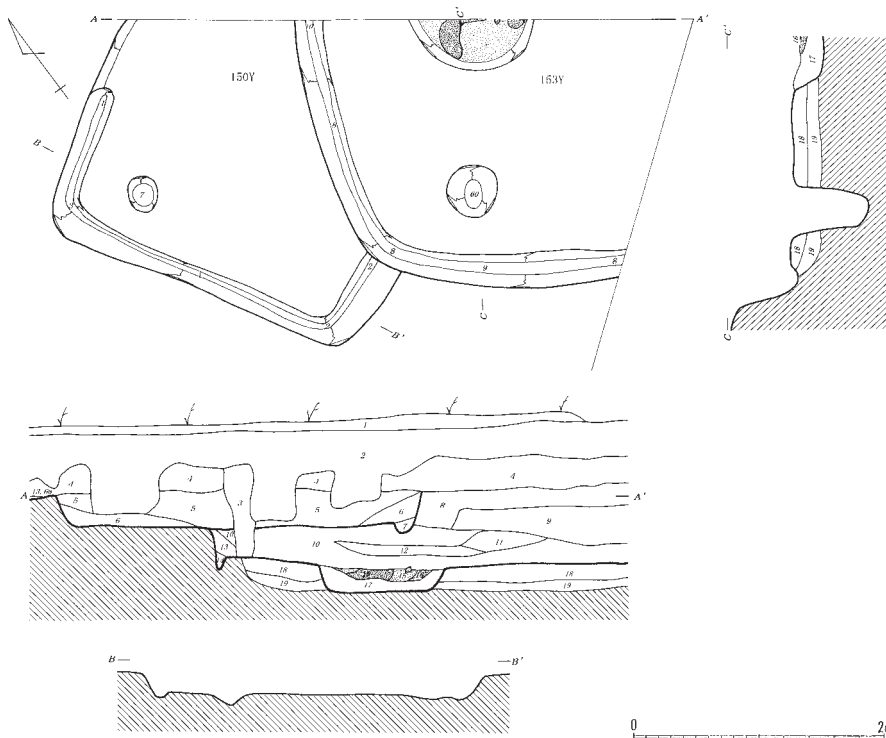
〔構造〕 南西側調査区外。139 Y に切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 25~32cm を測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に軟弱だが、東側の一部に硬化面を認める。(炉) 不明×56cmの地床炉で、深さ10cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 深度のあるピット3本が支柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 黄褐色土。ロームブロック。
- 8層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 9層 黒褐色土。ローム粒子を含む。

〔遺物〕 北側ピットから少数出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

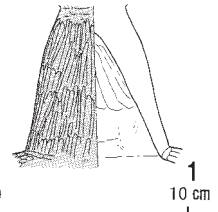


第165図 150・153号住居跡 (1/60)

149号住居跡出土遺物（第164図、第169図19～22）

甕形土器（第164図1、第169図19～22）

第164図1は台付甕形土器の甕部上半の1/2程度が残存する。推定口径7.2cm。頸部は強くくびれて口縁部は外傾する。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。器面には炭化物の付着が顕著である。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。住居跡北寄りピット上から出土した。



第166図 150号住居跡出土遺物（1/4）

第169図19・20は口縁部破片。21・22は体部破片。20の口唇部外面には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は19がにぶい橙色（7.5YR6/4）、20・21が灰褐色（7.5YR4/2）、22が黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。22は住居跡南寄りピット上から他は覆土中からの出土。

150号住居跡（第165図）

〔位置〕 10Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。153Yを切る。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×276cm。（主軸方位）N—58°—E。（壁高）17～20cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅17～30cm・下幅3～15cm・深さ1～3cmを測り、西側で止まる。（床面）平坦で遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出された1本は後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 後世のピット。
- 4層 黒褐色土。赤色粒子を含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 6層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期後半。

150号住居跡出土遺物（第166図、第169図23・24）

壺形土器（第169図24）

小形丸底壺の底部破片。底部は小さく、上げ底を呈する。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂含むがきめ細かい。覆土中からの出土。

高坏形土器（第166図1）

脚柱部の1/2程度が残存する。柱状部から裾部へかけて強く屈曲して水平に開く。外面は縦方向にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされるが上端部に絞り目がみられる。色調は赤彩部が赤褐色（5YR4/6）、内面はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・輝石を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

甕形土器（第169図24）

口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

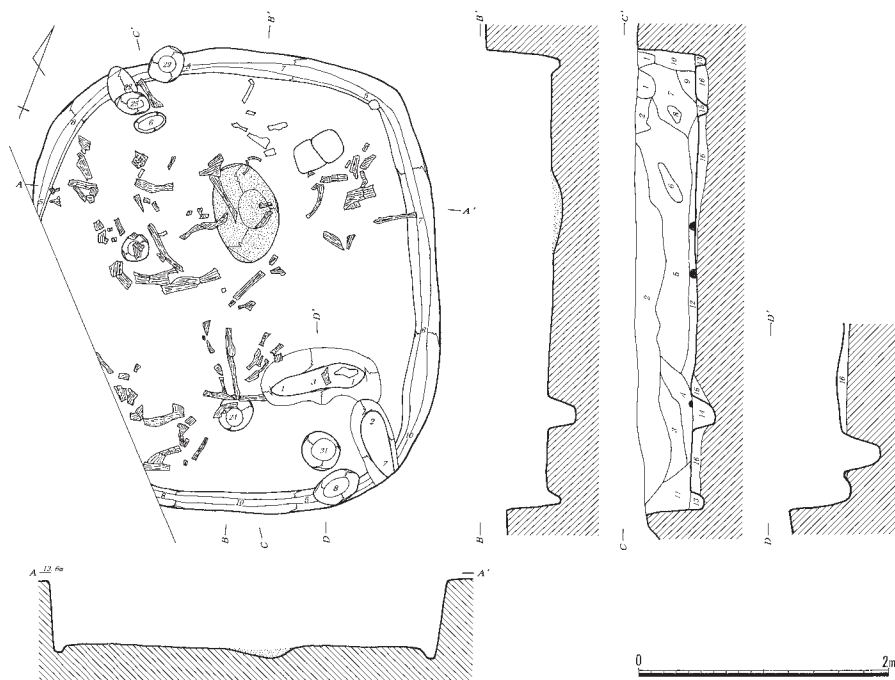
151号住居跡（第167図）

〔位置〕 10Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）370×318cm。（主軸方位）N-23°-W。（壁高）42～53cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～20cm・下幅3～12cm・深さ5～10cmを測り全周すると思われる。（床面）炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。78×48cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）主柱穴と確定できるピットは検出されなかった。南壁下より僅かに北に偏った1本は入口施設になろうか。（貯蔵穴）南東壁から東に偏って位置する。径30cmの円形を呈し、深さ32cmを測る。幅40cm前後・高さ1～3cmの凸堤を鍵型に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 8層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 9層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 10層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 11層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 12層 黒褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 13層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 14層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 15層 黒褐色土。ローム粒子を含む。



第167図 151号住居跡（1/60）

16層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。貼床充填土。

堆積状態が不整合で、ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上に土器片と炭化材が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕炭化材が多量に検出されたため、焼失家屋の可能性が大きい。

151号住居跡出土遺物（第169図25～33）

壺形土器（第169図25～29・33）

25は複合口縁部破片。口縁部内面には無節Rの端末結節が施される。口唇部外面には刻みが施される。色調は在地の胎土とは異なると思われ、灰白色（10YR8/2）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

26～28は肩部破片。26の肩部にはRLの単節縄文の端末結節が2段、下端には鋸歯文が施される。27には2条のS字状結節文がみられる。28には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。色調は26がにぶい赤褐色（5YR5/4）、27が灰褐色（7.5YR4/2）、28がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

29は体部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

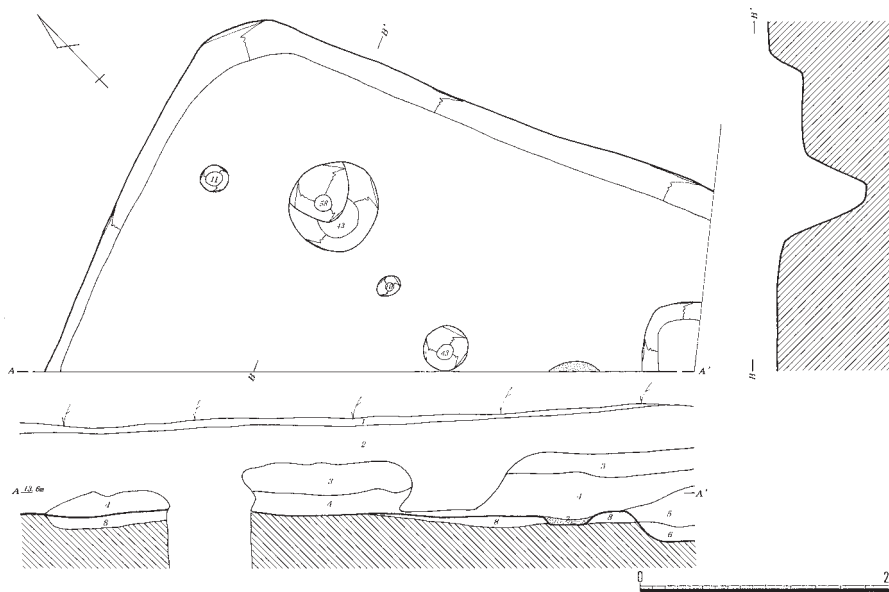
33は底部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

甕形土器（30～32）

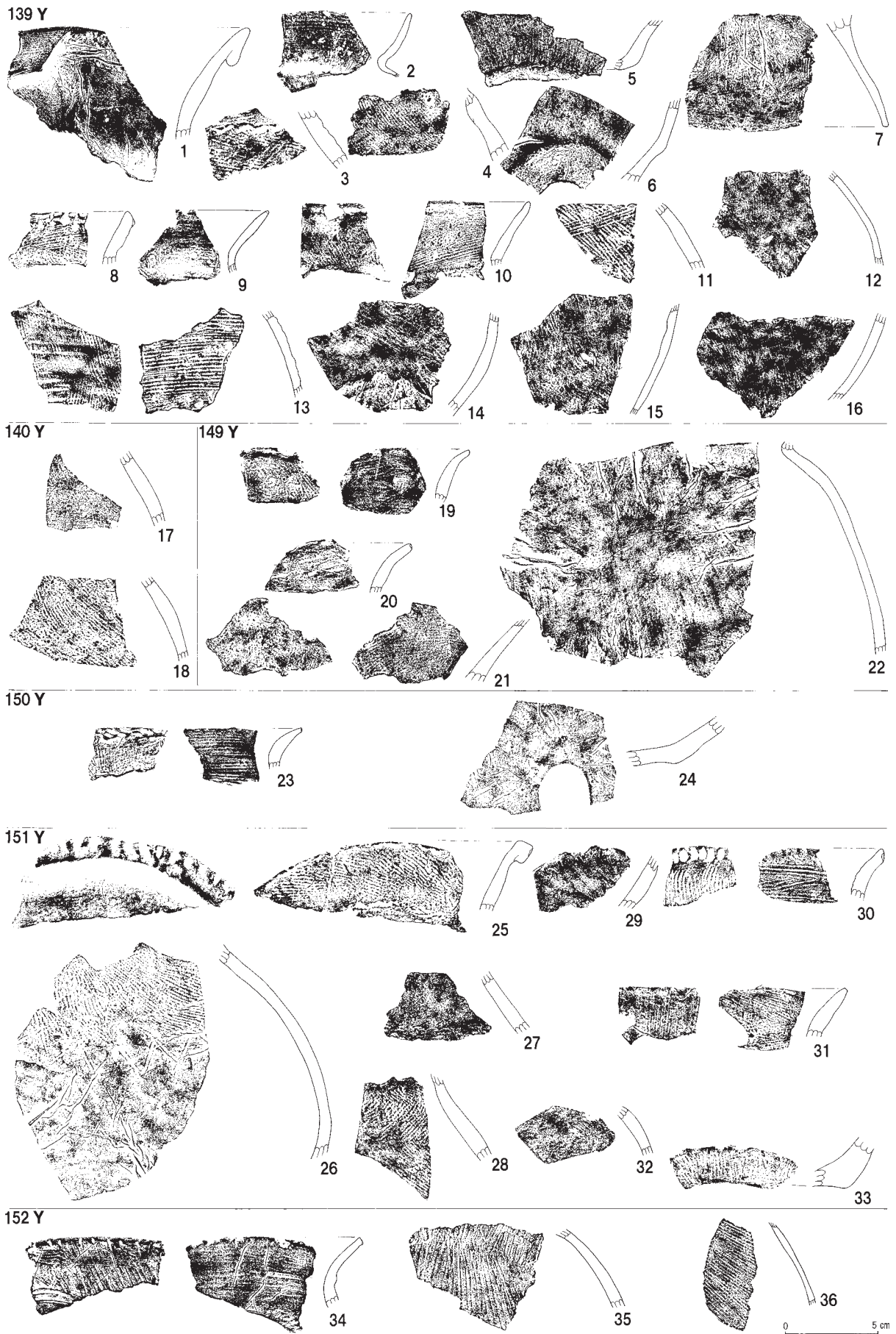
30・31は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。色調は30が灰褐色（7.5YR4/2）、31は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。

32は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

すべて覆土中からの出土である。



第168図 152号住居跡（1/60）



第169図 139・140・149～152号住居跡出土遺物 (1/3)

152号住居跡（第168図）

〔位置〕 10Ⅱ地点。

〔構造〕 西及び南側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）14～18cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。（炉）炉と思われる被熱で赤化した僅かな部分を確認したのみである。（柱穴）北側コーナーに支柱穴を1本確認する。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 暗赤褐色土。焼土粒子を多く含む。
- 8層 褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中に僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

152号住居跡出土遺物（第169図34～36）**甕形土器（34～36）**

34・35は同一個体の口縁部と体部の破片。口唇部外面には浅く押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが粗く不規則なハケ目痕が残る。色調は34がにぶい褐色（7.5YR6/3）、35がにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

36は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中から出土した。

153号住居跡（第165図）

〔位置〕 10Ⅱ地点。

〔構造〕 北東及び北西が調査区外。150Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）47～50cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅21～29cm・下幅4～9cm・深さ7～8cmを測る。（床面）硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。（炉）不明×100cmの粘土火皿で21cmの掘り込みをもつ。（柱穴）南西コーナーの1本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 4層 黒褐色土。赤色粒子を含む。
- 8層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 9層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 10層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 11層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

- 12層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 13層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 14層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 15層 暗赤褐色土。焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。
- 16層 赤褐色土。被熱した粘土ブロック。
- 17層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 18層 黄褐色土。ロームブロック。貼床。
- 19層 黒色土。ローム粒子・ロームブロックを含む。貼床充填土。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から少数出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

153号住居跡出土遺物（第181図1～5）

壺形土器（1・2）

1は頸部破片。3条のS字状結節文の下にRLの単節縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

2は複合口縁部破片。口縁部下端には刻みが巡る。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（3～5）

3は口縁部破片、4・5は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は3がにぶい赤褐色（2.5YR4/4）、4がにぶい赤褐色（5YR5/3）、5が褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土である。

154号住居跡（第170図）

〔位置〕 6Ⅱ地点。

〔構造〕 南側調査区外。155・156Yを切り、155Y・14Mに切られる。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×300cm。（主軸方位）E—W。（壁高）9～22cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～22cm・下幅5～10cm・深さ8～11cmを測る。（床面）全体に軟弱である。（炉）不明×45cmの地床炉で、深さ20cmを測る。（柱穴）北西コーナーに2本検出されたが支柱穴とするには判然としない。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。14号溝跡覆土。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

154号住居跡出土遺物（第181図6～8）

高坏形土器（6）

脚部破片。裾部へかけて末広がりになる器形である。内外面共に丁寧にヘラミガキされる。器厚は2～3mmと薄い。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈する。胎土には粗砂を僅かに含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

甕形土器（7・8）

7は頸部破片、8は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は7が黒褐色（5YR3/1）、8が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中から出土した。

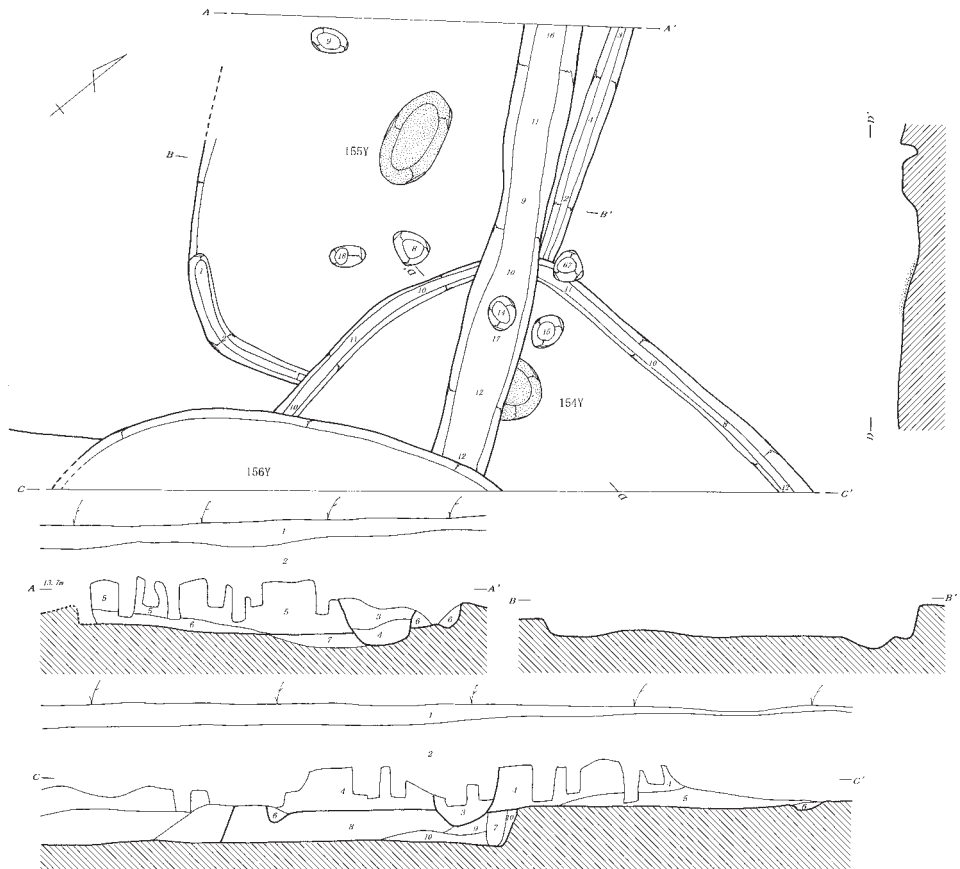
155号住居跡（第170図）

〔位置〕 6Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。154Y・14Mに切られる。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×300cm。（方位）N-40°-W。（壁高）9～23cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅14～30cm・下幅5～10cm・深さ1～3cmを測り、北西コーナーで止まる。（床面）平坦で全体に軟弱である。特に硬化面は認められなかった。（炉）住居中央と思われる位置にある。80×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ19cmを測る。遺存状態は良好である。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。14号溝跡覆土。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。14号溝跡覆土。



第170図 154～156号住居跡（1/60）

- 5層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 6層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子を含む。貼床充填土。

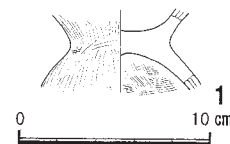
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

155号住居跡出土遺物（第171図）

甕形土器（1）

台付甕形土器の接合部。接合部でくびれて裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。



第171図 155号住居跡
出土遺物（1/4）

156号住居跡（第170図）

〔位置〕 6Ⅱ地点。

〔構造〕 南側調査区外。154Y・14Mに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）24～41cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 7層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 9層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 10層 黒褐色土。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

156号住居跡出土遺物（第181図9～13）

壺形土器（9～11）

9は複合口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。10は頸部破片。外面にはLRの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には粗砂を含む。11は肩部破片。RLの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（12・13）

12は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。13は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は12が黒褐色（7.5YR3/1）、13が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土。

157号住居跡（第172図）

〔位置〕 6Ⅱ地点。

〔構造〕 北西及び南東側調査区外。158Yを切る。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）34～

38cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に軟弱で遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含むにぶい黄褐色土を基調とする。埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

158号住居跡 (第172図)

〔位置〕 6Ⅱ地点。

〔構造〕 南側・北側調査区外。157Yに切られる。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 不明×428cm。(主軸方位) N—68°—W。(壁高) 52～57cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 硬質ロームを床面とする。平坦で遺存状態は良好である。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。88×61cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 各コーナーに近い4本が主柱穴である。東壁中央に近い1本は入口施設になるうか。(貯蔵穴) 東コーナー近くに位置する。50×47cmの楕円形を呈し、深さ30.5cmを測る。西及び北側には幅37cm前後・高さ6cm前後の凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 6層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 9層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

堆積状態が不整合で、ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 床面に土器片が点在する。

〔時期〕 古墳時代前期前半。

158号住居跡出土遺物 (第173図、第181図14～17)

壺形土器 (第173図1、第181図14・15)

第173図1は底部のみ残存する。底径5.4cm。平底の底部から直線的に立ち上がる器形である。外面はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色(5YR6/4)、赤彩部がにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡南東寄り床面上から出土した。

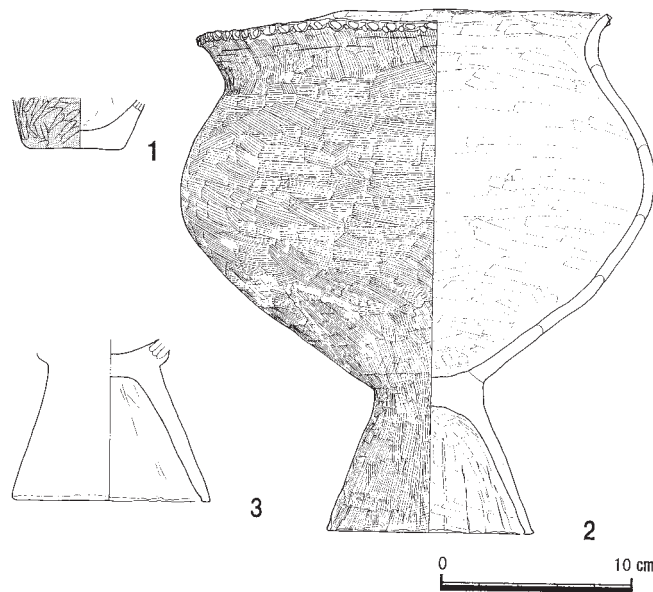
第181図14は複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面にはLRの単節縄文が施され、棒状浮文が貼付される。口縁部下端には、柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

15は肩部破片。上からLRの単節縄文・Z字状結節文・無文帯・Z字状結節文・LRの単節縄文の順番で施される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (第173図2・3、第181図16・17)



第172図 157・158号住居跡 (1/60)



第173図 158号住居跡出土遺物 (1/4)

第173図2は台付甕形土器の甕部1/3程度を欠く。口径21.4cm・底径10.9cm・器高27.7cmを測る。体部上半に最大径をもち、頸部で屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部には棒状の工具により交互に押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央からやや南寄り床面上から出土した。

3は脚台部のみ残存する。底径10.5cm。裾部にかけて直線的に広がる器形である。接合部には凸帯が巡る。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。西北壁付近から出土した。

16・17は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は16が灰褐色（5YR4/2）、17がにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中からの出土。

159号住居跡（第174図）

〔位置〕 10Ⅱ地点。

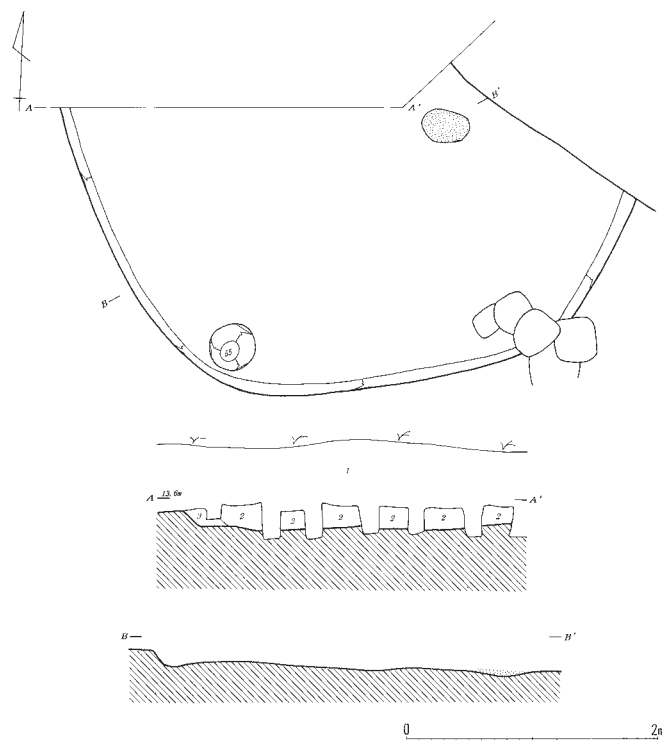
〔構造〕 北側調査区外。160Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）11～16cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）耕作による攪乱が著しいが部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。38×24cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第174図 159号住居跡 (1/60)

159号住居跡出土遺物 (第181図18・19)

甕形土器 (18・19)

口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。共に色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

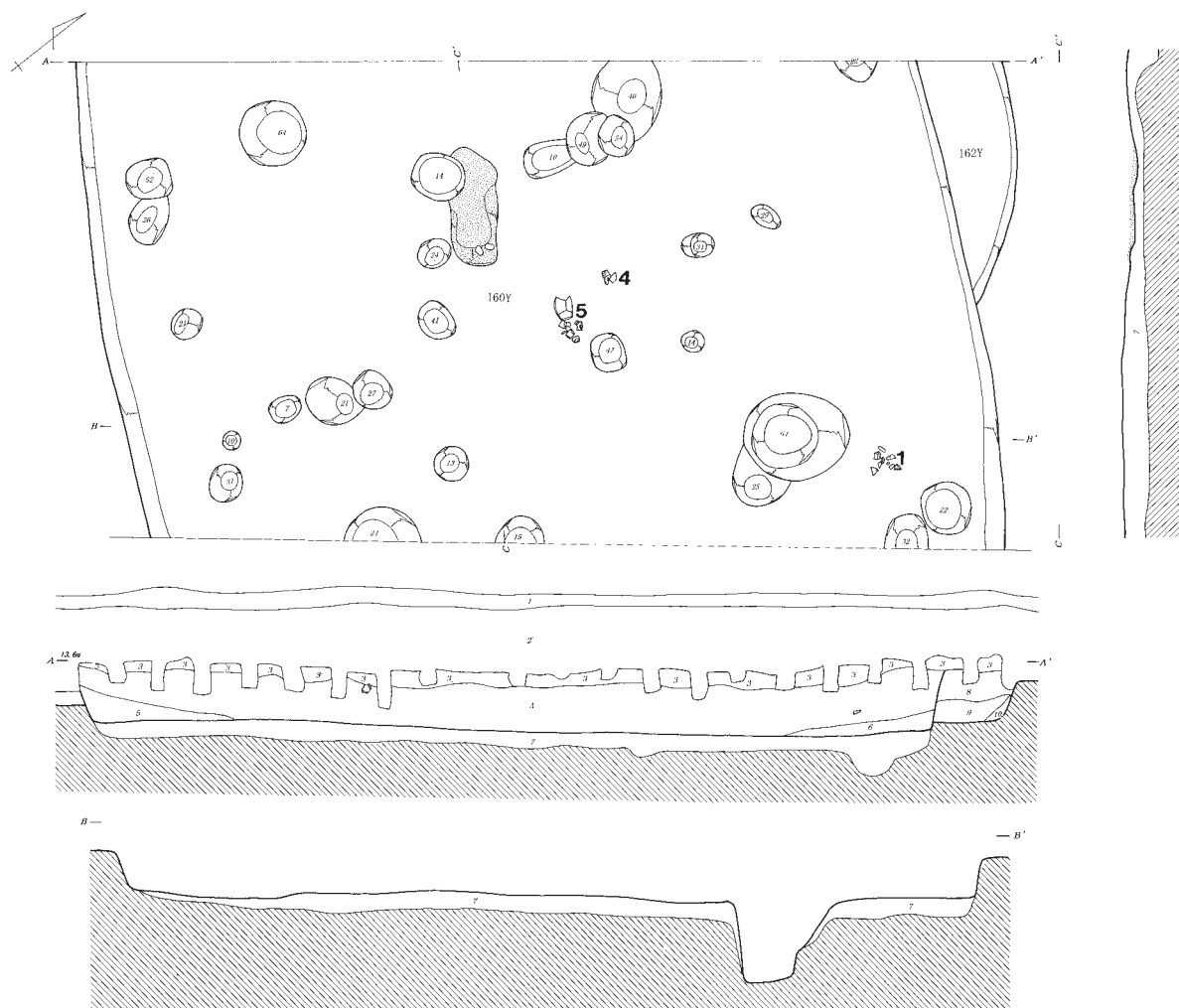
160号住居跡 (第175図)

〔位置〕 6Ⅱ地点。

〔構造〕 南西及び南東側調査区外。43 J・159・162 Yを切る。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×690cm。(主軸方位) N-52°-W。(壁高) 38~45cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際を除いた中央には硬化面を認める。(炉) 住居中央から北西に偏って位置しようか。95×38cmの粘土火皿で深さ7cmの掘り込みをもつ。南側に礫を配置している。(柱穴) 比較的多く検出するが、主柱穴は判然としない。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。



第175図 160・162号住居跡 (1/60)



5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

6層 黒褐色土。ローム粒子を含む。

7層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。貼床充填土。

〔遺物〕床面に土器片が出土した。

〔時期〕古墳時代前期後半。

160号住居跡出土遺物（第176図、第181図20～30）

壺形土器（第181図20～24）

20・21は複合口縁部破片。20の口唇端部に網目状撚糸文が施される。口縁部外面にも網目状撚糸文が施され、縦位に沈線が施される。口縁部内面はヘラミガキされ赤彩される。21は口縁部内面にL Rの単節縄文の端末結節が施される。色調は20がにぶい赤褐色（5YR5/4）、21がにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

22～24は肩部破片。22はL Rの単節縄文端末結節が2段施される。23はR Lの単節縄文が羽状に施され、境目には縄文の端の結び目痕がみられる。24は無節Rの端末結節が2段に施される。色調は22がにぶい褐色（7.5YR6/3）、23がにぶい橙色（7.5YR6/4）、24がにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

鉢形土器（第176図1・2、第181図25）

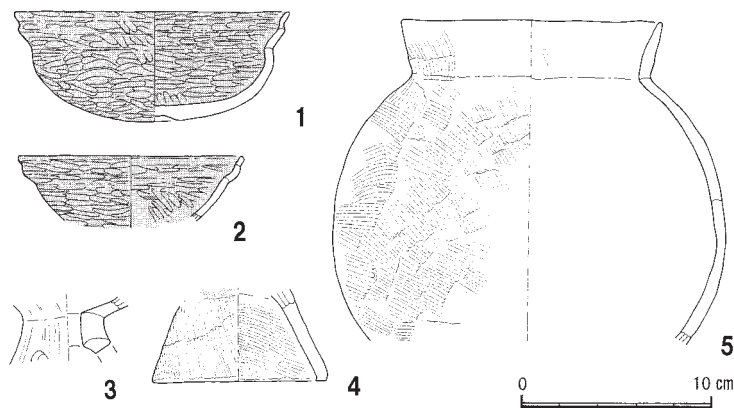
第176図1は有段鉢で2/3程度が残存する。口径14.6cm・底径5.3cm・器高5.8cmを呈する。底部は中心が僅かにくぼんでいる。体部は塊状を呈する体部から頸部で2段に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部内外面共にヨコナデ。以下、内外面共に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。胎土には粗砂・橙色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。北東壁寄り床面上から出土した。

2は1/5程度が残存する。推定口径16cm。口縁部に段をもち、体部は塊状を呈する。口唇部は直立気味に立ち上がる。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かい。覆土中から出土した。

第181図25は複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面にはL Rの単節縄文が施される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

器台形土器（第176図3）

接合部のみ残存する。接合部で屈曲し、受け部は大きく広がる器形。受け部の中心から脚部へ1孔が貫通する。孔径は1cmである。脚部には途中3孔があげられる。受け部内面と脚部外面はヘラミガキされるが、脚部内面はヘラナデされる。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子・輝石を含む。覆土中からの出



第176図 160号住居跡出土遺物（1/4）

土。

甕形土器（第176図4・5、第181図26～30）

第176図4は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径9.3cm。裾部へかけて「ハ」字状に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央付近より出土した。

5は1/4程度が残存する。推定口径14cm。球状を呈する体部から頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。外面には粗いハケ目痕が残る。内面はミガキをかけたように強くナデられる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・輝石を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

第181図26は口縁部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

27はいわゆる叩き調整甕と思われる体部破片。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。粗砂を含むが、堅緻である。

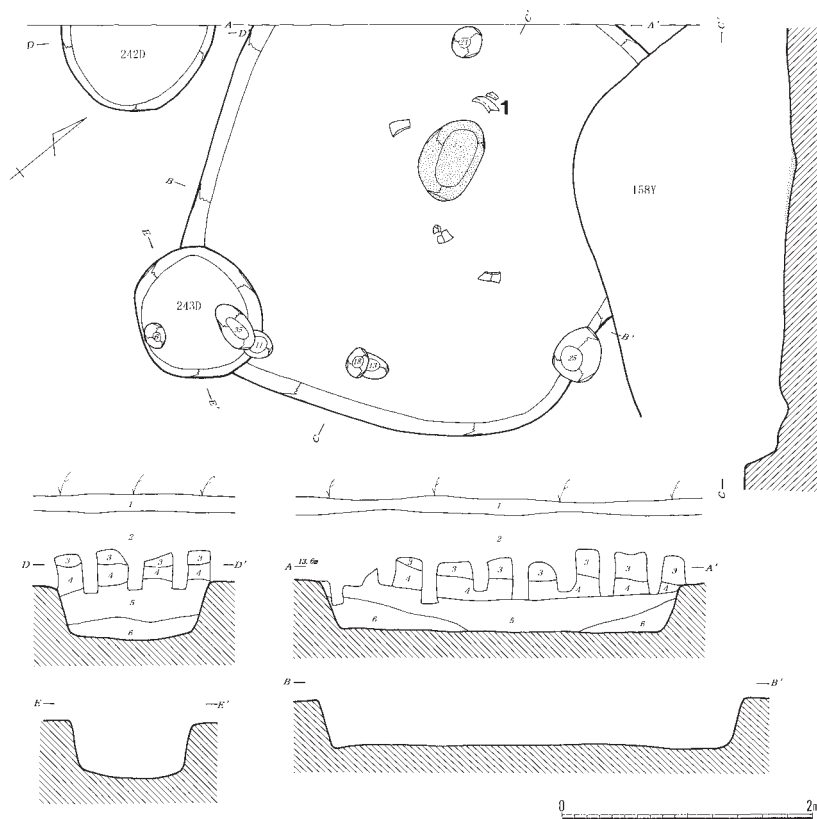
28～30は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には幅広で粗く不規則なハケ目痕が残る。胎土には細礫・粗砂を含む。

26～30はいずれも覆土中から出土した。

161号住居跡（第177図）

〔位置〕 6Ⅱ地点。

〔構造〕 北西側調査区外。158Y・243Dに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×336cm。（主軸方位）N—29°—W。（壁高）29～37cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。（炉）住居中央から北西に僅



第177図 161号住居跡、242・243号土坑（1/60）

かに偏って位置する。70×47cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 主柱穴は検出されなかった。南壁中央の壁下に位置するピットは入口施設と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 床面上に土器片が点在する。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

161号住居跡出土遺物 (第178図、第181図31～35)

壺形土器 (第181図31～33)

31は単純口縁壺形土器の口頸部破片。口唇端部にはRLの単節縄文が施され、口唇部外面には刻みが巡る。頸部外面には3条のS字状結節文と、RLの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は黒褐色(5YR3/1)を呈する。胎土には際礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

32は複合口縁部破片。短い口縁部にはLRの単節縄文が施される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

33は頸部破片。LRの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。

いずれも覆土中からの出土。

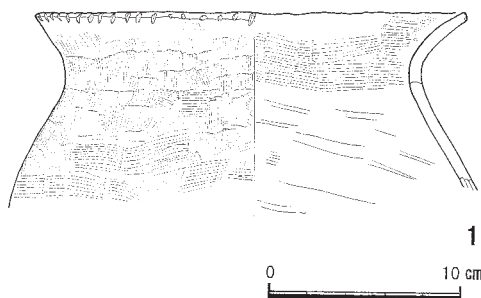
甕形土器 (第178図1、第181図34・35)

第178図1は体部上半の2/3程度が残存する。推定口径22.8cm。頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には左方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物が付着する。色調は外面が黒褐色(7.5YR3/1)、内面ににぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉付近床面上から出土した。

第181図34・35は口縁部破片。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調は黒褐色(5YR3/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。共に覆土中からの出土。

162号住居跡 (第175図)

〔位置〕 6Ⅱ地点。



第178図 161号住居跡出土遺物 (1/4)

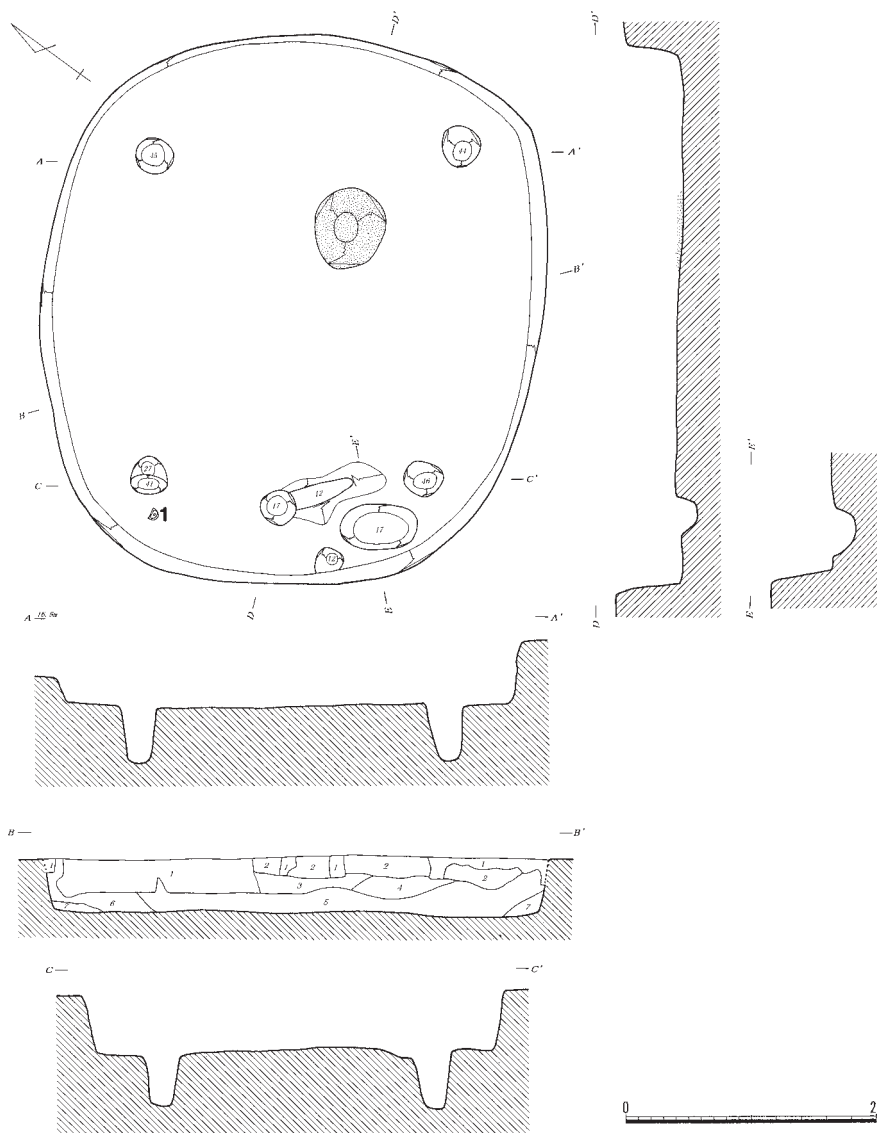
〔構造〕 北側調査区外。12Sを切る。160Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 35~45cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に軟弱で、遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 8層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 9層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 10層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。



第179図 163号住居跡 (1/60)

163号住居跡（第179図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 248・249Dを切る。（平面形）隅丸正方形。（規模）438×400cm。（主軸方位）N-57°-E。（壁高）46～49cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。平坦で遺存状態は良好である。東側に一部硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。62×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が主柱穴である。西壁下中央から僅かに東に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西コーナーに位置する。60×36cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。東側に幅25cm前後・高さ10cm前後の直線的な凸堤を構築している。

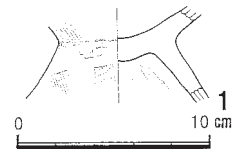
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 4層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 にぶい黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 7層 黒色土。ローム小ブロックを含む。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 北西コーナーに土器片を出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第180図 163号住居跡出土遺物
(1/4)

163号住居跡出土遺物（第180図、第181図36～39）

壺形土器（第181図36・37）

36・37は頸部破片。36の頸部には円形浮文がみられる。以下無節Rの縄文が2段施される。縄文帯以外は赤彩される。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。37は頸部にRLの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は36がにぶい黄橙色（10YR6/3）、37がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・軽石を含む。共に覆土中から出土した。

甕形土器（第180図1、第181図38・39）

第180図1は台付甕形土器の接合部のみ残存する。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。西コーナーから出土した。

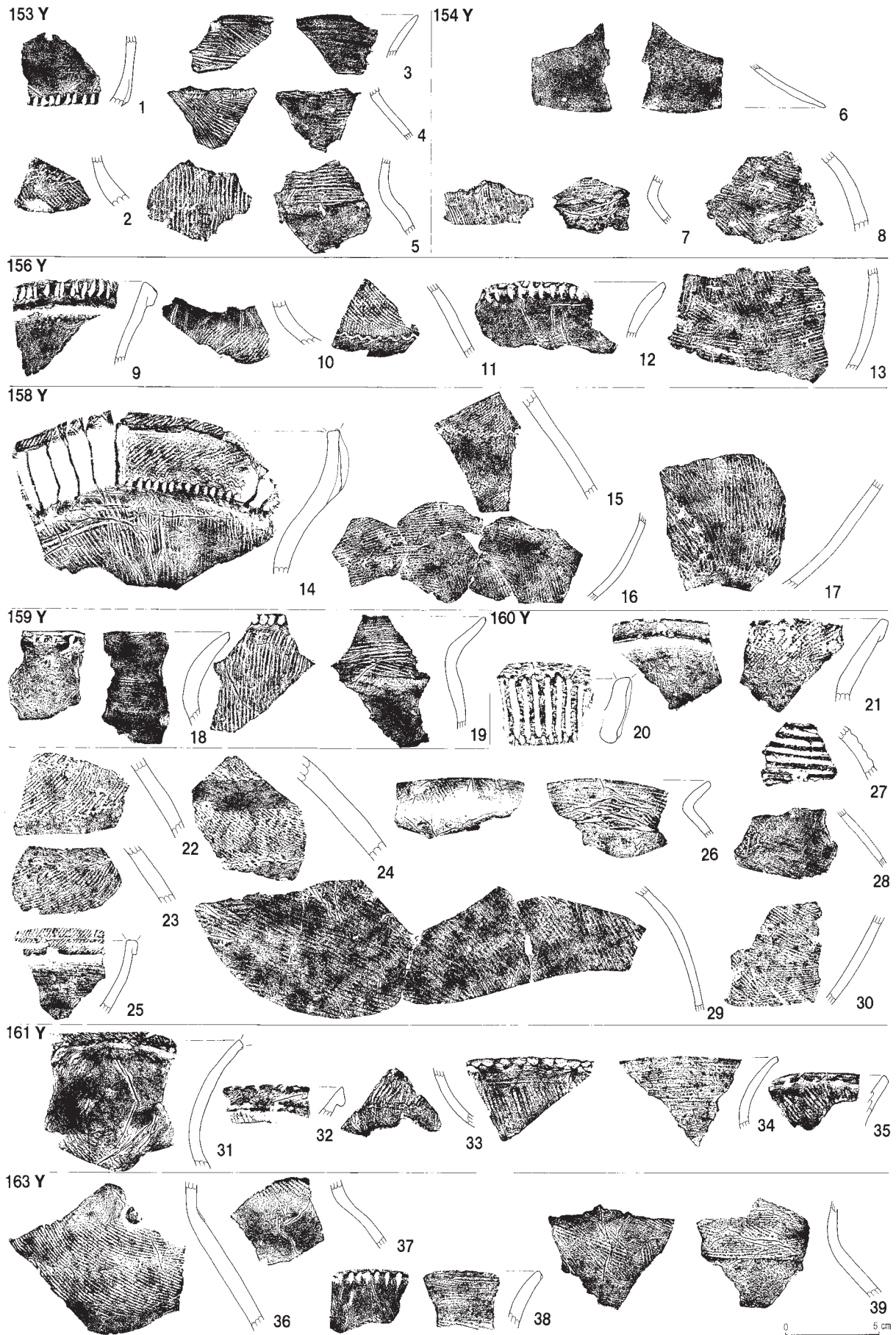
第181図38は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。39は頸部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は38が灰褐色（7.5YR4/2）、39が黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

164号住居跡（第182図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔構造〕 8方・250Dに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）420×402cm。（主軸方位）N-37°-W。（壁高）3～5cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅7～15cm・下幅4～7cm・深さ2～9cmを測り、北側を除き検出された。（床面）全面軟弱で遺存状態は不良である。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。径57cmの円形を呈する粘土火皿で、深さ1cmの掘り込みをもつ。粘土の遺存状態は不良である。（柱穴）主柱穴は検出されなかった。南壁下の1本は入口施設となるうか。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 ローム面を床面とするため、詳細は不明。



第181図 153・154・156・158～161・163号住居跡出土遺物 (1/3)

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

172号住居跡（第183図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 北西側調査区外。10方・273Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明×558cm。（主軸方位）不明。（壁高）33～44cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）大きく10方に切られているため詳細は不明である。全体に軟弱で遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）2本のピットが検出されたが、支柱穴とは断定できない。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 床面上と覆土中から少数出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

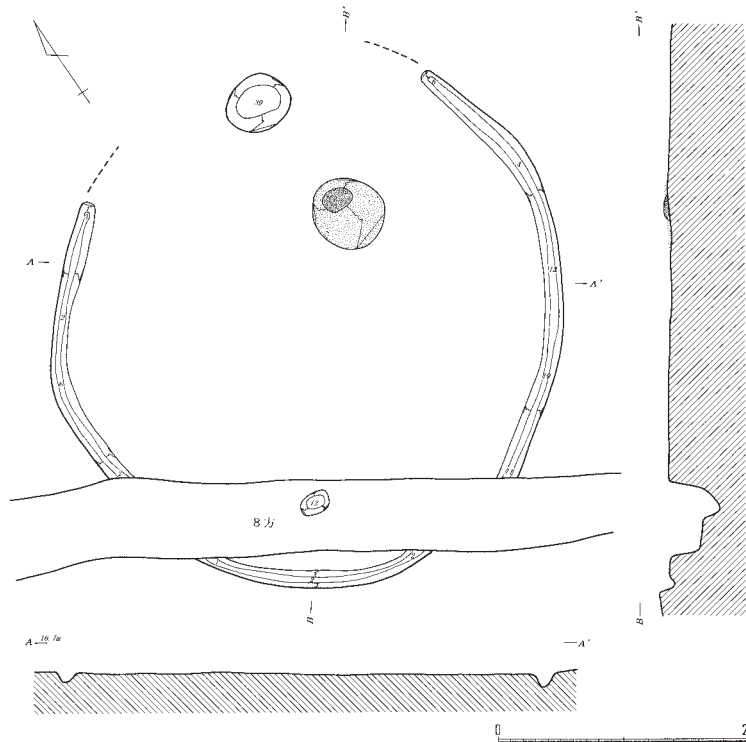
172号住居跡出土遺物（第184図、第203図1～4）

壺形土器（第203図1・2）

1は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

2は肩部破片。LRの単節縄文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

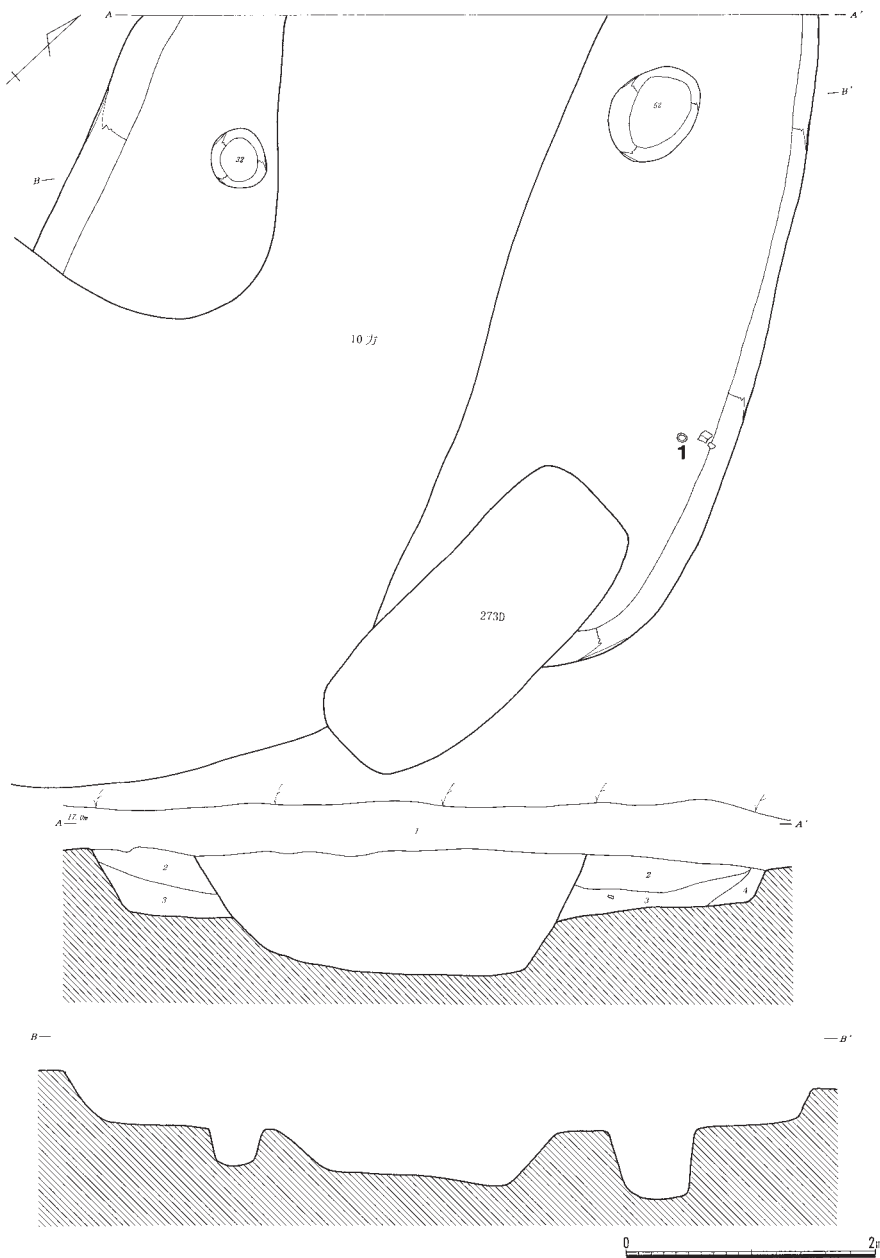
甕形土器（第184図1、第203図3・4）



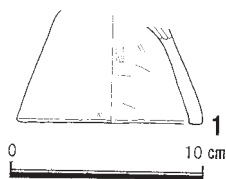
第182図 164号住居跡 (1/60)

第184図1は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。底径9.7cm。裾部へかけて僅かに内湾しながら広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。外面にはスリッブをかけてあると思われる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北東壁付近から出土した。

第203図3は口縁部破片、4は肩部破片。3は口唇部には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は3が灰褐色（7.5YR4/2）、4が黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・



第183図 172号住居跡 (1/60)



第184図 172号住居跡出土遺物 (1/4)

粗砂を含む。覆土中からの出土。

173号住居跡（第185図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 南東側調査区外。48・49Jを切り、8方に切られる。（平面形）不明。（規模）不明×474cm。（主軸方位）N-47°-W。（壁高）2～18cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅14～25cm・下幅4～10cm・深さ2～13cmを測り全周すると思われる。（床面）全体に軟弱であるが、部分的に硬化面を認める。（炉）90×78cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。（柱穴）北及び西コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を含む。

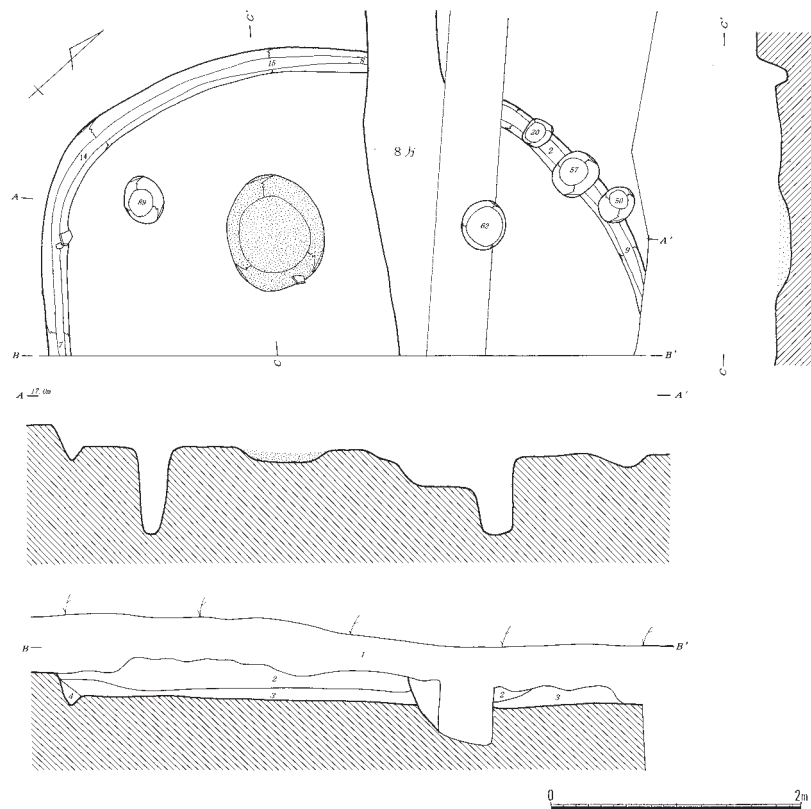
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

174号住居跡（第186図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。49Jを切り、279Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）261～40cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出できなかった。（床面）住居西側に硬化面を認める。（炉）65×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cm前後を測る。（柱穴）支柱穴と思われるものは検出でき



第185図 173号住居跡 (1/60)

なかった。(貯蔵穴) 検出できなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。
- 6層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 7層 暗褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
- 8層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。貼床充填土。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

176号住居跡 (第187図)

〔位置〕 29 I 地点。

〔構造〕 北東側調査区外。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×435cm。(主軸方位) N-43°-E。(壁高) 12~16cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅20~25cm・下幅6~10cm・深さ12~20cmを測り全周すると思われる。(床面) 攪乱で破壊されているため遺存状態は不良である。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。46×38cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 各コーナーの2本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

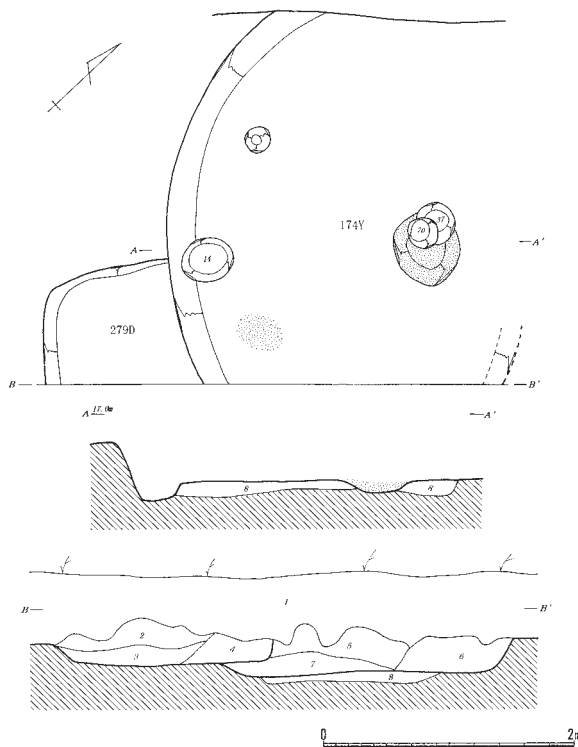
〔覆土〕 耕作による攪乱が著しく詳細は不明であるが、ローム粒子を含む黒褐色土が部分的に確認された。

〔遺物〕 覆土中から土錘が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

176号住居跡出土遺物 (第539図11)

細形管状土錘 (第539図11)



第186図 174号住居跡、279号土坑 (1/60)

片側端部の一部を欠損する。長さ4cm・径1.1cm・穴径0.4cm・重量3gを測る。手づくねで作られている。外面は丁寧にナデられる。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈し、胎土には粗砂を含むがきめ細い。覆土中からの出土。

178号住居跡(第188図)

〔位置〕28Ⅱ地点。

〔構造〕(平面形)不整正方形。(規模)260×258cm。(主軸方位)N-9°-W。(壁高)22~27cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅7~16cm・下幅5~7cm・深さ6~9cmを測る。(床面)平坦だが全体に軟弱で遺存状態は不良である。(炉)住居中央から北に偏って位置する。95×53cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。掘り込み外の北側の焼土は灰の掻き出しのためか。(柱穴)検出されなかった。(貯蔵穴)検出されなかった。

〔覆土〕耕作による攪乱が著しく詳細は不明であるが、ローム粒子を僅かに、炭化物粒子を多く含む黒褐色土が確認できた。また北壁際には焼土の堆積がめだつ。

〔遺物〕図示できる遺物はなかった。

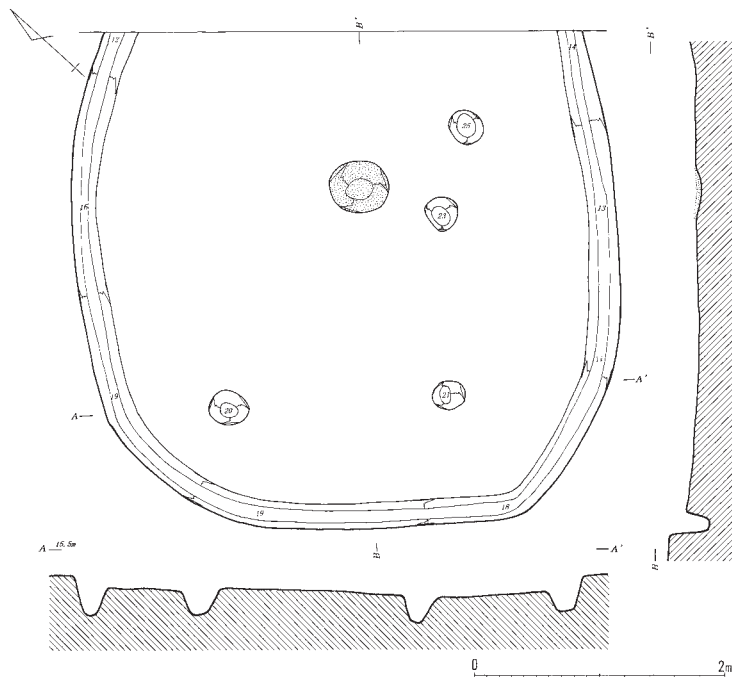
〔時期〕弥生時代後期~古墳時代前期。

〔所見〕焼失家屋の可能性はある。

179号住居跡(第189図)

〔位置〕28Ⅱ地点。

〔構造〕(平面形)隅丸長方形。(規模)330×295cm。(主軸方位)N-41°-E。(壁高)29~33cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅8~16cm・下幅4~9cm・深さ1~6cmを測り全周する。(床面)壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。全体に遺存状態は良好である。(炉)住居中央から北東に偏って位置する。75×60cmの楕円形を呈する地床炉で深さ8cmの掘り込みをもつ。(柱穴)検出されなかった。(貯蔵穴)南東コーナー壁下に位置する。32×30cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。周囲には幅44cm前後・高さ4cm前後の凸堤を弧状に構築している。



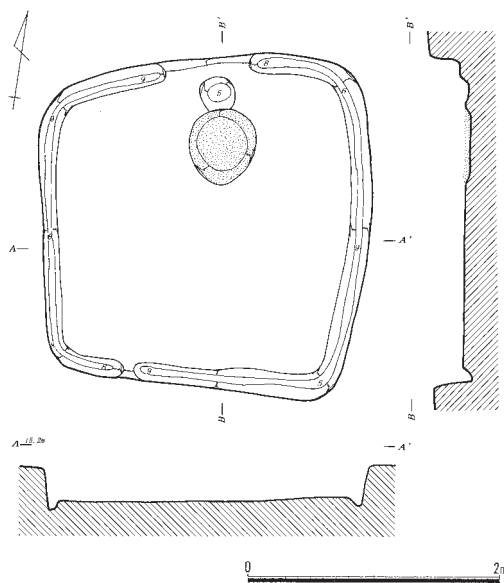
第187図 176号住居跡(1/60)

〔覆土〕

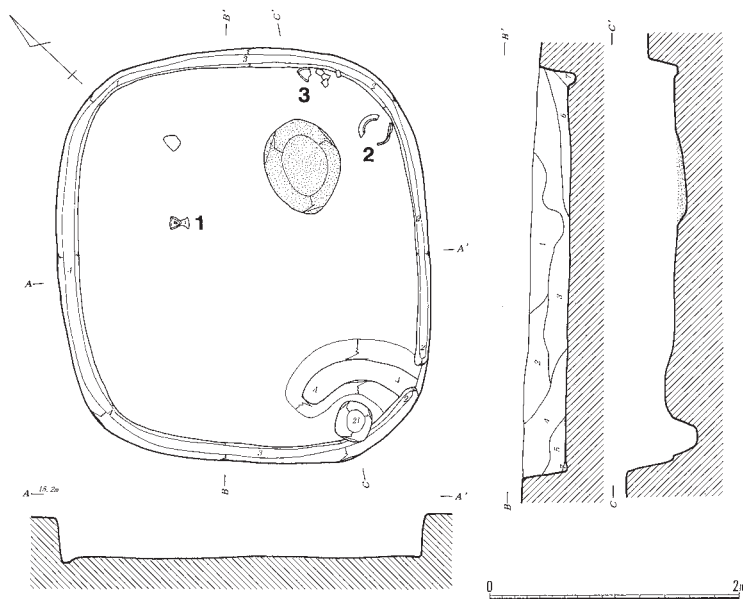
- 1層 耕作土。
 - 2層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
 - 3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
 - 4層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 - 5層 にぶい黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
 - 6層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 - 7層 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。
- 堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 床面上に土器片が点在する。

〔時期〕 古墳時代前期前半。



第188図 178号住居跡 (1/60)



第189図 179号住居跡 (1/60)

179号住居跡出土遺物（第190図、第203図5～10）

壺形土器（第203図6）

6は頸部破片。R Lの単節縄文が施され、縄文帯内部には円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は暗赤褐色（2.5YR3/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

高坏形土器（第190図1、第203図5・7）

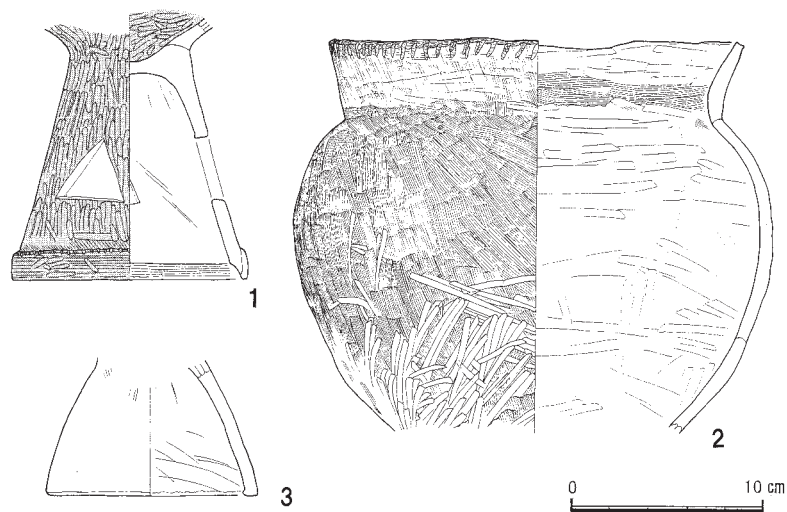
第190図1は脚台部1/2程度が残存する。第203図7は口縁部破片、5は脚台部破片で1と同一個体である。推定裾部径12.3cm。口縁部は折り返し状口縁で口縁部外面にはL Rの単節縄文が施され、縄文帯内部には直径約1cmの円形赤彩文が施され、刻みが施される。以下2段の突帯が巡り、刻みが施される。脚部には一辺4.5cmの三角形の孔が穿たれている。脚裾端部には幅1.5cmの粘土帯を貼付し、上端にはヘラ状工具により押捺された刻みが巡る。脚裾端部内面には、ヘラ状工具により削り取られたように稜がみられる。脚部外面と坏部内面は丁寧に縦方向にヘラミガキされ赤彩される。脚部内面はヘラナデされるが僅かに工具痕が残る。脚裾端部にはハケ目痕が残る。色調は赤彩部ににぶい赤褐色（2.5YR5/4）、内面ににぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央からやや北寄り床面上より出土した。

甕形土器（第190図2・3、第203図8～10）

第190図2はいわゆる多摩型甕。甕部の1/2程度が残存する。口径21.7cmを測る。口縁部は直立し、体部は球形を呈する。口唇部は面取りされ、口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。外面はヘラナデされるが、縦位・斜位のハケ目痕が残る。内面は外面とは異なる工具でヘラナデされるが口縁部内面には横位のハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。特に橙色粒子は非常に多量に含まれているのが観察される。東コーナー壁際床面上から出土した。

3は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径11.2cm。脚裾部へかけて内湾気味に広がる器形である。脚裾端部には粘土のはみ出しがみられる。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を多く含む。東コーナー付近の床面上から出土した。

第203図8・10は体部破片、9は脚台部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は8がにぶい褐色（7.5YR5/3）、9がにぶい褐色（7.5YR6/3）、10が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。



第190図 179号住居跡出土遺物（1/4）

259号住居跡（第191図）

〔位置〕 35地点。

〔構造〕 南東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）42～46cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）掘り込みが深く、遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。
- 3層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 赤黒色土（2.5YR2/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ロームブロックを部分的に含む。やや粘質。
- 6層 黒褐色土（7.5YR2/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

259号住居跡出土遺物（第203図11～13）

壺形土器（11）

肩部破片。上からLRの単節縄文の端末結節が2段施され、その下にRLの単節縄文が施される。縄文帯内部には円形赤彩文がみられる。縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

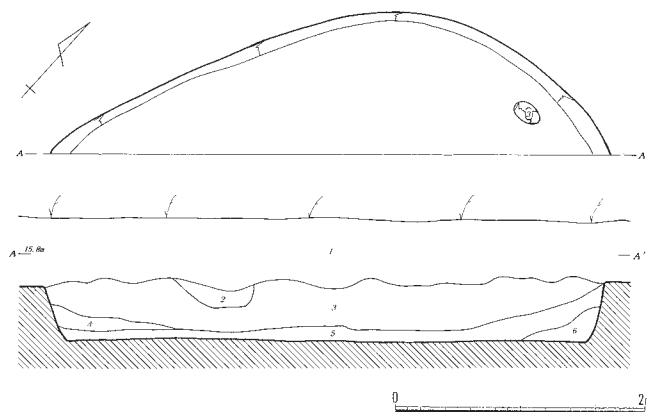
甕形土器（12・13）

12は体部破片、13は脚台部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は12が（5YR5/4）、13が灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

260号住居跡（第192図）

〔位置〕 35地点。

〔構造〕 北西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）35～44cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際と貯蔵穴の周辺を除き硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）住居中央南壁下の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東コーナーの近くに位置する。66×63cmを呈し、深さ22cmを測る。幅33cm前後・高さ1～4cmの凸堤



第191図 259号住居跡（1/60）

を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。部分的に硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。硬質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。軟質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 9層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。軟質。
- 10層 黒色土 (10YR2/1)。炭化物粒子を多く含む。やや軟質。
- 11層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 15層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。細礫を多く含む。軟質。
- 16層 黒色土 (10YR2/1)。炭化材片を多く含む。軟質。
- 17層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。軟質。
- 18層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。軟質。

東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

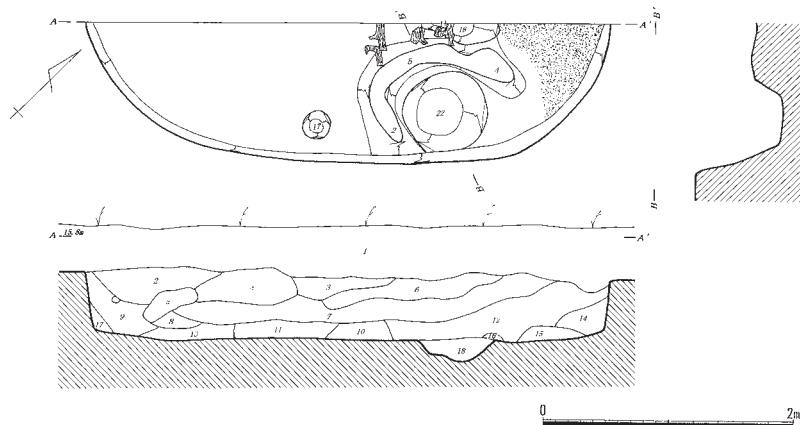
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

260号住居跡出土遺物 (第203図14～17)

壺形土器 (14)

複合口縁部破片。口縁部外面には集合沈線が施される。内面にはLRの単節縄文の端末結節とRLの単節縄文が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈し、胎土には礫・粗砂を含むが、橙色粒子を特に多く含む。



第192図 260号住居跡 (1/60)

甕形土器 (15~17)

15は口縁部破片。16・17は体部破片。15の口唇部外面には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は15がにぶい橙色 (5YR6/4)、16・17は黒褐色 (5YR3/1) を呈する。いずれも胎土には礫・粗砂を含む。

すべて覆土中から出土した。

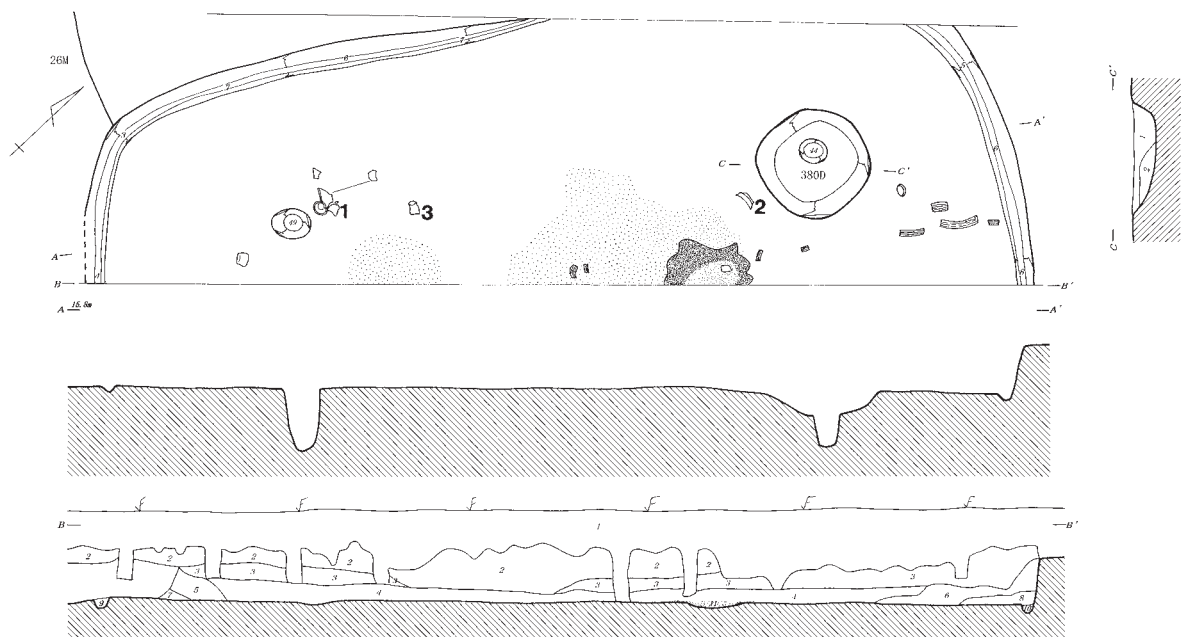
261号住居跡 (第193図)

〔位置〕 35地点。

〔構造〕 南東及び北西側調査区外。26Mを切り、380Dに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×744cm。(主軸方位) N-38°-E。(壁高) 35~38cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅9~19cm・下幅5~10cm・深さ2~9cmを測る。(床面) 硬質ロームを床面とする。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。炉跡の北側は被熱を受けて赤化している部分が広範囲に検出される。(炉) 不明×65cmの粘土火皿で深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 東コーナー及び380D内のピットが支柱穴の一部か。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土 (N2/0)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土 (5YR2/1)。ローム粒子・焼土粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。床面付近では部分的に炭化材を含む。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。硬質。
- 7層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。粘質。
- 10層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。粘質。



第193図 261号住居跡、380号土坑 (1/60)

11層 黒褐色土 (5YR2/2)。焼土粒子を多く含む。

〔遺物〕 床面上に土器片が点在する。

〔時期〕 古墳時代前期。

〔所見〕 焼失家屋の可能性はある。

261号住居跡出土遺物 (第194図、第539図4)

壺形土器 (第194図1)

頸部と肩部のみ残存する。頸部は強くくびれて口縁部へ開く器形である。肩部にはS字状結節文に区画されたLRの単節縄文が施される。外面は縄文帯以外は斜方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面は口縁部が横方向にヘラミガキされ、以下、ヘラナデされる。色調は外面がにぶい黄橙色 (10YR7/3)、内面が浅黄橙色 (10YR8/3) を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。西寄りピット付近の床面上から出土した。

甕形土器 (第194図2・3)

2は口頸部1/4程度が残存する。推定口径19cm。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (5YR7/4) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。炉北側床面上から出土した。

3は脚台部の1/4程度が残存する。推定裾部径11.6cm。裾部へかけて「ハ」字状に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。北西寄り床面上から出土した。

ガラス製小玉 (第539図4)

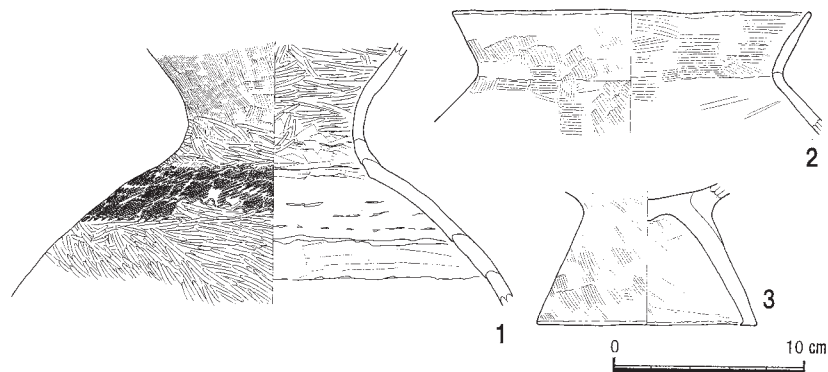
長さ1cm・径0.8cm・穴径0.3cm・重量0.7gを測る。色調は濃紺色を呈する。覆土中から出土した。

262号住居跡 (第195図)

〔位置〕 35地点。

〔構造〕 東及び西側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明×484cm。(主軸方位) N-22°-E。(壁高) 18~27cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の北側を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。53×30cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。掘り込み外の東側の被熱は、灰の掻き出しのためであろうか。(柱穴) 北東及び南東コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 南壁下に位置する。63×43cmの楕円形を呈し、深さ32cmを測る。周囲には幅43cm前後・高さ1~3cmの凸堤を鍵状に構築している。

〔覆土〕



第194図 261号住居跡出土遺物 (1/4)

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕床面上に土器片が点在する。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

262号住居跡出土遺物 (第196図、第203図18～22)

壺形土器 (第203図18～22)

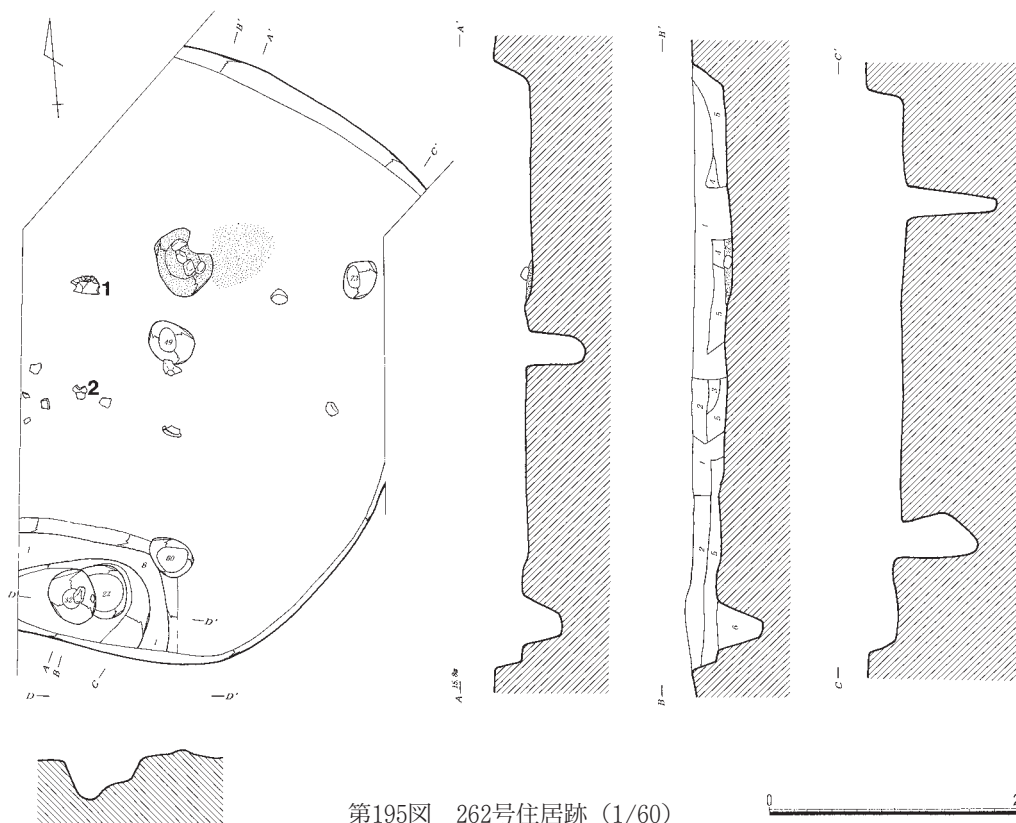
18は複合口縁部破片。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端には刻みが施される。縄文帯内部には形・大きさが不規則な円形赤彩文が2段に施されているのが観察される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

19は単純口縁部破片。口唇部は角状に面取りされヨコナデされる。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

20は頸部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端には3段S字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。

21は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、境目には結節文がみられる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。

22は口縁部破片で途中屈曲する器形。外面にはS字状結節文がみられる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子を含む。



第195図 262号住居跡 (1/60)

すべて覆土中から出土した。

甕形土器 (第196図1・2)

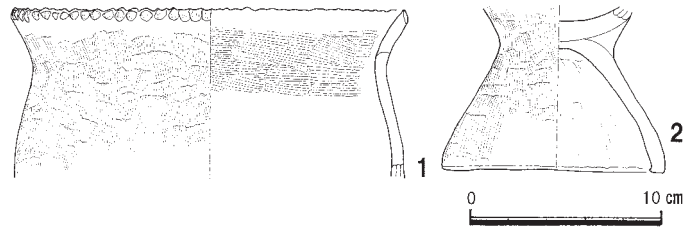
1は甕部上半1/4程度が残存する。推定口径21cm。頸部はゆるやかにくびれて口縁部は直立気味に立ち上がる。口唇部外面には刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR 6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。住居跡中央付近から出土した。

2は脚台部のみ残存する。裾部径11.8cm。裾部へかけて内湾しながら開く器形。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央付近から出土した。

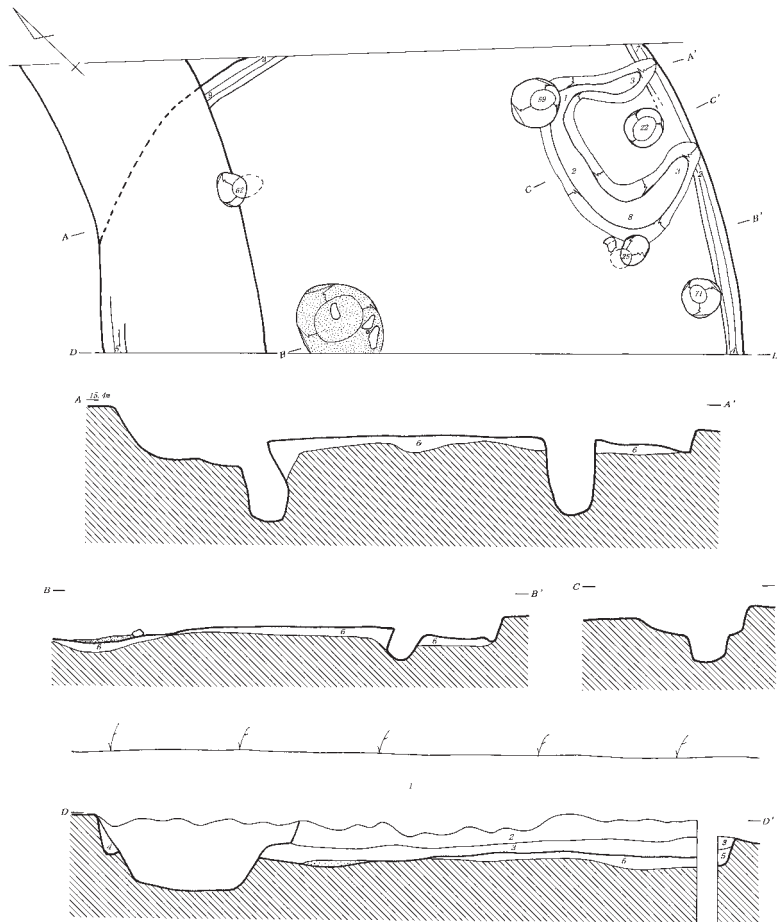
263号住居跡 (第197図)

〔位置〕 36地点。

〔構造〕 北西側が18方に切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) N-60°-W。(壁高) 16~21cmを



第196図 262号住居跡出土遺物 (1/4)



第197図 263号住居跡 (1/60)

測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅15~20cm・下幅5cm前後・深さ18cm前後を測る。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。(炉) 北西側に位置する。不明×65cmの地床炉で、深さ5cm前後の掘り込みをもつ。掘り込み際と中央に礫を検出する。(柱穴) 北及び西コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。南東壁下から僅かに西に偏った1本は住居中央に傾斜をもって穿たれていて梯子穴を想定させる。(貯蔵穴) 東壁際中央から僅かに北東に偏って位置する。径30cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。幅30cm前後・高さ8cm前後の凸堤が馬蹄形状に構築されている。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 5層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 6層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 床面上と覆土中から少数出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

263号住居跡出土遺物(第203図23~25)

壺形土器(23)

複合口縁部破片。口縁部外面にはRLの単節縄文が施され、棒状浮文が貼付される。下端には刻みが施される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。胎土には礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

甕形土器(24・25)

24は口縁部から体部上半の破片。頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。凸堤そばから出土した。

25は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈し、胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

264号住居跡(第198図)

〔位置〕 36地点。

〔構造〕 北東側調査区外。27Mに切られる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明。(主軸方位) N-38°-E。(壁高) 26~32cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 南西及び北西コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ロームブロックを含む。硬質。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや粘質。
- 6層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 7層 黒色土(7.5YR2/1)。焼土粒子を多く含む。焼土粒子を多く含む。やや軟質。

- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや軟質。
- 9層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 10層 暗赤褐色土 (5YR3/3)。焼土粒子を多く含む。炭化材片を含む。軟質。
- 11層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化材片を含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 13層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。焼土粒子を多く含む。炭化材片を含む。軟質。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

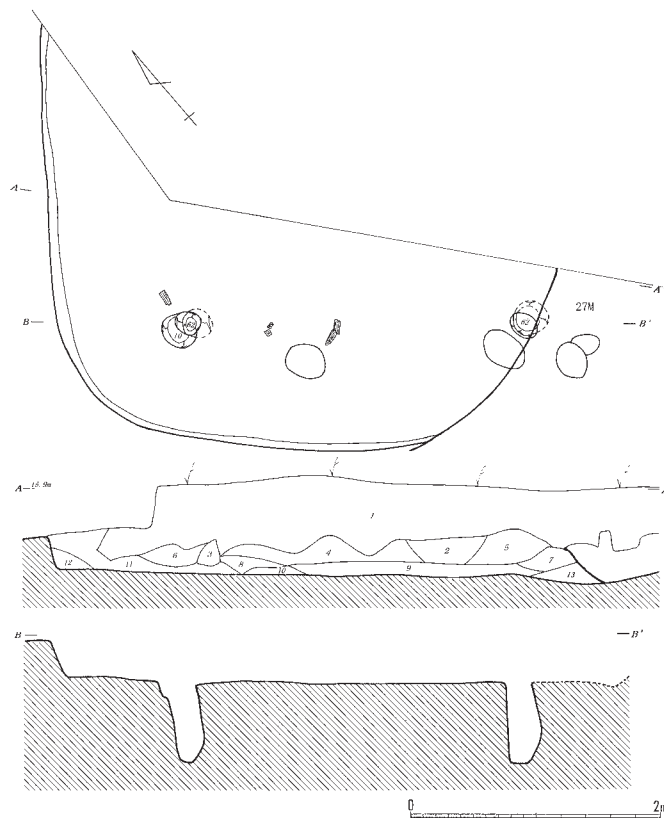
265号住居跡 (第199図)

〔位置〕 36地点。

〔構造〕 北東側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明×516cm。(主軸方位) N-42°-E。(壁高) 26~35cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅8~14cm・下幅2~8cm・深さ1~12cmを測る。(床面) 硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 南西及び北西コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。凸堤を切っている1本は、入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南西壁中央から南東に偏って位置する。63×60cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。幅33cm前後・高さ1~3cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。



第198図 264号住居跡 (1/60)

- 3層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 7層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。軟質。
- 9層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

南東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

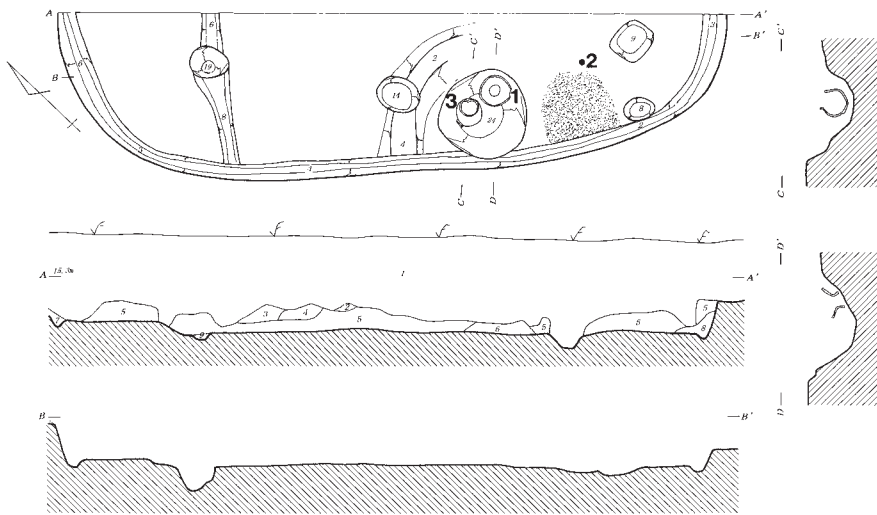
〔遺物〕 貯蔵穴内と床面上から出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

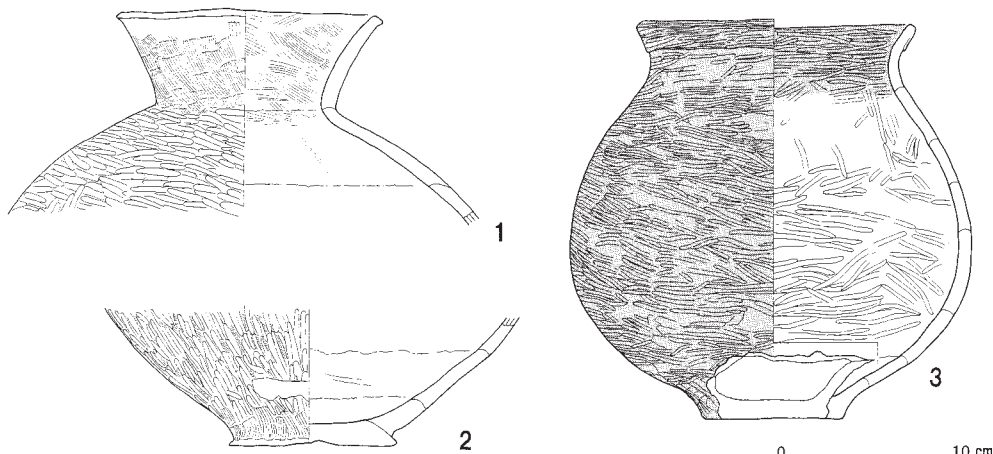
265号住居跡出土遺物 (第200図)

壺形土器 (第200図)

1は体部上半より上が残存する。口径14cmを測る。張りのある体部から頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇端部は角状に面取りされヨコナデされる。口頸部内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が



第199図 265号住居跡 (1/60)



第200図 265号住居跡出土遺物 (1/4)

残る。体部外面は横方向にヘラミガキされる。体部内面はヘラナデされる。色調は橙色（2.5YR7/6）を呈する。胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴覆土中から出土した。

2は底部のみ残存する。底径8.7cm。平底の底部から立ち上がり広がる器形である。外面は縦方向にヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は内面が褐灰色（5YR4/1）、外面がにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には礫・粗砂・橙色粒子を含む。南コーナーから出土した。

3は完形の広口壺形土器。口径14.2cm・底径7.4cm・器高21cmを測る。底部は平底で体部は体部下半に最大径を持つ。頸部はゆるやかにくびれて、口縁部は短い複合口縁を呈する。外面と口縁部内面は横方向に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされるが、一部にミガキ痕がみられる。底部には木葉痕が残る。体部下位に穿孔痕がみられる。色調は赤褐色（5YR4/8）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含み、特に白色粒子を多く含む。貯蔵穴内覆土中からの出土。

266号住居跡（第201図）

〔位置〕 13Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×403cm。（主軸方位）N-70°-E。（壁高）40~48cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅21~33cm・下幅5~11cm・深さ5~8cmを測り、西側コーナーで止まる。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き部分的に硬化面を認める。被熱で赤化している部分もある。（炉）住居中央から東に偏って位置する。53×47cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。（柱穴）北及び東・西コーナーに近い3本が支柱穴の一部と思われる。西壁下やや東に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西コーナー壁下に位置する。径31cmの円形を呈し、深さ17cmを測る。幅28cm前後・高さ1~3cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 4層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子・炭化材片を含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや粘質。
- 8層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 11層 暗褐色土（10YR3/3）。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 12層 黒褐色土（10YR3/2）。ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

南西コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 多量に出土したが、床直はほとんど無く、壁際から流れ込んだような出土状態である。床面上に炭化材が散乱している。

〔時期〕 古墳時代前期（覆土中から出土した遺物は床面上から出土したものより新相を示す）。

〔所見〕 覆土中に焼土・炭化物を含み、床面上に炭化材が散乱するなど、焼失家屋の可能性が高い。

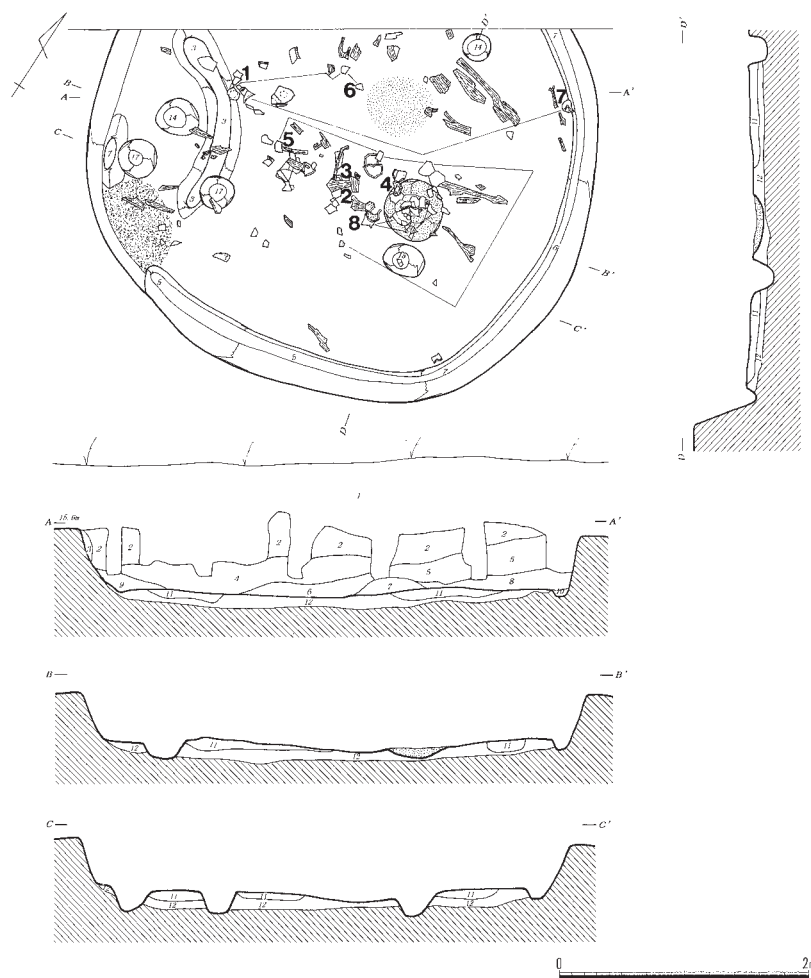
266号住居跡出土遺物（第202図、第203図26～29）

壺形土器（第202図1～4、第203図26・27）

第202図1はいわゆる菊川式系の壺で2/3程度が残存する。口径13.6cm・底径9.2cm・器高22.1cmを測る。平底の底部から開きながら立ち上がり、体部下位で一度屈曲してすぼまる器形である。これはある程度積み上げた段階で一度乾燥させて、安定した所でさらに上に積み上げて作られているためであろう。頸部はくびれて短い複合口縁部は外傾する。口唇端部にはLRの単節縄文が施される。肩部外面には2条のS字状結節文に区画され、撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。口縁部内面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。口縁部外面はヨコナデされる。外面と口縁部内面は縄文帯以外がヘラミガキされる。体部内面はヘラナデされる。色調は橙色（5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子・橙色粒子を含む。貯蔵穴凸堤付近覆土中から出土した。

2も菊川式に系譜をもつ単純口縁壺。ほぼ完形で、口径10.2cm・底径4.7cm・器高13.5cmを測る。体部は張り出しが乏しく、口縁部は幅広く頸部は丸く屈曲し、内湾気味に広がる器形である。内外面共にヘラナデされる。内面には工具痕が残る。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子・輝石を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央付近床面上から出土した。

3は口縁部を欠く。底径5.3cm・現存高8.7cmと小型である。底部は平底。体部は張りが乏しく、体部最大径より器高の方が高く細長くみえる。頸部の屈曲は弱く口縁部は直立気味に立ち上がる器形と推測される。肩部にはRLの単節縄文の末端結節縄文が施される。縄文帯内部には円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調は赤彩部が赤褐色（2.5YR4/3）、内面と底部が暗赤灰色（2.5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂を僅かに、軽石と思われる白色粒子を多く含む。住居跡中央付近の床面上から出土した。



第201図 266号住居跡（1/60）

4は平底の底部から大きく外傾しながら立ち上がり、体部下半で屈曲し、頸部へかけてすぼまる無花果形の器形である。外面はヘラナデされるが、部分的にヘラミガキされている。体部下半には黒斑が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・輝石・粗砂・白色粒子を多く含む。炉付近から出土した。

第203図26は体部中位から上の破片。口縁部は肥厚する。体部は球状を呈し、頸部はくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には不明瞭な棒状浮文が貼付される。外面と口縁部内面はヘラミガキされる。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。住居跡中央付近覆土中からの出土。

27は肩部破片。外面には1段目にRLの単節縄文、2段目にLRの単節縄文の端末結節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

鉢形土器(第202図5・6、第203図7・8)

第202図5は広口壺形土器か。1/2程度が残存する。推定口径21cm・推定底径7.8cm・器高16cmを測る。やや上げ底気味の底部から立ち上がり、体部上半に最大径をもつ球形の体部へ至る。頸部はゆるやかにくびれて短い口縁部は外傾する。口唇部は面取りされヨコナデされる。外面は横位にヘラミガキされるが、一部にハケ目痕が残る。内面は体部上半より上がヘラミガキされ赤彩される。以下ヘラナデされるが部分的に赤彩痕がみられる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)、赤彩部がにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

6は1/2程度が残存する。推定口径8cm・底径7cm・器高9.2cmを測る。やや上げ底気味の底部から立ち上がり、内湾しながら開く器形である。口唇部外面には幅7mm位の浅い凹線が一周する。底部はナデ、口唇部内外面共にヨコナデ。体部は内外面共にヘラナデされる。色調は浅黄橙色(7.5YR8/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

第203図28・29は口縁部から体部にかけての破片。高坏形土器の可能性もある。28は口縁部外面の輪積痕で区画された部分にLRの単節縄文が施され、縄文帯内部には不規則でやや形の崩れた円形赤彩文がみられる。29の体部は丸く、複合口縁は内湾する。いずれも縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は共ににぶい褐色(2.5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。28は住居跡中央からやや南より床面上から出土した。29は住居跡中央付近覆土中からの出土。

甕形土器(第202図7・8)

7は全体の1/2程度が残存する。推定口径19.7cm・裾部径11.1cm・器高27.3cmを測る。体部中位に最大径をもつ球状の体部から頸部で強くくびれて口縁部は開く器形である。棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、体部外面は磨耗が激しく不明瞭。色調は明黄褐色(10YR7/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡北東と住居跡中央の覆土中から分割して出土。

8は輪積痕甕。全体の約1/3を欠損する。推定口径11cm・裾部径9.8cm・器高25cmを測る。口縁部に4段の輪積痕を明瞭に残す。輪積痕は幅約1cmで、上から指頭等で押えつけた痕がみられる。体部は球状を呈し、頸部はゆるやかにくびれて口縁部は開く器形である。脚台部は直線的に開く。口唇部外面には浅く押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。住居跡中央と炉の上の覆土中から分割して出土。

267号住居跡(第204図)

〔位置〕38地点。

〔構造〕北側調査区外。(平面形)楕円形か。(規模)不明×435cm。(主軸方位)N-25°-W。(壁高)18~24cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)全体に軟弱だが、南東コーナー付近に部

分的に硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 東壁下に位置する。67×48cmの楕円形を呈し、深さ37cmを測る。

〔覆土〕

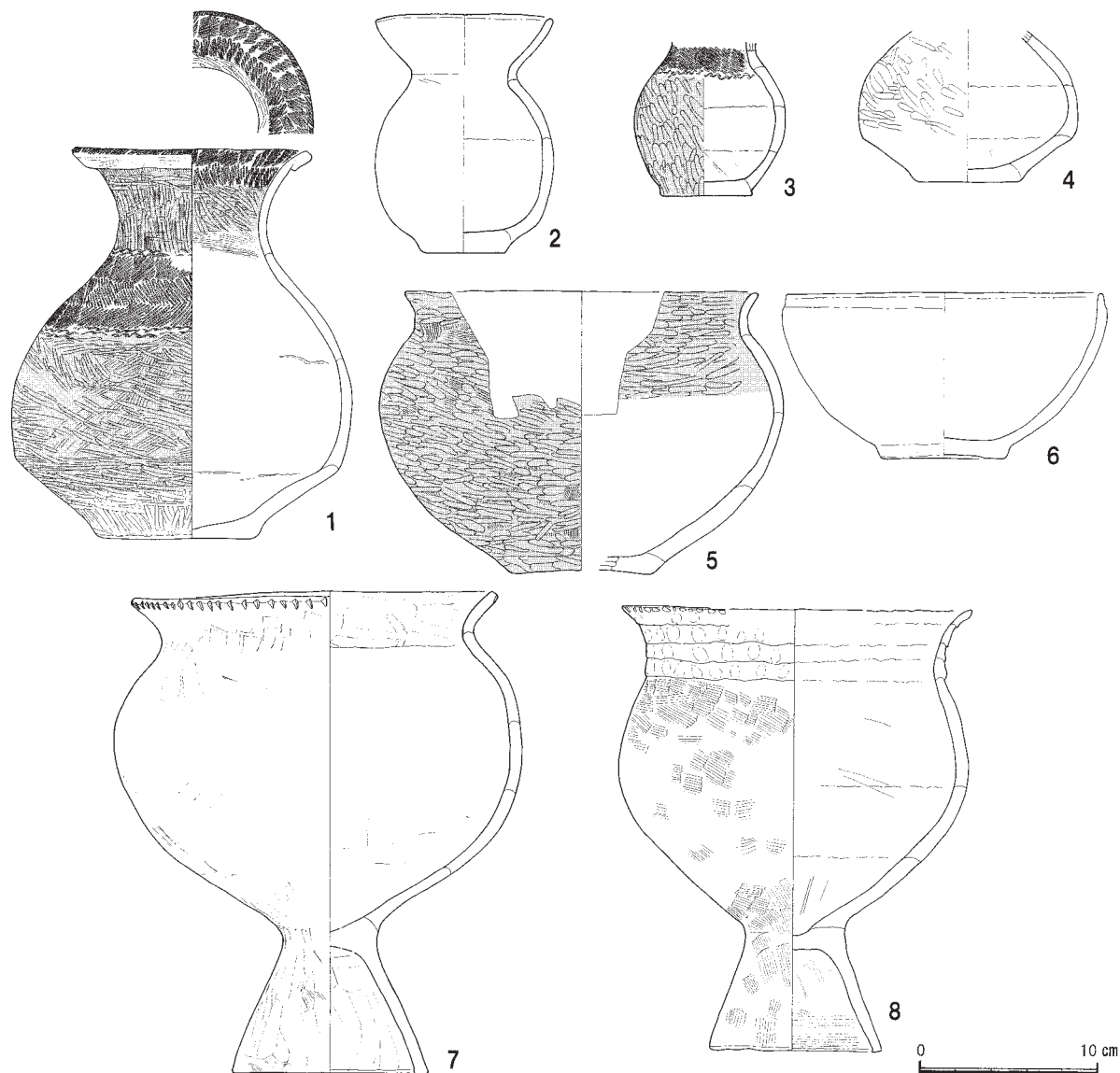
- 1層 耕作土。
- 2層 暗灰色土 (N3/0)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 褐灰色土 (10YR4/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。やや粘質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 床面上に土器片が点在する。

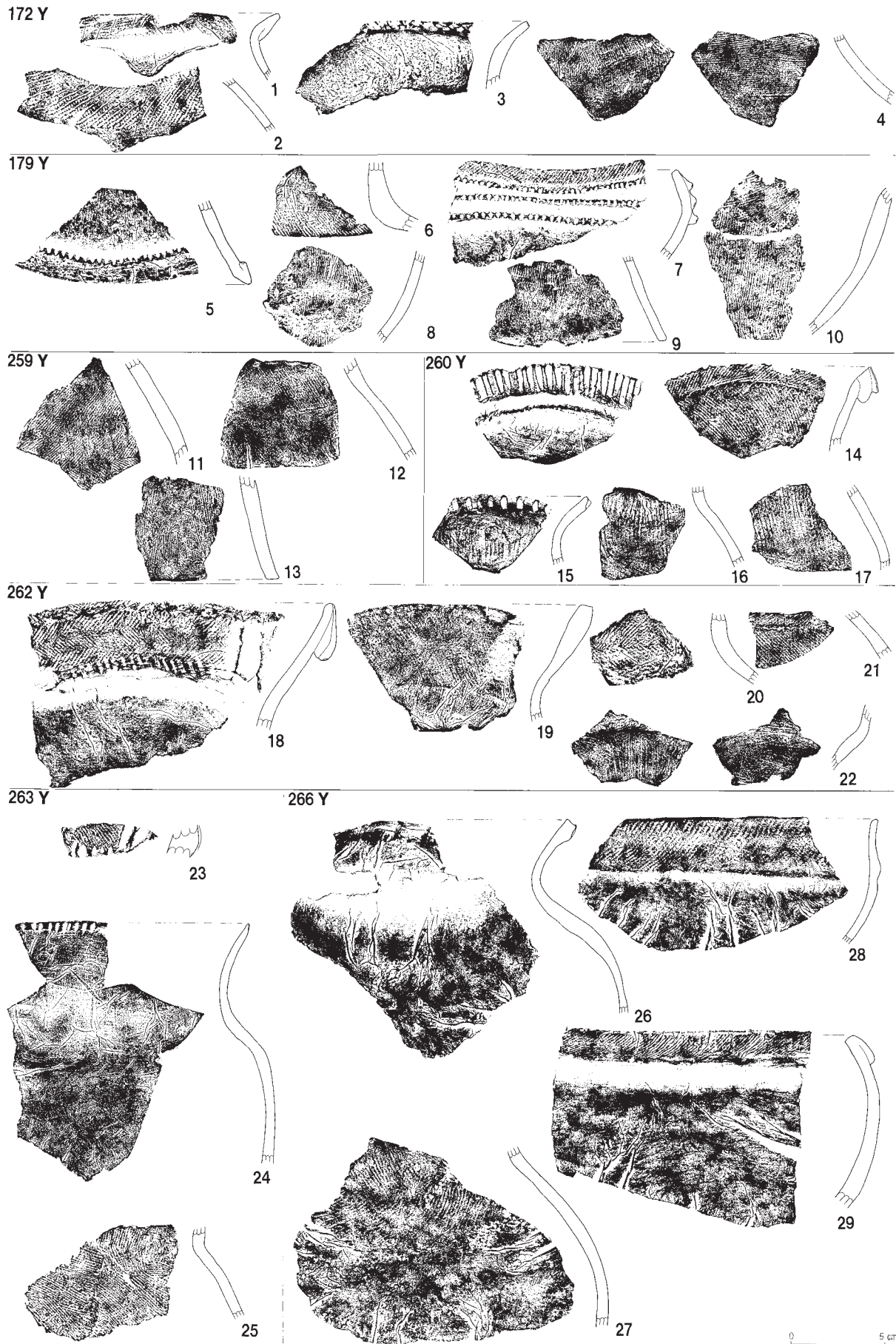
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

267号住居跡出土遺物 (第221図1)

壺形土器 (第221図1)



第202図 266号住居跡出土遺物 (1/4)



第203図 172・179・259・260・262・263・266号住居跡出土遺物 (1/3)

複合口縁破片。339Y15の壺形土器と接合した。口縁部内面には付加条縄文が施される。口唇部外面には刻みが施される。頸部内外面共に縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。南コーナー付近床面上から出土した。

268号住居跡(第205図)

〔位置〕 38地点。

〔構造〕 南西側調査区外。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×265cm。(主軸方位) N-40°-E。(壁高) 27~31cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。38×35cmの円形を呈する地床炉で深さ1cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土(10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ロームブロック。
- 4層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。焼土粒子を含む。ロームブロックを部分的に含む。やや粘質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・炭化材片を含む。軟質。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

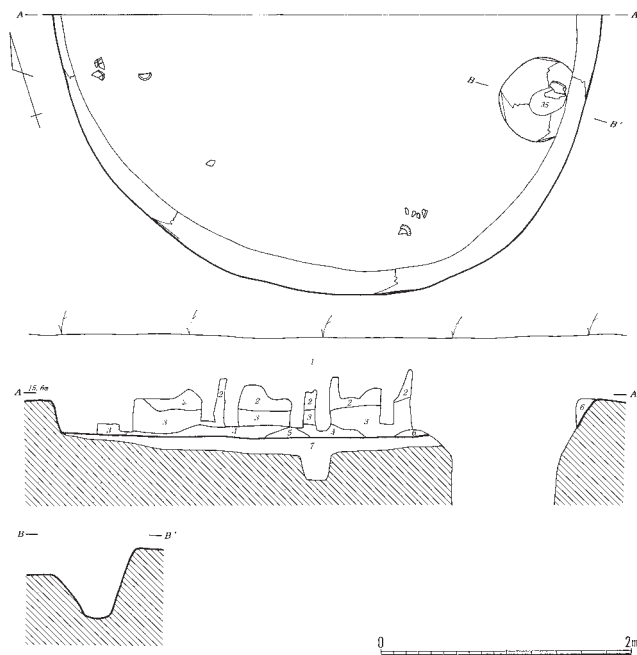
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

269号住居跡(第206図)

〔位置〕 38地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸正方形。(規模) 338×332cm。(主軸方位) N-44°-E。(壁高) 38~42cmを測り、60°前

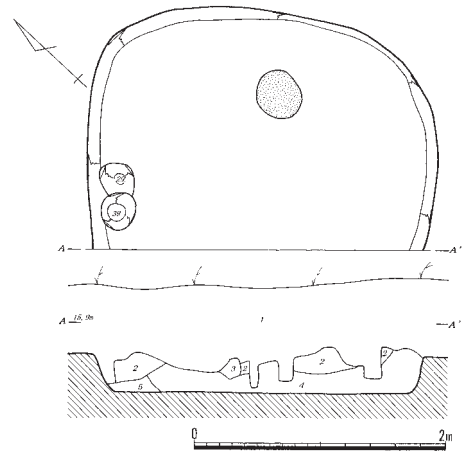


第204図 267号住居跡(1/60)

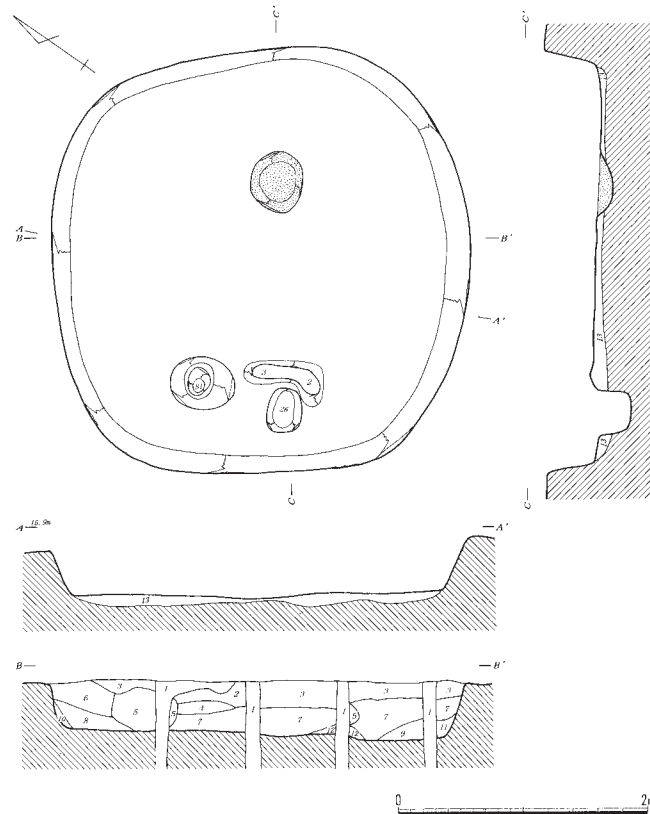
後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。東側に硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。45×41cmの円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されなかった。南西コーナーに近いピットは後世のものである。(貯蔵穴) 西壁下ほぼ中央に位置する。31×29cmの円形を呈し、深さ26cmを測る。周囲には幅21cm前後・高さ1～4cmの凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。ボロボロした感じ。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや粘質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 9層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を含む。やや硬質。
- 10層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。
- 11層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや粘質。
- 12層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。やや硬質。



第205図 268号住居跡 (1/60)



第206図 269号住居跡 (1/60)

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

269号住居跡出土遺物（第221図2・3）

壺形土器（2）

肩部破片。RLの単節縄文と鋸歯文がみられる。鋸歯文以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10YR5/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（3）

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

270号住居跡（第207図）

〔位置〕 38地点。

〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）22～28cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱だが、一部硬化面を認める。（炉）不明×43cmの地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

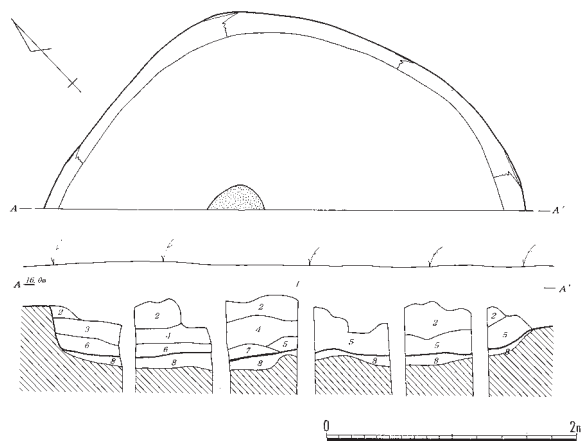
- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。軟質。
- 3層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 4層 暗赤灰色土（2.5YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 7層 暗褐色土（7.5YR3/3）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。焼土粒子を多く含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

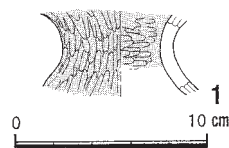
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

270号住居跡出土遺物（第208図、第221図4・5）

壺形土器（第208図1）



第207図 270号住居跡（1/60）



第208図 270号住居跡出土遺物（1/4）

頸部のみ残存する。頸部はくびれて口縁部は開く器形である。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第221図4・5）

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。外面には炭化物の付着がみられる。覆土中からの出土。

271号住居跡（第209図）

〔位置〕 38地点。

〔構造〕 東コーナー調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）307×263cm。（主軸方位）N-7°-W。（壁高）4～7cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦だが全体に軟弱である。

〔炉〕 住居中央から東に偏って位置する。39×36cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。（柱穴）住居中央西壁下の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を多く含み、ローム小ブロックを含む軟質の黒褐色土（7.5YR3/1）を基調とする。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

272号住居跡（第210図）

〔位置〕 38地点。

〔構造〕 北東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）8～19cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）遺存状態は良好で部分的に硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

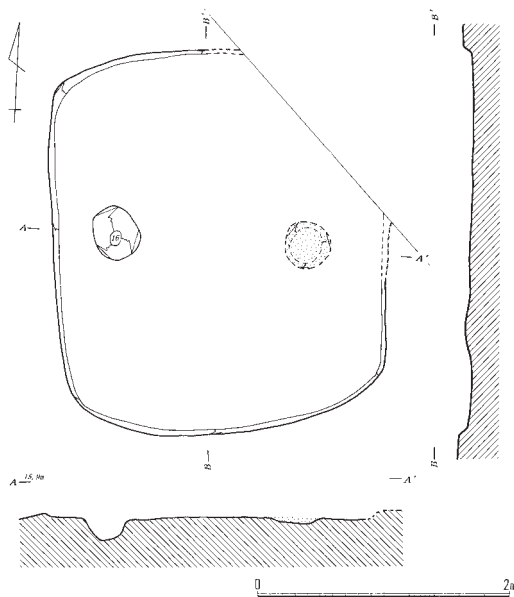
〔覆土〕

1層 耕作土。

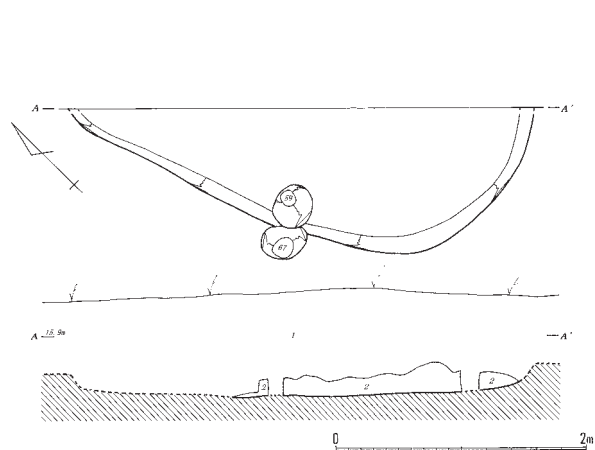
2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを部分的に含む。やや硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第209図 271号住居跡（1/60）



第210図 272号住居跡（1/60）

273号住居跡（第211図）

〔位置〕 24Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）径410cm。（主軸方位）N-30°-W。（壁高）21~24cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12~24cm・下幅4~9cm・深さ1~8cmを測り全周する。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。北側に部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。67×61cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。炉の南側に土器片を埋設している。（柱穴）南東壁下中央から北に偏って位置する1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東壁、東に偏って位置する。径42cmの円形を呈し、深さ21cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや粘質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 北西壁際と炉内を中心とした床面上に出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

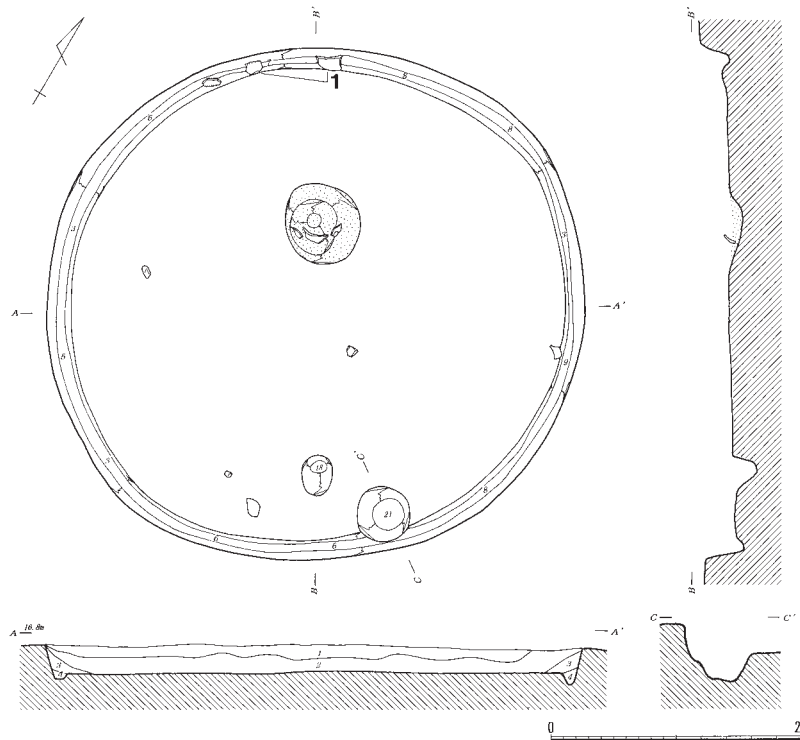
273号住居跡出土遺物（第212図、第221図6）

壺形土器（第221図6）

肩部破片。上から3条のS字状結節文・撚りの異なる単節縄文が羽状に6段・3条のS字状結節文・無文帯・3条のS字状結節文・撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。1段目のS字状結節文の上には円形浮文が5個貼付される。色調はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南と東の壁際床面上から出土した。

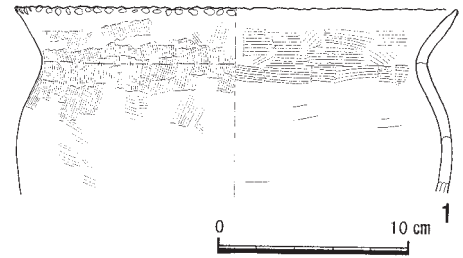
甕形土器（第212図1）

口頸部のみ残存する。口径13.5cmを測る。あまり張らない体部から頸部で屈曲し、口縁部は外傾する器形である。



第211図 273号住居跡（1/60）

口唇部外面にはやや左方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面には粗めのハケ目痕が残る。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北西壁際から出土した。



第212図 273号住居跡出土遺物（1/4）

274号住居跡（第213図）

〔位置〕 39 I・67 II地点。

〔構造〕 442・443 Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）760×660cm。（主軸方位）N-39°-E。（壁高）5～15cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅18～25cm・下幅5～11cm・深さ5～14cmを測り全周する。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。107×74cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ9cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い4本が支柱穴である。南壁下中央から北に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南壁下中央から南東に偏って位置する。117×81cmの楕円形を呈し、深さ8cmを測る。北側に幅40cm前後・高さ1～5cmの比較的小規模な凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/1）。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 7層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

北コーナーに砂礫を含む暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 実測可能個体は1個体のみで、あとは破片で出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

274号住居跡出土遺物（第214図、第221図7～11、第539図3）

壺形土器（第221図7）

肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が2段施される。内面はヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

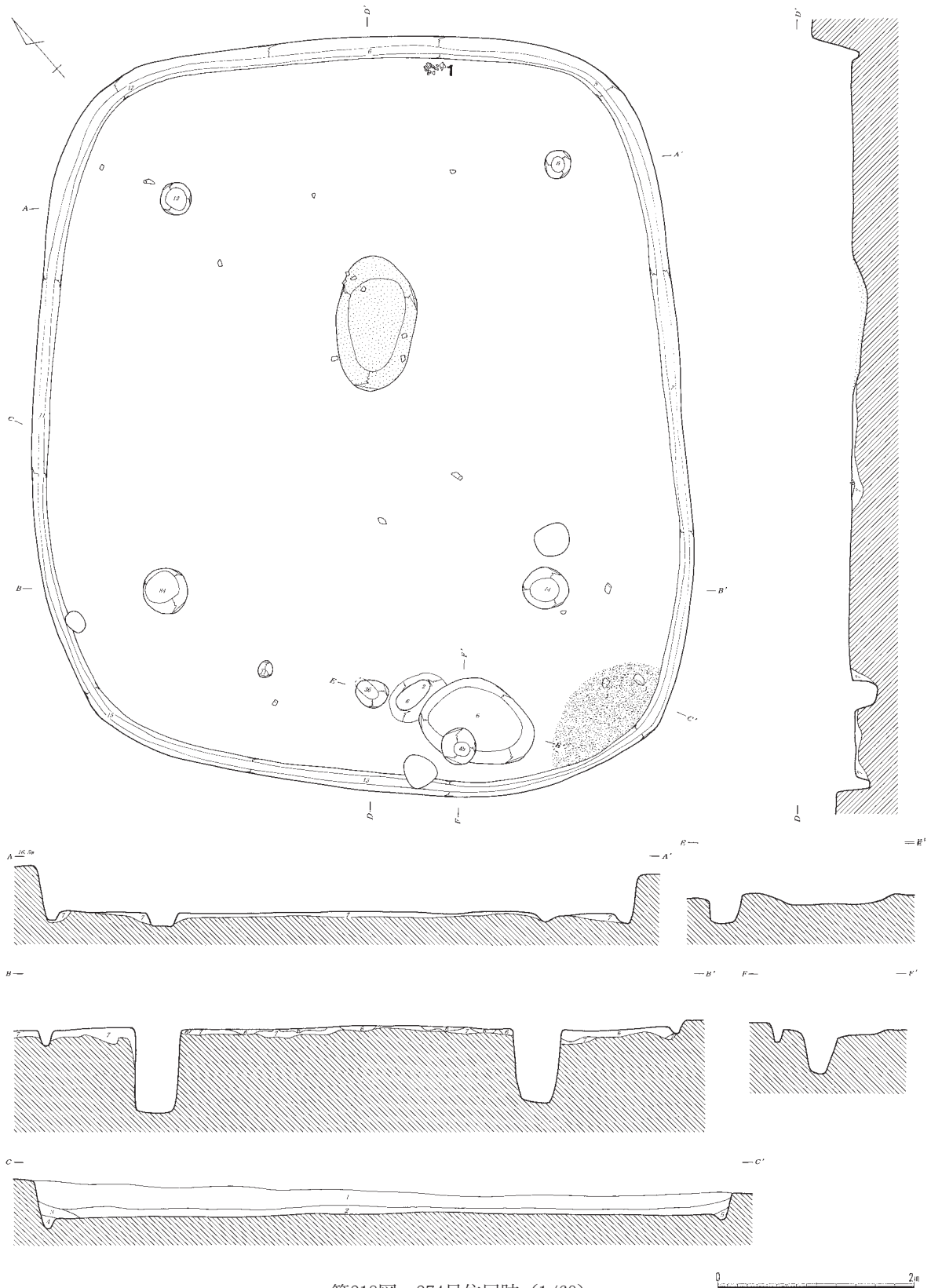
高坏形土器（第214図1）

坏部が1/2程度が残存する。推定口径13.2cmを測る。坏部は塊状を呈する。口縁部は内湾する。接合部は強くくびれて脚台部は末広がりになると推測される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は橙色（7.5YR7/6）、赤彩部分は赤褐色（10YR4/4）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁際床面上から出土。

甕形土器（第221図8～11）

8は口頸部破片。頸部は「く」字状に屈曲して、口縁部は外反する。口唇部外面には棒状の工具により細かく押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。床面上から出土した。

9は口縁部破片。口唇部外面には紐目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出



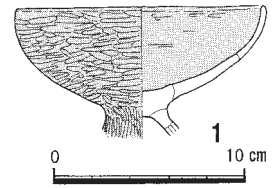
第213図 274号住居跡 (1/60)

土。

10・11は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調は10がにぶい赤褐色(5YR5/4)、11が黒褐色(5YR3/1)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

土製勾玉（第539図7）

完形で小ぶりである。最大長2.7cm・最大幅1.7cm・穴径は0.3cmを測る。重量は5.2g。C字形を呈する。手づくねで作られており、表面はナデられる。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には粗砂を含む。床面上から出土した。



第214図 274号住居跡出土遺物（1/4）

275号住居跡（第215図）

〔位置〕 24Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）326×295cm。（主軸方位）N—32°—W。（壁高）6～11cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。53×44cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。（柱穴）南壁下中央から北に偏って位置する1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 ローム粒子を含むやや硬質の黒褐色土（7.5YR3/1）を基調とする。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

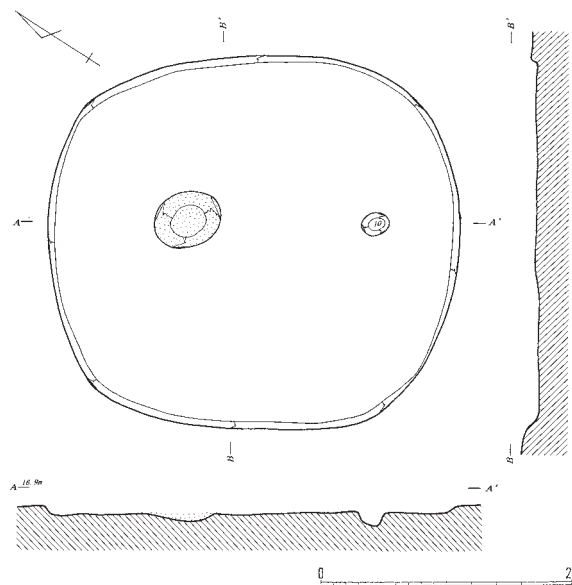
276号住居跡（第216図）

〔位置〕 39Ⅰ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）380×353cm。（主軸方位）N—50°—E。（壁高）20～25cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）住居壁際と炉の周辺を除き良く硬化している。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。50×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。掘り込み外の西側に礫を配している。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）西壁下中央から僅かに南東に偏って位置する。径51cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。周幅33cm前後・高さ1～3cmの凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

1層 耕作土。



第215図 275号住居跡（1/60）

- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。軟質。
- 5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロックを多く含む。やや粘質。
- 7層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

276号住居跡出土遺物 (第221図12～16)

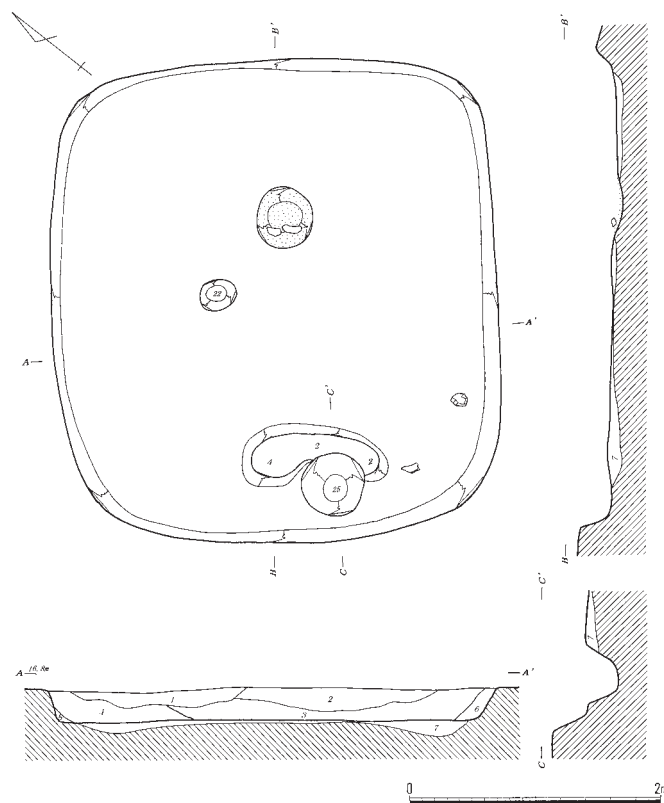
壺形土器 (12～14)

12は複合口縁部破片。口唇端部には網目状撚糸文が施される。口縁部外面にも網目状撚糸文が施され、7本の棒状浮文が貼付される。口縁部下端には刻みがみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色 (10R4/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。特に白色粒子が多くみられる。覆土中からの出土。

13・14は複合口縁部破片。13は内外面共にヘラミガキされる。14は口縁部外面に撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端には刻みが施される。縄文帯内部には円形赤彩文が2ヵ所にみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は13が赤褐色 (10R6/3)、14がにぶい黄褐色 (10YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。14には特に白色粒子が多量に含まれている。覆土中からの出土。

甕形土器 (15・16)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は15が灰褐色 (7.5YR4/2)、16がにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。



第216図 276号住居跡 (1/60)

278号住居跡（第217図）

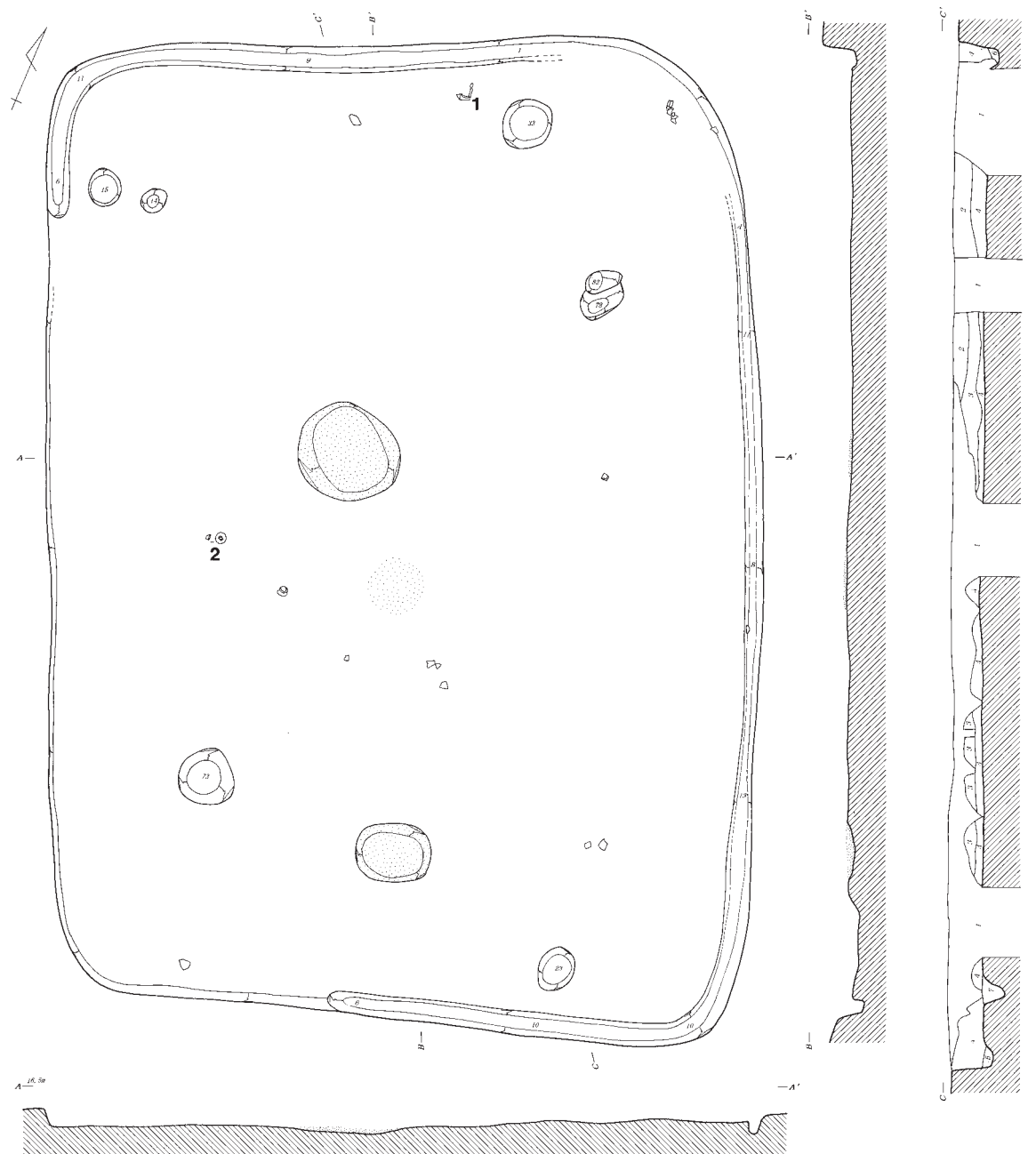
〔位置〕 39・67Ⅱ地点。

〔構造〕 282・285Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）874×632cm。（主軸方位）N-21°-W。（壁高）8～20cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～25cm・下幅8～20cm・深さ4～13cmを測る。北東コーナー側と南西コーナー側を除き確認された。（床面）比較的平坦で部分的に硬化面が認められる。被熱で赤化している部分がある。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。95×85cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。（柱穴）不規則ではあるが、各コーナーに近い4本が主柱穴と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 褐灰色土（10YR4/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。



第217図 278号住居跡（1/60）

- 3層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕床面上に土器片が出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

278号住居跡出土遺物 (第218図、第221図17~21)

壺形土器 (第218図1、第221図17~19)

第218図1は東海西部地方に系譜をもつ、所謂短頸瓢壺である。口縁部と体部の一部を欠く。廻間Ⅱ式に相当する(赤塚1990)。口径8cm・底径4.5cm・器高15.1cmを測る。小さい底部は丸底で中心が凹む独特な形状を示す。体部は偏球状を呈し下半で屈曲する。口頸部は内湾しながら立ち上がり、口唇部外面には浅く凹線が一周し、口唇端部は微妙に外湾する。口唇部内面は面取りされる。口頸部外面には6条一単位の櫛歯状工具による波状文と横線文が2段施される。肩部にも同じ工具による文様が施される。施文順位はまず1・3・5段目に横線文を施文し、次に2・4段目に波状文が施される。外面と口縁部内面の文様帯以外はヘラミガキされる。色調は赤褐色(10YR4/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北西壁際より出土した。

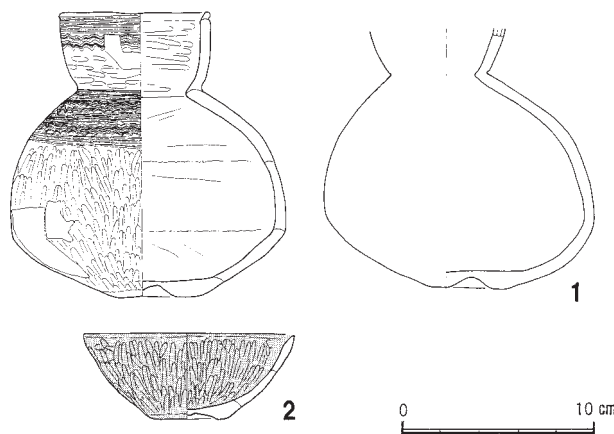
第221図17は複合口縁部破片。17は口縁部外面にLRの単節縄文が施され、棒状浮文が貼付される。内面はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から南西寄りの床面上から出土した。

18は頸部破片。RLの単節縄文が施され、円形浮文が貼付される。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

19は瓢壺の口頸部破片。口縁部は内湾しながら立ち上がる。口唇端部は僅かに外湾する。口縁部内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。住居跡中央付近覆土中からの出土。

鉢形土器 (第218図2)

2は小型でほぼ完形。口径11cm・底径4cm・器高4.5cmを測る。底部は中心が凹んだ形状を呈し、口縁部は外傾する。口唇部内外面共にヨコナデされる。体部は内外面共に縦方向に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央からやや南西寄りの床面上から出土した。



第218図 278号住居跡出土遺物 (1/4)

甕形土器（第221図20・21）

20・21は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物の付着がみられる。色調は20が黒褐色（7.5YR3/1）、21が灰褐色（5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。共に覆土中からの出土。

279号住居跡（第219図）

〔位置〕 39 I 地点。

〔構造〕 北東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明×504cm。（主軸方位）N-42°-E。（壁高）32～35cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅14～23cm・下幅5～7cm・深さ5～8cmを測り南西コーナーで止まる。（床面）壁際を除き硬化している。（炉）検出されなかった。（柱穴）南西壁下の柱穴は入り口施設か。（貯蔵穴）南西壁下、僅かに南東に僅かに偏って位置する。49×47cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。幅40cm前後・高さ2～4cmの凸堤を馬蹄形状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土（7.5YR3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。軟質。
- 9層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

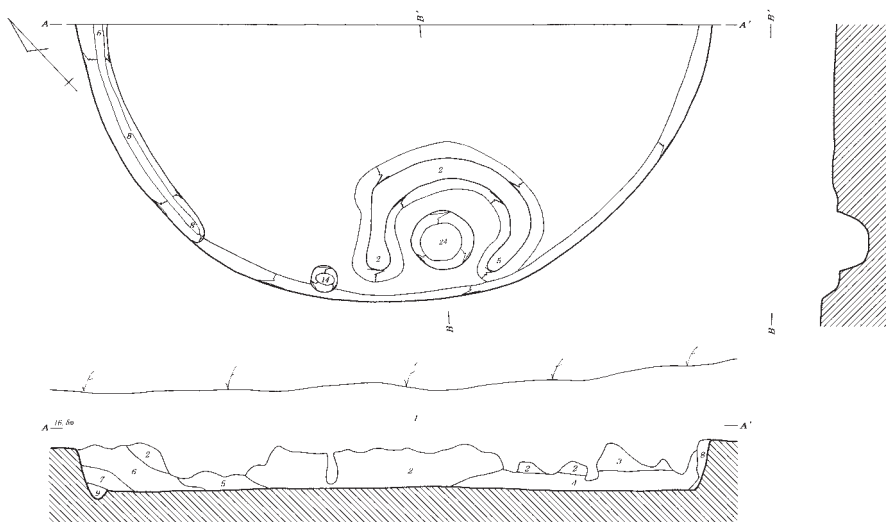
〔遺物〕 破片の状態で床面上と覆土中から出土したが多くはなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

279号住居跡出土遺物（第221図22・23）

甕形土器（22・23）

22・23は頸部破片。22は口唇部外面に刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色



第219図 279号住居跡（1/60） 0 2m

調は22がにぶい褐色（7.5YR6/3）、23が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。共に覆土中からの出土。

280号住居跡（第220図）

〔位置〕 39 I 地点。

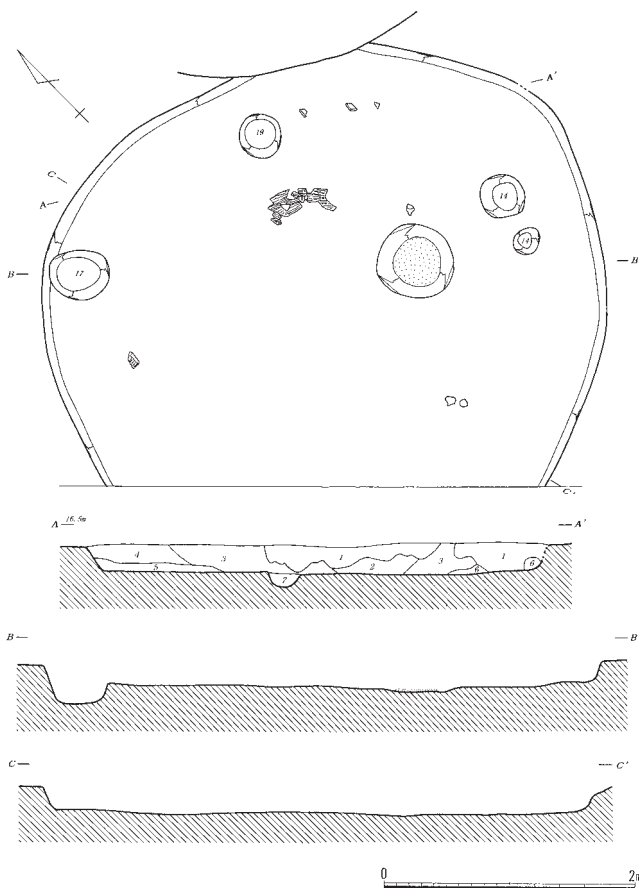
〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）不整円形か。（規模）不明×446cm。（主軸方位）不明。（壁高）18～25cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。一部硬化面を認める。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北東側に位置する。65×58cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

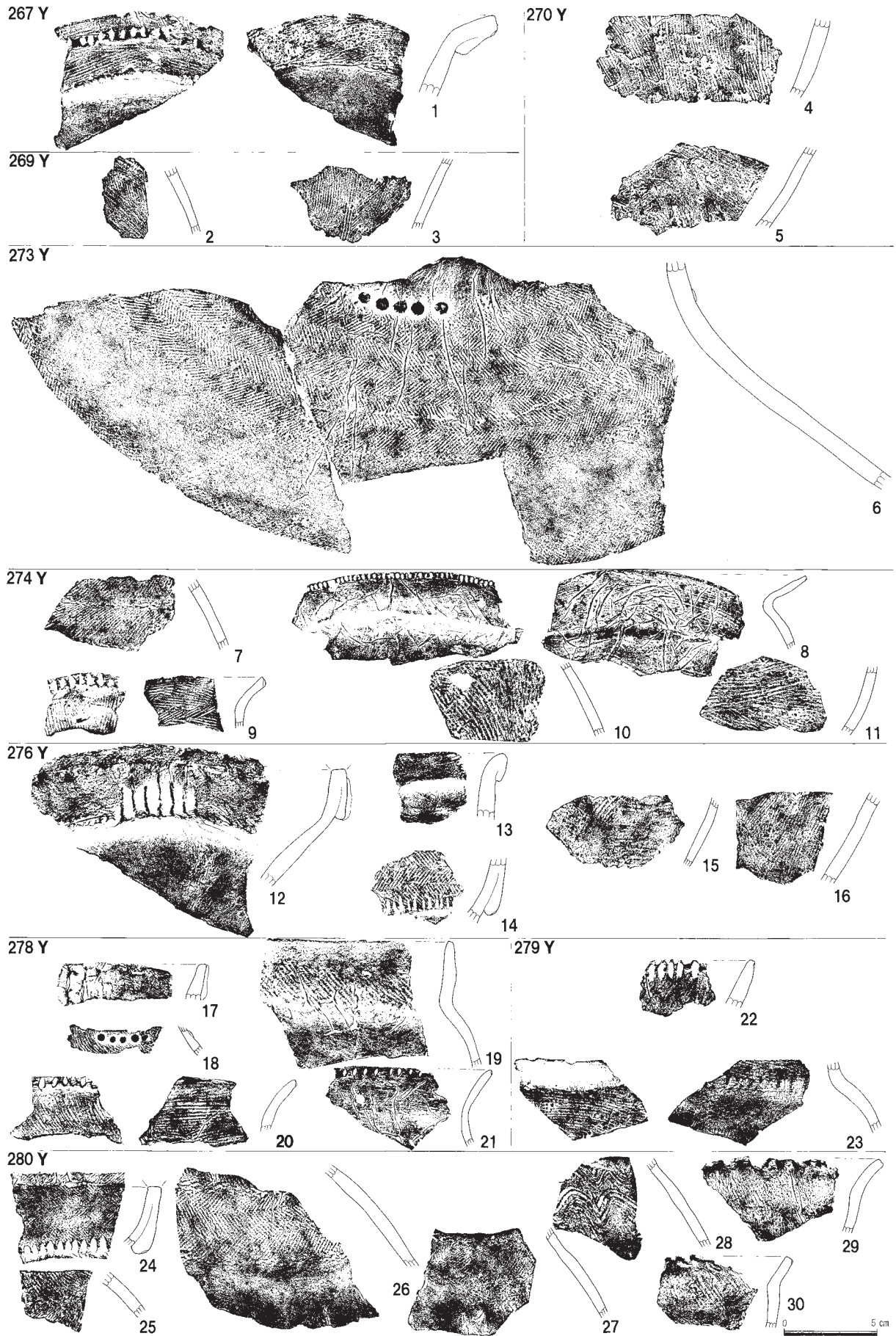
- 1層 耕作土。
- 2層 暗赤灰色土（2.5YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土（10YR3/4）。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第220図 280号住居跡（1/60）



第221図 267・269・270・273・274・276・278～280号住居跡出土遺物 (1/3)

〔所見〕 焼失家屋の可能性はある。

280号住居跡出土遺物（第221図24～30）

壺形土器（24～28）

24は複合口縁部破片。口唇端部にはL Rの単節縄文が巡る。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。口縁部下端には刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

25～28は肩部破片。25にはR Lの単節縄文の端末結節が2段施される。26は撚りの異なる単節縄文が羽状に3段施され、下端には2条のZ字状結節文が巡る。縄文帯内部には直径2 cm程度の円形赤彩文がみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。27はL Rの単節縄文の端末結節が施され、細い竹管のような工具で押捺した円形文が巡る。28は東海西部に系譜をもつ文様で、5本一単位の櫛描波状文が施される。色調は25がにぶい赤褐色（5 YR5/3）、26が赤褐色（10YR4/3）、27がにぶい褐色（7.5YR5/3）、28がにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。26は住居跡北西壁付近床面上から出土した。28は住居跡中央付近床面上から出土した。他は覆土中からの出土。

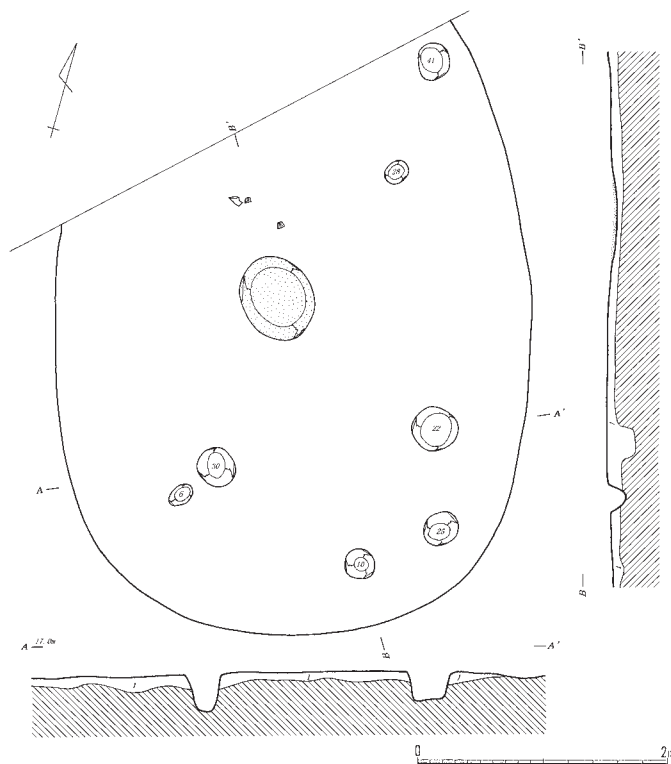
甕形土器（29・30）

29・30は同一個体。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面には幅広で粗いハケ目痕が残る。色調は29がにぶい赤褐色（5YR4/3）、30は灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。共に覆土中からの出土。

281号住居跡（第222図）

〔位置〕 24Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×380cm。（主軸方位）N-31°-W。（壁高）確認面が床面となる。（壁溝）検出されなかった。（床面）確認面が床面となるため遺存状態は不良であるが、一部硬化面を



第222図 281号住居跡（1/60）

認める。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。69×57cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 北東及び南西・南東コーナーに近い3本が支柱穴の一部と思われる。南壁下中央から北に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。中央部は炉の影響で焼土粒子が多い。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 床面上に土器片が出土したが、図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

282号住居跡 (第223図)

〔位置〕 39 I 地点。

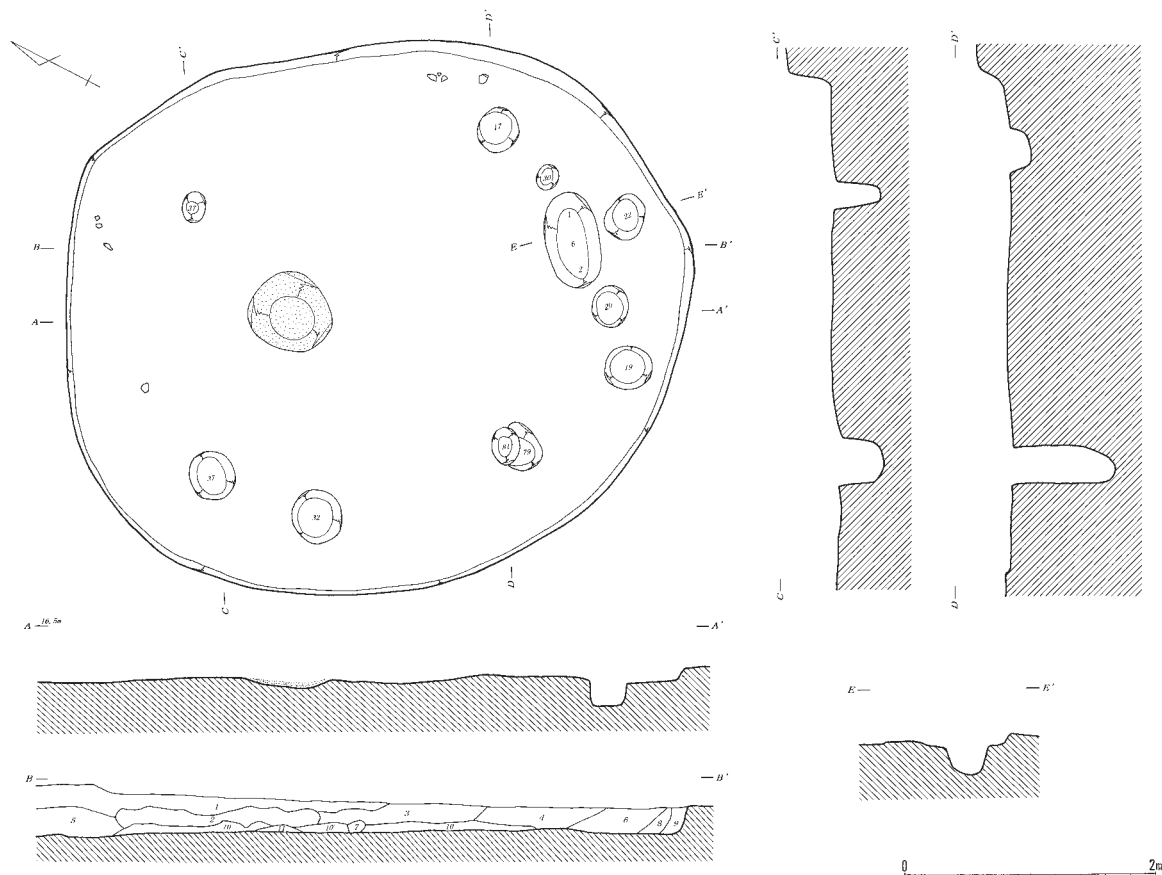
〔構造〕 20 J・278 Yを切る。(平面形) 不整楕円形。(規模) 500×430cm。(主軸方位) N-30°-W。(壁高) 4～28cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。(炉) 住居中央からやや北に偏って位置する。径65cmの略円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 各コーナーに近い4本が支柱穴である。(貯蔵穴) 南東壁中央からやや東に偏って位置する。40×30cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。北側に幅40cm前後・高さ2cm前後の凸堤が直線的に構築されている。

〔覆土〕

1層 黒褐色土(10YR3/1)。炉を僅かに含む。軟質。

2層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを部分的に含む。やや硬質。

3層 暗赤灰色土(2.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。



第223図 282号住居跡 (1/60)

- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロック。硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 9層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 10層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。焼土粒子を多く含む。炭化材片を多く含む。軟質。

堆積状態が不整合で、一部ロームブロックが多くみられるなど埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 貯蔵穴と覆土中から破片が少数出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

282号住居跡出土遺物 (第251図1～4)

壺形土器 (1～3)

1・2は複合口縁部破片。いずれも口縁部下端には刻みが施される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。共に色調は赤褐色 (10R4/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、特に橙色粒子が多く含まれている。貯蔵穴から出土。

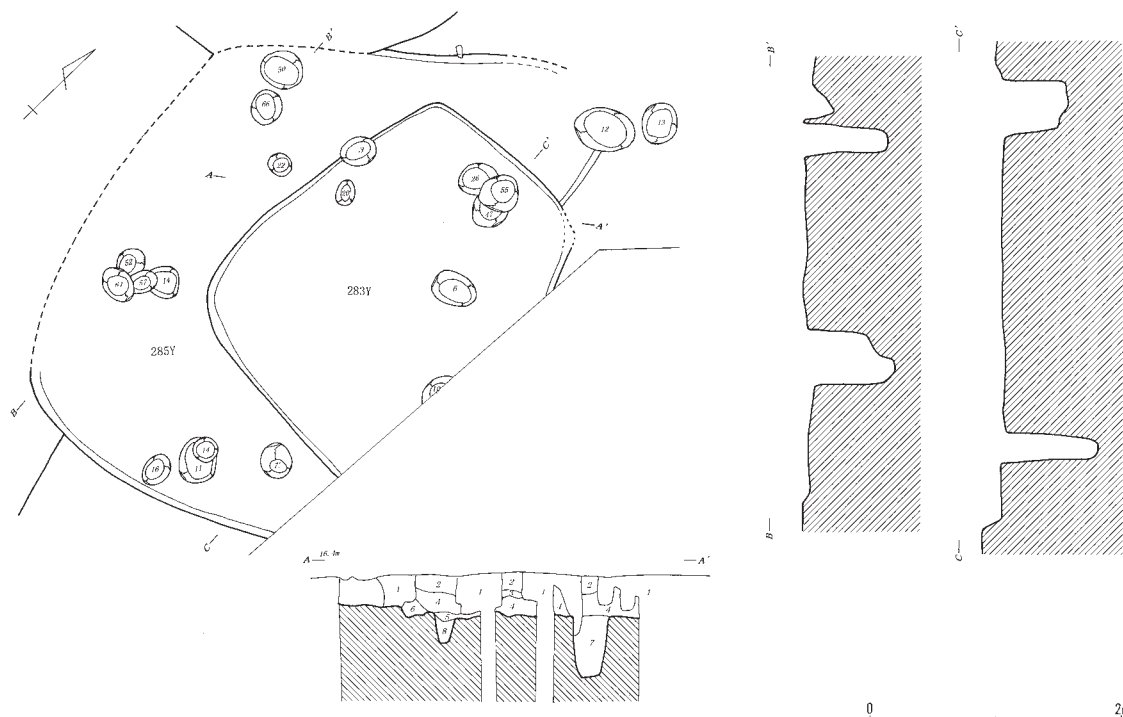
3は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、境目にはS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

鉢形土器 (4)

4は複合口縁部破片。内外面共に縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。特に白色粒子が非常に多く含まれているのが観察される。覆土中からの出土。

283号住居跡 (第224図)

〔位置〕 39 I 地点。



第224図 283・285号住居跡 (1/60)

〔構造〕 東側調査区外。285Yを切る。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×270cm。(主軸方位) N—S。(壁高) 5～11cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 重複住居と攪乱により破壊されているため遺存状態は不良である。一部硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。被熱したロームブロック・焼土粒子を含む。やや軟質。
- 6層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

285号住居跡 (第224図)

〔位置〕 39 I 地点。

〔構造〕 西側調査区外。282・306Yを切り、283Yに切られる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明。(主軸方位) N—18°—W。(壁高) 9～23cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 重複住居と攪乱で破壊されているため遺存状態は不良である。北側に一部硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 比較的多く検出しているが、深度のある4本が主柱穴と思われる。南壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

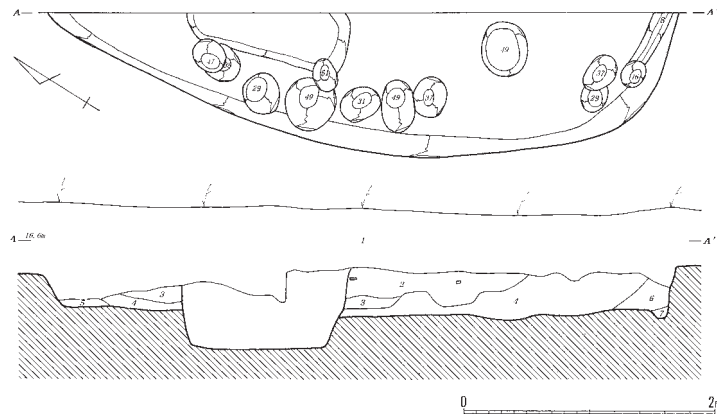
〔覆土〕 攪乱が著しいため詳細は不明であるが、僅かに確認できた覆土はローム粒子を多く、ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含むやや硬質の灰褐色土 (7.5YR4/2) である。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

286号住居跡 (第225図)

〔位置〕 24 II 地点。



第225図 286号住居跡 (1/60)

〔構造〕 北東側調査区外。398Dに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 47~53cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 攪乱により遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 北コーナーに近い深度49cmのピットが主柱穴の一部か(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

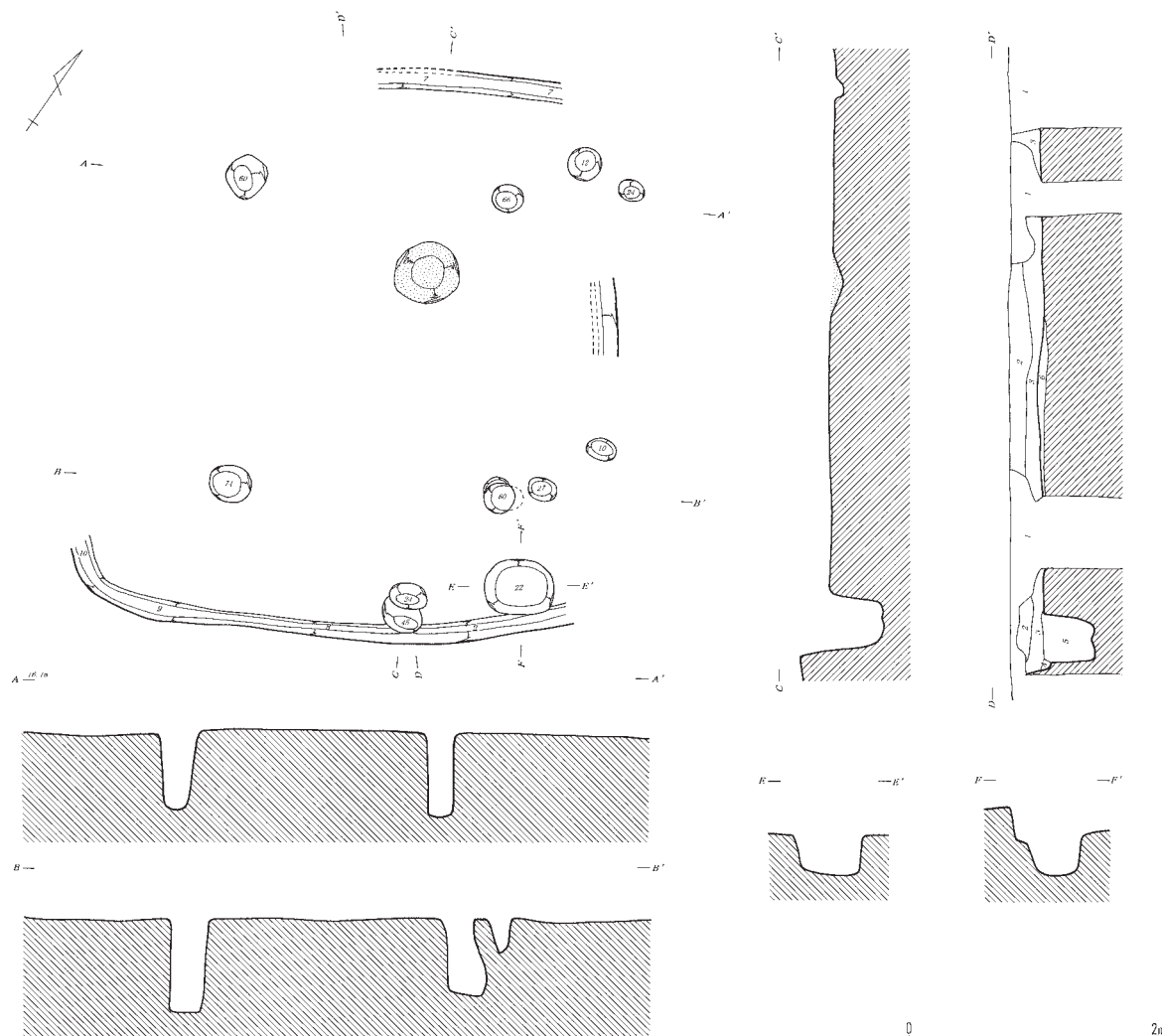
- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

287号住居跡 (第226図)

〔位置〕 13Ⅲ地点。



第226図 287号住居跡 (1/60)

〔構造〕北側調査区外。85 Jを切る。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位) N-33°-W。(壁高) 1~24cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅13~17cm・下幅6~9cm・深さ2~12cmを測る。(床面) 確認面が床面となるため、遺存状態は不良である。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。径49cmの円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 深度の同じ4本が主柱穴と思われる。住居南壁下中央の1本が入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東壁中央から北東に偏って位置する。54×43cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 4層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを多く含む。貼床充填土。硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

〔所見〕 短軸が主軸と思われる。

289号住居跡 (第227図)

〔位置〕 13Ⅲ地点。

〔構造〕(平面形) 隅丸長著方形。(規模) 584×480cm。(主軸方位) N-57°-E。(壁高) 25~38cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉周囲を除き硬化面が認められた。(炉) 住居中央からやや北東に偏って位置する。70×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ50cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴) 各コーナーにある4本が主柱穴である。南西壁際にある1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南西壁下に位置する。55×45cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。貯蔵穴の北側には幅4cm・高さ2~6cmの凸堤が弧状に構築されている。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子・焼土粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 灰褐色土 (5YR4/2)。焼土粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。貼床充填土。硬質。

南コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

289号住居跡出土遺物 (第251図5~9)

壺形土器 (5・6)

5は複合口縁部破片。口唇端部と口縁部には網目状捺糸文が施され、刻みが加えられた棒状浮文が貼付される。口縁部下端には棒状の工具で押捺された刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐

色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。西コーナー床面上より出土した。

6は肩部破片。網目状捺糸文が施され、下端にはS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

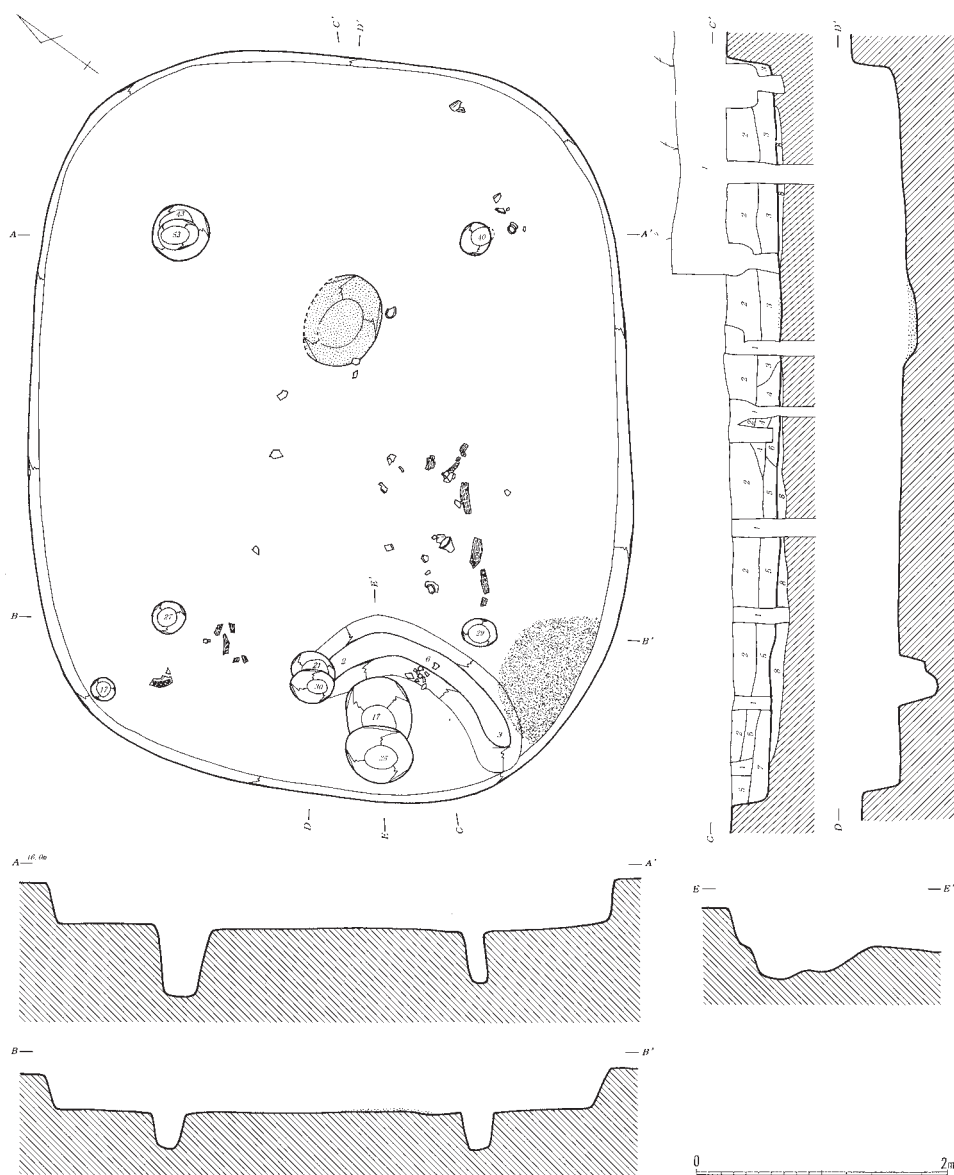
甕形土器(7~9)

7・8は口縁部破片、9は頸部から肩部にかけての破片。7・8の口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は7がにぶい赤褐色(5YR5/4)、8が黒褐色(5YR3/1)、9がにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂含む。7は東コーナーより出土した。8・9は覆土中からの出土。

290号住居跡(第229図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕北西側調査区外。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)35~39cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅12~18cm・下幅4~7cm・深さ3~8cmを測る。(床面)壁際を除き硬化している。



第227図 289号住居跡(1/60)

(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。遺物を多く含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 褐灰色土 (7.5YR4/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

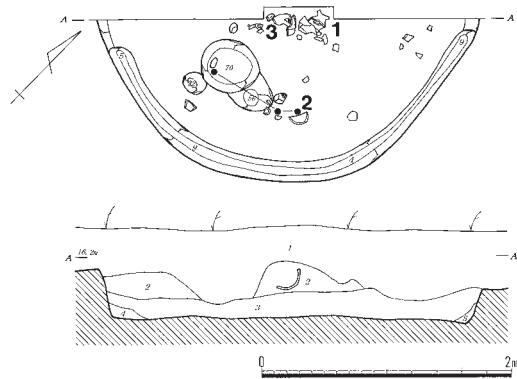
〔遺物〕 床面上に土器片が多量に出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

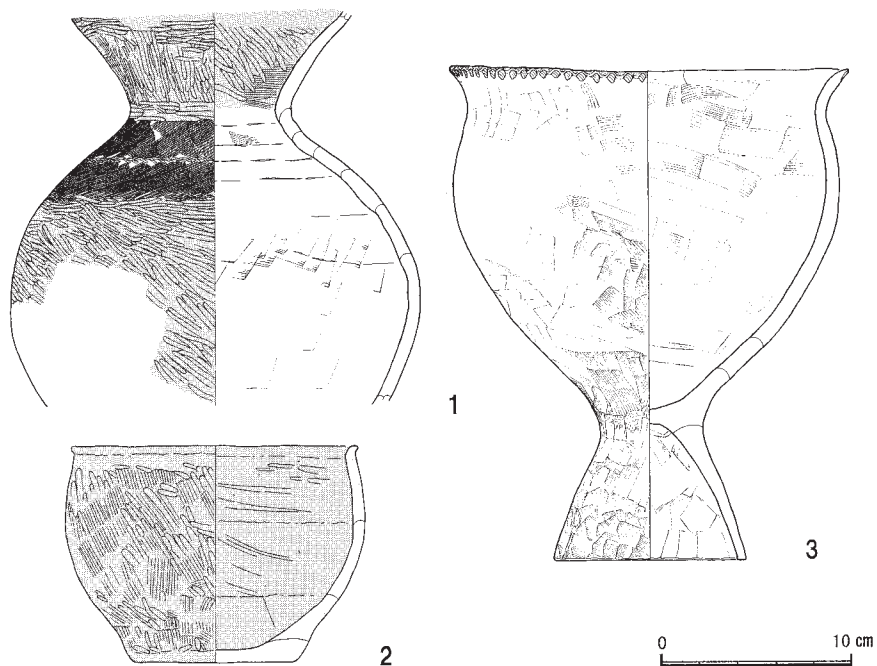
290号住居跡 (第229図)

壺形土器 (1)

1は口縁部と体部下半を欠損する。球状を呈する体部から頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。肩部には無節Lの縄文が2段施され、境目と下端にはZ字状結節文が施される。外面と口縁部内面は縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。内面体部はヘラナデされるが、頸部と体部中位には指頭痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5



第228図 290号住居跡 (1/60)



第229図 290号住居跡出土遺物 (1/4)

YR7/4)、赤彩部が赤褐色(2.5YR4/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、特に白色粒子が多くみられる。住居跡中央床面上から出土した。

鉢形土器(2)

体部の1/3程度が残存する。推定口径15.2cm・底径8.7cm・器高11.5cmを測る。平底の底部から内湾しながら立ち上がる。口縁部はやや内湾し、口唇端部は肥厚し外面には沈線が施される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)、赤彩部分にはぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、白色粒子が特に多くみられる。住居跡中央から南東寄り覆土中から散乱した状態で出土した。

甕形土器(3)

台付甕形土器で全体の1/2程度が残存する。推定口径21.0cm・器高26.1cm・底径10.2cmを測る。あまり張りのない体部から立ち上がり、頸部でゆるやかにくびれて口縁部は外傾する。口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残るが、磨耗が激しく不明瞭である。色調は橙色(2.5YR6/8)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央床面上から出土した。

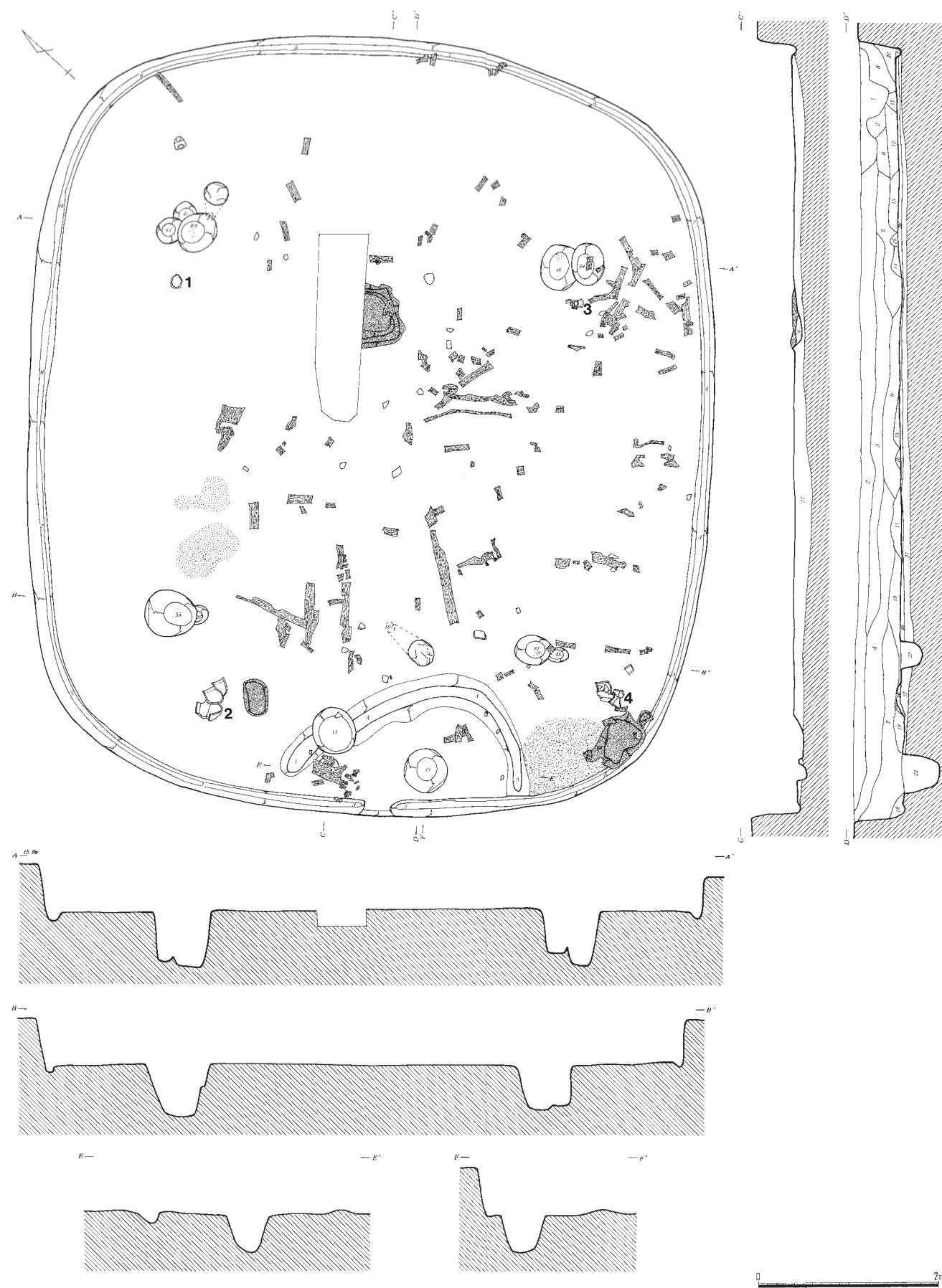
291号住居跡(第230図)

〔位置〕13Ⅲ地点。

〔構造〕(平面形)隅丸長方形。(規模)886×676cm。(主軸方位)N-50°-E。(壁高)39~50cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅15cm前後・下幅6cm前後・深さ2~7cmを測り全周する。(床面)硬質ロームを床面とする。平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺・南側のピット周辺を除き硬化面を認める。東側と北側に、部分的に被熱により赤化している部分を検出する。(炉)住居中央から北東に偏って位置する。不明×70cmを測り、厚さ1cm前後の粘土火皿であるが、被熱による赤化は顕著ではない。使用期間が短かったと思われる。(柱穴)各コーナーに近い4本が主柱穴である。(貯蔵穴)南西壁中央から南東に偏って位置する。60×50cmの楕円形を呈し、深さ43cmを測る。幅40cm前後・高さ4cm前後の凸堤が貯蔵穴を囲むように構築されている。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 7層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を部分的に含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 9層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。硬質。
- 11層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・焼土小ブロックを含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 14層 黒褐色土(10YR3/2)。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。カリカリした感じ。
- 15層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。



第230図 291号住居跡 (1/60)

- 16層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。カリカリした感じ。
- 17層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。粘質。
- 18層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや粘質。
- 19層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 20層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 21層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 22層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 23層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 24層 灰赤色土 (2.5YR4/2)。焼土粒子・焼土ブロック。硬質。
- 25層 炭化材。
- 26層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを含む。硬質。貼床。
- 27層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。
南コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 土器片と炭化材が床面上と覆土中に多量に出土した。凸堤北側と南コーナーに粘土が堆積している。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

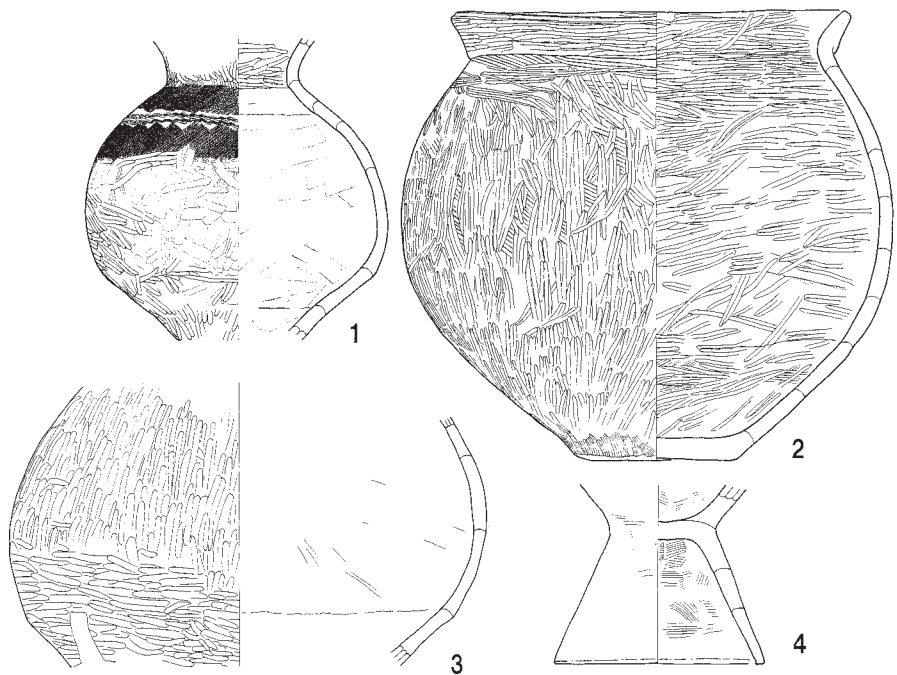
〔所見〕 炭化材が散乱し、床面が焼けているなど、焼失家屋の可能性が大きい。

291号住居跡出土遺物 (第231図、第251図10～12)

壺形土器 (第231図1～3、第251図10)

第231図1は全体の1/2程度が残存する。球状を呈する体部下半には稜がみられる。肩部にはLRの単節縄文が2段施され、境目に2条のZ字状結節文が巡る。縄文帯最下端には縄文の閉じた端がみられる。外面はヘラミガキされる。内面は口縁部がヘラミガキされ、以下、ヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北コーナーから出土した。

2は広口壺。底部は平底。口径20.5cm・底径8.5cm・器高23.7cmを測る。体部中位に最大径をもつ球状の体部から



第231図 291号住居跡出土遺物 (1/4)

頸部は屈曲し、複合口縁部は外反して開く器形である。口唇部は面取りされる。体部外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。口縁部内外面、体部内面は横方向にヘラミガキされる。全体に非常に丁寧に作られている。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。西コーナー床面上から出土した。

3は体部のみ残存する。体部下半には稜がみられる。外面は丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・輝石を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー床面上から出土した。

第251図10の口唇端部にはR Lの単節縄文が施される。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、刻みの施された棒状浮文が貼付される。縄文帯内部には円形赤彩文が施される。内面はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（第231図4、第251図11・12）

第231図4は脚台部のみ残存する。底径11.2cm。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から東寄りの覆土中からの出土。

第251図11・12はいずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は11がにぶい赤褐色（5YR5/4）、12が褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。11は覆土中から、12は凸堤上からの出土。

292号住居跡（第232図）

〔位置〕 13Ⅲ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×570。（主軸方位）E—W。（壁高）30cm前後を測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅18～24cm・下幅6～12cm・深さ6～9cmを測る。（床面）住居南側に硬化面が検出された。（炉）住居中央から西に偏って位置する。不明×54cm・深さ3cmを測る。（柱穴）各コーナーに近い4本が支柱穴である。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 289Yに大部分が破壊されているため詳細は不明。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

295号住居跡（第233図）

〔位置〕 13Ⅳ地点。

〔構造〕 南側調査区外。15H・28Mに切られる。（平面形）楕円形か。（規模）不明×720cm。（主軸方位）N—24°—W。（壁高）14～20cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱だが、部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する。不明×48cmの地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。炉の北側に礫を検出する。（柱穴）東・西コーナー付近の深度のある2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

3層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

295号住居跡出土遺物（第251図13・14）

壺形土器（13）

複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面にはL Rの単節縄文が施され、縄文帯内部には直径約1cmの円形赤彩文がみられる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

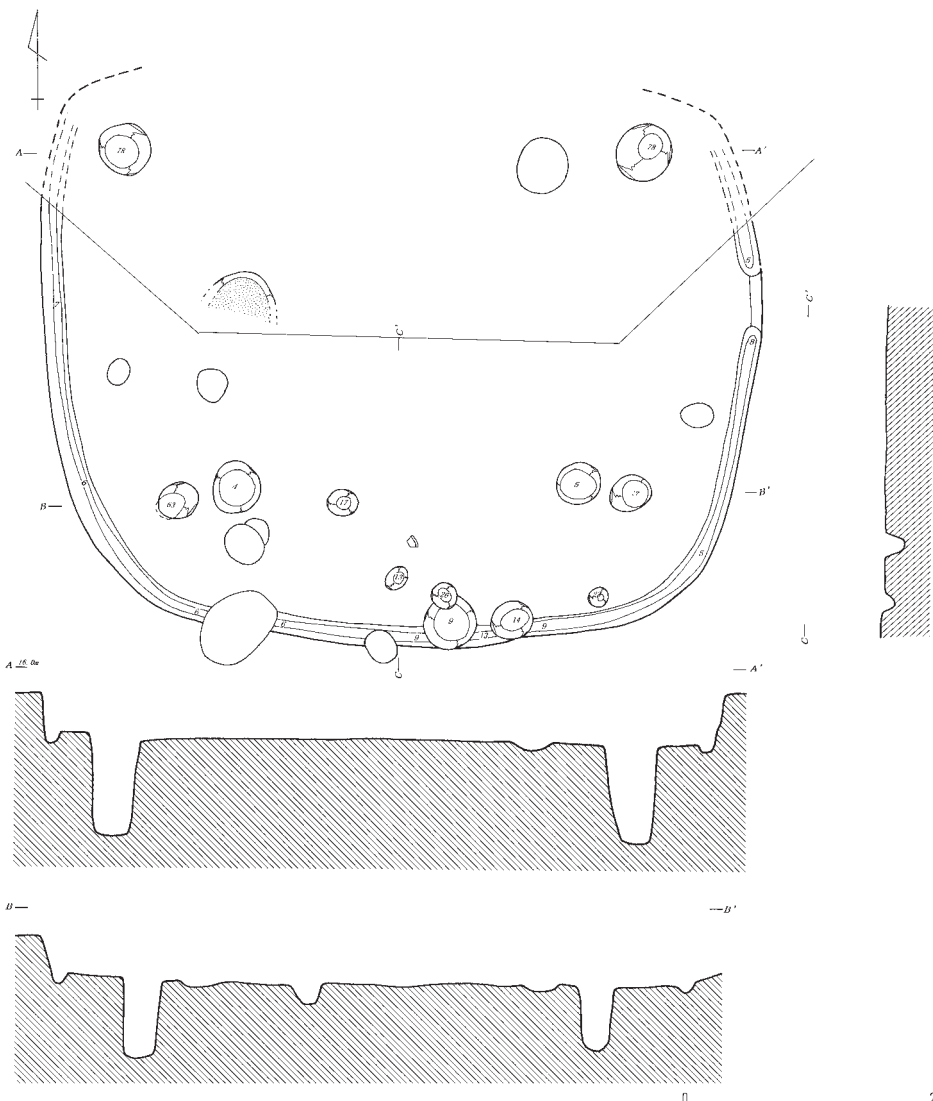
甕形土器（14）

頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

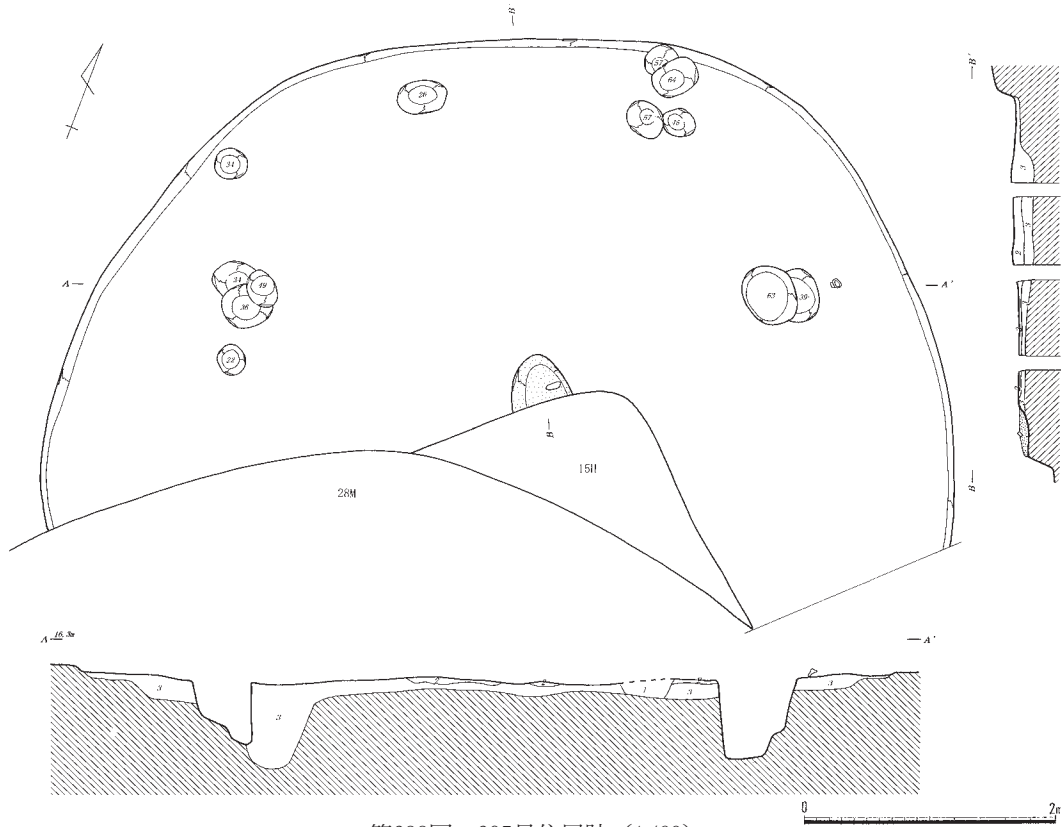
296号住居跡（第234図）

〔位置〕 13IV地点。

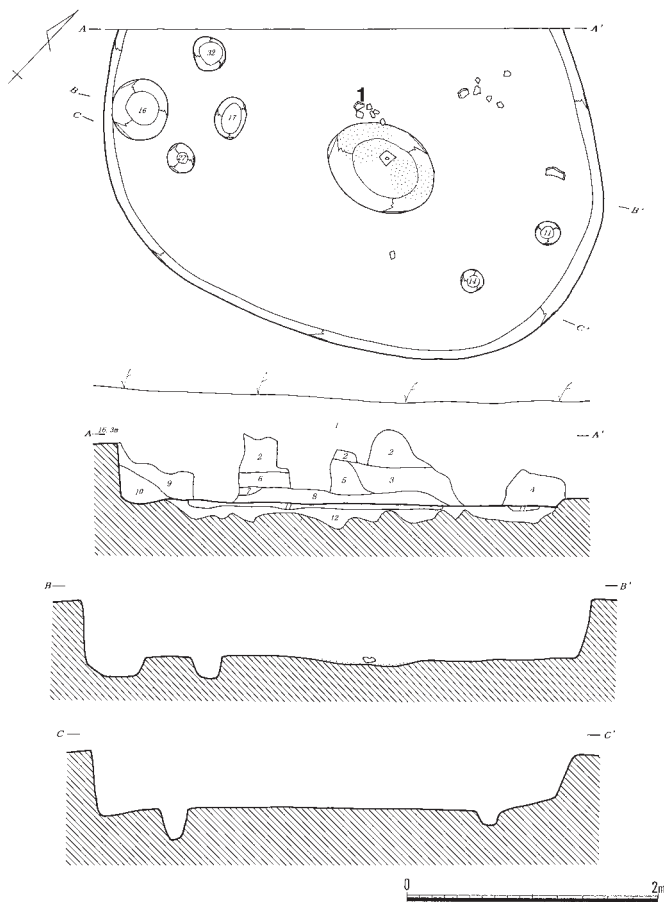
〔構造〕 北西側調査区外。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×403cm。（主軸方位）N-56°-E。（壁高）40～49cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。88×68cmの



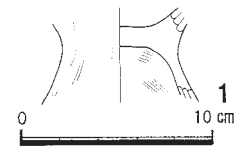
第232図 292号住居跡（1/60）



第233図 295号住居跡 (1/60)



第234図 296号住居跡 (1/60)



第235図 296号住居跡出土遺物 (1/4)

楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。(柱穴)南西及び北東コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴)西壁下中央からやや東に位置する。48×45cmの楕円形を呈し、深さ16cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 4層 暗赤灰色土(2.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 7層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 8層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 9層 黒色土(2.5Y2/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土(10YR2/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土(10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 12層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。貼床充填土。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上に土器片が点在している。

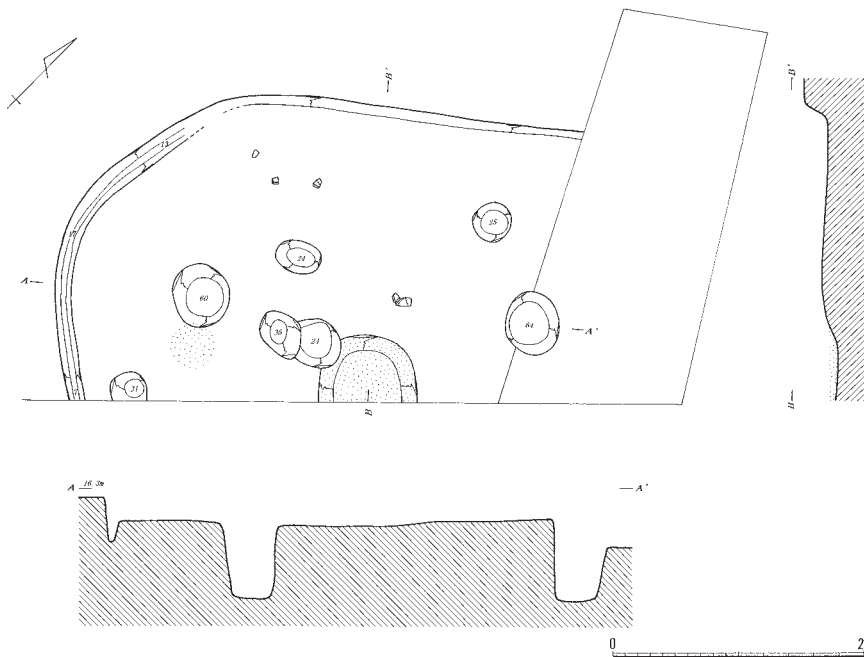
〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

296号住居跡出土遺物(第235図、第251図15・16)

壺形土器(第251図15)

15は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。下端には2条のS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器(第235図1、第251図16)



第236図 297号住居跡(1/60)

第235図1は台付甕形土器の接合部のみ残存する。接合部はゆるやかにくびれて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉脇から出土。

第251図16は甕部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・多量の橙色粒子を含む。覆土中から出土した。

297号住居跡(第236図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕南西側調査区外。北東側攪乱。301・306Yを切る。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)N-40°-W。(壁高)15~22cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅12~16cm・下幅4~6cm・深さ9~16cmを測り、北側コーナーで止まる。(床面)平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉)不明×78cmの地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。(柱穴)比較的多く検出するが、深度のある2本が主柱穴の一部になるうか。(貯蔵穴)検出されなかった。

〔覆土〕攪乱が著しいため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土はローム粒子を僅かに、焼土粒子を多く含むやや粘質の黒褐色土で、炭化材片を含む。

〔遺物〕床面上に土器片が僅かに出土した。

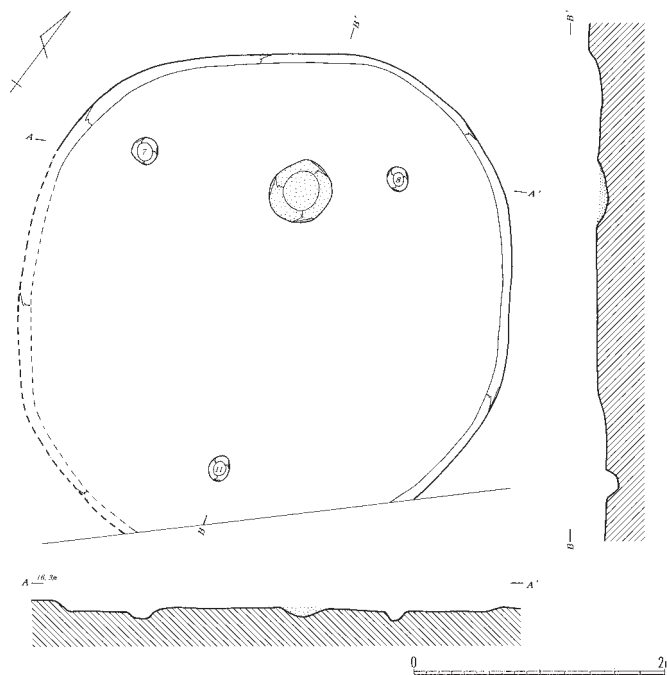
〔時期〕弥生時代後期~古墳時代前期。

297号住居跡出土遺物(第251図17~20)

壺形土器(17・18)

いずれも肩部破片。17は上からRLの単節縄文・無文帯・撚りの異なる単節縄文が羽状に2段、下端にはS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。18はLRの単節縄文が施される。色調は17が赤褐色(10R4/4)、18がにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。17は住居跡炉の北側から出土した。18は覆土中からの出土。

甕形土器(19・20)



第237図 298号住居跡(1/60)

19は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

20は脚部破片。脚裾端部には粘土のはみ出しがみられる。内外面共にヘラナデされるが幅広で粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。西コーナー付近出土。

298号住居跡（第237図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 南東側調査区外。（平面形）隅丸正方形か。（規模）不明×390cm。（主軸方位）N—29°—W。（壁高）6～11cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。遺存状態は不良であるが、部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。径49cmの円形を呈する地床炉で、深さ10cmの掘り込みをもつ。（柱穴）北東及び北西コーナーの2本が支柱穴の一部となろうか。南側の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

299号住居跡（第238図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 南東側調査区外。91Jを切る。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×400cm。（主軸方位）N—79°—W。（壁高）18～35cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～20cm・下幅10cm前後・深さ5～7cmを測る。遺存している部分では全周する。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）不明×75cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった（貯蔵穴）検出されなかった。

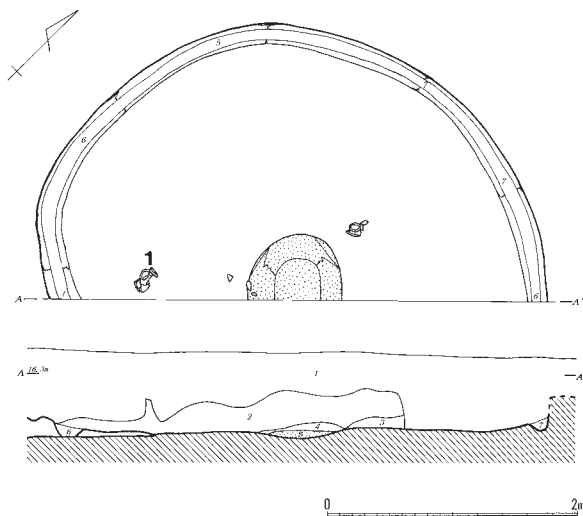
〔覆土〕

1層 耕作土。

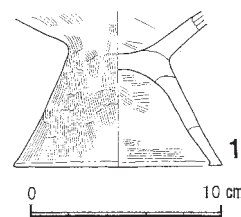
2層 黒褐色土（10YR2/2）。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。

4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。焼土ブロックを含む。やや硬質。



第238図 299号住居跡（1/60）



第239図 299号住居跡出土遺物（1/4）

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。焼土粒子を含む。被熱のためロームブロックは硬化。

6層 黒褐色土（5YR2/2）。ローム粒子を含む。硬質。

7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕床面上と覆土中から少数出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

299号住居跡出土遺物（第239図）

甕形土器（1）

台付甕形土器の脚台部。接合部は屈曲し、裾部へかけて「ハ」字状に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。内面には工具痕が残る。色調にはぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から南寄り床面上から出土した。

300号住居跡（第240図）

〔位置〕13Ⅲ地点。

〔構造〕南東側調査区外。301Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）16～20cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に遺存状態は不良であるが、部分的に硬化面を認める。（炉）径46cmの円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕攪乱が著しいため詳細は不明であるが、部分的に残された覆土は、ローム粒子を含み、炭化物粒子を僅かに含むやや軟質の黒褐色土（10YR3/1）である。

〔遺物〕図示できる遺物はなかった。

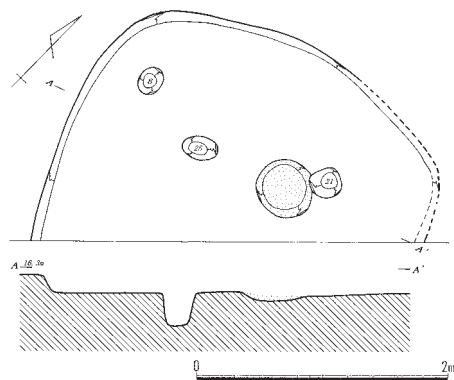
〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

301号住居跡（第241図）

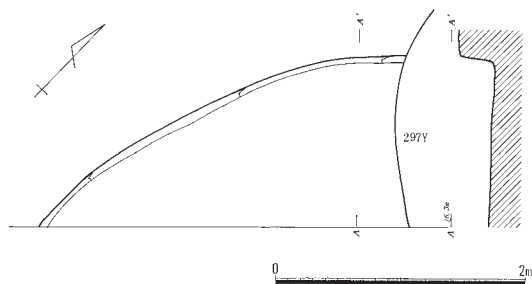
〔位置〕13Ⅳ地点。

〔構造〕南東側調査区外。300Yを切り、297Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）27～29cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱だが、僅かに硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕297号住居跡に切られ、また攪乱が著しいため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子・ロームブロックを多く含む硬質の黒褐色土（10YR3/1）である。



第240図 300号住居跡（1/60）



第241図 301号住居跡（1/60）

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

302号住居跡（第242図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 北西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明×382cm。（主軸方位）N-31°-W。（壁高）16～23cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）耕作による攪乱が著しいが、部分的に硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子を含む。炭化材片を含む。

3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 床面上に土器片と炭化材を出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

302号住居跡出土遺物（第243図）

甕形土器（1）

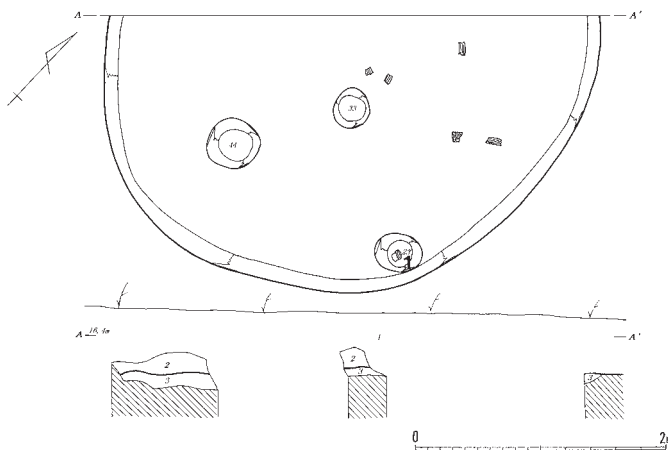
台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径9cmを測る。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

303号住居跡（第244図）

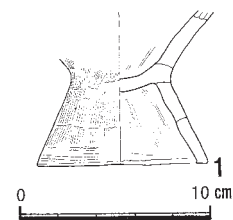
〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 北西及び南西側調査区外。16Hに切られる。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明。（主軸方位）N-62°-E。（壁高）4～9cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11～18cm・下幅5cm前後・深さ3～11cmを測り、遺存している部分では全周する。（床面）大部分が調査区外と古墳時代の住居に切られているため詳細は不明。確認できた部分は軟弱である。（炉）住居中央から北東側に偏って位置する。39×34cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。（柱穴）北及び東コーナーの2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しいため詳細は不明である。



第242図 302号住居跡（1/60）



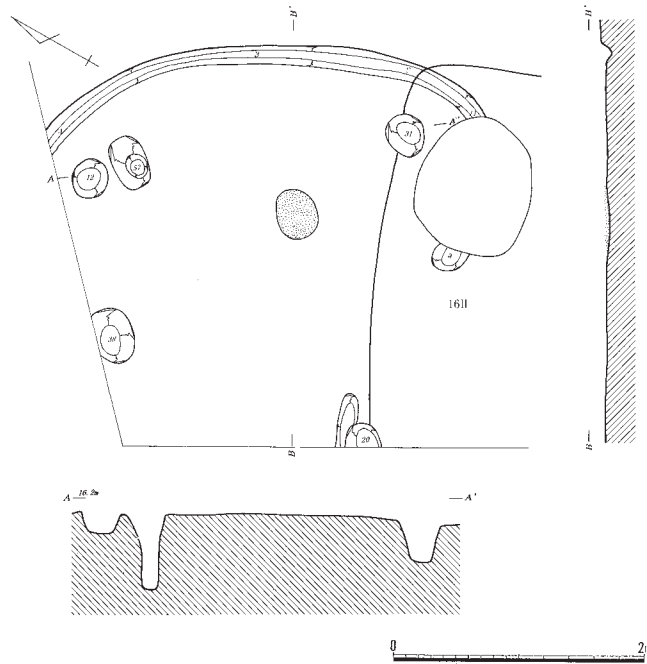
第243図 302号住居跡出土遺物（1/4）

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

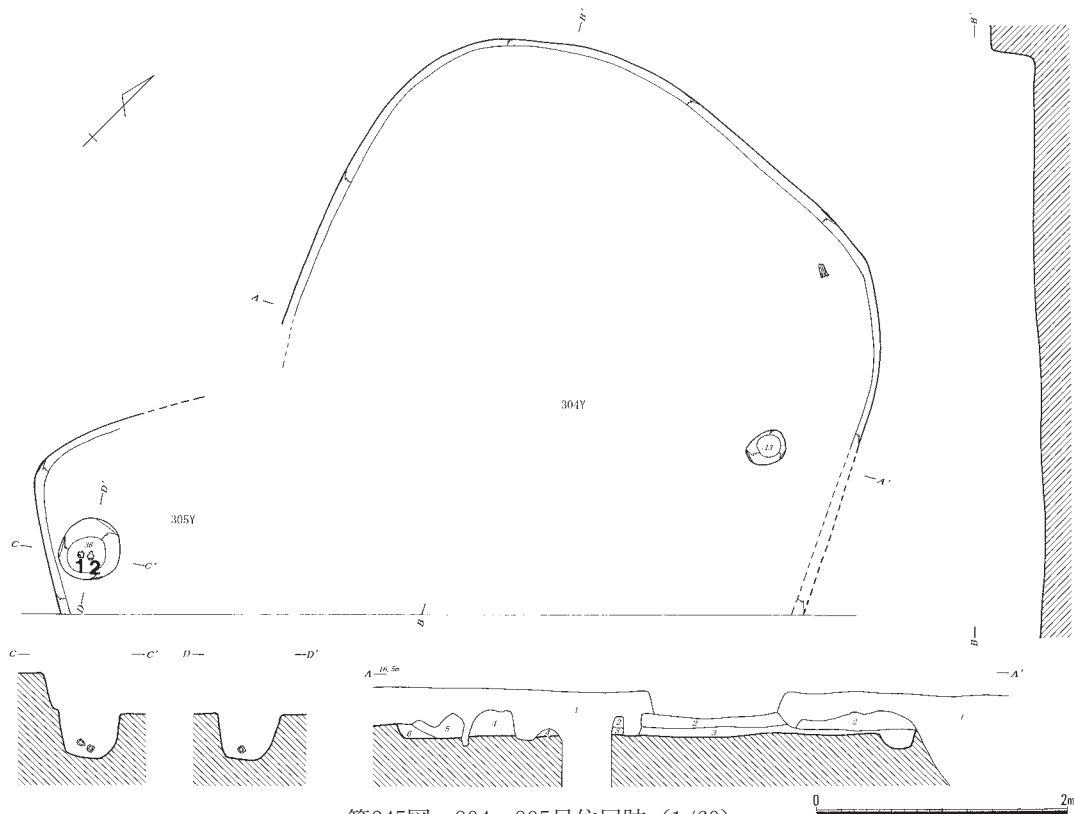
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

304号住居跡（第245図）

〔位置〕 13IV地点。



第244図 303号住居跡 (1/60)



第245図 304・305号住居跡 (1/60)

〔構造〕南東側調査区外。93 J を切り、305 Y に切られる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×432cm。(主軸方位) 不明。(壁高) 30cm前後を測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 暗褐色土中に築かれていた。そのため部分的に硬化面を認めるが、全体に遺存状態は不良である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 6層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕覆土中に土器片を検出するが、大部分が縄文土器である。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

304号住居跡出土遺物 (第251図21～23)

壺形土器 (21)

頸部から肩部の破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (22・23)

22・23は体部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。色調は22が灰褐色 (5YR4/2)、23がにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。共に胎土には細礫・粗砂を含む。すべて覆土中からの出土。

305号住居跡 (第245図)

〔位置〕13IV地点。

〔構造〕南西側調査区外。93 J ・304 Y を切る。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 28～33cmを測り、遺存している部分では60° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 暗褐色土中に築かれていた。そのため西側は硬化面を認めるが、東側は遺存状態は不良のため確認できなかった。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 南壁下に位置する。径50cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。

〔覆土〕攪乱が著しいため詳細は不明。

〔遺物〕貯蔵穴に小型壺の完形2個体が出土した。

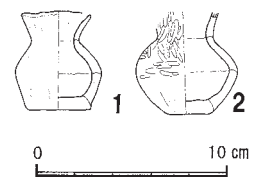
〔時期〕古墳時代前期。

305号住居跡出土遺物 (第246図)

ミニチュア土器 (1・2)

1はほぼ完形の壺形土器。底径3.3cm・口径3.8cm・器高5.1cmを測る。平底の底部から広がり、偏球状の体部を作成する。頸部は屈曲し口縁部は外傾する。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

2は口縁部を欠く壺形土器。底径2.3cm。平底の底部から立ち上がり、偏球状の体部へ至り、頸部で屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる器形である。外面体部上半より上と口縁部内外面共にヘラミガキされる。以下ヘラナデされる。色調は灰褐色 (7.5YR6/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂・輝石を含む。貯蔵穴から出土した。



第246図 305号住居跡出土遺物 (1/4)

306号住居跡（第247図）

〔位置〕 13IV地点。

〔構造〕 北西側調査区外。74 Jを切る。285・297 Yに切られる。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×670cm。
 （主軸方位）不明。（壁高）10～22cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅28cm前後・下幅10cm前後・深さ5cm前後を測り、北西壁下に確認できた。（床面）全体に軟弱で遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明。

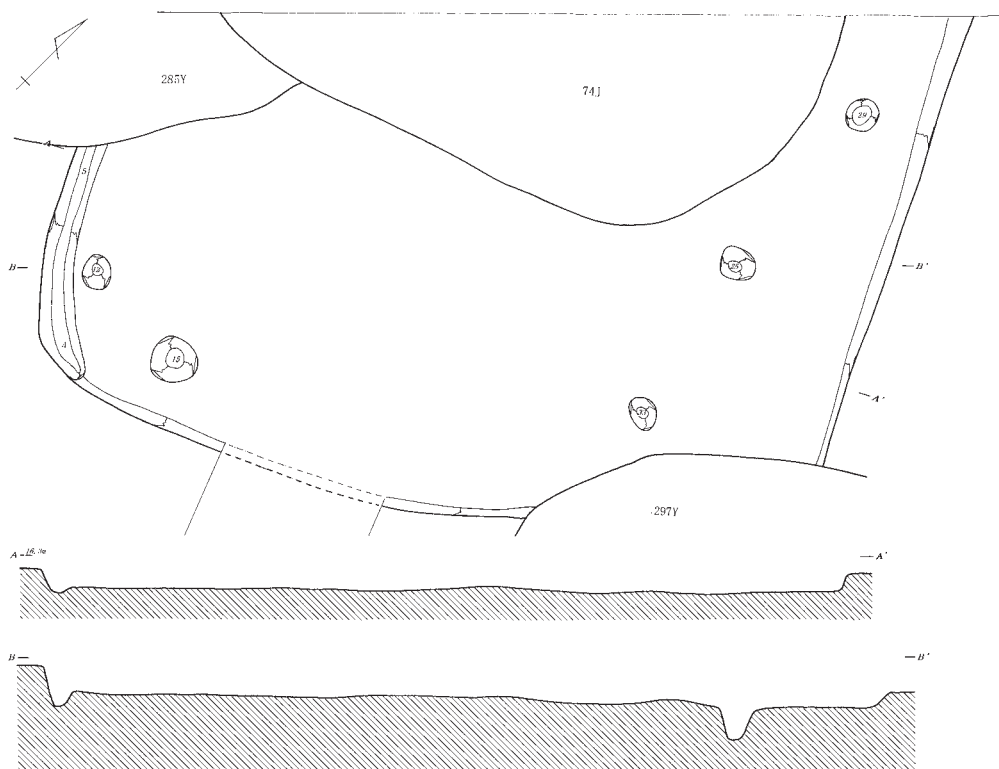
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

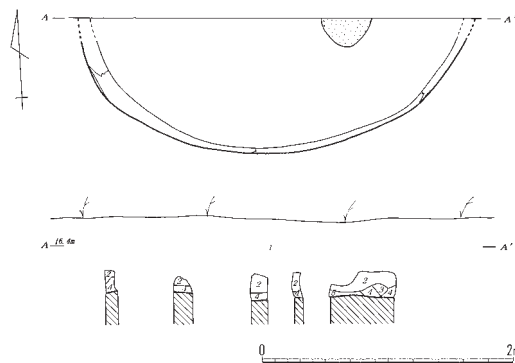
306号住居跡出土遺物（第251図24・25）

壺形土器（24・25）

24は複合口縁部破片。口縁部外面には沈線が3本みられ、口縁部下端には刻みが巡る。内外面共にヘラミガキさ



第247図 306号住居跡（1/60）



第248図 308号住居跡（1/60）

れ赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

25は単純口縁部破片。内湾気味に開く器形である。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、外面には消しきれない粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

308号住居跡（第248図）

〔位置〕 39Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）20～25cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。（炉）住居東側に位置する。不明×39cmの地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロック。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや軟質。

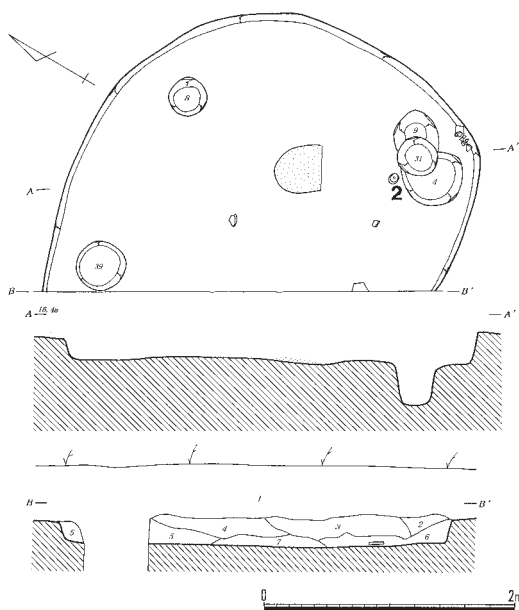
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

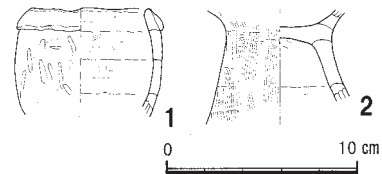
309号住居跡（第249図）

〔位置〕 39Ⅱ地点。

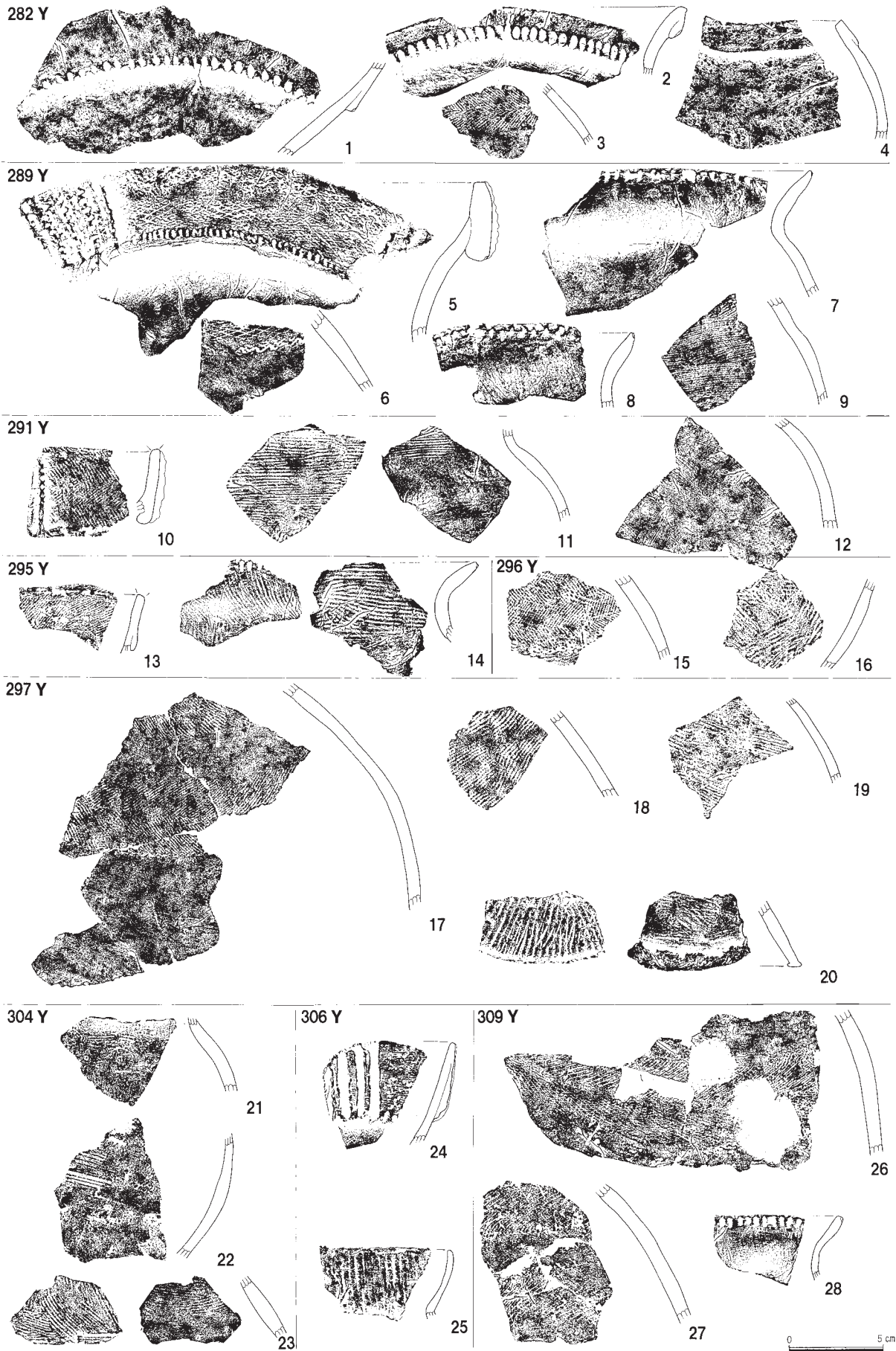
〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×300cm。（主軸方位）N-76°-E。（壁高）15～24cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。住居中央に硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。不明×37cmの地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。東側は攪乱で破壊されている。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。



第249図 309号住居跡（1/60）



第250図 309号住居跡出土遺物（1/4）



第251図 282・289・291・295・297・304・306・309号住居跡出土遺物 (1/3)

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロック・炭化材片を僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化材片を含む。硬質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上に僅かに土器片が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

309号住居跡出土遺物 (第250図、第251図26～28)

壺形土器 (第251図26・27)

いずれも体部破片。肩部には付加条縄文が2段に施され、間には無文帯がみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は26が赤褐色 (10R4/4)、27がにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。26は東コーナー壁際床面上から出土した。27は覆土中からの出土。

鉢形土器 (第251図1)

1/3程度が残存する。推定口径3.5cm。あまり張らない体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は折り返し口縁を呈する。外面はヘラナデされるが、僅かにミガキ痕が残る。内面はヨコナデされるが輪積痕が明瞭に残る。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (第250図2、第251図28)

第250図2は台付甕形土器の脚台部1/2程度が残存する。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。東寄り床面上から出土した。

第251図28は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。色調はにぶい橙色 (5YR7/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

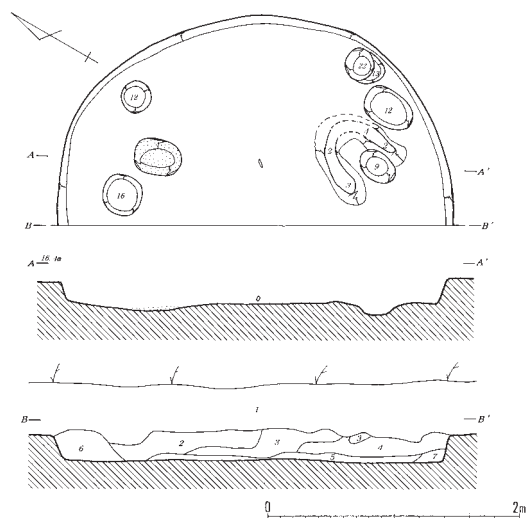
310号住居跡 (第252図)

〔位置〕39Ⅱ地点。

〔構造〕南西側調査区外。(平面形)不明。(規模)不明。

(主軸方位) N-30°-W。(壁高)15~20cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)平坦で遺存状態は良好である。住居中央に硬化面を認める。(炉)住居中央から北に偏って位置する。径30cmの円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。(柱穴)検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴)南壁下中央から東に偏って位置する。32×23cmの楕円形を呈し、深さ9cmを測る。幅22cm前後・高さ2~3cmを測る凸堤を馬蹄形状に構築している。

〔覆土〕



第252図 310号住居跡 (1/60)

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 4層 褐灰色土 (10YR5/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。
- 7層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

311号住居跡 (第253図)

〔位置〕 39Ⅱ地点。

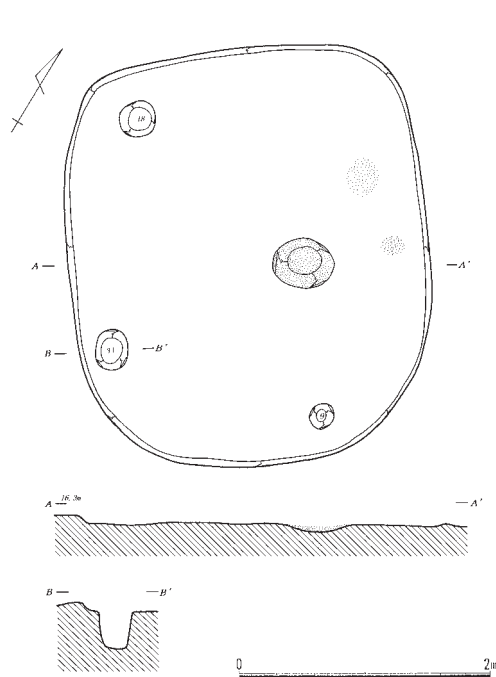
〔構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 329×282cm。(主軸方位) N—51°—E。(壁高) 4～10cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に遺存状態は不良である。部分的に硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。48×39cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されピットは後世のものである。(貯蔵穴) 南西壁下中央から南に偏って位置する。32×28cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明であるが、部分的に残された覆土はローム粒子を僅かに含む軟質の黒褐色土 (7.5YR3/1) で、炉跡の付近では焼土粒子が目立つ。

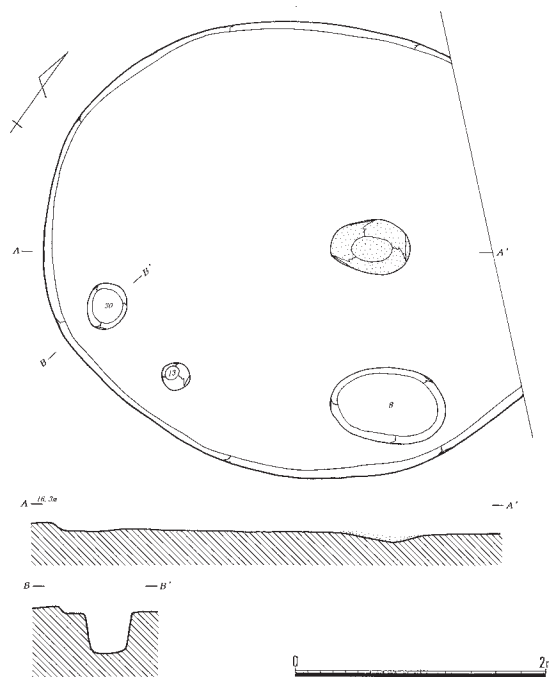
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 短軸が主軸と思われる。



第253図 311号住居跡 (1/60)



第254図 312号住居跡 (1/60)

312号住居跡（第254図）

〔位置〕 39Ⅱ地点。

〔構造〕 北東側調査区外。（平面形）楕円形。（規模）不明×357cm。（主軸方位）N-55°-E。（壁高）3～6cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。63×43cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）北西壁下中央から南東に偏って位置する。径34cmの円形を呈し、深さ29cmを測る。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明であるが、部分的に残された覆土はローム粒子を含むやや硬質の黒褐色土（10YR3/1）である。

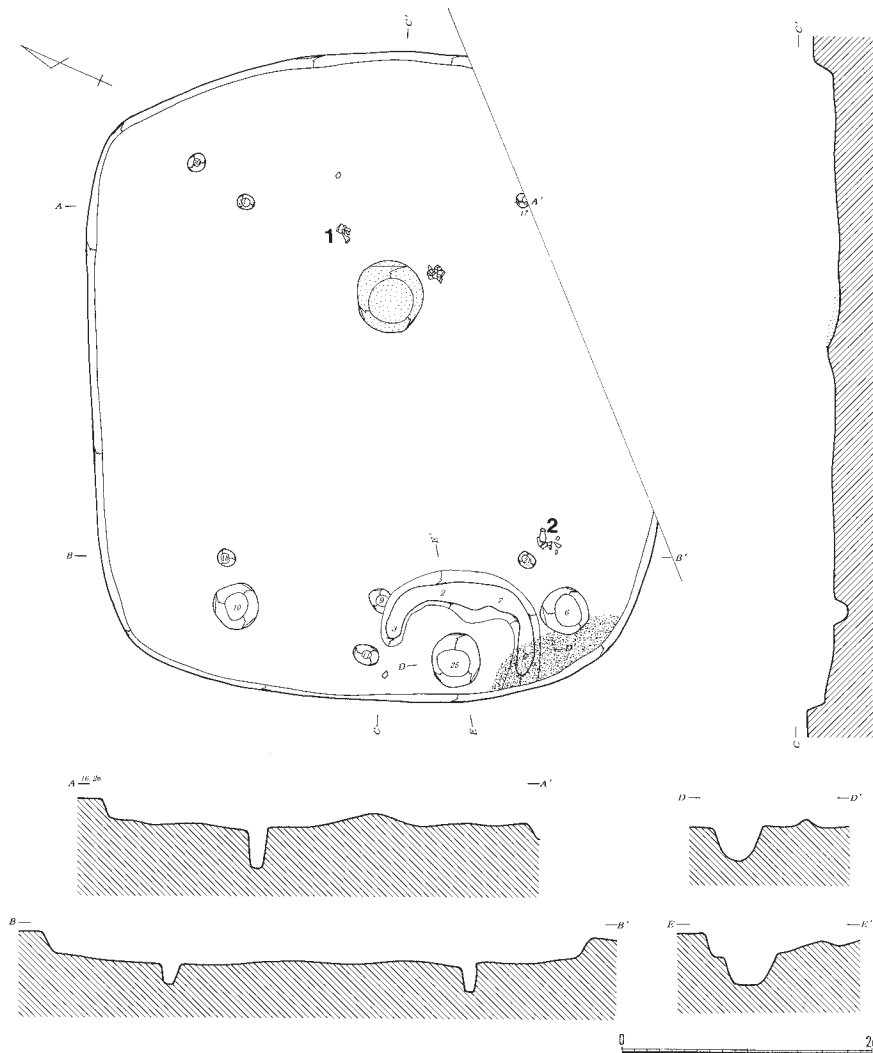
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

313号住居跡（第255図）

〔位置〕 40Ⅰ地点。

〔構造〕 南側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）505×436cm。（主軸方位）N-64°-E。（壁高）11～20cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に平坦であるが軟弱である。（炉）



第255図 313号住居跡（1/60）

住居中央から東に偏って位置する。57×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。(柱穴)各コーナーの4本が支柱穴と思われる。全体に規模が小さいものである。西壁下中央からやや東に偏って位置するピットは、入口施設と思われる。(貯蔵穴)西壁下中央から南に偏って位置する。43×39cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。幅23cm前後・高さ2～12cmを測る凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕攪乱が著しく詳細は不明であるが、部分的に残された覆土はローム粒子を多く、炭化物粒子を僅かに含むやや硬質の黒褐色土(10YR3/2)である。南コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が推移する。

〔遺物〕実測できるものは3点のみで、あとは破片が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

313号住居跡出土遺物(第256図、第278図1・2)

壺形土器(第256図1、第278図1)

第256図1は底部のみ残存する。底径6.5cm。底部中心が僅かに窪んでいる。外面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉北側から出土。

第278図1は肩部破片。LRの単節縄文とS字状結節文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中の出土。

高坏形土器(第256図2)

ほぼ完形。口径13.4cm・裾部径9.3cm・器高11cmを測る。坏部は塊状を呈し、脚台部は末広がりになるやかに開く器形である。口縁部外面にはLRの単節縄文が施される。坏部は縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。脚台部外面はヘラミガキされ赤彩されるが、内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色(5YR6/4)、赤彩部は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。凸堤東側床面上から出土した。

甕形土器(第256図3、第278図2)

第256図3は台付甕形土器の甕部1/2が程度が残存する。推定口径16cmを測る。球状の体部から立ち上がり、頸部は「く」字状にくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面にはごく浅い刻みがみられる。内外面共にヘラナデされるが外面には僅かにハケ目痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR5/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

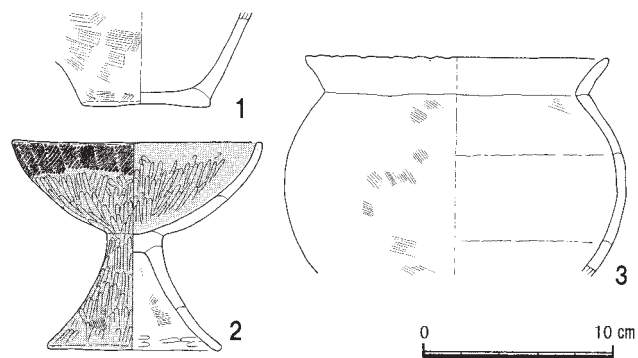
第278図2は口頸部破片。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調は黒褐色(5YR3/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中から出土した。

314号住居跡(第257図)

〔位置〕40I地点。

〔構造〕南東コーナーの一部調査区外。(平面形)隅丸正方形。(規模)322×318cm。(主軸方位)N-62°-E。(壁高)13～17cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)全面軟弱である。(炉)住居中央から東に偏って位置する。45×42cmの円形を呈する地床炉で、深さ21cmを測る。(柱穴)各コーナーの4本が支柱穴である。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)南西コーナーに位置する。径30



第256図 313号住居跡出土遺物(1/4)

cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明であるが、部分的に残された覆土は、ローム粒子を僅かに含むやや硬質の黒褐色土(10YR3/1)である。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

315号住居跡 (第258図)

〔位置〕 40 I 地点。

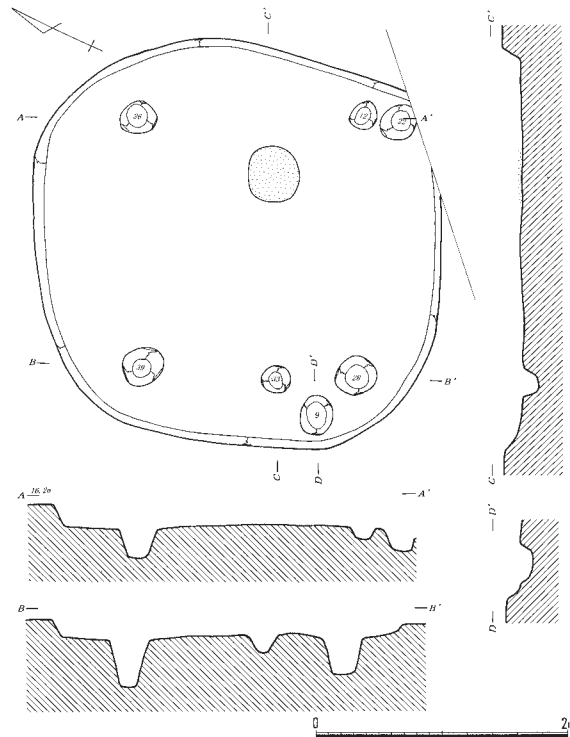
〔構造〕 北側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 17~26cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に平坦で軟弱だが、南東コーナー付近に硬化面を認める。

(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出された1本は主柱穴の可能性はある。(貯蔵穴) 検出されなかった。

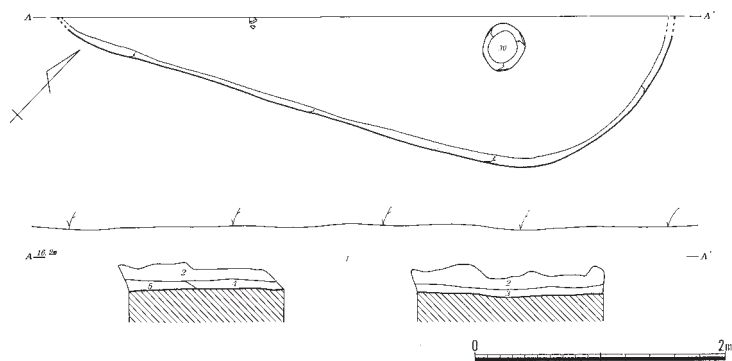
〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。



第257図 314号住居跡 (1/60)



第258図 315号住居跡 (1/60)

- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 4層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

316号住居跡 (第259図)

〔位置〕 40 I 地点。

〔構造〕 北西側調査区外。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 不明×215cm。(主軸方位) N-47°-W。(壁高) 2～5cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅9～14cm・下幅3～5cm・深さ1～6cmを測り全周すると思われる。(床面) 全体に平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) ピットが多く検出されているが、ほとんどが後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しいため詳細は不明である。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔所見〕 炉が検出されなかったが、それ以外の構造からして住居跡と認定した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

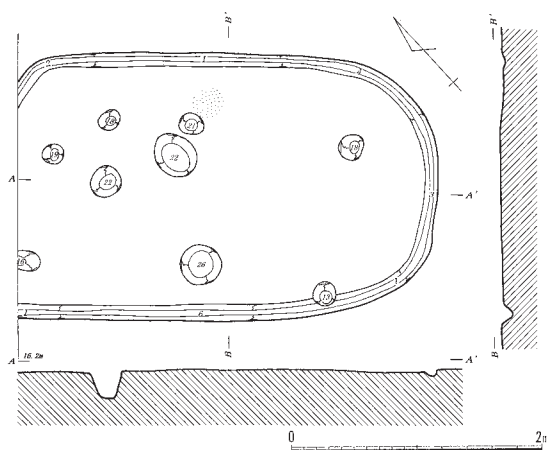
317号住居跡 (第260図)

〔位置〕 40 I 地点。

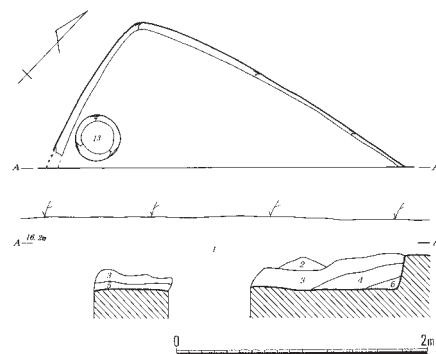
〔構造〕 南東側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 25～29cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦で全面軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。



第259図 316号住居跡 (1/60)



第260図 317号住居跡 (1/60)

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

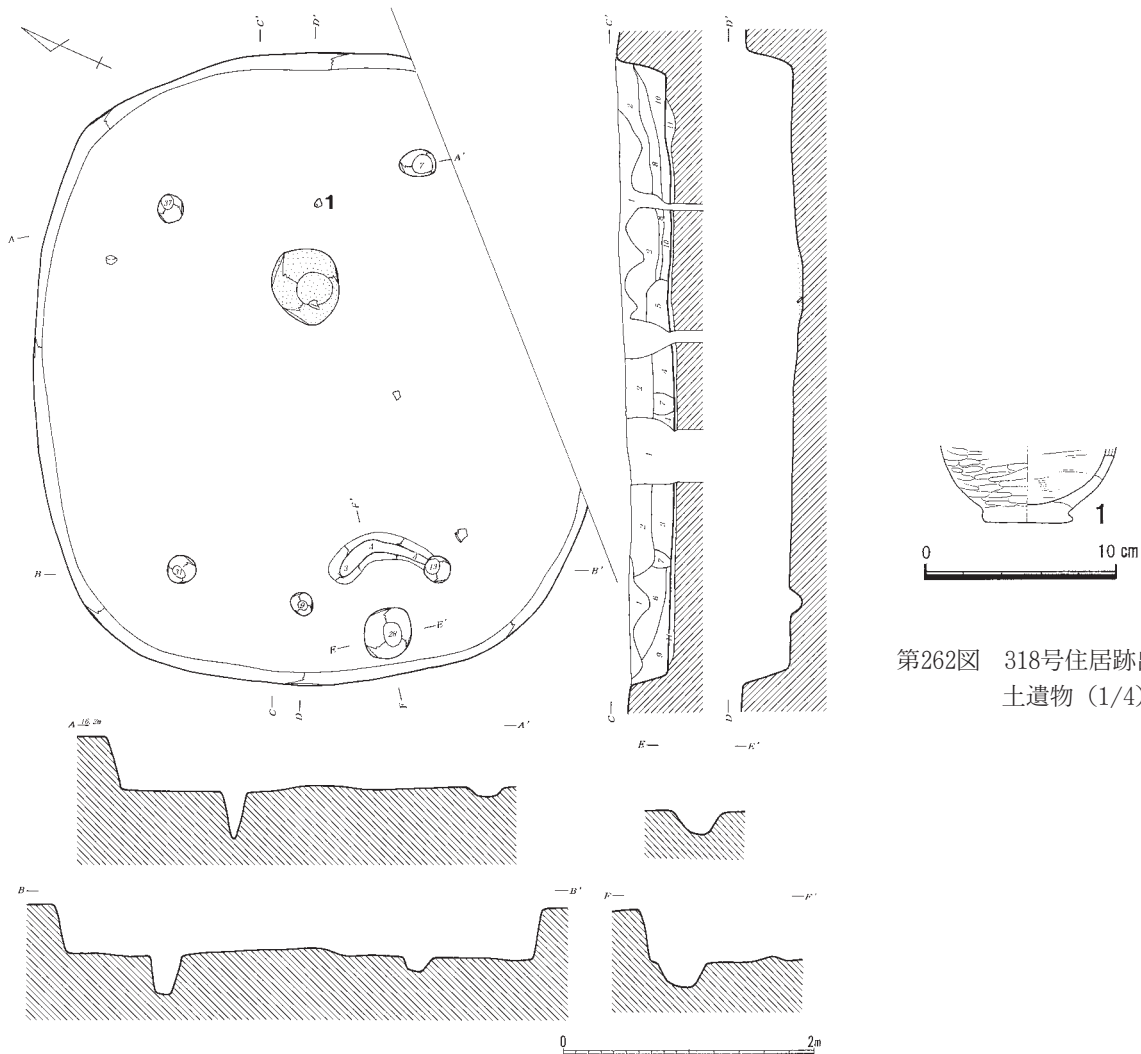
318号住居跡（第261図）

〔位置〕 40 I 地点。

〔構造〕 南東側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×500cm。（主軸方位）N-65°-E。（壁高）35～41cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。64×54cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。掘り込み内側に土器片を検出する。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴である。西壁下中央から僅かに北に偏った1本が入口施設と思われる。（貯蔵穴）西壁下中央から南に偏って位置する。45×39cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。幅21cm前後・高さ2～3cmを測る凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。



第261図 318号住居跡（1/60）

第262図 318号住居跡出土遺物（1/4）

- 5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 9層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 11層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上に僅かに土器片が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

318号住居跡出土遺物 (第262図、第278図3～7)

壺形土器 (第278図5)

肩部破片。LRの単節縄文が3段施され、境目にはS字状結節文がみられる。縄文帯内部には直径約1cmの円形赤彩文がみられる。色調は褐灰色 (7.5YR4/1) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

鉢形土器 (第278図3・4)

3・4は同一個体。複合口縁部直下には直径8mmの円孔が焼成前に穿孔される。外面はヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。3は凸提東側付近、4は炉内部から出土した。

甕形土器 (第278図6・7)

6は口縁部破片、7は体部破片。6の口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は6がにぶい赤褐色 (5YR5/4)、7が黒褐色 (5YR3/1) を呈する。共に胎土には細礫・粗砂を含む。6は覆土中から、7は住居跡中心付近から出土した。

ミニチュア土器 (第262図1)

壺形土器の底部2/3程度が残存する。底径4.5cmを測る。底部は平底で張り出している。体部は球状を呈すると思われる。外面は横方向にヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉の北東側床面上から出土した。

319号住居跡 (第263図)

〔位置〕40I地点。

〔構造〕(平面形)隅丸長方形。(規模)297×275cm。(主軸方位)N-57°-E。(壁高)20～28cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)平坦だが全体に軟弱である。(炉)住居中央から僅かに北東に偏って位置する。47×41cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴)検出されなかった。(貯蔵穴)南コーナーに位置する。33×30cmの楕円形を呈し、深さ16cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 10層 褐灰色土 (10YR4/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 11層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロック。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを含む。硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 15層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 16層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 17層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 18層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 19層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物は1点のみである。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

319号住居跡出土遺物 (第264図)

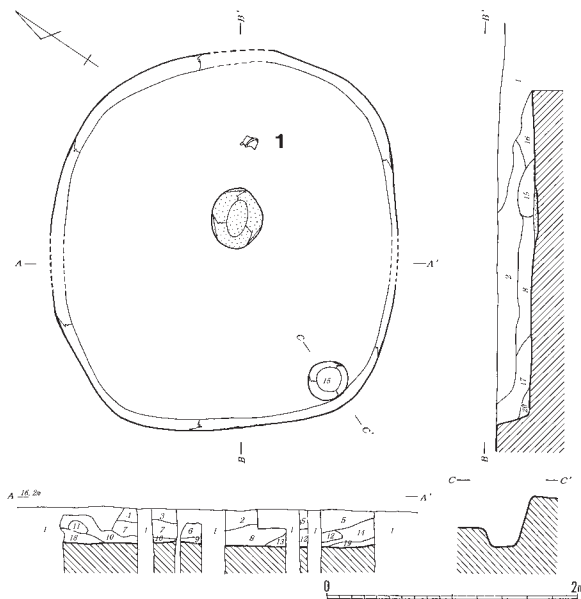
甕形土器 (1)

台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径11.3cmを測る。裾部へかけて内湾気味に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉の北東側床面上から出土した。

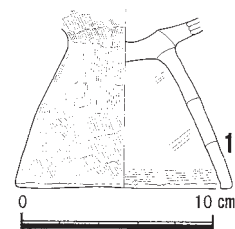
321号住居跡 (第265図)

〔位置〕 40Ⅱ地点。

〔構造〕 北西側調査区外。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×373cm。(主軸方位) N-45°-E。(壁高) 21~25cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認



第263図 319号住居跡 (1/60)



第264図 319号住居跡出土遺物 (1/4)

める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。53×47cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 東側の2本が支柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 南東コーナー壁下に位置する。46×32cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。周囲には幅11～35cm・高さ2～5cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

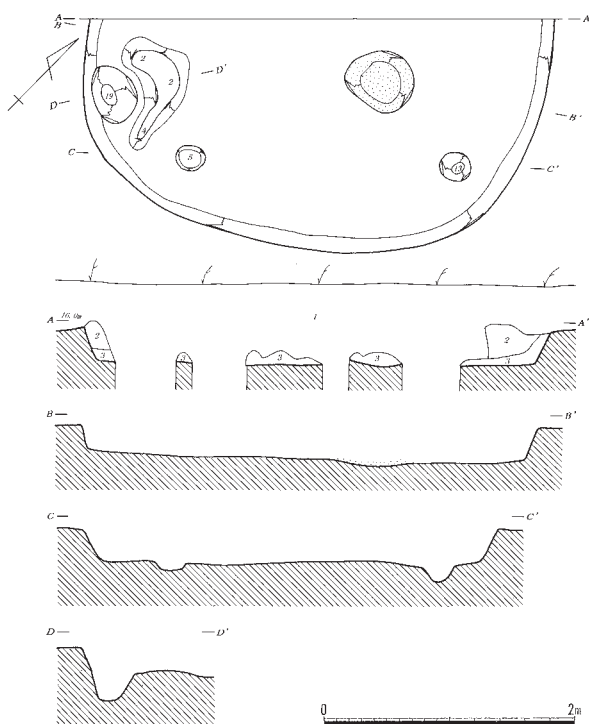
322号住居跡(第266図)

〔位置〕 43 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 494×423cm。(主軸方位) N-35°-W。(壁高) 36～41cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅11～20cm・下幅4～7cm・深さ5～10cmを測り全周する。(床面) 硬質ロームを床面とし、平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。91×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。南側に礫を配している。(柱穴) 各コーナーの4本が支柱穴である。南壁下中央から僅かに北に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東壁下中央から北東に偏って位置する。40×35cmの楕円形を呈し、深さ17cmを測る。北西側には幅28cm・高さ2～7cmを測る凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

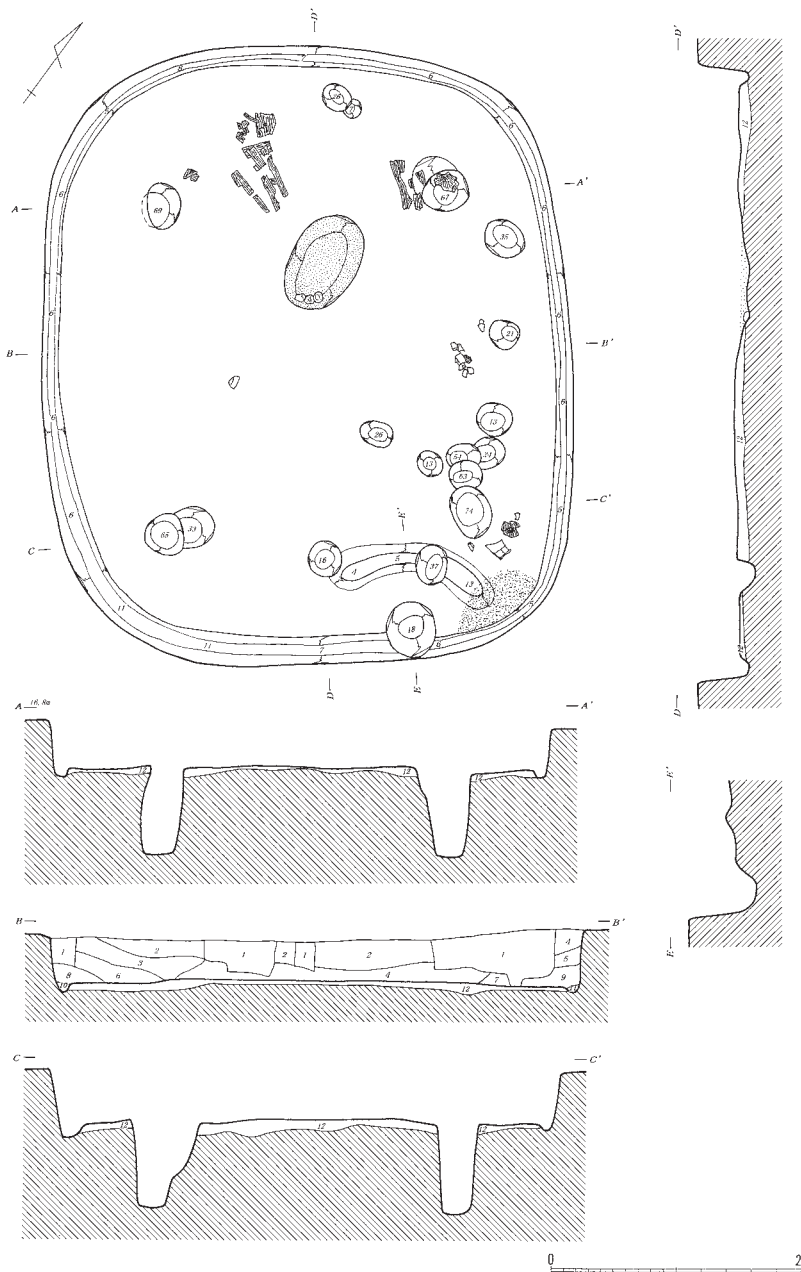
- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。



第265図 321号住居跡(1/60)

- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 7層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。焼土粒子を多く含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 12層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 東側の床面上に僅かに土器片と、北側床面上に炭化材を出土した。



第266図 322号住居跡 (1/60)

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 炭化材が床面上に出土するなど、焼失家屋の可能性はある。

322号住居跡出土遺物（第287図 8～12）

壺形土器（8～10）

8は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、境目にはS字状結節文が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁寄りの床面上から出土した。

9は頸部破片、10は肩部破片。9は内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。10は鋸歯文の区画内に網目状捺糸文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は9がにぶい褐色（7.5YR5/3）、10はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。いずれも胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。共に覆土中からの出土。

甕形土器（11・12）

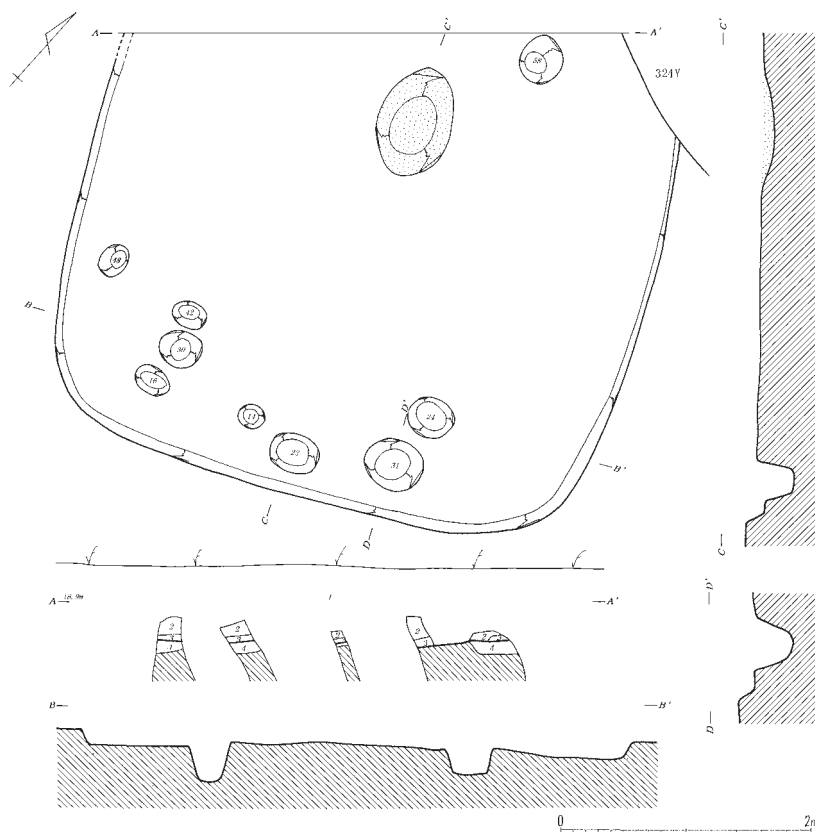
11は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

12は台付甕形土器の甕部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。東コーナー床面上から出土した。

323号住居跡（第267図）

〔位置〕 43 I 地点。

〔構造〕 北西側調査区外。324 Y に切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×458cm。（主軸方位）N-29°-W。（壁高）12～22cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。87×59cmの楕



第267図 323号住居跡（1/60）

円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴)南・側コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。南壁下中央から西に偏って位置するピットは入口施設と思われる。(貯蔵穴)南壁下中央から東に偏って位置する。50×40cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

324号住居跡 (第268図)

〔位置〕 43 I 地点。

〔構造〕 北西側調査区外。326Yを切る。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 7～15cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。硬質。貼床充填土。

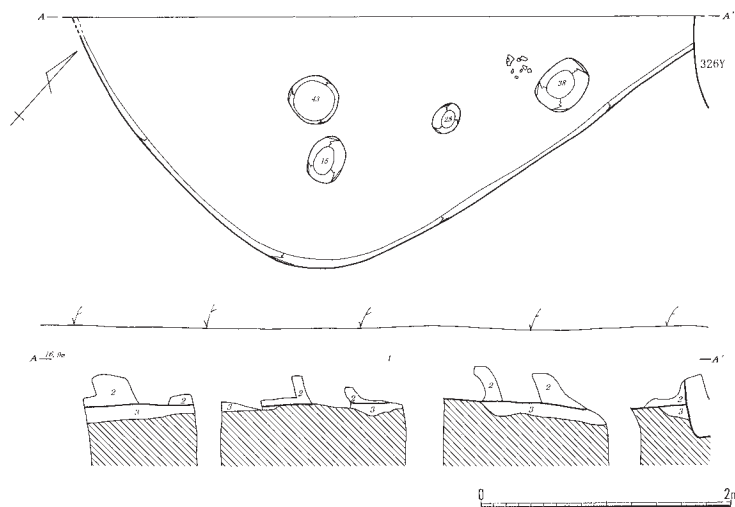
〔遺物〕 破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

324号住居跡出土遺物 (第278図13～15)

甕形土器 (13～15)

いずれも台付甕形土器の脚台部破片。13・14は同一個体。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は13・14がにぶい赤褐色 (5YR5/4)、15がにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。13・15は床面上から出土。14は覆土中からの出土。



第268図 324号住居跡 (1/60)

325号住居跡（第269図）

〔位置〕 43 I 地点。

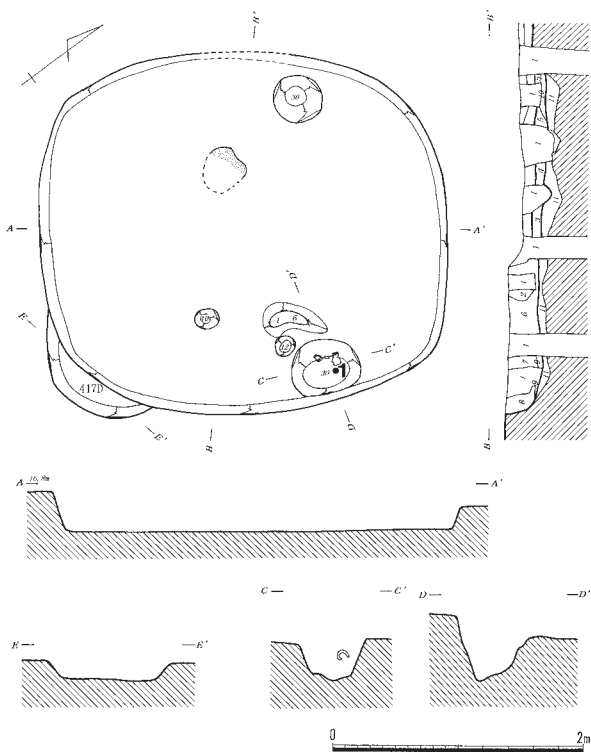
〔構造〕 417Dを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）326×287cm。（主軸方位）N-57°-W。（壁高）24~34cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に平坦である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。不明×32cmの地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。南側・北側が攪乱で破壊されている。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）南東壁中央から東に偏って位置する。54×43cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。北側に幅20cm前後・高さ1~10cmの凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

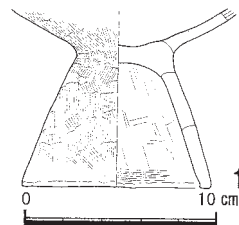
- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土（10YR3/3）。ロームブロック。硬質。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。硬質。
- 7層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 8層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 10層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 11層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 貯蔵穴内に土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。



第269図 325号住居跡、417号土坑（1/60）



第270図 325号住居跡出土遺物（1/4）

〔所見〕短軸が主軸と思われる。

325号住居跡出土遺物（第270図、第278図16～18）

壺形土器（第278図16・17）

16は肩部破片。LRの単節縄文が施され、下端には3条のS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

17は頸部破片。内面には櫛描波状文が施され、文様帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第270図1、第278図18）

第270図1は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径10cmを測る。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。内面には工具痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

第278図18は甕部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

326号住居跡（第271図）

〔位置〕43Ⅱ・43Ⅲ地点。

〔構造〕北東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）29～33cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～20cm・下幅6～10cm・深さ5～18cmを測り、確認できた範囲では全周する。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）北・東コーナーに近い2本が主柱穴の一部であろうか。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。中央部分では焼土粒子を含む。やや粘質。
- 5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 8層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 10層 暗褐色土（10YR3/3）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕南コーナーの床面上に土器片が出土した。

〔時期〕古墳時代前期前半。

326号住居跡出土遺物（第272図）

壺形土器（1・2）

1は短頸広口壺。全体の1/4程度が残存する。推定口径15cm。短い複合口縁から頸部でくびれて、球状の体部を作出する。内外面共にヘラミガキされるが、複合口縁直下には消しきれないハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。南コーナー床面上より出土した。

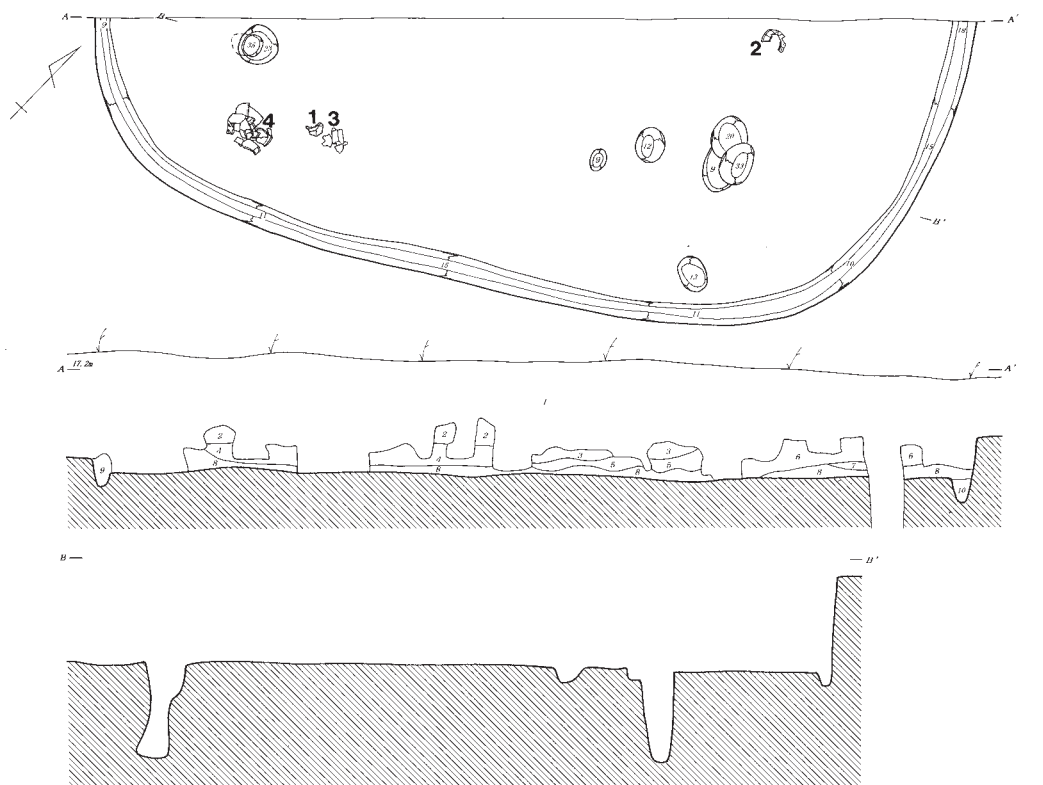
2は複合口縁部のみ残存。推定口径17.5cm。口縁部は折り返し口縁。頸部からゆるやかに外反する器形である。口縁部外面はヘラナデされるが、消しきれないハケ目痕が残る。以下、ヘラミガキされるが、外面複合口縁下と内

面頸部付近にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・特に白色粒子を多く含む。住居跡中央から北東より床面上から出土した。

甕形土器（3・4）

3は甕部1/4程度が残存する。推定口径14.2cmを測る。あまり張らない体部から立ち上がり、頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが粗いハケ目痕が残る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物が付着する。南コーナー付近床面上から出土。

4は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径23.2cmを測る。張りの無い体部から立ち上がり、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は開く器形であるが、全体的に左右不対象である。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。輪積痕と指頭痕が多数みられる。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が明瞭に残る。体部下半には炭化物が厚く付着している。色調は浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。胎土には細礫・



第271図 326号住居跡 (1/60)



第272図 326号住居跡出土遺物 (1/4)

粗砂・白色粒子を含む。住居跡南コーナー床面上から出土した。

329号住居跡（第273図）

〔位置〕 48地点。

〔構造〕 東及び西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）18～29cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱だが、部分的に硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 灰褐色土（7.5YR4/2）。ロームブロックを多く含む。軟質。後世のピット。
- 3層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロック。
- 5層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 6層 暗灰色土（N3/0）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

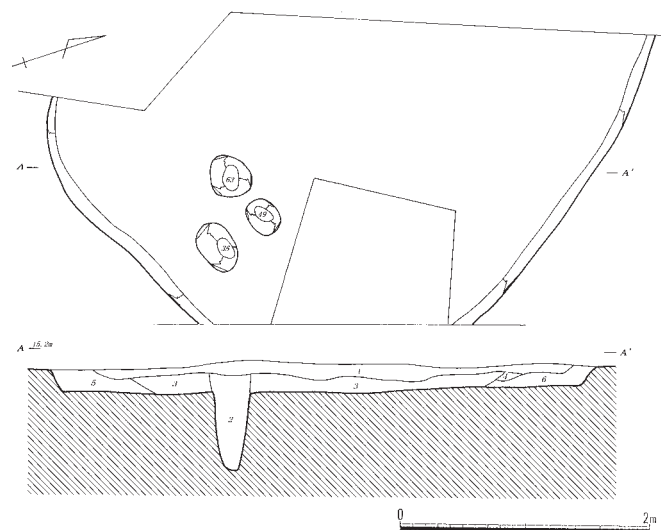
330号住居跡（第274図）

〔位置〕 49 I 地点。

〔構造〕 南側及び北側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）24～31cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。西壁の一部を確認するのみである。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱であるが、中央に一部硬化面を認める。（炉）48×44cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ9cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。



第273図 329号住居跡（1/60）

4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

5層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床

6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや軟質。貼床充填土。

〔遺物〕 炉の北側と床面上に僅かに土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

330号住居跡出土遺物 (第278図19～21)

壺形土器 (19・20)

19・20は同一個体で頸部から肩部にかけての破片。頸部外面には円形浮文が貼付される。内外面共にヘラミガキされる。色調は19がにぶい褐色 (7.5YR5/3)、20がにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・多量の白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (21)

口縁部破片。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉北側床面上から出土。

331号住居跡 (第275図)

〔位置〕 49 I 地点。

〔構造〕 大部分が調査区外と攪乱で詳細は不明である。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 24～27cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅17～19cm・下幅8～10cm・深さ9～16cmを測る。(床面) 遺存状態は不良で、部分的に硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

331号住居跡出土遺物 (第278図22・23)

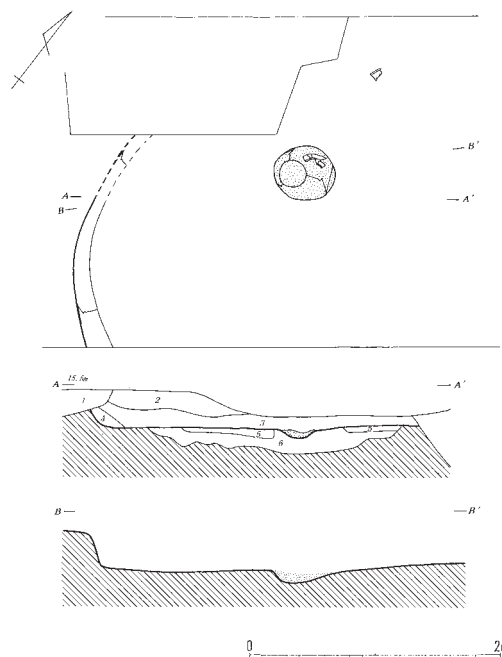
甕形土器 (22・23)

22は口縁部破片、23は体部破片。共に内外面共にヘラナデされるが不規則なハケ目痕が残る。色調は22が灰褐色 (7.5YR4/2)、23が灰褐色 (5YR4/2) を呈する、いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

332号住居跡 (第276図)

〔位置〕 50 I 地点。

〔構造〕 大部分が調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 28～31cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅12～16cm・下幅5～7cm・深さ3～



第274図 330号住居跡 (1/60)

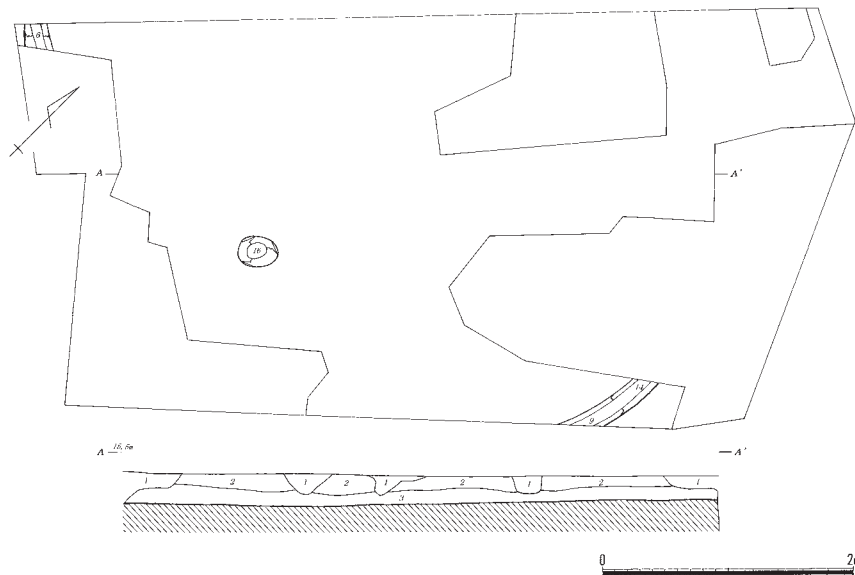
11cmを測る。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 不明×35cmの粘土火皿で深さ5cmを測り、被熱の範囲は不明×45cmである。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

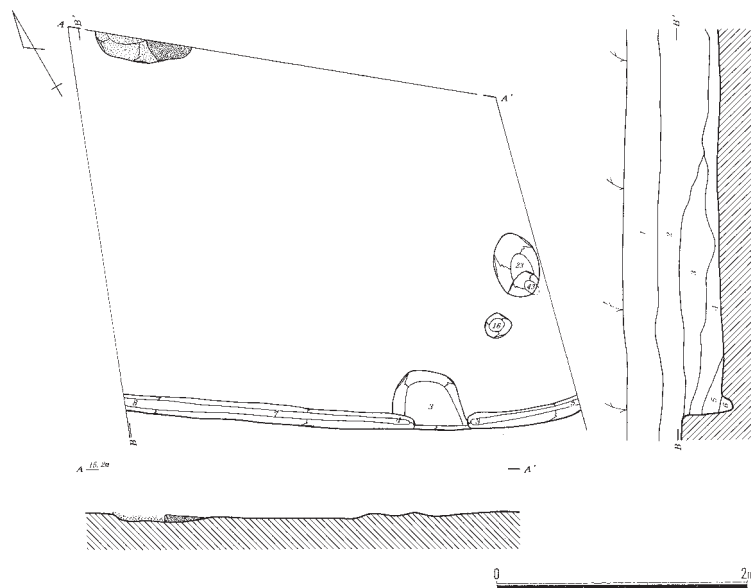
- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第275図 331号住居跡 (1/60)



第276図 332号住居跡 (1/60)

333号住居跡（第277図）

〔位置〕 50 I 地点。

〔構造〕 北西コーナー部側調査区外。334 Y に切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）330×274cm。（主軸方位）N—28°—W。（壁高）14～19cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。52×48cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みを持つ。（柱穴）各コーナーの4本が主柱穴である。南壁下中央の1本は入口施設であろうか。（貯蔵穴）南東壁下中央から北東に偏って位置する。径37cmの円形を呈し、深さ26cmを測る。幅31cm・高さ2～5cmの凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 褐灰色土（10YR4/1）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 5層 暗赤褐色土（5YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや硬質。
- 6層 灰赤色土（2.5YR4/2）。焼土ブロック。硬質。
- 7層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む。硬質。
- 8層 褐灰色土（10YR4/1）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

南東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が推移する。

〔遺物〕 貯蔵穴の中に土器片が1点出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

333号住居跡出土遺物（第278図24～26）

壺形土器（24）

複合口縁部破片。R Lの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉内から出土した。

鉢形土器（25）

複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（10R4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

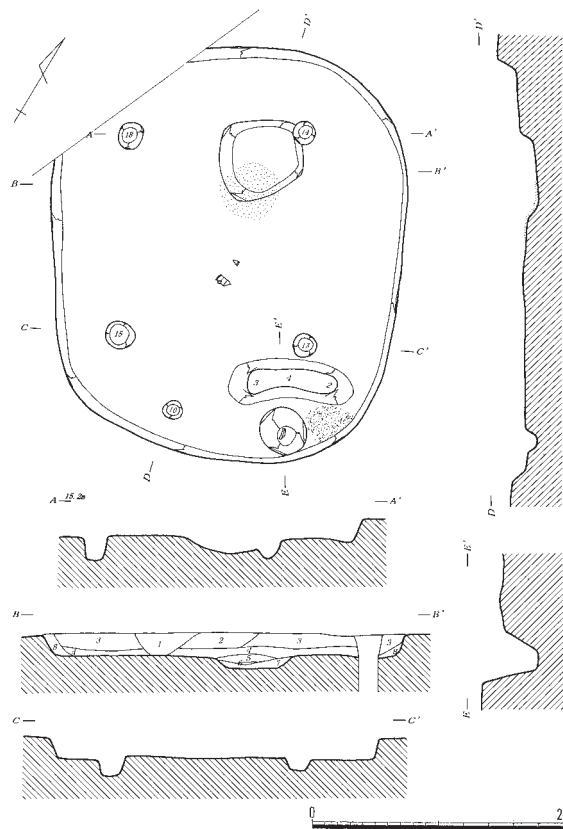
甕形土器（26）

口頸部破片。頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

334号住居跡（第279図）

〔位置〕 50 I・50 II 地点。

〔構造〕 北及び南・西側調査区外。333 Y を切る。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）18～24cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）



第277図 333号住居跡（1/60）

上幅19～27cm・下幅9～12cm・深さ4～14cmを測る。(床面)全体に軟弱だが、一部硬化面を認める。(炉)122×63cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴)検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴)検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土(5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 灰褐色土(7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや粘質。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

334号住居跡出土遺物(第280図、第299図1～4)

壺形土器(第299図1)

第299図1は肩部破片。LRの単節縄文が施され、下端には3条のS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は暗赤褐色(10R3/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中からの出土。

鉢形土器(第280図2)

完形の屈曲口縁鉢。口径13cm・底径2cm・器高4.5cmを測る。上げ底の底部から立ち上がり碗状の体部を作出する。口縁部は粘土紐を貼り付けている。外面には輪積痕が残る。内面は横方向にヘラミガキされる。外面は縦方向にヘラミガキされる。外面体部は横位にヘラミガキされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈する。胎土には粗砂・橙色粒子を含むが、極めて精選されきめ細かく堅緻である。北西壁際から出土した。

甕形土器(第299図2～4)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には幅広で粗いハケ目痕が残る。色調は2がにぶい赤褐色(5YR5/4)、3が黒褐色(7.5YR3/1)、4が灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。いずれも胎土には粗砂・白色粒子を含むが、精選されてきめ細かい。3・4は器厚が3mmと非常に薄く作られており、外面には炭化物が付着する。覆土中からの出土。

ミニチュア土器(第280図1)

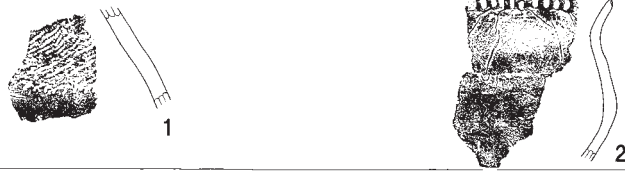
壺形土器。全体の1/2程度が残存する。口径3.7cm・底径2.5cm・器高3.2cmを測る。てづくねで作られている。平底の底部から立ち上がり頸部で屈曲し、口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には粗砂を含む。覆土中からの出土。

335号住居跡(第281図)

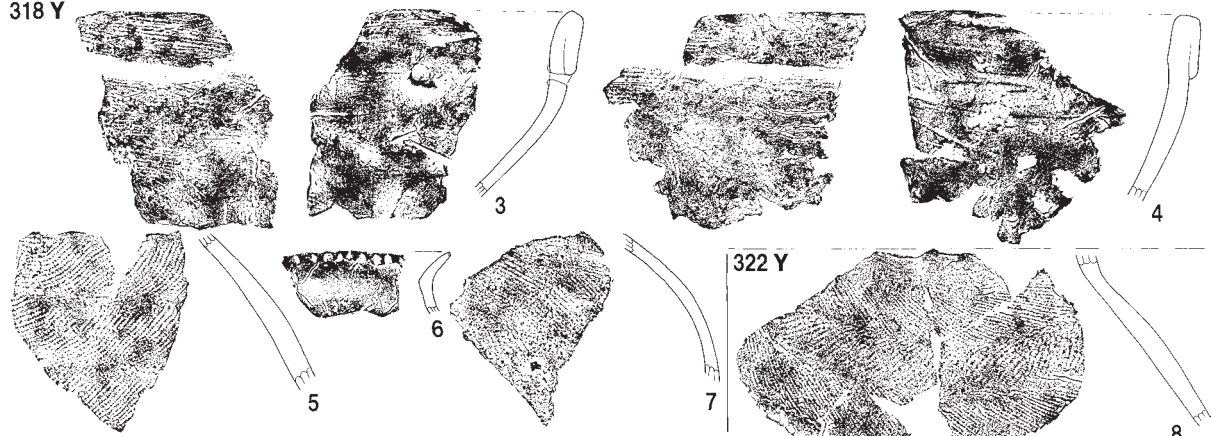
〔位置〕51地点。

〔構造〕西側調査区外。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)N-61°-W。(壁高)49～53cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅8～13cm・下幅3～8cm・深さ1～11cmを測る。遺存している部分では全周する。(床面)平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。(炉)検出されなかった。(柱穴)検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴)東壁下中央に位置する。53×45cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測

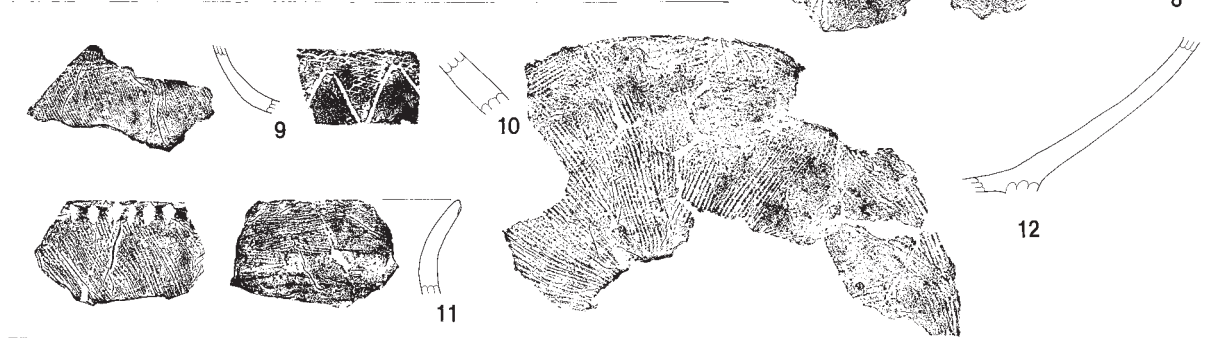
313 Y



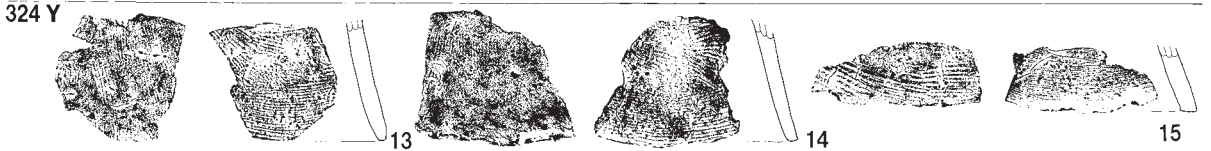
318 Y



322 Y



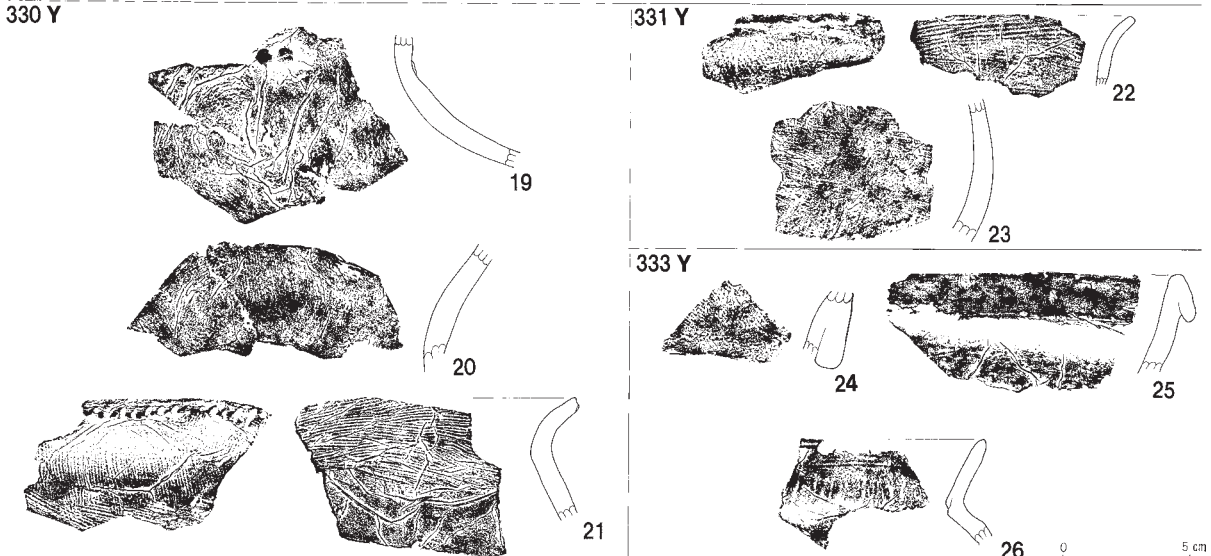
324 Y



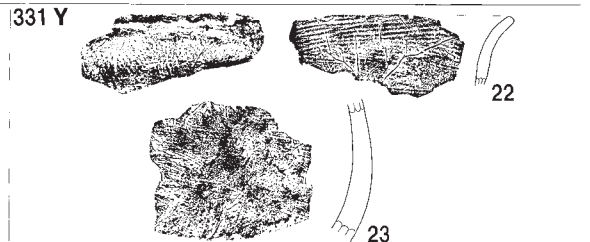
325 Y



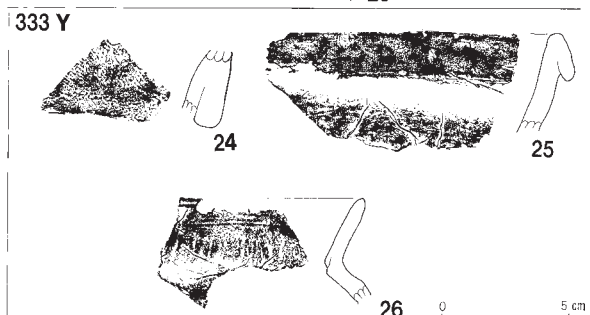
330 Y



331 Y



333 Y



第278図 303・318・322・324・325・330・331・333号住居跡出土遺物 (1/3)

0 5 cm

る。幅29cm前後・高さ1～6cmを測る凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 - 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
 - 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
 - 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子・炭化物小片を含む。やや硬質。
 - 5層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
 - 6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
- 東コーナーに砂礫を含む暗赤褐色土が堆積している。

〔遺物〕 貯蔵穴の周囲に土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

335号住居跡出土遺物 (第299図5・6)

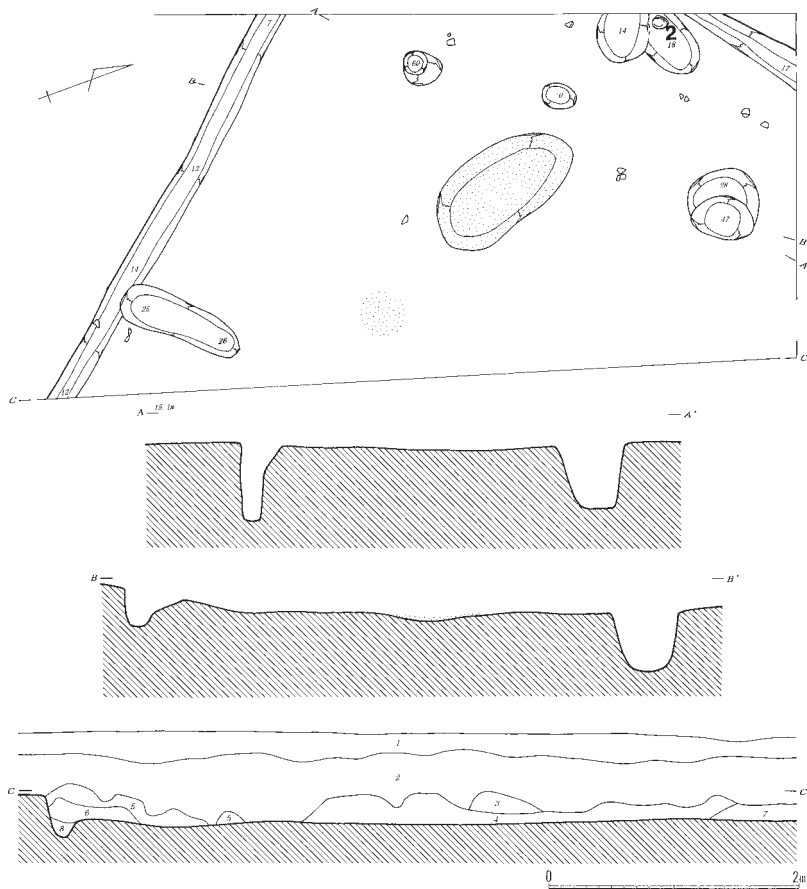
壺形土器 (5)

肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端には2条のS字状結節文が施される。色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

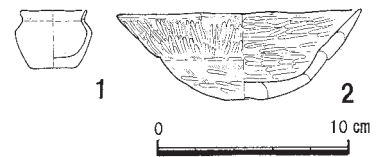
甕形土器 (6)

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

共に覆土中から出土した。



第279図 334号住居跡 (1/60)



第280図 334号住居跡出土遺物 (1/4)

336号住居跡（第282図）

〔位置〕 10Ⅲ地点。

〔構造〕 南西側は調査区外。（平面形）略円形。（規模）径407cm。（主軸方位）N-7°-W。（壁高）17~30cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。南側に一部硬化面を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する。66×59cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。（柱穴）南壁下の1本は入口施設であろう。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）南壁下、中央から東に偏って位置する。不明×74cm・深さ17cmを測る。幅21cm前後・高さ3~5cmを測る凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 6層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 床面上に土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

336号住居跡出土遺物（第283図、第299図7~13）

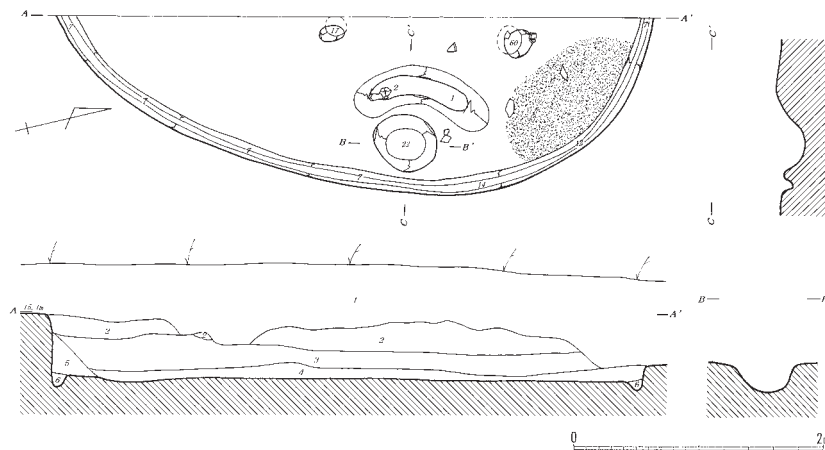
壺形土器（第299図7~11）

7は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

8・10・11は頸部から肩部にかけての破片。8・10はLRの単節縄文が施され、上端には円形浮文が施される。11はLRの単節縄文が2段施され、境目にはZ字状結節文がみられる。上端には円形浮文が施される。いずれも縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。すべて色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。8・10は覆土中からの出土。11は炉内からの出土。

9は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節縄文が施される。縄文帯内部には直径約1cmの円形赤彩文がみられる。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10R4/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。東壁際床面上から出土した。

甕形土器（第283図1、第299図12~13）



第281図 335号住居跡（1/60）

第283図1は台付甕形土器の脚台部の1/2程度が残存する。推定裾部径10.7cm。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

第299図12は口縁部破片、13は体部破片。12は口唇部外面に刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。共に色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

337号住居跡（第284図）

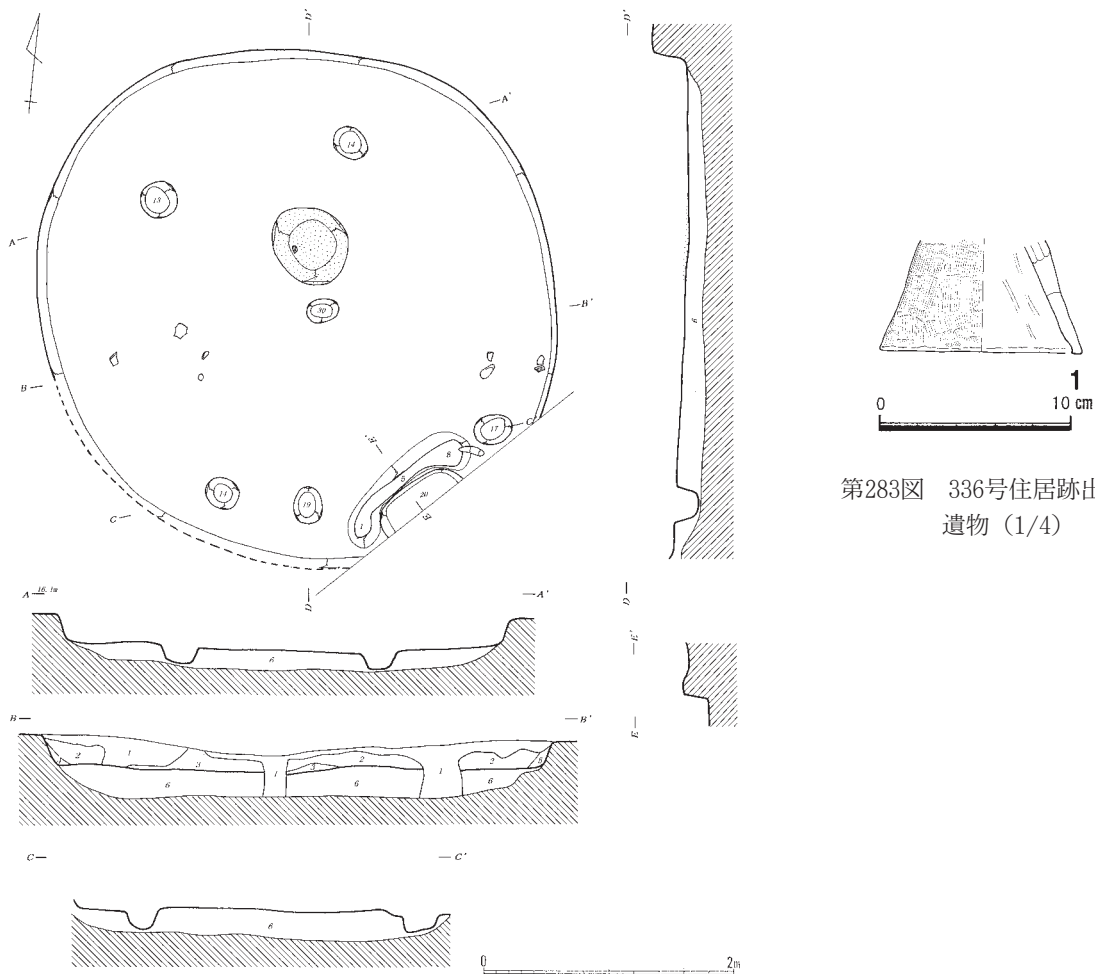
〔位置〕 40Ⅲ地点。

〔構造〕 北西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）N—S。（壁高）19～25cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）東及び南コーナーの2本が主柱穴と思われる。南壁下の柱穴は入口施設と考えられる。（貯蔵穴）東コーナー壁下に位置する。53×41cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。幅19cm前後・高さ1～5cmを測る凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。



第283図 336号住居跡出土遺物（1/4）

第282図 336号住居跡（1/60）

3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。

〔遺物〕床面上から破片が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

337号住居跡出土遺物 (第285図、第299図14)

甕形土器 (第285図1、第299図14)

第285図1は台付甕形土器の甕部1/2程度が残存する。推定口径20cm。球状の体部から立ちあがり、頸部で「く」字状にくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色 (5YR6/6) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央付近と貯蔵穴付近から出土した。

第299図14は体部下半の破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

338号住居跡 (第286図)

〔位置〕40Ⅲ地点。

〔構造〕南東側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) N-11°-W。(壁高) 43~53cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。西側に硬化面を認める。(炉) 大部分が調査区外である。地床炉と思われる。(柱穴) 東及び西コーナー検出された2本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

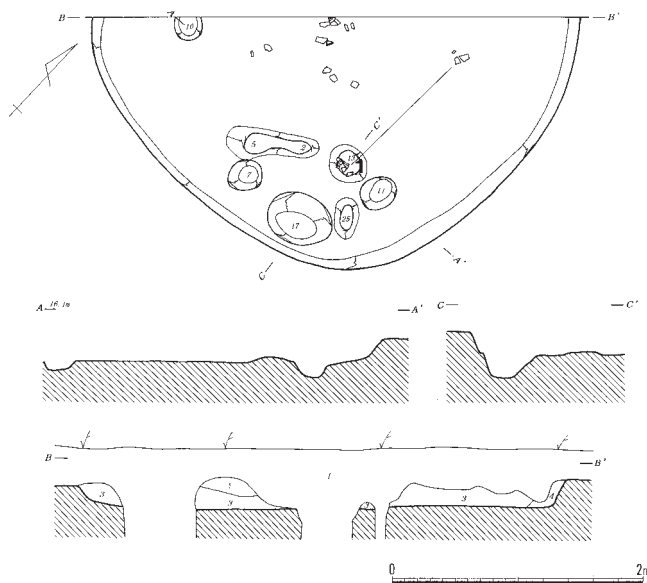
2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。

3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。

4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。



第284図 337号住居跡 (1/60)



第285図 337号住居跡出土遺物 (1/4)

7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックをやや硬質。

8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム小ブロックを含む。やや軟質。

9層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

10層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 礫が出土したのみで図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

339号住居跡 (第287図)

〔位置〕 40Ⅲ地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 358×346cm。(主軸方位) N-84°-E。(壁高) 39~45cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 硬質ロームを床面とするため遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。57×43cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmを測る。西側に土器片を埋設している。(柱穴) 各コーナーの4本が主柱穴である。西壁下中央に位置するピットは入口施設と思われる。(貯蔵穴) 西壁下中央から僅かに南に偏って位置する。55×36cmの楕円形を呈し、深さ28cmを測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。

3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロックを多く含む。ポロポロした感じ。

4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。硬質。

6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。

8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。

10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

11層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 西側コーナーに土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

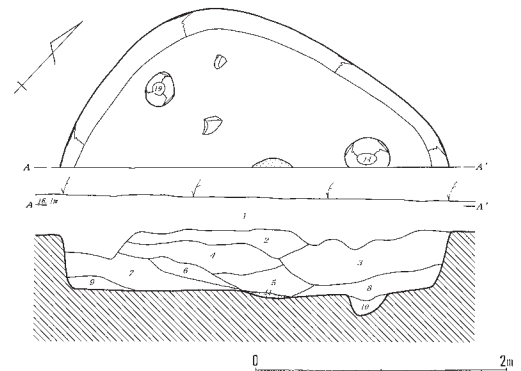
339号住居跡出土遺物 (第288図、第299図15~18)

壺形土器 (第299図15)

15は複合口縁部破片。267Y 1と同一個体。口縁部内面には付加条縄文が施される。口唇部外面には刻みが施される。頸部内外面共に縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むがきめ細かい。覆土中からの出土。

甕形土器 (第288図1、第299図16~18)

第288図1は甕部1/3程度が残存する。推定口径14.3cm。あま



第286図 338号住居跡 (1/60)

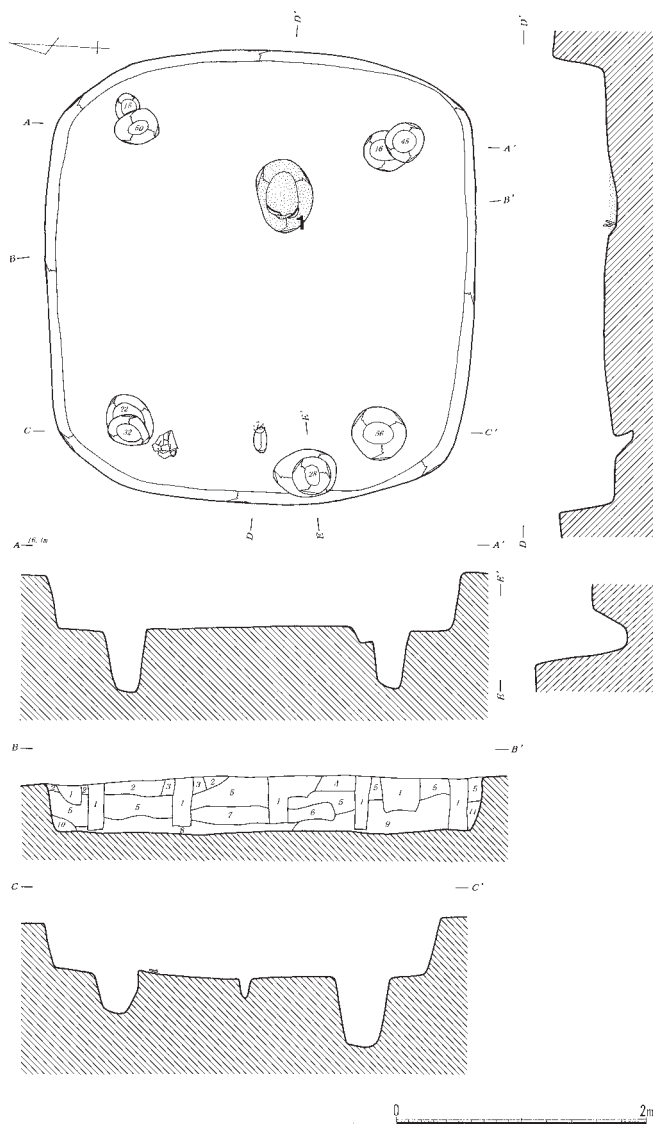
り張りのない体部から立ち上がり、頸部でくびれて口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調は橙色（2.5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉内から出土した。

第299図16・17は体部破片、18は脚台部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は16が灰褐色（5YR4/2）、17がにぶい赤褐色（5YR5/4）、18が灰褐色（5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。16は炉内から出土。17・18は覆土中から出土した。

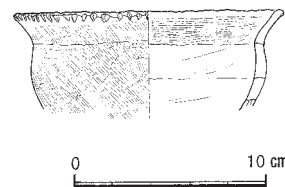
340号住居跡（第289図）

〔位置〕 42Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明×370cm。（主軸方位）N-54°-E。（壁高）50~55cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。66×63cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。南側に礫を配石している。（柱穴）北及び東コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。



第287図 339号住居跡（1/60）



第288図 339号住居跡出土遺物（1/4）

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 - 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
 - 3層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む。やや軟質。
 - 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
 - 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
 - 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
 - 7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
 - 8層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
 - 9層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
 - 10層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
 - 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。やや粘質。
 - 12層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。粘質。
- 堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

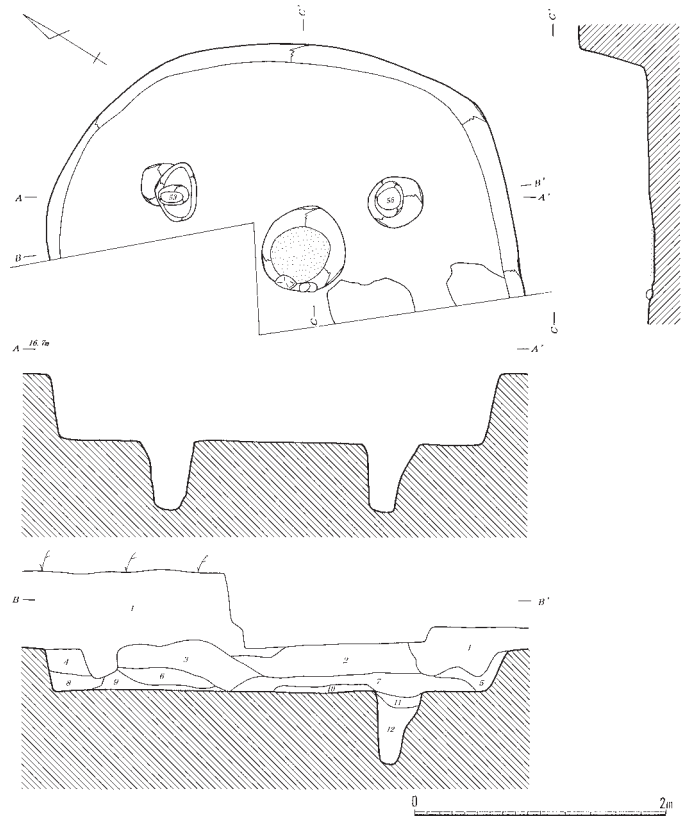
341号住居跡 (第290図)

〔位置〕 42Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。342・343Yを切る。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 38～42cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅11～16cm・下幅3～8cm・深さ5～16cmを測る。北側の一部は攪乱で破壊されている。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。部分的に硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 北東コーナーに近い1本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 北東壁下に位置する。径43cmの円形を呈し、深さ33cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
- 5層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロッ



第289図 340号住居跡 (1/60)

クを多く含む。硬質。貼床。

東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。

〔遺物〕 貯蔵穴付近を中心に僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

341号住居跡出土遺物（第291図、第299図19・20）

壺形土器（第299図19）

肩部破片。網目状撚糸文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は暗褐色（10R3/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第291図1、第299図20）

第291図1は台付甕形土器。脚台部1/2程度が残存する。推定裾部径9cm。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

第299図20は口縁部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

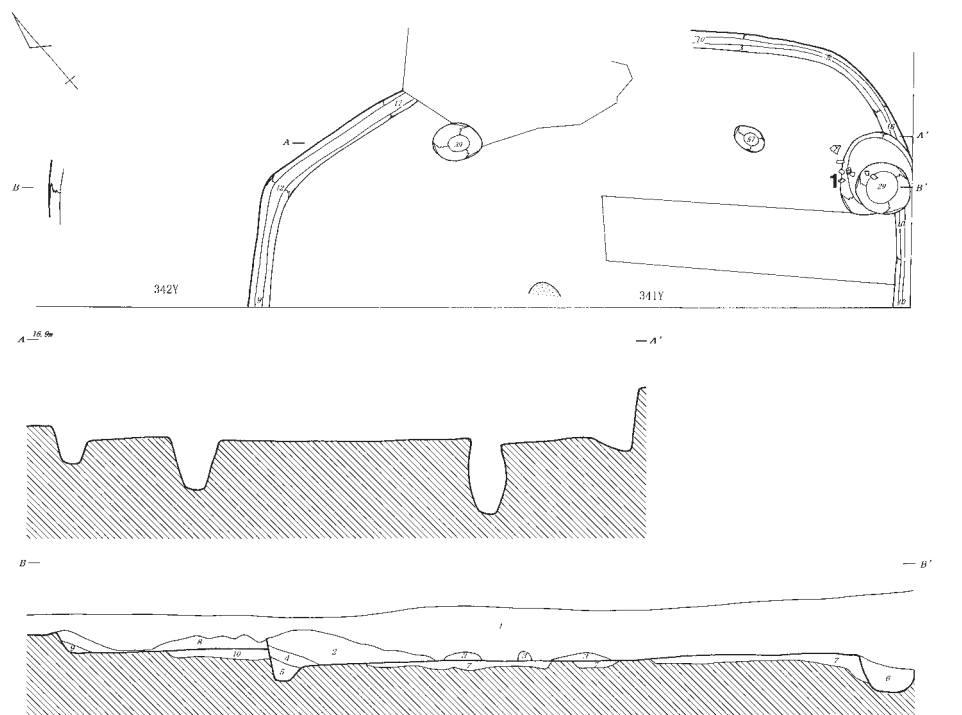
342号住居跡（第290図）

〔位置〕 42Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。343Yを切り、341Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）北西に僅かに検出された壁は、高さ18cmを測り、64°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬化面を一部確認するのみである。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。



第290図 341・342号住居跡（1/60）

8層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

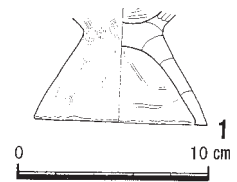
〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

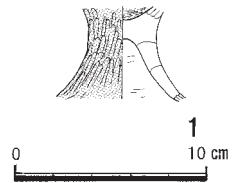
342号住居跡出土遺物 (第292図)

高坏形土器 (1)

脚部のみ残存する。裾部へかけて末広がりに広がる器形である。坏部内面はヘラミガキされ赤彩される。脚部外面は丁寧にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。



第291図 341号住居跡出土遺物 (1/4)



第292図 342号住居跡出土遺物 (1/4)

343号住居跡 (第293図)

〔位置〕 42Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。341・342Yに切られる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×520cm。(主軸方位) N—68°—W。(壁高) 53～57cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。部分的に焼土を確認する。(炉) 住居中央から西に偏って位置する。68×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 北及び東コーナーの深度があるピットが支柱穴の一部と思われる。東壁下中央からやや西に偏って位置する1本は入口施設と思われる。他のピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。焼土粒子・炭化材片を含む。軟質。

2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

3層 暗褐色土 (10YR3/3)。ロームブロックを多く含む。やや軟質。

4層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。軟質。

5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を含む。炭化材片を多く含む。やや軟質。

6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化材片を多く含む。焼土粒子を含む。やや軟質。

7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子・炭化材片を多く含む。軟質。

8層 炭化材。

9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 床面上に多量の炭化材が広範囲に出土した。図示できる遺物は少ない。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 部分的に焼土の堆積がみられたり、炭化材が多量に出土するなど、焼失家屋の可能性が大きい。

343号住居跡出土遺物 (第294図、第299図21・22)

甕形土器 (第294図1、第299図21・22)

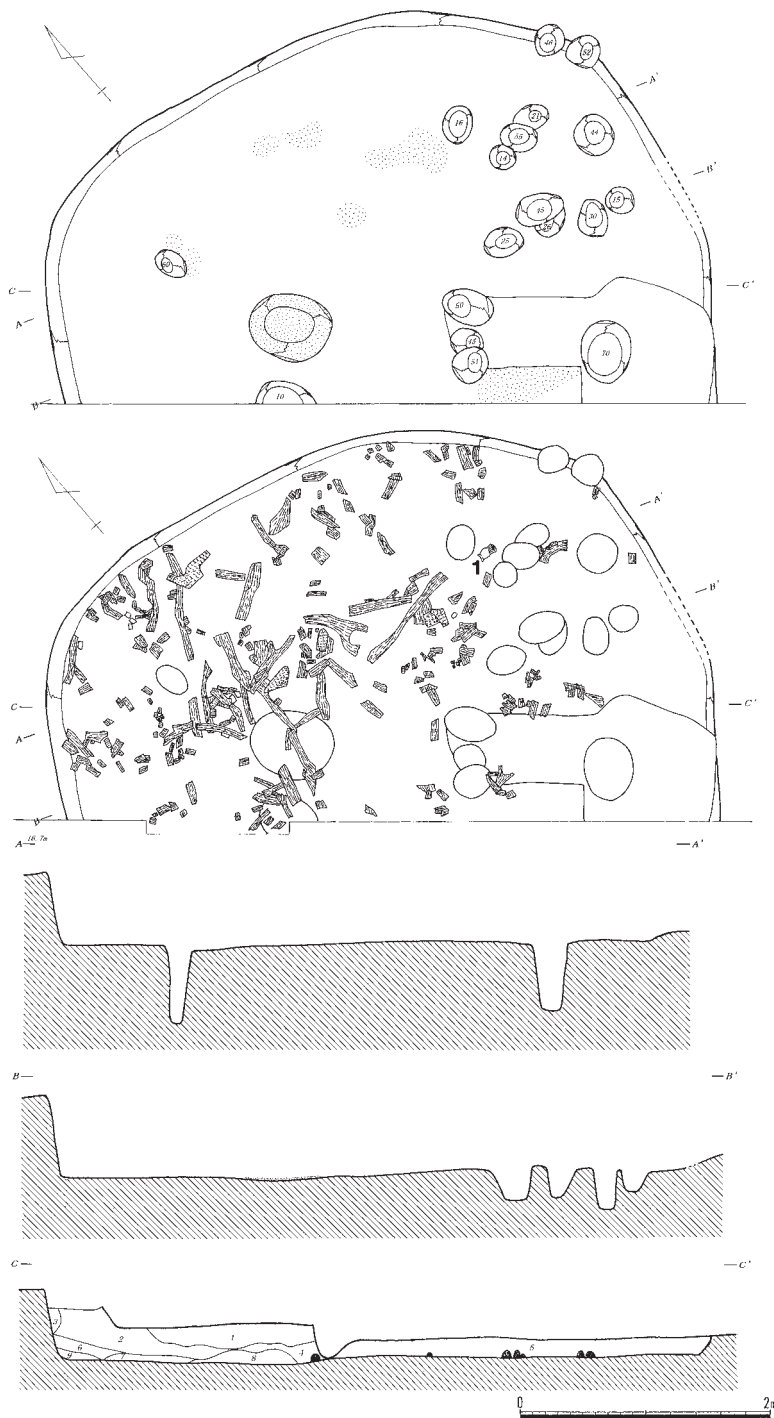
第294図1は小型の台付甕形土器で完形。口径7.5cm・底径7.7cm・器高12.5cmを測る。甕部はあまり張らずに僅かに体部中位が膨らむ器形である。頸部は僅かにくびれて脚台部は直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデ

されるが工具痕が残る。脚台部外面は縦方向に粗くケズリが施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。全体に分厚く雑な造りである。住居跡中央から東寄り床面上より出土した。

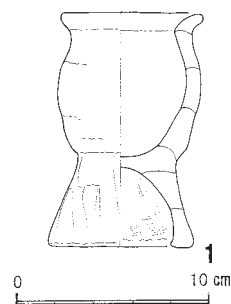
第299図21は口縁部破片、22は体部破片。21の口唇部外面には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は21が灰褐色（5YR4/2）、22は褐灰色（5YR4/1）を呈し、すべて胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

344号住居跡（第295図）

〔位置〕 47Ⅱ地点。



第293図 343号住居跡炭化材出土状態（1/60）



第294図 343号住居跡出土遺物（1/4）

〔構造〕 東及び西側調査区外。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×300cm。(主軸方位) N-70°-W。(壁高) 23~29cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居跡西側に位置する。73×54cmの楕円形を呈する粘土火皿で、深さ7cmの掘り込みをもつ。炉の中央に土器片が出土した。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック炭化物粒子を多く含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を府やや軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を含む。炭化材片を多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

ロームブロックを多く含む層があり、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 土器片が僅かに出土したが、図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 覆土中に焼土・炭化材を多く含み、焼失家屋の可能性はある。

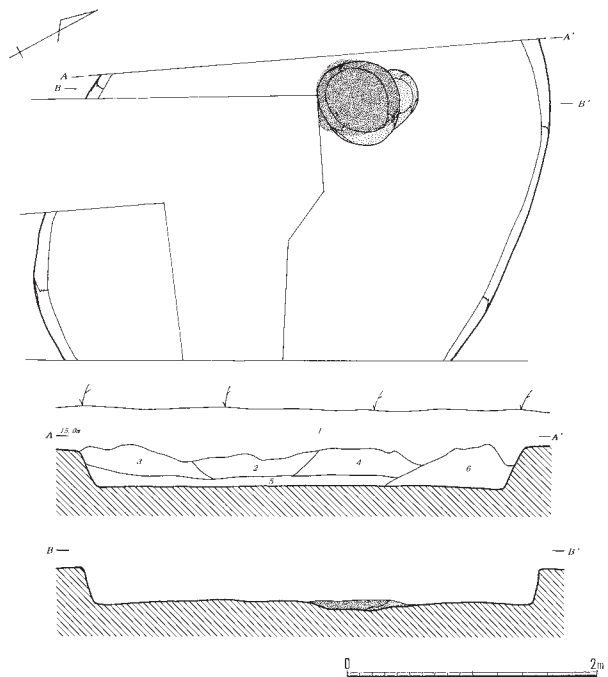
345号住居跡 (第296図)

〔位置〕 47Ⅱ地点。

〔構造〕 東側調査区外。20方に切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明×300cm。(主軸方位) N-70°-W。(壁高) 23~29cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。西壁下が一部高くなる。(炉) 住居西側に位置する。73×54cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。炉の中央に土器片が出土した。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ロームブロック。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。中央部分では焼土粒子・炭化物粒子が目立つ。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 7層 褐灰色土 (7.5YR4/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (5 YR3/1)。ローム粒子を含む。



第295図 344号住居跡 (1/60)

焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 住居跡東側に土器が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

345号住居跡出土遺物（第297図）

甕形土器（1・2）

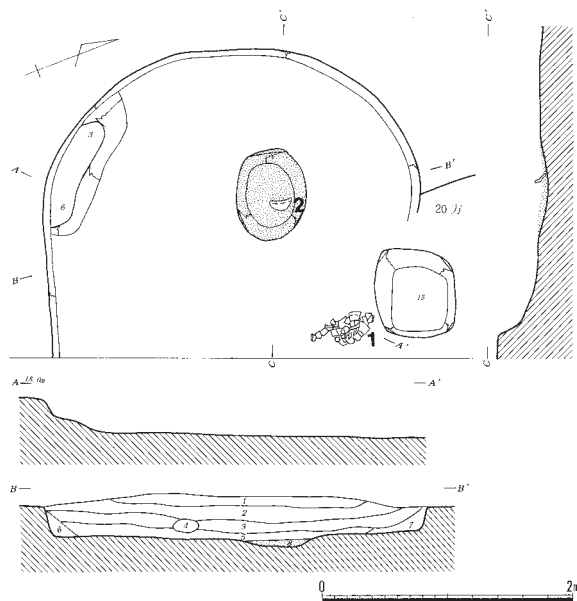
1は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径22.4cm。球状の体部から頸部で屈曲し、口縁部は外反する器形である。右方向から板状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、工具痕が残る。色調は外面がにぶい橙色（7.5YR7/4）、内面が橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むがきめ細かい。東側床面上から出土。

2は輪積甕。推定径22cm。口頸部1/4程度が残存する。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。頸部には2段の輪積痕があり、表面には不規則な指頭押捺を施している。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉内部より出土。

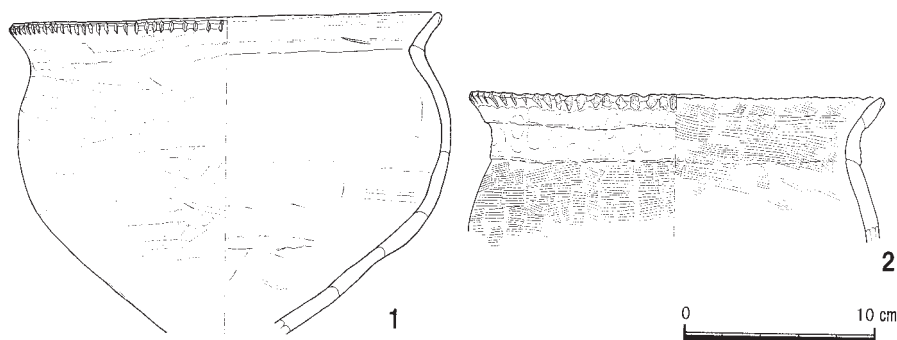
346号住居跡（第298図）

〔位置〕 12Ⅱ地点。

〔構造〕 南側調査区外。347Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×648cm。（主軸方位）N-18°-E。



第296図 345号住居跡（1/60）



第297図 345号住居跡出土遺物（1/4）

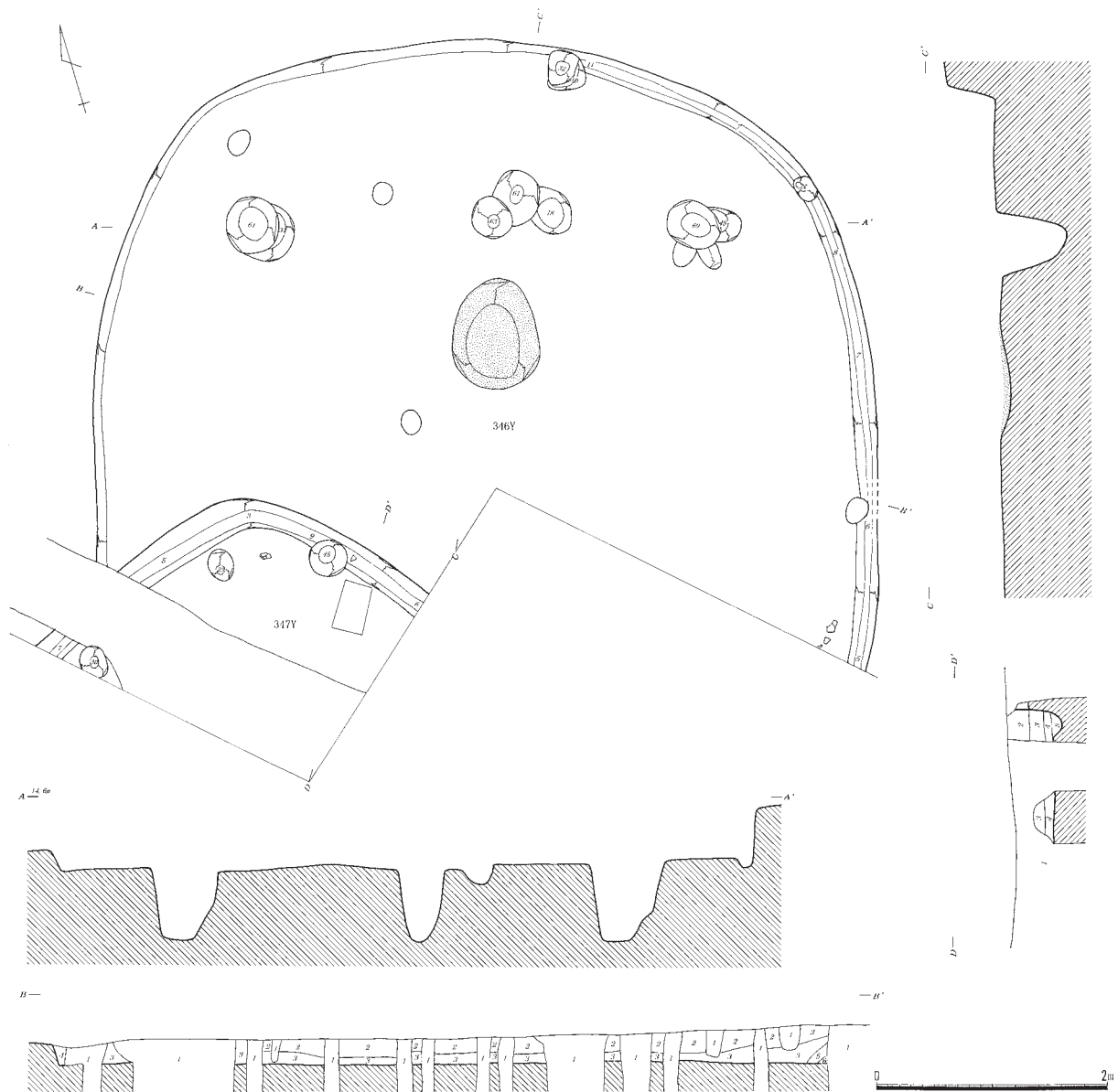
(壁高) 14~50cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅16~21cm・下幅 4~7 cm・深さ 5~10cmを測り、東側のみで検出された。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。(炉) 住居中央から北に偏って位置し、70×55cmの地床炉で、深さ10cm前後を測る。(柱穴) 北及び東コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。



第298図 346・347号住居跡 (1/60)

346号住居跡出土遺物（第299図23～27）

壺形土器（23・24）

23は複合口縁部破片。口唇端部にはLRの単節縄文が施され、口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。口縁部下端には刻みが施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色（7.5YR 6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

24は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、縄文帯内部には円形浮文が貼付される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

甕形土器（25～27）

25は口縁部破片。26・27は体部破片。25の口唇部外面には刻みが施される。いずれもヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は25が黒褐色（7.5YR3/1）、26が明赤褐色（2.5YR5/6）、27が黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

すべて覆土中から出土した。

347号住居跡（第298図）

〔位置〕 12Ⅱ地点。

〔構造〕 南側調査区外。346Yを切る。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）33～41cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅23～31cm・下幅9～11cm・深さ3～7cmを測る。（床面）大部分が調査区外と攪乱により破壊されている。確認できた部分は遺存状態は良好で壁際を除いて硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

347号住居跡出土遺物（第299図28～32）

壺形土器（28）

口頸部破片。頸部は屈曲し、複合口縁部はラッパ状に開く器形である。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北コーナーから出土した。

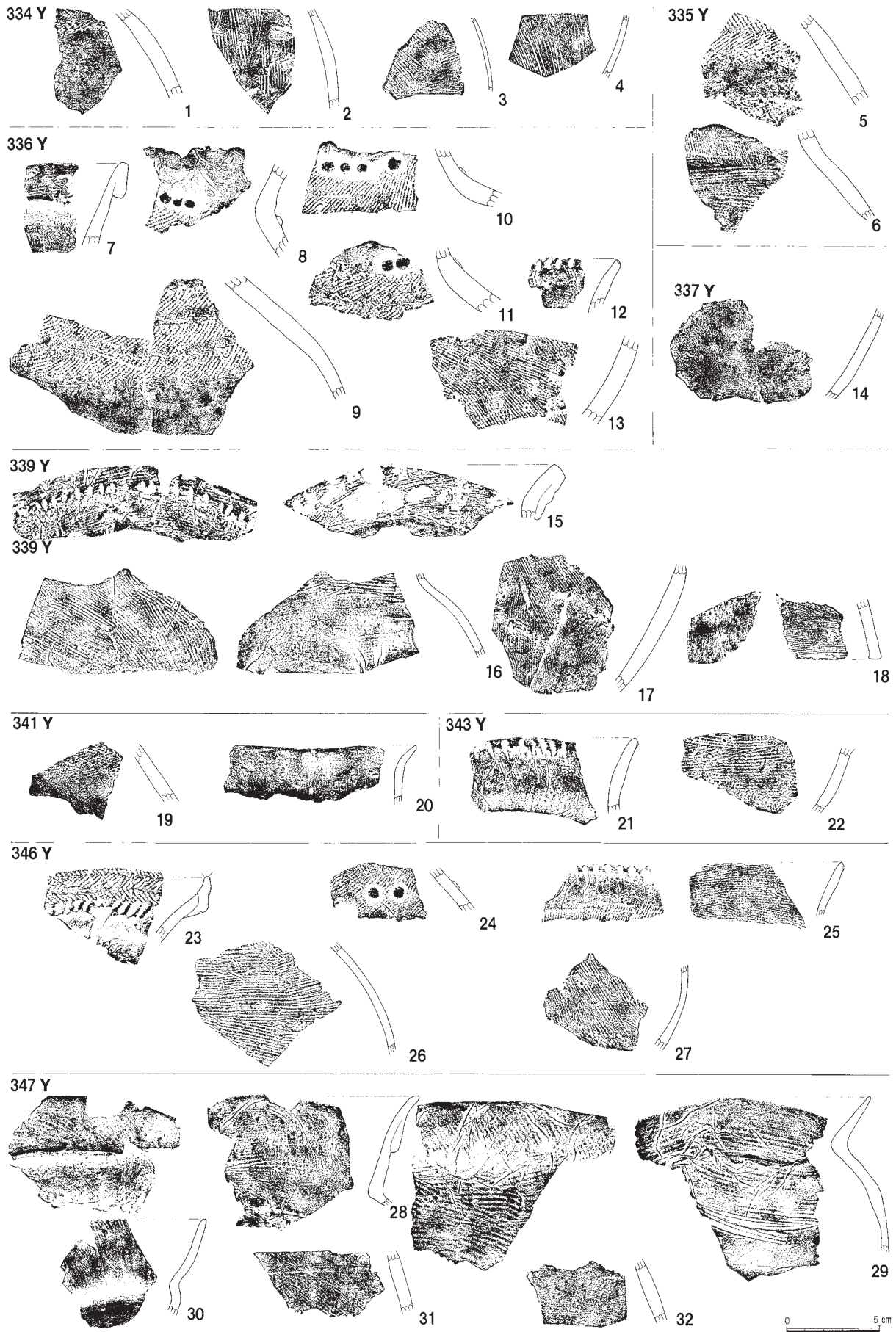
埴形土器（30）

小形丸底埴と推測される口頸部と体部の破片。体部は小さく薄手で、口縁部の高さが体部の高さよりも高い。口縁部は内湾気味に立ち上がる器形である。内外面共に丁寧にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（29・31・32）

29は口頸部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるが、粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

31・32は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調は灰褐色（5YR4/2）



第299図 334~337・339・341・343・346・347号住居跡出土遺物 (1/3)

を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

いずれも覆土中から出土した。

348号住居跡（第300図）

〔位置〕 12Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×345cm。（主軸方位）不明。（壁高）7～17cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱だが北東側に一部硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）北及び東コーナーの2本が主柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明であるが、部分的に残されている覆土は、ローム粒子を含むやや軟質の黒褐色土（7.5YR3/1）である。

〔遺物〕 北側の床面上に土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

348号住居跡出土遺物（第311図1～3）

壺形土器（1・2）

1は短い複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

2は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

いずれも覆土中からの出土。

甕形土器（3）

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡北側床面上に出土した。

349号住居跡（第302図）

〔位置〕 12Ⅱ地点。

〔構造〕 352Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×640cm。（主軸方位）N-11°-W。（壁高）57～64cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とし、平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。76×49cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。

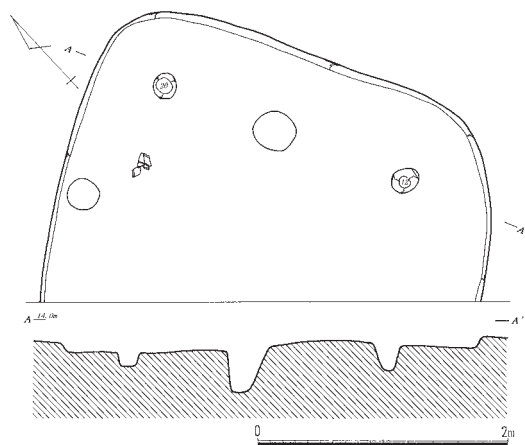
（柱穴）各コーナーの4本が主柱穴である。南壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東壁下中央から北東に偏って位置する。75×67cmの楕円形を呈し、深さ31cmを測る。幅42cm・高さ1～4cmを測る凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

1層 耕作土。

8層 褐灰色土（7.5YR4/1）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

9層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。



第300図 348号住居跡（1/60）



第301図 349・352号住居跡 (1/60)

- 10層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック多く含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 14層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 15層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化材片を部分的に含む。やや硬質。
- 16層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 17層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
- 18層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 19層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。
- 20層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 21層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 22層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 23層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
- 24層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。
- 25層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 26層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 27層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

東コーナーに砂礫を含む暗赤褐色土が堆積する。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

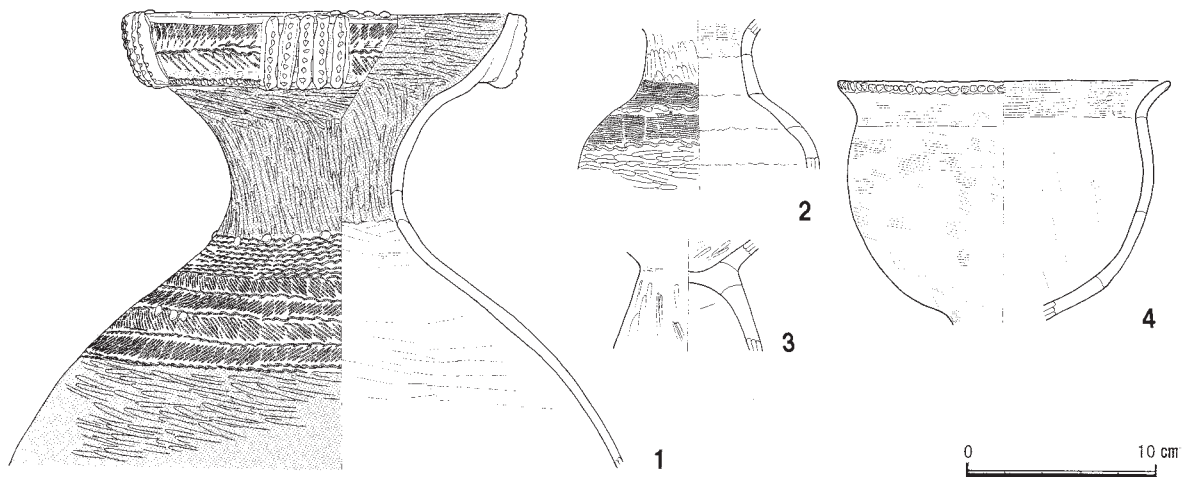
〔遺物〕 貯蔵穴・南東コーナーに土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期後半。

349号住居跡出土遺物 (第302図、第311図4～7)

壺形土器 (第302図1・2、第311図4～6)

第302図1は体部上半より上のみが残存する。口径20.3cmを測る。頸部はやや強めにくびれて口縁部はゆるやかに開きながら立ち上がり、複合口縁部は内湾しながら直立気味に立ち上がる器形である。口唇端部には4個一単位の円形浮文が等間隔に貼付される。口縁部外面には、7～8ヵ所に刻みが施された棒状浮文が、5本一単位で等間隔に5ヵ所に貼付される。棒状浮文の間には1段目がRLの単節縄文の端末結節で、2段目がLRの単節縄文の羽



第302図 349号住居跡出土遺物 (1/4)

状縄文が施されている箇所と、その逆で1段目がLRの単節縄文の端末結節、2段目にRLの単節縄文が施される箇所がある。肩部には1段目には3条一組のS字状結節文が施され、上端には等間隔で円形浮文が施される。2段目には3条一組のS字状結節文が3段施されている。3段目以下にはRLの単節縄文の端末結節とLRの単節縄文の端末結節が交互に羽状になるように施される。3段目と4段目の境目には3個一単位と推測される円形浮文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は浅黄橙色(10YR8/4)、赤彩部分は赤褐色(5YR4/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子・橙色粒子を含む。東コーナー付近から3ヵ所に分かれた状態で出土した。

2は小型壺の頸部と体部上半のみ残存する。頸部はくびれて直立しながら立ち上がり、口縁部は開くと推測される器形である。肩部には上から横位のRの撚糸文と無節RのS字状結節文が交互に2段施される。文様帯以外の外面はヘラミガキされる。頸部内面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが、輪積痕が明瞭に残る。色調は外面が明赤褐色(2.5YR5/6)、内面は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。東コーナーから出土した。

第311図4は口縁部破片。口唇部内外面共に刻みが施される。内面にはLRの単節縄文が施され、下端には円形浮文が貼付される。色調はにぶい橙色(5YR7/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

5・6は肩部破片。5はLRの単節縄文の端末結節が2段施される。6は撚りの異なる単節縄文の端末結節が羽状に施され、境目には2個の円形浮文が貼付されている。共に縄文帯以外はヘラミガキされるが、6はその上に赤彩されている。色調は5が黒褐色(10YR3/1)、6がにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。5は床面上、6は貯蔵穴から出土した。

甕形土器(第302図3・4、第311図7)

第302図3は甕部のみ残存する。口径17.8cm。最大径を口縁部にもち頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。体部はあまり張らない球状の体部を作出する。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面には細密なハケ目痕が残る。色調は橙色(2.5YR6/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。凸堤上から出土した。

4は脚台部の1/2程度が残存する。接合部でくびれて脚裾部へ広がる器形である。外面はミガキを施したように強くヘラナデされている。内面はヘラナデされるが工具痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・多量の白色粒子を含む。覆土中からの出土。

第311図7は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南コーナーから出土した

350号住居跡(第303図)

〔位置〕6I・12II地点。

〔構造〕北西側調査区外。52Y・423Dを切り、54Yに切られる。(平面形)隅丸長方形。(規模)500×440cm。(主軸方位)N-22°-W。(壁高)39~41cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。(炉)住居中央から北に偏って位置する。径70cmの円形を呈する地床炉で、3cm前後の掘り込みをもつ。南側に礫を配している。(柱穴)各コーナーの4本が支柱穴である。南壁際の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)南壁下中央から東に偏って位置する。径50cmの円形を呈し、深さ28cmを測る。幅20cm前後・高さ4cm前後の凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。軟質。

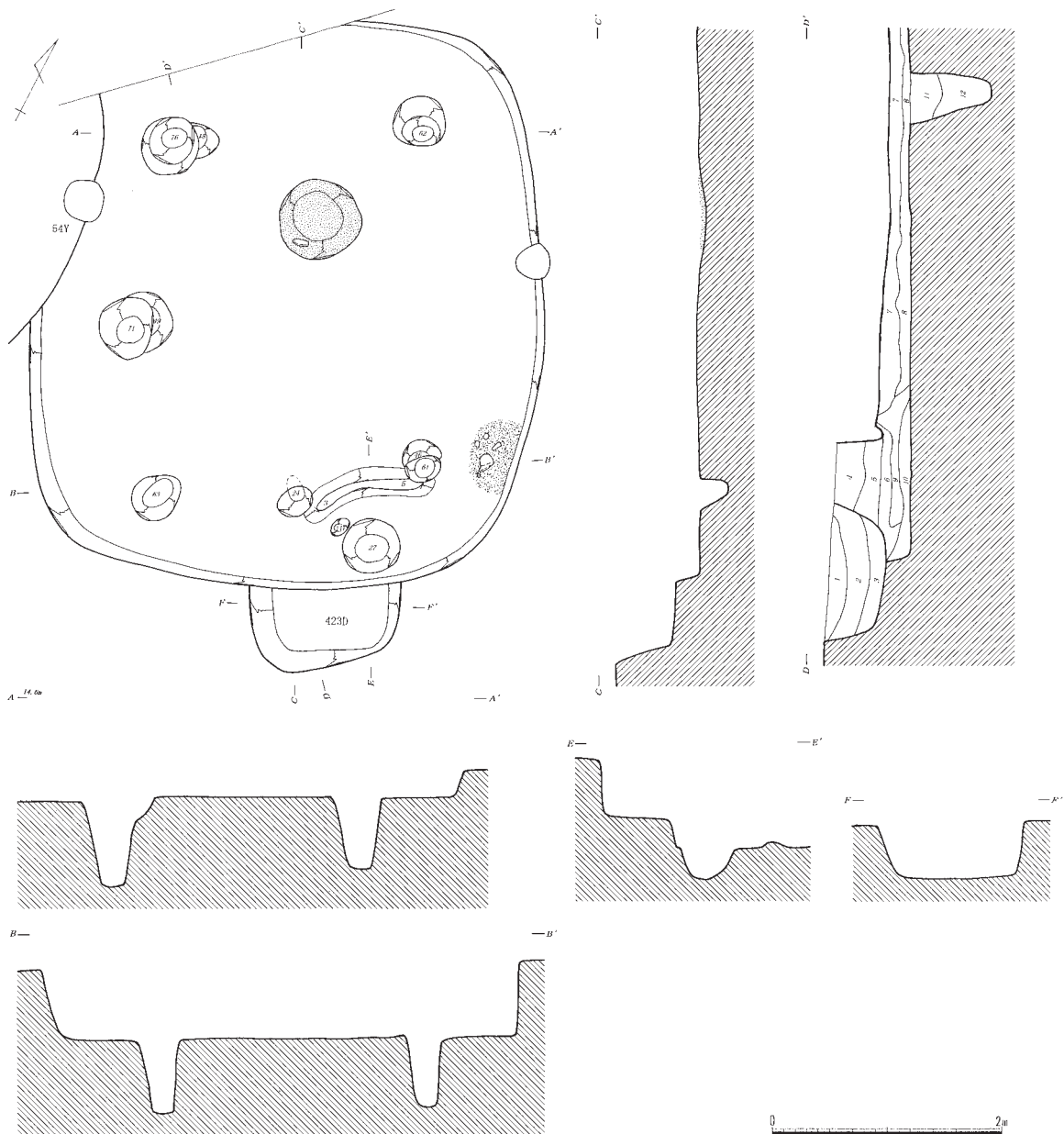
東コーナー近くに砂礫まじりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 東コーナー壁際の明赤褐色土の上部に土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

350号住居跡出土遺物 (第311図8～11)

壺形土器 (8)



第303図 350号住居跡、423号土坑 (1/60)

複合口縁部破片。短い複合口縁部はナデられている。内外面共にヘラミガキされるが、ハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（9～11）

9・10は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調は黒褐色（10YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

11は口頸部から体部上半にかけての破片。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。南コーナー壁際の上部から出土した。

351号住居跡（第304図）

〔位置〕 12Ⅱ地点。

〔構造〕 北東及び南西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）12～37cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11～14cm・下幅3～5cm・深さ4～8cmを測り東側で途切れる。（床面）炉の東側に硬化面を認める。（炉）62×53cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。南側に礫を配している。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 掘り込みが浅い事と、攪乱が著しいため詳細は不明である。

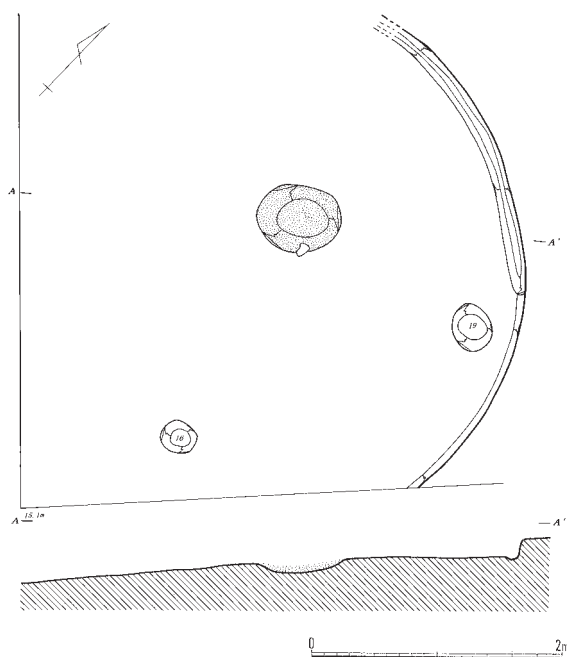
〔遺物〕 覆土中から破片が出土したが、図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

352号住居跡（第301図）

〔位置〕 12Ⅱ地点。

〔構造〕 北側が大きく攪乱されている。349Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）470×420cm。（主軸方位）N—69°—W。（壁高）31～40cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）北西側が大きく攪乱により破壊されている。南東側の壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。



第304図 351号住居跡（1/60）

不明×47cmの地床炉で深さ1cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 3層 褐灰色土 (7.5YR4/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 褐灰色土 (7.5YR4/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 南東側床面から出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

352号住居跡出土遺物 (第305図、第311図12~14)

壺形土器 (第305図1~3)

1は頸部と体部上半のみ残存する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形と思われる。体部は下膨れの球状を呈すると推測される。外面は縦方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされるが、輪積痕が明瞭に残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北東コーナー付近床面上から出土した。

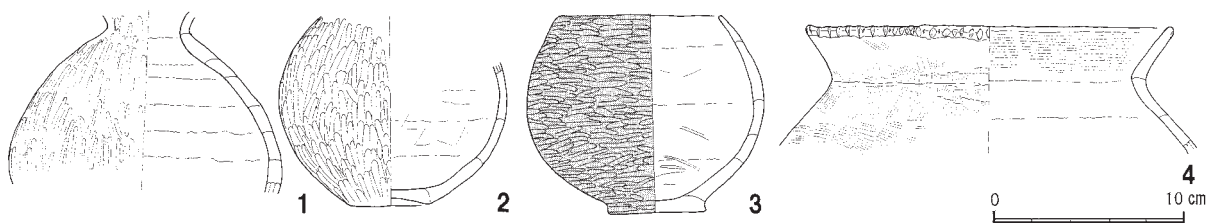
2は体部のみ残存する。底径4.4cm。上げ底の底部から体部中位に最大径をもつ球状の体部を作成する。外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされるが工具痕が残る。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。北西壁付近床面上から出土した。

3は完形の無頸壺。口径8.5cm・器高10.5cm・底径5.2cmと小型である。壺形土器に近い器形。僅かに突出した平底の底部から、ゆがみのない均等な球状の体部を作り、体部から口縁部へすぼまりをみせる。外面は横方向に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。口唇部は輪積で丁度切ったようにみられ、調整されていない。内面はヘラナデされる。色調は外面赤彩部が赤褐色 (10YR4/4)、内面はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央から北東コーナー寄り床面上から出土した。

甕形土器 (第305図4、第311図12~14)

第305図4は口頸部1/4程度が残存する。推定口径9.8cm。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には右方向から板状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る、炭化物の付着がみられる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。南東コーナー付近床面上から出土した。

第311図12~14は口頸部破片。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面には僅かにハケ目痕が残る。色調は12がにぶい黄橙色 (10YR7/4)、13がにぶい橙色 (5YR7/4)、14が赤褐色 (5YR5/3) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。12は北壁寄り床面上から、13は南コーナーのピット付近床



第305図 352号住居跡出土遺物 (1/4)

面上から出土した。14は覆土中からの出土。

353号住居跡（第306図）

〔位置〕 12Ⅱ地点。

〔構造〕 西コーナー及び南コーナー付近は耕作により破壊されている。（平面形）隅丸長方形。（規模）341×318cm。（主軸方位）不明。（壁高）15～31cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。南西コーナー付近に一部硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）南コーナーに位置する。48×42cmの楕円形を呈し、深さ47cmを測る。

〔覆土〕 掘り込みが浅い事と、攪乱が著しいため詳細は不明である。

〔遺物〕 床面上から破片が僅かに出土したが、図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 炉・柱穴が検出されなかったが、掘り込みがしっかりしているため住居跡とした。

354号住居跡（第307図）

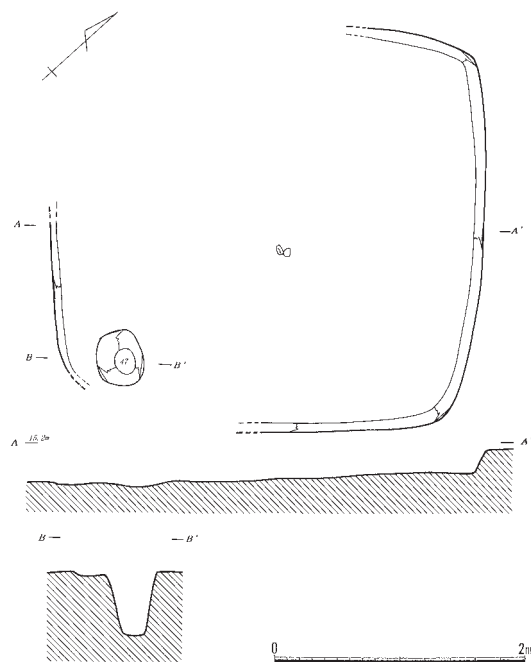
〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 南側調査区外。北西側は耕作により大きく破壊されている。357Yを切る。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）1～7cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。西壁の一部が確認されたのみである。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱である。西側に硬化面を部分的に認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかったが幅24cm・高さ4～8cmの弧状の凸堤が検出された。

〔覆土〕 攪乱が著しいため詳細は不明であるが、部分的に残された覆土はローム粒子を含み、焼土粒子を多く含む硬質の黒褐色土（7.5YR3/2）である。

〔遺物〕 床面上に僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第306図 353号住居跡 (1/60)

354号住居跡出土遺物（第308図、第311図15・16）

壺形土器（第308図1、第311図15）

1・15は同一個体。口縁部、肩部の一部のみ残存する。頸部は屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる器形である。口唇部外面にはぼやけた沈線状の線がみられる。口縁部内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央から西寄りの床面上から出土した。

甕形土器（第311図16）

甕部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。炭化物の付着がみられる。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。西壁付近床面上から出土した。

355号住居跡（第309図）

〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 北東側調査区外。417Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×730cm。（主軸方位）N-41°-W。（壁高）33～38cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～22cm・下幅4～6cm・深さ2～11cmを測り、調査した部分では全周する。（床面）全体に平坦で遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。不明×54cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6cmを測る。（柱穴）南及び東コーナーの2本が支柱穴の一部となろう。南壁下中央から僅かに北に偏って位置する1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東壁下中央から北東に偏って位置する。51×48cmの楕円形を呈し、深さ36cmを測る。幅30～40cm・高さ1～7cmの凸堤を両脇に構築している。

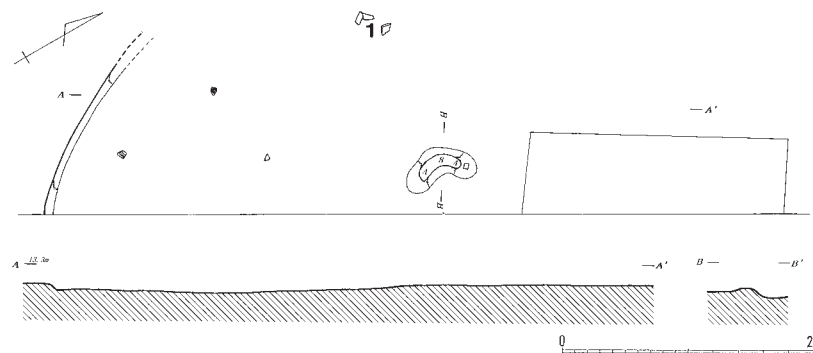
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 8層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

東コーナーに砂礫まじりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 貯蔵穴東側に土器片が多く出土した。

〔時期〕 弥生時代後期。



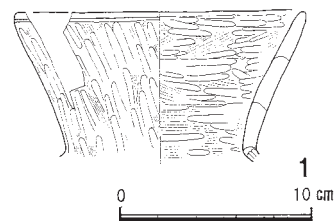
第307図 354号住居跡（1/60）

355号住居跡出土遺物（第310図、第311図17～26）

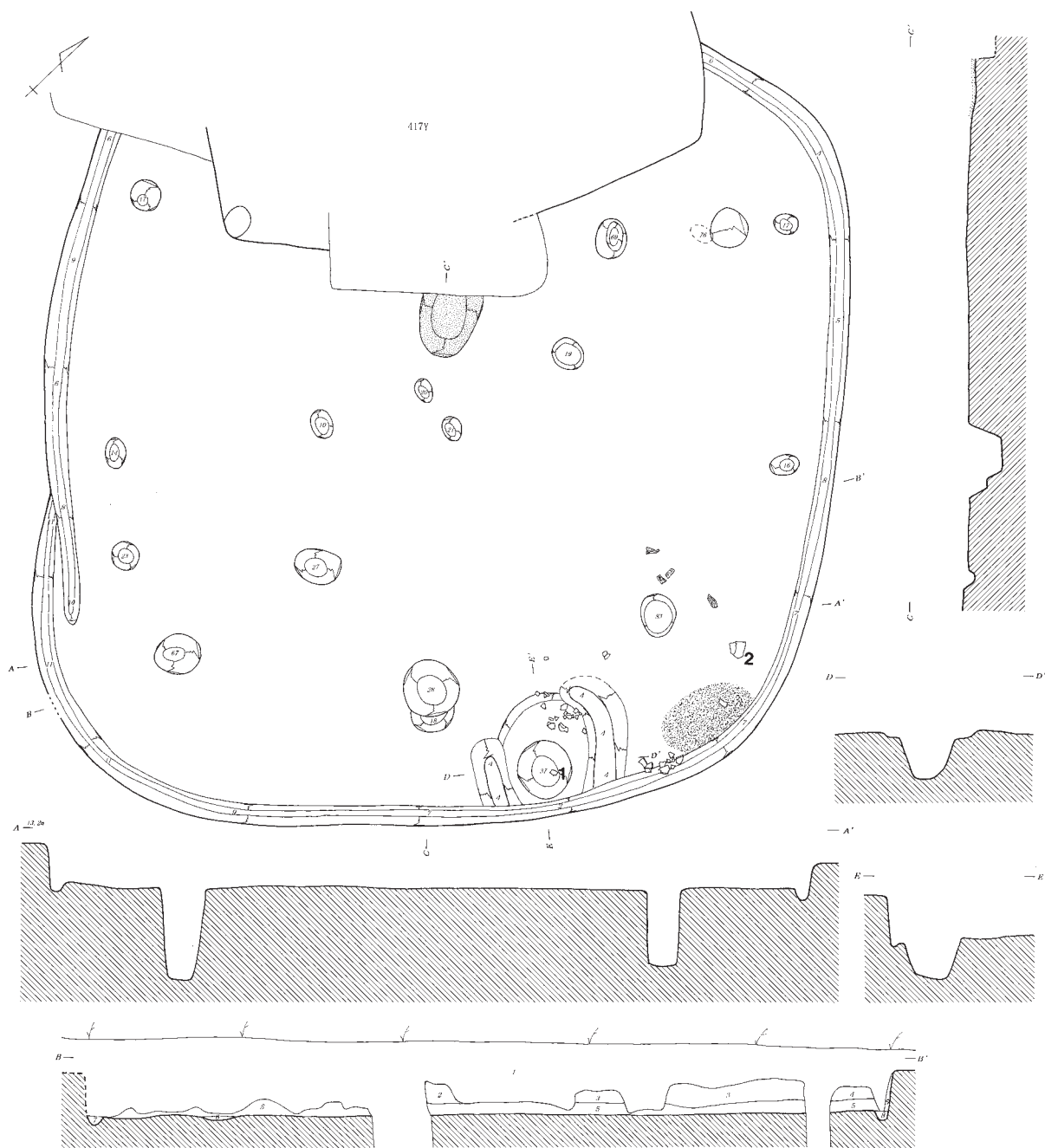
壺形土器（第310図1、第311図17～23）

第310図1は口縁部1/2程度が残存する。推定口径24.4cm。頸部はくびれて複合口縁部は外反する。口縁部外面には5本一組の棒状浮文が貼付され、下端には刻みが施される。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は橙色（2.5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

第311図17は複合口縁部破片。口唇端部にはLRの単節縄文がみられる。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、棒状浮文が貼付される。下端には刻みが施される。内面はヘラミガキされる。色調はにぶい黄橙色（10YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。



第308図 354号住居跡出土遺物（1/4）



第309図 355号住居跡（1/60）

18も複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面にはLRの単節縄文が施され、棒状浮文が貼付される。下端には刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

19は無文の複合口縁部破片。内外面共に口縁部以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

20・22は同一個体で頸部から肩部の破片。S字状結節文と撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

21は頸部から体部上半にかけての破片。LRの単節縄文の端末結節が施され、縄文帯内部には円形浮文が貼付される。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色(5YR4/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

23は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、上下には3条のS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

21は東コーナー赤褐色土内から出土した。他は覆土中からの出土。

甕形土器(第310図2、第311図24~26)

第310図2は甕部のみ残存する。推定口径18.3cm。最大径が口縁と体部中位で拮抗する。あまり張りのない体部から頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外傾する。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、内面下位はミガキが施されたようにみられる。色調は外面が橙色(5YR7/6)、内面がにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。東コーナー床面上から出土した。

24は口縁部破片。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調は黒褐色(5YR3/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。東コーナーからやや南東寄り壁際から出土した。

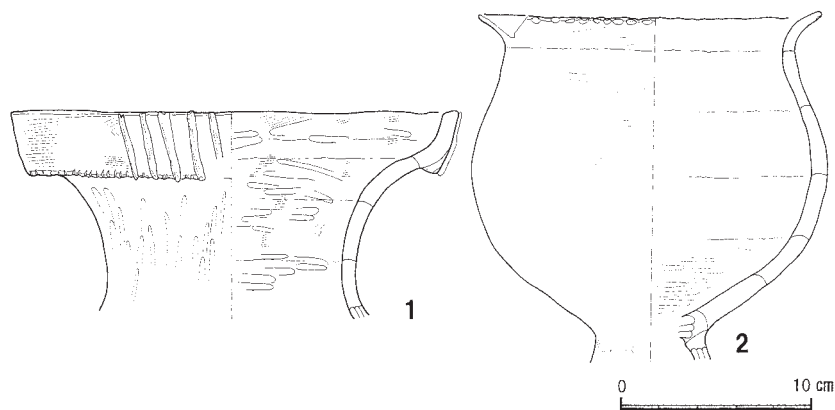
25は口頸部破片。頸部は「く」字状にくびれて口縁部は外反する。色調は(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

26は体部下半の破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

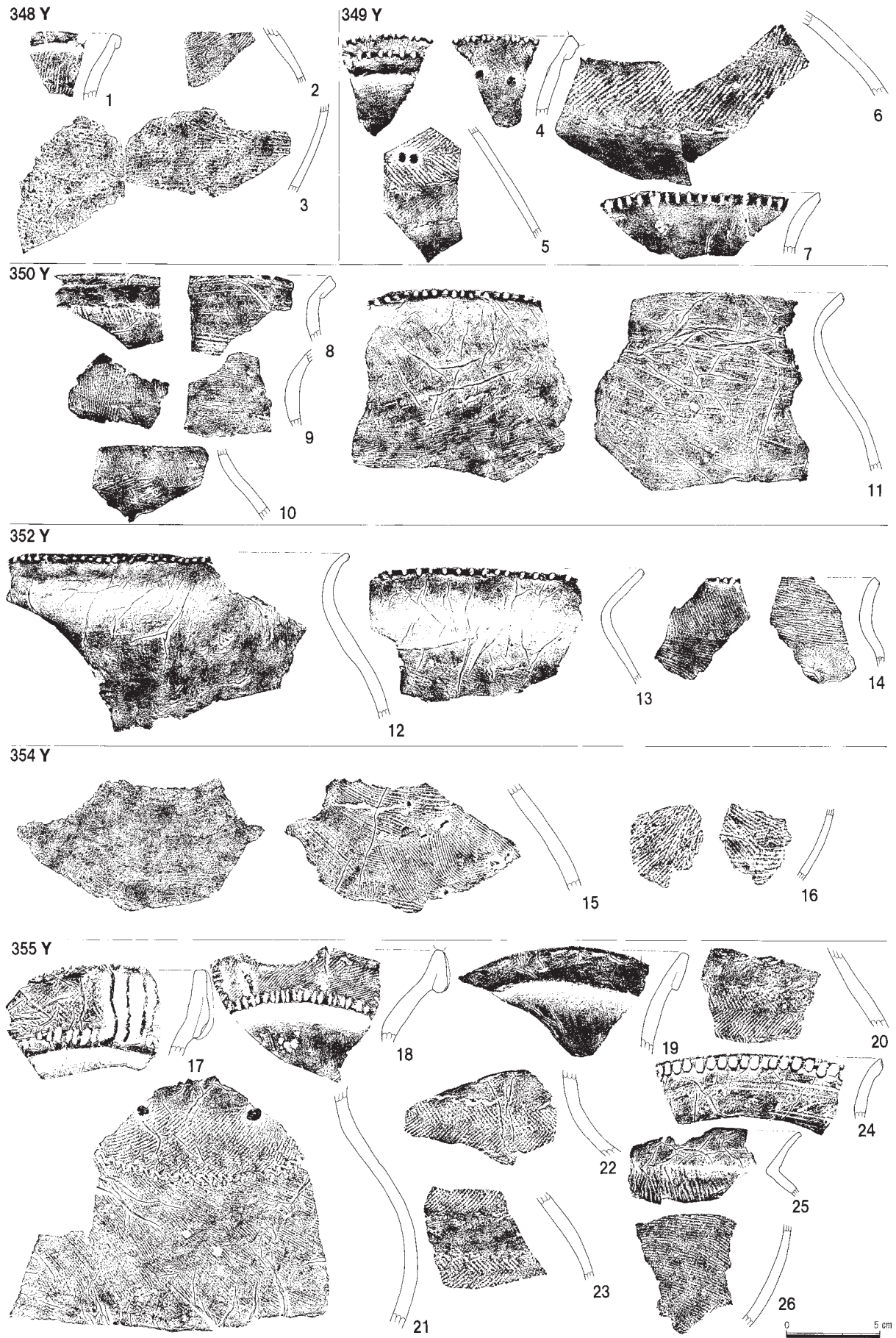
356号住居跡(第312図)

〔位置〕5Ⅱ地点。

〔構造〕北側調査区外。358Yを切る。35Mに切られる。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)13~22cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅18~27cm・下幅6~8cm・深さ2~9cmを測る。東側は35Mに切られ確認できなかった。(床面)全体に軟弱だが、南側に硬化面を認める。(炉)検出されなかった。



第310図 355号住居跡出土遺物(1/4)



第311図 348～350・352・354・355号住居跡出土遺物 (1/3)

(柱穴) 北及び南・東コーナーに近い深度のある3本が支柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕 攪乱が著しいため詳細は不明であるが、部分的に残された覆土は、ローム粒子を多く含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含むやや硬質の黒褐色土(7.5YR3/1)である。

〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

356号住居跡出土遺物(第322図1～6)

壺形土器(1・2)

1は複合口縁部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

2は単純口縁部破片。口唇端部と内面にはLRの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

鉢形土器(4)

口縁部破片。口唇端部と外面にはLRの単節縄文が施される。内外面共に縄文帯以外はヘラミガキされる。色調は灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

埴形土器(3)

口頸部破片。口縁部外面には網目状捺糸文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器(5・6)

5・6は同一個体と思われる体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。共に色調はにぶい褐色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。5は住居跡中央付近から出土。6は南東壁際から出土。



第312図 356号住居跡(1/60)

した。

358号住居跡（第313図）

〔位置〕 5 II 地点。

〔構造〕 南西側調査区外。356Y・35Mに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）13～22cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全面軟弱で一部硬化面を認める。（炉）ほぼ住居中央に位置すると思われる。不明×43cmの地床炉で、1cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土したが、図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

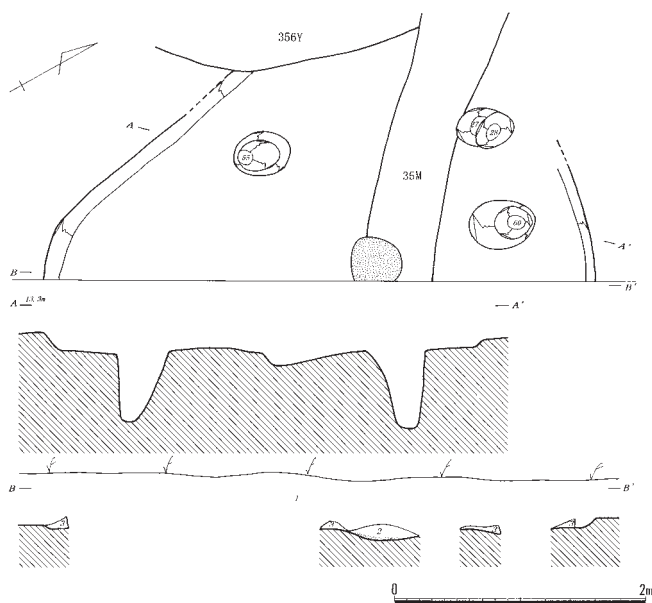
359号住居跡（第315図）

〔位置〕 5 II 地点。

〔構造〕 南側調査区外。360Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×395cm。（主軸方位）N-15°-W。（壁高）18～22cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～23cm・下幅4～8cm・深さ2～8cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。一部焼土を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する。79×67cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。（柱穴）東及び西・南コーナーの深度のある3本が主柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 7層 黒色土（10YR2/1）。炭化材片を多く含む。やや軟質。
- 8層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。



第313図 358号住居跡（1/60）

〔遺物〕 床面上と覆土中から土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

359号住居跡出土遺物（第315図、第322図7～13、第539図8）

壺形土器（第315図1、第322図7～11）

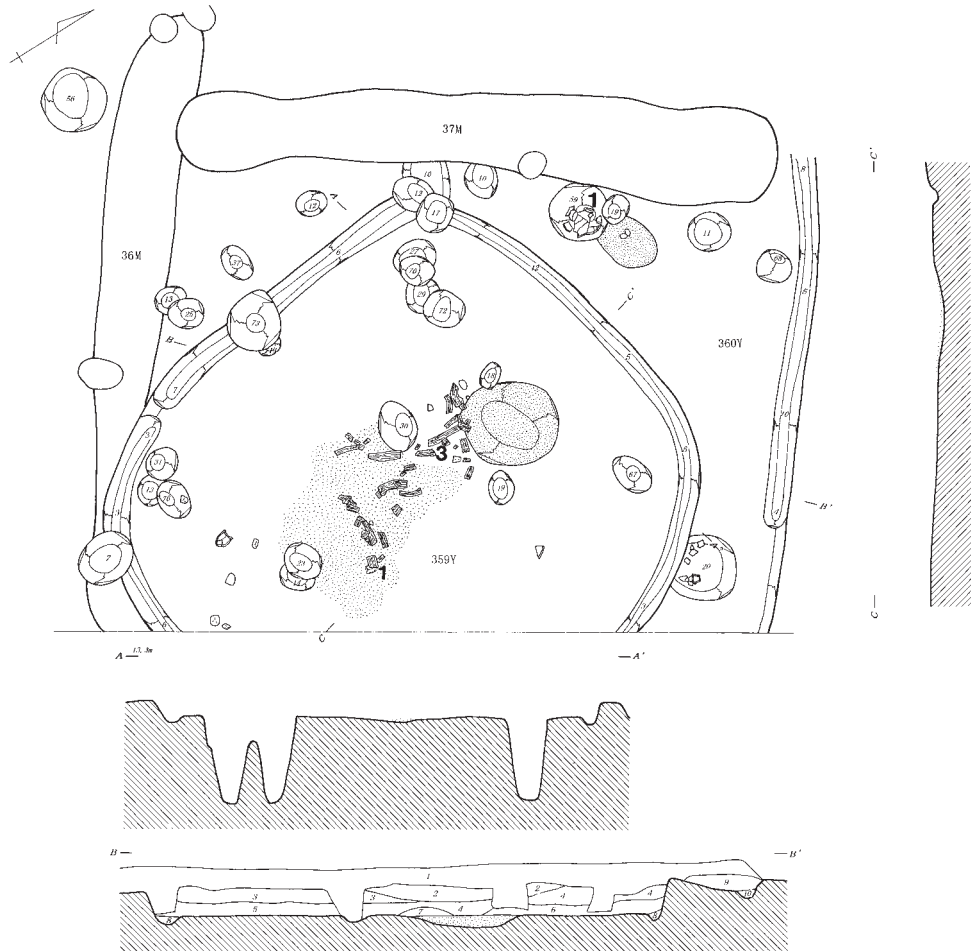
第315図1は体部下半以下の1/2程度が残存する。底径6.5cm。平底の底部から立ち上がり体部下半で屈曲して開く器形である。外面は横方向にヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。床面上から出土した。

第322図7は口縁部破片。口唇端部にはR Lの単節縄文が施される。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。床面上から出土した。

8～10は肩部破片。8は撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、境目にはS字状結節文が巡る。9はL Rの単節縄文と下端には2条のS字状結節文が施される。10はL Rの単節縄文と下端にZ字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は8がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、9が褐色（5YR6/4）、10がにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。すべて覆土中からの出土。

11は口縁部破片。外面には刻みが施される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

器台形土器（第315図2）



第314図 359・360号住居跡（1/60）

受け部の1/2程度が残存する。推定口径8.5cm。口縁部は直線的に大きく開く器形である。受け部孔は上から下へ穿孔される。内外面共に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10YR4/4）を呈し、胎土には含有物がほとんど見られないくらい精選され、非常にきめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

甕形土器（第315図3、第322図12・13）

第315図3は脚台部の1/4程度が残存する。裾部径9.5cm。接合部は強くくびれて裾部へかけて直線的に広がる器形である。甕部をソケット状にはめ込んだ状態が良く観察される。甕部内面には直径4mm位の棒状工具で挿したような深さ4mm程の穴がみられる。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央付近から出土した。

第322図12は口頸部破片。頸部で強くくびれて口縁部は外傾する器形である。口唇部右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

13は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

土製勾玉（第539図8）

完形である。最大長5.1cm・最大幅2.8cm・径2.7cm・穴径は0.3cmを測る。重量は23.9g。手づくねで作られており、表面はナデられる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。胎土には粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

360号住居跡（第314図）

〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 南側調査区外。359Y、36・37Mに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）4～10cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～19cm・下幅5～9cm・深さ5～10cmを測る（床面）大部分が359Yと37Mに切られ、遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）東壁下に位置する。不明×54cmの方形を呈し、深さ20cmを測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

9層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を含む。やや軟質。

10層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

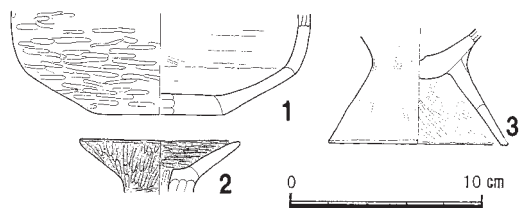
〔遺物〕 北側の床面上及び貯蔵穴・炉横のピット中から土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

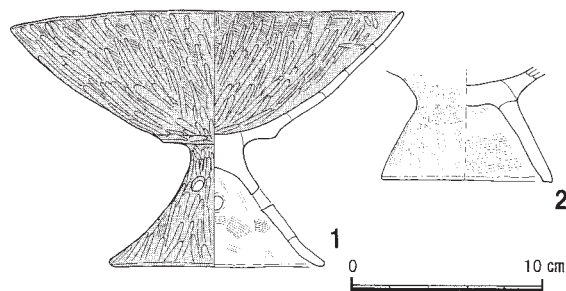
360号住居跡出土遺物（第316図、第322図14・15）

高坏形土器（第316図1）

いわゆる元屋敷系高坏で、ほぼ完形。口径21cm・器高13.5cm・裾部径11.5cmを測る。坏部下端に稜をもち、大き



第315図 359号住居跡出土遺物（1/4）



第316図 360号住居跡出土遺物（1/4）

く外傾する。脚部は円錐状に広がり、脚裾部はゆるやかに外反する。途中3孔が開けられる。坏部内外面共に縦方向にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。脚部外面は縦方向にヘラミガキされ赤彩されるが、ハケ目痕が残る。脚部内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/8）、赤彩部は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴から出土した。

甕形土器（第316図2、第322図14・15）

第316図2は脚台部。「ハ」字状に直線的に開く。内外面ともハケ目痕を残す。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には粗砂を僅かに含む。覆土中からの出土。

第322図14は口縁部破片。頸部は屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされる。色調は（5YR3/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

15は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

361号住居跡（第317図）

〔位置〕 5Ⅱ地点及び区画整理外72地点。

〔構造〕 南壁は耕作により破壊されている。361～363Yを切る。（平面形）隅丸正方形。（規模）640×640cm。（主軸方位）N—55°—W。（壁高）32～37cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～19cm・下幅4～8cm・深さ3～18cmを測る（床面）全体に軟弱で遺存状態は不良である。（炉）住居中央からやや西に偏って位置する。60×50cmの不整楕円形を呈する粘土火皿で厚さ6cmを測り、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）北及び東・西コーナーに近い深度のある3本が主柱穴の一部と思われる。南東壁から南西に偏って位置する小ピットは入口施設であろうか。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 後世のピット。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。
- 7層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 8層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 完形の大型壺形土器が北東壁際床面上から出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

361号住居跡出土遺物（第318図、第322図17～22）

壺形土器（第318図1）

ほぼ完形。口径15.5cm・底径8.35cm・器高28.5cmを測る。僅かに張り出した底部は平底。体部は張りの強い球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、複合口縁部は外反する。口縁部内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。体部外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面は丁寧にヘラナデされる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁際床面上から出土した。

甕形土器（第322図17～22）

17・18は口縁部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は17が灰褐色（5YR4/2）、



第317図 361号住居跡 (1/60)



第318図 361号住居跡出土遺物 (1/4)



18は黒褐色を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

19・21・22は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。内外面共に共に炭化物の付着が顕著である。いずれも色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

20は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

すべて覆土中からの出土。

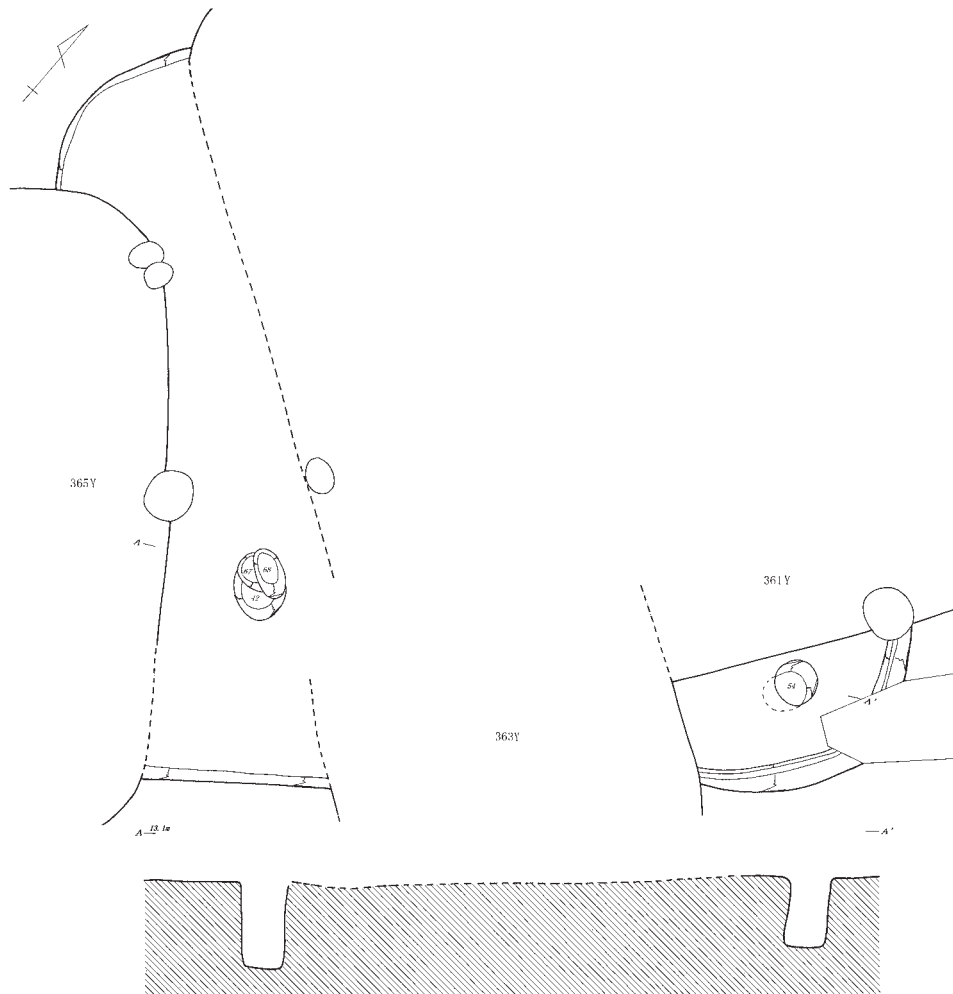
362号住居跡（第319図）

〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 361・363・365 Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明×650cm。（主軸方位）不明。（壁高）37～49cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅14～20cm・下幅5cm前後・深さ3cm前後を測る。（床面）全体に軟弱で遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 361・363・365 Yに切られているため詳細は不明であるが、部分的に残されている覆土は、上層がローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含むやや硬質の黒褐色土（10YR3/2）、下層がローム粒子・ロームブロックを多く含む硬質の褐灰色土（7.5YR4/1）である。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。



第319図 362号住居跡（1/60）

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

362号住居跡出土遺物（第322図23～25）

壺形土器（23・24）

23は複合口縁部破片。口唇端部にはLRの単節縄文が施され、短い複合口縁部下端には刻みが施される。外面はヘラナデ、内面はヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

24は肩部破片。無節Rと無節Lの縄文が羽状に施される。境目にはS字状結節文が施される。内面はヘラナデされる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

甕形土器（25）

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土。

363号住居跡（第320図）

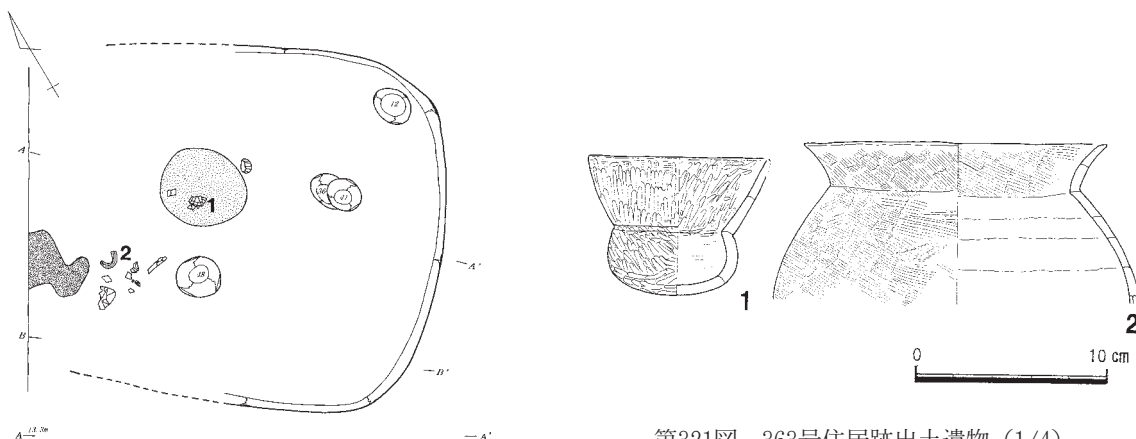
〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 362Yを切り、361・364Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×285cm。（主軸方位）N—57°—W。（壁高）28～34cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱で遺存状態は不良である。（炉）ほぼ住居中央に位置し、66×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ12cmを測る。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

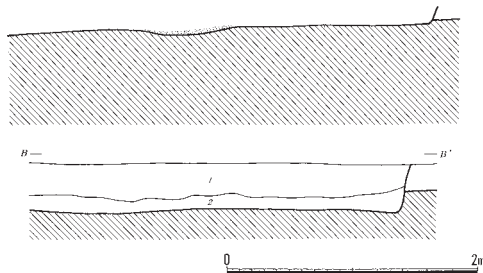
〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
 - 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 西側床面上に灰色粘土が堆積していた。

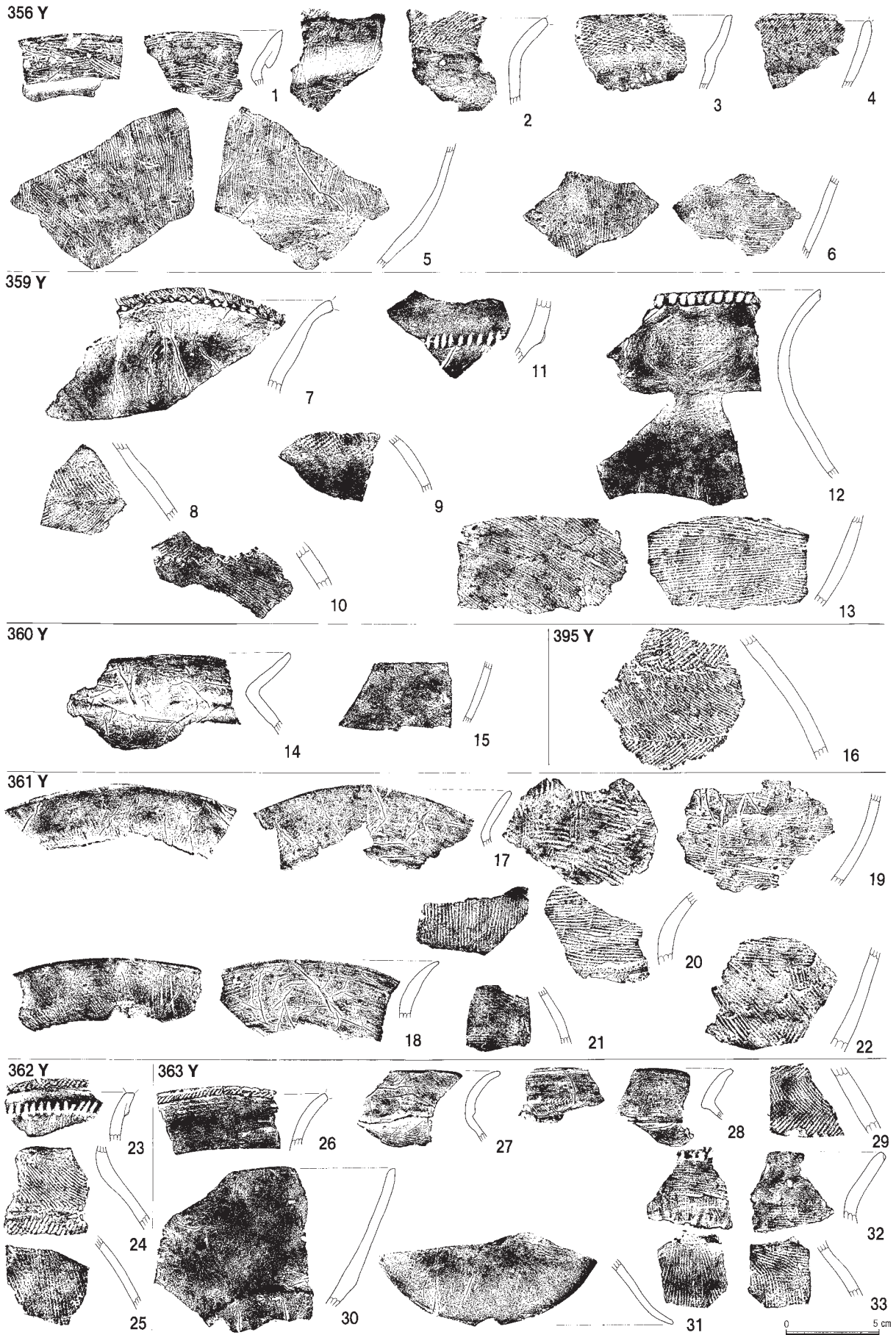
〔遺物〕 北東側の床面上に土器片が僅かに出土した。



第321図 363号住居跡出土遺物（1/4）



第320図 363号住居跡（1/60）



第322図 356・359~363号住居跡出土遺物 (1/3)

〔時期〕 古墳時代前期。

363号住居跡出土遺物（第321図、第322図26～33、第539図14）

壺形土器（第322図26・29）

26は口縁部破片。口唇端部にはLRの単節縄文が施される。内外面共に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

29は肩部破片。LRの単節縄文が羽状に施される。縄文帯内部には円形赤彩文が施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

埴形土器（第321図1）

ほぼ完形。口径9.7cm・底径2cm・器高7.3cmと小型である。丸底の底部から立ち上がり、体部中位に張りを持つ球形に近い器形。頸部は強く屈曲し、口縁部は長く外反する。口唇部内外面共にヨコナデ、外面と口縁部内面は非常に丁寧にヘラミガキされる。体部内面は横方向にヘラナデされる。頸部にはヘラミガキ後、同じ工具で横方向に一周した痕が沈線状に残る。色調は明赤褐色（5YR5/8）を呈する。胎土には粗砂を含むが、非常に精選されきめ細かく堅緻である。炉内から出土。

高坏形土器（第322図30・31）

30は有段高坏の口縁部破片。内外面共に縦方向に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー付近床面上から出土した。

31は脚台部破片。脚裾部へかけて若干膨らんだ後、末広がりに広がる器形である。外面は丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（第321図2、第322図27・28・32・33）

第321図2は口縁部のみ残存する。推定口径16cm。球状を呈すると推測される体部から頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。北東側床面上から出土した。

第322図26・27・32は口縁部破片。32の口唇部外面には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は26がにぶい褐色（7.5YR5/3）、27が黒褐色（7.5YR3/1）、28が灰褐色（7.5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

33は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。にぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

沈刻が施された礫（第539図14）

完形。長さ9.4cm・幅7.3cm・厚さ6cm・重さ600gを測る角錐状の礫を用いる。かんらん石と思われる。底面の研磨された面に、沈刻による絵画が描かれている。基本は三角形を描き、中央に縦の一本線を引く。三角形の頂点から左右にそれぞれ横位の沈刻、それぞれの斜辺を延長する形で、斜位の沈刻が施される。また、三角形の頂点を中心にするような半円形の沈刻がみられる。側面にも弧線とそれに交差する2条の直線状の沈刻がなされている。覆土中から出土した。

364号住居跡（第323図）

〔位置〕 5Ⅱ地点。

〔構造〕 363Y・428Dを切る。365Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）北東壁が僅かに検出された。高さ12cmを測り、80°前後の角度で立ちあがる。（床面）全体に軟弱である。被熱のため赤化している部分がある。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検

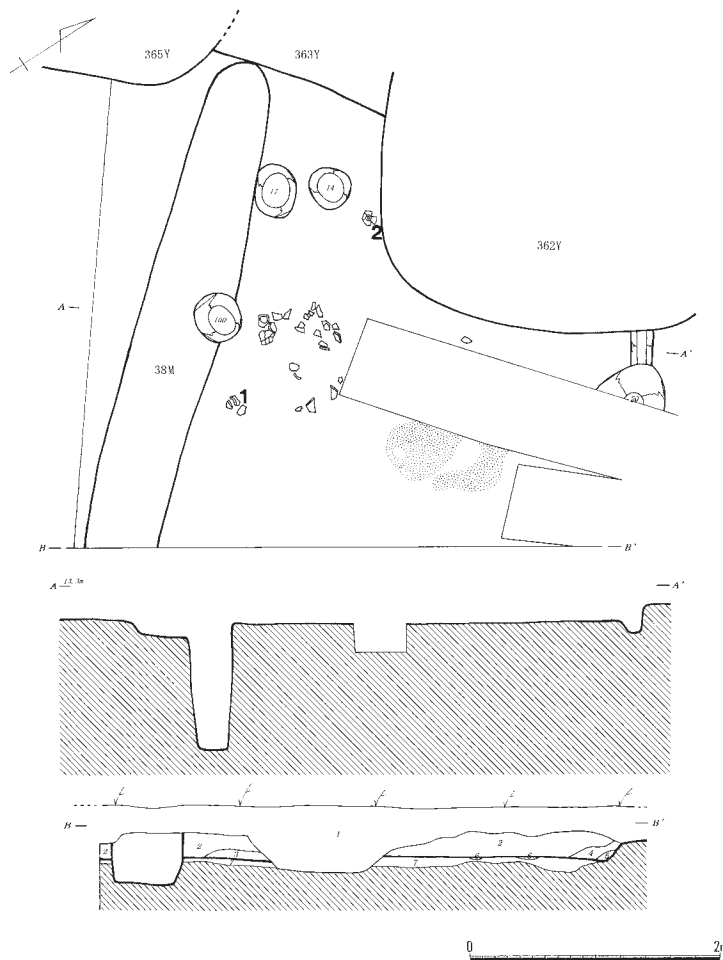
出されなかった。

〔覆土〕

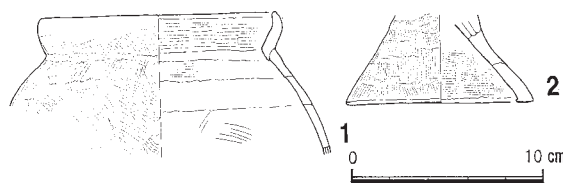
- 1層 耕作土。
- 2層 38号溝跡覆土。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 床面上から土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。



第323図 364号住居跡 (1/60)



第324図 364号住居跡出土遺物 (1/4)

364号住居跡出土遺物（第324図、第346図1～3）

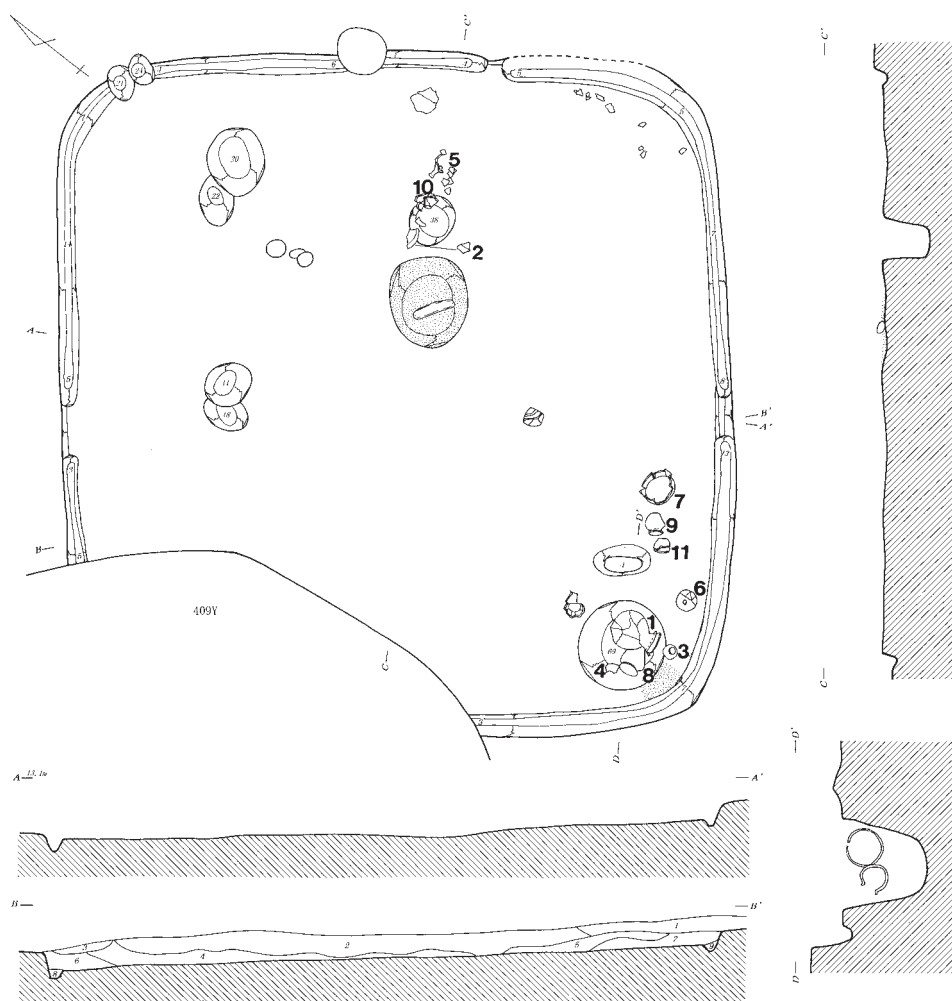
甕形土器（第324図1・2、第346図1～3）

第324図1はいわゆる受け口状口縁甕で、口頸部のみ残存する。推定口径12.5cmを測る。球形を呈すると推測される体部から頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は受け口状を呈し、直立気味に立ち上がり内湾する。口縁部はつまみ上げながら押し広げたように整形されている。外面はヘラナデされるが、粗い幅広のハケ目痕が残る。内面口縁部はヨコナデされるが、ハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが上部に輪積痕が明瞭に残る。色調はにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央付近床面上から出土した。

2は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径10cmを測る。裾部へかけて内湾しながら大きく広がる器形である。脚裾端部内面には粘土のはみ出しがみられる。内外面共にヘラナデされるが外面には縦位、内面には横位のハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。床面上から出土した。

第346図1は口縁部破片。頸部は「く」字状に屈曲して、口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

2・3は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は2がにぶい褐色（7.5YR6/3）、3はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第325図 365号住居跡 (1/60)

365号住居跡（第325図）

〔位置〕 5Ⅱ・5Ⅲ・72地点。

〔構造〕 362Yを切り、409Yに切られる。（平面形）隅丸正方形。（規模）538×534cm。（主軸方位）N—55°—E。（壁高）2～29cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11～17cm・下幅4～10cm・深さ2～16cmを測り全周すると思われる。（床面）全体に軟弱だが、部分的に硬化面を認める。北コーナーに焼土が堆積している。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。71×62cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2～16cmの掘り込みをもつ。炉の中央に礫を配している。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）北コーナーに位置する。74×70cmの楕円形を呈し、深さ68cmを測る。北西側に幅24cm・高さ4cmの凸堤が直線状に構築されている。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや軟質。
- 3層 暗赤灰色土（2.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。焼土粒子を多く含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 暗赤褐色土（5YR3/2）。焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 10層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 12層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 13層 暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
- 14層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 貯蔵穴内とその付近から土器が多く出土した。

〔時期〕 古墳時代前期後半。

〔所見〕 覆土中に焼土を多く含むなど。焼失家屋の可能性がある。

365号住居跡出土遺物（第327図1～11）

壺形土器（1～4）

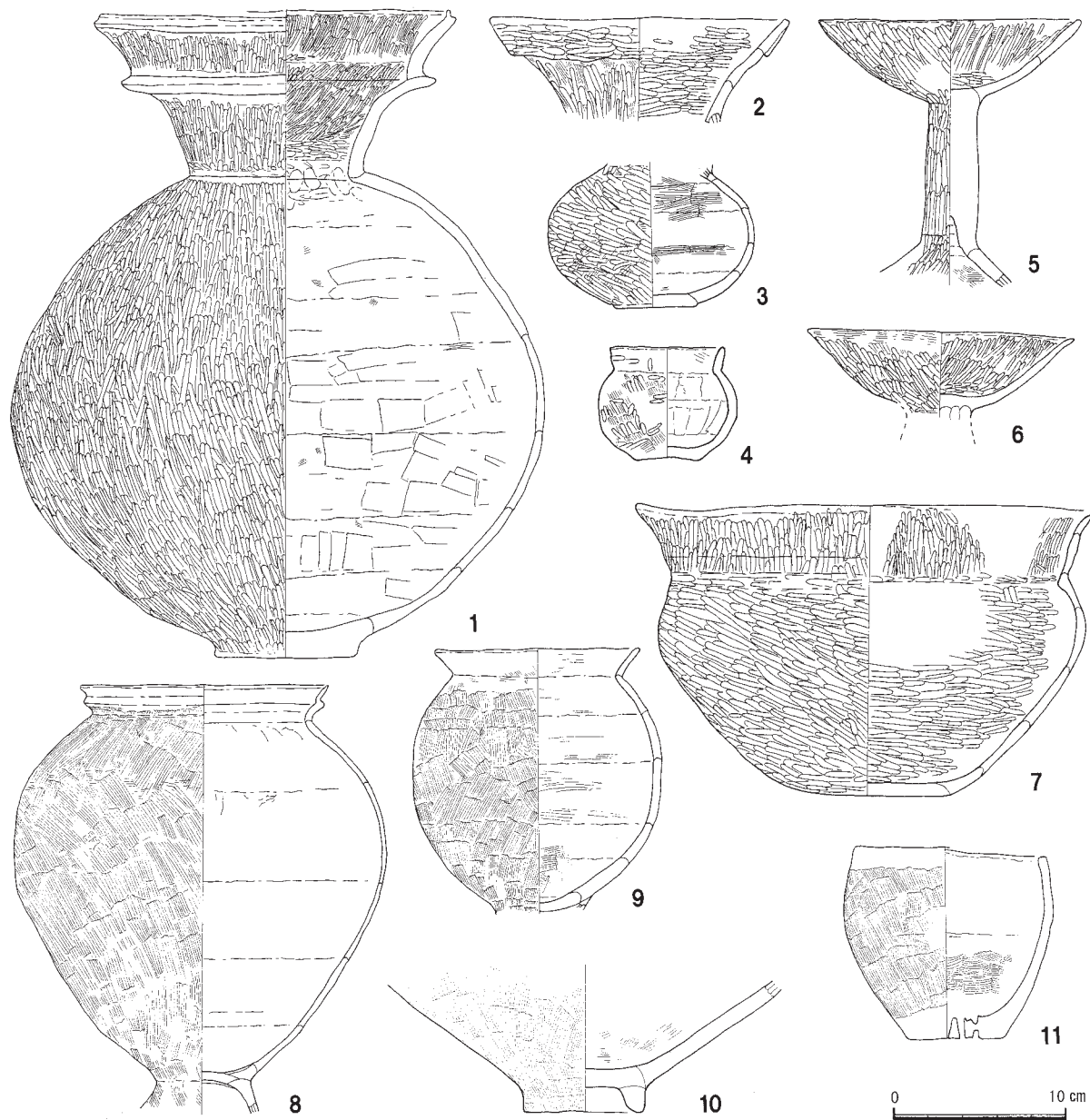
1はいわゆる伊勢型二重口縁壺である。口縁の一部を僅かに欠くが、ほぼ完形である。口径21cm・底径8.5cm・器高22.5cmを測る。口縁は二重口縁を呈する。口縁部の粘土帯を擬口縁の先端より5mm程度内側に乗せて成形している。そのため、口縁部下端には擬口縁部の先端が残り、鏢状の突帯を形成している。擬口縁上の口縁は強く外反しながら立ち上がる。口唇端部には沈線が施される。頸部は強く屈曲し、体部は球状を呈する。底部は平底を呈し、「砂粒充填痕」（川崎2002）がみられる。外面は縦方向に非常に丁寧なミガキが施される。口縁部内面は縦方向に丁寧にミガかれる。頸部内面下位は、横方向にミガかれており、成形時の指頭痕が残る。以下横方向にヘラナデされるが、工具痕が残る。口唇端部はヨコナデ。器面、特に内面は剥離が激しい。炭化物が付着する。色調は外面は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、焼成時に生じたと推測される黒斑部は黒褐色（5YR3/1）を呈する。内面は褐灰色（5YR4/1）、煤部分は黒褐色（5YR2/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子・雲母類・片岩類を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴内から出土した。

2は壺形土器の口縁部のみ残存する。口径17.5cmを測る。複合口縁部はやや内湾気味に開く。口縁部外面は横方

向にヘラミガキされ、以下縦方向にヘラミガキされるが縦位のハケ目痕が残る。内面は横方向にヘラミガキされる。内外面共に赤彩痕が残る。口唇部はヨコナデ。色調は外面は明赤褐色（5YR5/6）、内面は明赤褐色（5YR5/8）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。炉に近接した床面上から出土した。

3は小型壺。頸部以下残存する。底径4.9cmを測る。平底の底部から立ち上がり、やや扁平な球状を呈する。口縁部は直線的に立ち上がると推測される。外面は斜方向に丁寧ミガかれるが、体部下半に僅かにハケ目痕が残る。内面は、横方向にヘラナデされるが、一部にハケ目痕が残る。器面全体が黒味をおびる。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）、黒色部は暗赤褐色（5YR3/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むがきめ細かく堅緻である。住居跡南隅の壁際から出土した。

4は短頸壺形土器。推定口径6.7cm・底径約3.8cm・器高11.6cmを測り、遺存度は1/2程度である。若干上げ底気味の底部から立ち上がり、体部は偏球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は短く直立気味に僅かに外反しながら立ちあがる。外面はヘラミガキされるが、僅かにハケ目痕が残る。内面はヘラナデされるが工具痕が残る。色調は内外面共に、にぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく



第326図 365号住居跡出土遺物（1/4）

堅緻である。貯蔵穴内から出土した。

高坏形土器（5・6）

5は高脚の高坏形土器。推定口径15.4cm・現器高15.2cm。坏部は浅い碗状を呈する。脚部は細身の柱状を呈し、脚裾部は直線的に開く。坏部は内外面共に縦方向に丁寧にヘラミガキされるが、内面には横位のハケ目痕が僅かに残る。脚部外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。脚部内面は粗くヘラケズリされる。裾部内面は横方向にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。坏部には斑点状に剥離して器面の荒れが顕著な部分がある。色調は坏部外面が明赤褐色（5YR5/6）、坏部内面がにぶい赤褐色（5YR4/4）、黒色部分が黒褐色（5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、極めて精選されきめ細かく堅緻である。住居跡北東寄りの床面上から出土した。

6は高坏形土器の坏部のみ残存する。口径15.5cmを測る。坏部は僅かに内湾気味に開き、口縁部は外傾する。内外面共に、丁寧に縦方向のヘラミガキが施され光沢を帯びる。内面は器面の荒れがかなり激しく、全面に斑点状の剥離がみられ黒色化している。色調は坏部内面底部のみ明赤褐色（5YR5/6）、他は黒褐色（5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、極めて精選されきめ細かく堅緻である。南コーナー床面上から出土した。

鉢形土器（7・10）

7はほぼ完形の鉢形土器。口径27cm・底径10cm・器高12.9cmを呈する。丸底気味の底部から立ち上がり、体部は広がり頸部上半で屈曲する。口縁部内外面共に、縦方向にヘラミガキされる。以下横方向斜方向にヘラミガキされる。口唇部はヨコナデ。体部下半と底部には内外面共に、焼成時に付いたと思われる黒斑がみられる。色調は外面明が明赤褐色（5YR5/6）、内面がにぶい赤褐色（5YR5/4）、黒斑部が黒褐色（5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡南東寄り床面上からの出土。

10は鉢形土器の底部と思われる。底径7cm。脚台部は極端に短く高台状を呈する。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉に近い床面上から出土した。

甕形土器（8・9）

8はS字状口縁台付甕形土器。口径14.5cm・体部最大径12.8cm・現器高25cmを測る。脚部中位以下欠損。短いS字状口縁部の下段は外傾しながら立ち上がり、中段で僅かに内傾して、上段で外反気味に開き、口唇部内面には浅く沈線状の凹面を作出する。頸部は強く屈曲する。体部は最大径をやや上半にもち、あまり張らない器形である。体部中位の、一番火を受けると推測される部分は、非常に薄く作られている。この部分の内面には炭化物がこびりついている。脚台部との接続部には、いわゆる「補充技法」（赤塚1990）と思われる僅かな盛り上がりが見られる。口縁部内外面共にヘラナデされるが、縦位・斜位のハケ目痕が残る。体部外面はヘラナデされるが、体部上半には、明瞭な縦位のハケ目痕が残り、下位には粗い斜位のハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされる。脚部外面はヘラナデされるが、斜位のハケ目痕が残る。脚部内面はヘラナデされる。色調は甕部が橙色（5YR7/6）、脚台部がにぶい黄橙（10YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・雲母・片岩・白色粒子が含まれる。特に補充技法の部分の胎土には粗砂が多く含まれる。貯蔵穴から出土した。

9は小型の台付甕で脚台部を欠損する。口径11.9cmを測る。体部は球形を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが、外面にやや不規則なハケ目痕が残る。内面は横方向にヘラナデされるが工具痕が残る。内外面共に全体に炭化物が付着して黒色化している。内面の中位には斑点状の剥離が見られる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、黒色部は赤黒色（2.5YR2/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡南東寄り床面上から出土した。

甌形土器（11）

完形の甌形土器。口径11cm・底径5.5cm・器高9.5cmと小型である。底部は平底で胴部は膨らみ、口縁部は内湾する器形である。焼成前に底部に直径約3～7mmの孔が12ヵ所穿たれている。内1孔は貫通されずに残っている。内

外面共にヘラナデされるが外面には縦位、内面には横位のハケ目痕が残る。外面と内面底部には炭化物が付着する。色調は外面が赤褐色（2.5YR5/6）、内面がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡南東寄り床面上から出土した。

366号住居跡（第327図）

〔位置〕 25VI地点。

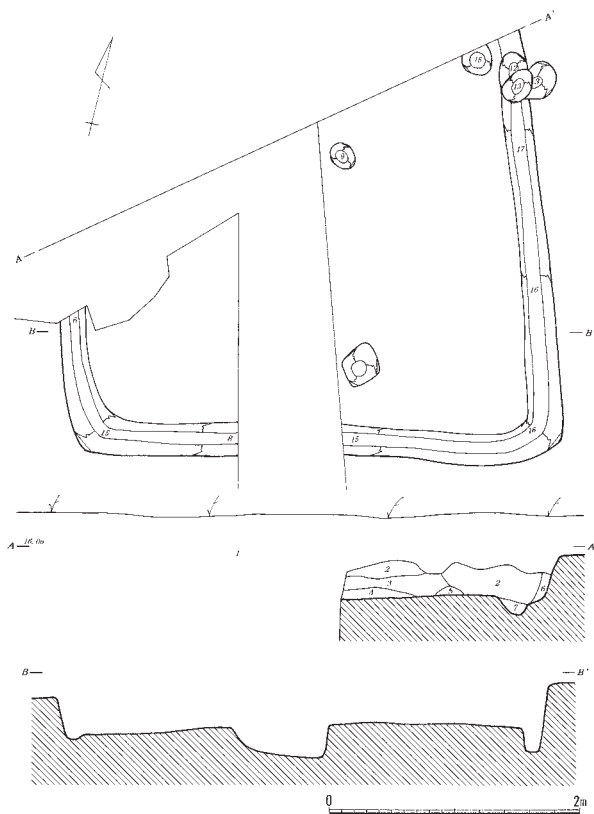
〔構造〕 北側調査区外。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×400cm。（主軸方位）不明。（壁高）23～36cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅25～35cm・下幅10～14cm・深さ13～16cmを測る。（床面）住居中央は攪乱で破壊されているが、部分的に硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（5 YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第327図 366号住居跡（1/60）

367号住居跡（第328図）

〔位置〕 56 I 地点。

〔構造〕 北側調査区外。40Mに切られる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×397cm。(主軸方位) N-48°-Wか。(壁高) 26~32cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際から住居中央に向かって挿鉢状となり、全体に軟弱だが遺存状態は良好である。部分的に硬化面を認める。(炉) 40Mに切られた可能性がある。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

368号住居跡（第329図）

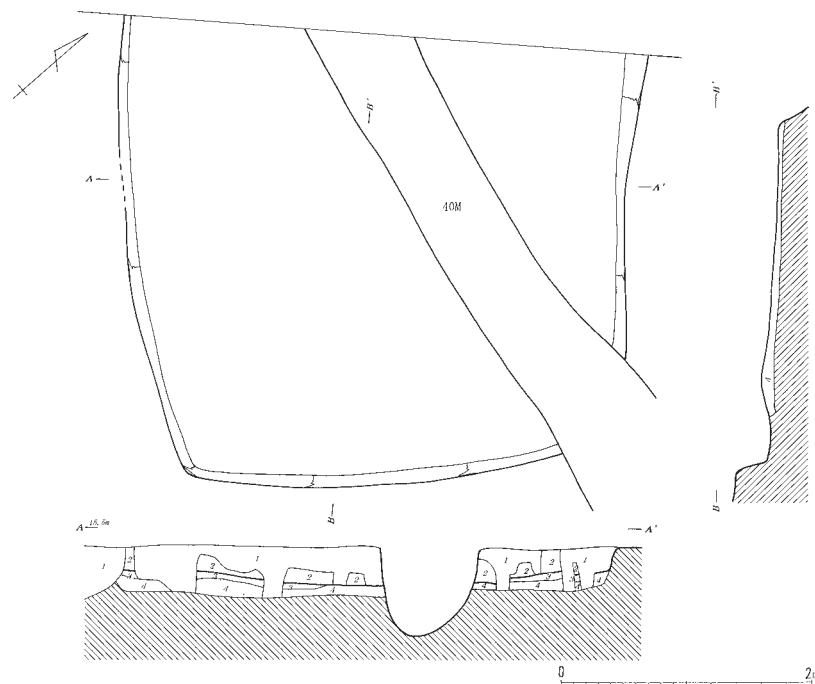
〔位置〕 57 I 地点。

〔構造〕 南西側攪乱。396Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 6~9cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 軟弱だが、遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。被熱をして赤化している部分を検出する。(炉) 北東側に位置する。50×46cmの円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 壁際の2本のピットは主柱穴とするには判然としない。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。



第328図 367号住居跡 (1/60)

3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや軟質。

〔遺物〕 床面上に土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

368号住居跡出土遺物 (第330図)

器台形土器 (1)

小形器台。受け部の1/2程度が残存する。推定口径8.2cm。受け部下端に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

369号住居跡 (第331図)

〔位置〕 57 I 地点。

〔構造〕 434Dに切られる。(平面形) 隅丸正方形。(規模) 351×346cm。(主軸方位) N-25°-W。(壁高) 58~66cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 硬質ロームを床面とするため、遺存状態は良好である。東側に硬化面を認める。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。不明×43cmの地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。焼土の上に土器片が出土した。(柱穴) 北西コーナーに近い1本は後世のものである。南壁下中央から北に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東壁下、中央から東に偏って位置する。62×48cmの楕円形を呈し、深さ17cmを測る。

〔覆土〕

1層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。軟質。

2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを多く含む。硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

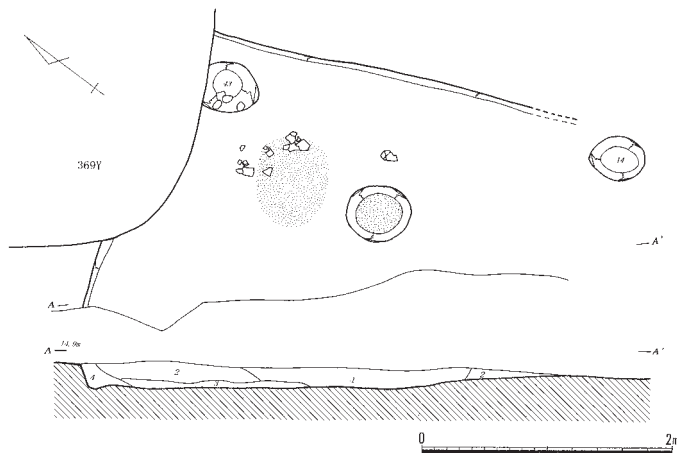
6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。

8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。硬質。

9層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。

10層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。



第329図 368号住居跡 (1/60)



第330図 368号住居跡出土遺物 (1/4)

11層 黒色土 (2.5Y2/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 炉内部から壺形土器が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

369号住居跡出土遺物 (第332図、第346図 4～6)

壺形土器 (第332図 1、第346図 4)

第332図 1 は小型で1/2程度が残存する。推定口径10.5cm。体部は球状を呈し、頸部は強くくびれて口縁部は外反する器形である。外面はヘラミガキされるが、不規則なハケ目痕が残る。内面もヘラナデされるが、剥離が激しく不明瞭。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉内から出土した。

第346図 4 は複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面には網目状撚糸文が施される。内面には直径1cmの楕円形の円形赤彩文が2段施される。色調は在地の胎土とは異なるにぶい黄橙色 (10YR7/2) を呈する。胎土には粗砂を含むが、非常に精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

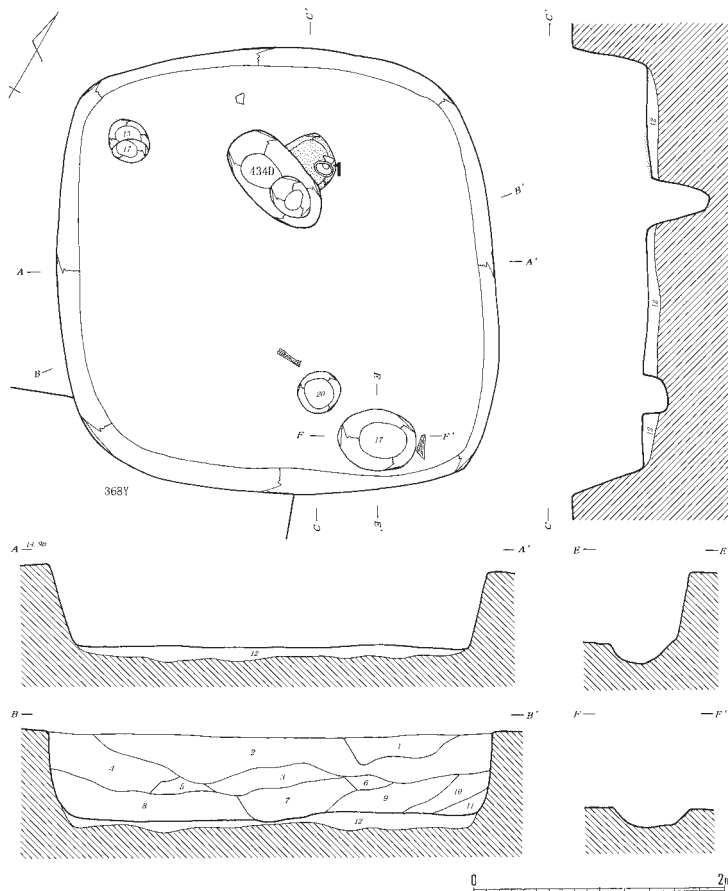
甕形土器 (第346図 5・6)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は5が黒褐色 (5YR3/1)、6がにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

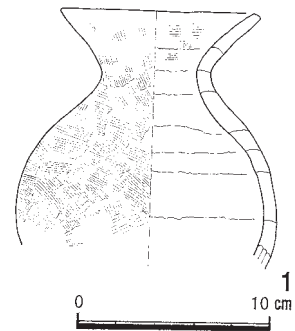
370号住居跡 (第333図)

〔位置〕 57 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸正方形。(規模) 436×405cm。(主軸方位) N-34°-W。(壁高) 9~20cmを測り、80°前



第331図 369号住居跡 (1/60)



第332図 369号住居跡出土遺物 (1/4)

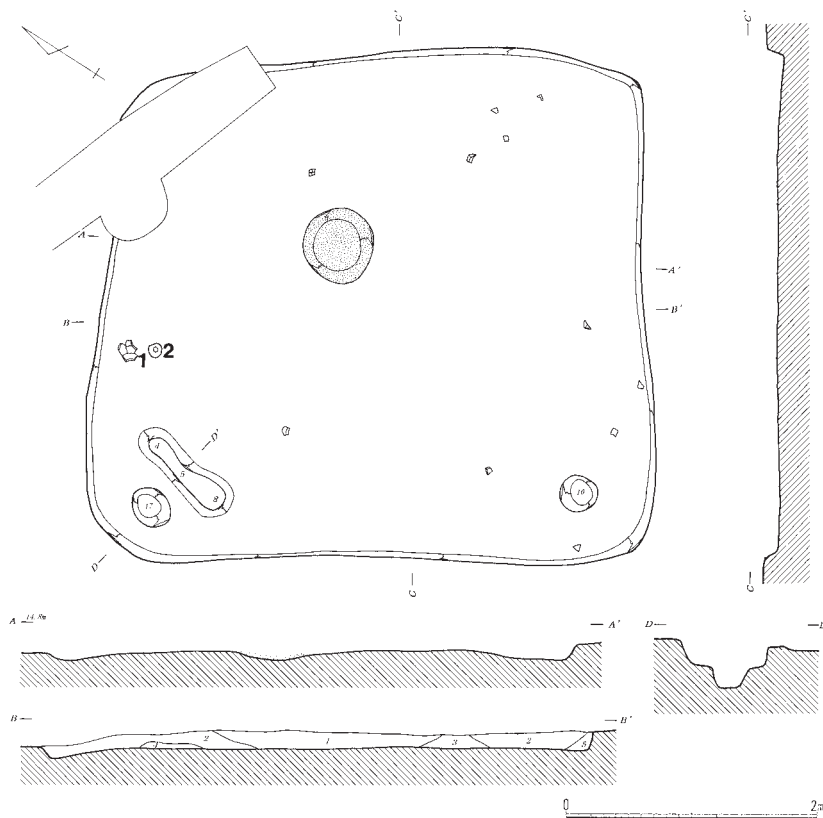
後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 軟弱だが、遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。(炉) 住居中央から僅かに北西に偏って位置する。径59cmの円形を呈する地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 南コーナーに1本検出されたが支柱穴とするには疑問である。(貯蔵穴) 西コーナーに位置する。40×25cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。貯蔵穴の東側には幅25cm前後・高さ4cm前後の直線的な凸堤を構築している。

〔覆土〕

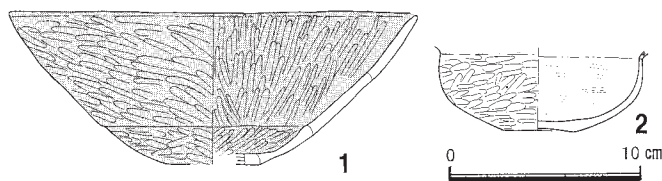
- 1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。

〔遺物〕 北西壁寄り床面上から出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。



第333図 370号住居跡 (1/60)



第334図 370号住居跡出土遺物 (1/4)

370号住居跡出土遺物（第334図、第346図7～9）

壺形土器（第346図7・8）

7は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、口縁部外面には消し切れないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

8は肩部破片。LRの単節縄文が羽状に施され、上端にはS字状結節文が巡る。色調はにぶい黄褐色（5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

鉢形土器（第334図1）

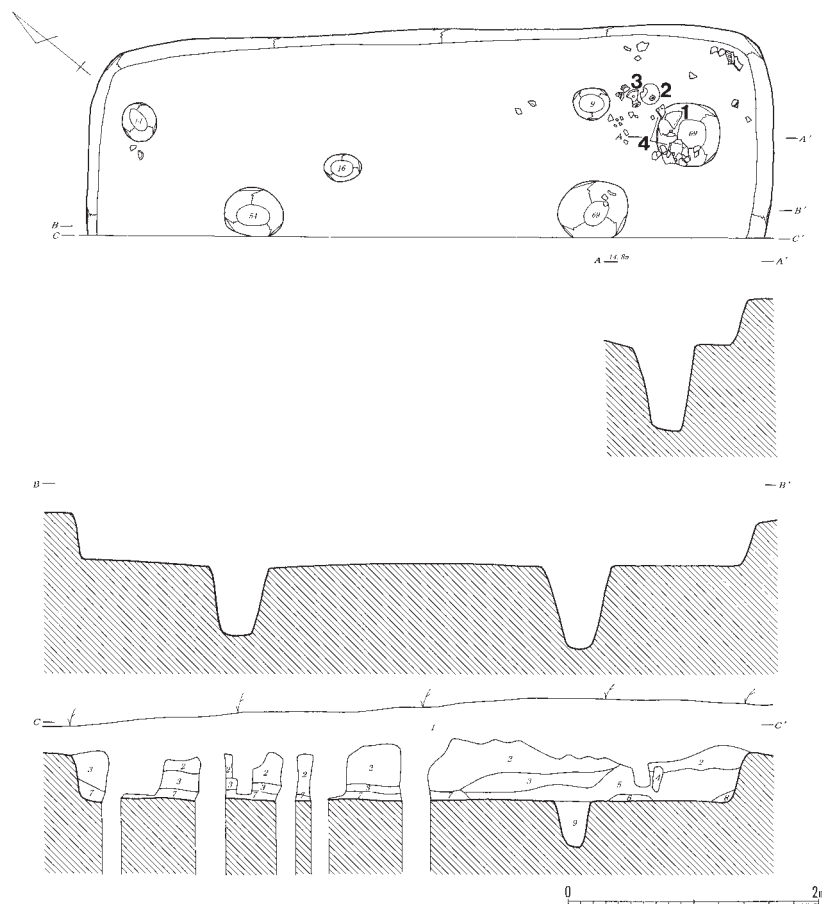
有段鉢で1/3程度が残存する。推定口径21.7cm・推定底径5cm・器高13cmを測る。小さい底部から立ち上がり、体部下端に僅かな稜を持ち、僅かに内湾しながら開き、口縁部へ至る器形である。外面は斜方向に丁寧にヘラミガキされ、口縁部から体部下半の稜までは赤彩される。内面は縦方向に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は橙色（5YR6/6）、赤彩部はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。北西壁際床面上から出土した。

坏形土器（第334図2）

口縁部を欠く有段坏。底径3.8cmを測る。僅かに凹んだ底部から塊状の体部へ至り、頸部は屈曲し、欠損しているが、口縁部は開く器形である。体部外面はヘラケズリ後ヘラミガキされる。内面はナデられる。色調は明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・輝石を含むが、きめ細かく堅緻である。北西寄り床面上から出土した。

甕形土器（第346図9）

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。



第335図 374号住居跡（1/60）

374号住居跡（第335図）

〔位置〕 57 I 地点。

〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明×547cm。（主軸方位）不明。（壁高）37～42cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とし、平坦で遺存状態は良好である。（炉）検出されなかった。（柱穴）北・東コーナーに深度のある2本が主柱穴の一部と思われる。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）東コーナーに位置する。50×50cmの正方形を呈し、深さ71cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。軟質。
- 4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロック。硬質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 8層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 9層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 貯蔵穴の上部とその周辺に土器片が多量に出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

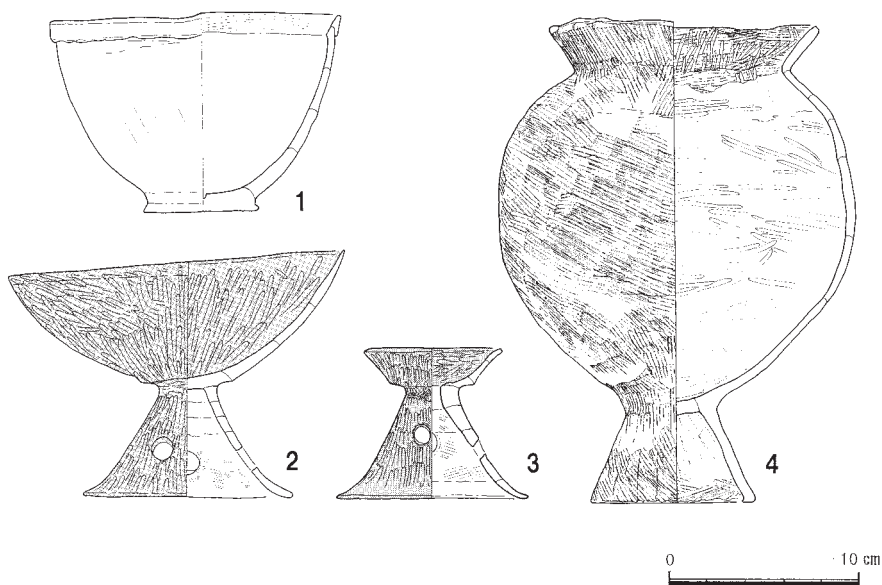
374号住居跡出土遺物（第336図、第346図10～14）

壺形土器（第374図10～12）

いずれも複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は10がにぶい褐色（7.5YR5/4）、11が灰褐色（7.5YR4/2）、12がにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。10・12は東コーナー床面上、11は貯蔵穴上から出土した。

鉢形土器（第336図1）

完形。底径6cm・器高10.5cmを測り、口径が14×13.5cmと上から見ると楕円形を呈し、かなりゆがんだ形である。



第336図 374号住居跡出土遺物（1/4）

口縁部は複合口縁を呈する。やや立ち気味の口縁部からゆるやかに湾曲しながら、高台状に張り出した平底の底部に至る。複合口縁部はナデられるが、内面には粗いハケ目痕が残る。体部内外面共にナデられる。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴内部から出土した。

高坏形土器（第336図2）

ほぼ完形の元屋敷系高坏形土器である。口径7.9cm・裾部径21cm・器高12.5cmを測る。坏部下端に稜をもち、口縁部へかけて大きく開く。坏部の器壁は著しく薄い。脚台部は大きく末広がりになり、中位には直径1cmの円窓が3孔開けられている。坏部内外面共に縦方向にヘラミガキされるが、口唇部にはハケ目痕が残る。外面には黒斑がみられる。脚台部外面は縦方向にヘラミガキされ、内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。坏部内外面と脚台部外面は赤彩が施される。色調は橙色（5YR6/6）、赤彩部は（2.5YR4/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、非常に精選されておりきめ細かく堅緻である。貯蔵穴横床面上から出土。

器台形土器（第336図3）

口径7.5cm・裾部径10.8cm・器高8cmと小型で完形である。口縁部は面取りされる。受け部は深めでその下半に稜を持ち、浅い碗状を呈する。受け部の中心から脚部へ貫通する円形孔は直径1cmで、脚部孔と同径である。脚台部は末広がりになりゆるやかに開き、外側から内側へ直径1cmの円窓が3孔開けられている。色調はにぶい橙色（5YR6/4）、赤彩部は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には粗砂を含むが、非常に精選されきめ細かく堅緻である。貯蔵穴付近の床面上から出土した。

甕形土器（第336図4、第346図13・14）

第336図4は完形の台付甕形土器。口径14cm・裾部径8.6cm・器高25.6cmを測る。体部は中位に最大径を持つ球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部は面取りされナデられる。脚台部は直線的に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。体部内外面共に炭化物の付着がみられる。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

第346図13・14は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。13は床面上、14は住居跡南コーナー床面上から出土した。

375号住居跡（第337図）

〔位置〕 57 I 地点。

〔構造〕 435・436 D に切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）452×438cm。（主軸方位）N-20°-W。（壁高）30～36cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。70×64cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーに近い深度のある4本が主柱穴である。南壁下中央から僅かに北に寄った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東壁下中央から東に偏って位置する。81×74cmの楕円形を呈し、深さ51cmを測る。貯蔵穴北西側に幅28～34cm・高さ1～4cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。

- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 7層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 9層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

南東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕南コーナー付近と覆土中から出土した。

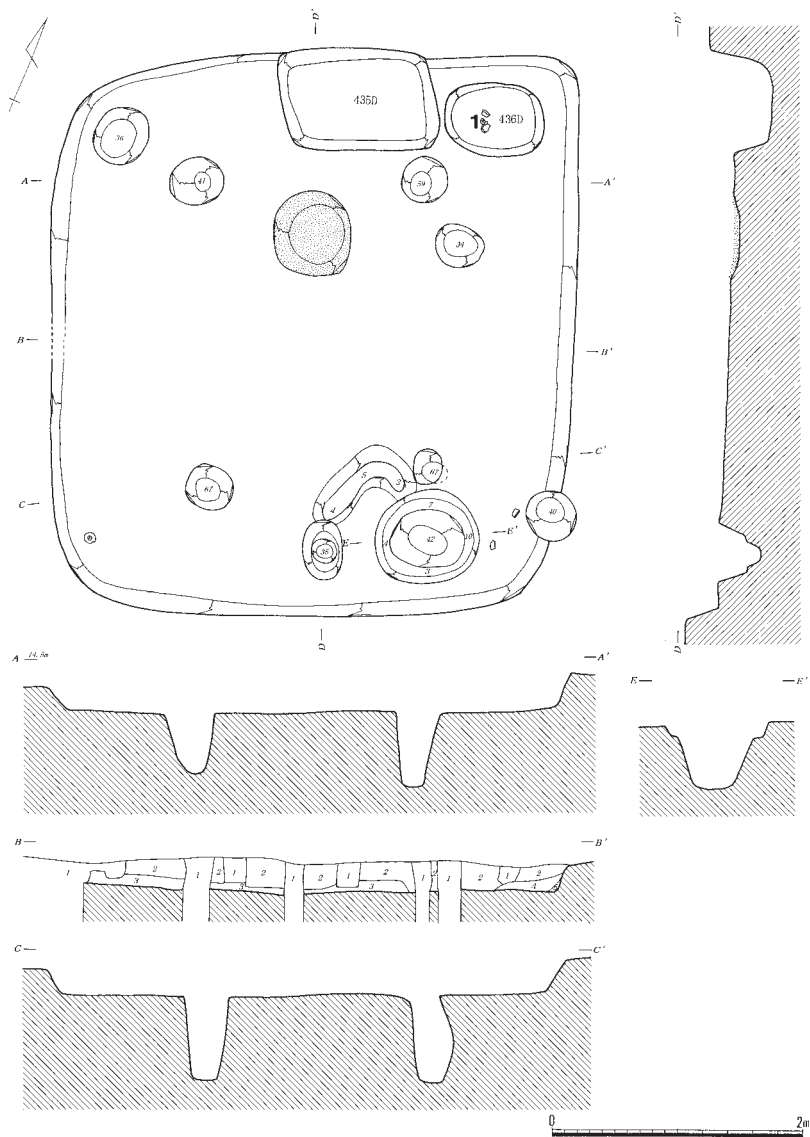
〔時期〕古墳時代前期。

375号住居跡出土遺物 (第338図、第346図15~18)

壺形土器 (第346図15)

口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

器台形土器 (第338図1)



第338図 375号住居跡出土遺物 (1/4)

第337図 375号住居跡 (1/60)

脚台部中位部分のみ残存する。裾部へかけて末広がりになる器形である。脚部中位には、直径約1cmの円窓が3孔外から内へと穿たれる。受け部内面と外面は丁寧にヘラミガキされる。脚部内面はヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は橙色(5YR6/6)を呈し、胎土には粗砂を含むが、非常に精選されきめ細かく堅緻である。北東コーナー出土した。

甕形土器(第346図16~18)

16は口縁部破片、17・18は体部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は16が灰褐色(5YR4/2)、17がにぶい褐色(7.5YR6/3)、18が灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

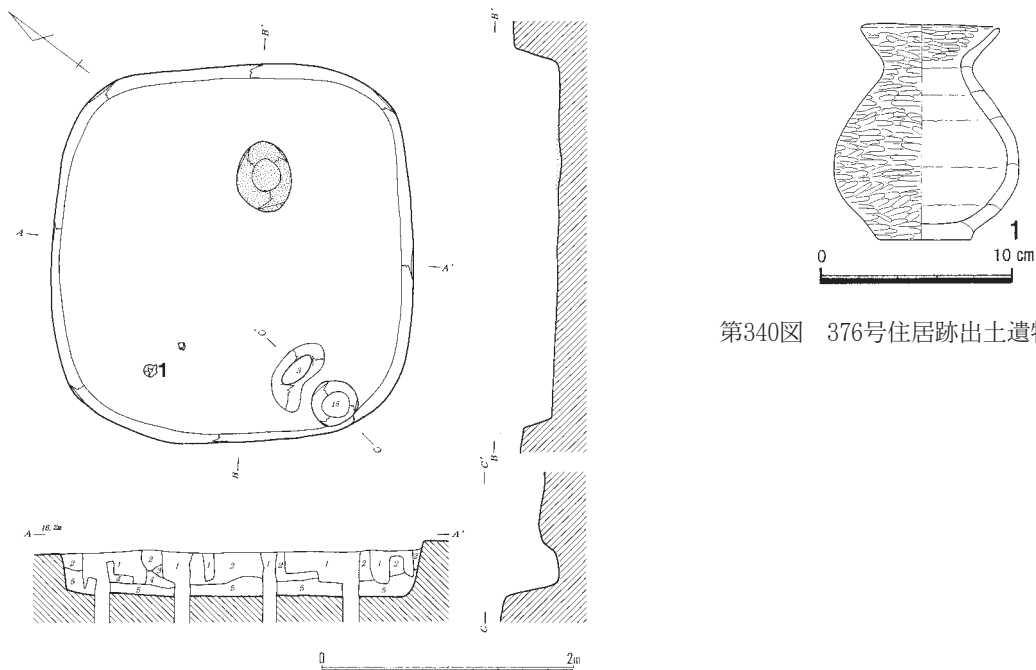
376号住居跡(第339図)

〔位置〕40IV地点。

〔構造〕(平面形)隅丸正方形。(規模)301×290cm。(主軸方位)N-54°-E。(壁高)29~34cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)平坦で硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉)住居中央から北東に偏って位置する。56×45cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。(柱穴)検出されなかった。(貯蔵穴)南コーナーに位置する。径45cmの円形を呈し、深さ6cmを測る。北側に幅24cm前後・高さ2cm前後の直線的な凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 3層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(2.5Y3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 7層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ロームブロック。硬質。



第339図 376号住居跡(1/60)

第340図 376号住居跡出土遺物(1/4)

- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 9層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロック。硬質。
- 10層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 15層 黒褐色土 (5YR3/1)。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
- 16層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 17層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 西コーナーより小型の壺形土器が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

376号住居跡出土遺物 (第340図)

壺形土器 (1)

小型で完形。口径7.5cm・底径5.2cm・器高11.4cmを測る。平底の底部から立ち上がり、やや下膨れの体部を作出する、頸部は強くくびれて口縁部は外反する。外面と口縁部内面は横方向にヘラミガキされる。体部内面はヘラナデされるが、輪積痕が明瞭に残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。西コーナー寄り床面上から出土した。

377号住居跡 (第341図)

〔位置〕 40IV地点。

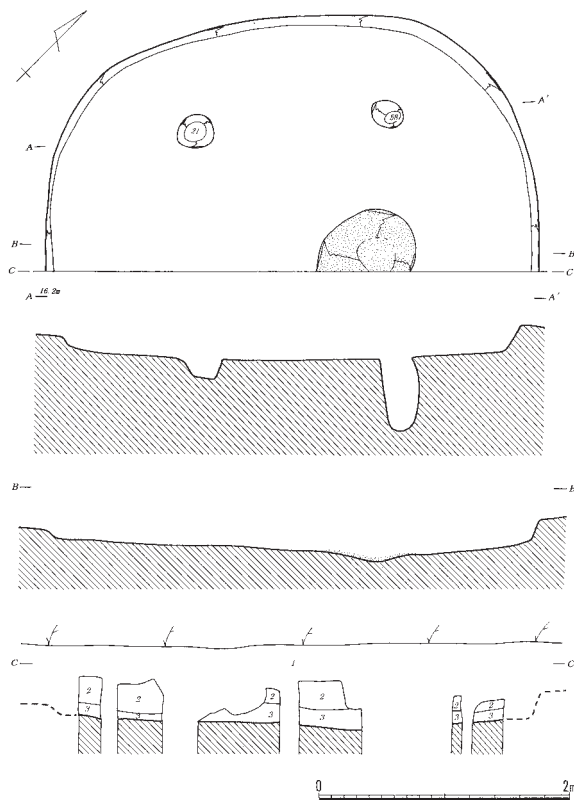
〔構造〕 南西側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明×388cm。(主軸方位) N-46°-E。(壁高) 11~19cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。不明×469cmの地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 北・西コーナーの2本が主柱穴の一部であろうか。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第341図 377号住居跡 (1/60)

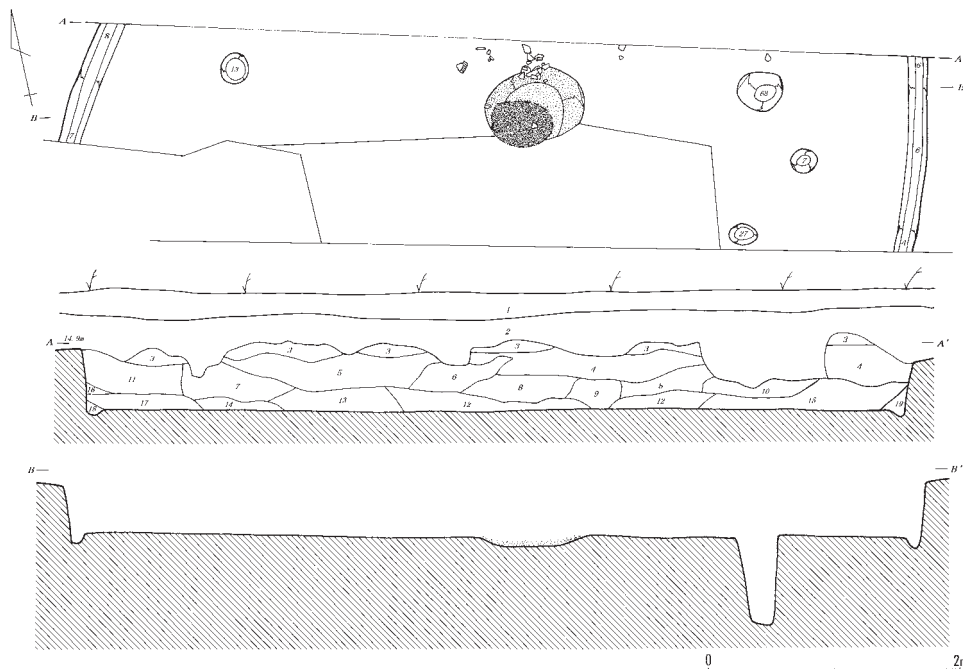
378号住居跡（第342図）

〔位置〕 59 I 地点。

〔構造〕 南側・北側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）42～48cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅14～18cm・下幅5～10cm・深さ4～9cmを測る。（床面）平坦で硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際を除き硬化面を認める。（炉）ほぼ住居中央に位置する。不明×71cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。焼土に粘土の痕跡があり、粘土火皿の可能性もある。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を含む。硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 10層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
- 13層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 14層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 15層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。硬質。
- 16層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。



第342図 378号住居跡（1/60）

17層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム小ブロックを多く含む。硬質。

18層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。粘質。

19層 黄灰色土 (2.5Y4/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。粘質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 炉の周辺に土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

378号住居跡出土遺物 (第346図19～22)

壺形土器 (19～21)

19・20は口縁部破片で同一個体。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は19がにぶい赤褐色 (5YR5/3)、20がにぶい赤褐色 (5YR5/3)、を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

21は体部破片。LRの単節縄文を鋸歯文で区画した文様がみられる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

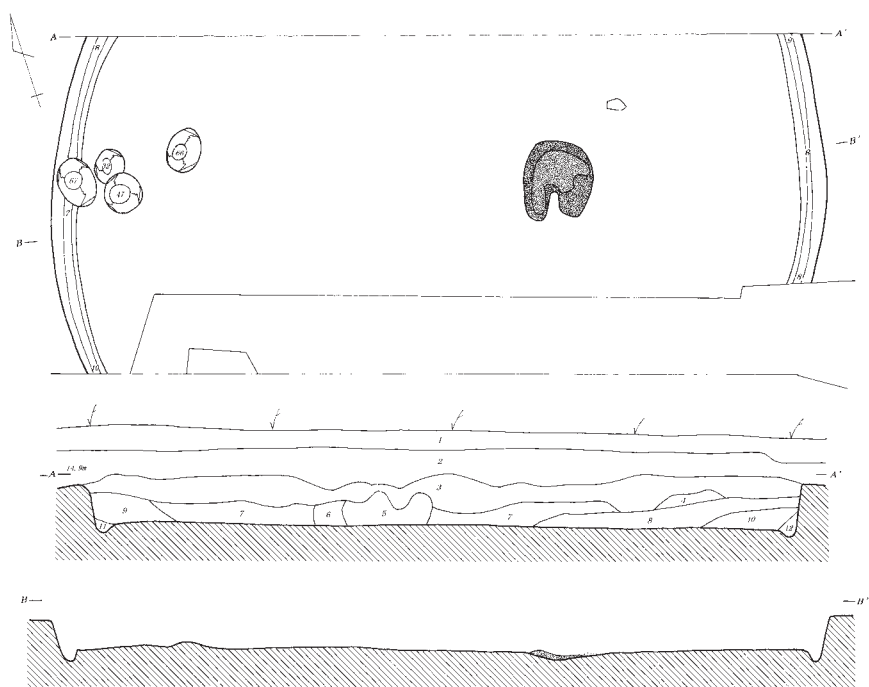
甕形土器 (22)

22は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉付近床面上から出土した。

379号住居跡 (第343図)

〔位置〕 59 I 地点。

〔構造〕 南側・北側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明×618cm。(主軸方位) 不明。(壁高) 26～31cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅14～20cm・下幅4～8cm・深さ5～10cmを測る。(床面) 平坦で遺存状態は良好である。部分的に硬化面を認める。(炉) 住居東側に位置する。62×57cmの不整形を呈する粘土火皿で、1cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 4本検出するが、いずれも後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

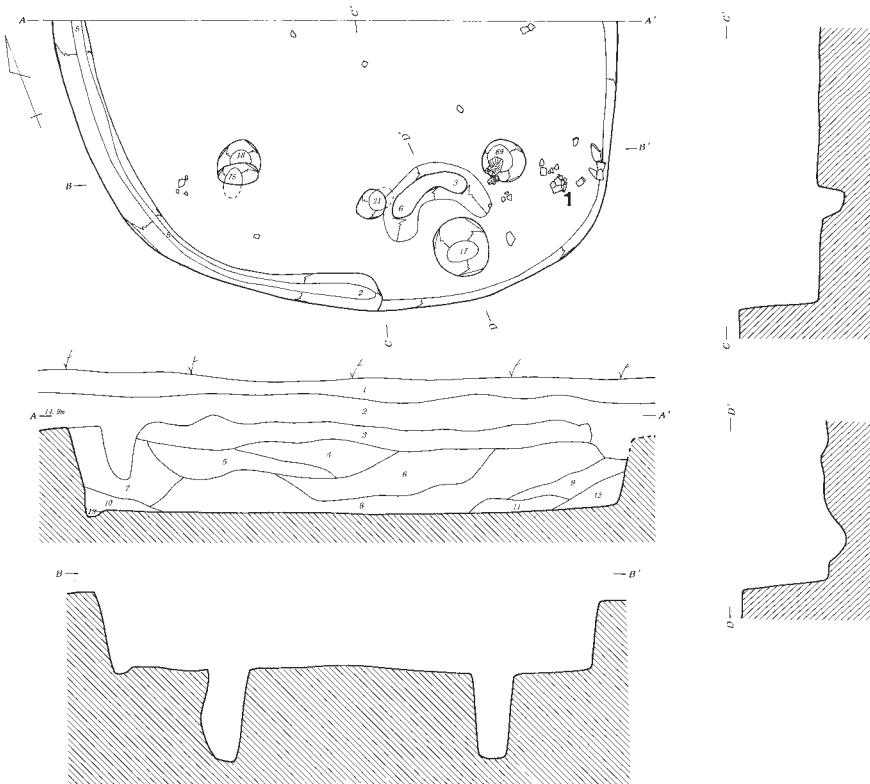


第343図 379号住居跡 (1/60)

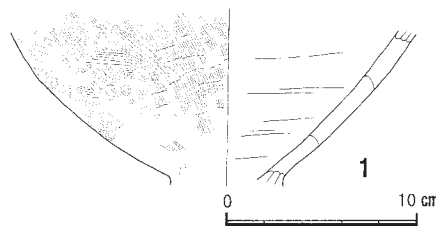
〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 11層 黄灰色土 (2.5Y4/1)。ローム粒子を多く含む。粘質。
- 12層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。粘質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。



第344図 380号住居跡 (1/60)



第345図 380号住居跡出土遺物 (1/4)

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

380号住居跡（第344図）

〔位置〕 59 I 地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×438cm。（主軸方位）N-18°-E。（壁高）56～64cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～25cm・下幅4～8cm・深さ2～5cmを測り、住居西側で検出された。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際を除き、硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）南西・南東コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。南壁下中央から僅かに北に偏った1本は入口施設であろう。（貯蔵穴）南壁下中央から東に偏って位置する。径47cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。幅26cm前後・高さ3～6cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや粘質。

8層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。

10層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

11層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・焼土ブロックを含む。やや硬質。

12層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

13層 褐灰色土（10YR4/1）。ローム粒子を多く含む。粘質。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 南コーナー床面上に土器片が点在する。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

380号住居跡出土遺物（第345図、第346図23～25）

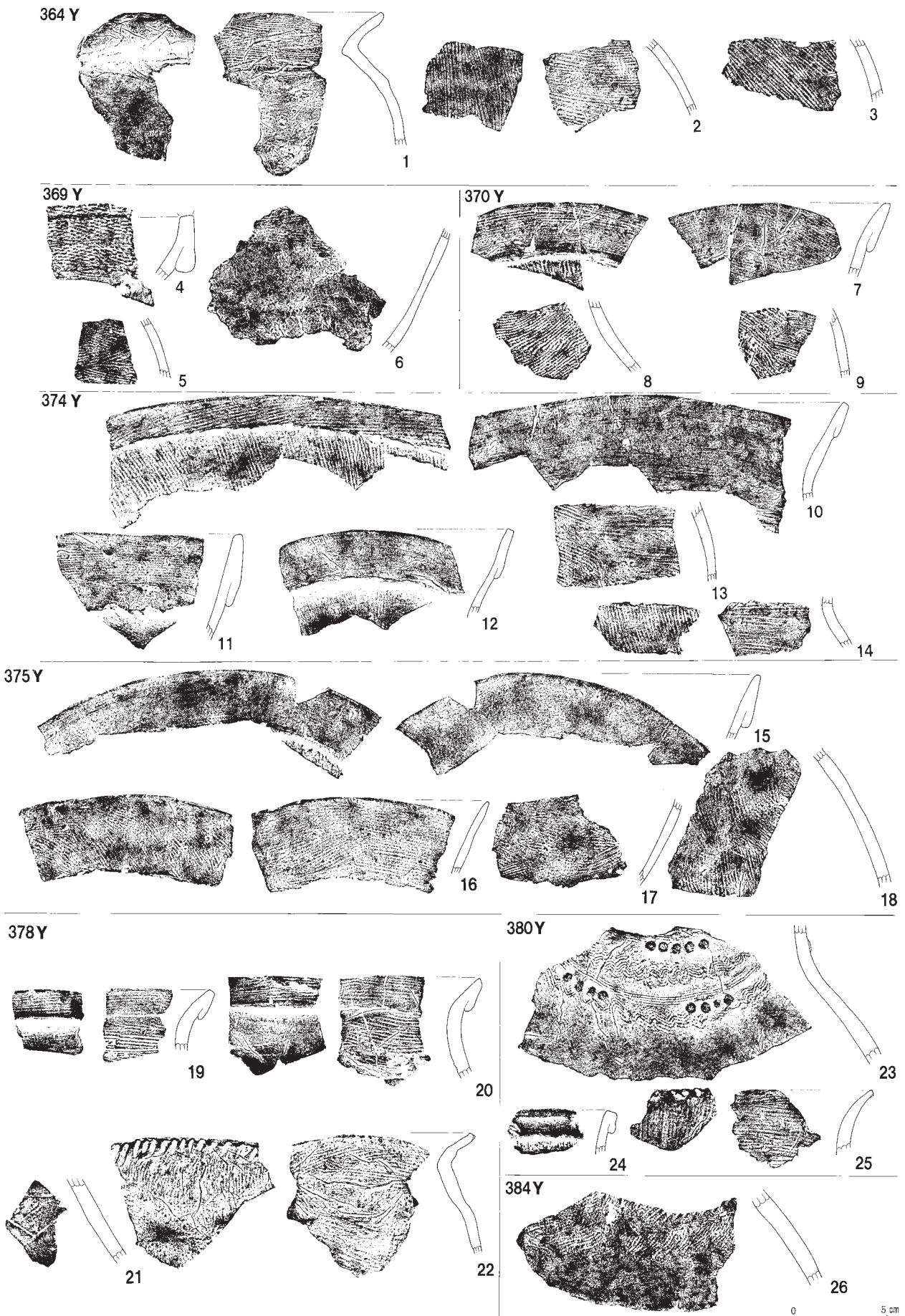
壺形土器（第346図23・24）

23は肩部破片。上から順に櫛描横線文・波状文が2段施され、1段目の横線文直下には円形浮文が5個、2段目の横線文の直下には4個一単位の円形浮文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は暗赤褐色（5YR3/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー付近から出土した。

24は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第345図1、第346図25）

第345図1は台付甕形土器の甕部下半のみ残存する。内外面共にヘラミガキされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。内面には炭化物が付着する。色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。



第346図 364・369・370・374・375・378・380号住居跡出土遺物 (1/3)

南コーナー付近床面上から出土した。

第346図25は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

381号住居跡（第347図）

〔位置〕 40V地点。

〔構造〕 南東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）15～19cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全面軟弱で遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）北・西コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 耕作による攪乱のため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子を多く含むやや硬質の黒褐色土（10YR3/2）である。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

382号住居跡（第348図）

〔位置〕 40V地点。

〔構造〕 南東側調査区外。（平面形）不整楕円形。（規模）不明×315cm。（主軸方位）N-43°-W。（壁高）15～23cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に軟弱で遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出された1本は後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 明赤褐色土（5YR5/6）。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。やや軟質。

3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。

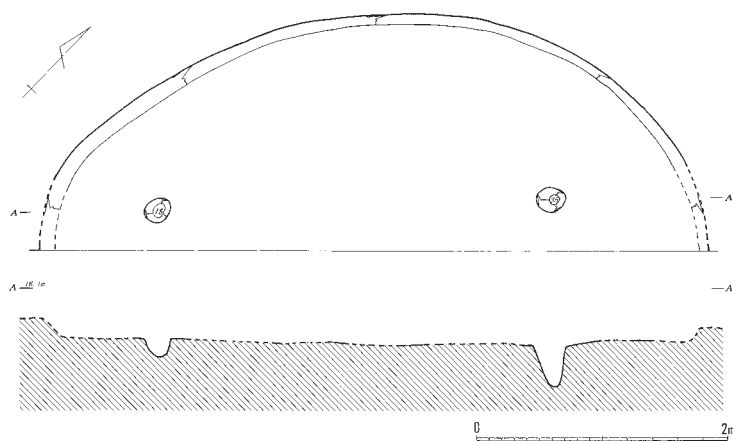
4層 褐灰色土（10YR4/1）。ローム粒子を含む。やや軟質。

5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 炉・柱穴などが検出されず、住居跡とするには躊躇を覚えるが、掘り込みがしっかりしているため、住居跡として認定した。



第347図 381号住居跡（1/60）

383号住居跡（第349図）

〔位置〕 40V地点。

〔構造〕（平面形）隅丸正方形。（規模）360×360cm。（主軸方位）N—S。（壁高）37～50cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅20cm前後・下幅5cm前後・深さ4cm前後を測り、北壁側に検出された。（床面）硬質ロームを床面とする。平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。径45cmの円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）西壁下、中央から東に偏った1本は入口施設と思われ。それ以外のピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 3層 にぶい褐色土（7.5YR5/4）。ロームブロック。硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや軟質。
- 5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子・炭化材小片を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

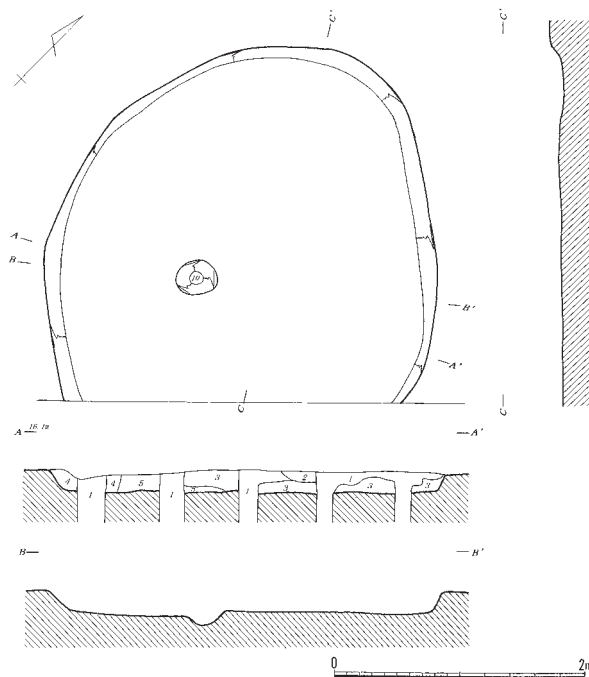
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

384号住居跡（第350図）

〔位置〕 40V地点。

〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）26～33cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で軟弱だが、西側に部分的に硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）北西コーナーの1本が主柱穴の一部か。（貯蔵穴）検出されなかった。



第348図 382号住居跡（1/60）

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 3層 灰褐色土 (7.5YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。中央付近で焼土粒子が目立つ。やや硬質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 床面上と覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

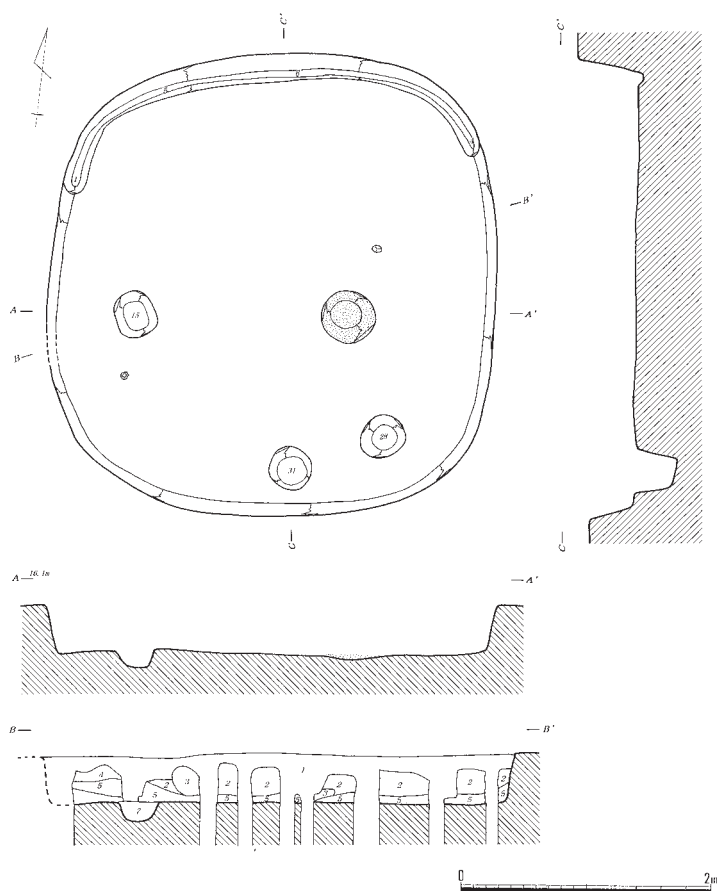
384号住居跡出土遺物 (第351図、第346図26)

壺形土器 (第346図26)

肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が2段施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。炉内から出土した。

甕形土器 (第351図1)

脚台部のみ残存する。裾部径9.6cmを測る。裾部へかけて「ハ」字状に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は橙色 (7.5YR6/6) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡西寄り床面上から出土した。



第349図 383号住居跡 (1/60)

385号住居跡（第352図）

〔位置〕 60地点。

〔構造〕 南側・北側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）3～7cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居ほぼ中央に位置し、35×33cmの円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 遺構確認面から浅いことと、耕作による攪乱が著しいため詳細は不明であるが、部分的に残された覆土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む、やや硬質の黒褐色土（7.5YR3/1）である。

〔遺物〕 床面上と覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

385号住居跡出土遺物（第353図1）

甕形土器（1）

台付甕形土器の脚台部1/2程度が残存する。推定裾部径9.8cmを測る。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は褐色（7.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

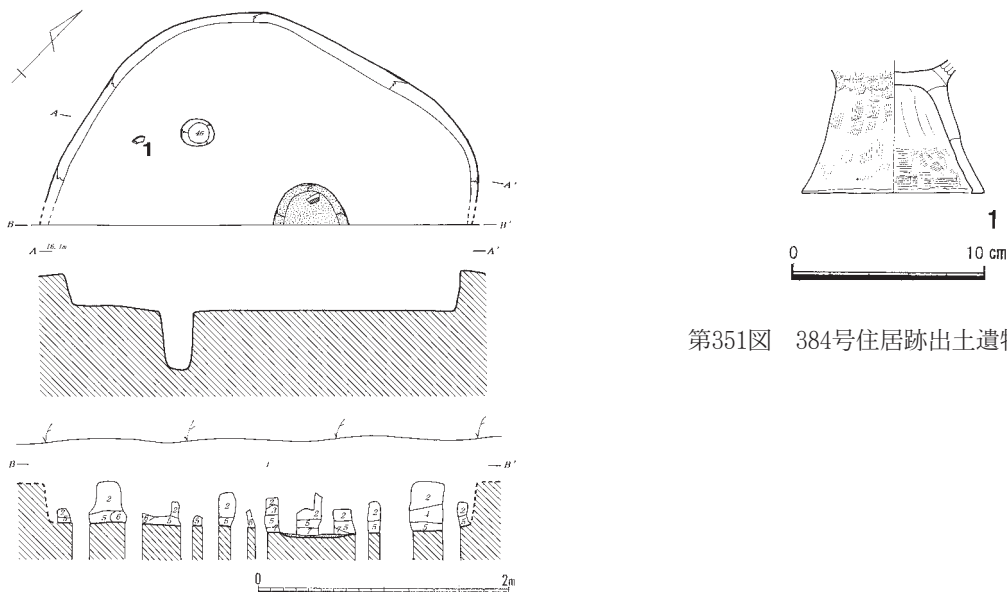
386号住居跡（第354図）

〔位置〕 60地点。

〔構造〕 北側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）52～58cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）硬質ロームを床面とする。遺存状態は良好である。壁際を除き、硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）南西コーナーに近い1本が主柱穴の一部か。（貯蔵穴）南東コーナーに位置する。36×35cmの楕円形を呈し、深さ45cmを測る。西側に不整形をなした凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。



第351図 384号住居跡出土遺物（1/4）

第350図 384号住居跡（1/60）

- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロック。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。部分的に炭化材片を含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (5YR3/1)。焼土粒子を多く含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (5YR3/1)。焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや軟質。
- 10層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。

土層図には現れないが、ロームブロックを多く含む層があり、部分的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 覆土中に焼土粒子・炭化材などを多く含み、焼失家屋の可能性はある。

395号住居跡 (第355図)

〔位置〕 130地点、市教委調査67地点。

〔構造〕 年度を違えて調査した結果、住居中央部に空隙部分が生じた。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 690×580cm。(主軸方位) N-40°-E。(壁高) 8~25cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅13~27cm・下幅5~15cm・深さ2~10cmを測り、全周すると思われる。(床面) 部分的に硬化面を残すが、全体に軟弱である。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。80×60cmの楕円形を呈する地床炉で、4cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 南西壁下中央の入口施設と思われるピット意外は後世のものである。(貯蔵穴) 南コーナー近くに位置する。37×21cm・深さ34cmを測る。北東側に幅30cm・高さ4cm前後の凸堤が弧状に構築される。

〔覆土〕 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。貯蔵穴南側の床面上には砂礫混じりの暗赤褐色土が、西コーナー付近には白色粘土の堆積が認められた。

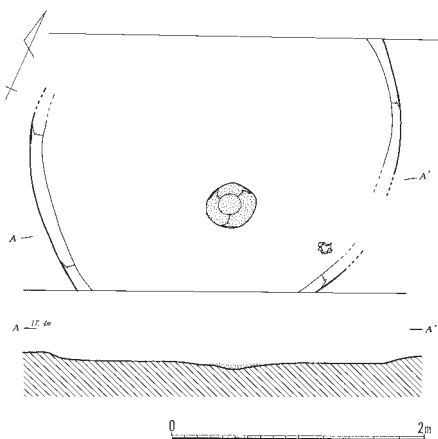
〔遺物〕 東コーナー寄りの床面上から甕形土器が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

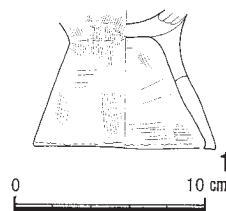
395号住居跡出土遺物 (第356図、第322図16)

壺形土器 (第322図16)

肩部破片。外面には捩りの異なる単節縄文が羽状に施される。境目にはZ字状結節文とS字状結節文が施される。



第352図 385号住居跡 (1/60)



第353図 385号住居跡出土遺物 (1/4)

色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第356図1・2）

1は口頸部の1/2程度が残存する。推定口径16cm。頸部は強くくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

2は全体の1/3程度が残存する。口径16cm・底径20.5cm・器高26cmを測る。体部上位に最大径をもつ球状の体部から立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には、やや左方向から柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面には斜位のハケ目痕が残る。体部内面下半には炭化物が付着する。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・軽石と推測される多量の白色粒子を含む。東コーナー付近床面上から出土した。

410号住居跡（第357図）

〔位置〕 74地点。

〔構造〕 北西側調査区外。17Hに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）55～62cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅19～23cm・下幅3～4cm・深さ4～9cmを測り、東壁の一部で検出された。（床面）全面軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）南コーナーの壁下に位置する。54×50cmの楕円形を呈し、深さ28cmを測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

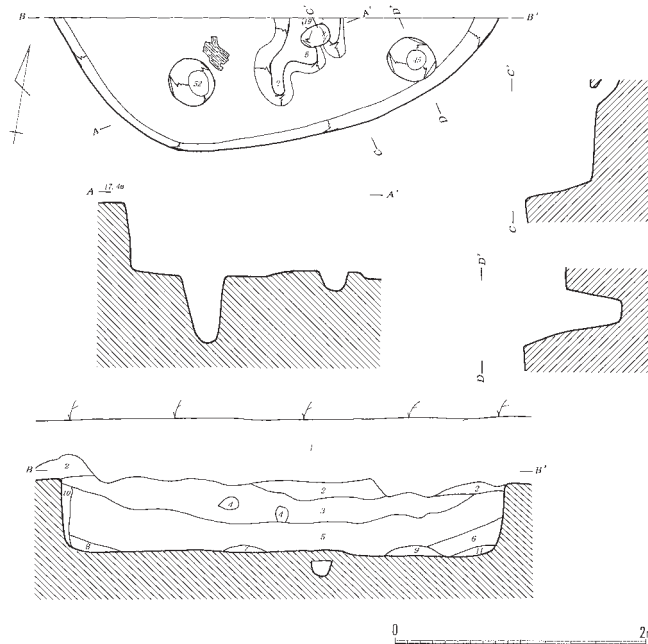
〔遺物〕 貯蔵穴付近から出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

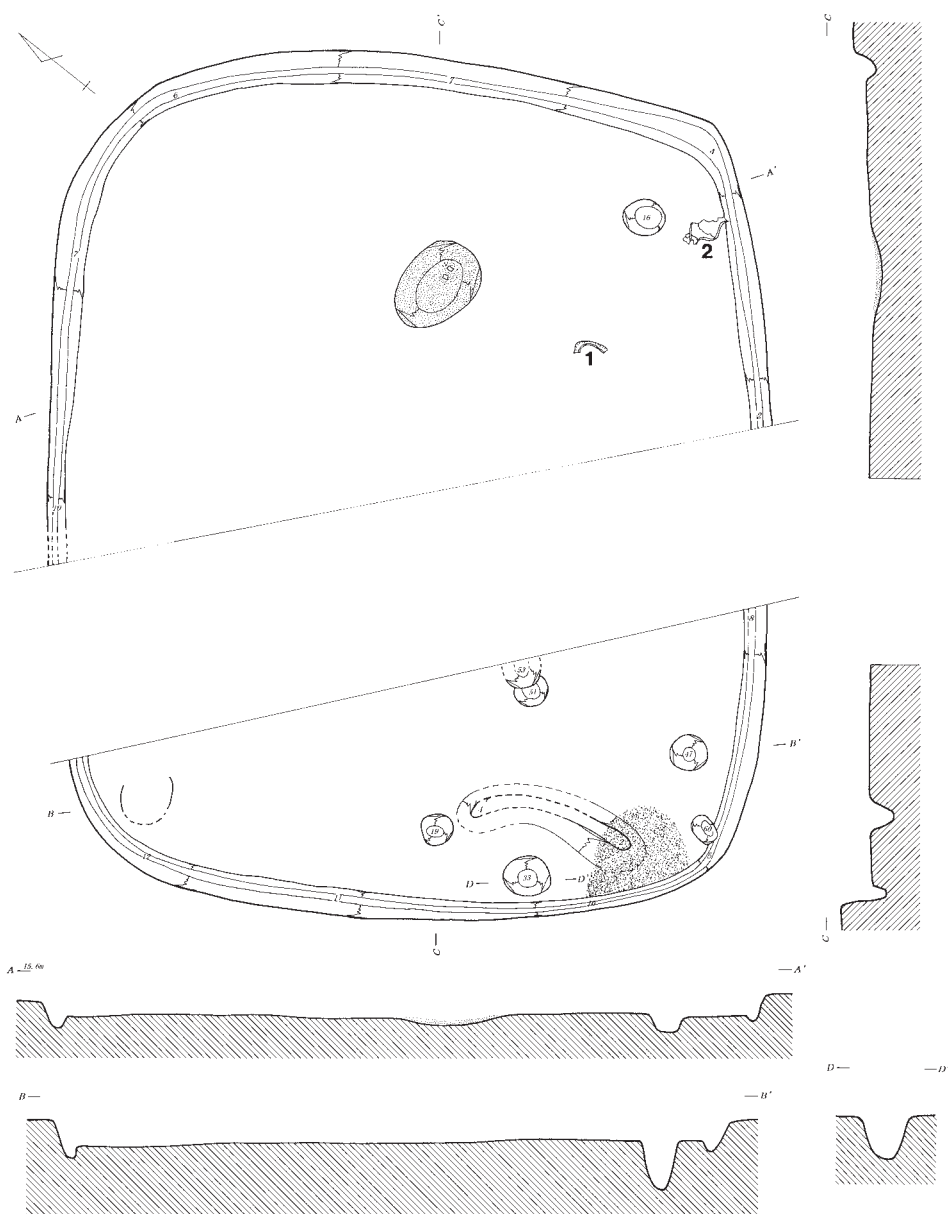
410号住居跡出土遺物（第358図、第367図1～5）

甕形土器（第358図1・2、第367図1～5）

第358図1は甕部の1/2程度が残存する。推定口径15.3cmを測る。頸部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部上半は



第354図 386号住居跡 (1/60)



第355図 395号住居跡 (1/60) 0 2m

外反し、「コ」字状を呈する。内外面共にヘラナデされるが、外面には幅広で粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。南西壁寄り床面上から出土した。

第358図2は台付甕形土器の脚台部1/2程度が残存する。推定裾部径7cm。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には幅広で粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

第367図1は口縁部破片。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

第367図2は口頸部破片。体部は球状を呈し、頸部で強くくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴から出土した。

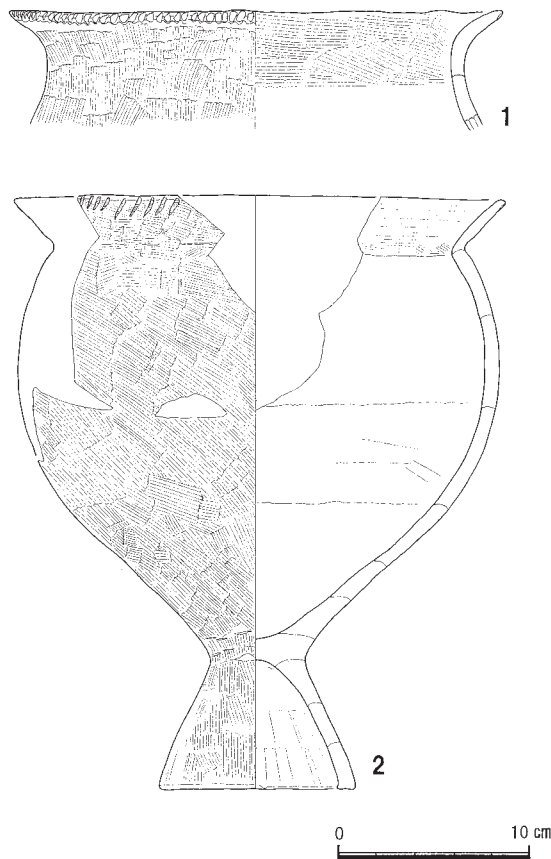
第367図3～5は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は3がにぶい黄褐

色 (10YR5/3)、4 がにぶい褐色 (7.5YR5/3)、5 がにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

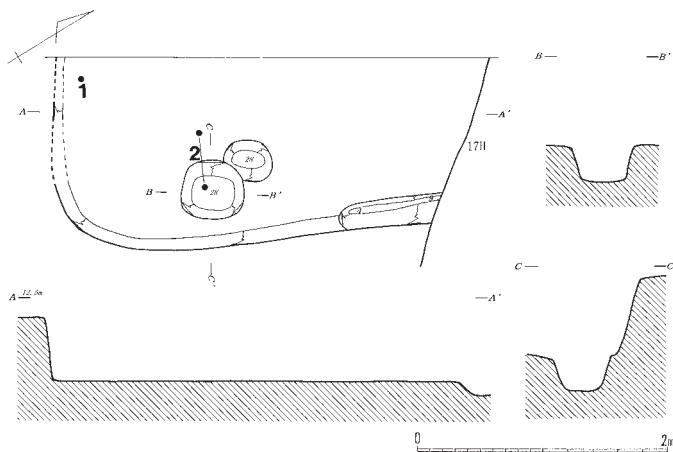
411号住居跡 (第359図)

〔位置〕 74地点。

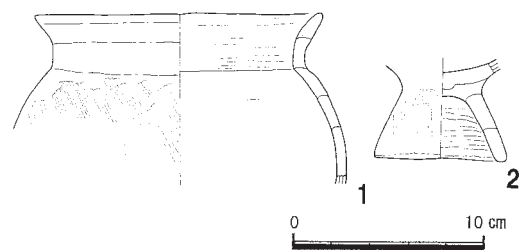
〔構造〕 西側調査区外。17・20Hに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) N-1°-E。(壁高) 40~60cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅12~27cm・下幅4~9cm深さ5~11cmを測る。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。68×54cmを呈する地床炉で、深



第356図 395号住居跡出土遺物 (1/4)



第357図 410号住居跡 (1/60)



第358図 410号住居跡出土遺物 (1/4)

さ10cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 南壁下中央、東に偏って位置する。68×54cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

〔覆土〕

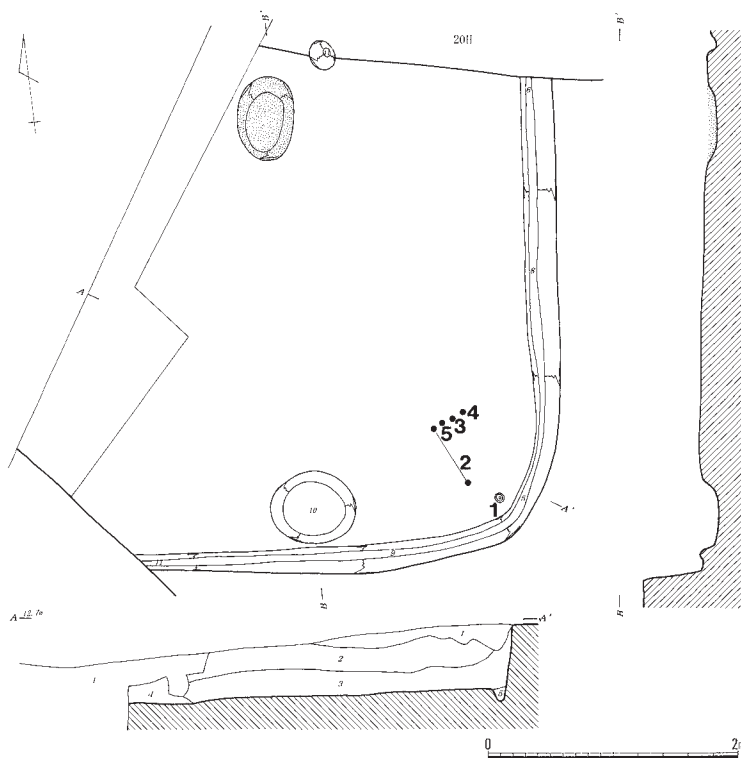
- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 南東コーナー付近床面上から多く出土した。

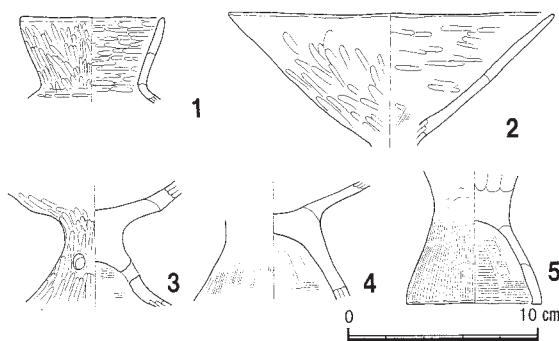
〔時期〕 古墳時代前期。

411号住居跡出土遺物 (第360図、第367図6～9)

埴形土器 (第360図1)



第359図 411号住居跡 (1/60)



第360図 411号住居跡出土遺物 (1/4)

口頸部のみ残存する。口径7.7cmを測る。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面共に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。南東コーナー床面上から出土した。

高坏形土器（第360図2・3）

2は坏部1/4程度が残存する。推定口径17cm。坏部下端は稜をもたず、口縁部にかけて直線的に大きく開く器形である。内外面共に丁寧にヘラミガキが施されるが、斑点状の剥離が顕著である。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には粗砂を含むが、非常にきめ細かく堅緻である。

3は脚台部上半と坏部下半のみが残存する。坏部下端に稜を持ち外反する器形である。脚台部は裾部へかけて中位から軽く屈曲して開く。途中3個の円窓があげられる。外面と坏部内面は非常に丁寧にヘラミガキが施される。脚台部内面はヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

いずれも南東コーナー寄り床面上から出土した。

甕形土器（第360図4・5、第367図6～9）

第360図4は台付甕形土器の接合部のみ残存する。脚台部は裾部へかけて直線的に開く器形であろう。内外面共にヘラナデされるが、脚台部外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南東コーナー付近から出土した。

第360図5は脚台部のみ残存する。裾部径7.3cmを測る。裾部へかけて内湾しながら広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが、外面は縦位、内面は横位のハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南東コーナー付近の出土。

第367図6は叩き調整甕形土器の口頸部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。色調はにぶい黄褐色（10YR7/3）を呈し、胎土には粗砂を含むが堅緻である。覆土中からの出土。

第367図7～9は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は7・8がにぶい赤褐色（5YR5/3）、9が黒褐色（5YR5/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。外面には煤の付着が顕著である。覆土中から出土した。

412号住居跡（第361図）

〔位置〕34Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）不明。（壁溝）検出されなかった。（床面）本住居は99Jの上に位置し、暗褐色土中に築かれていた。そのため僅かに硬化面を残すのみで、全体に軟弱である。（炉）焼土を2ヵ所確認したが、炉とは断定できない。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。硬質。

〔遺物〕覆土中から出土。

〔時期〕古墳時代前期。

412号住居跡出土遺物（第362図、第367図10～13）

壺形土器（第362図1・2、第367図10・13）

第362図1は口径8cm・底径8.6cm・器高31.5cmと大型でほぼ完形。突出した平底の底部から大きく開きながら立ち上がり、張りの強い球状の体部を呈する。頸部は「く」字状に屈曲し、複合口縁は外反する器形である。口縁部内外面共に横方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。体部外面は縦方向にヘラミガキされるが、

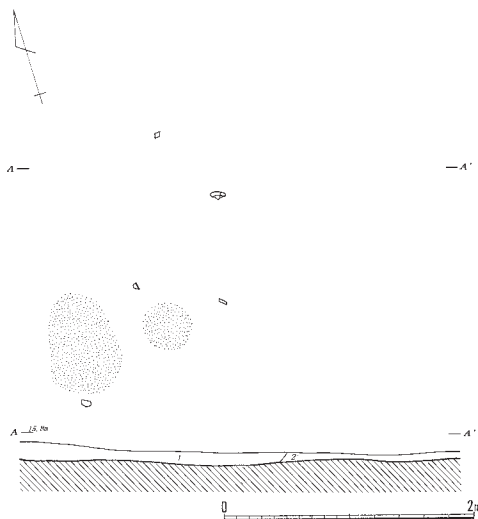
消しきれないハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが、下半にはハケ目痕と工具痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、非常にきめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

第362図2は小形丸底土器ではほぼ完形。口径9.5cm・器高4.6cmを測る。体部は偏球状を呈し、口縁部は短く内湾しながら開く器形である。内外面共にヘラミガキされると推測されるが器面の荒れが激しく不明瞭。色調は橙色（5YR6/8）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中より出土。

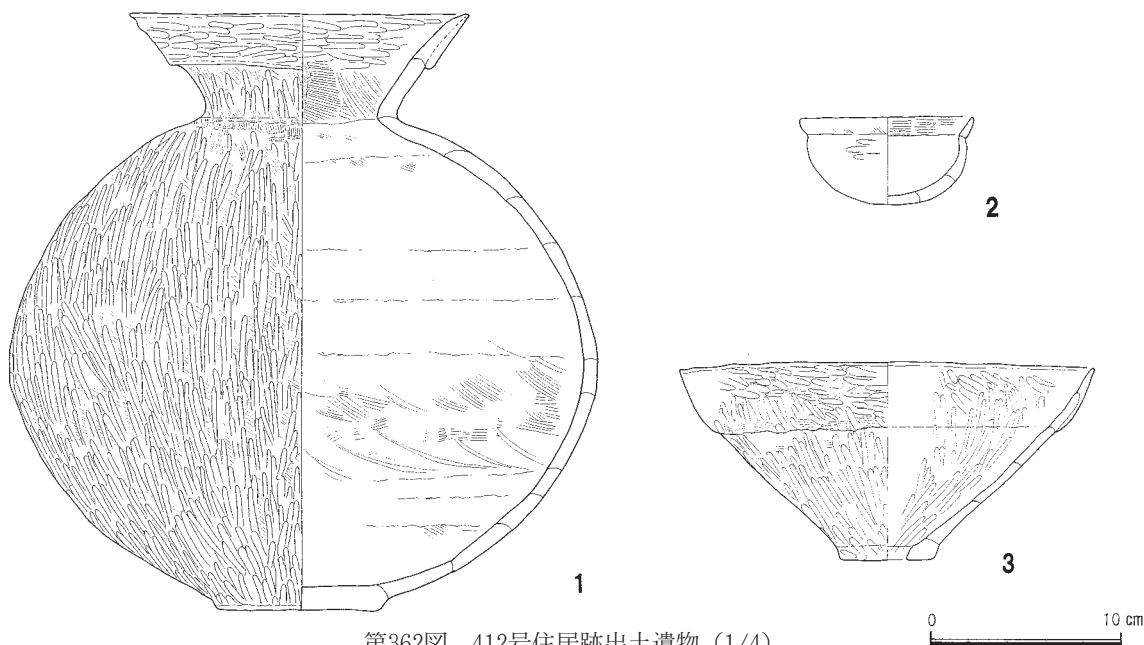
第367図10・13は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。いずれも色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甔形土器（第362図3）

1/3程度が残存する。推定口径22cm・底径5cm・器高13.5cmを測る。複合口縁をもつ播鉢状の土器で、底部に直径2.2cmの孔が開けられている。内外面共にヘラミガキされるが、口縁部外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出



第361図 412号住居跡 (1/60)



第362図 412号住居跡出土遺物 (1/4)

土。

甕形土器（第367図11・12）

口縁部破片で同一個体。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるが不規則なハケ目痕が残る。色調は11がにぶい赤褐色（5YR5/4）、12がにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

413号住居跡（第363図）

〔位置〕 74地点。

〔構造〕（平面形）不明。（規模）不明×408cm。（主軸方位）N-60°-W。（壁高）31~44cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。不明×32cmの地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。1/2以上攪乱で破壊されている。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）東壁下中央からやや北に偏って位置する。44×42cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。周囲には幅23~29cm・高さ1~3cmの弧状の凸堤を構築している。

〔覆土〕攪乱が著しく詳細は不明であるが、部分的に残された覆土は、ローム粒子を多く含むやや硬質の黒褐色土（10YR3/2）である。北東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期~古墳時代前期。

413号住居跡出土遺物（第364図）

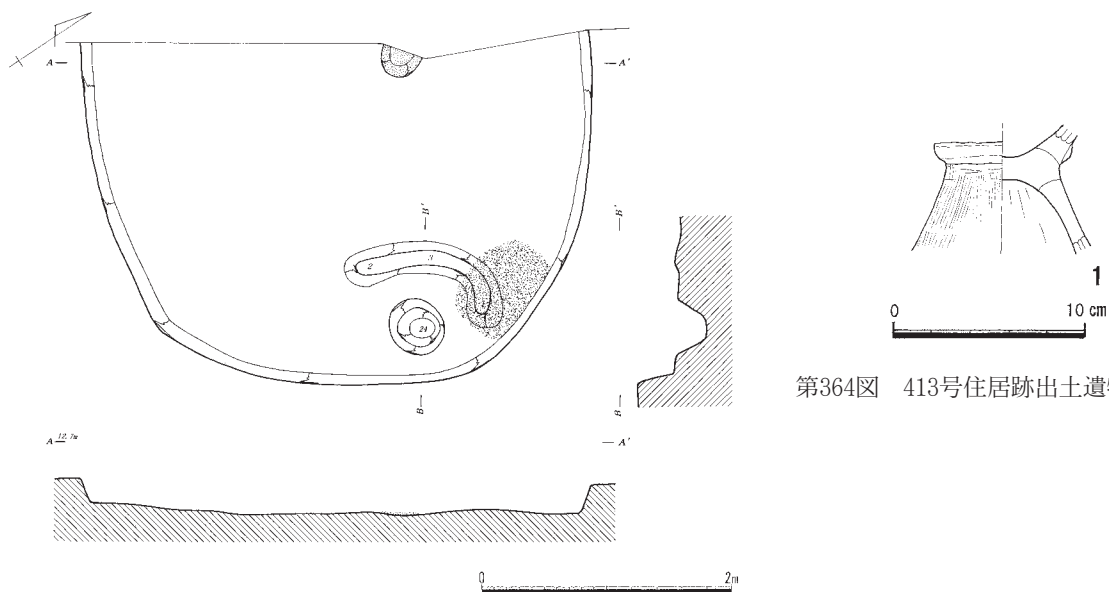
甕形土器（1）

接合部のみ残存する。接合部外面には凸帯が巡る。脚裾部へかけて直線的に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。甕部内面には炭化物が付着する。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

414号住居跡（第365図）

〔位置〕 65Ⅲ地点。

〔構造〕北東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）32~39cmを測り、70°前後の



第363図 413号住居跡（1/60）

第364図 413号住居跡出土遺物（1/4）

角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅14~23cm・下幅4~8cm・深さ2~5cmを測る。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 北コーナーに位置する。55×42cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 9層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 12層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

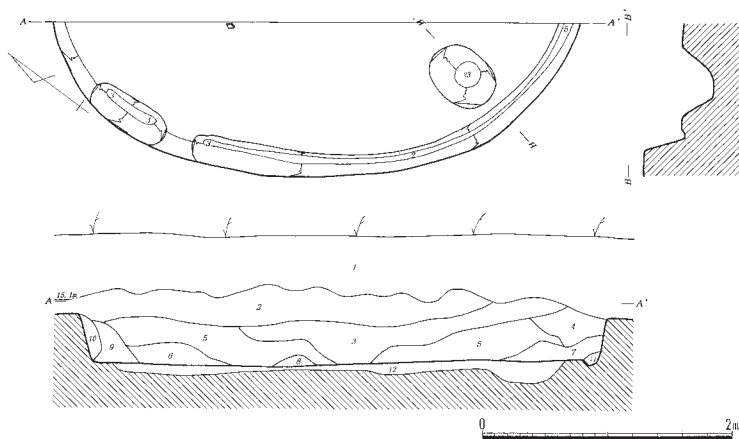
421号住居跡 (第50図)

〔位置〕 10Ⅲ地点。

〔構造〕 南側調査区外。67Yを切る。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 23~53cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅15~25cm・下幅5~10cm・深さ2~12cmを測る。(床面) 住居中央が僅かに硬化している。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。



第365図 414号住居跡 (1/60)

- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (5YR3/1)。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。炭化物を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 暗赤褐色土 (2.5YR3/2)。焼土。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 10層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

421号住居跡出土遺物 (第367図14・15)

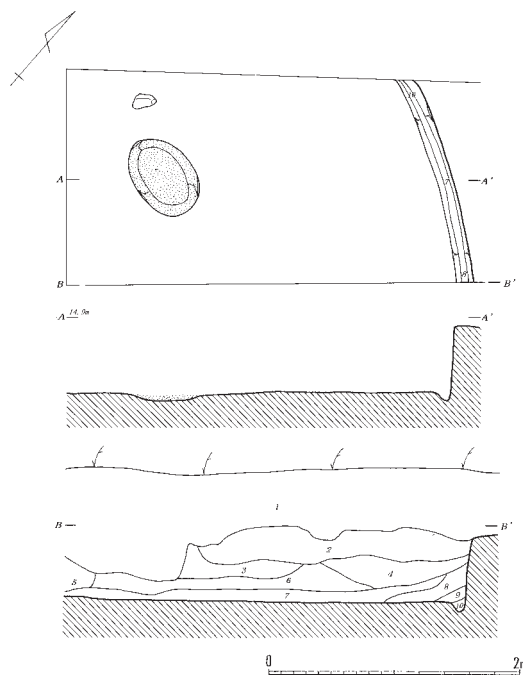
甕形土器 (14・15)

14・15共に体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は14が黒褐色 (7.5YR3/1)、15がにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

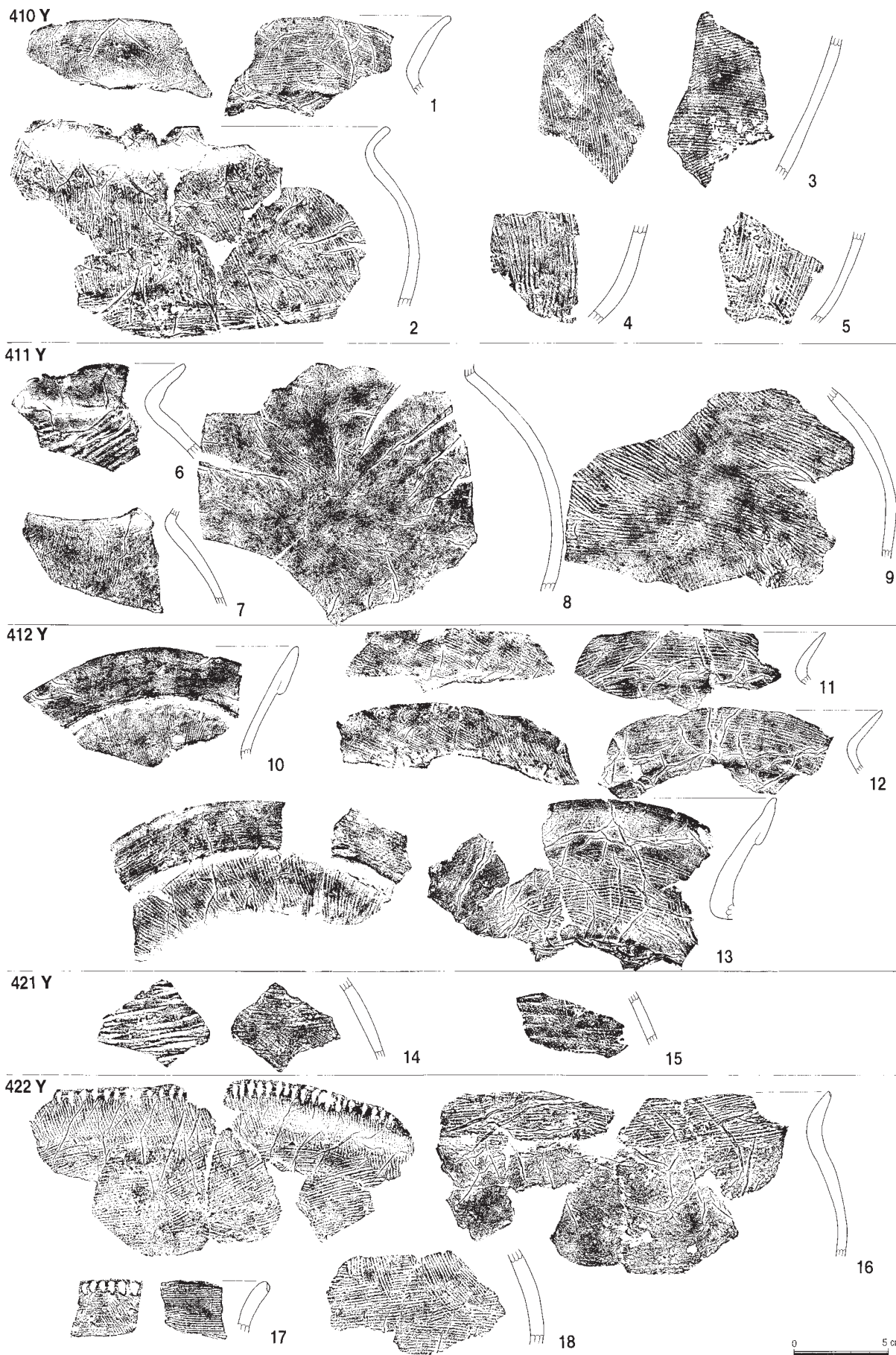
422号住居跡 (第366図)

〔位置〕 64地点。

〔構造〕 東側を除き大部分が調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 51～56cmを測り、90°に近い角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅12～14cm・下幅4～5cm・深さ6～8cmを測る。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。(炉) 68×46cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。



第366図 422号住居跡 (1/60)



第367図 410~412・422号住居跡出土遺物 (1/3)

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

422号住居跡出土遺物 (第367図16～18)

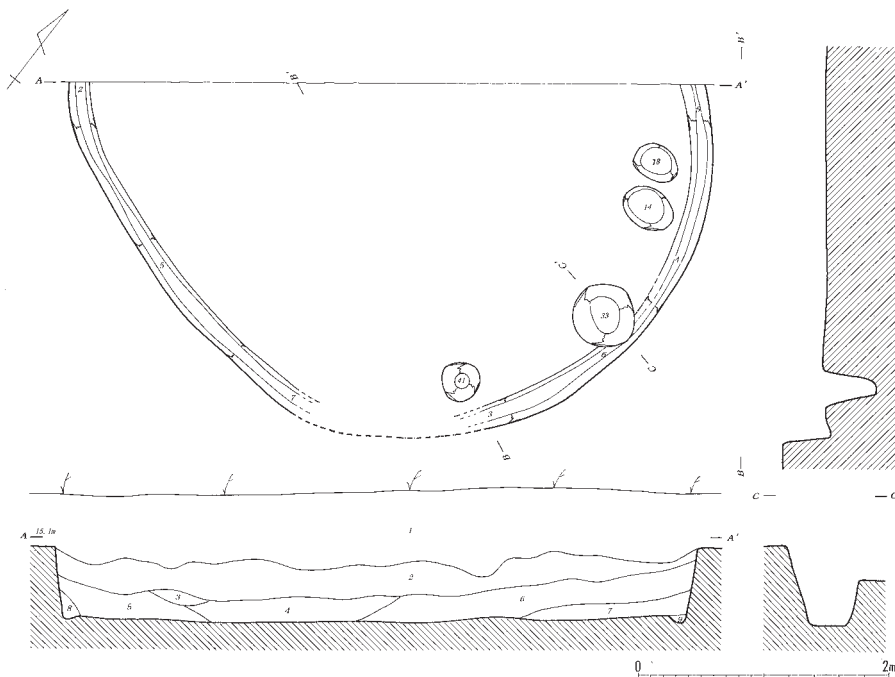
甕形土器 (16～18)

16は口頸部破片、17は口縁部破片、18は体部破片。16・17の口唇部外面には刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は16が灰褐色 (7.5YR4/2)、17が黒褐色 (7.5YR3/1)、18がにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

423号住居跡 (第368図)

〔位置〕 64地点。

〔構造〕 北西側調査区外。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明。(主軸方位) N—67°—Wか。(壁高) 54～56cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅14～21cm・下幅3～7cm・深さ2～7cmを測る。(床面) 部分的に硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 南東壁下中央の1本は入口施設と思われる。他のピットは



第368図 423号住居跡 (1/60)

後世のものである。(貯蔵穴) 南東コーナーの壁下に位置する。53×51cmの楕円形を呈し、深さ34cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (5YR2/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。部分的に焼土ブロックを含む。やや硬質。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 9層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

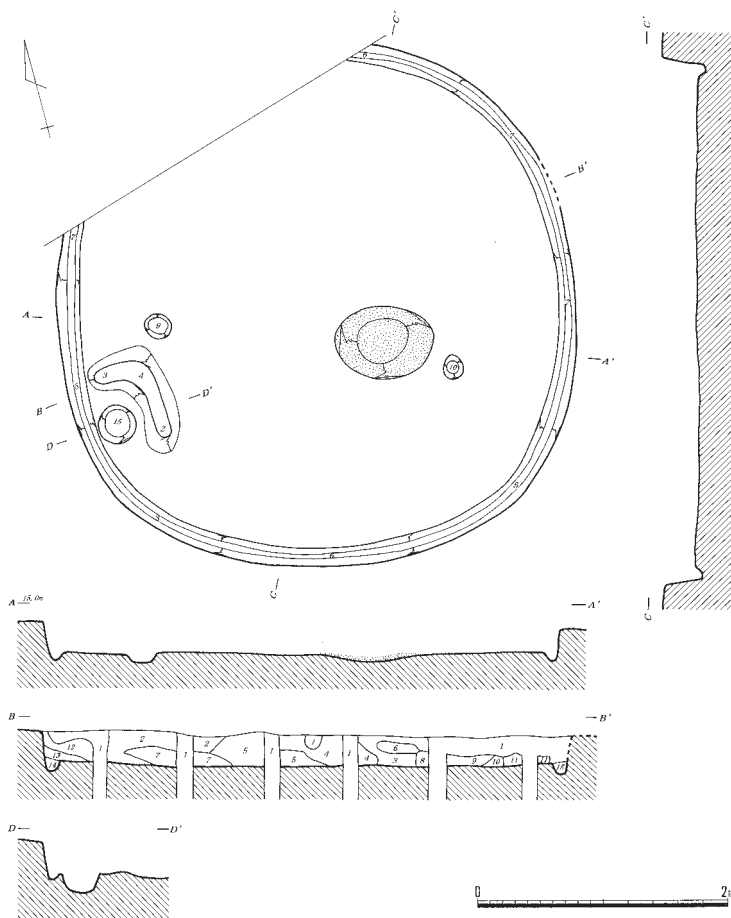
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

424号住居跡 (第369図)

〔位置〕 56Ⅱ地点。

〔構造〕 北側調査区外。(平面形) 略円形。(規模) 径412cm。(主軸方位) N-110°-E。(壁高) 22~26cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅12~18cm・下幅4~6cm・深さ4~8cmを測り全周すると思われる。



第369図 424号住居跡 (1/60)

(床面) 壁際と西側を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。71×58cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 支柱穴は検出されなかった。西壁下に近い1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 西壁中央から南に偏って位置する。径29cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。東側には幅26～29cm・高さ1～4cmの凸堤を弧状に構築している。

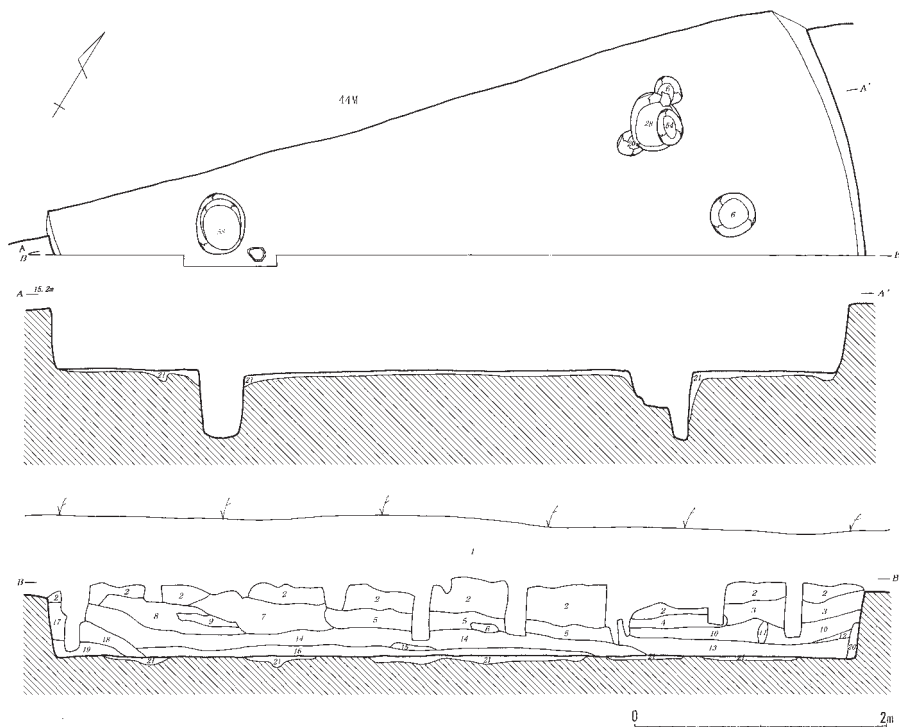
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 3層 褐灰色土 (10YR4/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 10層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロック。硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 13層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 14層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 15層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第370図 425号住居跡 (1/60)

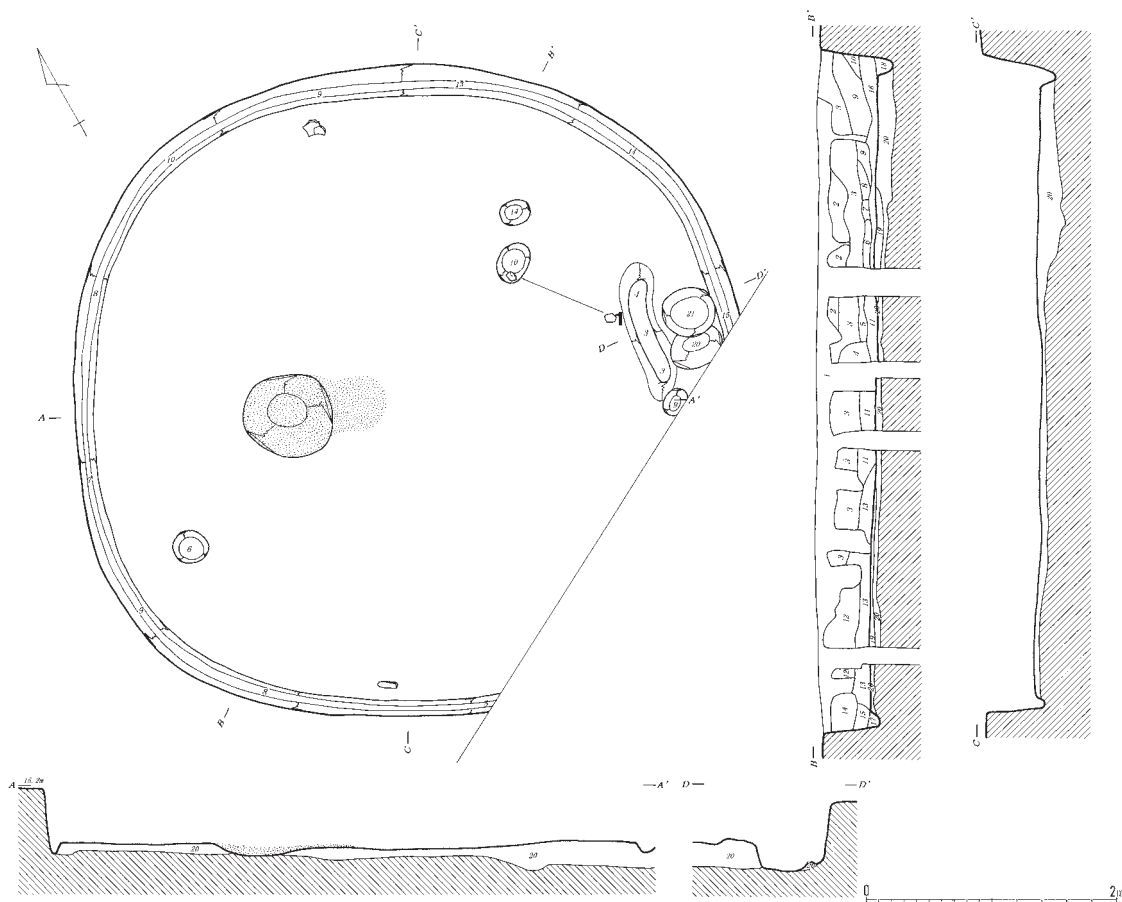
425号住居跡（第370図）

〔位置〕 56Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。44Mに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）52cm前後を測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）深度のあるピット2本が支柱穴か。（貯蔵穴）検出されなかった。

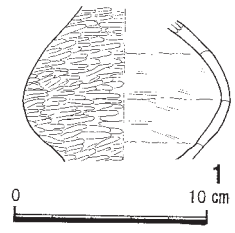
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 5層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 6層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）。ロームブロック。硬質。
- 12層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。硬質。



第371図 425号住居跡（1/60）

- 14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。硬質。
 15層 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)。ロームブロック。硬質。
 16層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
 17層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
 18層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。硬質。
 19層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
 20層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
 21層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。



第372図 426号住居跡出土遺物 (1/4)

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

425号住居跡出土遺物 (第379図)

甕形土器 (1・2)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物の付着が顕著である。いずれも色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡床面上から出土した。

426号住居跡 (第371図)

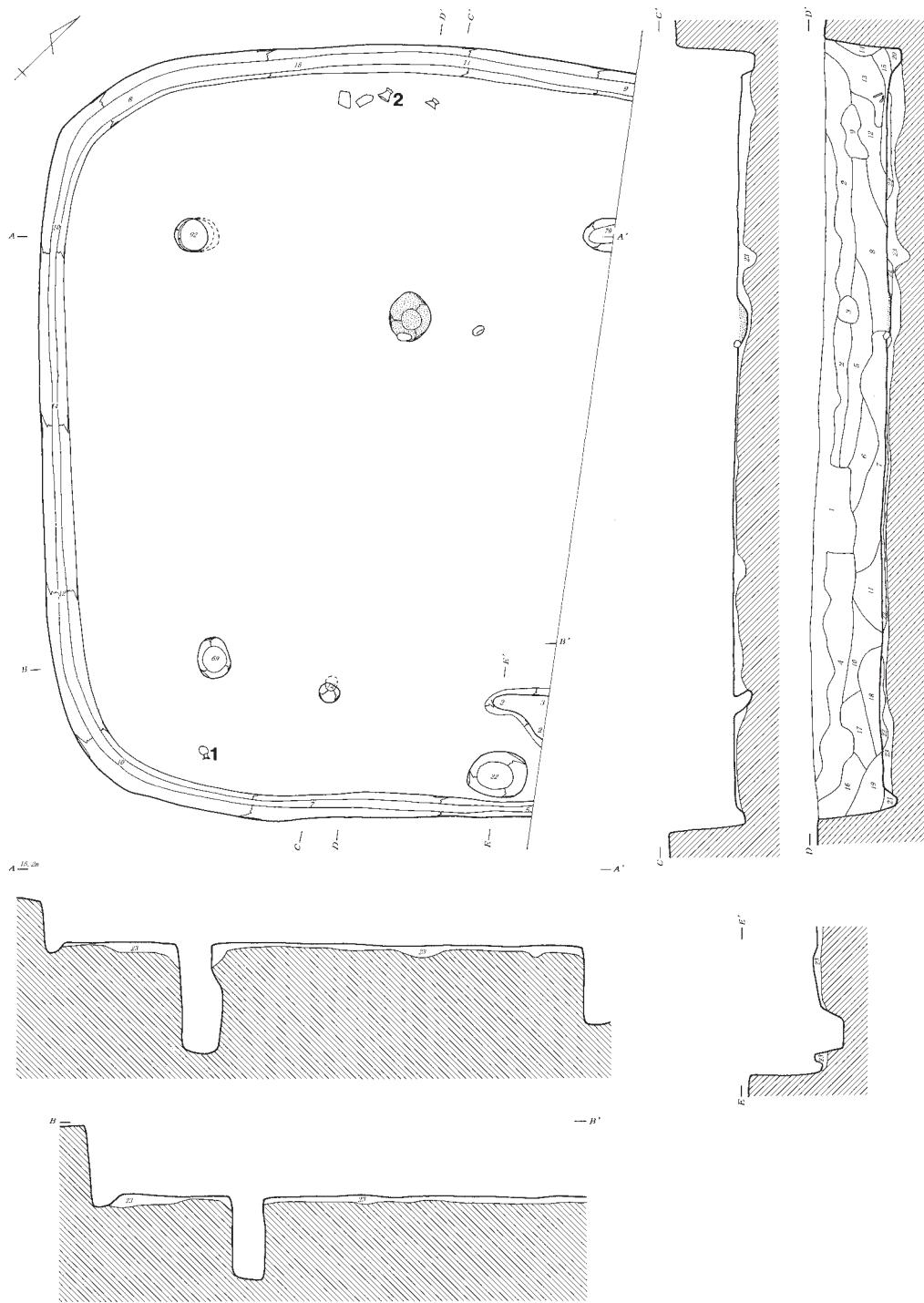
〔位置〕 56Ⅱ地点。

〔構造〕 南東側調査区外。(平面形) 隅丸正方形。(規模) 530×522cm。(主軸方位) N-61°-W。(壁高) 39~46cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅14~21cm・下幅4~8cm・深さ4~15cmを測り全周すると思われる。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。74×65cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。南東側の掘り込み外の被熱は、灰の掻き出しのためであろうか。(柱穴) 凸堤に接した1本は入口施設と思われる。他のピットは後世のものである。(貯蔵穴) 南東壁下中央から僅かに北に偏って位置する。63×44cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。西側に幅23~28cm・高さ2~5cmの直線的な凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
 3層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。
 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
 7層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
 9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。
 10層 黒色土 (10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
 11層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を僅かに含む。硬質。
 12層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
 13層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。
 14層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。

- 15層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
 - 16層 黒褐色土 (2.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや軟質。
 - 17層 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
 - 18層 暗黄灰色土 (2.5Y4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや粘質。
 - 19層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
 - 20層 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。
堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。
- 〔遺物〕 床面上から破片が出土した。



第373図 427号住居跡 (1/60)

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

426号住居跡出土遺物（第372図、第379図3・4）

壺形土器（第372図1）

口縁部を欠損する。底径6cmと小型である。平底の底部からやや下膨れの体部へ至る。外面は丁寧にヘラミガキされるが内面はヘラナデされる。色調は外面が黒褐色（7.5YR3/1）、内面がにぶい褐色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴と住居跡中央からやや東寄りのピット内から出土した。

甕形土器（第379図3・4）

3は体部破片。張りの無い体部から頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は3が灰褐色（7.5YR6/2）、4がにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。南コーナーと北西壁付近床面上から出土した。

4は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

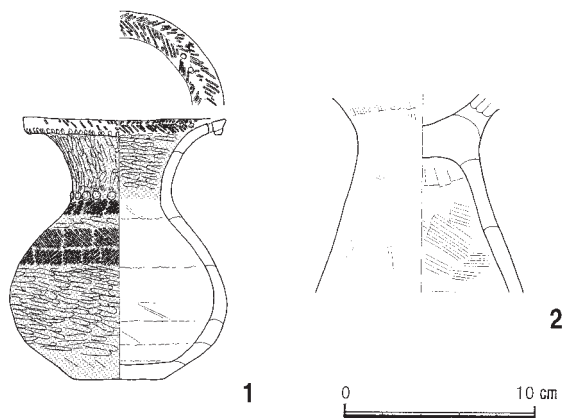
427号住居跡（第373図）

〔位置〕 65地点。

〔構造〕 北東側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×687cm。（主軸方位）N-33°-W。（壁高）57～63cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅21～28cm・下幅6～15cm・深さ5～15を測り全周すると思われる。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。41×35cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。南東側に礫を配石している。（柱穴）3コーナーの3本が主柱穴の一部と思われる。南東壁下中央から北西に偏って位置する1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西壁下中央から北東に偏って位置する。53×41cmの楕円形を呈し、深さ7cmの掘り込みをもつ。北側に幅30cm・高さ3cm前後の凸堤を構築しているが、大部分は調査区外である。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 暗灰黄色土（2.5Y4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
- 7層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 9層 暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 10層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。



第374図 427号住居跡出土遺物（1/4）

- 11層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 12層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 13層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 14層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 15層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 16層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 17層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 18層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 19層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 20層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。粘質。
- 21層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 22層 褐色土 (10YR4/4)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 23層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。
- 堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕北側の床面上に僅かに土器片が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

427号住居跡出土遺物 (第374図、第379図5～7)

壺形土器 (第374図1)

ほぼ完形の小型壺。口径10.6cm・底径4.8cm・器高14cmを測る。口縁部は短い複合口縁。口縁部下端部には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。口縁部内面にはLRの単節縄文が羽状に施され、2孔一対の焼成前穿孔がみられる。頸部はくびれて、口縁部は開く器形である。体部はやや下膨れの球形を呈する。頸部外面には直径5mmの円形浮文が添付され一周する。肩部文様帯は上から順にLRの単節縄文・無文帯・LRの単節縄文を羽状に施す。外面と口縁部内面は縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。内面頸部以下はヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (5YR6/3)、赤彩部はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー付近床面上から出土した。

甕形土器 (第374図2、第379図5～7)

第374図2は脚台部のみ残存する。底径11.5cm。脚裾部へかけて直線的に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面と内面中位にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北西壁際から出土した。

第379図5～7は口頸部破片。6のみ口唇部外面に刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は5が灰褐色 (7.5YR6/2)、6がにぶい褐色 (7.5YR5/3)、7が黒褐色 (7.5YR3/1) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

428号住居跡 (第375図)

〔位置〕34Ⅲ・34Ⅳ地点。

〔構造〕南西側調査区外。2年度に分けて調査したため、住居東側に空隙ができた。461Dに切られる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 30～33cmを測り、83°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 住居中央は電柱の囲いがあったため調査ができなかった。東側は全体に軟弱である。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。不明×69cmの地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。焼土中央に礫を配している。(柱穴) 検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

428号住居跡出土遺物 (第379図8～13)

壺形土器 (8～12)

8は単純口縁部破片、9は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は8が灰褐色 (5YR4/2)、9が褐灰色 (7.5YR6/3) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

10は肩部破片。LRの単節縄文が施され、下端には2条のS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

11は口縁部から体部へかけての破片。頸部は強く屈曲し、複合口縁部は直立気味に立ち上がる器形である。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

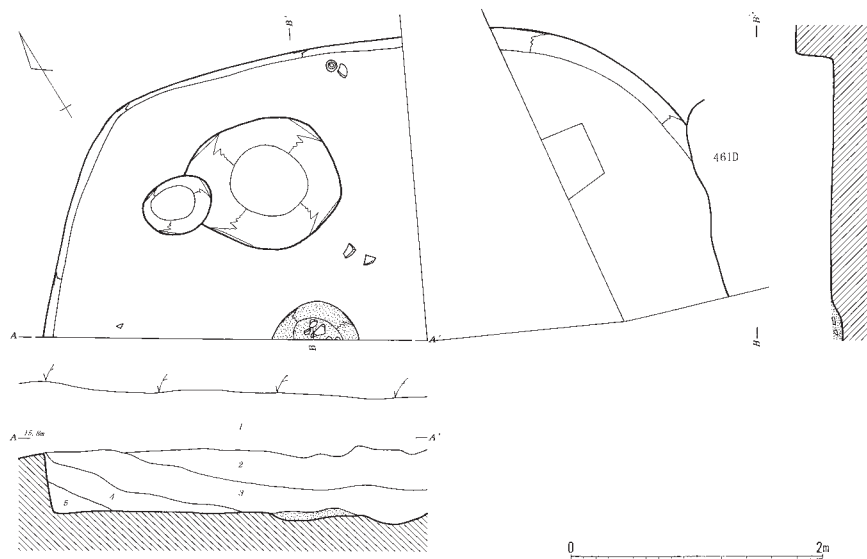
12は体部破片。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残り、一部に赤彩痕がみられる。内面はヘラナデされる。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土。

甕形土器 (13)

台付甕形土器の脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

429号住居跡 (第376図)

〔位置〕 43Ⅱ・43Ⅲ地点。



第375図 428号住居跡 (1/60)

〔構造〕北東側が大きく攪乱されている。(平面形)隅丸長方形。(規模)不明×490cm。(主軸方位)N-55°-E。(壁高)7~23cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅16~18cm・下幅6~8cm・深さ2~4cmを測り、東コーナー部分に検出された。(床面)平坦であるが、全体に軟弱である。(炉)検出されなかった。(柱穴)検出されたピットは後世のものである。(貯蔵穴)南西壁下南に偏って位置する。50×48cmの円形を呈し、深さ35cmを測る。幅27cm前後・高さ1~4cmを測る凸堤を鍵状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 攪乱。
- 2層 盛土。
- 3層 耕作土。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

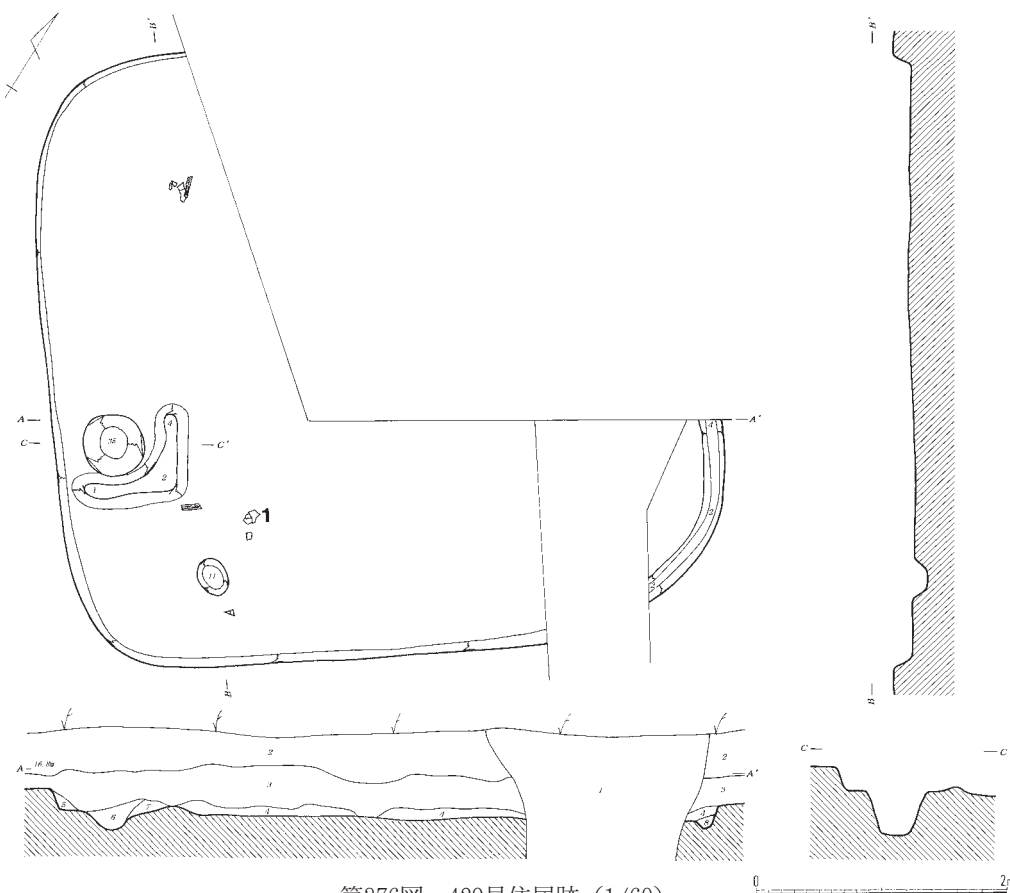
〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期~古墳時代前期。

429号住居跡出土遺物 (第379図14~16)

甕形土器 (14~16)

すべて体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は14が黒褐色 (5YR3/1)、15・16が黒褐色 (10YR3/1) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第376図 429号住居跡 (1/60)

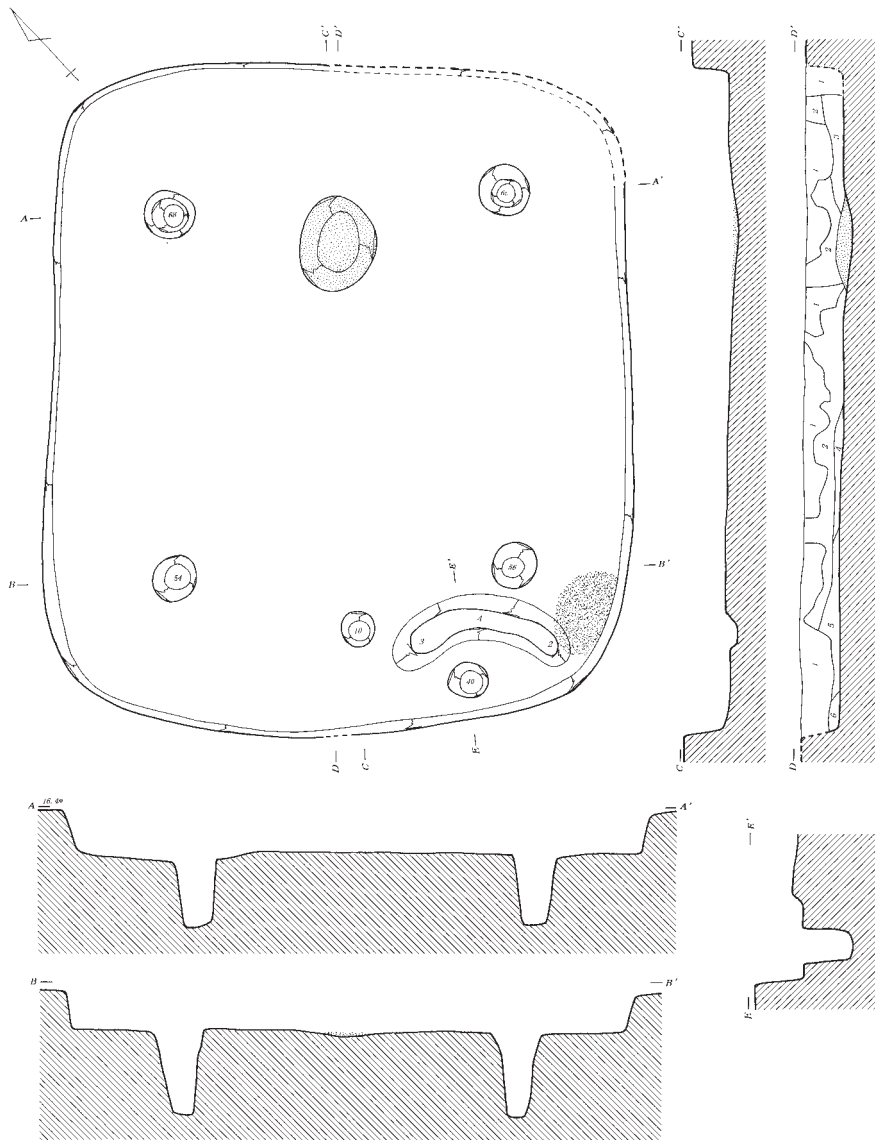
431号住居跡（第377図）

〔位置〕 67 I 地点。

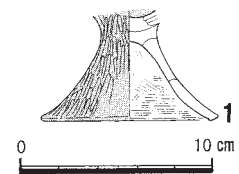
〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）535×460cm。（主軸方位）N-42°-E。（壁高）31~37cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。74×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴である。南壁下中央からやや北に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西壁下中央から北東に偏って位置する。31×29cmの円形を呈し、深さ40cmを測る。幅40cm前後・高さ2~4cmを測る凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。



第377図 431号住居跡（1/60）



第378図 431号住居跡出土遺物（1/4）

5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

6層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

南コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

431号住居跡出土遺物 (第378図、第379図17~21)

壺形土器 (第379図17~20)

17は複合口縁部破片。口縁端部と口縁部外面にはLRの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色 (10YR4/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

18・19も複合口縁部破片。18は口唇部に刻みが巡り、19は内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は18がにぶい黄橙色 (10R7/3)、19がにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

20は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器 (第378図1)

脚台部の1/2程度が残存する。裾部へかけて末広がりに広がる器形である。外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調は外面がにぶい赤褐色 (2.5YR4/4)、内面が褐色 (7.5YR4/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器 (第379図21)

口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

432号住居跡 (第380図)

〔位置〕 67 I 地点。

〔構造〕 45Mに切られる。住居北側は攪乱されている。(平面形) 隅丸方形。(規模) 547×460cm。(主軸方位) N-61°-E。(壁高) 20~34cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺・北側の床面を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。75×57cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 各コーナーの4本が主柱穴である。西コーナーに近い柱穴は攪乱の下から検出された。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南西壁下中央から南東に偏って位置する。不明×47cmの楕円形を呈し、深さ55cmを測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

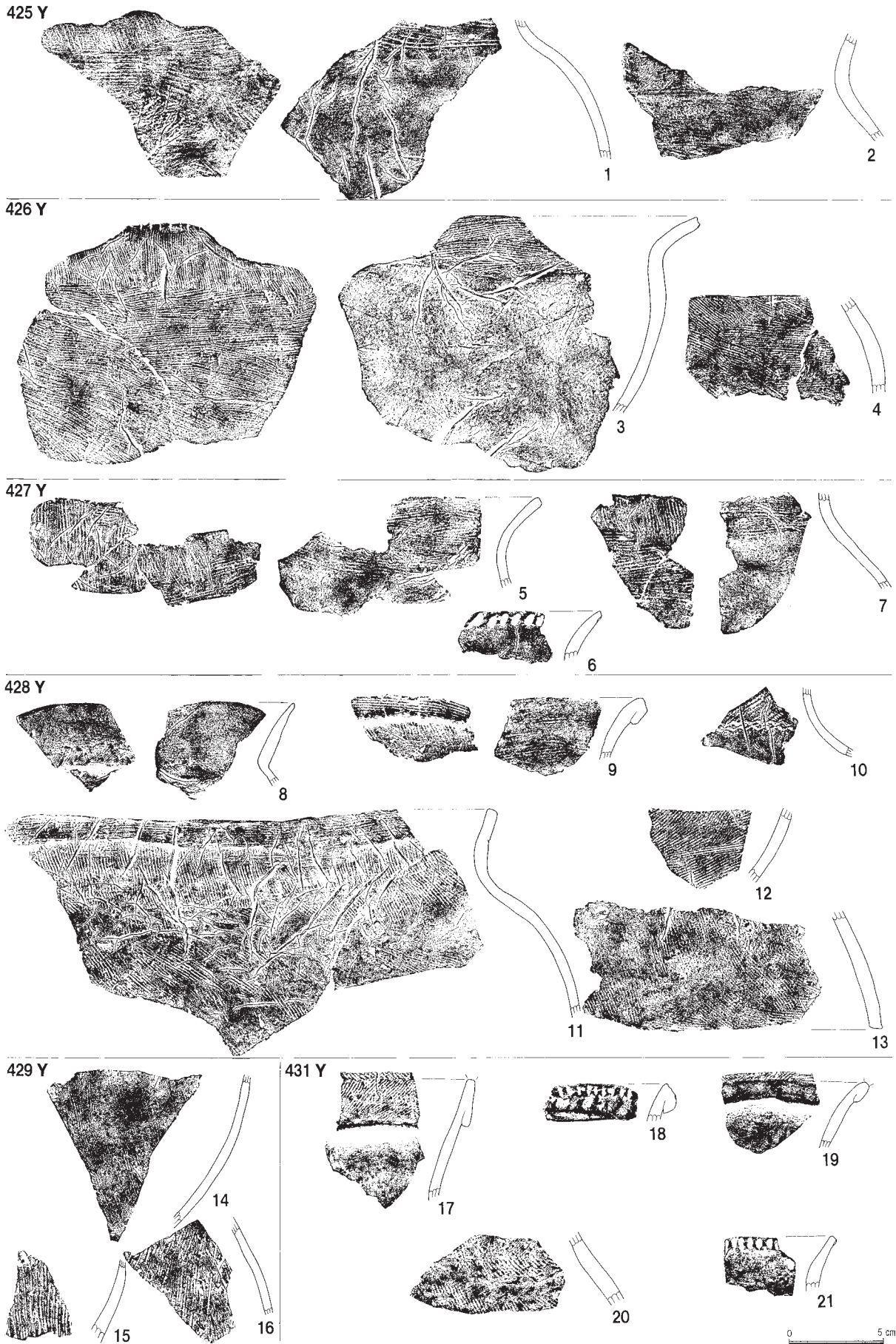
4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロック。硬質。

6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。



第379図 425~429・431号住居跡出土遺物 (1/3)

- 9層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上に土器片と炭化材が点在している。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

432号住居跡出土遺物 (第392図1～9)

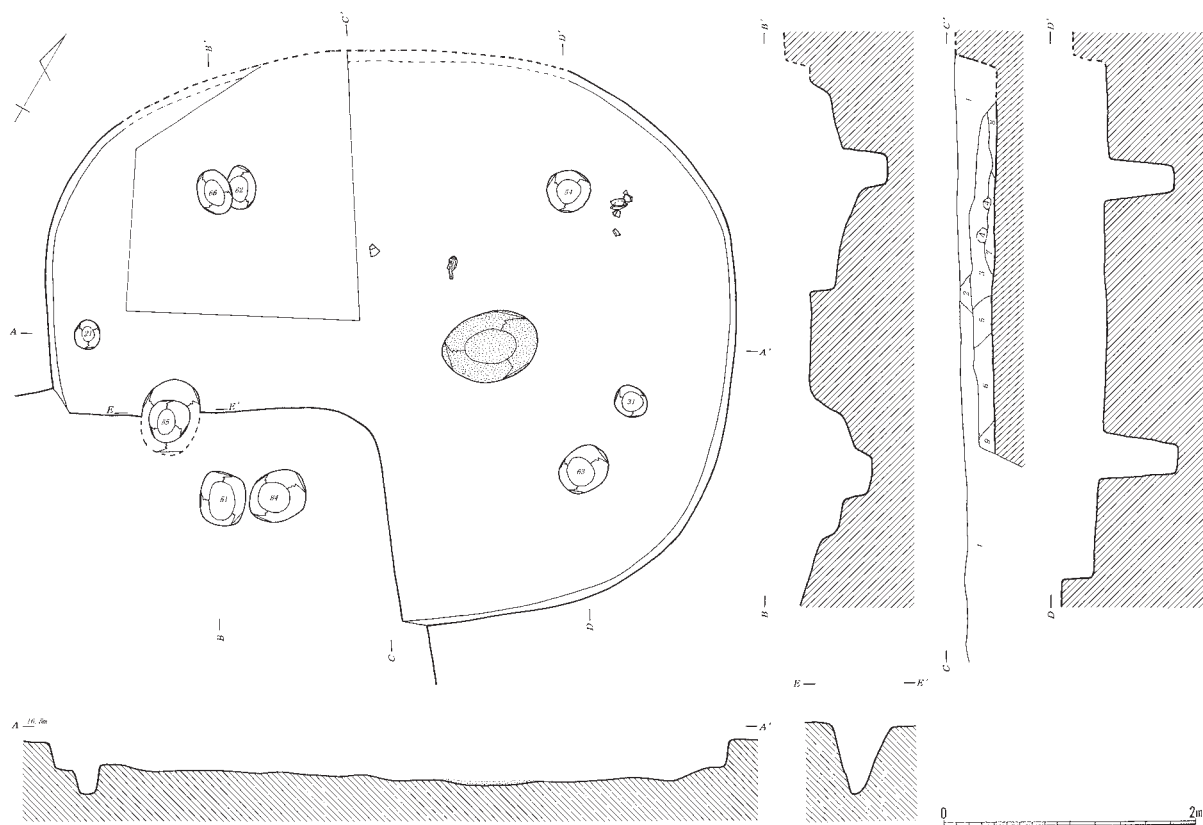
壺形土器 (1～5)

1・2は複合口縁部破片。2の口唇部外面には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は1が灰褐色 (7.5YR4/2)、2がにぶい黄橙色 (10R7/3) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

3～5は同一個体であると思われる肩部破片。外面にはLRの単節縄文の端末結節が施される。円形浮文が数箇所に施される。色調は3が灰褐色 (5YR4/3)、4がにぶい赤褐色 (5YR5/4)、5がにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂、軽石と思われる白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (6～9)

6・7は口縁部破片。口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は6が黒褐色 (7.5YR3/2)、7が灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。



第380図 432号住居跡 (1/60)

8・9は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

433号住居跡(第381図)

〔位置〕67I地点。

〔構造〕463Yを切る。(平面形)不整楕円形。(規模)不明×455cm。(主軸方位)N-65°-E。(壁高)11~13cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅8~18cm・下幅3~6cm・深さ3~10cmを測る。(床面)攪乱が著しいが壁際と炉の周辺を除き僅かに硬化面を認める。(炉)住居中央から北東に偏って位置する。69×54cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。炉跡南側の掘り込み外の被熱は灰の掻き出しのためであろうか。(柱穴)北及び東・南コーナーの3本が支柱穴の一部か。(貯蔵穴)北コーナーに位置する。径37cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。北東側に幅33cm前後・高さ2~3cmの凸堤が弧状に構築されている。

〔覆土〕確認面から浅いことと、耕作による攪乱が著しいため、詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子・ロームブロックを含むやや硬質の黒褐色土(10YR3/1)である。

〔遺物〕覆土中から僅かに出土した。

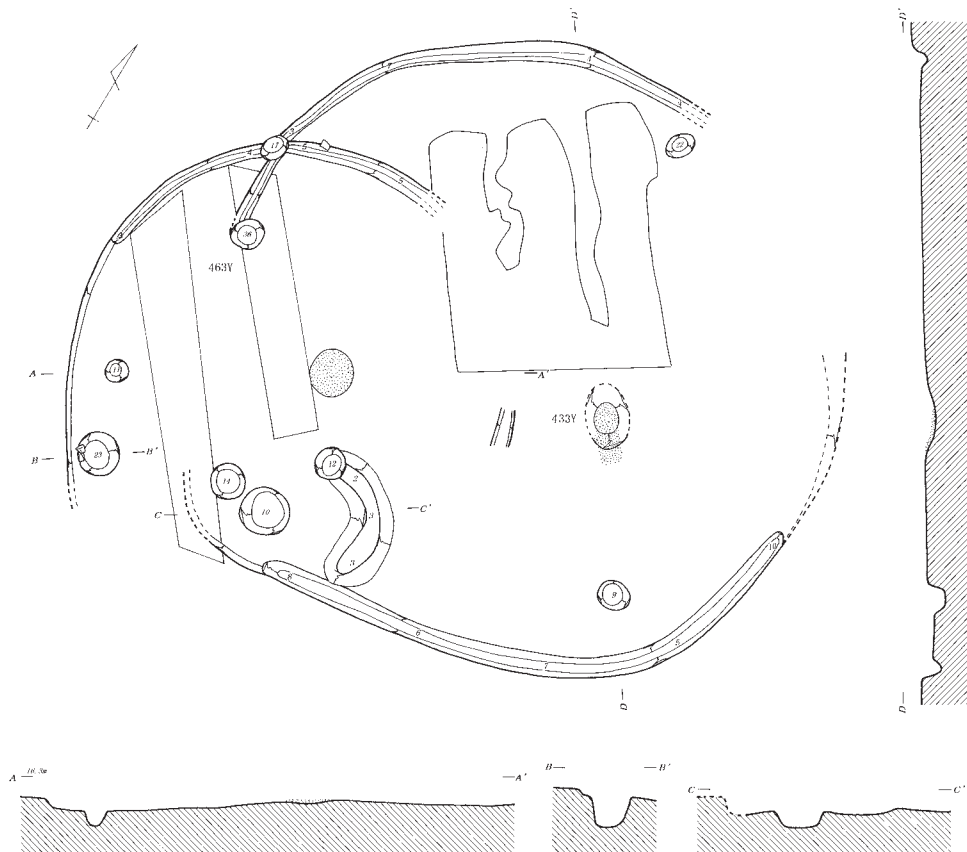
〔時期〕弥生時代後期~古墳時代前期。

433号住居跡出土遺物(第392図10、第539図13)

甕形土器(第392図10)

口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

鉄鏃(第539図13)



第381図 433・463号住居跡(1/60)

短頸片平鑄造長三角形式の鉄鏃である。鏃身部先端と頸部下端を欠損する。鏃身部は錆により膨張し、内部が空洞化している。重量は7.6gである。覆土中からの出土。

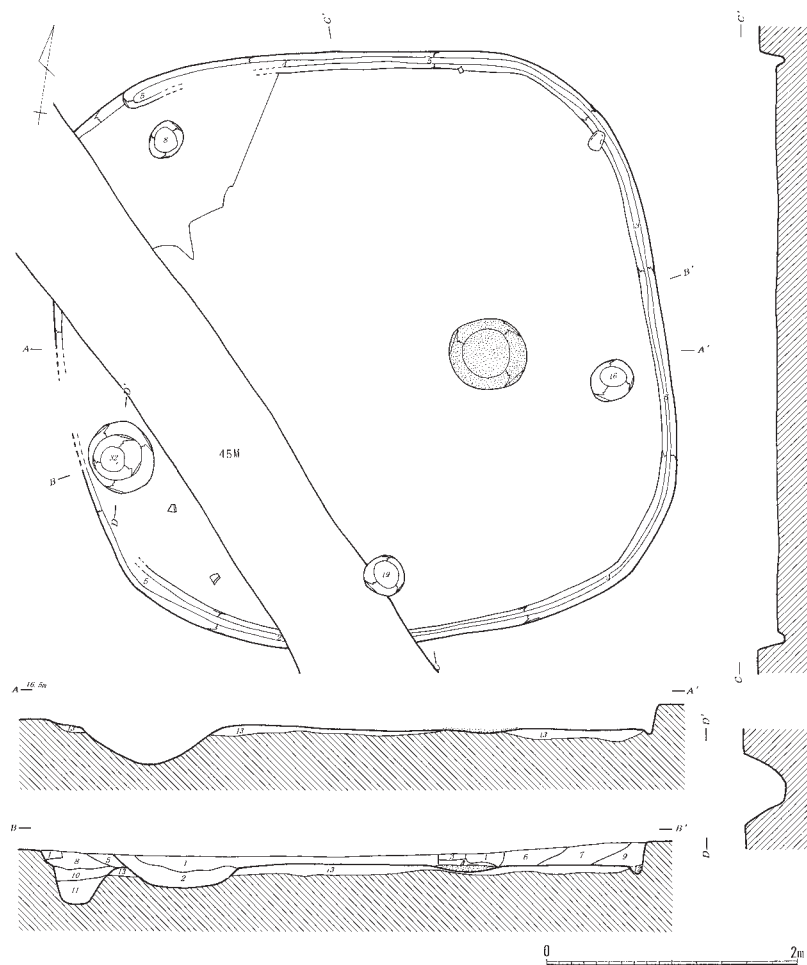
435号住居跡（第382図）

〔位置〕 67 I 地点。

〔構造〕 45Mに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）483×466cm。（主軸方位）N-78°-W。（壁高）18~25cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅9~18cm・下幅3~8cm・深さ2~6cmを測る。南壁は攪乱のため不明である。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。径55cmの円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）西壁下中央から南に偏って位置する。60×50cmの楕円形を呈し、深さ32cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 45号溝跡覆土。
- 3層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ロームブロックを含む。焼土粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。



第382図 435号住居跡（1/60）

- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
 9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
 10層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
 11層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
 12層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
 13層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

437号住居跡 (第383図)

〔位置〕 67 I 地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 不明×450cm。(主軸方位) N-62°-E。(壁高) 35～45cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅9～18cm・下幅2～5cm・深さ2～4cmを測り、西壁側に検出された。(床面) 南西側壁際を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央からやや北東に偏って位置する。68×56cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。南西側に礫を配している。(柱穴) 各コーナーの4本が支柱穴である。南西側壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南西壁下中央から南東に偏って位置する。59×54cmの楕円形を呈し、深さ44cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 2層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。
 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・炭化材片を僅かに含む。やや硬質。
 9層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材片を含む。やや硬質。
 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
 12層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。
 13層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
 14層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 床面上と覆土中に土器片と炭化材を出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

〔所見〕 覆土中に焼土粒子・炭化材などを多く含み、焼失家屋の可能性はある。

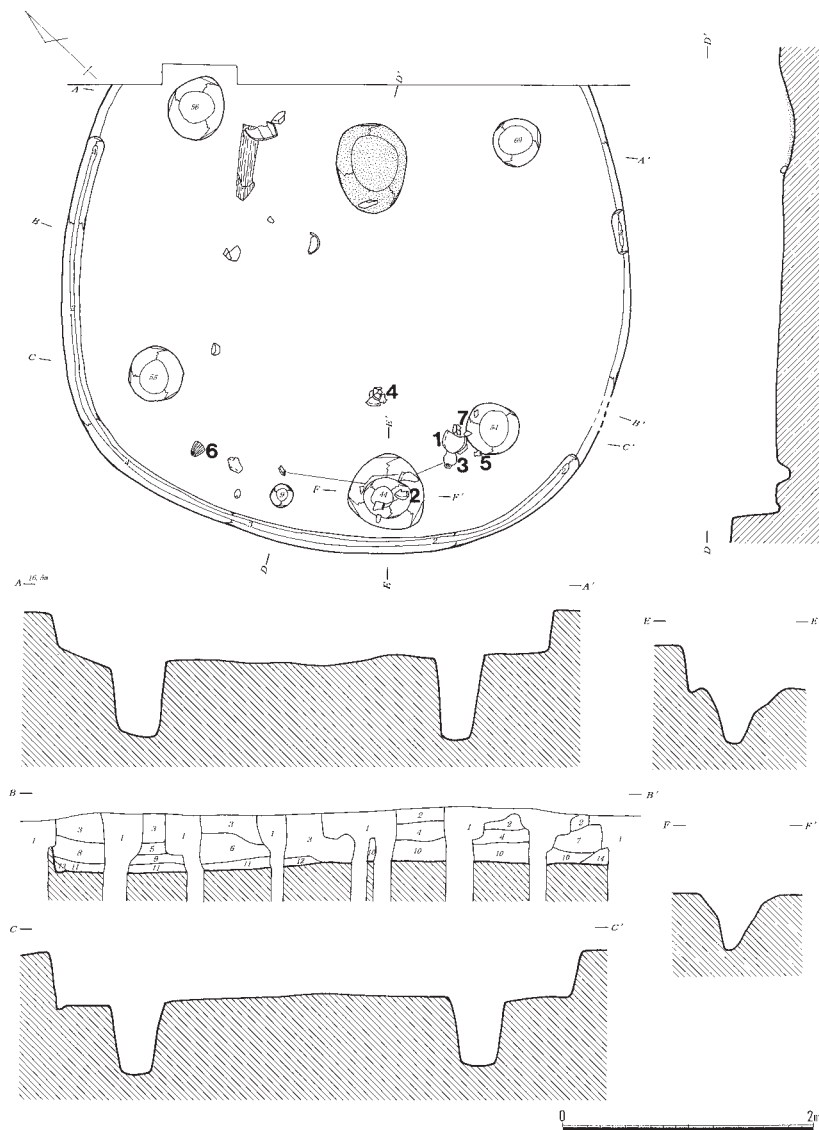
437号住居跡出土遺物 (第384図、第392図11～19、第539図12)

壺形土器 (第384図1、第392図11～15)

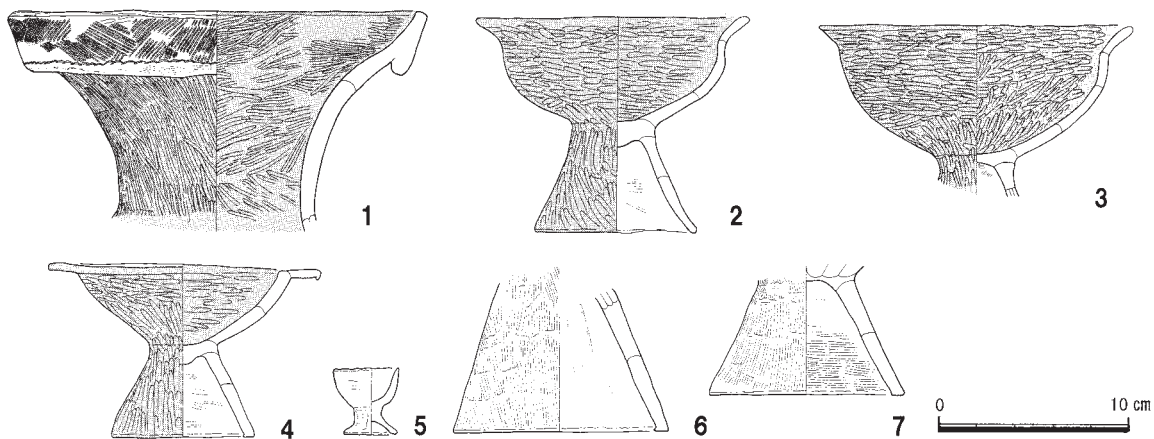
第384図1は口縁部のみ残存する。口径21.2cmを測る。複合口縁部外面には部分的にLRの単節縄文が羽状に施され、下端にはS字状結節文がみられる。縄文帯内部には円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤

彩される。色調は（暗赤色10R3/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。貯蔵穴から出土した。

第392図11・12は複合口縁部破片。11は内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。12は口縁部外面にLRの単節縄文が施され、縄文帯内部には円形赤彩文が施される。内面はヘラミガキされ赤彩される。



第383図 437号住居跡 (1/60)



第384図 437号住居跡出土遺物 (1/4)

色調は11がにぶい褐色、(7.5YR5/4)、12が(7.5YR6/4)を呈し、いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

第392図13～15は肩部破片。13の外面にはR Lの単節縄文が羽状に施され、境目にはS字状結節文が施される。縄文帯内部には直径約1cmの円形赤彩文がみられる。14の外面にはR Lの単節縄文が施される。15の外面にはL Rの単節縄文の端末結節が施される。いずれも内面はヘラナデされる。色調は13がにぶい赤褐色(5YR5/3)、14・15が灰褐色(5YR4/2)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

高坏形土器(第384図2～4)

2は坏部1/2程度を欠損する。口径14.5cm・底径8.6cm・器高11.5cmを測る。体部は塊状を呈し、頸部は屈曲して口縁部は外方に開き、脚台部は直線的に開く器形である。坏部内外面と脚台部外面は丁寧にヘラミガキされ赤彩される。脚台部内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)、赤彩部は赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。南コーナー寄り床面上から伏せた状態で出土した。

3は坏部のみ残存する。口径16.7cmを測る。体部は塊状を呈し、頸部は屈曲して口縁部は外方向へ開く器形である。坏部内外面共に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。脚部外面は丁寧にヘラミガキされ赤彩されるが、内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。貯蔵穴周囲の床面上から散在した状態で出土した。

4は口縁部の1/2程度を欠損する。口径14.4cm・底径7.5cm・器高9.3cmを測る。体部は塊状を呈し、口縁部は屈曲して水平に広がり、脚台部は直線的に開く器形である。口縁部内外面共にヨコナデ、坏部内外面共にヘラミガキされる。脚台部外面は縦方向にヘラミガキされ、内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。坏部内外面と脚部外面は赤彩される。色調は浅黄橙色(7.5YR8/4)、赤彩部は赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。貯蔵穴の北東側床面上から出土した。

甕形土器(第384図6・7、第392図16～19)

第384図6は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径11.5cmを測る。裾部へかけて内湾しながら開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は橙色(7.5YR7/6)を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。西コーナー床面上から出土した。

7は台付甕形土器の脚台部。裾部径10.3cm。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

第392図16・17は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は16がにぶい褐色(5YR5/3)、17が黒褐色(5YR3/1)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土。

18・19は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は18がにぶい褐色(7.5YR6/3)、19が黒褐色(5YR3/1)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

ミニチュア土器(第384図5)

手づくねでつくられている。完形。ワイングラス形の土器。口径3.4mm・裾部径2.8mm・高さ3.5mmを測る。坏部は塊状を呈し、脚台部はゆるやかに広がる器形である。内外面共にナデられ、脚台部には絞り目がみられる。色調は橙色(7.5YR6/6)を呈し、胎土には粗砂・白色粒子を含む。南コーナー寄りのピット脇から出土した。

銅鏃(第539図12)

短頸鑄造長三角形式の銅鏃である。鏃身部先端と頸部下端を欠損する。重量は3.5g。覆土中から出土した。

438号住居跡（第385図）

〔位置〕 67 I 地点。

〔構造〕 南西側調査区外。45Mに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）35～38cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅9～20cm・下幅3～7cm・深さ4～9cmを測る。（床面）全体に硬化している。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 45号溝跡覆土。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 7層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 住居壁際の床面に土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

438号住居跡出土遺物（第386図、第392図20・21）

壺形土器（第386図1、第438図20・21）

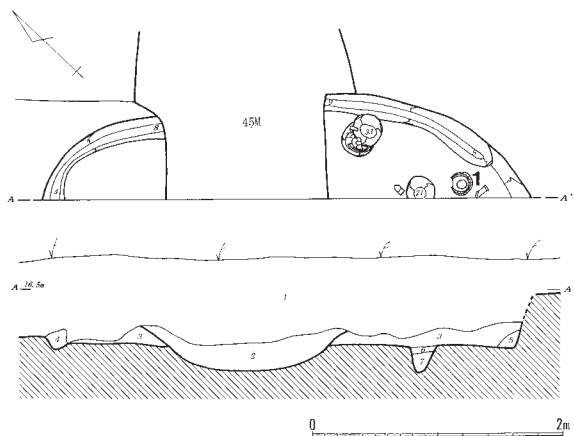
第386図1は口縁部のみ残存する。口径8cm。口縁部は短い複合口縁を呈する。口縁端部にはRLの単節縄文が横方向に施される。口縁部内面にはRLの単節縄文が縦回転に2段、横回転が1段、3段になるように施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）、赤彩部は赤褐色（2.5YR4/5）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡東寄り壁際床面上から出土した。

第392図20は単純口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁付近のピット内から出土した。

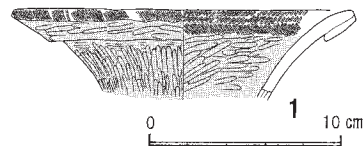
第392図21は肩部破片。LRの単節縄文を羽状に施し、境目にはヘラミガキされ赤彩された無文帯がある。色調は赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡南東よりピット脇から出土した。

440号住居跡（第387図）

〔位置〕 43 III 地点。



第385図 438号住居跡（1/60）

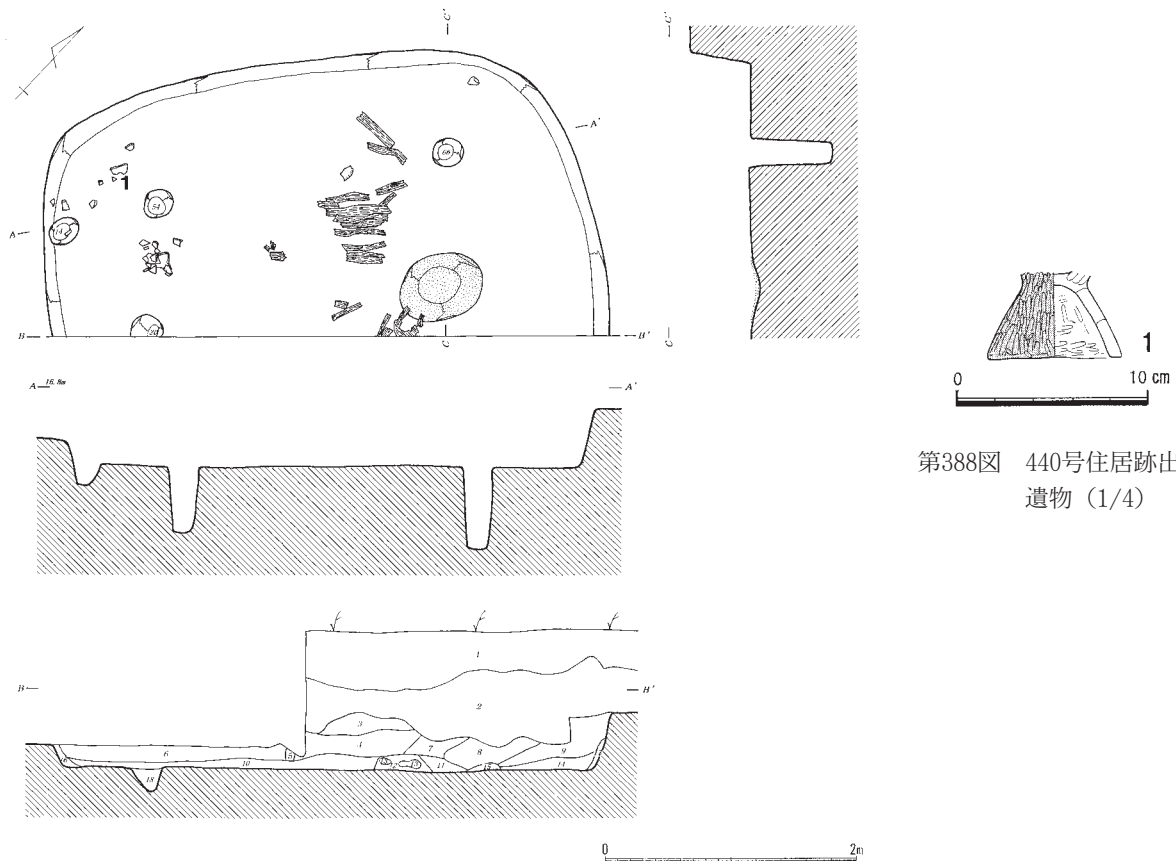


第386図 438号住居跡出土遺物（1/4）

〔構造〕 南西側調査区外。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×440cm。(主軸方位) N-39°-E。(壁高) 47~50cmを測り、65°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。69×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 北・西コーナーの2本が主柱穴の一部と思われる。南西壁下中央からやや北東に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロック。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを多く含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子を含む。硬質。
- 11層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を多く含む。やや軟質。
- 12層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム小ブロックを含む。炭化材片を多く含む。やや軟質。



第388図 440号住居跡出土遺物 (1/4)

第387図 440号住居跡 (1/60)

13層 炭化材。

14層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

15層 黄灰色土 (2.5Y4/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。

16層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

17層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。

18層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上に土器片と炭化材が出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

〔所見〕床面土に炭化材が散布するなど、焼失家屋の可能性が大きい。

440号住居跡出土遺物 (第388図1、第392図22~26)

壺形土器 (第392図22)

体部破片。外面はヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器 (第388図1)

脚台部のみ残存する。裾部径7.2cm。外面はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調は外面が暗赤褐色 (2.5YR3/6)、内面が明赤褐色 (2.5YR4/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。西コーナー床面上から出土した。

甕形土器 (第392図23~26)

23は口頸部破片。口唇部外面には右方向から板状の工具により押擦された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡西寄り床面上と北西寄り床面上から離れた状態で出土した。

24・25は同一個体の口縁部破片。口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。共に色調は黒褐色 (7.5YR3/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。西コーナー寄り床面上から出土した。

26は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。西コーナー付近床面上から出土した。

441号住居跡 (第389図)

〔位置〕43Ⅲ地点。

〔構造〕北側の一部を除き調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 22~28cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅14~20cm・下幅4~9cm・深さ5~7cmを測る。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。

5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

8層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

441号住居跡出土遺物 (第392図27～31)

壺形土器 (27・28)

27は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が羽状に施される。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

28は頸部破片。外面下半にはLRの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

いずれも覆土中からの出土。

甕形土器 (29～31)

29～31は体部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調は29が灰褐色 (7.5YR5/2)、30がにぶい赤褐色 (5YR5/3)、31が褐灰色 (7.5YR4/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。29は床面上、他は覆土中からの出土。

442号住居跡 (第390図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 274Yに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 556×505cm。(主軸方位) N-32°-W。(壁高) 27～33cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅9～18cm・下幅3～6cm・深さ1～3cmを測り、部分的に途切れるがほぼ全周する。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。97×71cmの楕円形を呈する粘土火皿で、掘り込み内側の南側に厚さ4cmを測る粘土を検出する。(柱穴) 各コーナーの4本が主柱穴である。南東壁下中央から僅かに北西に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東壁下中央から東に偏って位置する。径44cmの円形を呈し、深さ17cmを測る。幅8cm前後・高さ2～3cmの凸堤を構築している。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

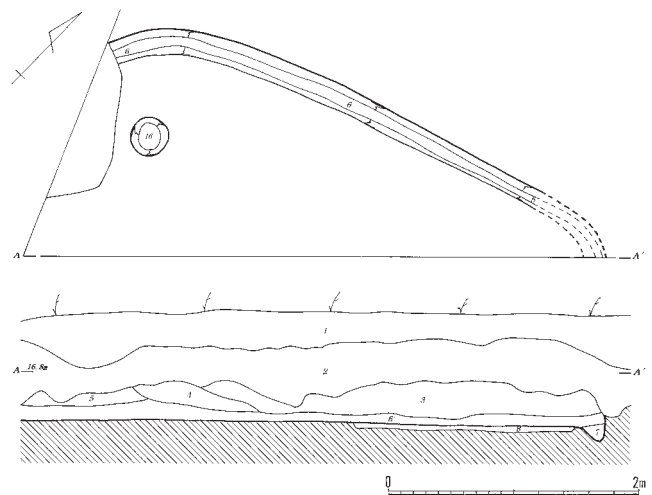
4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。

6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

7層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。

8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロー



第389図 441号住居跡 (1/60)

ム小ブロックを含む。やや硬質。

9層 黒色土 (2.5Y2/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

10層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。粘土火皿。硬質。

11層 にぶい赤褐色土 (2.5YR4/4)。ロームブロック。硬質。赤化。

12層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。

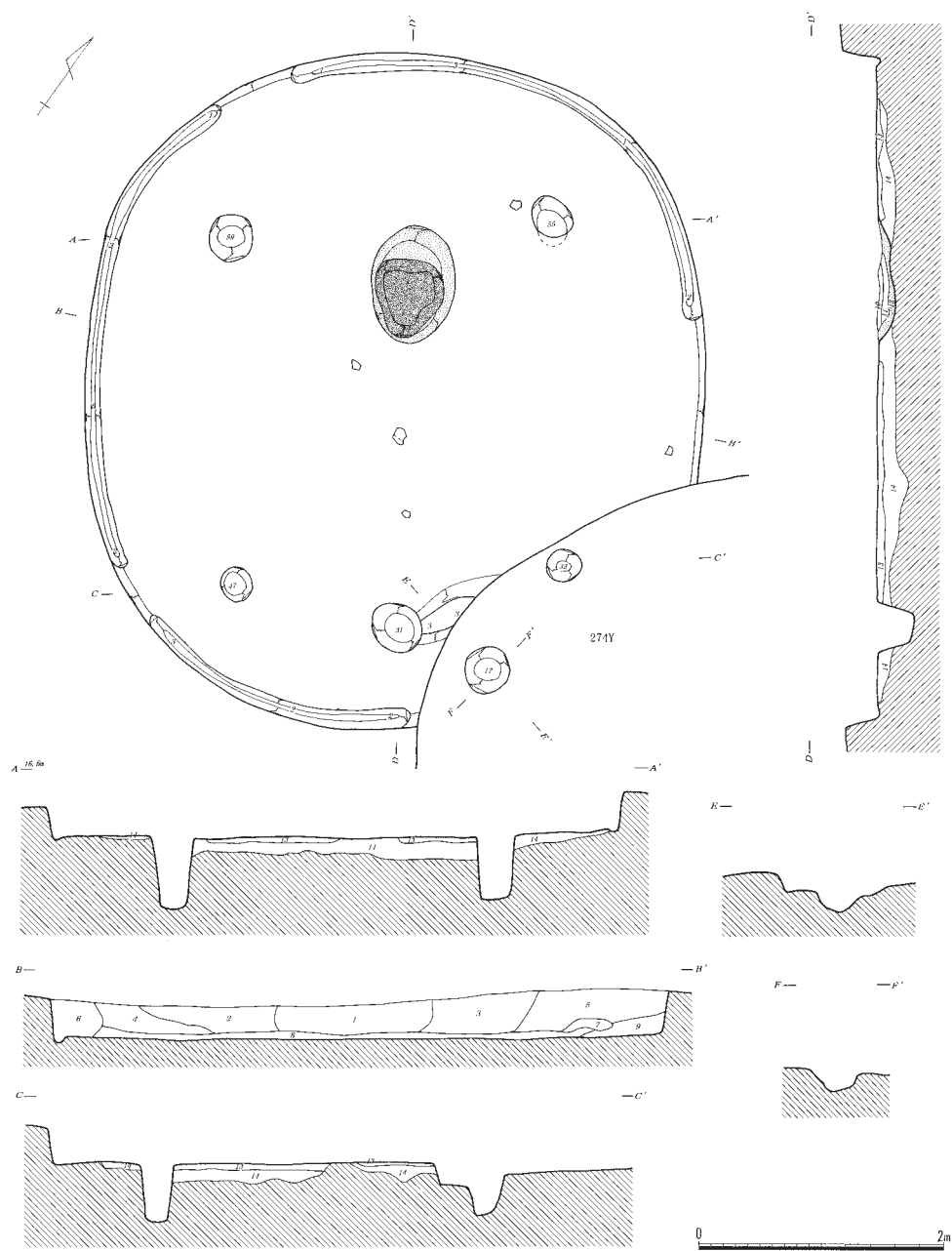
13層 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)。ロームブロック。硬質。貼床。

14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第390図 442号住居跡 (1/60)

442号住居跡出土遺物（第392図32～34）

壺形土器（32）

複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面にはL Rの単節縄文が施され、4本の棒状浮文が貼付される。口縁部下端には刻みが施される。色調は灰黄褐色（10YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（33・34）

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

443号住居跡（第391図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 274Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×525cm。（主軸方位）N-70°-E。（壁高）11～15cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。不明×53cmの地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴と思われる。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西コーナーに位置する。43×39cmの楕円形を呈し、深さ36cmを測る。掘り込み東側に幅40cm前後・高さ9cm前後の凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 274号住居跡覆土。
 - 2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。
 - 3層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
 - 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
 - 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
 - 6層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
 - 7層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロック。硬質。貼床。
 - 8層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。
- 南西コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

443号住居跡出土遺物（第392図35～37）

壺形土器（35・36）

35は複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面にはL Rの単節縄文が施される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

36は肩部破片。L Rの単節縄文が羽状に施され、下端には3条のS字状結節文が巡る。色調は灰褐色（10YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

甕形土器（37）

口縁部破片。口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中より出土した。

444号住居跡（第393図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕(平面形) 楕円形。(規模) 498×485cm。(主軸方位) N-18°-W。(壁高) 5~18cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅9~15cm・下幅3~5cm・深さ1~5cmを測り、北・西・南壁に検出された(床面) 全体に軟弱である。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。68×58cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 南壁下中央からやや東に偏って位置する。49×33cmの楕円形を呈し、深さ16cmを測る。

〔覆土〕 ローム粒子を含み、炭化物粒子を僅かに含む、やや硬質の黒褐色土(7.5YR2/2)を基調とする。

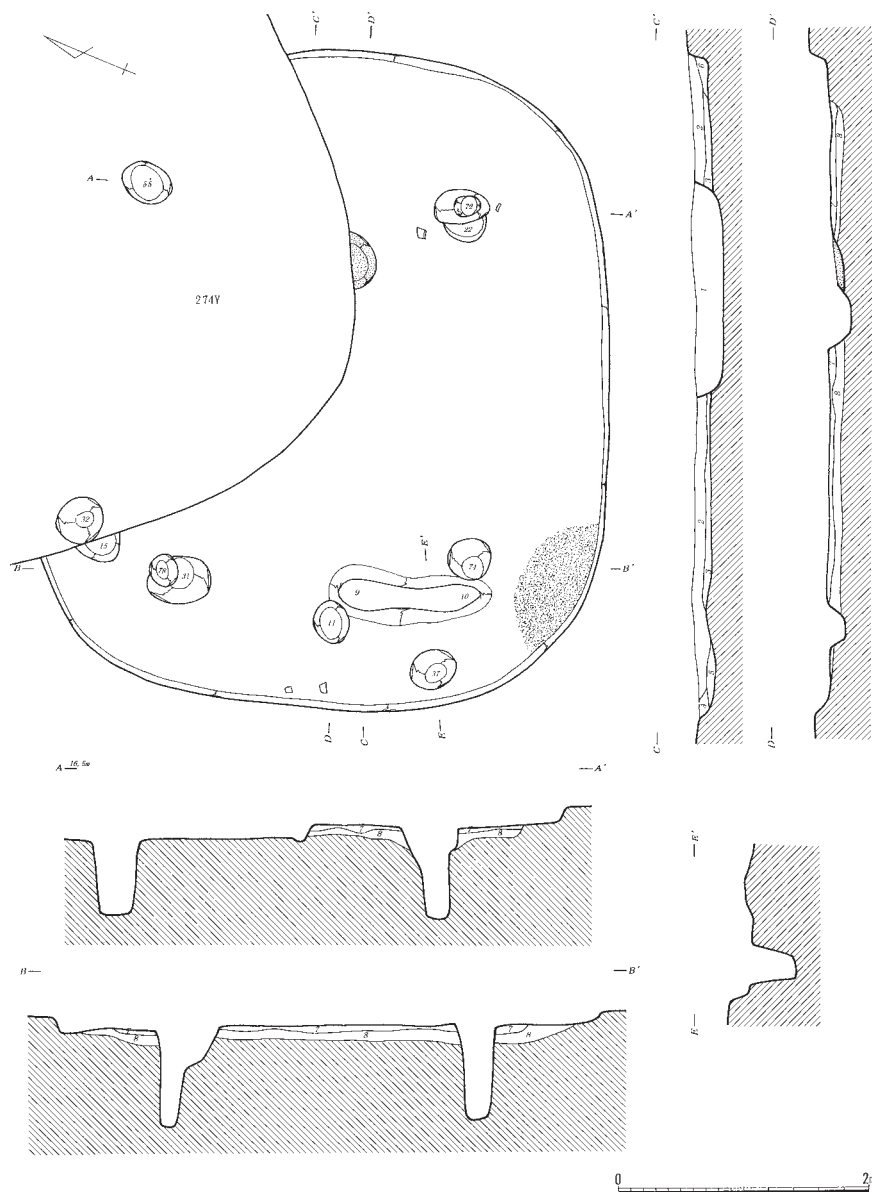
〔遺物〕 西側の床面上に多量の土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

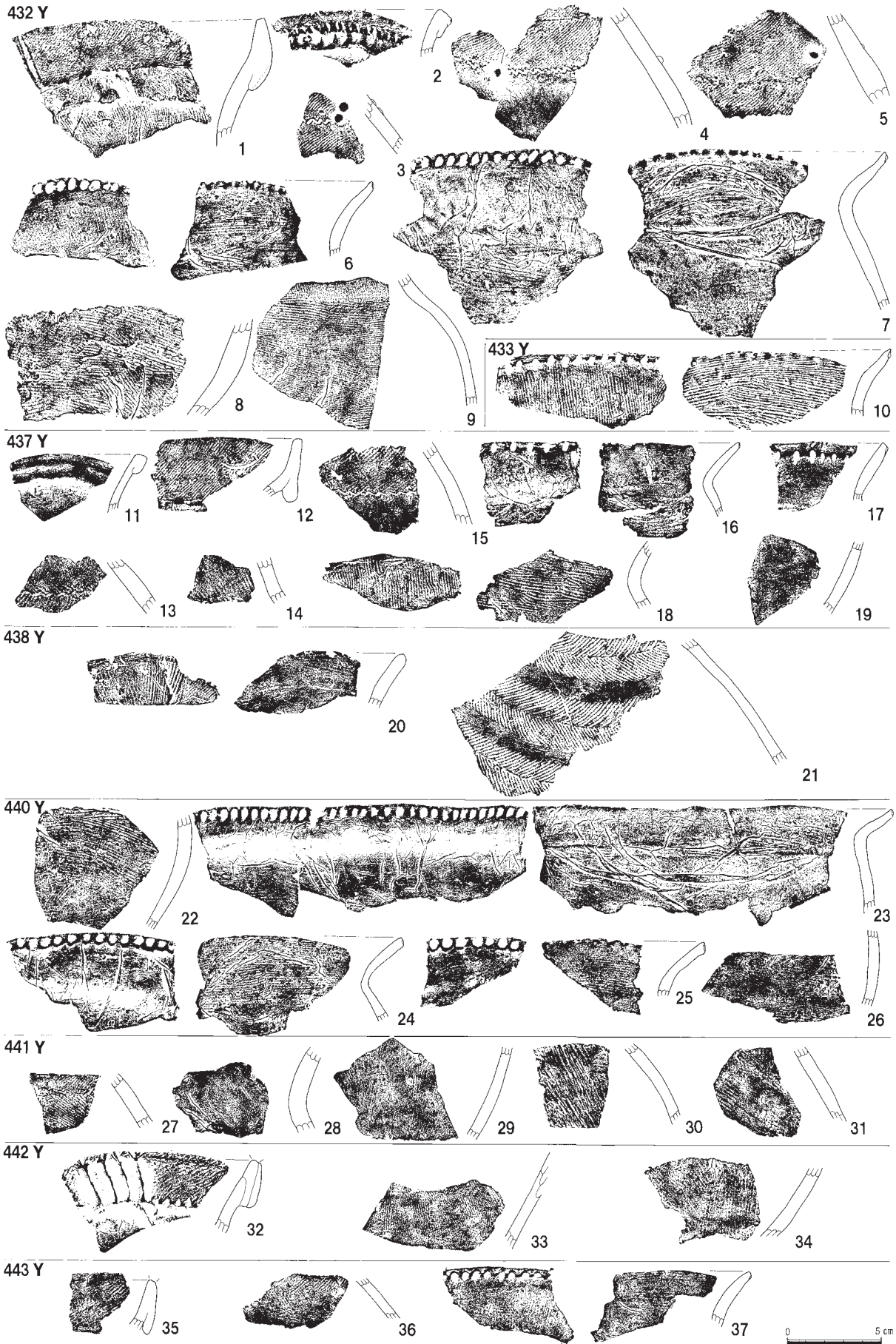
444号住居跡出土遺物(第394図、第397図1~14)

壺形土器(第394図1、第397図1~8)

第394図1は小型の壺形土器で完形。口径6.3cm・底径6.0cm・器高10.5cmを測る。平底で大きめな底部から立ち上がり、体部は外湾し、頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外反する器形である。外面は横方向にヘラナデされるが、頸部と口縁部には指頭痕が明瞭に残る。内面はヘラナデされるが、工具痕と輪積痕が明瞭に残る。口唇部はヨコナ



第391図 443号住居跡(1/60)



第392図 432・433・437・438・440～443号住居跡出土遺物 (1/3)

デされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴付近の壁際床面上から出土した。

第397図1は広口壺の口縁部破片であろうか。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。口縁部内面には4本一単位の櫛描波状文が施される。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央から西寄りの床面上から出土した。

2は複合口縁部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から西寄りの床面上から出土した。

3は肩部破片。撚りの異なる単節縄文の端末結節が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡西側床面上から出土した。

4は肩部破片。RLの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央から西寄りの床面上から出土した。

5は肩部破片。RLの単節縄文と下端には3条のS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡西側床面上から出土した。

6は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が羽状に施され、上端には円形浮文が貼付される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。炉の北西側の床面上から出土した。

7は頸部破片。外面には無節Rの縄文が施される。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。炉北西側床面上から出土した。

8は肩部破片。外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡西側床面上から出土した。

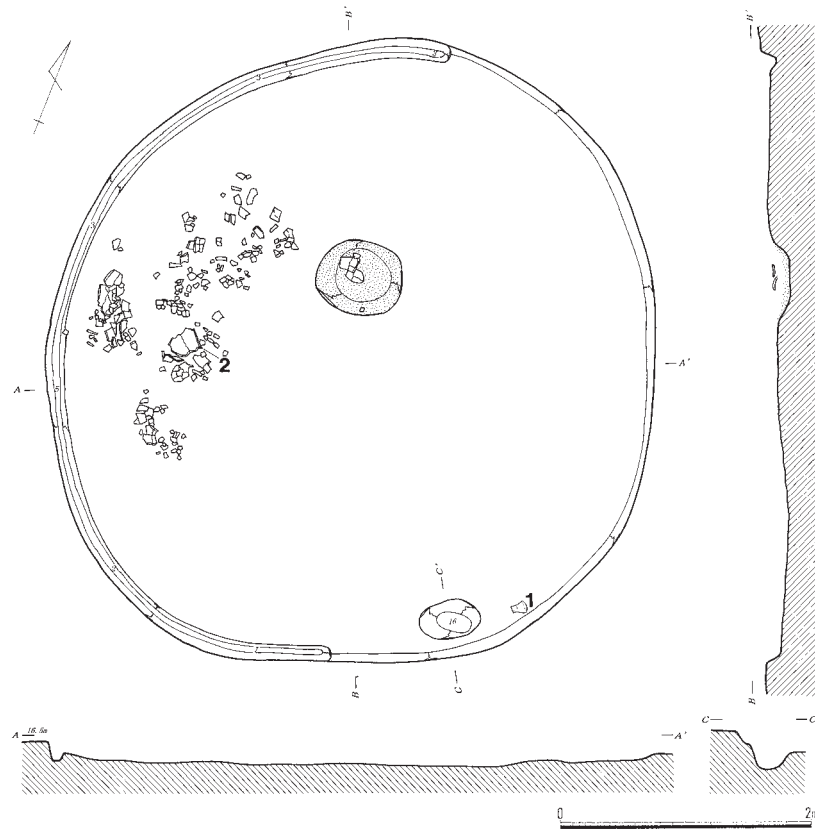
甕形土器（第394図2、第397図9～14）

第394図2は台付甕形土器の甕部1/2程度が残存する。口径19.5cmを測る。球状の体部から立ち上がり、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面と内面上半にはハケ目痕が残る。色調は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から西寄り床面上から出土した。

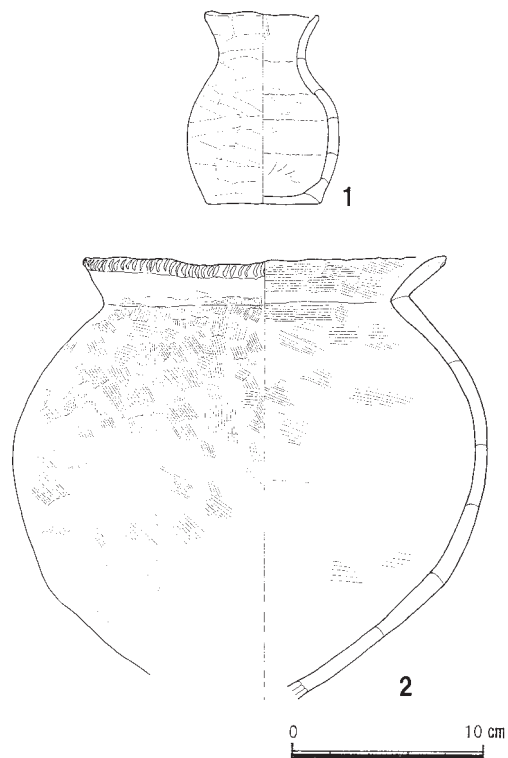
第397図9・10は口頸部破片。いずれも頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが、粗く不規則なハケ目痕が残る。色調は9がにぶい赤褐色（5YR5/3）、10がにぶい赤褐色（2.5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。9は住居跡中央から南西寄り床面上から出土した。10は西側壁際付近の床面上から出土した。

11は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。炉内から出土した。

12は口頸部、13・14は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は12がにぶい橙色（7.5YR6/4）、13・14がにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。12は住居跡中央から南西寄り床面上から出土した。13は炉南西側床面上から出土した。14は覆土中からの出土。



第393図 444号住居跡 (1/60)



第394図 444号住居跡出土遺物 (1/4)

445号住居跡（第395図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）512×446cm。（主軸方位）N—18°—W。（壁高）50～56cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～20cm・下幅4～8cm・深さ6～12cmを測り全周する。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する。86×70cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ6～12cmの掘り込みをもつ。掘り込み外の南東側の被熱で赤化した部分は、灰の掻き出しのためであろうか。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴である。南壁下中央から僅かに北に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南壁下中央から東に偏って位置する。57×43cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測る。北側に幅31～44cm・高さ2～4cmの直線的な凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土（2.5YR3/1）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土（2.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 13層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 14層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 15層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 16層 褐色土（10YR4/4）。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 17層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

北西コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 北側の床面上に土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

445号住居跡出土遺物（第396図1～6、第397図15～17）

壺形土器（第397図15）

肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。縄文帯内部には円形赤彩文が施される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

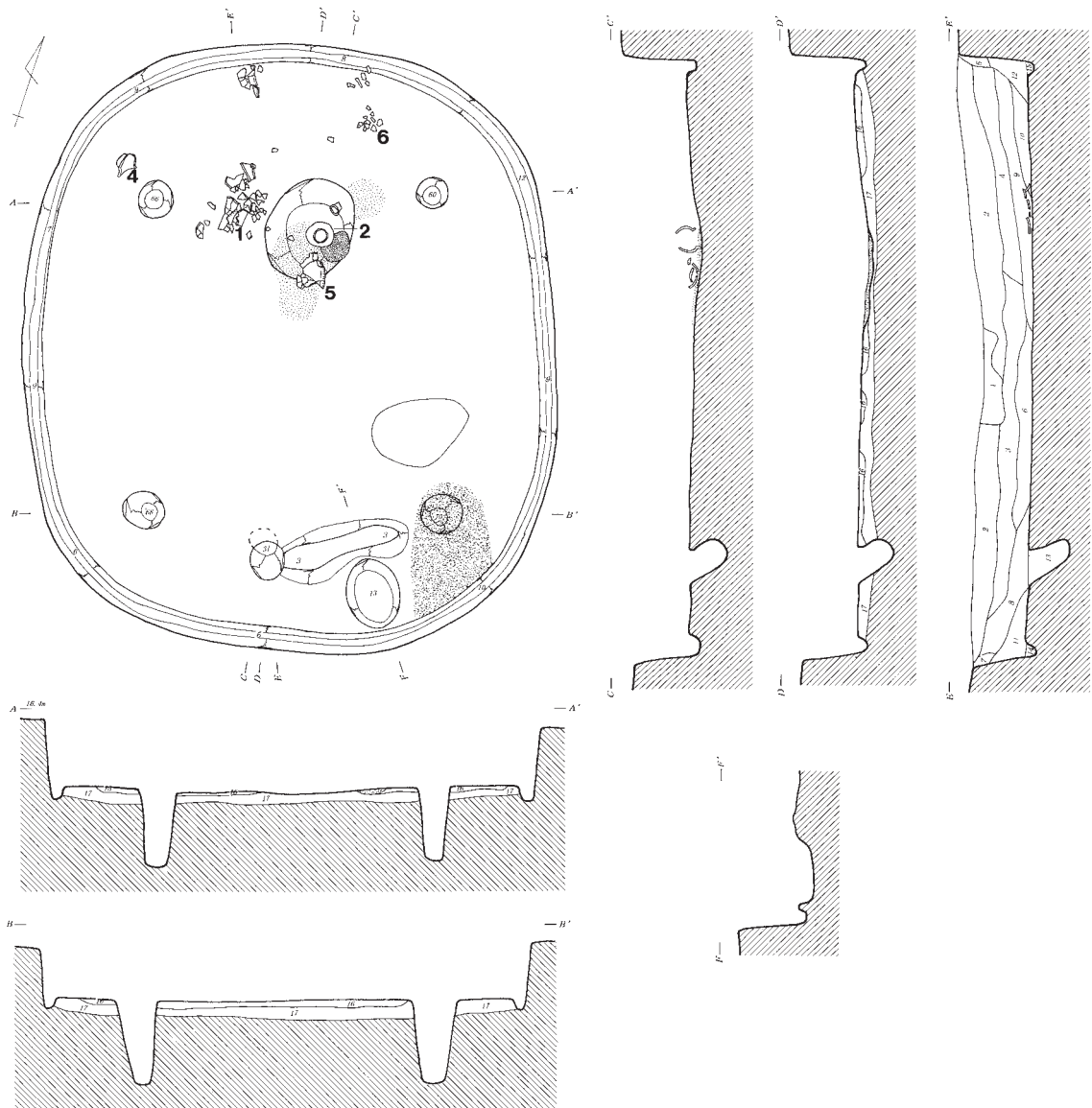
甕形土器（第396図1～6、第397図16・17）

第396図1は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径23.4cmを測る。球状の体部から頸部でくびれて口縁部は開く器形である。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面と甕部内面下半には明瞭なハケ目痕が残る。色調は外面がにぶい橙色（7.5YR7/4）、内面は橙色（7.5YR7/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉西側床面上から出土した。

2も台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径10.5cmを測る。ややつぶれた球状を呈する体部から頸部はやや直立気味に立ち上がり、ゆるやかに外反する器形である。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面には幅広で粗いハケ目痕が残る。体部外面には炭化物の付着がみられる。色調は外面は明赤褐色（5YR5/6）、内面はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉上から出土した。

3は甕部の1/4程度が残存する。推定口径14.3cm。あまり張りの無い球状の体部から頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は内面がにぶい橙色（7.5YR7/3）、外面はにぶい橙色（7.5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

4は甕部の1/2程度が残存する。推定口径16.5cmを測る。球状の体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は外面はにぶい橙色（7.5YR7/3）、内面はにぶい橙色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。西コーナー寄り床面上から出土した。



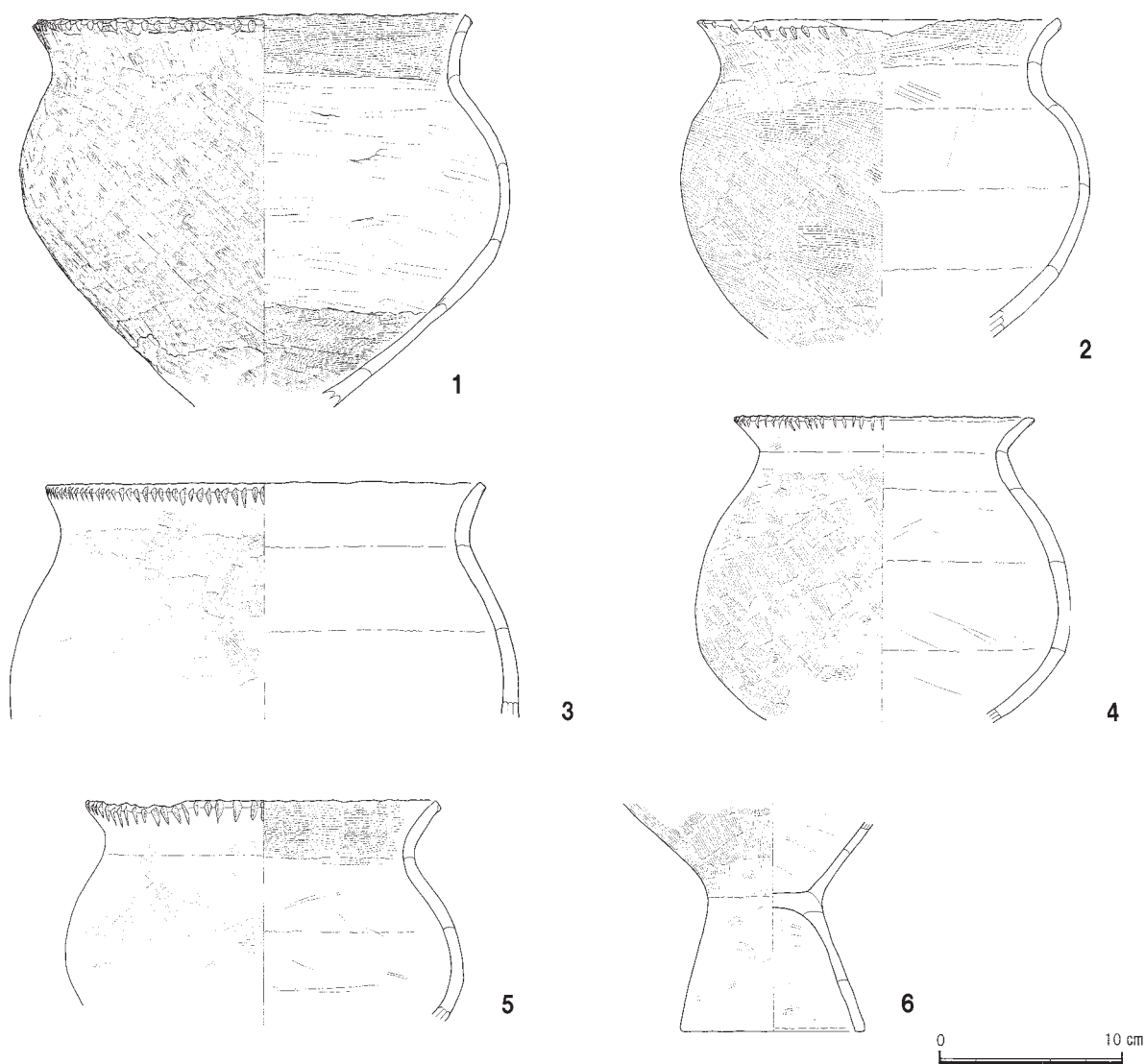
第395図 445号住居跡 (1/60)

5は甕部1/2程度が残存する。推定口径19.5cmを測る。球状を呈する体部から頸部で強くくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、体部外面と口縁部内面には不規則なハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。炉上から出土した。

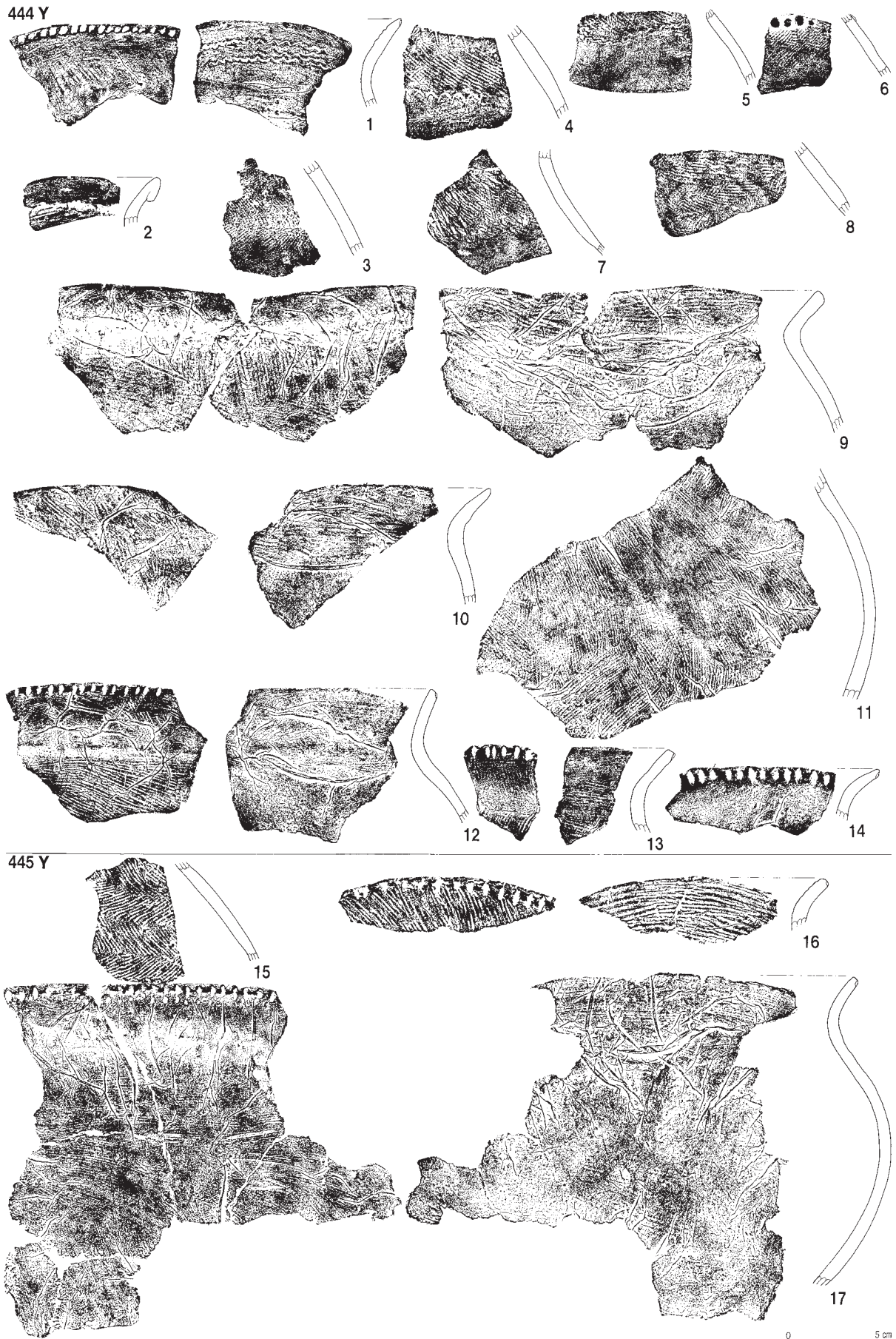
6は甕部下半と脚台部のみ残存する。裾部径10cmを測る。脚台部は直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。甕部外面には炭化物の付着がみられる。色調は橙色（5YR6/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡北寄りから西寄り床面上から散乱した状態で出土した。

第397図16は口縁部破片。口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。炉上から出土した。

17は甕部破片。口唇部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。球状の体部から頸部で強くくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。炉上から出土した。



第396図 445号住居跡出土遺物（1/4）



第397图 444・445号住居跡出土遺物 (1/3)

446号住居跡（第398図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）343×302cm。（主軸方位）N—4°—W。（壁高）30～35cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）住居南側に硬化面を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する。95×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）南壁下中央から東に偏って位置する。48×42cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。

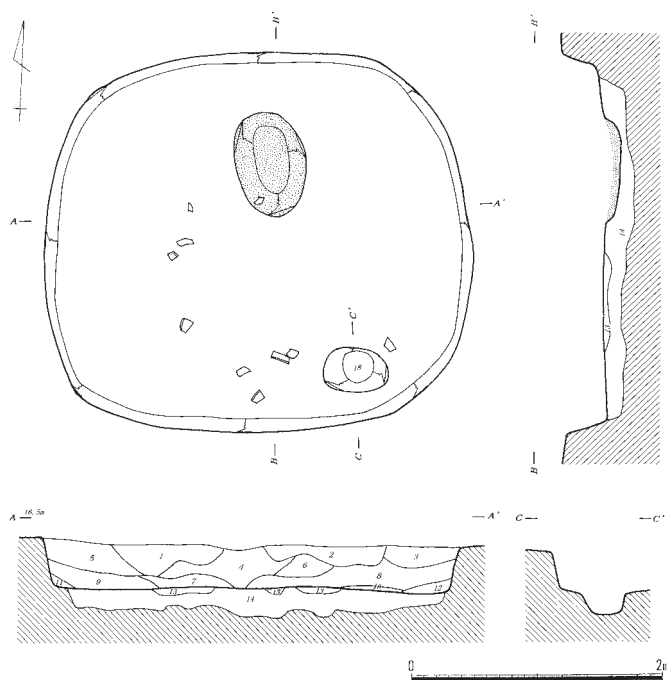
〔覆土〕

- 1層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。
- 2層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。硬質。
- 8層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒色土（2.5Y2/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 11層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 12層 暗灰黄色土（2.5Y5/2）。
- 13層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 14層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 床面上に土器片が点在する。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第398図 446号住居跡（1/60）

〔所見〕 短軸が主軸の住居跡である。

446号住居跡出土遺物 (第408図)

甕形土器 (1・2)

1は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。頸部は強くくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされる。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

2は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。西コーナー付近床面上から出土した。

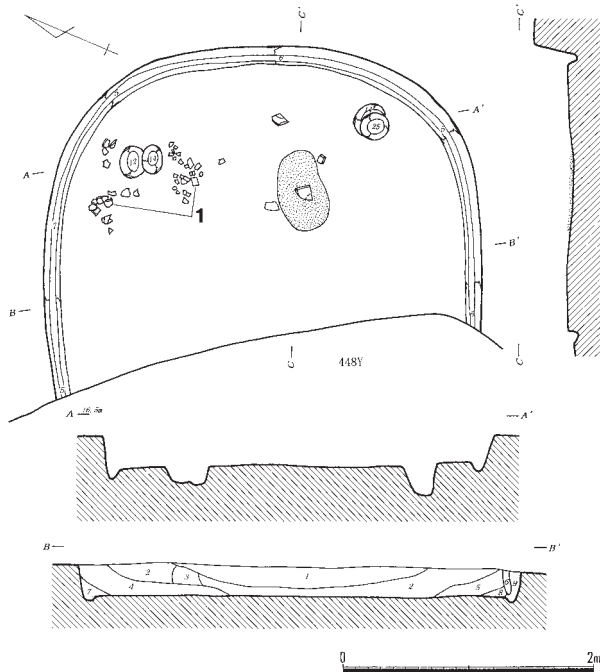
447号住居跡 (第399図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

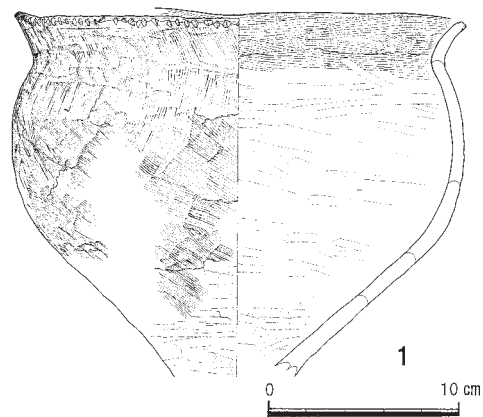
〔構造〕 455Yを切り、448Yに切られる。(平面形) 隅丸長方形か。(規模) 不明×355cm。(主軸方位) N-72°-E。(壁高) 20~24cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅11~15cm・下幅3~7cm・深さ5~7cmを測る。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から東に偏って位置する。64×39cmの不整楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 北・東コーナーに近い2本が主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 2層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロック。硬質。
- 7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 8層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。



第399図 447号住居跡 (1/60)



第400図 447号住居跡出土遺物 (1/4)

9層 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 北東コーナーと炉の周辺の床面上に土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

447号住居跡出土遺物 (第400図)

甕形土器 (第400図)

台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径25cmを測る。体部上位に最大径をもち、下半にかけてすぼまる器形である。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面には不規則なハケ目痕が残る。外面にはほぼ全面に炭化物の付着がみられる。色調は外面がにぶい黄橙色 (10YR4/3)、内面は褐色 (10YR4/5) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北コーナー寄り床面上から出土した。

448号住居跡 (第401図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。447・456Yを切る。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 21~28cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅9~17cm・下幅3~6cm・深さ2~14cmを測り、北西コーナーで止まる。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。住居北西側に床面が直線状に隆起する部分が認められた。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 北及び東コーナーの2本が支柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかったが、東コーナーに幅50cm前後・高さ7cm前後の住居内側に内湾した凸堤を確認した。

〔覆土〕

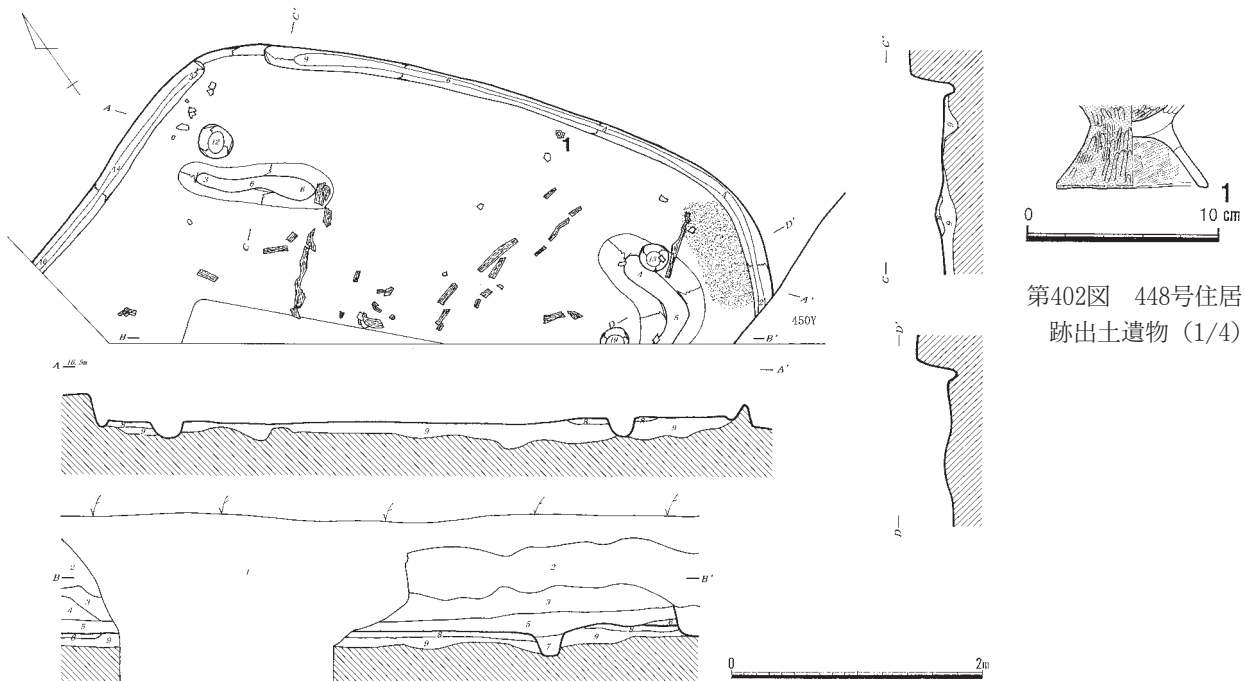
1層 盛土及び攪乱。

2層 耕作土。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。や



第401図 448号住居跡 (1/60)

第402図 448号住居跡出土遺物 (1/4)

や硬質。

6層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。炭化材を多く含む。軟質。

7層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。

8層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。

東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。

〔遺物〕床面上に土器片と炭化物が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕炭化材が多く出土し焼失家屋の可能性が大きい。

448号住居跡出土遺物 (第402図1、第408図3～8)

壺形土器 (第408図3～6)

3は複合口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

4も複合口縁部破片。口縁部外面にはLRの単節縄文が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

5は肩部破片。LRの単節縄文を羽状に施文している。上端には円形浮文が2個貼付される。縄文帯内部には赤彩痕がみられる。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

6は肩部破片。LRの単節縄文と、Z字状結節文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器 (第402図1)

脚台部1/2程度が残存する。裾部径8cm。裾部へかけて「ハ」字状に広がる器形である。外面は縦方向にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は外面は赤褐色 (5YR4/6)、内面はにぶい褐色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁際から出土した。

甕形土器 (第408図7・8)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は7が褐灰色 (5YR4/1)、8はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

449号住居跡 (第403図)

〔位置〕67Ⅱ地点。

〔構造〕(平面形)隅丸長方形。(規模)572×493cm。(主軸方位)N-35°-W。(壁高)45～59cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)検出されなかった。(床面)全体に平坦で軟弱である。(炉)住居中央から北に偏って位置する。44×34cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。(柱穴)各コーナー4本が主柱穴である。(貯蔵穴)南東壁中央からやや東に偏って位置する。径40cmの円形を呈し、深さ35cmを測る。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

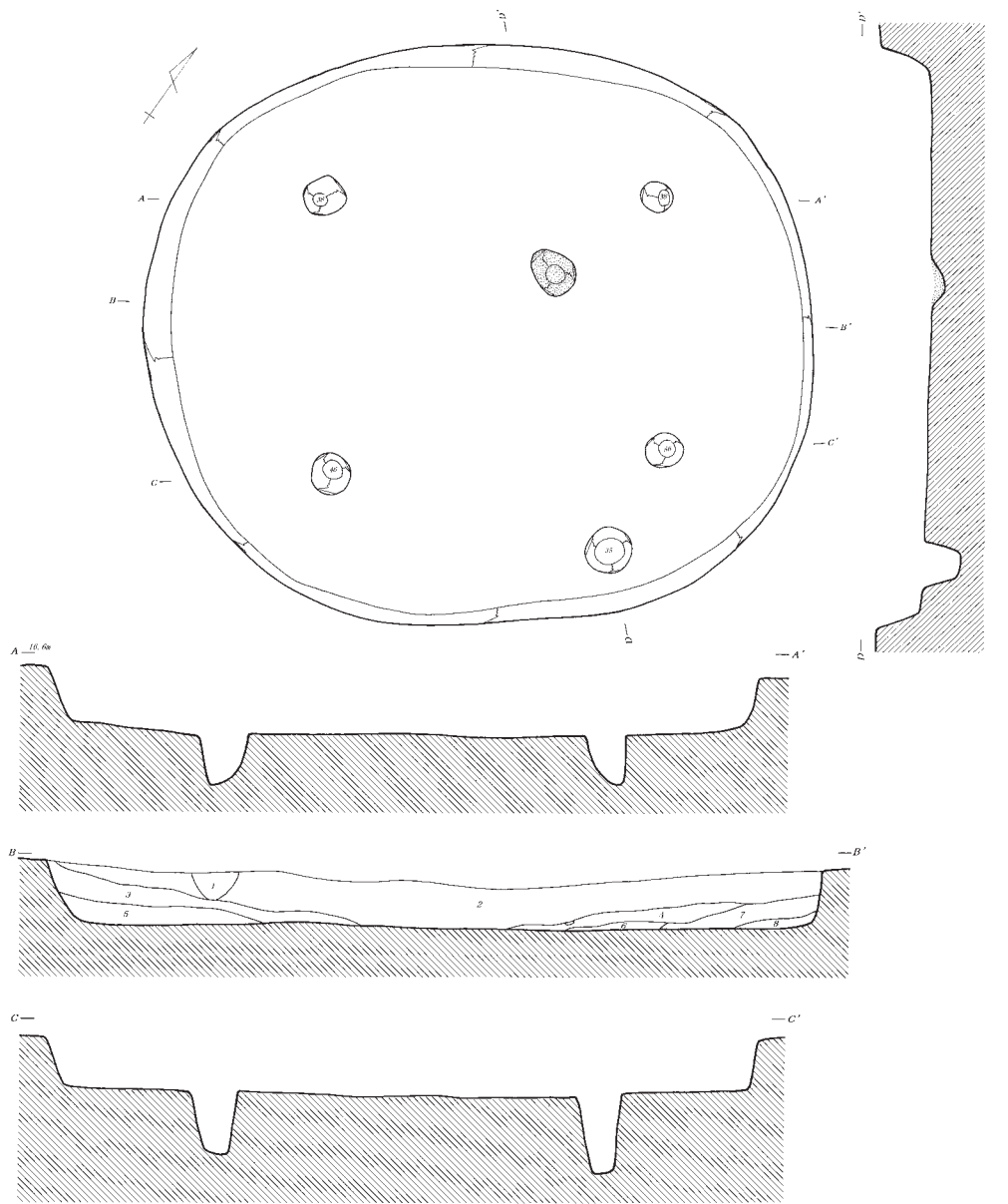
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 短軸が主軸になる住居跡である。

449号住居跡出土遺物 (第408図9～20)

壺形土器 (9・10)

いずれも肩部破片。9はLRの単節縄文を羽状に施し、下端には3条のS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。10はLRの単節縄文の末端結節が2段に施される。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒



第403図 449号住居跡 (1/60)



子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

甕形土器（11～13）

いずれも口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。色調は11・12がにぶい褐色（7.5YR6/3）、13は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

450号住居跡（第404図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。456Yを切る。（平面形）不明。（規模）不明×287cm。（主軸方位）N-72°-E。（壁高）30～35cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）炉の周辺に部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。不明×63cmを測る地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。東側の掘り込み外の被熱は灰の掻き出しのためか。（柱穴）北・東コーナーの2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 南東コーナーに土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

450号住居跡出土遺物（第408図14～16）

壺形土器（14）

肩部破片。LRの単節縄文が羽状に施される。縄文帯内部には直径1cmの円形赤彩文が施される。色調は（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（15・16）

15は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

16は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR5/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

いずれも覆土中から出土した。

451号住居跡（第405図）

〔位置〕 43Ⅲ地点。

〔構造〕 452Yを切る。（平面形）不明。（規模）不明×373cm。（主軸方位）N-43°-W。（壁高）16～21cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）452Yの覆土中に硬化面が認められた。（炉）住

居中央から北西に偏って位置する。41×39cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 住居南東側の1本は入口施設と思われる。他のピットは後世のものである。(貯蔵穴) 南東コーナーに位置する。74×70cmの楕円形を呈し、深さ68cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子を含む。炭化材片を多く含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

451号住居跡出土遺物 (第408図17~20)

甕形土器 (17~20)

17は小型の台付甕形土器の口頸部破片。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。頸部でくびれて口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から北東寄り床面上から出土した。

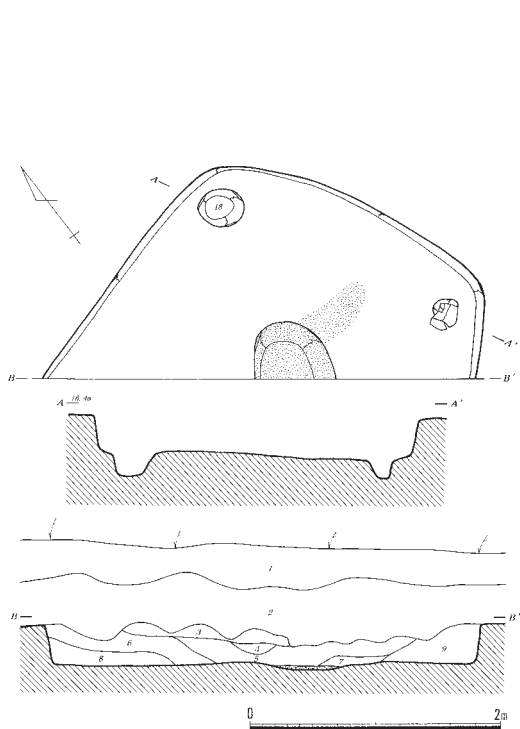
18は口縁部破片。口唇部外面には、柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

19は頸部破片。輪積痕を3段残す。内外面共にヘラナデされる。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

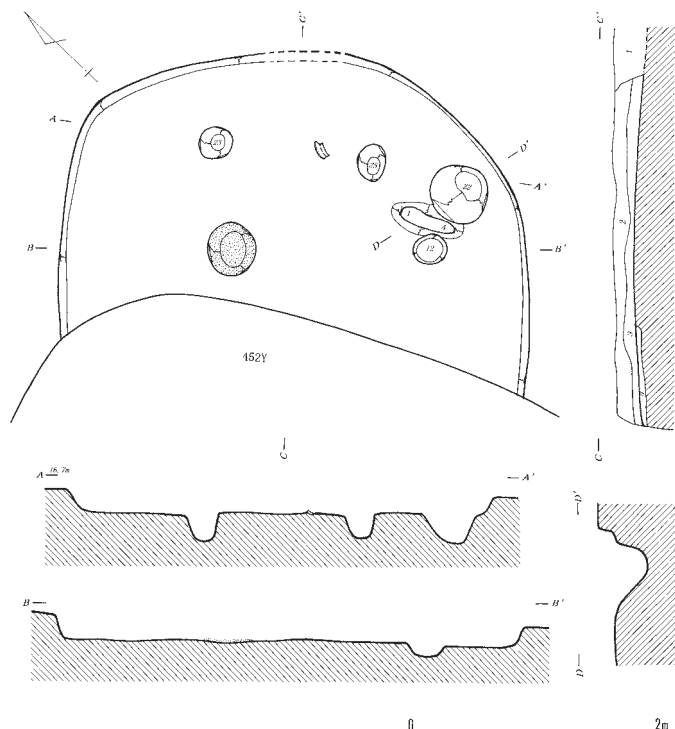
20は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中より出土した。

452号住居跡 (第406図)

〔位置〕 43Ⅲ地点。



第404図 450号住居跡 (1/60)



第405図 451号住居跡 (1/60)

〔構造〕 南西側調査区外。457Yを切り、451Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 47～53cmを測り、90° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅11～17cm・下幅4～8cm・深さ6～12cmを測る。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土及び攪乱。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

南東壁際に、砂礫混じりの暗褐色土が准移する。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

452号住居跡出土遺物 (第408図21～27)

壺形土器 (21・22)

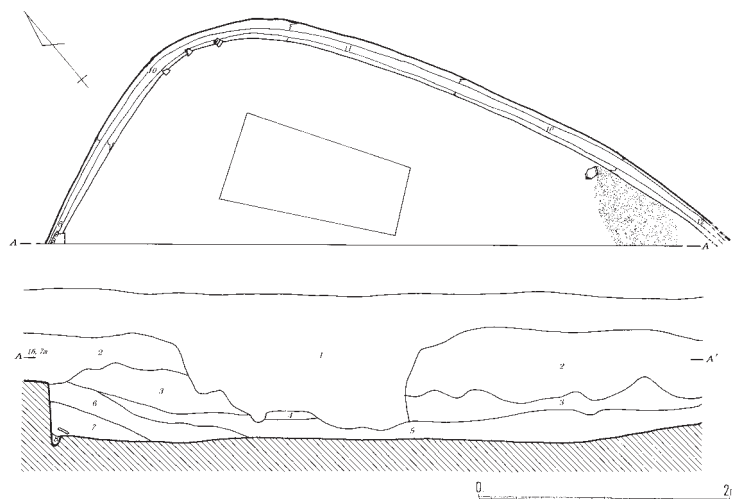
21・22は体部破片。21はLRの単節縄文が施され、下端にはZ字状結節文が巡る。22はLRの単節縄文が施され、下端にはZ字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は21が明赤褐色 (5YR5/6)、22はにぶい赤褐色 (2.5YR5/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。21は北西壁際付近床面上から出土した。22は覆土中からの出土。

甕形土器 (23～27)

23は甕部破片。頸部は強くくびれて口縁部は内湾気味に開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。北西壁際床面上から出土した。

24は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

25は体部破片、26・27は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は25・26が黒褐



第406図 452号住居跡 (1/60)

色(5YR3/1)、27が褐灰色(5YR4/1)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中からの出土。

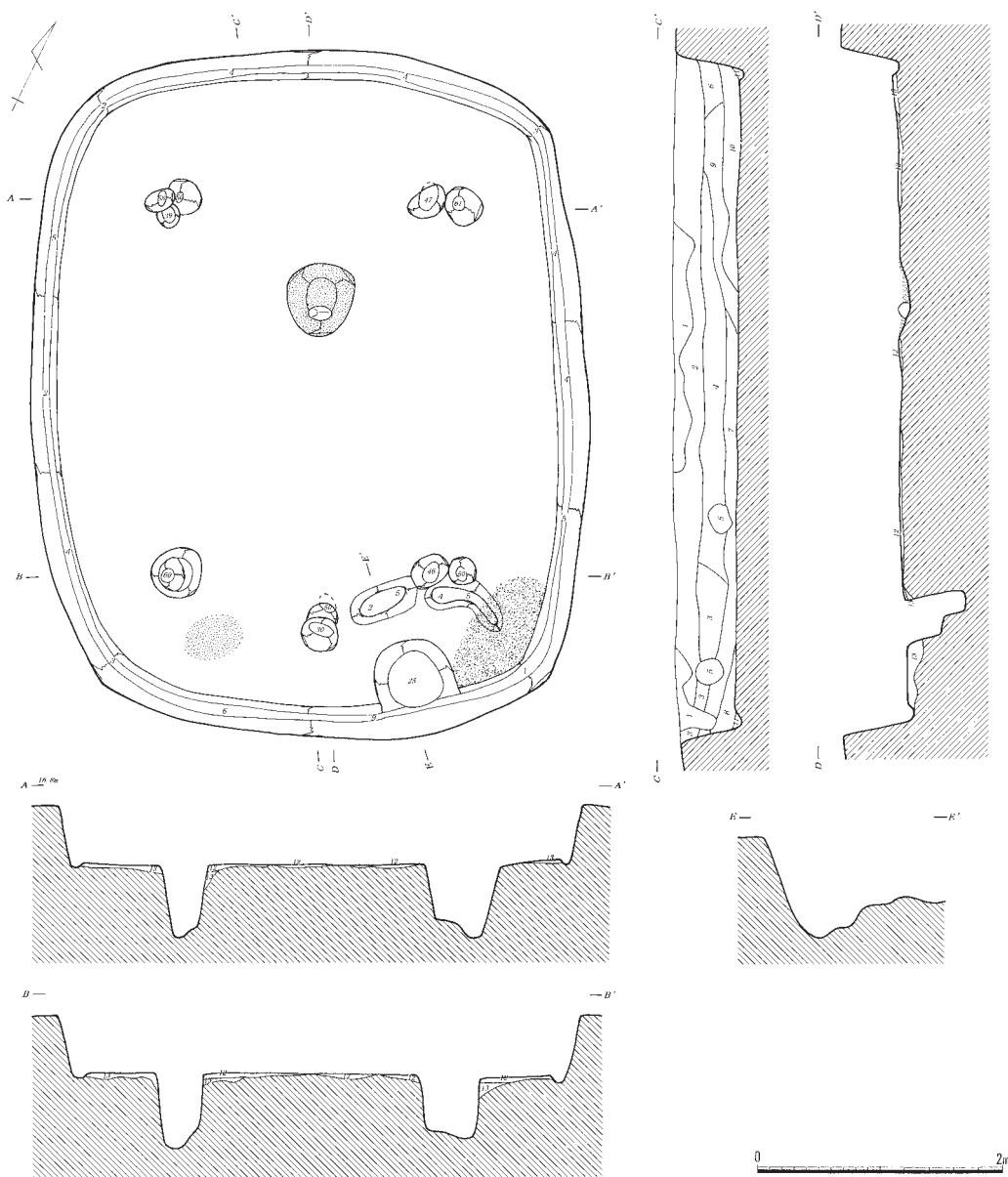
453号住居跡(第407図)

〔位置〕43Ⅲ地点。

〔構造〕(平面形)隅丸長方形。(規模)563×452cm。(主軸方位)N-29°-W。(壁高)47~53cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅16~26cm・下幅5~9cm・深さ1~9cmを測り全周する。(床面)壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉)住居中央から北西に偏って位置する。63×53cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。炉の南側に礫を配置している。(柱穴)各コーナーの4本が支柱穴である。南壁下中央から僅かに北に偏った1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)南東壁下中央から東に偏って位置する。65×55cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。北側に幅19~28cm・高さ1~6cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

1層 耕作土。



第407図 453号住居跡(1/60)

- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロック。硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 11層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 12層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 13層 褐色土 (10YR4/4)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。
東コーナーに砂礫を混じる暗赤褐色土が堆積する。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

453号住居跡出土遺物 (第408図28～32)

壺形土器 (28・29)

28は複合口縁部破片。幅1cmの口唇端部には鋸歯状の沈線文が巡る。口縁部外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。口縁部下端には粘土を押さえつけたような痕がみられる。色調はにぶい黄橙色 (10R5/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

29は肩部破片。LRの単節縄文が羽状に施される。文様の境目にはS字状結節文が巡る。縄文帯内部には円形赤彩文が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器 (30～32)

30は頸部破片、31は体部破片、32は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は30がにぶい赤褐色 (5YR5/3)、31がにぶい橙色 (5YR6/4)、32がにぶい橙色 (5YR6/4) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。いずれも覆土中から出土した。

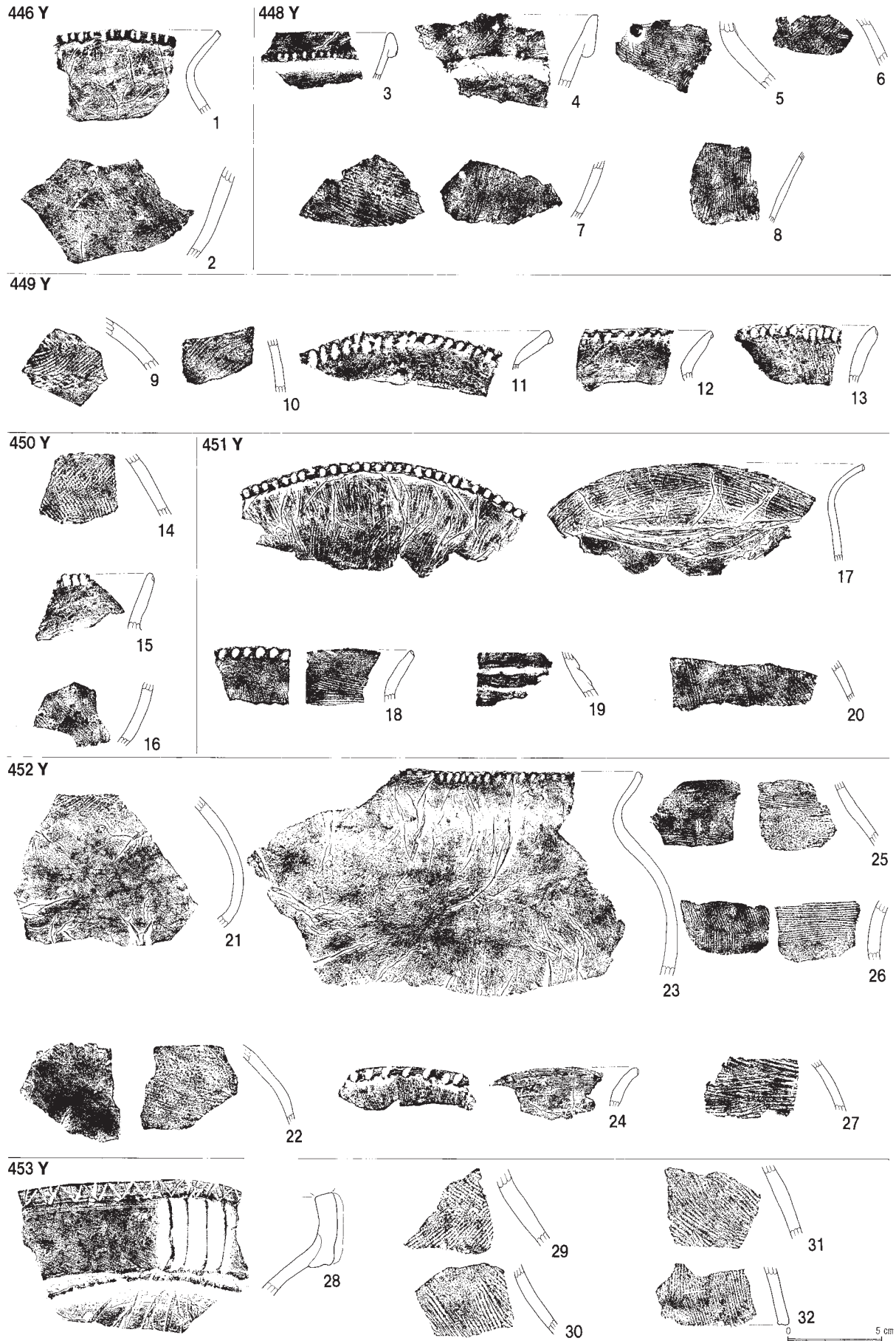
454号住居跡 (第409図)

〔位置〕 43Ⅲ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 36～39cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際を除き、硬化面と被熱で赤化している部分を認める。(炉) 調査区際に僅かに検出された。(柱穴) 北コーナー部の1本は主柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや軟質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。



第408図 446・448～453号住居跡出土遺物 (1/3)

やや硬質。

5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

6層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。焼土粒子を含む。やや硬質。

7層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。やや硬質。

8層 しぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。

10層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。硬質。

11層 暗赤褐色土 (5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。硬質。

12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

13層 しぶい赤褐色土 (5YR4/4)。焼土粒子を多く含む。やや軟質。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。床面上に炭化材が確認された。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 覆土中に焼土・炭化物粒子を多く含み、床面が赤化しているなど、焼失家屋の可能性はある。

455号住居跡 (第410図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 456Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) N-25°-W。(壁高) 15cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北西に偏って位置する。50×42cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 南側の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南東コーナーに位置する。31×28cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。

〔覆土〕

1層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

457号住居跡 (第411図)

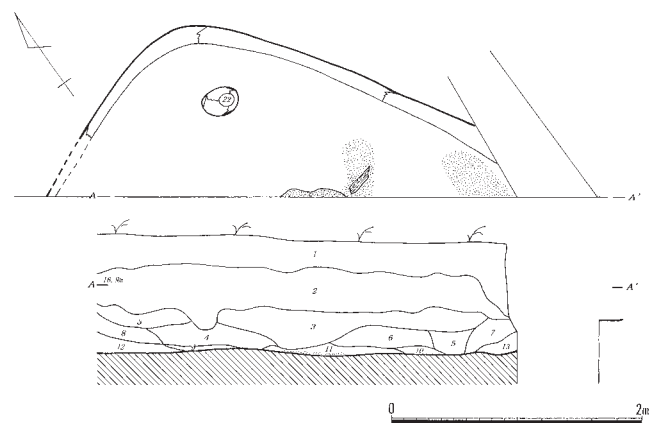
〔位置〕 43Ⅲ地点。

〔構造〕 南側調査区外。452Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 11～24cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 部分的に硬化面と焼土を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅



第409図 454号住居跡 (1/60)

かに含む。ローム小ブロックを含む。硬質。

3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

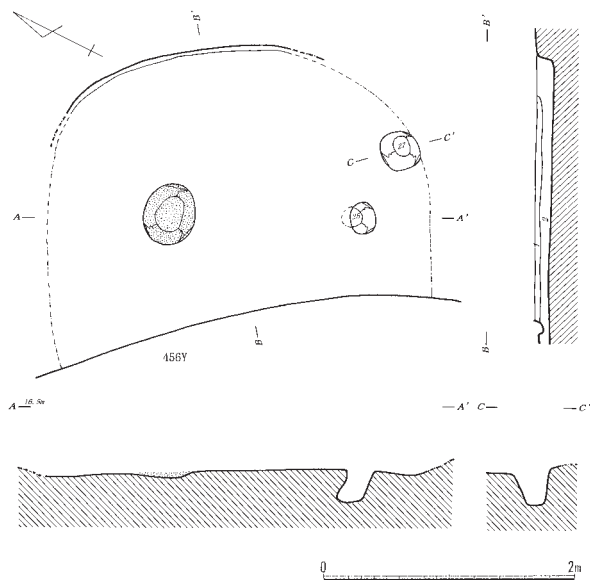
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

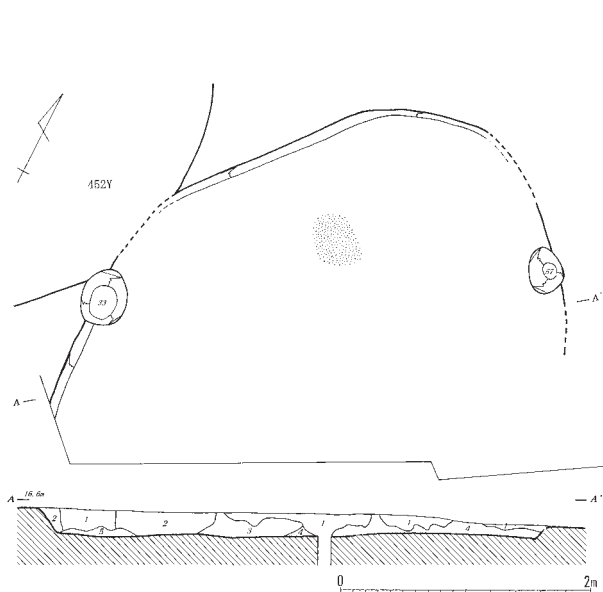
458号住居跡 (第412図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

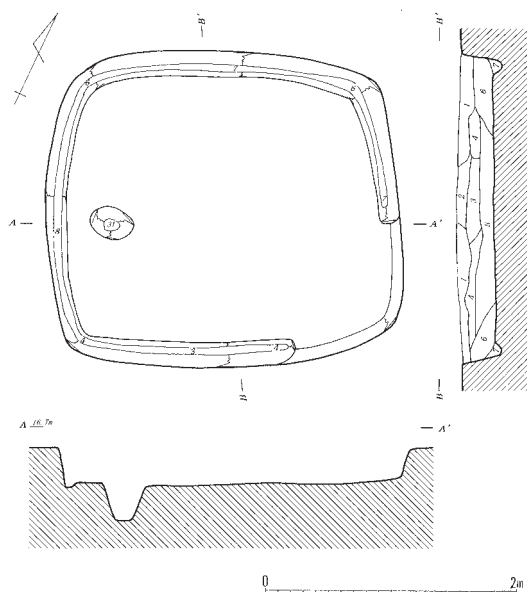
〔構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 250×200cm。(主軸方位) N-63°-E。(壁高) 22~30cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅14~21cm・下幅5~7cm・深さ3~8cmを測り、南東コーナー部を除き検出



第410図 455号住居跡 (1/60)



第411図 457号住居跡 (1/60)



第412図 458号住居跡 (1/60)

された。(床面) 全体に平坦で軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 西壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 褐色土 (10YR4/4)。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 土器小片が僅かに出土した。図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

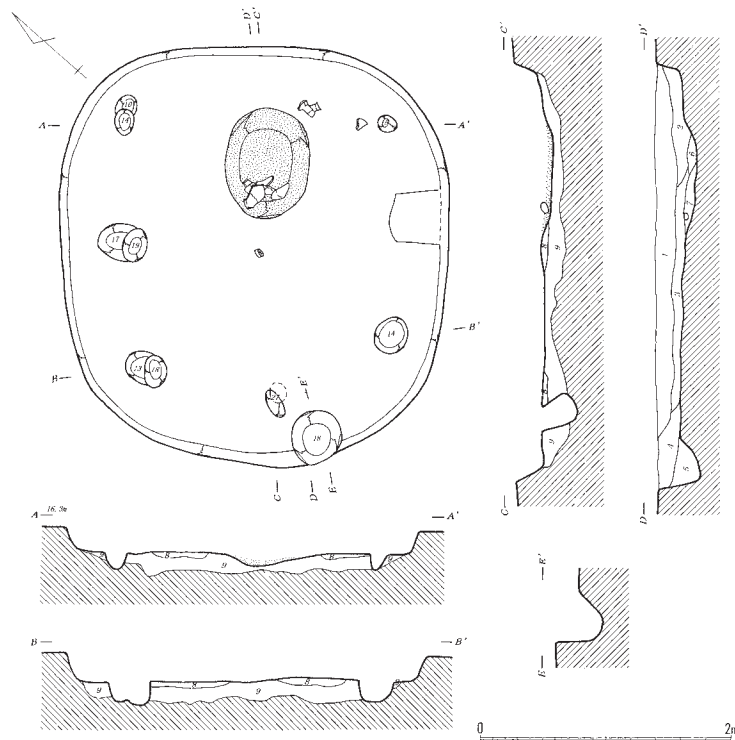
〔所見〕 炉は検出されなかったが、しっかりした掘り込みがあるため、住居跡と認定した。

459号住居跡 (第413図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 (平面形) 隅丸長方形。(規模) 335×308cm。(主軸方位) N-48°-E。(壁高) 19～22cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。92×67cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。掘り込み外の西側に土器片と礫が配置されている。(柱穴) 各コーナーの4本が支柱穴である。南西壁に近いピットは入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南西壁下南東に偏って位置する。径41cmの円形を呈し深さ18cmを測る。

〔覆土〕



第413図 459号住居跡 (1/60)

- 1層 暗灰黄色土 (2.5Y4/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 2層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を含む。下部に焼土粒子が目立つ。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 暗赤灰色土 (2.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を含む。焼土ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 暗赤褐色土 (5YR3/3)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。焼土ブロックを含む。やや硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 10層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。
ローム粒子・ロームブロックを多く含み、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 炉付近の床面上と覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

459号住居跡出土遺物 (第416図)

壺形土器 (1～4)

1は複合口縁部破片。口唇端部と内面にはLRの単節縄文が施される。口縁部外面にはヘラ状工具で押さえた痕が残る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

2も複合口縁部破片。口唇端部には無節Rの縄文がみられる。口縁部外面には無節Rと単節LRの縄文が羽状に施され、棒状浮文が4本貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。炉内部から出土した。

3も複合口縁部破片。口唇端部と口縁部外面にはLRの単節縄文が施される。口縁部外面には棒状浮文が3本貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

4も複合口縁部破片。口縁部外面には、刻みが施された棒状浮文が3本貼付される。口縁部下端には刻みが巡る。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (5～9)

5～7は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は5がにぶい橙色 (5YR4/2)、6が灰褐色 (5YR4/2)、7は黒褐色 (5YR3/1) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。

8・9は甕部破片。球状の体部から頸部でくびれて口縁部が開く器形である。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部外面にはハケ目痕が残る。色調は8がにぶい橙色 (5YR6/4)、9はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。8は炉内から出土、9は炉東側床面上から出土した。

460号住居跡 (第414図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側が攪乱で破壊されている。461Yを切る。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 不明×380cm。(主軸方位) N-38°-E。(壁高) 37～40cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と

炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉)住居中央から北東に偏って位置する。100×72cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ30cmの掘り込みをもつ。(柱穴)北及び東・南コーナーの3本が支柱穴の一部と思われる。(貯蔵穴)南コーナーに位置する。42×37cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。掘り込み外の東側に幅34～44cm・高さ2～6cmのやや太めの凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (2.5Y3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや粘質。
- 10層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。
南コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。
堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕住居跡南寄りの床面上から土器が出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

460号住居跡出土遺物 (第415図1・2、第416図10～15)

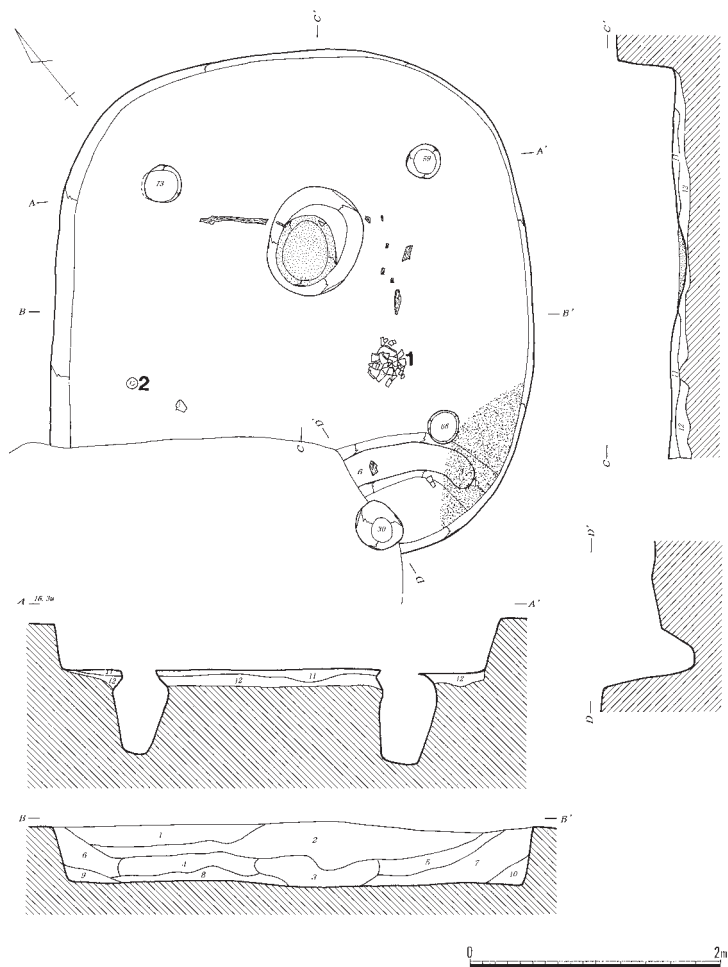
壺形土器 (第415図1・2、第416図10～13)

第415図1は菊川式系の壺形土器。口縁部と体部の1/3程度を欠損する。口径約17cm・底径9.5cm・器高30.9cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部中位からやや下に最大径のある球状の体部を作出する。頸部はくびれて直立気味に立ち上がり、口縁部は内湾しながら外側へ大きく開く器形である。口縁部外面には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが2段巡る。頸部にも同じ工具による刺突文が1段みられる。口縁部外面はヘラナデされる。頸部外面は縦方向にヘラミガキされるが消しきれないハケ目痕が残る。頸部内面は横方向にヘラミガキされる。体部外面は横方向にヘラミガキされるが、体部中位に消しきれないハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが、器面の荒れが激しく不明瞭。外面と口縁部内面は赤彩される。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/6)、赤彩部分は明赤褐色 (2.5YR5/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央からやや南に寄った床面上と、離れている462号住居跡の覆土中から出土した。

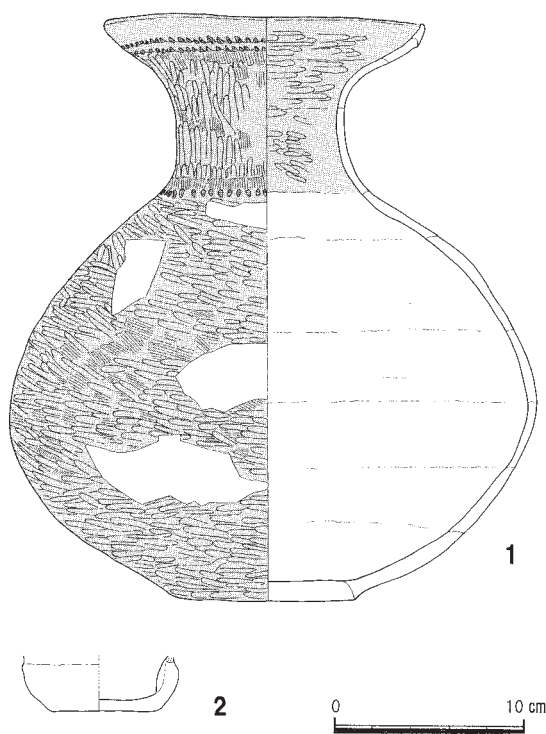
2は平底埴形土器であろうか。底部と体部のみ残存する。底径5.6cm。平底の底部から立ち上がり内湾する。頸部はくびれていると推測される。内面には輪積痕が残る。色調は黄橙色 (7.5YR8/8) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡南西寄り床面上から出土した。

第416図10は複合口縁部破片。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、境目にはS字状結節文が巡る。口縁部下端には刻みが施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色 (10R4/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央から南寄り床面上から出土した。

11も複合口縁部破片。広い口唇端部と内面にはLRの単節縄文の端末結節が施される。口縁部下端にはヘラ状工

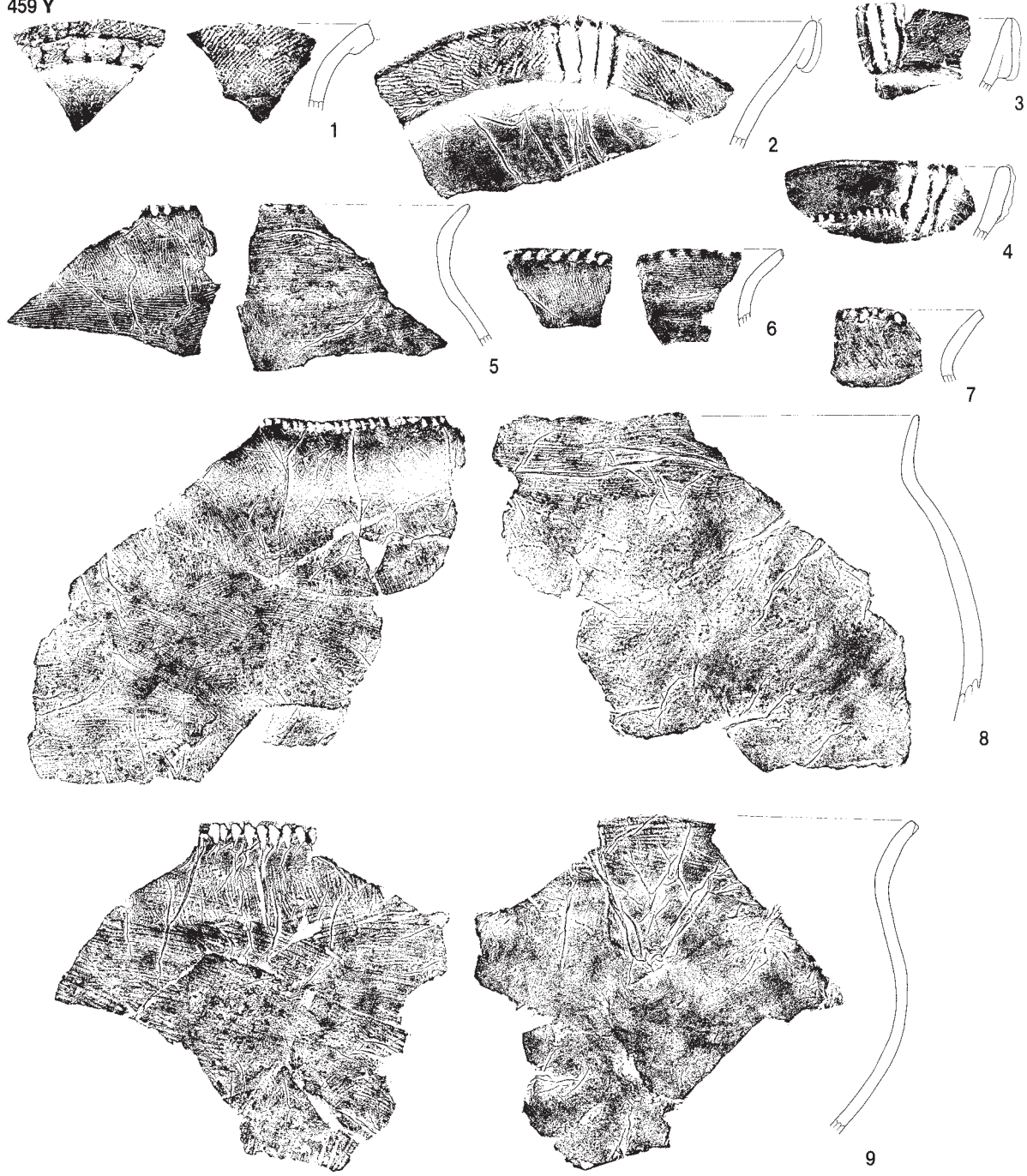


第414図 460号住居跡 (1/60)

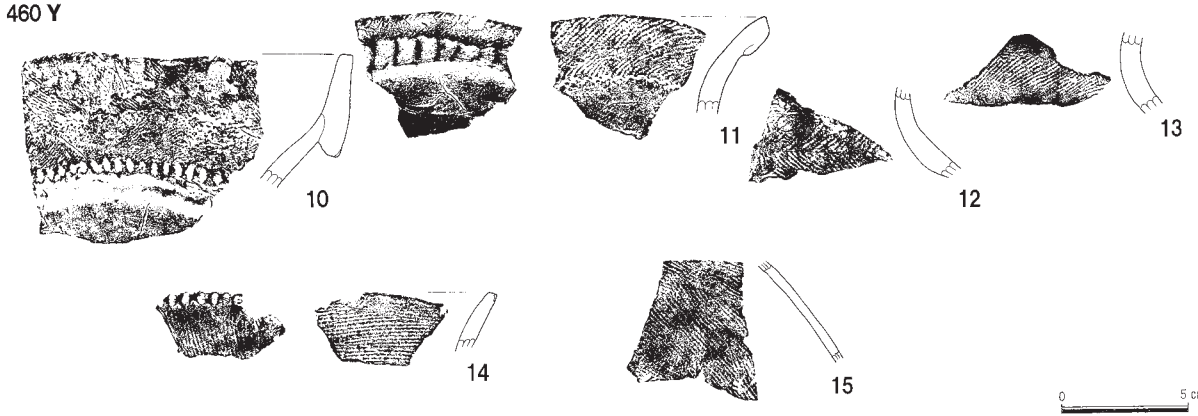


第415図 460号住居跡出土遺物 (1/4)

459 Y



460 Y



第416图 459・460号住居跡出土遺物 (1/3)

具で押さえた痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

12・13は頸部破片。12はLRの単節縄文の端末結節が羽状に施される。13はLRの単節縄文が施され、縄文帯以外は赤彩される。色調は12がにぶい橙色（7.5YR6/3）、13はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央から南寄り床面上から出土した。

甕形土器（14・15）

14は口縁部破片、15は体部破片。14の口唇部には刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

461号住居跡（第417図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 462Yを切り、460Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×678cm。（主軸方位）N-43°-W。（壁高）34~37cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15~24cm・下幅3~10cm・深さ2~12cmを測る。南西コーナーでは検出されなかった。（床面）壁際とピットの周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。不明×66cmの地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）西及び南コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。南東壁下の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）北西コーナー近くに位置する。南側は40×30cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。北側は50×40cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測る。北側に幅30cm前後・高さ4cm前後の直線的な凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 10層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。
- 11層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。やや軟質。
- 12層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 13層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。
- 14層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 15層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 16層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。壁に近い部分では焼土粒子が目立つ。やや硬質。
- 17層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや軟質。
- 18層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや粘質。
- 19層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 炉内や床面上から出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

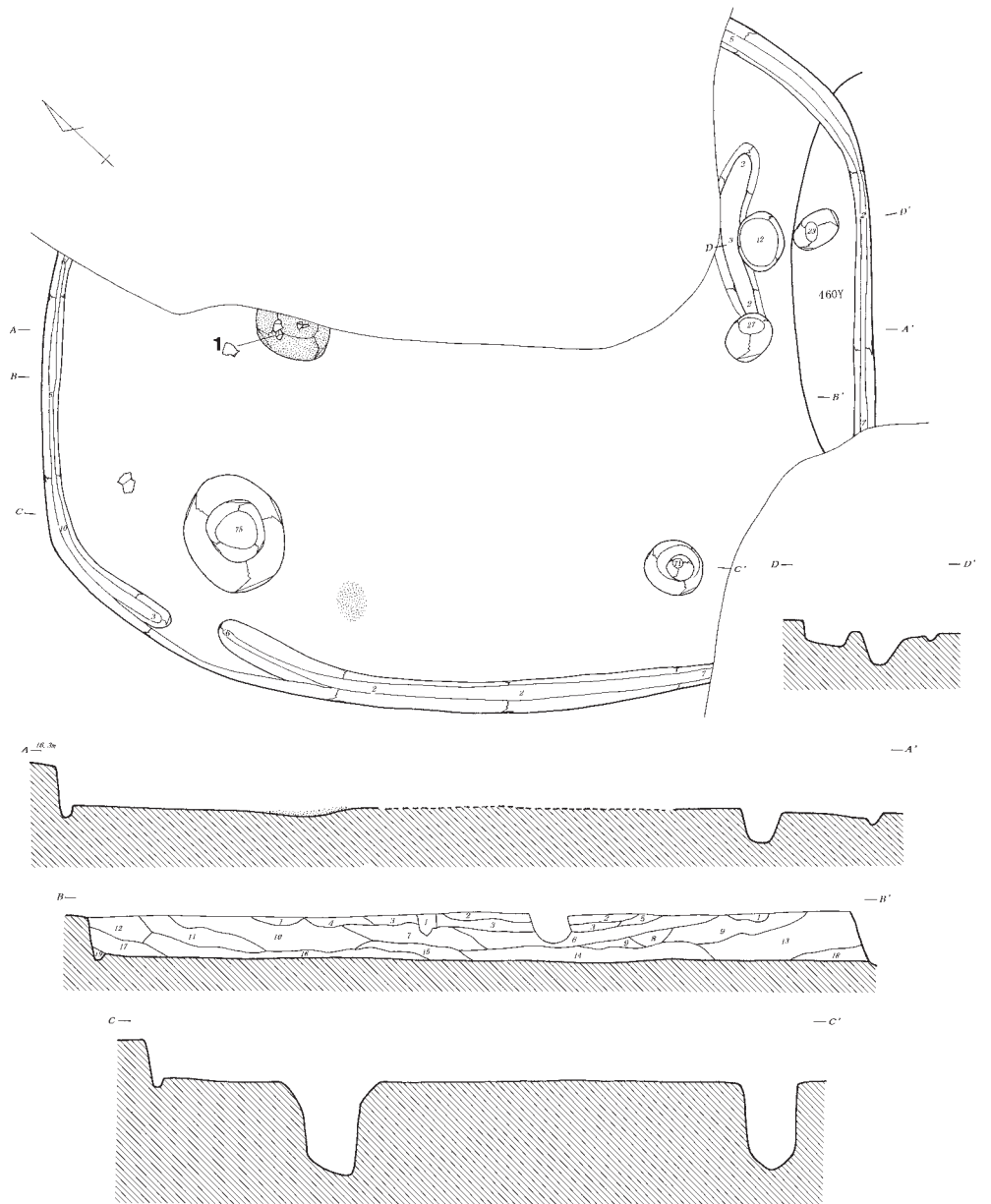
461号住居跡出土遺物（第418図1、第425図1・2）

甕形土器（第418図1、第425図1・2）

第418図1はいわゆる「多摩型甕」の影響を受けたと推測される台付甕形土器である。甕部1/2程度が残存する。推定口径17cm。球状の体部から頸部で屈曲し、口縁部は直立気味に立ち上がる器形である。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。炉内と、炉西側床面上から出土した。

第425図1は甕部破片。球状の体部から立ち上がり頸部は直立する器形である。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。内外面共にともに炭化物の付着が顕著である。西コーナー床面上から出土した。

2は輪積痕ナデ調整甕形土器の頸部破片。3段の輪積痕が確認できる。内外面共にヘラナデされるが外面にはハ



第417図 461号住居跡 (1/60)



ケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

462号住居跡(第419図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 461Ⅴに切られる。(平面形) 楕円形。(規模) 318×250cm。(主軸方位) N-62°-E。(壁高) 22~29cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全体に平坦で軟弱であるが、部分的に硬化面を認められた。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。53×38cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。北西側の被熱は灰の掻き出しのためか。(柱穴) 東・西コーナーに近い2本が支柱穴の一部か。南西壁下の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南西壁中央から東に偏って位置する。43×39cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。

〔覆土〕

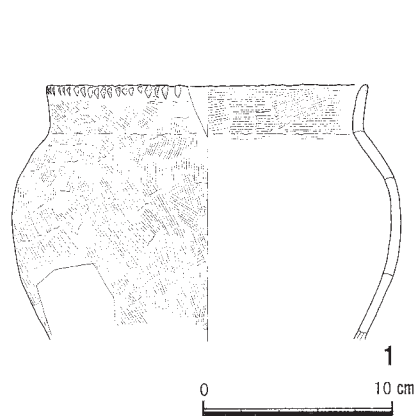
- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。炭化材小片・炭化物粒子を多く含む。やや軟質。
- 5層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや粘質。
- 6層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。
- 8層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。貼床充填土。

〔遺物〕 住居跡北東寄りの覆土中から出土した。

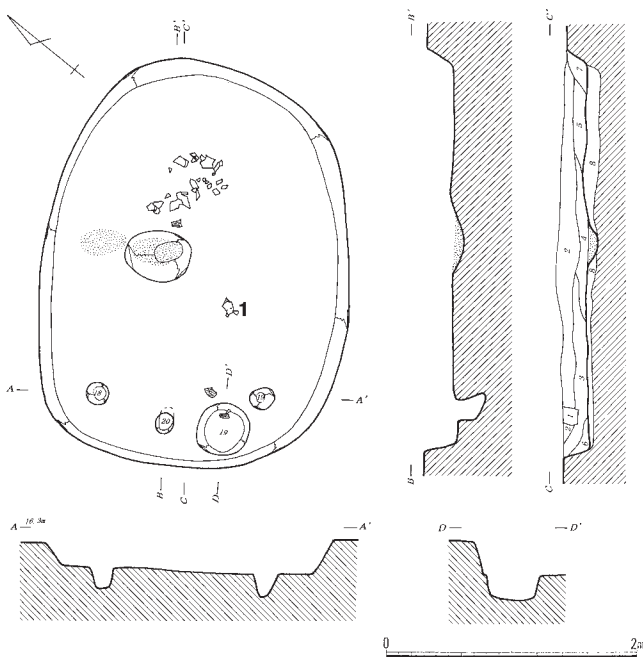
〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

462号住居跡出土遺物(第420図、第425図3~5)

壺形土器(第420図1、第425図3~5)

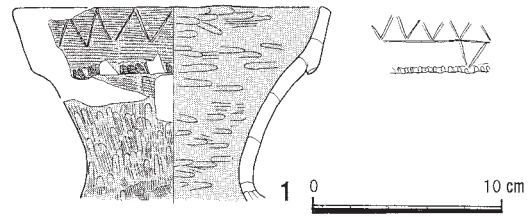


第418図 461号住居跡出土遺物(1/4)



第419図 462号住居跡(1/60)

第420図1は複合口縁の1/3程度が残存する。推定口径16.8 cm。頸部からゆるやかに開き複合口縁部は直立する。口縁部には鋸歯文が施される。口縁部下端には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。口唇端部には無節Rの縄文が施される。内外面共に縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR7/6）、赤彩部分にはぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居ほぼ中央、床面上から出土。



第420図 462号住居跡出土遺物（1/4）

第425図3は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

4は頸部破片。上から順に2条のS字状結節文・無節R・無節L・無節Rを羽状に3段施している。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

5は肩部破片。無節Rの縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10YR4/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

463号住居跡（第381図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 433Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）N-55°-E。（壁高）4～13cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅7～18cm・下幅3～7cm・深さ4～10cmを測る。（床面）南側に一部硬化面が認められる。（炉）住居ほぼ中央に位置する。径36cmの円形を呈する地床炉で、深さ1cmの掘り込みをもつ。（柱穴）西壁下中央の1本は入口施設と思われる。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）西壁下中央からやや南東に偏って位置する。径35cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。

〔覆土〕 確認面から浅いことと、耕作による攪乱が著しいため、詳細は不明である。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

464号住居跡（第421図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 東側調査区外。耕作により大きく破壊されている。（平面形）不明。（規模）不明×320cm。（主軸方位）N-61°-E。（壁高）6～12cmを測り、51°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）南側が大きく攪乱されている。部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から北東偏って位置する部分に、地床炉と思われる痕跡を確認する。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。硬質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

465号住居跡（第422図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 耕作により大きく破壊されている。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明。（主軸方位）N-46°-E。（壁高）6～10cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11～15cm・下幅3～6cm・深さ1～5cmを測る。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）検出されなかった。攪乱部分にあった可能性がある。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴である。（貯蔵穴）住居南側に位置する。43×37cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子を多く含む、やや硬質の暗褐色土（10YR3/3）である。

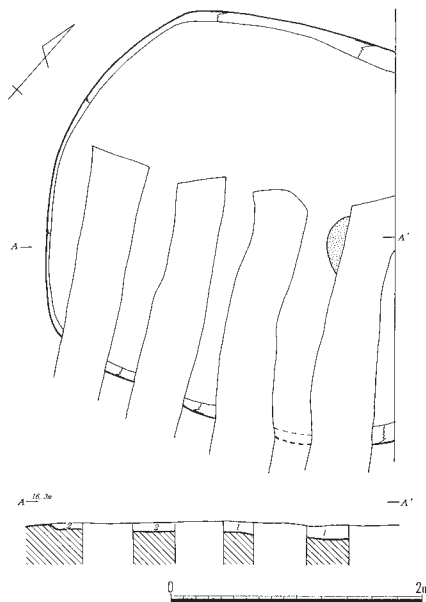
〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

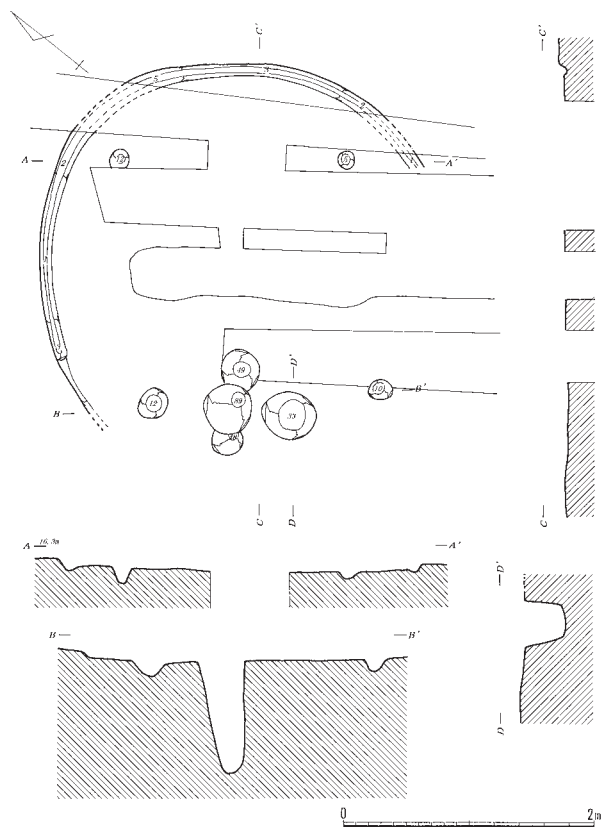
466号住居跡（第423図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×690cm。（主軸方位）N-35°-E。（壁高）20～30cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅10～21cm・下幅5～10cm・深さ7～12cmを測り全周すると思われる。（床面）平坦で遺存状態は良好である。壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。住居中央と西側の掘り込みに焼土が体積している。（炉）住居中央からやや北東に偏って位置する。200×80cmの長楕円形を呈する地床炉で、深さ8cm前後の掘り込みをもつ。通常よりやや大きめの炉跡で、赤化している部分も広範囲で、使用期間は長いと思われる。（柱穴）各コーナーに近い4本が支柱穴である。（貯蔵穴）南西壁中央から南東に偏って位置する。85×55cmの楕円形を呈し、深さ60cmの段をもつ掘り込みである。東側に幅30cm前後・高さ6cm前後の凸堤を直線状に構築している。



第421図 464号住居跡（1/60）



第422図 465号住居跡（1/60）

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや粘質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炉跡付近では焼土粒子が目立つ。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 13層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 15層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 16層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 17層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 18層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 19層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 20層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 21層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 22層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 23層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
- 24層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 25層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 26層 におい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
- 27層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。

南コーナーに砂礫まじりの暗赤褐色土が堆積している。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 貯蔵穴周辺の床面上と部分的に土器片が出土した。

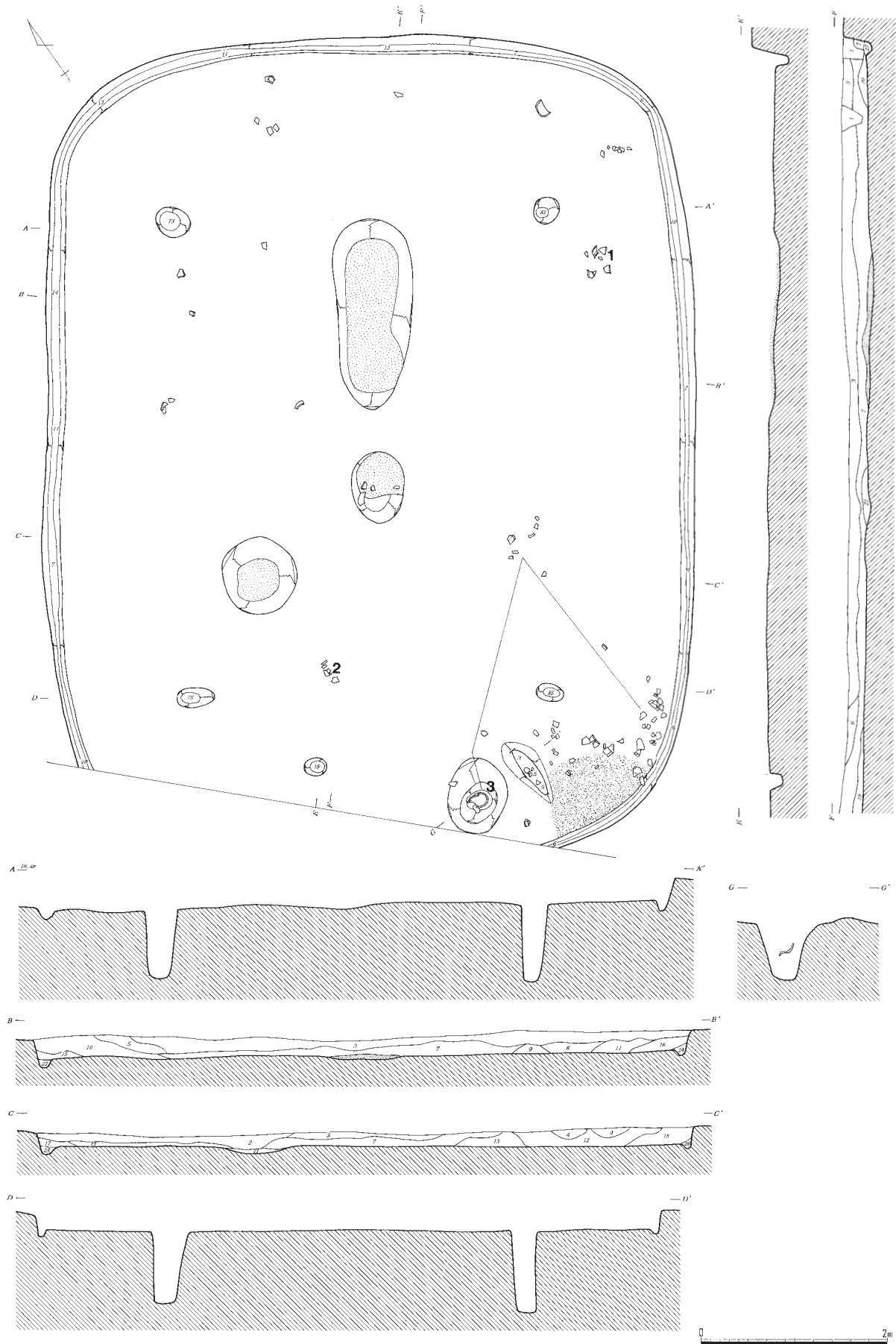
〔時期〕 古墳時代前期。

466号住居跡出土遺物 (第424図、第425図6～17)

壺形土器 (第424図1、第425図6～15)

第424図1は口縁部と体部以下を欠損する。頸部はくびれて口縁部は外反する器形である。頸部から肩部にかけてLRの単節縄文が施され、4個一単位の円形浮文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにおい橙色 (5YR6/6)、赤彩部ににおい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。東コーナーよりやや南寄り床面上から出土した。

第425図6は複合口縁部破片。口縁部外面には無節Rの縄文が施され、棒状浮文が4本貼付される。口縁部下端



第423図 466号住居跡 (1/60)

には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

7も複合口縁部破片。口唇端部にはRLの単節縄文が施される。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、縦方向に沈線が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色(10R4/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

8は短い複合口縁部破片。内面にはRLの単節縄文の端末結節が2段施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

9も短い複合口縁部破片。内面にはRLの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(5YR7/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

10は肩部破片。外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。上端には円形浮文が施される。色調はにぶい橙色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤彩された土器粒のような赤褐色粒子を多く含む。南コーナー付近床面上から出土した。

11は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。縄文帯下端には2条のS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色(10R4/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁際から出土した。

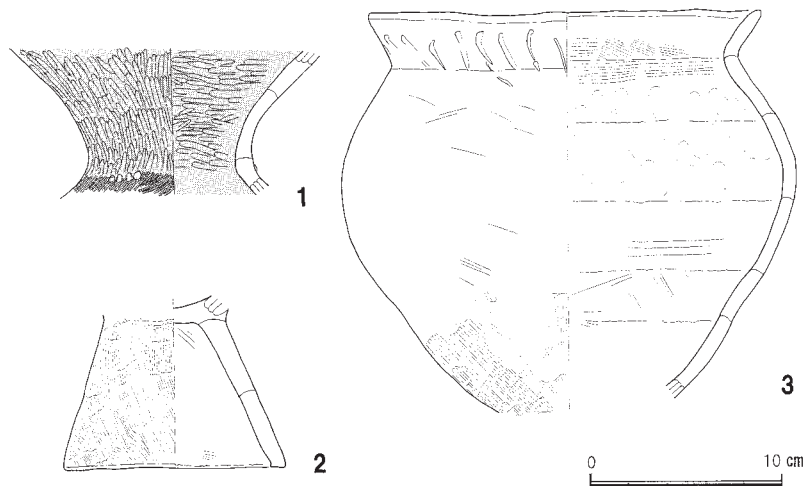
12・14は肩部破片。12はRLの単節縄文が羽状に施される。14はLRの単節縄文の端末結節が4段施される。色調は12がにぶい褐色、14はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。12は南コーナー寄り床面上から、14は住居跡中央から南寄り床面上から出土した。

13・15は肩部破片。13は撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、縄文帯の境目にはZ字状結節文、下端にはS字状結節文が施される。縄文帯内部には直径1cmの円形赤彩文が施される。15は付加条縄文が施される。いずれも縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は13がにぶい赤褐色(2.5YR5/4)、15は赤褐色(10R5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。13は炉内と炉周囲床面上から出土した。15は覆土中からの出土。

甕形土器(第424図2・3、第425図16・17)

第424図2は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径10.7cm。体部上半に最大径をもつ球状の体部から頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。肩部内面には明瞭な指頭痕が残る。内外面共に共にヘラナデされるが外面体部下半にはハケ目痕が残る。口縁部外面には、下から上の方向に先端が鋭い工具で沈線状に刻まれた痕がみられる。色調は外面が橙色(5YR6/6)、内面は明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。貯蔵穴内と周辺の覆土中から出土した。

3は脚台部破片。裾部径11.7cm。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白

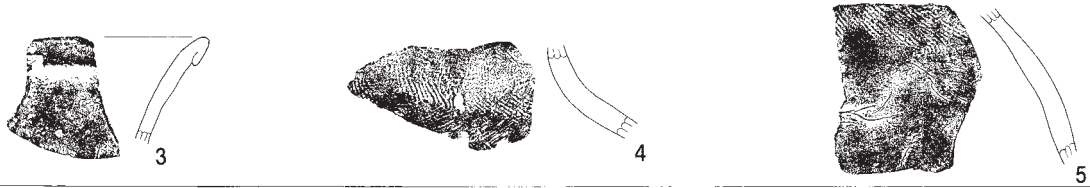


第424図 466号住居跡出土遺物(1/4)

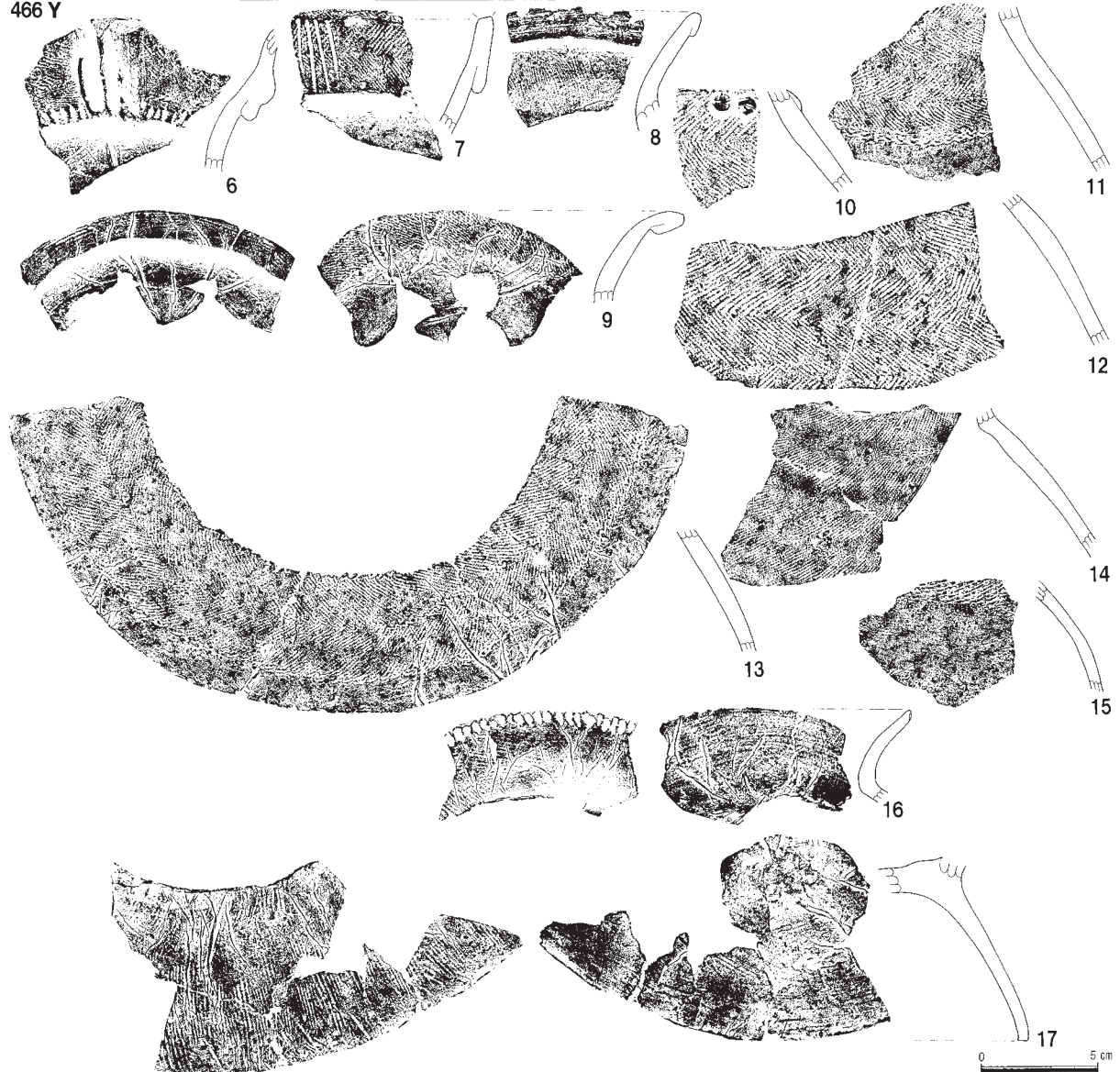
461 Y



462 Y



466 Y

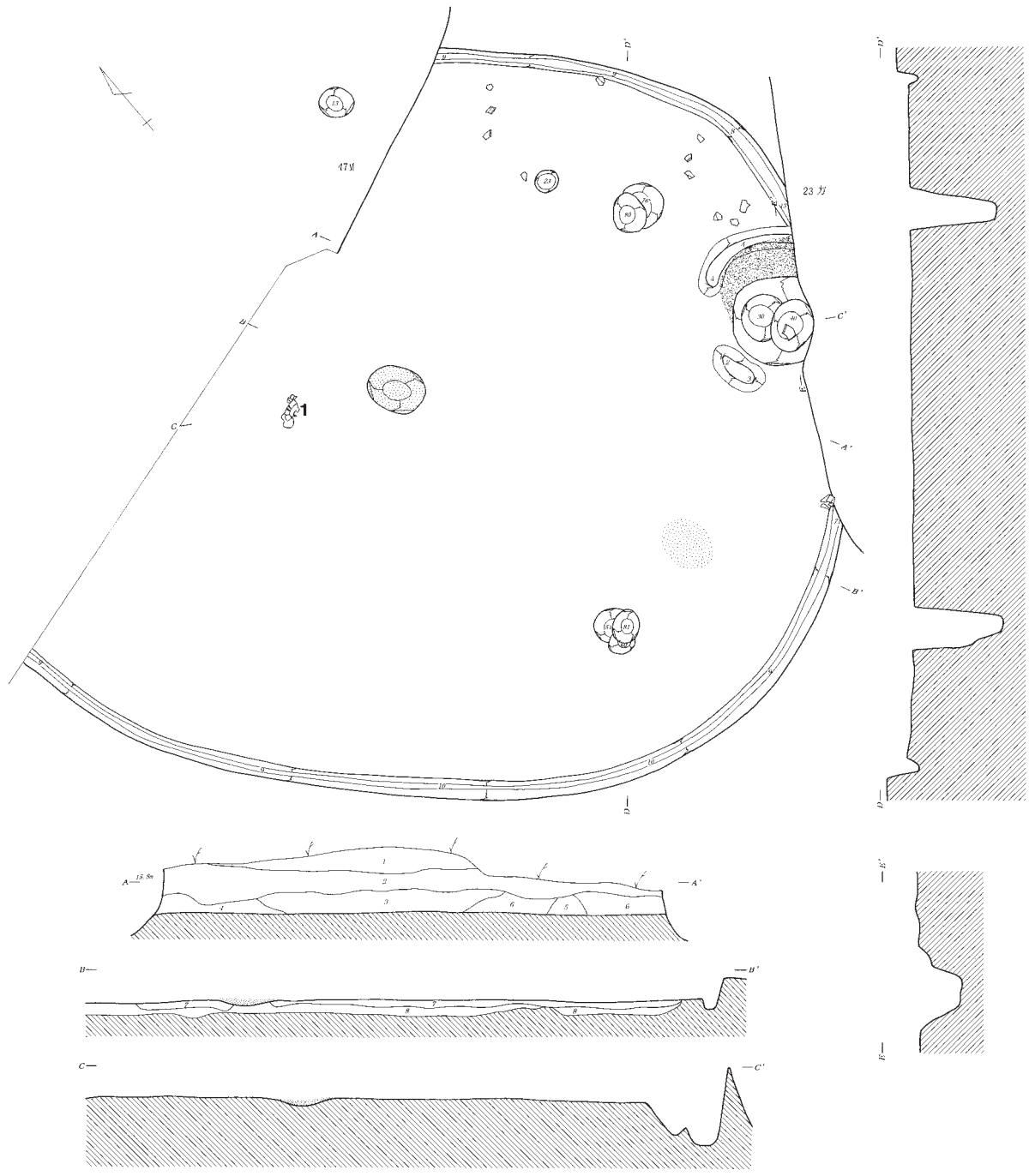


第425図 461・462・466号住居跡出土遺物 (1/3)

色粒子を含む。住居跡西寄り床面上から出土した。

第425図16は口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。頸部は屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。東コーナーから出土した。

17は脚台部破片。脚裾部へかけて内湾しながら開く器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴とその周囲から出土した。



第426図 468号住居跡 (1/60)

468号住居跡（第426図）

〔位置〕 25Ⅶ・71地点。

〔構造〕 23方・47Mに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×698cm。（主軸方位）N—55°—W。（壁高）7～10cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12～20cm・下幅4～11cm・深さ7～13cmを測る。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居ほぼ中央に位置する。53×42cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）南及び東コーナー部の2本が主柱穴の一部と思われる。他のピットは後世のものである。（貯蔵穴）南東壁下、北東に偏って位置する。不明×78cm・深さ40cmを測る。東側の掘り込み外に幅21～28cm・高さ3cm前後の凸堤を北東・南西に構築している。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

7層 黒褐色土（10YR3/1）。ロームブロックを含む。硬質。貼床。

8層 黒褐色土（10YR3/2）。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

南東コーナーに砂礫が混じる暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 床面上から土器片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

468号住居跡出土遺物（第427図、第440図1～5）

壺形土器（第427図1、第440図1・2）

第427図1は口頸部のみ残存する。口径5.5cm。口縁部は複合口縁を呈する。口縁部外面には4本一単位の棒状浮文が貼付される。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央付近床面上から出土した。

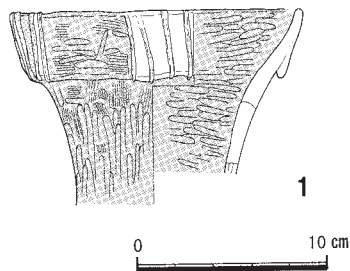
第440図1は複合口縁部破片。口唇端部にはLRの単節縄文が巡る。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、その上に数本の棒状浮文が貼付され、下端には刻みが施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

2は肩部破片。LRの単節縄文が羽状に施される。縄文帯内部には円形浮文が貼付される。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（第468図3～6）

3・4は口頸部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は3が黒褐色（7.5YR3/1）、4がにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

5・6は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調は5が灰褐色（5YR4/2）、6が黒褐色（5YR3/1）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。貯蔵穴・凸堤付近から出土した。



第427図 468号住居跡出土遺物（1/4）

469号住居跡（第428図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）748×665cm。（主軸方位）N—53°—E。（壁高）30～34cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅10～15cm・下幅3～7cm・深さ4～14cmを測り全周する。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。105×75cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cm前後の掘り込みをもつ。南側の掘り込み外に粘土を検出する。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴である。西壁下中央から僅かに東に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西壁下中央から北西に偏って位置する。53×47cmの楕円形を呈し、深さ45cmを測る。貯蔵穴東側に幅35cm前後・高さ1～2cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
 - 2層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子を多く含む。やや硬質。
 - 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
 - 4層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
 - 5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
 - 6層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
 - 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
 - 8層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
 - 9層 黒褐色土（10YR3/2）。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
 - 10層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。
- 北・東コーナーの柱穴周囲、西コーナーに近いピットの周囲に粘土が堆積していた。

〔遺物〕 南東コーナー付近の床面上に土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

469号住居跡出土遺物（第429図、第440図7～14）

壺形土器（第429図1、第440図7～9）

第429図1は口頸部のみ残存する。口径17.8cm。頸部は「く」字状にくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共に横方向に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・雲母を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。南コーナー付近床面上から出土した。

第440図7は複合口縁部破片。口唇端部と口縁部には無節Rの縄文が施される。縄文帯内部には直径1cmの円形赤彩文が3ヵ所に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10R4/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。西コーナーより出土した。

8は複合口縁部破片。口縁部外面にはLRの単節縄文が施され、下端には刻みが施される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・片岩を含む。覆土中からの出土。

9は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

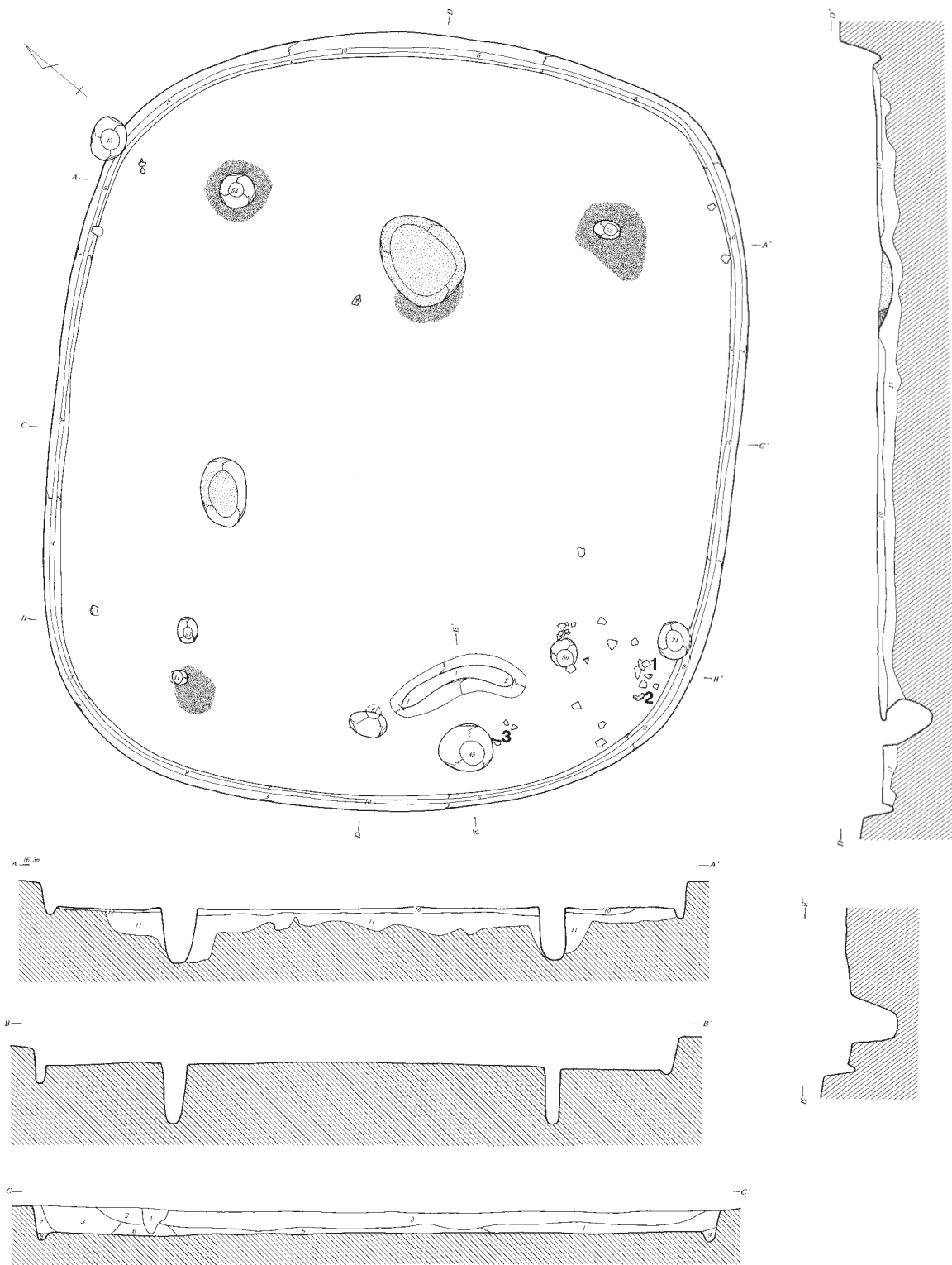
鉢形土器（第429図2）

底部と体部の1/5程度が残存する。底径4cm・推定口径17.8cm・器高5.5cm。平底の底部から立ち上がり、球状の体部を作出する。頸部は屈曲し、口縁部は外反する。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー床面上から出土した。

甕形土器（第429図3、第440図10～14）

第429図3は小型の台付甕形土器で、甕部の1/2程度が残存する。推定口径15cmを測る。あまり張りのない体部から立ち上がり、頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが、一部ハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴付近から出土した。

第440図10・11は口縁部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には柾目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色



第428図 469号住居跡 (1/60)

0 2m

調は10が灰褐色（5YR4/2）、11はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。10は覆土中からの出土、11は南コーナー付近から出土した。

12～14は体部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調は12がにぶい赤褐色（5YR5/4）、13が灰褐色（5YR4/2）、14は黒褐色（5YR3/1）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。12は覆土中、13は北西壁際付近、14は東コーナー付近から出土した。

471号住居跡（第430図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×362cm。（主軸方位）N-72°-E。（壁高）3～7cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から東に偏って位置する。61×53cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）検出された3本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）南コーナー付近に位置する。35×31cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。

〔覆土〕 確認面から浅いことと、攪乱が著しいため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを含むやや硬質の黒褐色土（7.5YR3/1）である。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

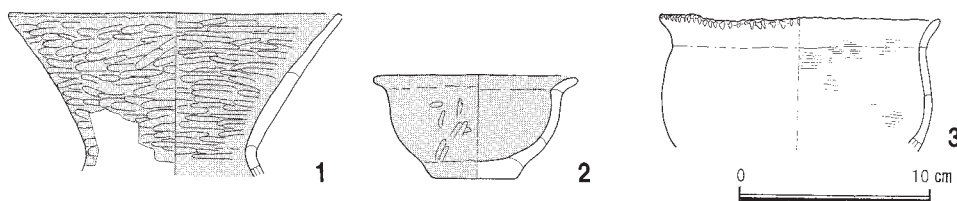
472号住居跡（第431図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）円形。（規模）径455cm。（主軸方位）N-17°-W。（壁高）10～12cmを測り、急斜に立ち上がる。（壁溝）上幅9～19cm・下幅3～8cm・深さ6～10cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面が認められる。（炉）住居中央から僅かに北に偏って位置する。77×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）北側と南側の2本が支柱穴の一部か。南壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南壁下中央から僅かに東に偏って位置する。49×45cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。炉跡の上部では焼土粒子が目立つ。軟質。
- 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや粘質。
- 8層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。



第429図 469号住居跡出土遺物（1/4）

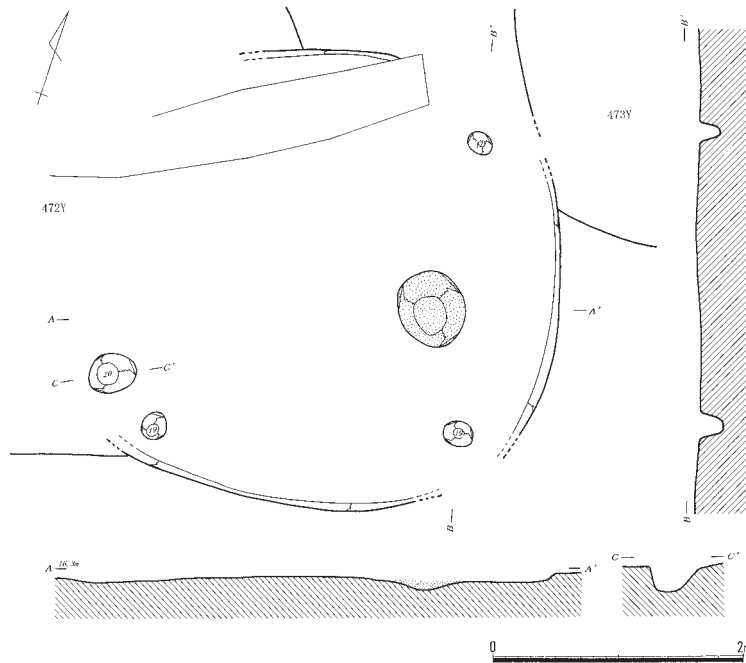
第4章 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

9層 暗褐色土 (10YR3/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

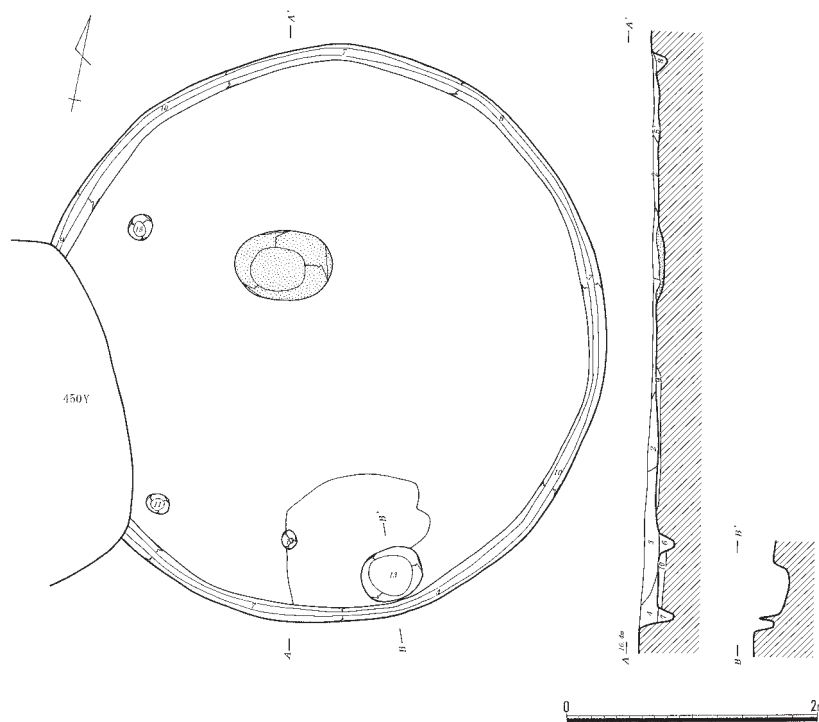
10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。貼床充填土。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第430図 471号住居跡 (1/60)



第431図 472号住居跡 (1/60)

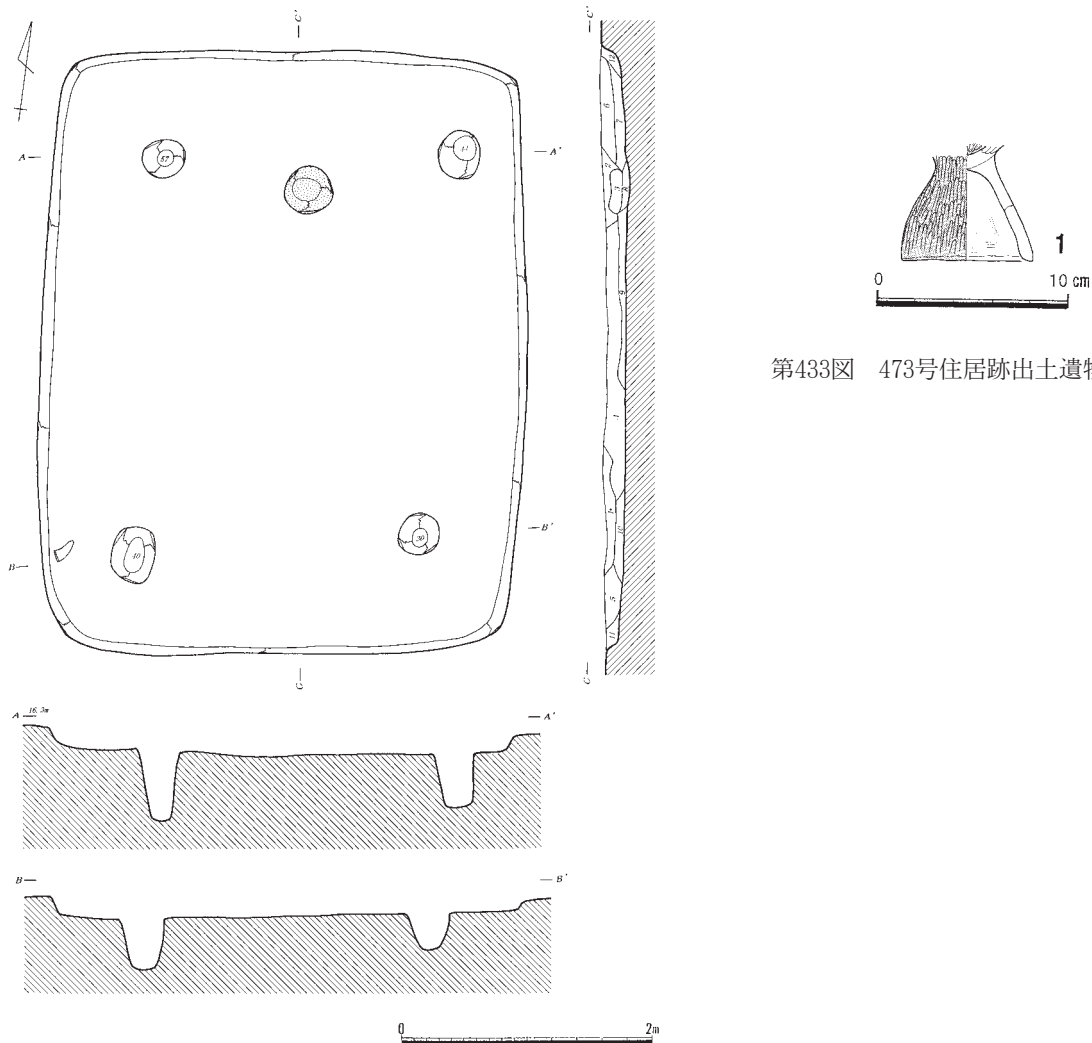
473号住居跡（第432図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）長方形。（規模）478×388cm。（主軸方位）N-8°-W。（壁高）13~20cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に平坦であるが軟弱である。（炉）住居中央から北に偏って位置する。径37cmの円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーの4本が主柱穴である。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 2層 にぶい赤褐色土（5YR4/3）。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。やや軟質。
- 3層 にぶい赤褐色土（5YR4/4）。焼土粒子・焼土ブロックを多く含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。



第433図 473号住居跡出土遺物（1/4）

第432図 473号住居跡（1/60）

10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。

11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

473号住居跡出土遺物 (第433図、第440図15~17)

壺形土器 (第440図15)

肩部破片。外面にはLRの単節縄文が羽状に施される。文様帯下端にはS字状結節文が巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

高坏形土器 (第433図1)

脚台部のみ残存する。裾部径7cm。裾部へかけて内湾しながら広がる器形である。外面は丁寧にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4)、赤彩部は赤褐色 (2.5YR4/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

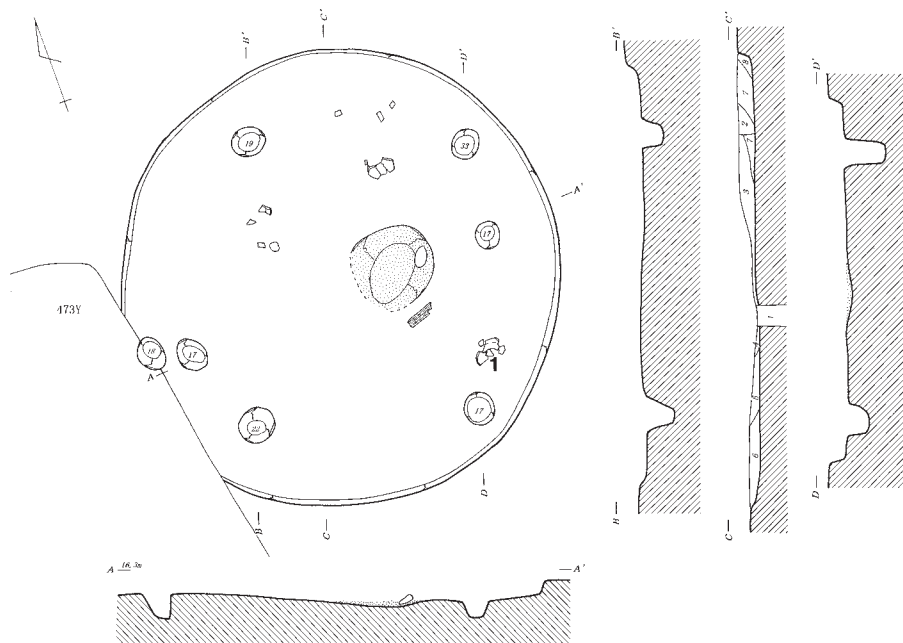
甕形土器 (第440図16・17)

16は口縁部破片、17は体部破片。16の口唇部外面には刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は16が褐灰色 (5YR4/1)、17が黒褐色 (5YR3/1) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

474号住居跡 (第434図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 473Yに切られる。(平面形) 円形。(規模) 径348cm。(主軸方位) N-67°-W。(壁高) 11~19cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 住居西側に硬化面を認める。(炉) 住居中央か



第434図 474号住居跡 (1/60)

ら東に偏って位置する。径65cmの円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。掘り込み外の東側に礫を配している。(柱穴) 4本が支柱穴になろうか。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を含む。炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕床面上に土器片が点在して出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

474号住居跡出土遺物 (第435図)

甕形土器 (1)

甕部の1/3程度が残存する。推定口径21.5cm。球状の体部から立ち上がり、頸部で強くくびれて口縁部は外反する器形である。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。東南壁際付近床面上から出土した。

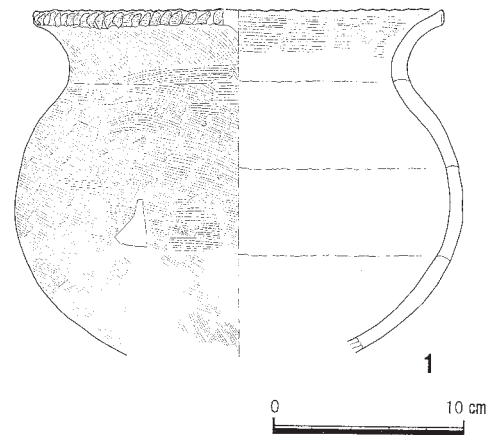
475号住居跡 (第436図)

〔位置〕67Ⅱ地点。

〔構造〕(平面形) 隅丸長方形。(規模) 576×503cm。(主軸方位) N-15°-W。(壁高) 39～42cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅11～23cm・下幅3～8cm・深さ5～17cmを測り全周する。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。南側に被熱のため広範囲に赤化している部分を検出する。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。140×84cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ9cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 各コーナーの4本が支柱穴である。南壁下中央を僅かに北に偏って位置する1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南壁下中央から僅かに東に偏って位置する。47×34cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。幅22～55cm・高さ1～5cmを測る凸堤が弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。



第435図 474号住居跡出土遺物 (1/4)

- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロック炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 11層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。炭化材片を含む。やや硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。
- 15層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを含む。やや硬質。貼床充填土。



第436図 475号住居跡 (1/60)

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上と覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕覆土中に焼土粒子・炭化物粒子を多く含み、床面が焼けているなど、焼失家屋の可能性が大きい。

475号住居跡出土遺物（第440図18～21）

壺形土器（18・19）

18は複合口縁部破片。内面にはLRの単節縄文が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

19は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（20・21）

20は口縁部破片、21は体部破片。20の口唇部外面には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。20は覆土中からの出土。21は床面上から出土した。

476号住居跡（第437図）

〔位置〕67Ⅱ地点。

〔構造〕469・475Yに切られる。（平面形）隅丸長方形か。（規模）不明×425cm。（主軸方位）N-28°-W。（壁高）17～23cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅9～17cm・下幅4～6cm・深さ2～8cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。63×57cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）2本が主柱穴の一部か。南東壁下の中央に位置する1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東壁下中央から僅かに北東に偏って位置する。61×53cmの楕円形を呈し、深さ21cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）。ローム粒子を含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 6層 褐色土（10YR4/4）。ロームブロック。硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 11層 黒色土（7.5YR2/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。炭化物粒子を含む。
- 12層 黒褐色土（2.5Y3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 14層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
- 15層 黄褐色土（2.5Y5/3）。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

南東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

476号住居跡出土遺物（第440図22～24）

甕形土器（22～24）

22は口縁部破片、23・24は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。口唇部外面には刻みが施される。色調は22が灰褐色（5YR4/2）、23・24は黒褐色（5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。22は北コーナー寄り床面上から出土した。23・24は覆土中からの出土。

477号住居跡（第438図）

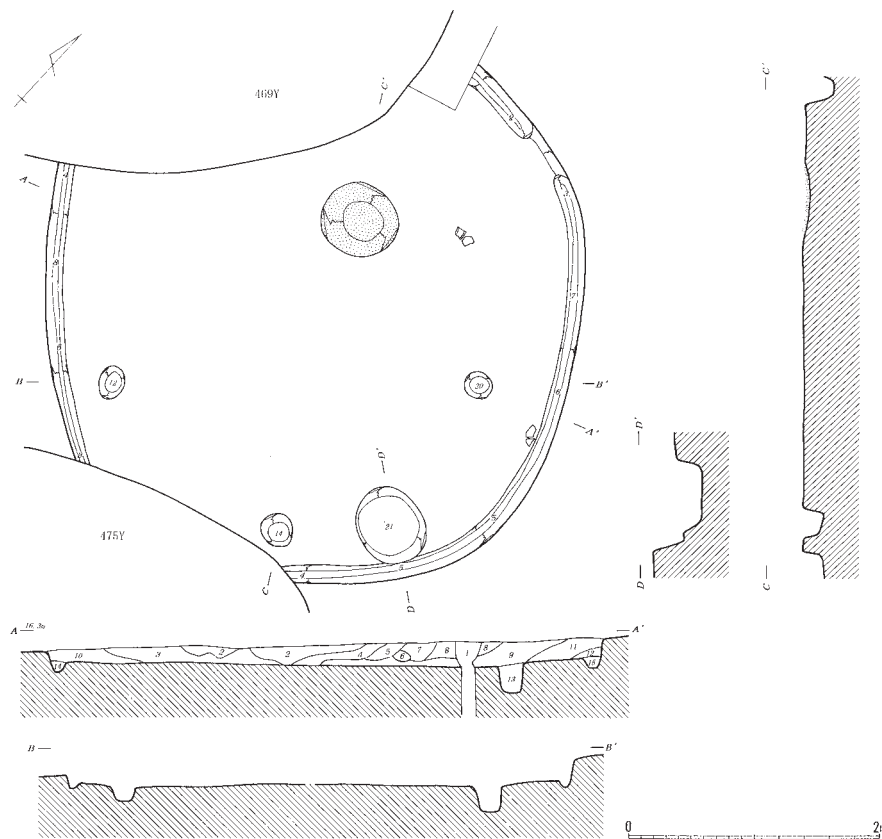
〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）505×475cm。（主軸方位）N-67°-E。（壁高）26～28cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅10～20cm・下幅4～8cm・深さ5～13cmを測り全周する。（床面）西側に硬化面を認める。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から東に偏って位置する。66×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）主柱穴は検出されなかった。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）西壁中央から僅かに南に偏って位置する。41×39cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。幅24～34cm・高さ4～5cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや軟質。



第437図 476号住居跡（1/60）

- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕貯蔵穴と住居跡西コーナー付近から多く出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

477号住居跡出土遺物 (第439図、第440図25～29)

壺形土器 (第439図1、第440図25)

第439図1は肩部から体部の1/2程度が残存する。肩部には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。縄文帯内部には直径1cmの円形赤彩文が施される。縄文帯下端には3条のS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。貯蔵穴内から出土した。

第440図25は複合口縁部破片。内面にはLRの単節縄文が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (第439図2、第440図26～29)

第439図2は甕部のみ残存する。口径23cm。球状の体部から立ち上がり、頸部は強くくびれて口縁部は外反する。口唇部外面にはやや左から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・片岩・橙色粒子を含む。西コーナー床面上から出土した。

第440図26・28は口縁部破片、27は体部破片。26・28の口唇部外面には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は26がにぶい橙色 (7.5YR6/4)、27が褐灰色 (7.5YR4/1)、28が黒褐色 (5YR3/1) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。26は貯蔵穴から、27・28は覆土中から出土した。

29は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

478号住居跡 (第441図)

〔位置〕23Ⅱ地点。

〔構造〕東側・西側調査区外。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)N-45°-W。(壁高)39～42cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅15～24cm・下幅4～8cm・深さ2～6cmを測る。(床面)壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉)住居中央から北西に偏って位置する。68×60cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴)東壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)調査区域外にあるものと思われる。幅22～28cm・高さ2cm前後の凸堤を確認する。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

5層 褐色土 (10YR4/6)。ロームブロックを多く含む。硬質。

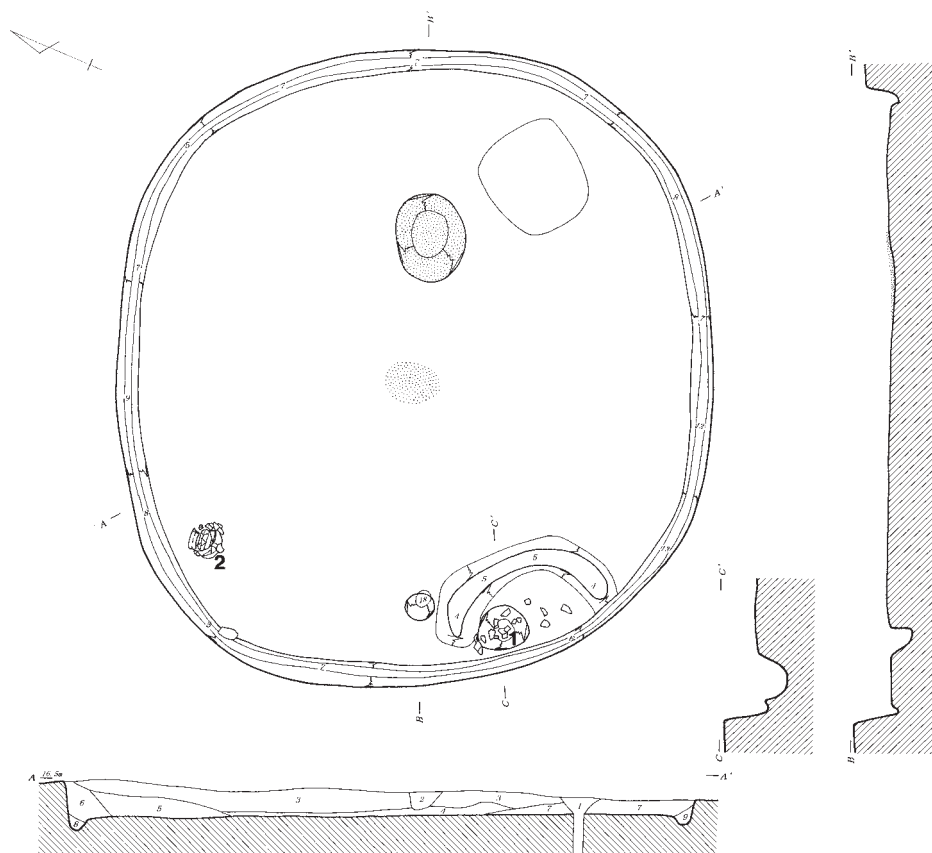
〔遺物〕 南コーナー床面上と覆土中から出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

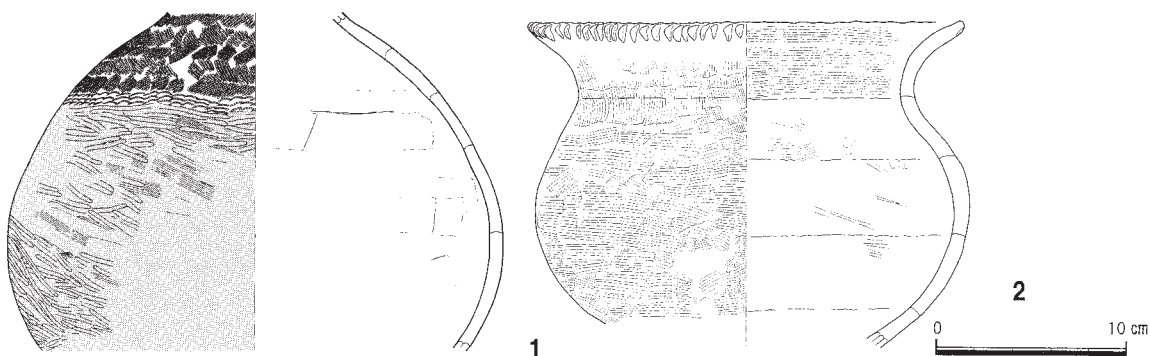
478号住居跡出土遺物 (第442図、第453図1・2)

壺形土器 (第442図1、第453図1)

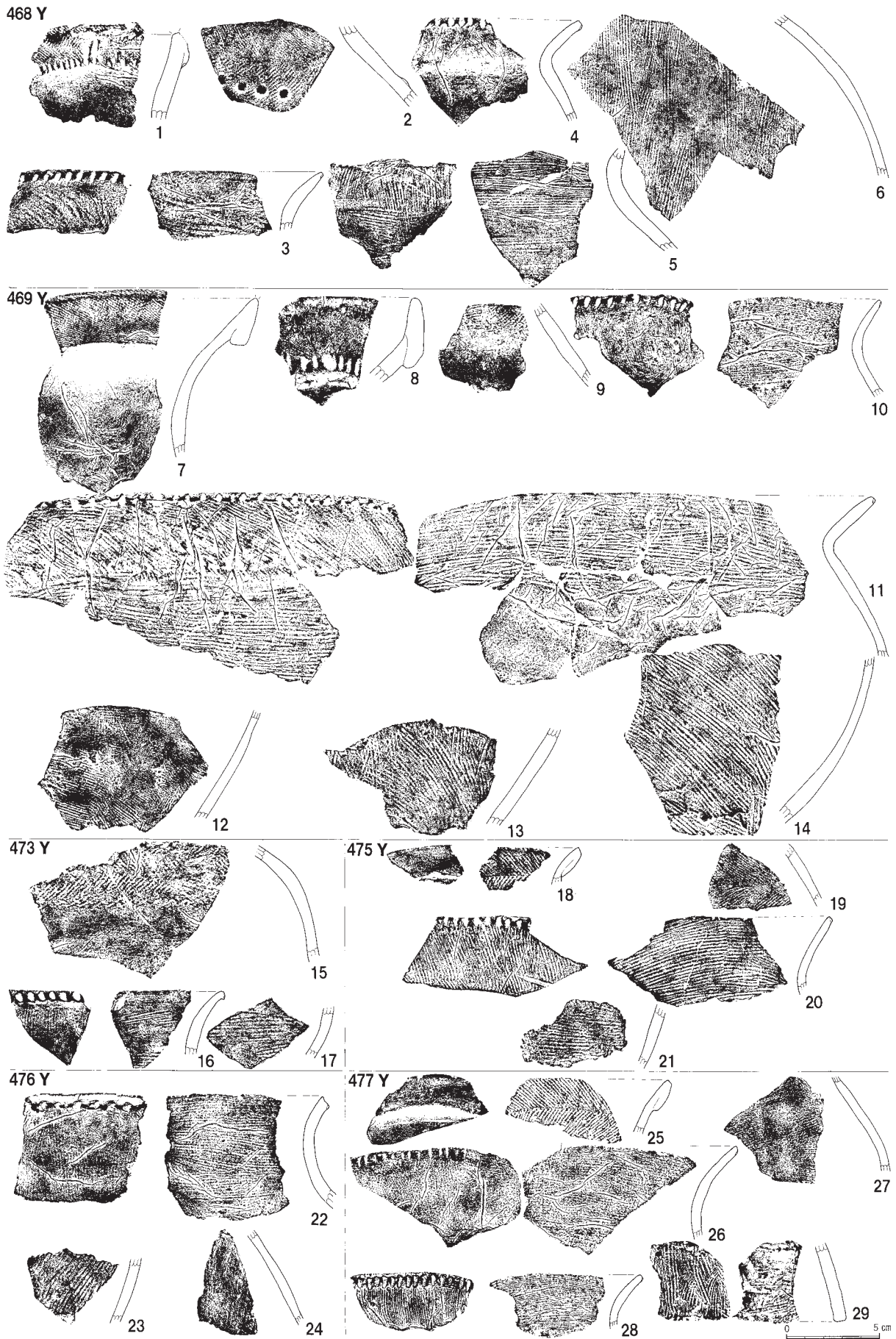
第442図1は口頸部2/3程度が残存する。口径5.5cm。複合口縁部は直立気味に立ち上がり外反する。外面は縦方向にヘラミガキされるが、複合口縁部下端と頸部にはハケ目痕が残る。内面は中位より上はヘラミガキされるが、以下ハケ目痕が残る。色調は外面がにぶい褐色 (7.5YR5/3)、内面は黒褐色 (7.5YR3/1) を呈する。胎土には細



第438図 477号住居跡 (1/60) 0 2m



第439図 477号住居跡出土遺物 (1/4)



第440図 468・469・473・475～477号住居跡出土遺物 (1/3)

礫・粗砂・橙色粒子を多く含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー床面上から出土した。

第453図1は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。下端には3条のS字状結節文が施される。色調は黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器(第453図2)

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。住居跡中央からやや西寄り床面上から出土した。

479号住居跡(第443図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

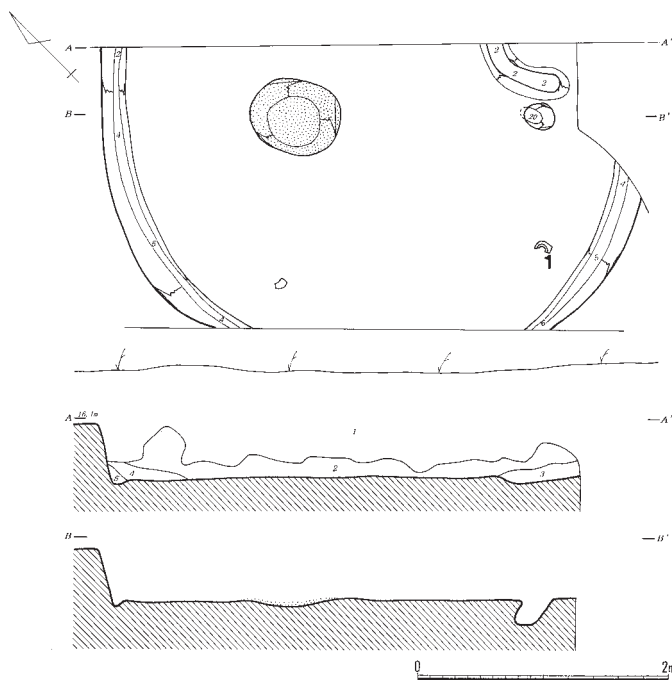
〔構造〕 480Yを切る。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 346×335cm。(主軸方位) N-53°-E。(壁高) 14~20cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。55×49cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 北及び東・西コーナーに近い3本が主柱穴の一部と思われるが、残りの1本が検出されなかった。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南西壁中央からやや南東に偏って位置する。43×37cmの楕円形を呈し、深さ23cmを測る。

〔覆土〕

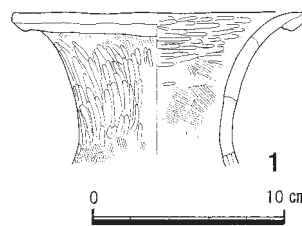
- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。



第441図 478号住居跡(1/60)

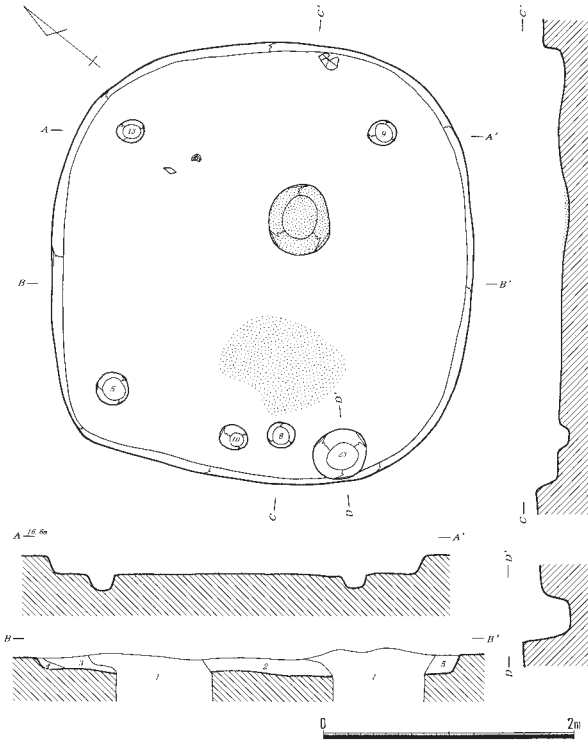


第442図 478号住居跡出土遺物(1/4)

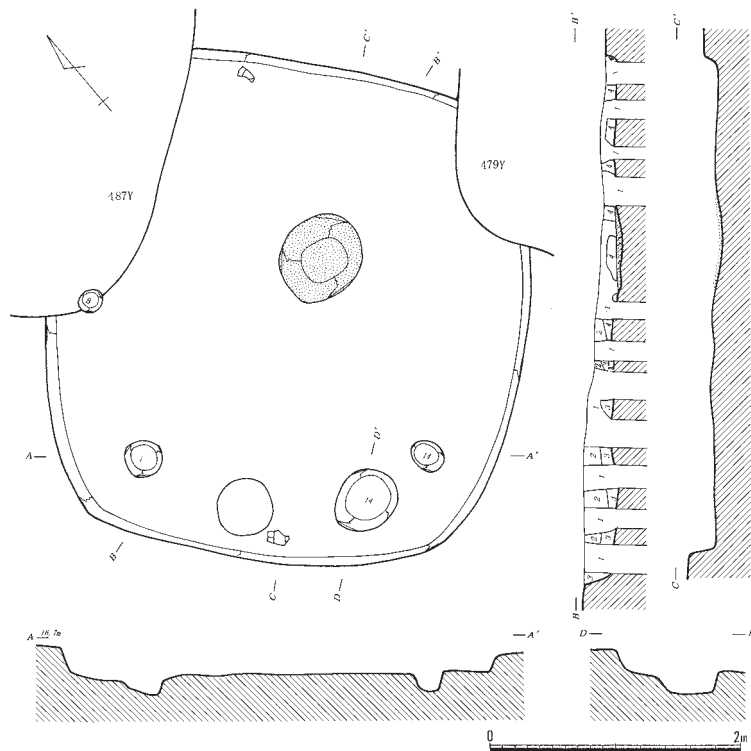
479号住居跡出土遺物（第453図3～5）

甕形土器（3～5）

3は口縁部破片、4・5は体部破片。3は口縁部外面には刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は3・4はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）、5はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。



第443図 479号住居跡（1/60）



第444図 480号住居跡（1/60）

いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。すべて覆土中からの出土。

480号住居跡（第444図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

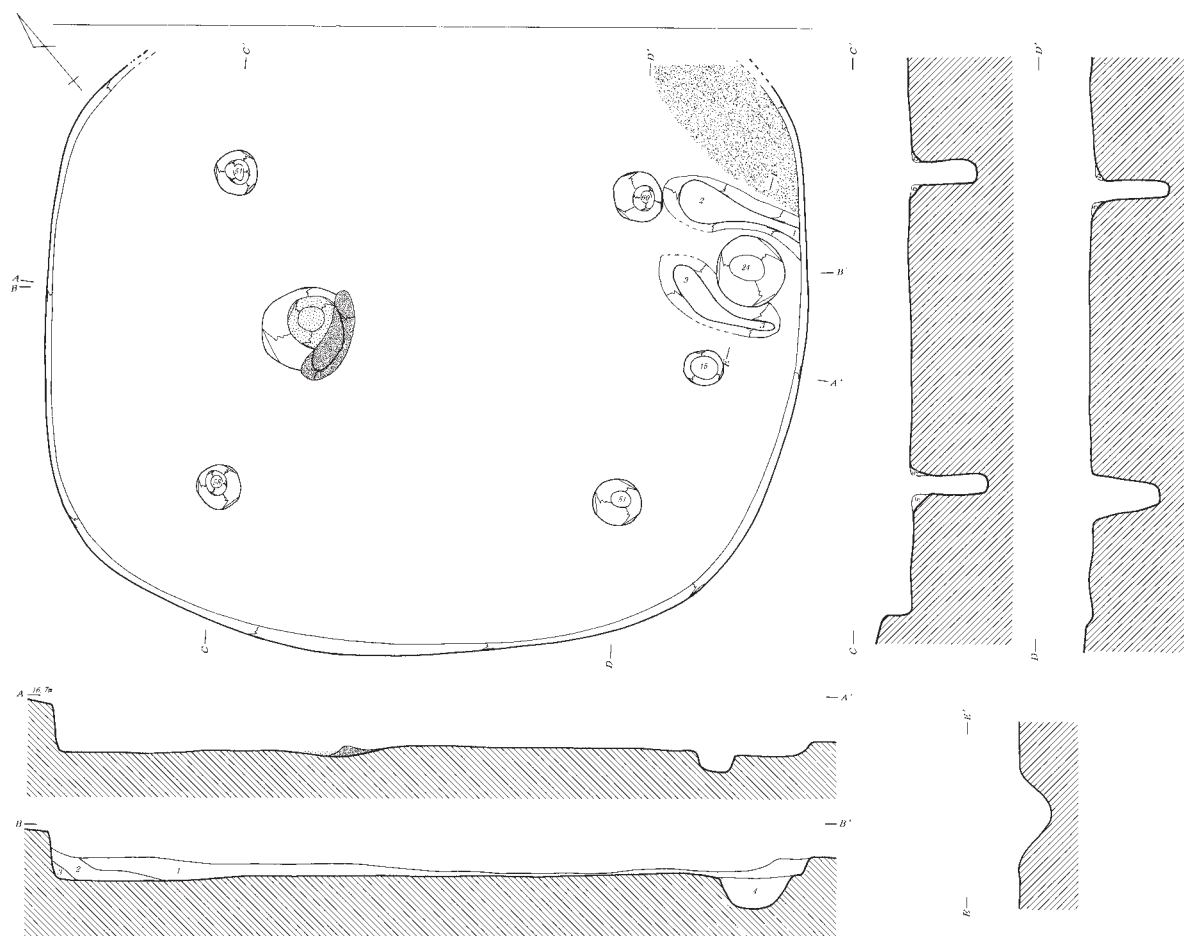
〔構造〕 479・487Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）397×380cm。（主軸方位）N-50°-E。（壁高）20~23cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。73×65cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。（柱穴）西及び南コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）南西壁中央から北西に偏って位置する。55×45cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 - 2層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
 - 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
 - 4層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
- 南東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第445図 481号住居跡（1/60）

480号住居跡出土遺物（第453図6～10）

壺形土器（6）

6は肩部破片。LRの単節縄文を羽状に施し、縄文帯上端と下端には3条のS字状結節文が施される。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。北東壁際床面上から出土した。

甕形土器（7～10）

7は口縁部破片、8は頸部破片、9～10は体部破片。7の口唇部外面には刻みが施される。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は7がにぶい褐色（7.5YR5/3）、8がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、9がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、10がにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。10は南西壁際から出土、他は覆土中から出土した。

481号住居跡（第445図）

〔位置〕67Ⅱ地点。

〔構造〕北東側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×610cm。（主軸方位）N-47°-W。（壁高）29～34cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。遺存状態は良好である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。80×73cmの楕円形を呈し、深さ3cmの掘り込みをもつ。西側の掘り込み外に粘土火皿を検出する。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴である。南壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）北西壁下中央からやや北東に偏って位置する。径52cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。貯蔵穴を挟むように幅36～42cm・高さ1～3cmの凸堤を構築している。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
 - 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。硬質。
 - 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
 - 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 南東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

481号住居跡出土遺物（第453図11～13）

壺形土器（11）

11は複合口縁部破片。口唇端部にはLRの単節縄文が施される。口縁部外面にはLRの単節縄文が施され、棒状浮文が3本貼付される。内面はヘラミガキされる。縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

鉢形土器（12）

口唇端部と口縁部にはRLの単節縄文が羽状に施され、文様帯下端には3条のS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（13）

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

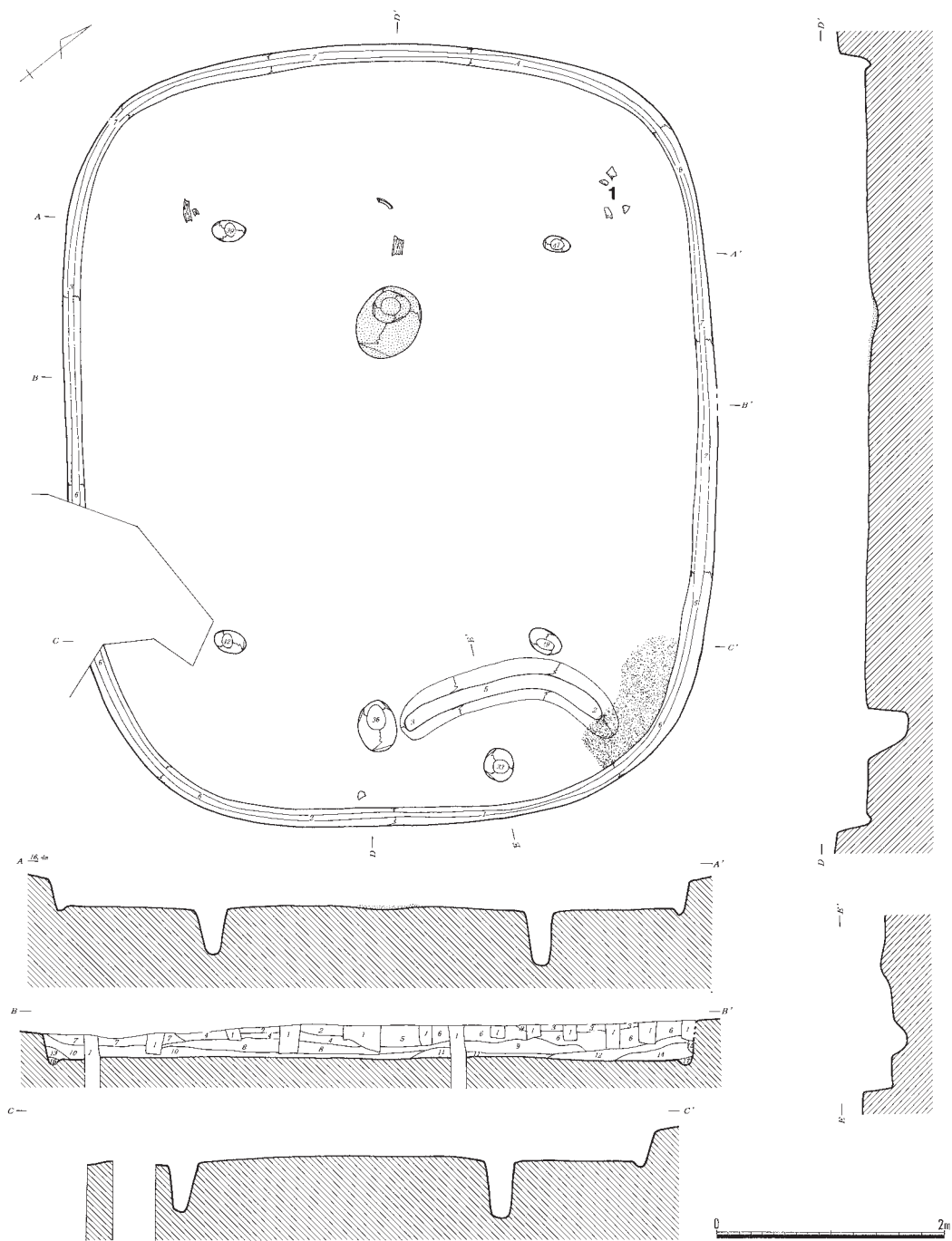
すべて覆土中から出土した。

482号住居跡（第446図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）隅丸長方形。（規模）684×572cm。（主軸方位）N—50°—W。（壁高）30～35cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12～17cm・下幅4～7cm・深さ7cmを測り全周すると思われる。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。径56cmの円形を呈する地床炉で、深さ7cmの掘り込みをもつ。（柱穴）各コーナーの4本が主柱穴である。南東壁下の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東コーナー壁下に位置する。29×26cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。幅32～36cm・高さ2～6cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕



第446図 482号住居跡（1/60）

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 9層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。やや硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 15層 褐色土 (10YR4/6)。ロームブロック。硬質。
- 16層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 17層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 床面上や覆土中から少数出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

482号住居跡出土遺物 (第447図1、第453図14~20)

壺形土器 (第453図14~16)

14は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

15は頸部破片。肩部にはLRの単節縄文が施され、縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色 (10YR4/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

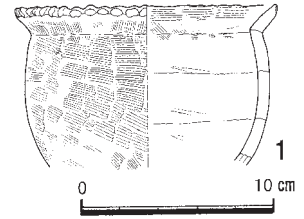
16は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が施される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器 (第447図1、第453図17~20)

第447図1は台付甕形土器の甕部の2/3程度が残存する。口径14cmを測る。最大径を口縁部に持ちあまり張りの無い体部から立ち上がり頸部で屈曲し、口縁部は外反する。右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。外面には全体に炭化物が付着する。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北コーナーから出土した。

第453図17は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

18は甕部破片。頸部は「く」字状に屈曲し口縁部は外反する。口唇部外面には柂目の板の小口部分で刺突された



第447図 482号住居跡出土遺物 (1/4)

刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。炉西側の床面上から出土した。

19は頸部破片、20は体部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は19は灰褐色（5YR4/2）、20が黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

483号住居跡（第448図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕（平面形）楕円形。（規模）362×346cm。（主軸方位）N-84°-E。（壁高）11~12cmを測り、42°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居ほぼ中央に位置する。49×38cmの楕円形を呈する地床炉で、4cmの掘り込みをもつ。東側は焼土は灰の掻き出しのためか。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 確認面から浅いため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子を僅かに含む、やや硬質の黒褐色土（10YR3/2）である。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

483号住居跡出土遺物（第453図21~23）

壺形土器（21）

体部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は赤褐色（10YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器（22・23）

22は口縁部破片、23は体部破片。22の口唇部外面には刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。ともに色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

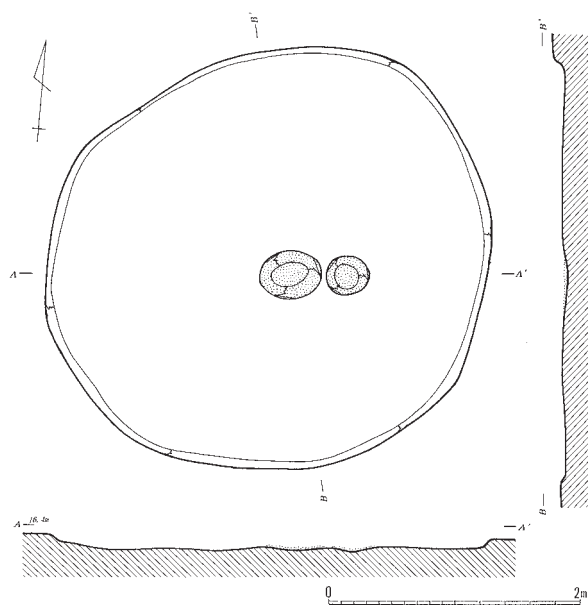
484号住居跡（第449図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 西側攪乱。（平面形）円形か。（規模）不明×335cm。（主軸方位）N-10°-E。（壁高）2~15cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から僅かに北に偏って位置する。60×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cm前後の掘り込みをもつ。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 確認面から浅いことと、攪乱が著しいため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む、やや硬質の黒褐色土（10YR3/2）である。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。



第448図 483号住居跡（1/60）

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

484号住居跡出土遺物（第453図）

壺形土器（第453図24）

肩部破片。東海西部地方に系譜をもつ土器である。上から順に6条一単位の櫛歯状工具による横線文・弧帯文・横線文・半円文が施される。文様帯以外はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調は赤褐色（10YR4/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

485号住居跡（第450図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 南西コーナーは攪乱される。486Yに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×650cm。（主軸方位）N-50°-E。（壁高）2～9cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全体に遺存状態は不良であるが、部分的に硬化面を認める。北側コーナー付近に被熱のため赤化している部分を検出する。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。95×75cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ8cmの掘り込みをもつ。（柱穴）ピットは不規則な配置をしており、深さも一定でないため主柱穴とは特定できない。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 確認面から浅いため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子を僅かに含むやや硬質の黒褐色土（10YR3/2）である。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

485号住居跡出土遺物（第453図25～30）

壺形土器（25～29）

25は複合口縁部破片。口縁部外面には、疑問も残るがオオバコの茎で縦方向に回転して施文したと思われる擬縄文が施される。口縁部下端には同じオオバコの茎で押捺された刻みが巡る。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

26～29は肩部破片。26・27は撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。28・29はLRの単節縄文が施される。いずれも縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。すべて色調は褐灰色（7.5YR4/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。

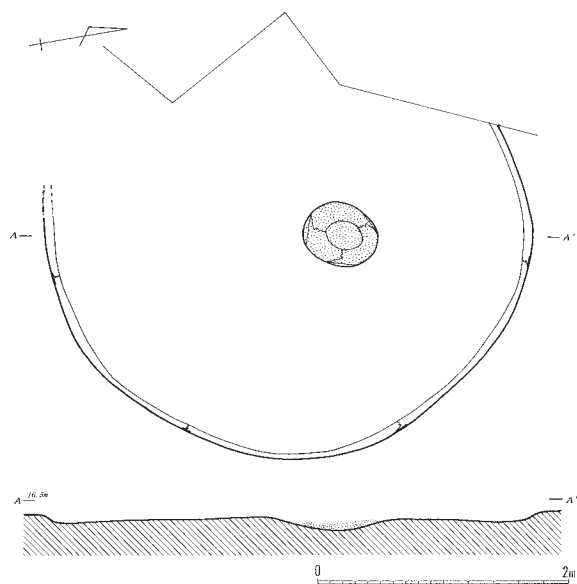
甕形土器（30）

甕部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

486号住居跡（第451図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 485Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）350×322cm。（主軸方位）N-62°-E。（壁高）22～30cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）



第449図 484号住居跡（1/60）

検出されなかった。(床面) 平坦だが全体に軟弱である。(炉) 住居中央からやや北東に偏って位置する。不明×23 cmの地床炉で、深さ1 cmの掘り込みをもつ。(柱穴) ピットが1本検出されたが住居に伴うかどうかは不明である。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

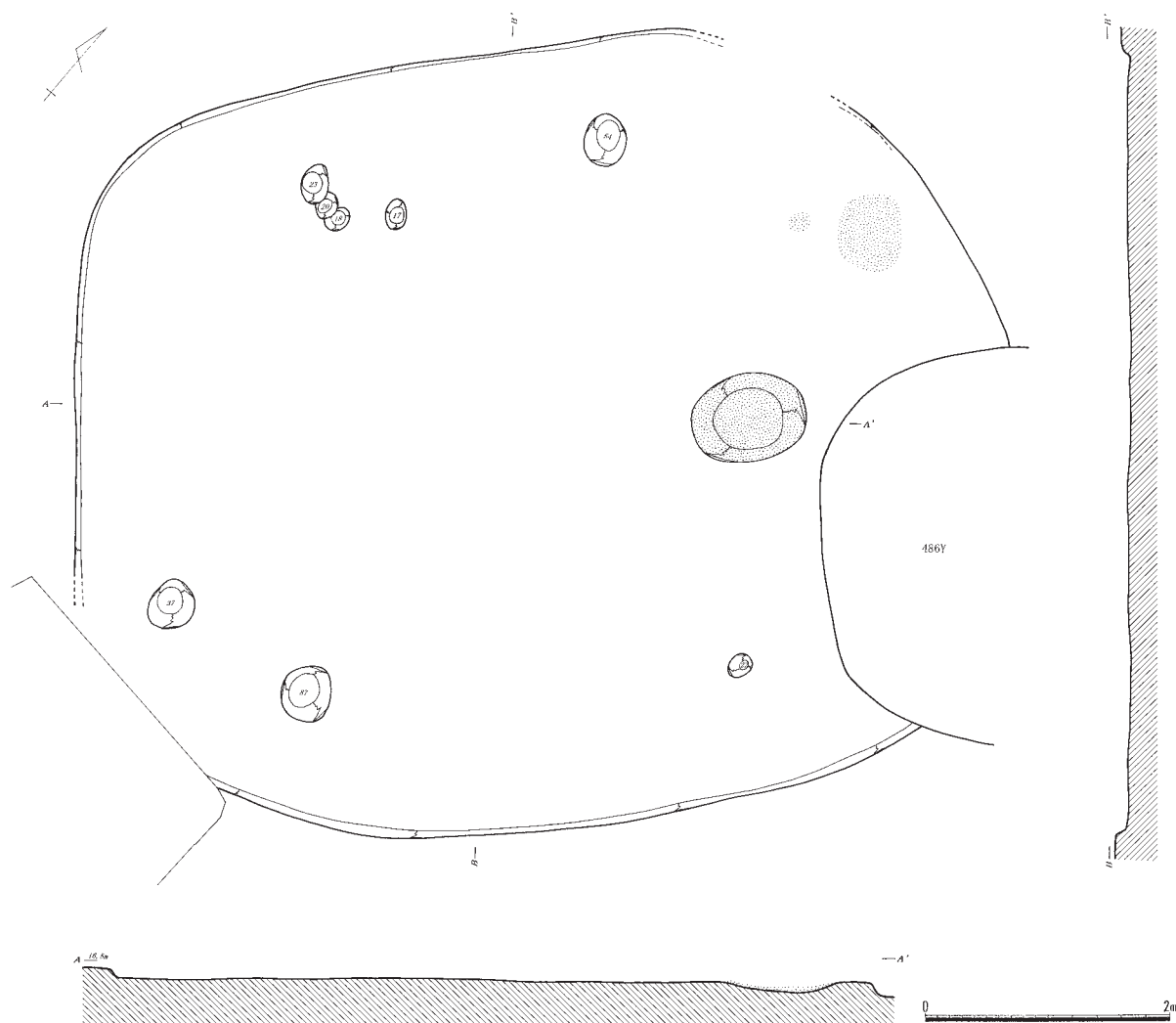
〔遺物〕 覆土中から僅かに破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

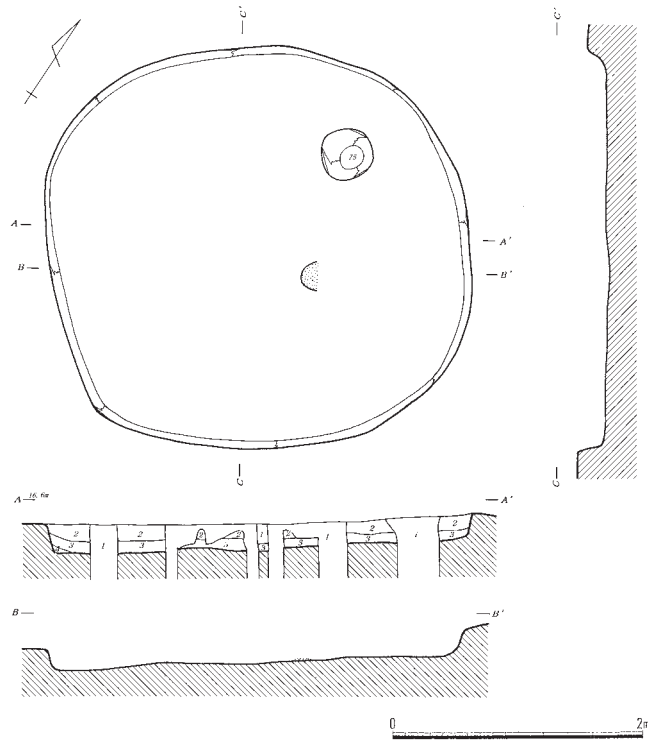
486号住居跡出土遺物 (第453図31)

甕形土器 (31)

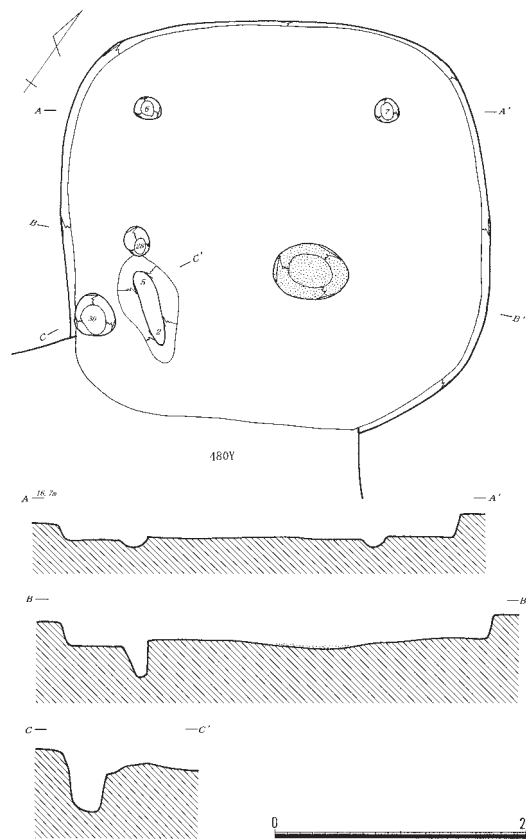
口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は褐灰色 (5YR4/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



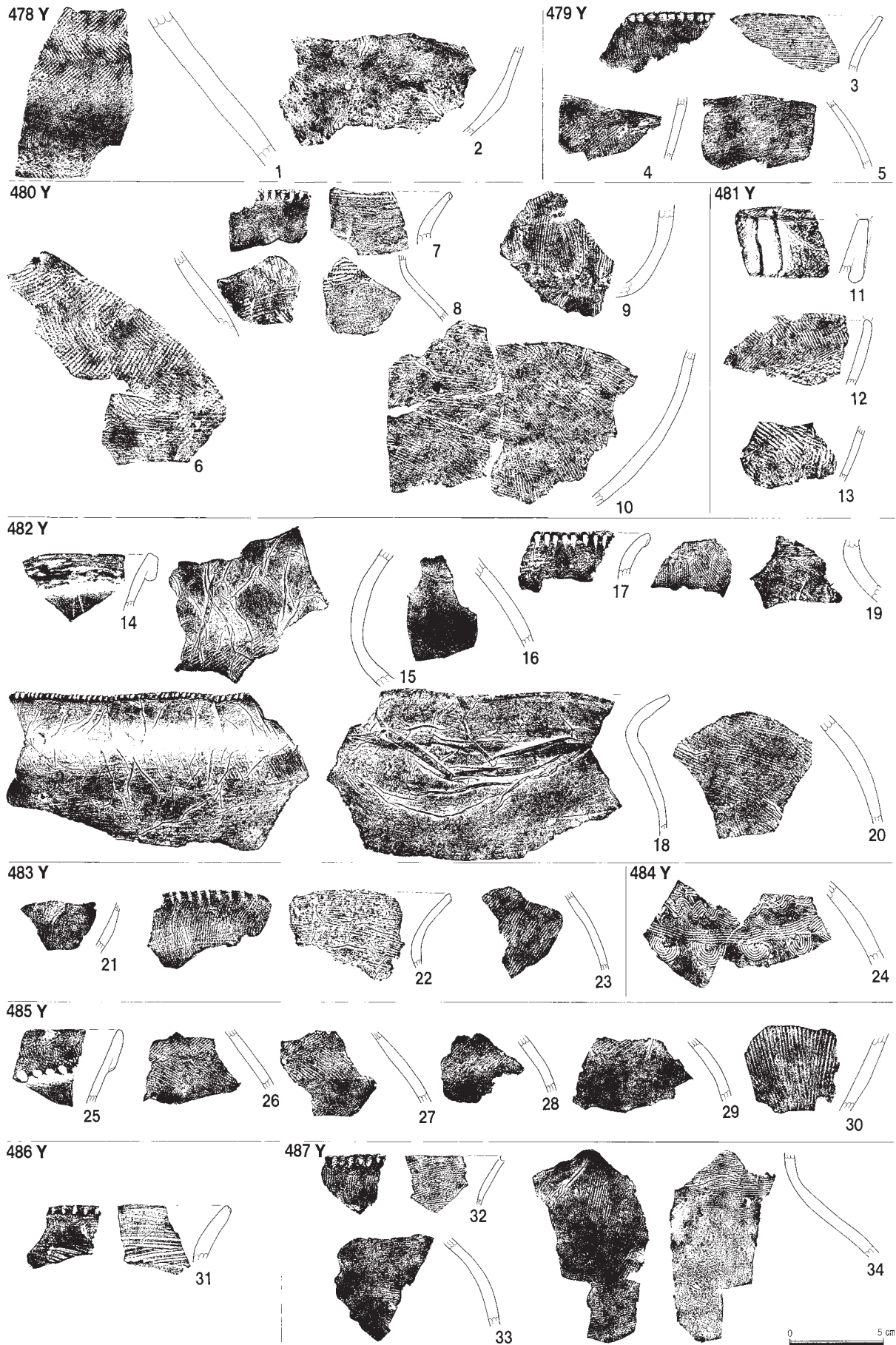
第450図 485号住居跡 (1/60)



第451図 486号住居跡 (1/60)



第452図 487号住居跡 (1/60)



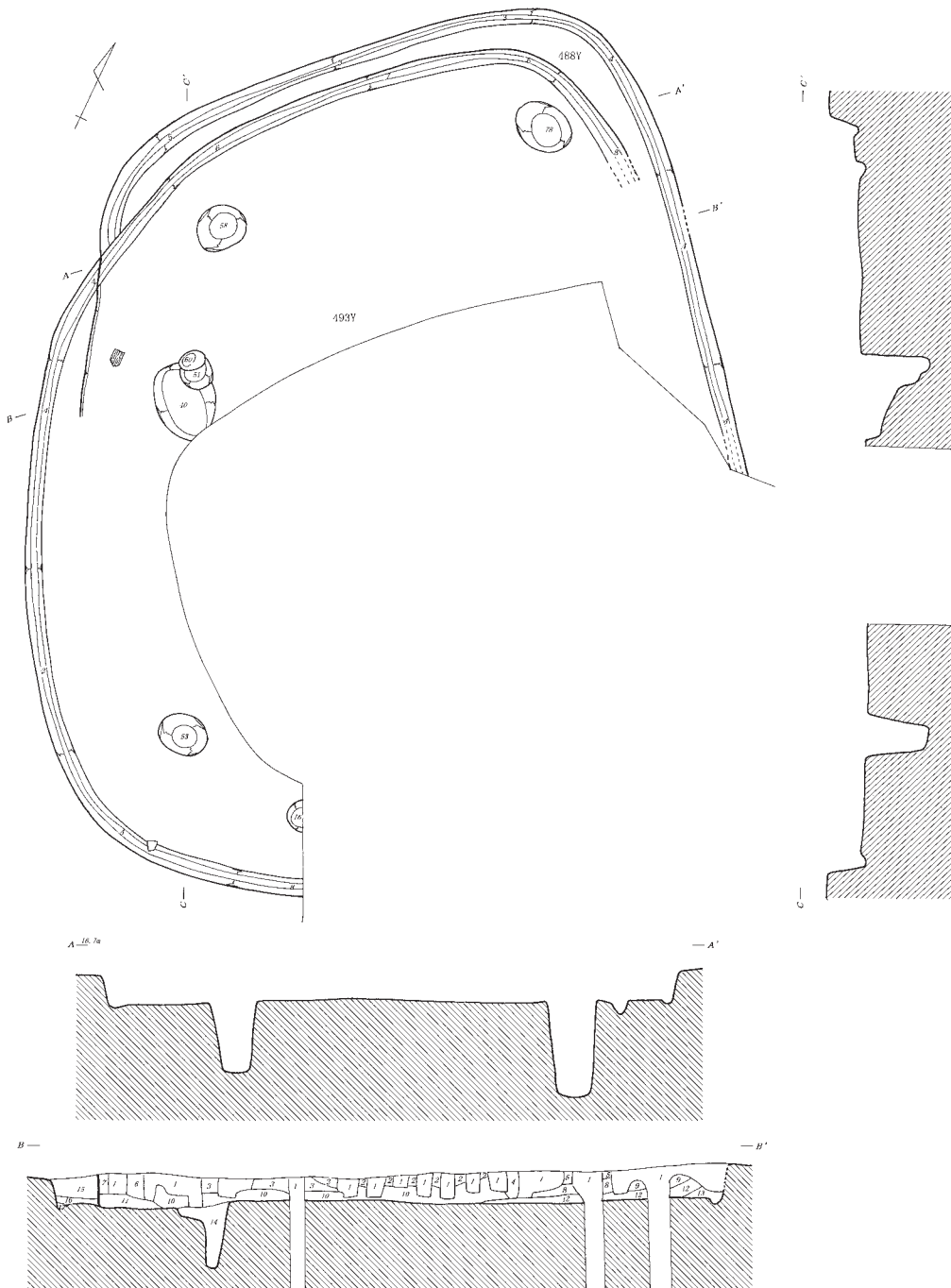
第453図 478~487号住居跡出土遺物 (1/3)

487号住居跡（第452図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 480Yを切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×340cm。（主軸方位）N-55°-E。（壁高）15~21cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央からやや北東に偏って位置する。60×43cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ2cmの掘り込みをもつ。（柱穴）北西及び北東コーナーに近い2本が支柱穴の一部になるうか。南西壁下の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南東コーナーに位置する。35×30cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。北側に幅22~44cm・高さ2~5cmの凸堤を直線状に構築している。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、上層がローム粒子を多く、ローム小ブロック・



第454図 488・493号住居跡 (1/60)

炭化物粒子を僅かに含む、やや硬質の黒褐色土（10YR3/2）、下層がローム粒子・ローム小ブロックを多く含む、硬質の黒褐色土（10YR3/1）である。

〔遺物〕 覆土中から僅かに破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

487号住居跡出土遺物（第453図32～34）

甕形土器（32～34）

32は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

33・34は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は33が黒褐色（5YR3/1）、34が灰褐色（5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。すべて覆土中からの出土。

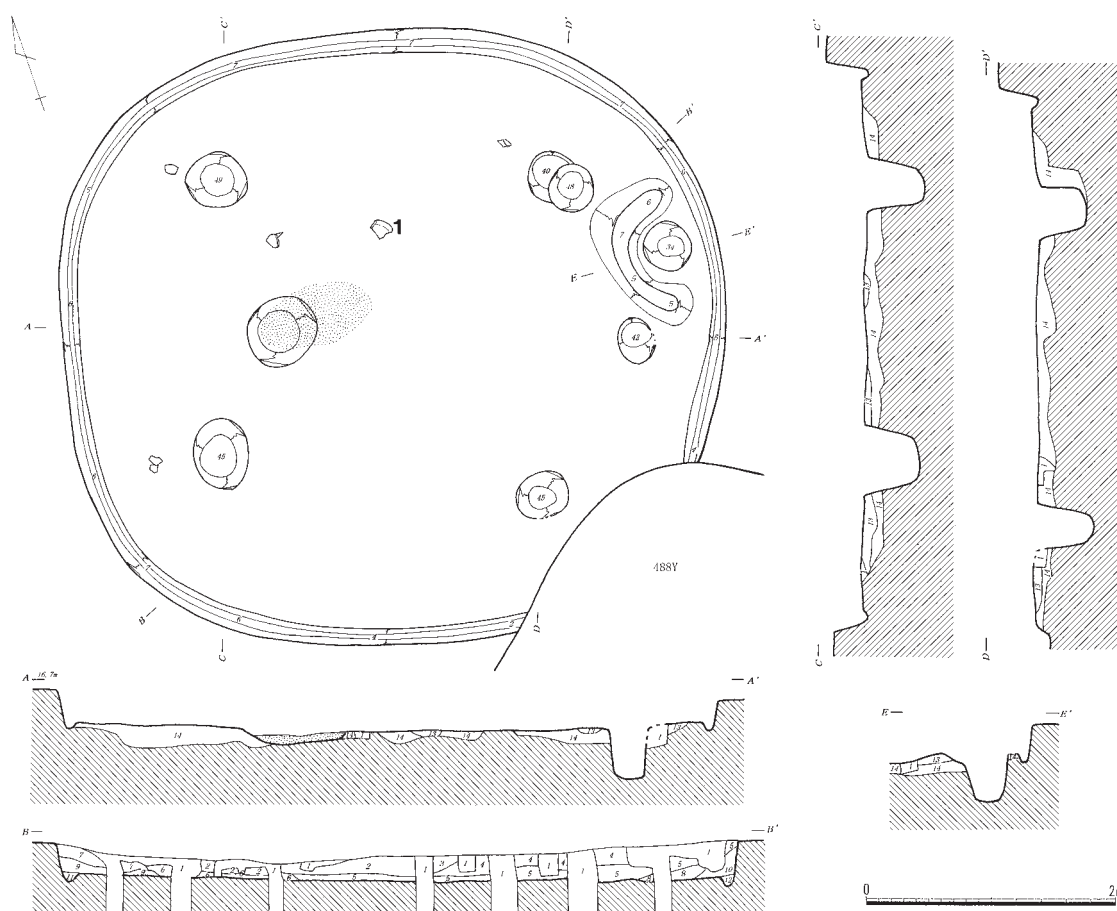
488号住居跡（第454図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 489・493Yを切る。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）23～27cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅11～16cm・下幅3～7cm・深さ3～7cmを測る。（床面）東側が攪乱により大きく破壊されているが、遺存している部分では硬化面が認められ良好であった。（炉）検出されなかった。（柱穴）493Yとの重複もあり、柱穴の帰属が不明である。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。



第455図 489号住居跡（1/60）

- 2層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 9層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。やや硬質。
- 12層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 13層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

489号住居跡 (第455図)

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 488Yに切られる。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 530×488cm。(主軸方位) N-69°-W。(壁高) 26～34cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅11～19cm・下幅4～7cm・深さ2～8cmを測り全周すると思われる。(床面) 部分的に硬化面を認める。(炉) 住居中央から西に偏って位置する。60×53cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。掘り込み外の被熱は灰の掻き出しのためであろうか。(柱穴) 各コーナーの4本が主柱穴である。南壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 東壁下中央から僅かに北に偏って位置する。径39cmの円形を呈し、深さ34cmを測る。幅18～40cm・高さ5～7cmを測る凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 10層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 11層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 12層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 13層 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)。ロームブロック。硬質。貼床。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。

堆積状態が不整合で、埋め戻された感が強い。

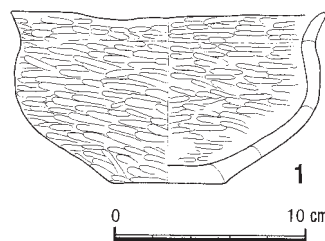
〔遺物〕 床面上に土器片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

489号住居跡出土遺物（第456図、第463図1～6）

壺形土器（第463図2・3）

2・3は同一個体の肩部破片。反捲りLとRの端末結節縄文を羽状に施す。縄文帯以外はヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。



第456図 489号住居跡出土遺物（1/4）

鉢形土器（第456図1）

1/2程度が残存する。底径6cm・推定口径16.5cmを測る。平底の底部から外反しながら立ち上がり、頸部でくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共に横方向に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を多く含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央からやや北寄りの床面上から出土した。

甕形土器（第463図1・4～6）

1は輪積甕の頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

4は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。

5・6は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は5がにぶい赤褐色（5YR5/4）、6は黒褐色（5YR3/1）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。

すべて覆土中から出土した。

490号住居跡（第457図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 南東側が大きく攪乱されている。（平面形）不明。（規模）不明×360cm。（主軸方位）N-40°-E。（壁高）2～12cmを測る。（壁溝）上幅12～15cm・下幅4～7cm・深さ3～8cmを測る。（床面）部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から北東に偏って位置する。68×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ3cmの掘り込みをもつ。（柱穴）支柱穴は検出されなかった。西壁下の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西壁下中央からやや南に偏って位置する。53×34cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。

〔覆土〕 攪乱が著しく詳細は不明。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

491号住居跡（第458図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 129・130・137Jを切る。19Hに切られる。（平面形）隅丸長方形。（規模）715×633cm。（主軸方位）N-60°-E。（壁高）41～43cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅10～17cm・下幅4～7cm・深さ3～10cmを測り全周する。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。北西側に被熱で赤化している部分を検出する。（炉）住居中央からやや北東に偏って位置する。83×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込み

をもつ。(柱穴) 各コーナーの4本が支柱穴である。西壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 南コーナーに位置する。径44cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 床面上に土器片と炭化材が点在している。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 床面上に炭化材が散乱しているなど、焼失家屋の可能性はある。

491号住居跡出土遺物 (第463図7～13)

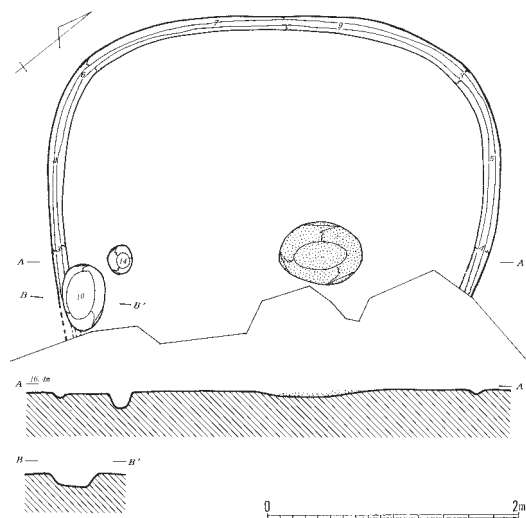
壺形土器 (7～12)

7は複合口縁部破片。口唇端部にRLの単節縄文が施される。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。境目にはS字状結節文が施される。縄文帯の上には棒状浮文が貼付される。色調は浅黄橙色 (7.5YR8/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

8は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

9は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端には3条のS字状結節文が施される。縄文帯内部には鋸歯文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

10は頸部から肩部にかけての破片。肩部文様帯は上から付加条縄文・LRの単節縄文の横回転・付加条縄文・



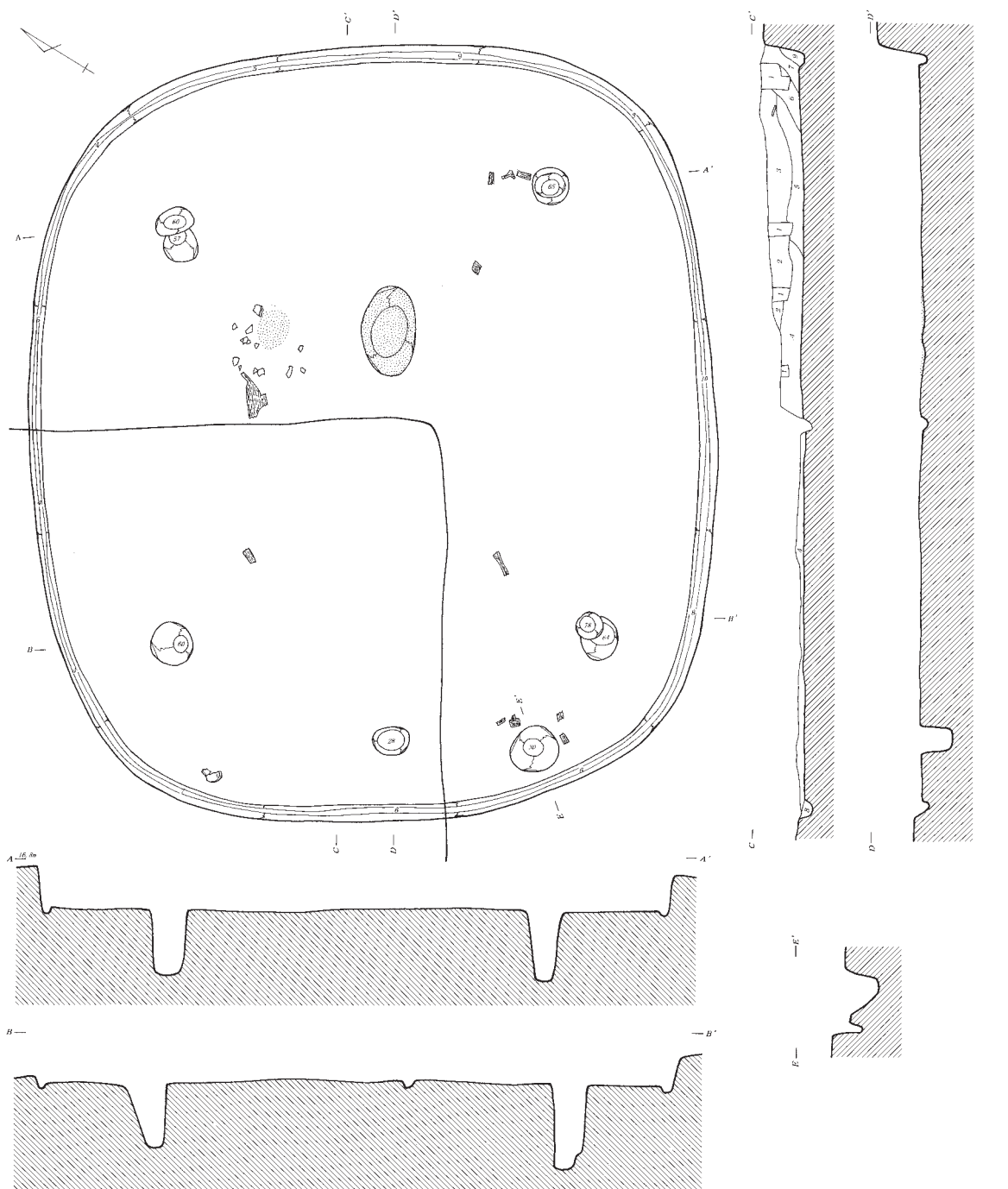
第457図 490号住居跡 (1/60)

L Rの単節縄文の縦回転が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は暗赤褐色（10R5/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

11・12は同一個体の体部破片。肩部にはL Rの単節縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10R4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央付近床面上から出土した。

甕形土器 (13)

口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

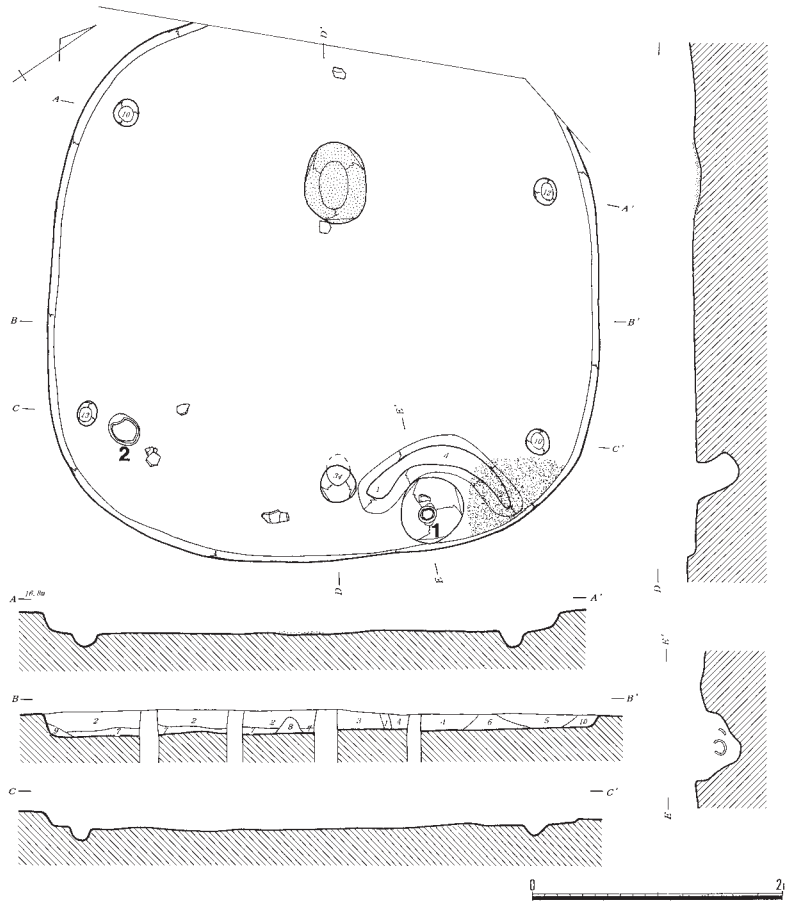


第458図 491号住居跡 (1/60)

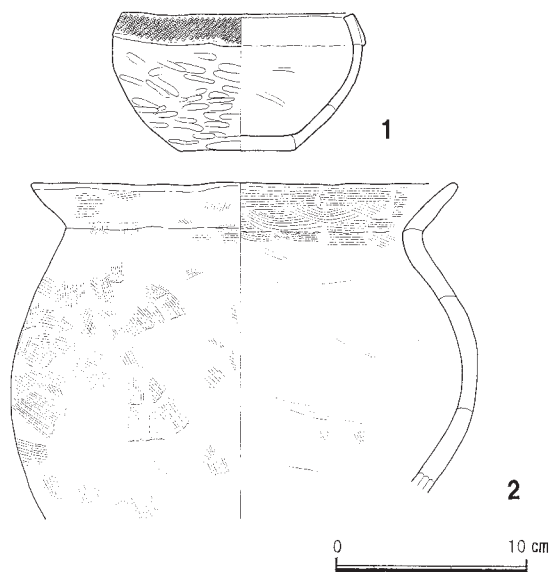
492号住居跡（第459図）

〔位置〕 67Ⅱ地点。

〔構造〕 北西側調査区外。（平面形）隅丸正方形か。（規模）不明×436cm。（主軸方位）N—50°—W。（壁高）15～23cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）住居北側に硬化面を認める。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。64×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）



第459図 492号住居跡（1/60）



第460図 492号住居跡出土遺物（1/4）

各コーナーの4本が支柱穴である。東壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 東壁中央からやや北に偏って位置する。50×47cmの楕円形を呈し、深さ27cmを測る。幅25～32cm・高さ1～4cmの凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。部分的に炭化材小片を含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を含む。硬質。
- 8層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ロームブロック。硬質。
- 9層 暗褐色土(7.5YR3/4)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 10層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積する。

〔遺物〕 貯蔵穴と南コーナー付近床面上に土器が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

492号住居跡出土遺物(第460図、第463図14・15)

鉢形土器(第460図1)

小型で碗状を呈し、2/3程度が残存する。口径12.2cm・底径6cm・器高7.1cmを測る。平底の底部から立ち上がり、複合口縁部は内湾し、碗状の器形を呈する。口縁部外面にはLRの単節縄文が施される。縄文帯以外は内外面共にヘラミガキされる。体部には内外面共に焼成時の黒斑がみられる。色調はにぶい橙色(5YR6/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。貯蔵穴内から出土した。

甕形土器(第460図2、第463図14・15)

第460図2は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径12.5cm。球状を呈する体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南コーナー床面上から出土した。

第463図14は台付甕形土器の甕部破片。球状の体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には刻みが施される。色調は黒褐色(5YR3/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南コーナー付近から出土した。

15は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

493号住居跡(第454図)

〔位置〕 67Ⅱ地点

〔構造〕 488Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 17～28cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅11～16cm・下幅3～7cm・深さ2～9cmを測る。(床面) 平坦だが軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 488Yと重複しているため、柱穴の帰属については不明である(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 15層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

16層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。

17層 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

〔遺物〕 破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

493号住居跡出土遺物 (第463図16～18)

壺形土器 (16・17)

16・17は同一個体の肩部破片。無節Rの縄文が2段施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は16がにぶい橙色 (7.5YR6/4)、17が赤褐色 (10R4/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。床面上から出土した。

甕形土器 (18)

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残り、炭化物の付着もみられる。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

495号住居跡 (第461図)

〔位置〕 71地点。

〔構造〕 西側調査区外。16・24方に切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 9～11cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 攪乱。

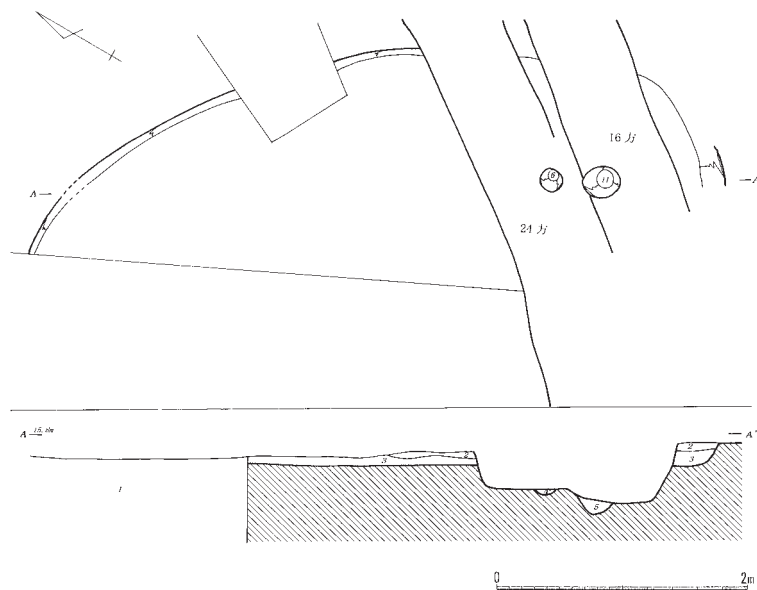
2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を僅かに含む。やや軟質。

3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。



第461図 495号住居跡 (1/60)

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

495号住居跡出土遺物（第463図19・20）

甕形土器（第463図19・20）

いずれも口縁部破片。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。色調はともに灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。

496号住居跡（第462図）

〔位置〕 5Ⅲ地点。

〔構造〕 365Y・472Dに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）13～19cmを測り、58°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。大部分が攪乱により破壊されている。（炉）深さ6cmの掘り込みをもつ。大部分が攪乱に破壊されているため規模は不明である。（柱穴）住居東側にある2本のピットが支柱穴の可能性がある。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 耕作による攪乱が著しいため詳細は不明である。

〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が出土した。

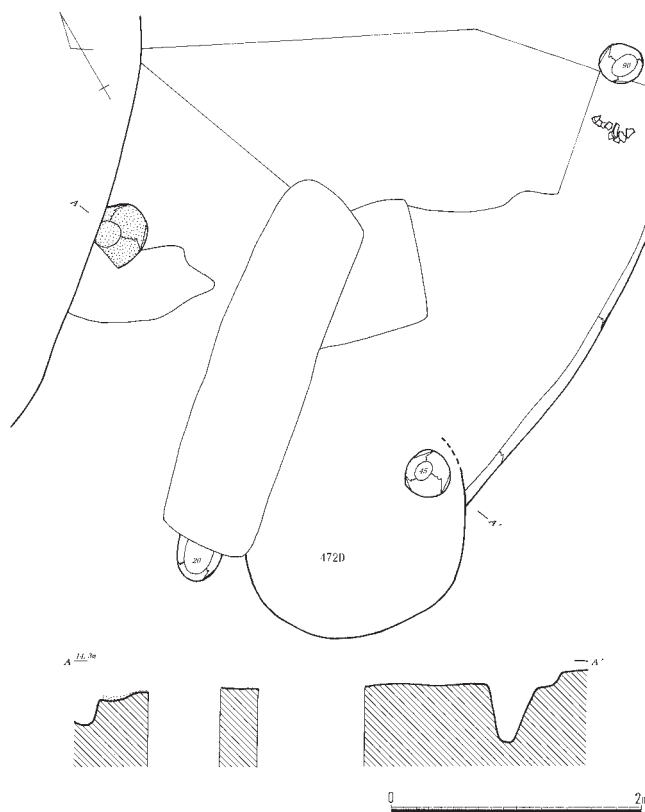
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

496号住居跡出土遺物（第463図21～26）

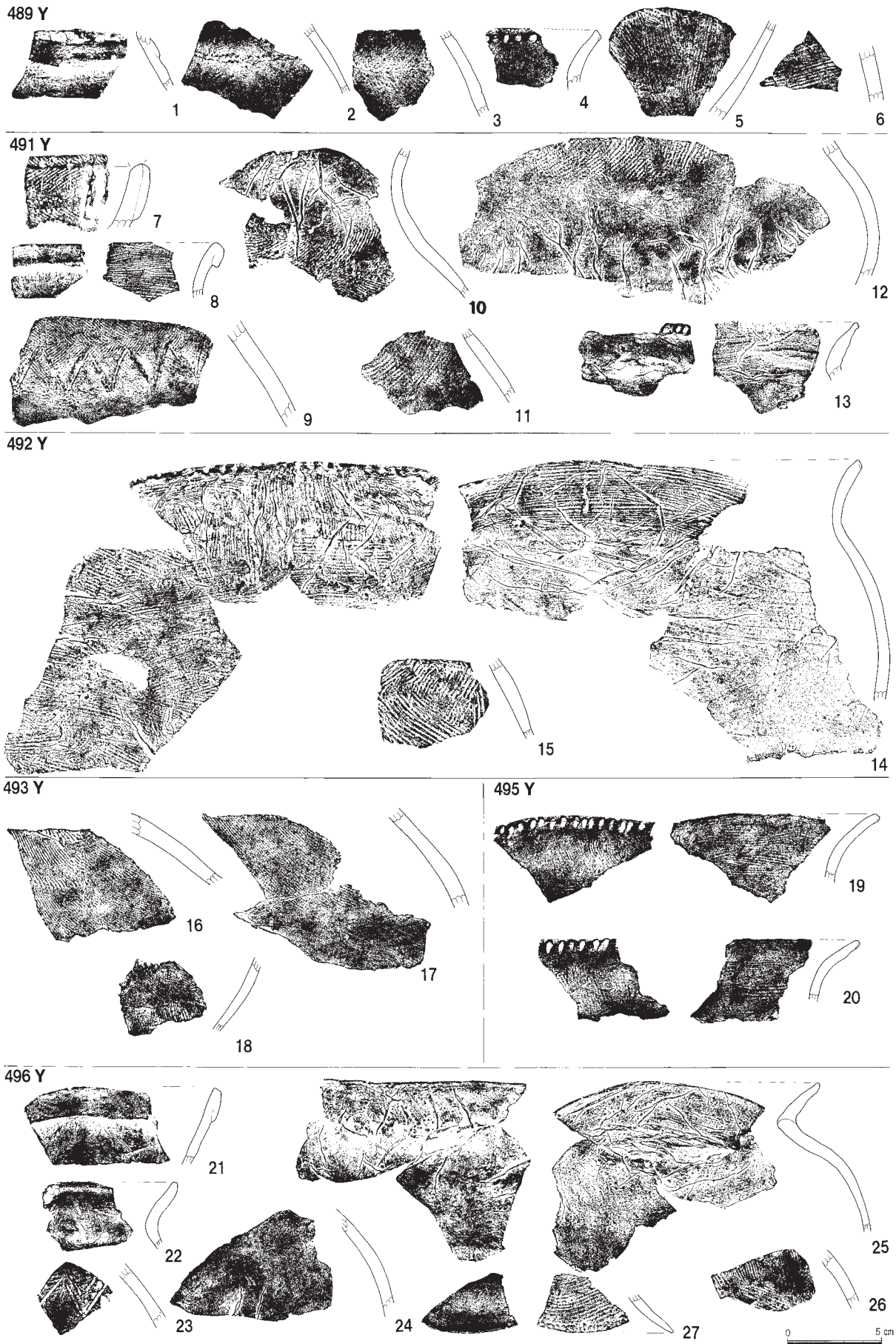
壺形土器（第463図21～26）

21は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

22は口縁部破片。肥厚した口縁部は僅かに内湾する。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。



第462図 496号住居跡（1/60）



第463図 489・491～493・495・496号住居跡出土遺物 (1/3)

23は肩部破片。鋸歯文が施される。文様帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10R4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

24・26は体部破片。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面はヘラナデされる。色調は24がにぶい赤褐色（5YR5/4）、26がにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土にはいずれも細礫・粗砂を含む。すべて覆土中からの出土。

25は口頸部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。床面上から出土した。

高坏形土器（27）

脚台部破片。外面は縦方向にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は赤褐色（5R4/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。床面上から出土した。

497号住居跡（第464図）

〔位置〕 5Ⅲ地点。

〔構造〕 北東側調査区外。498Yに切られる。平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）3～6cmを測る。（壁溝）上幅9～13cm・下幅3～6cm・深さ7cm前後を測る。（床面）住居中央と思われる部分に硬化面と被熱により赤化した面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）北東コーナーの1本が主柱穴の一部か。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 確認面から浅いことと、攪乱が著しいため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子を僅かに含む、やや硬質の黒褐色土（10YR3/1）である。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

497号住居跡出土遺物（第478図1～4）

壺形土器（1）

複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

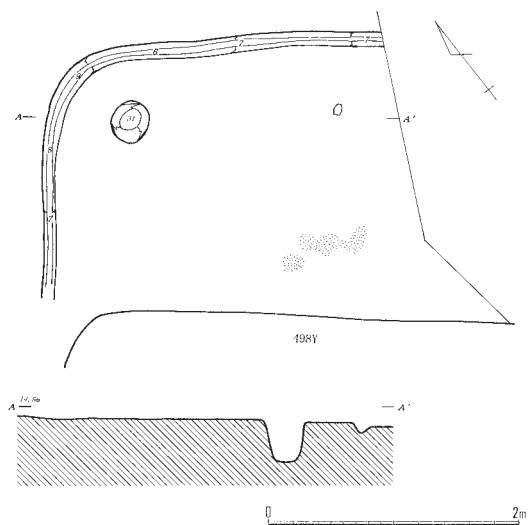
甕形土器（2～4）

2は口縁部破片、3は体部破片、4は脚台部破片。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は2・3が灰褐色（5YR4/3）、4がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。すべて胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

498号住居跡（第465図）

〔位置〕 5Ⅲ地点。

〔構造〕 南側調査区外。498・501Yに切られ、497Yを切る（平面形）隅丸正方形か。（規模）不明×565cm。（主軸方位）N-60°-E。（壁高）5～26cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12～25cm・下幅5～10cm・深さ1～9cmを測り全周すると思われる。（床面）住居中央に硬化面



第464図 497号住居跡（1/60）

を認める。(炉) 住居中央から北東に偏って位置する。径45cmの円形を呈する地床炉で、深さ2cm前後の掘り込みをもつ。(柱穴) 北及び南・東コーナーに近い3本が主柱穴の一部と思われる。西壁下中央から僅かに東に偏った1本は入口施設になろうか。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや軟質。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

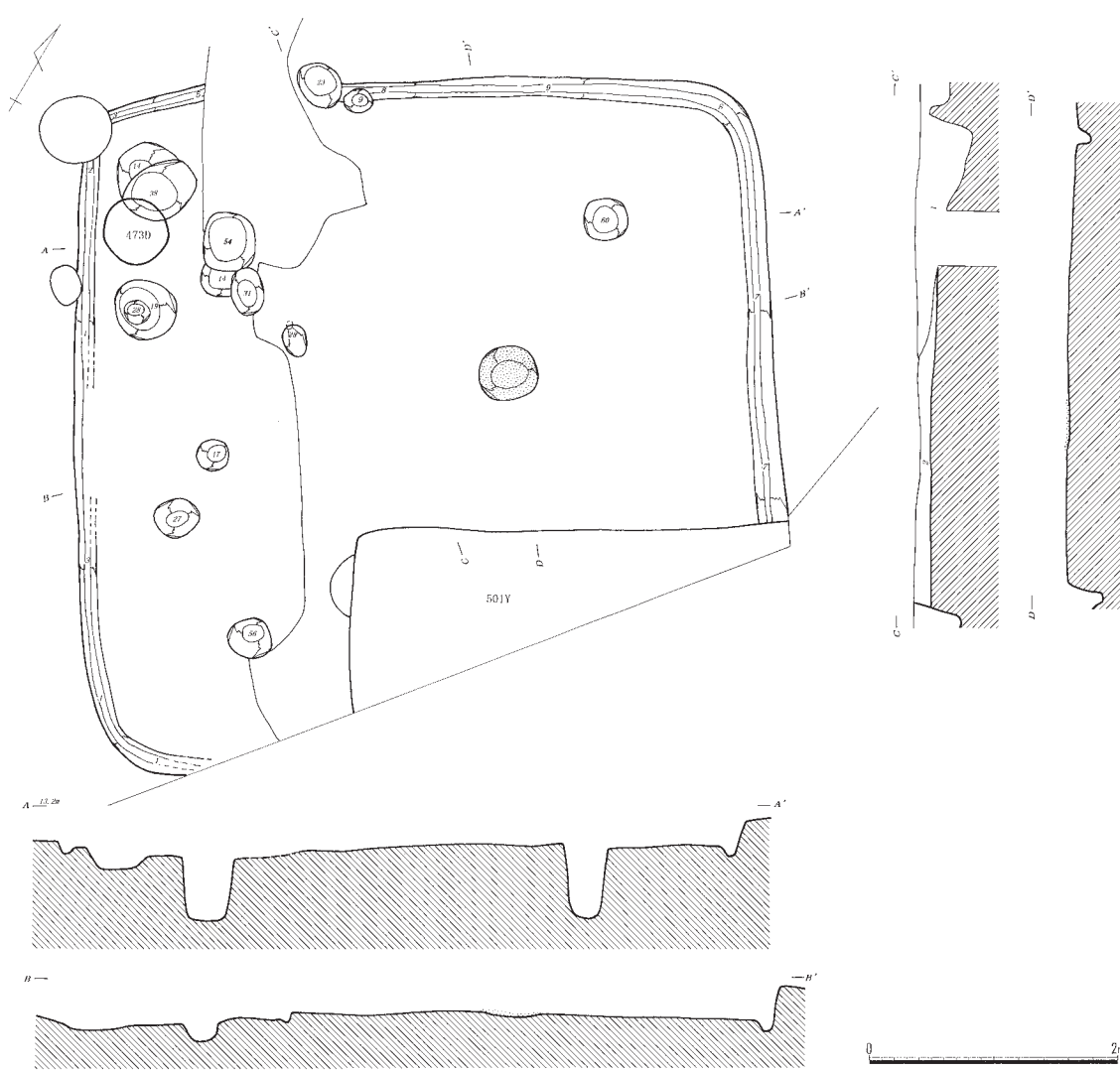
498号住居跡出土遺物 (第478図5～8)

壺形土器 (5・6)

いずれも口縁部破片。頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は5がにぶい赤褐色 (2.5YR5/4)、6が黒褐色 (5YR4/3) を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

甕形土器 (7・8)

7は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈



第465図 498号住居跡 (1/60)

し、胎土には細礫・粗砂を含む。

8は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが内面には粗いハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。

ともに覆土中からの出土。

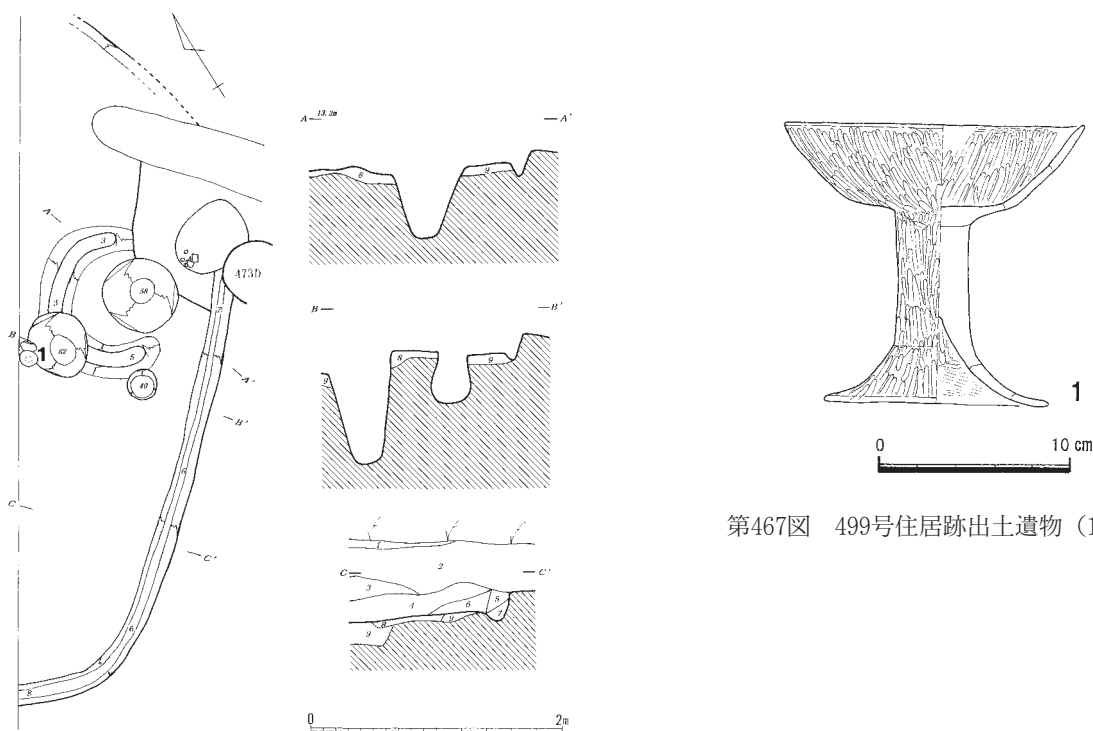
499号住居跡(第466図)

〔位置〕 5Ⅲ地点。

〔構造〕 北西側調査区外。498Yを切る。(平面形)不明。(規模)不明。(主軸方位)不明。(壁高)10~12cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝)上幅15cm前後・下幅5cm前後・深さ5cm前後を測る。(床面)498Yの覆土中に構築されているため、全体の遺存状態は不良である。(炉)検出されなかった。(柱穴)南壁下の1本は入口施設と思われる。凸堤を切っている1本は後世のものである。(貯蔵穴)南東コーナーに位置する。径60cmの円形を呈し、深さ58cmを測る。幅30cm前後・高さ6cm前後を測る凸堤を馬蹄形状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
- 7層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックをやや粘質。
- 8層 黄褐色土(10YR5/6)。ロームブロック。硬質。貼床。
- 9層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。貼床充填土。



第467図 499号住居跡出土遺物(1/4)

第466図 499号住居跡(1/60)

〔遺物〕 凸提横に完形の高脚高坏形土器が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

499号住居跡出土遺物（第467図、第478図9～12）

壺形土器（第478図9・10）

9は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

10は口縁部破片。口唇端部にはLRの単節縄文が巡る。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

鉢形土器（第478図11）

口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器（第467図1）

高脚高坏形土器ではほぼ完形。口径16cm・裾部径16cm・器高14.7cmを測る。坏部は下端に僅かに稜を持ち、口縁部は外傾する。脚柱部は裾部へゆるやかに移行して開く。脚端部は平坦である。坏部内外面共に丁寧に縦方向にヘラミガキされるが、口唇部内面には消しきれないハケ目痕が残る。脚部以下外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。内面はヘラナデされるが脚裾端部にはハケ目痕が残る。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。凸提横の床面上から出土した。

甕形土器（第478図12）

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

500号住居跡（第468図）

〔位置〕 5Ⅲ地点。

〔構造〕 北側調査区外。498Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）1～10cmを測る。（壁溝）上幅6～15cm・下幅3～6cm・深さ6～8cmを測る。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 確認面から浅いことと、攪乱が著しいため、詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子を多く含む、硬質の黒褐色土（2.5Y3/2）である。

南東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。

〔遺物〕 床面上に土器片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

500号住居跡出土遺物（第478図13～15）

壺形土器（14）

頸部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2/5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。床面上から出土した。

甕形土器（13・15）

13は口縁部破片。口唇部には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

15は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）を呈し、

胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

501号住居跡（第469図）

〔位置〕 5Ⅲ地点。

〔構造〕 南側調査区外。498Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）19～21cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～23cm・下幅10cm前後・深さ6cm前後を測り、北側に一部確認する。（床面）全体に軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

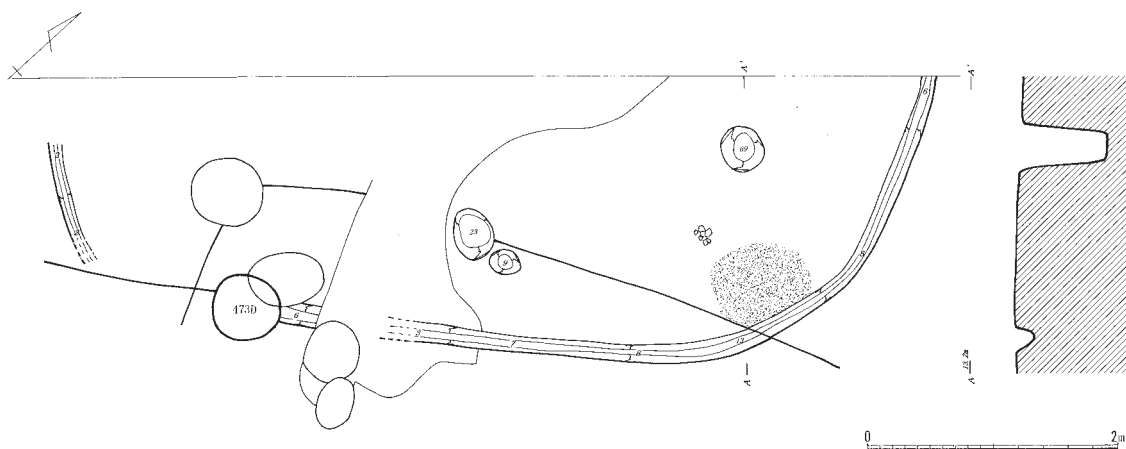
- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。焼土粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が出土した。

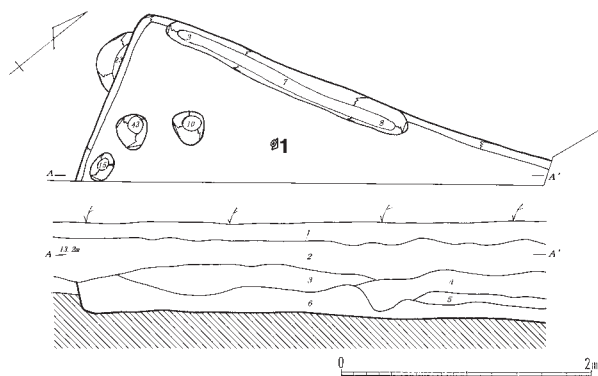
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

501号住居跡出土遺物（第470図、第478図16～19）

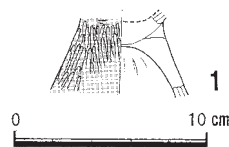
壺形土器（第478図16・18）



第468図 500号住居跡（1/60）



第469図 501号住居跡（1/60）



第470図 501号住居跡出土遺物（1/4）

16は複合口縁部破片。口縁部外面には棒状浮文が貼付される。色調はにぶい黄橙色（10R5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・軽石を含む。覆土中からの出土。

18は頸部破片か。刻みが施された凸帯が巡る。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

高坏形土器（第470図1）

接合部破片。脚裾部へかけて直線的に広がる器形である。外面はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）、赤彩部は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。北西壁寄り床面上から出土した。

甕形土器（第478図17・19）

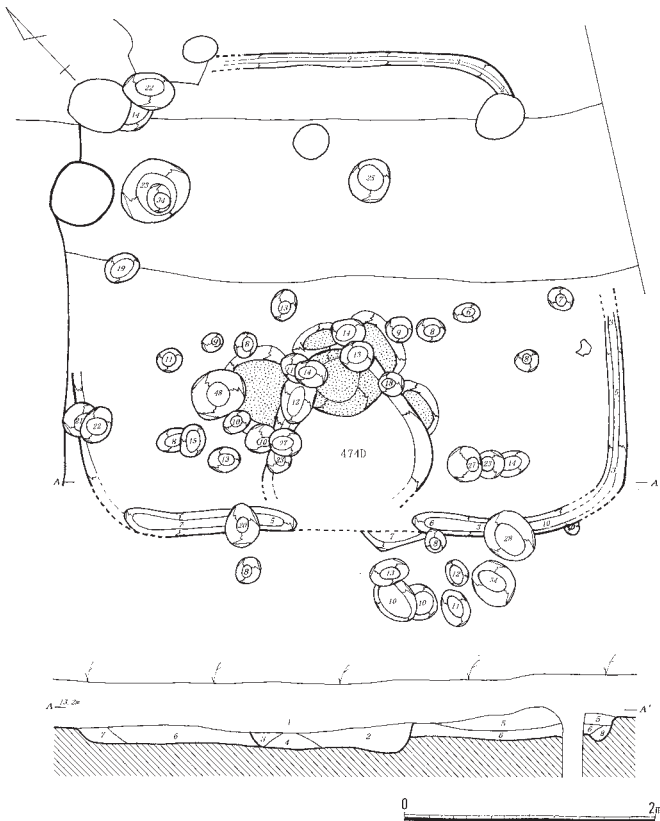
17は体部破片、19は脚台部破片。いずれも内外面共にともにヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は17が灰褐色（7.5YR4/2）、19がにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。ともに覆土中からの出土。

502号住居跡（第471図）

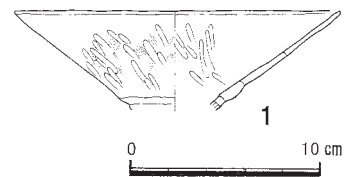
〔位置〕 5Ⅲ地点。

〔構造〕 474Dに切られる。（平面形）不整長方形。（規模）430×380cm。（主軸方位）不明。（壁高）6cm前後を測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13cm前後・下幅5cm前後・深さ3cm前後を測る。攪乱により遺存状態は不良である。（床面）全体に軟弱で、後世のピットによる破壊が著しく遺存状態は不良である。（炉）検出されなかった。住居南西に検出された焼土は後世のものである。（柱穴）主柱穴は確認できなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕



第471図 502号住居跡（1/60）



第472図 502号住居跡出土遺物（1/4）

1層 耕作土。

5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。

6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

8層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

502号住居跡出土遺物 (第472図、第478図20~24)

壺形土器 (第478図20)

口縁部破片。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

高坏形土器 (第472図1)

坏部の1/3程度が残存する。推定口径17.2cmを測る。坏部下端に稜を持ち口縁部にかけて大きく広がる器形である。内外面共にヘラミガキされるが、外面には消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

甕形土器 (第478図21~24)

21・22は口縁部破片。22の口唇部外面には刻みが巡る。いずれも内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は21は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。22はにぶい赤褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

23・24は体部破片。ともに内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調は灰褐色 (5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂・軽石を含む。

すべて覆土中から出土した。

503号住居跡 (第473図)

〔位置〕 69 I 地点。

〔構造〕 北東・南西側調査区外。504 Y を切る。調査の段階で床面を確認できなかった。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 24cm前後を測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅18cm前後・下幅6cm前後・深さ4cm前後を測る。(床面) 全体に軟弱である。(炉) 不明×48cm・深さ6cmを測る。中央に礫が配置されている。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。

7層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。

8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。

9層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。

10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。

11層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

12層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期

504号住居跡（第473図）

〔位置〕 69 I 地点。

〔構造〕 北東・南東側調査区外。503 Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）12 cmを測り、66° 前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅12cm前後・下幅 6 cm・深さ 4 cm前後を測る。（床面）軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

1層 盛土。

2層 耕作土。

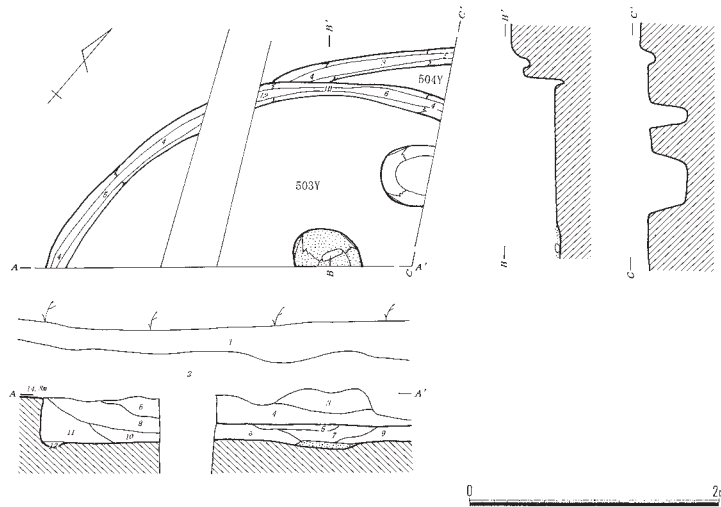
3層 黒褐色土（10YR）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

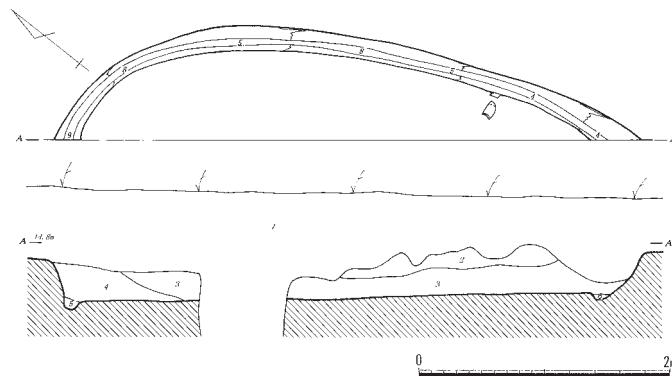
5層 にぶい黄褐色（10YR4/3）。ロームブロックを多く含む。硬質。貼床。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第473図 503・504号住居跡（1/60）



第474図 505号住居跡（1/60）

505号住居跡（第474図）

〔位置〕 69 I 地点。

〔構造〕 大部分が調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）30～33cmを測り、60°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～20cm・下幅6cm前後・深さ4～8cmを測る。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

505号住居跡出土遺物（第478図25）

甕形土器（25）

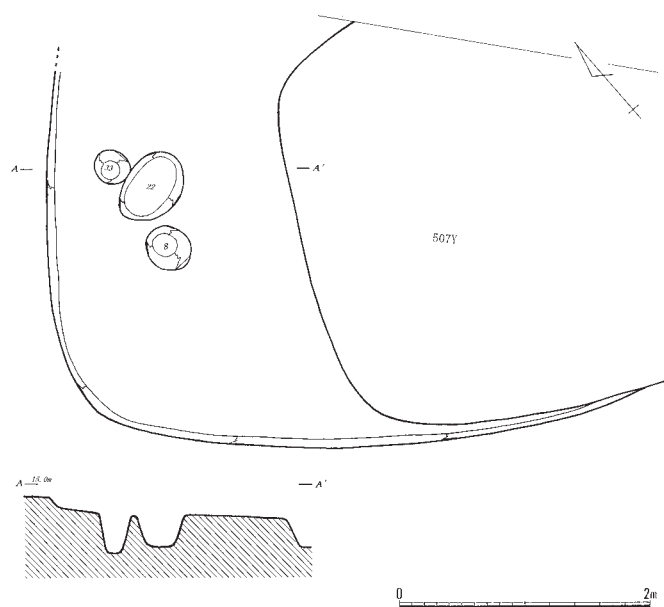
甕部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

506号住居跡（第475図）

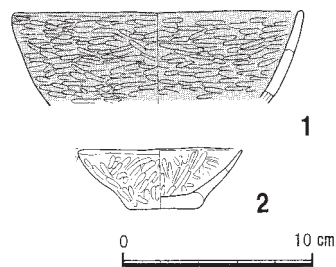
〔位置〕 69 I 地点。

〔構造〕 507Yに切られる。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）10～16cmを測り、50°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全面軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されたピットは後世のものである。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕 確認面から浅いことと、攪乱が著しいため詳細は不明であるが、僅かに残された覆土は、ローム粒子・ロー



第475図 506号住居跡（1/60）



第476図 506号住居跡出土遺物（1/4）

ムブロックを多く含む、やや硬質の暗褐色土（10YR3/3）である。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

506号住居跡出土遺物（第476図、第478図26～28）

鉢形土器（第476図1・2）

1は口縁部1/4程度が残存する。推定口径15cm。碗状を呈する器形と思われる。内外面共にヘラミガキされ赤彩されたと推測されるが、器面の荒れが激しく不明瞭。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

2はほぼ完形。口径8.7cm・底径3.7cm・器高3.2cmと小型である。平底の底部から立ち上がり、内湾しながら開く器形。内外面共に丁寧にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

甕形土器（第478図26～28）

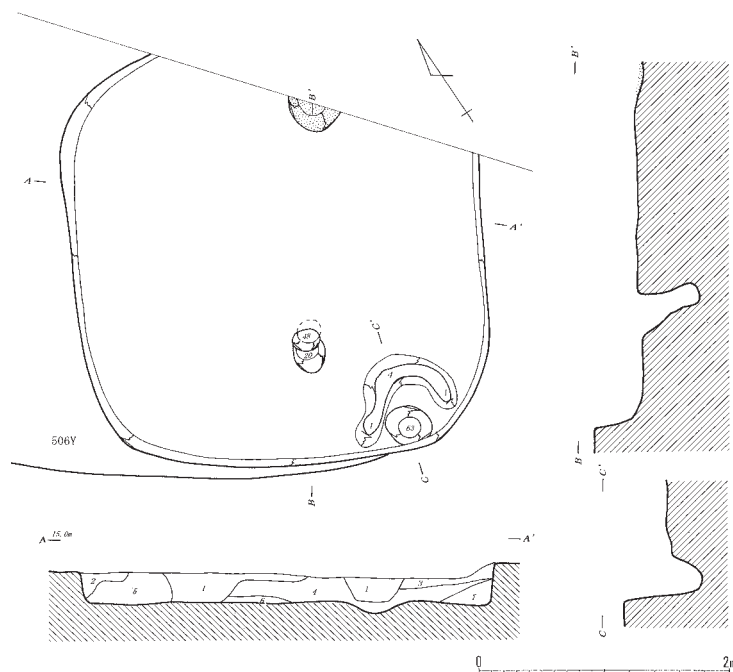
いずれも体部破片で、内外面共ににヘラナデされるが外面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調は26・27がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、28がにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。すべて覆土中からの出土。

507号住居跡（第477図）

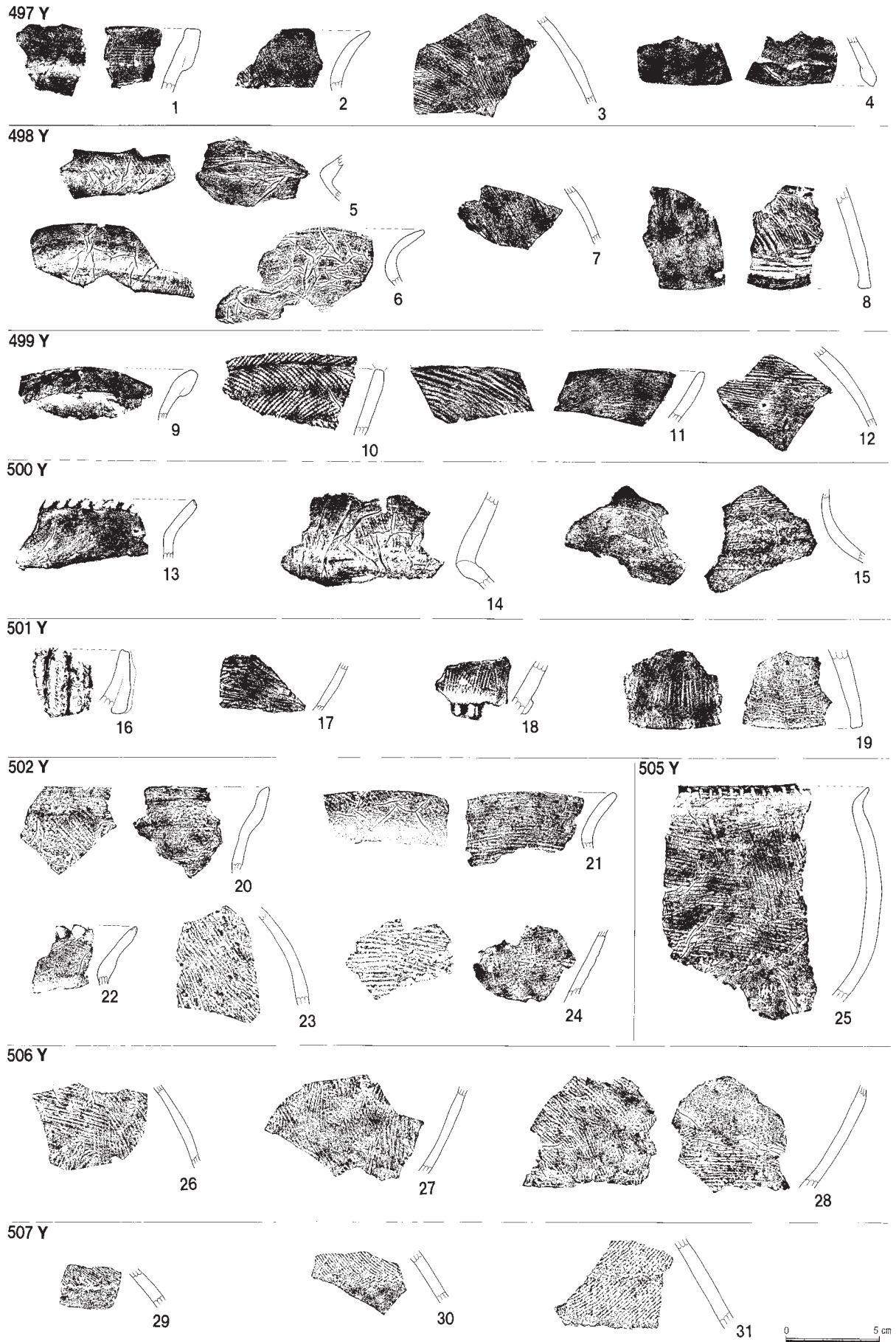
〔位置〕 69 I 地点。

〔構造〕 北東側調査区外。（平面形）隅丸長方形。（規模）不明×330cm。（主軸方位）N-33°-E。（壁高）22～23cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）壁際を除き硬化面を認める。（炉）住居中央から北に偏って位置する地床炉で、不明×42cm・深さ4cmを測る。（柱穴）支柱穴は検出されなかった。南西壁下中央から僅かに北東に偏った1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）南コーナーに位置する。径30cmの円形を呈し、深さ26cmを測る。幅35cm前後・高さ1cm前後の凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕



第477図 507号住居跡 (1/60)



第478図 497～502・505～507号住居跡出土遺物 (1/3)

- 1層 耕作土。
- 2層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。

ローム粒子・ロームブロックを多く含む層があり、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

507号住居跡出土遺物 (第478図29～31)

壺形土器 (第478図29～31)

29・30は肩部破片。いずれも無節Rの端末結節が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は29が赤褐色 (10R4/4)、30が暗赤褐色 (2.5YR3/2) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

31も肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が2段施される。色調は黒褐色 (5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を多く含む。

すべて覆土中からの出土。

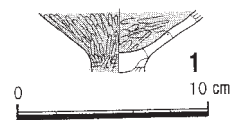
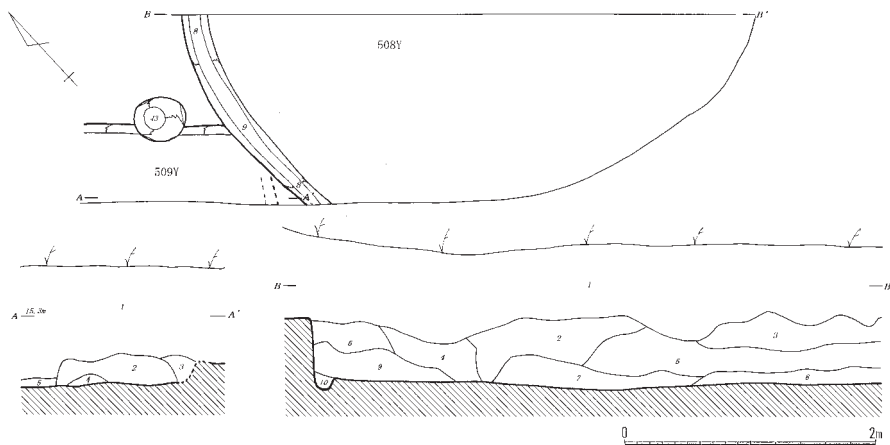
508号住居跡 (第479図)

〔位置〕 65Ⅱ地点。

〔構造〕 509Yを切る。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 33cm前後を測り、80° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅22cm前後・下幅11cm前後・深さ9cm前後を測る。(床面) 壁際を除き硬化面を認める。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。



第480図 508号住居跡出土遺物 (1/4)

第479図 508・509号住居跡 (1/60)

- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 10層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

508号住居跡出土遺物 (第481図)

高坏形土器 (第481図1)

坏部下半のみ残存する。口縁部にかけて直線的に開く器形であると推測される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色 (2.5YR4/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

509号住居跡 (第479図)

〔位置〕 65Ⅱ地点。

〔構造〕 508Yに切られる。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 29cm前後を測り、60°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全面軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を含む。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

510号住居跡 (第481図)

〔位置〕 69Ⅱ地点。

〔構造〕 南側調査区外。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 不明×600cm。(主軸方位) N-60°-W。(壁高) 29~57cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。(炉) 住居中央から僅かに西に偏って位置する。115×65cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。東側に礫を配している。(柱穴) 各コーナーの4本が支柱穴である。東壁下中央の1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴) 東壁下中央から北に偏って位置する。径90cmの円形を呈し、深さ30cmを測り段をもつ。北側に幅25~125cm・高さ6cm前後の凸堤を弧状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや軟質。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 14層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 15層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 16層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。
- 17層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子を多く含む。やや硬質。
- 18層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 19層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質
東コーナーに砂礫混じりの暗赤褐色土が堆積している。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕床面上から土器が多く出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

510号住居跡出土遺物 (第482図、第496図1～10)

壺形土器 (第482図1～3、第496図1～5)

第482図1はほぼ完形。口径7.5cm・底径10cm・器高31.3cmを測る。平底の底部から立ち上がり、球状の体部へ至る。頸部はくびれて、複合口縁部は外反して内湾気味に立ち上がる。複合口縁部外面には5本一単位と推測される棒状浮文が貼付される。肩部にはLRの単節縄文が施される。両端には縄文の縄尻を閉じた痕がみられる。縄文帯内部には円形浮文が施される。外面と口縁部内面は縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。外面口縁部直下と底部付近にはハケ目痕が残る。内面体部中位には何らかの液体を保存していたと思われる液状痕が確認される。色調は黒褐色 (7.5YR3/1)、赤彩部はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含み、白色粒子を多く含む。炉南側床面上から出土した。

2は口頸部のみ残存する。口径23cm。頸部は強くくびれて複合口縁部はラッパ状に開く。口唇端部にはRLの単節縄文が施される。口縁部外面には、撚りの異なる単節縄文が羽状に3段施文され、その上に13～15本の沈線を一組とする文様が均等に4箇所施される。肩部には4本一組のS字状結節文が施され、撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。肩部縄文帯内部には3もしくは4個一単位の円形浮文が4箇所に貼付される。外面は縄文帯以外縦方向にヘラミガキされ赤彩される。内面は横方向にヘラミガキされ赤彩される。色調は橙色 (5YR7/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。炉内部に伏せた状態で出土した。

3は完形の広口壺形土器。口径20.5cm・底径7cm・器高19.5cmを測る。平底の底部から立ち上がり、やや下膨れの球状の体部を呈し、頸部は屈曲する。口縁部は外反し、薄く粘土を貼り付けたような複合口縁を呈する。内外面共にヘラミガキされるが、口頸部外面には消しきれないハケ目痕が残る。体部中位と口縁部外面には黒斑がみられる。色調は赤褐色 (5YR4/6) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を多く含む。住居跡中央床面上から出土。

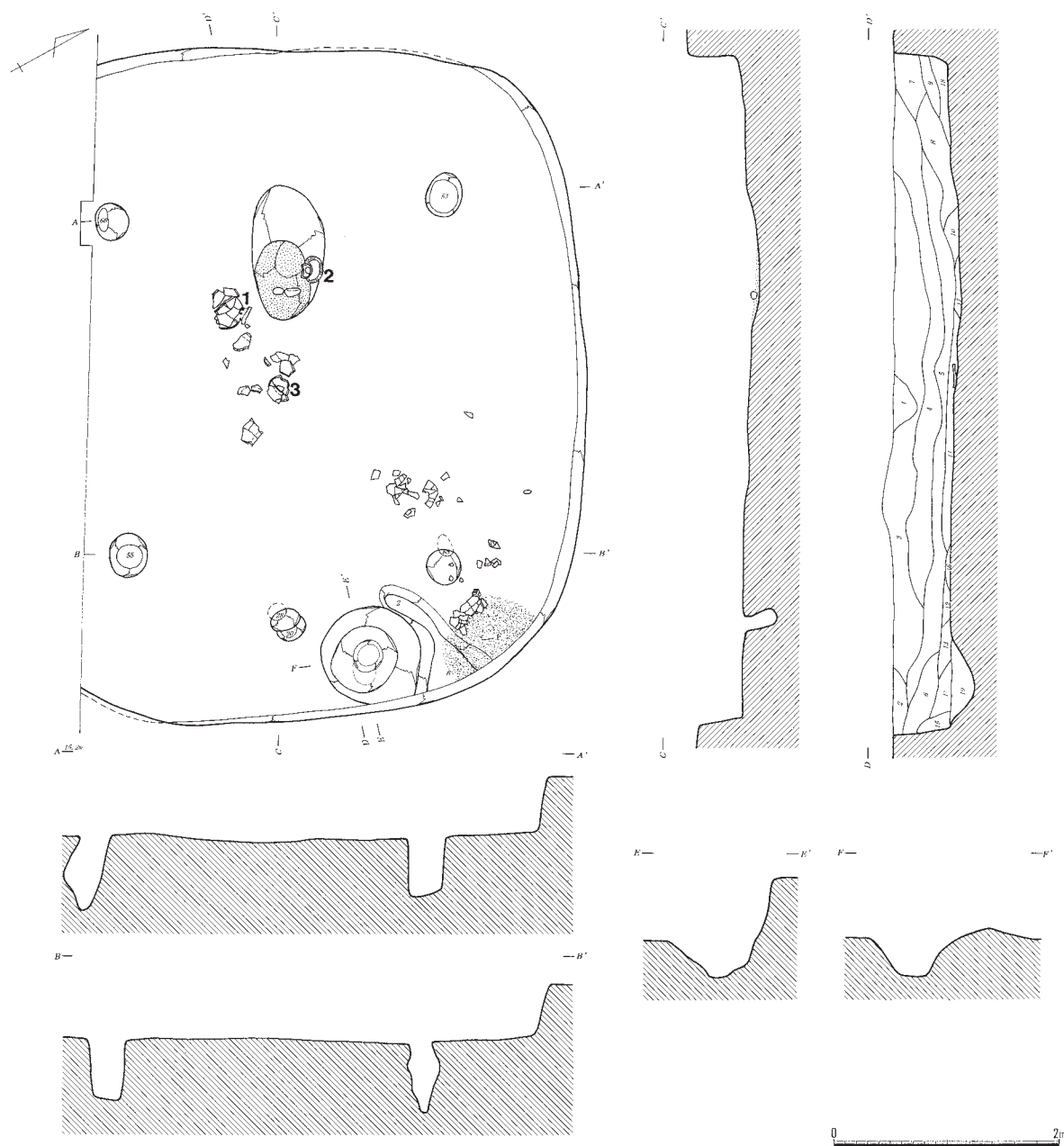
第496図1は複合口縁部破片。口縁部外面には棒状浮文が貼付される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。

色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

2～5は肩部破片。4・5は同一個体。いずれも撚りの異なる単節縄文が羽状に施されている。2は下端にS字状結節文がみられ、円形浮文が貼付される。3～5は縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は2が浅黄橙色（7.5YR8/4）、3がにぶい赤褐色（2.5YR5/4）、4・5はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈する。2の胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。3～5の胎土には細礫・粗砂を含む。2・3は東コーナー付近床面上から出土。4・5は覆土中からの出土。

高坏形土器（第496図6）

碗状を呈すると推測される坏部破片。外面には付加条縄文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。縄文帯下位内部には円形赤彩文が施される。色調にぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土。



第481図 510号住居跡 (1/60)

甕形土器（第496図7～10）

7～9は口縁部破片。いずれも口唇部外面には刻みが巡り、内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は7がにぶい橙色（7.5YR6/4）、8が黒褐色（7.5YR3/1）、9がにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。すべて胎土には礫・粗砂・白色粒子を含み。覆土中から出土した。

10は口頸部破片。頸部は強くくびれて口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

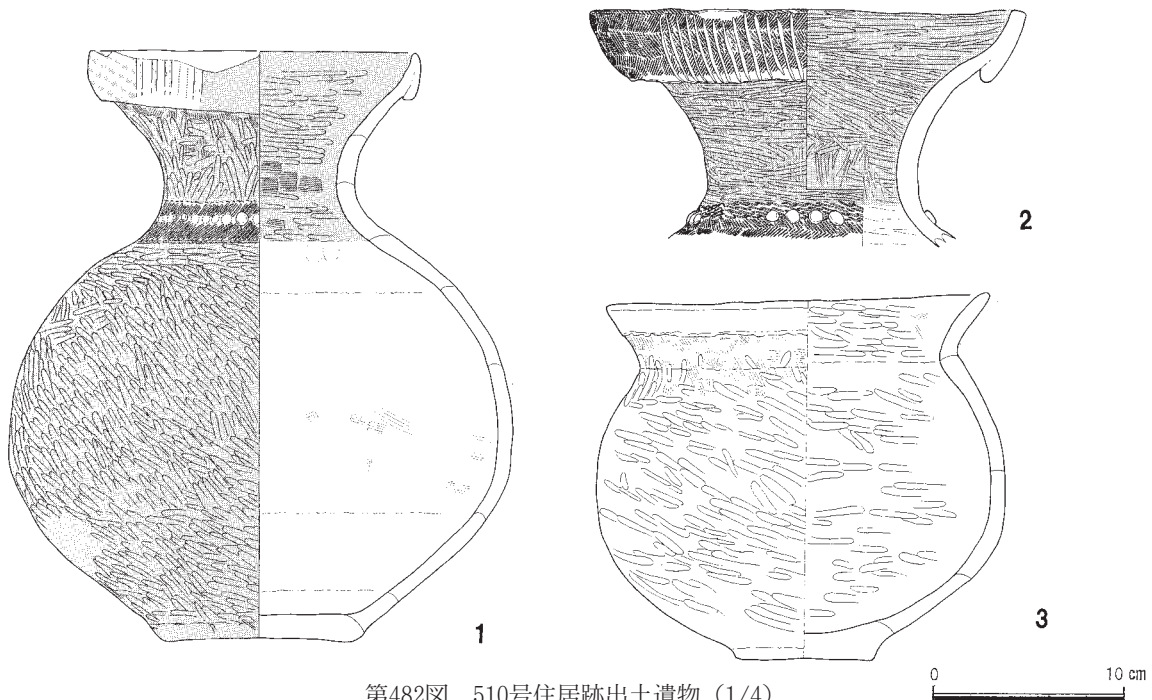
511号住居跡（第483図）

〔位置〕 69Ⅱ地点。

〔構造〕 北西・南西側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）N-67°-W。（壁高）17～26cmを測り、75°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～25cm・下幅5～7cm・深さ11～12cmを測り全周する。（床面）全体に軟弱だが、部分的に硬化面を認める。（炉）住居中央から西に偏って位置する。不明×60cmの地床炉で、深さ6cmの掘り込みをもつ。（柱穴）東壁下中央の1本は入口施設と思われる。（貯蔵穴）東壁下中央から北に偏って位置する。径53cmの円形を呈し、深さ31cmを測る。幅35cm前後・高さ5～8cmの凸堤を鍵状に構築している。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 6層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。



第482図 511号住居跡出土遺物（1/4）

10層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

11層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

511号住居跡出土遺物 (第496図11～13)

壺形土器 (11)

複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器 (12・13)

12は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物が付着する。色調は黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

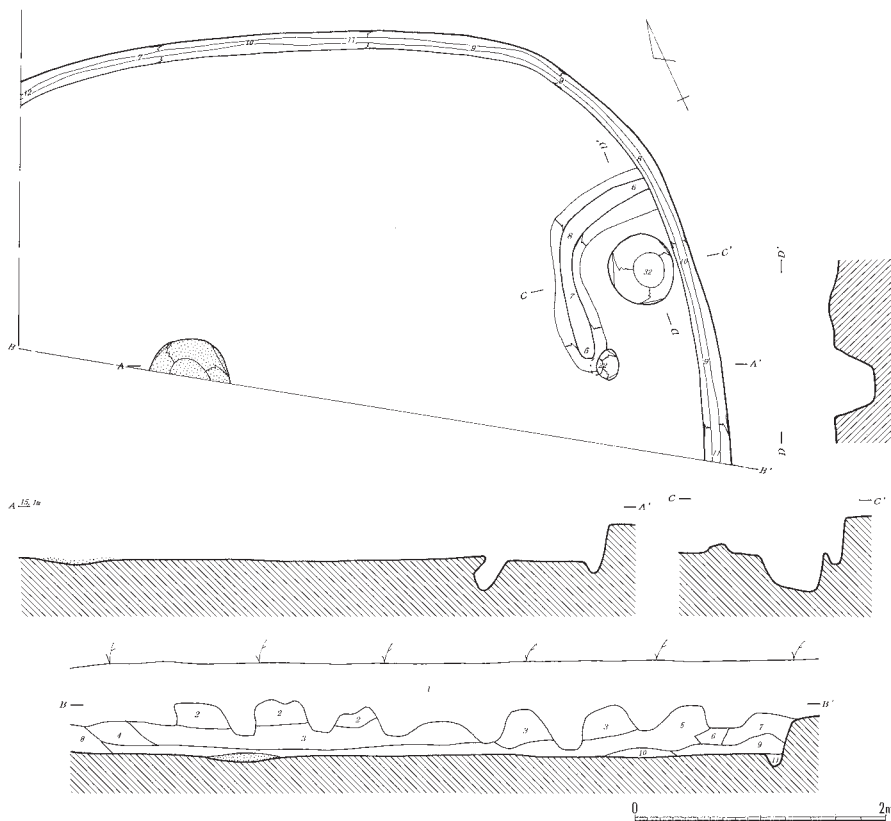
13は体部破片。内外面共にともにヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。色調は褐灰色 (5YR4/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中から出土した。

512号住居跡 (第484図)

〔位置〕 65Ⅲ地点。

〔構造〕 南西側調査区外。(平面形) 不明。(規模) 不明。(主軸方位) 不明。(壁高) 33～42cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 検出されなかった。(床面) 全面平坦であるが軟弱である。(炉) 検出されなかった。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 検出されなかった。

〔覆土〕



第483図 511号住居跡 (1/60)

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ロームブロックを含む。やや硬質。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 10層 暗褐色土 (7.5YR3/4)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 11層 暗褐色土 (7.5YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・炭化物粒子を含む。硬質。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/4)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

堆積状態が不整合で、部分的にロームブロックを多く含む層があるなど、埋め戻された感が強い。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

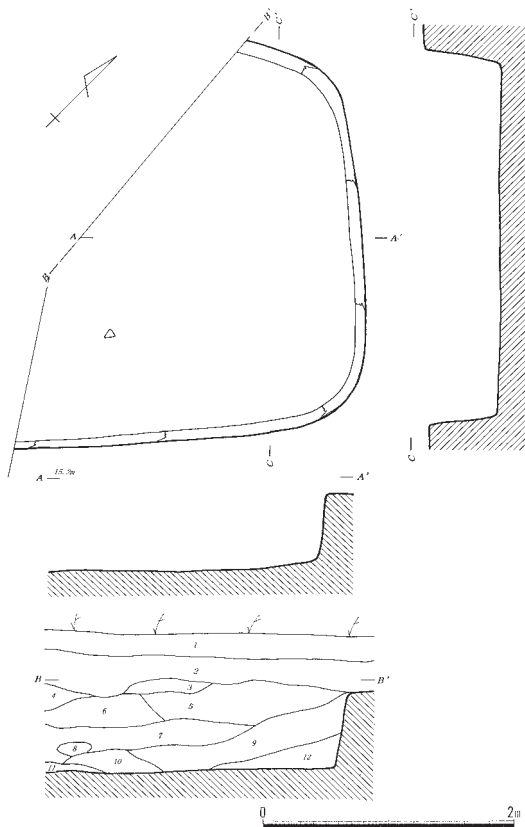
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

512号住居跡出土遺物 (第496図14・15)

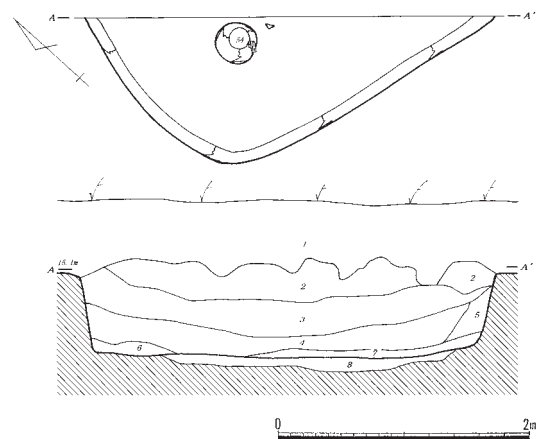
甕形土器 (14・15)

14は甕部破片。口唇部外面に刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含み、橙色粒子を多く含む。覆土中からの出土。

15は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色 (5YR4/1) を呈し、胎土には際礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第484図 512号住居跡 (1/60)



第485図 513号住居跡 (1/60)

513号住居跡（第485図）

〔位置〕 65Ⅲ地点。

〔構造〕 北東側調査区外。（平面形）不明。（規模）不明。（主軸方位）不明。（壁高）40～55cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）検出されなかった。（床面）全面軟弱である。（炉）検出されなかった。（柱穴）検出されなかった。（貯蔵穴）検出されなかった。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 7層 褐色土（10YR4/4）。ローム粒子を多く含む。硬質。貼床。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

516号住居跡（第486図）

〔位置〕 5Ⅳ地点。

〔構造〕 北西側調査区外。（平面形）隅丸正方形か。（規模）不明×530cm。（主軸方位）N—40°—E。（壁高）29～42cmを測り、85°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅13～23cm・下幅5～10cm・深さ6～16cmを測る。（床面）壁際と炉の周辺を除き硬化面を認める。（炉）住居中央からやや北東に偏って位置する。40×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。（柱穴）南・東コーナーに近い2本が支柱穴の一部と思われる。（貯蔵穴）南コーナー近くに位置する。50×65cmの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土（10YR3/3）。焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 7層 褐色土（7.5YR4/3）。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。やや硬質。
- 8層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 床面上に土器片と炭化材が散乱している。

〔時期〕 古墳時代前期。

〔所見〕 床面上に炭化材が散乱しているなど、焼失家屋の可能性があるとと思われる。

516号住居跡出土遺物（第487図）

壺形土器（第487図1）

体部下半を欠損する小型の単純口縁壺である。口径10.4cmを測る。球状の体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は一旦直立気味に立ち上がり、外反する器形である。内面口縁部と外面はヘラミガキされるが、不規則なハケ目痕が残る。色調は橙色（5YR6/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく

堅緻である。炉北東側床面上から出土した。

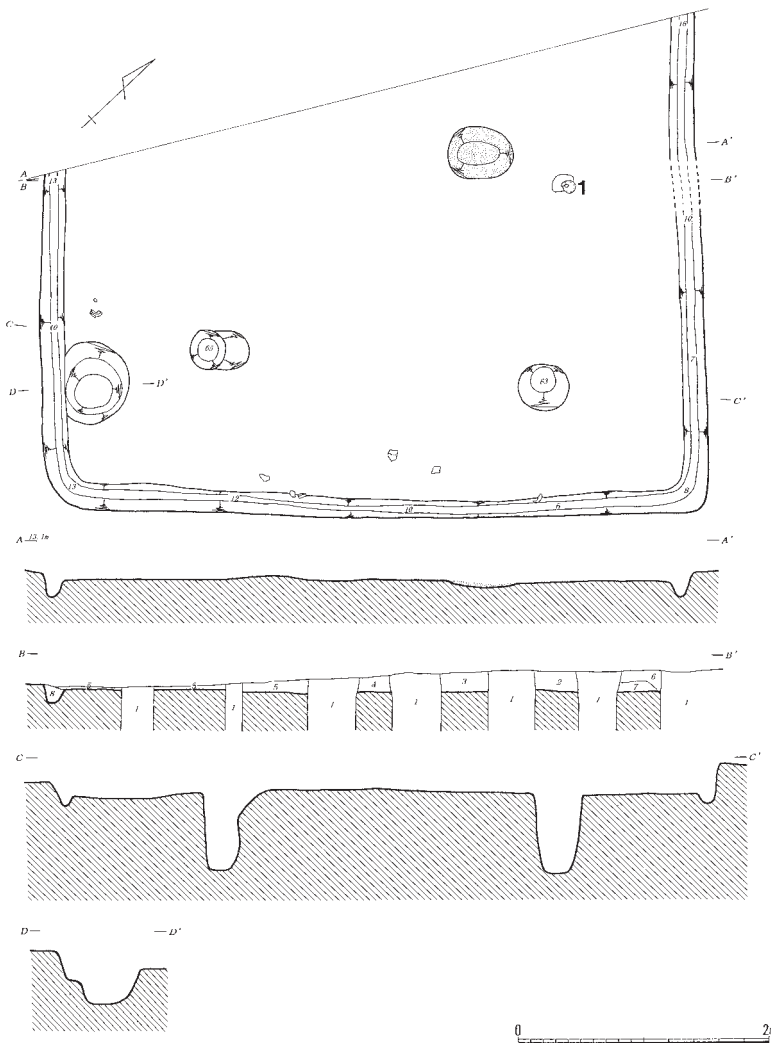
531号住居跡 (第488図)

〔位置〕 130地点。

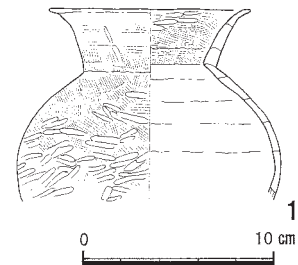
〔構造〕 南東側は調査区外。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 400×375cm。(主軸方位) N-15°-E。(壁高) 23~31cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅20cm前後・下幅5cm前後・深さ3cm前後を測る。西壁で一部途切れる。(床面) 壁際と炉周囲を除き、硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。100×70cmを測る地床炉で、深さ5cmの掘り込みをもつ。(柱穴) 検出されなかった。(貯蔵穴) 南壁下ほぼ中央に位置する。31×25cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測る。北側に幅20cm前後・高さ2cmの凸堤が直線状に構築される。

〔覆土〕

- 1層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。



第486図 516号住居跡 (1/60)



第487図 516号住居跡出土遺物 (1/4)

7層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。

8層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

9層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 床面上と覆土中から土器が少数出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

531号住居跡出土遺物 (第489図1、第496図16～19)

壺形土器 (第496図16)

体部破片。外面は縦方向にヘラミガキされる。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

甕形土器 (第489図1、第496図17～19)

第489図1は裾部径11cm。裾部へかけて内湾気味に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが接合部と脚台部上半にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

第496図17・18は口縁部破片。いずれも口唇部外面には刻みが施される。色調は17がにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。18が黒褐色 (7.5YR3/1) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

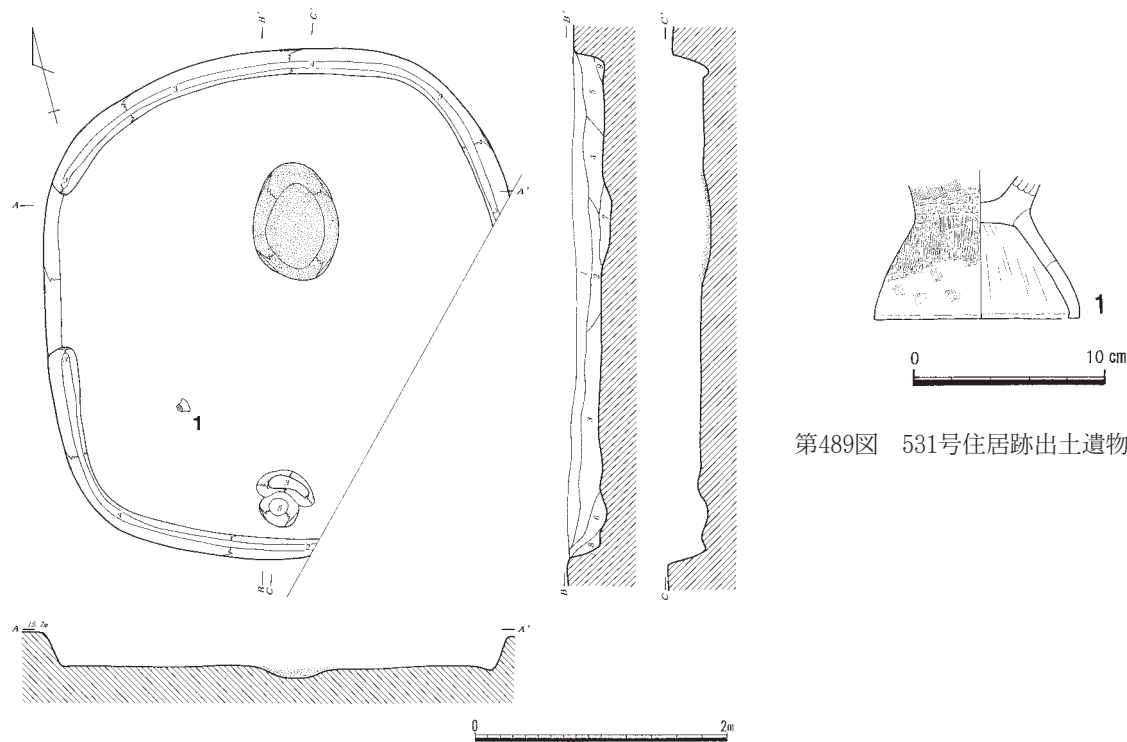
19は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・2～5mmの白色粒子を含む。

すべて覆土中からの出土である。

534号住居跡 (第490図)

〔位置〕 130地点。

〔構造〕 (平面形) 楕円形。(規模) 450×430cm。(主軸方位) N-13°-W。(壁高) 29～32cmを測り、80°前後の



第488図 531号住居跡 (1/60)

第489図 531号住居跡出土遺物 (1/4)

角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅20~30cm・下幅5~10cm・深さ4~9cmを測り全周する。(床面) 住居南側、北壁際、炉周囲を除き硬化している。(炉) 住居中央から北に偏って位置する。不明×70cmを測る粘土火皿。粘土の厚さは2cm前後である。(柱穴) 南壁下に1本検出された。入口施設であろう。(貯蔵穴) 南壁中央から東に偏って位置する。径45cmのほぼ円形を呈し、深さ23cmを測る。北側に幅30~40cm・高さ1~3cmの凸堤が弧状に構築される。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・炭化材片を含む。やや軟質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや軟質。
- 7層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子・炭化材片を含む。やや硬質。
- 9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

住居北側の床面上に、焼土が薄く堆積する。

堆積状態が不整合で、埋め戻された可能性が大きい。

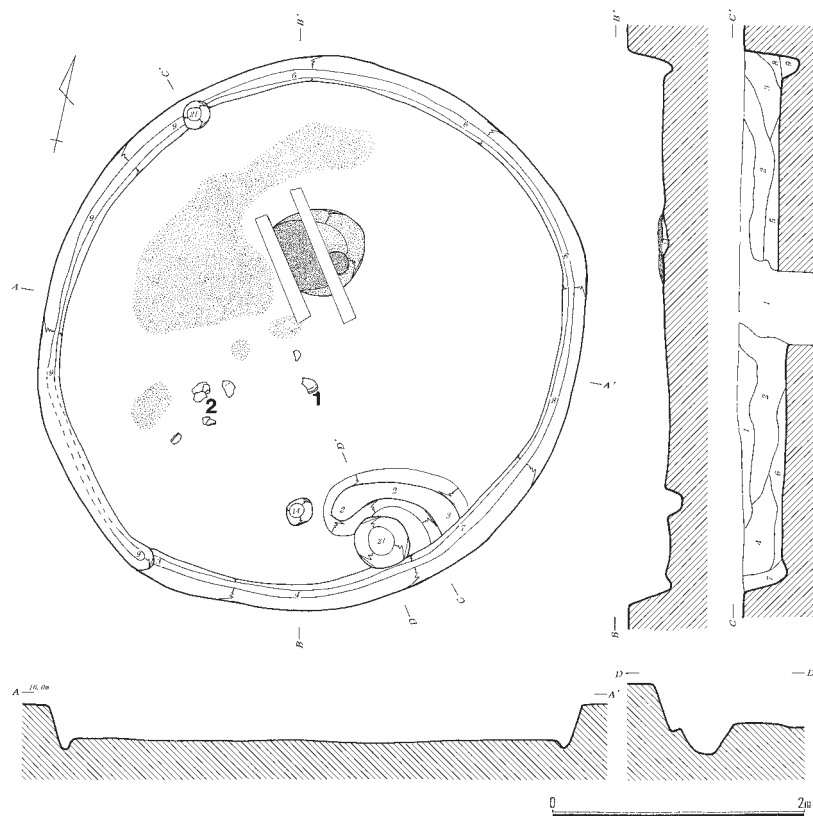
〔遺物〕 床面上と覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

〔所見〕 覆土中に焼土粒子・炭化物粒子・炭化材片を含み、床面上に焼土が堆積するなど、焼失家屋を想定させる。

534号住居跡出土遺物 (第491図、第496図20~22)

高坏形土器 (第491図1、第496図20)



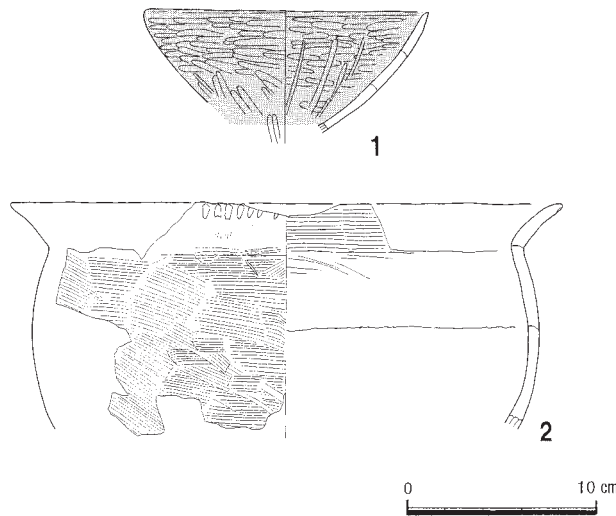
第490図 534号住居跡 (1/60)

1・20は同一個体。坏部の1/2程度が残存する。推定口径15cmを測る。体部は直線的に外傾し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。住居跡中央付近床面上から出土した。

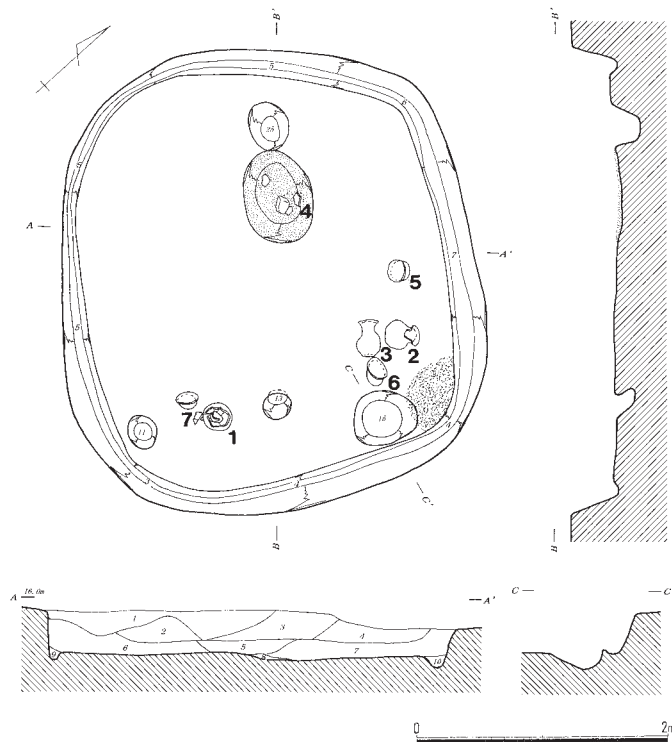
甕形土器（第491図2、第496図21・22）

第491図2は甕部上半の1/5程度が残存する。推定口径19.5cm。あまり張らない体部から立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。色調は外面が黒褐色（7.5YR2/1）、内面ににぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央からやや南西寄りの床面上から出土した。

第496図21は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされる。色調は灰褐色（5YR



第491図 534号住居跡出土遺物（1/4）



第492図 535号住居跡（1/60）

4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

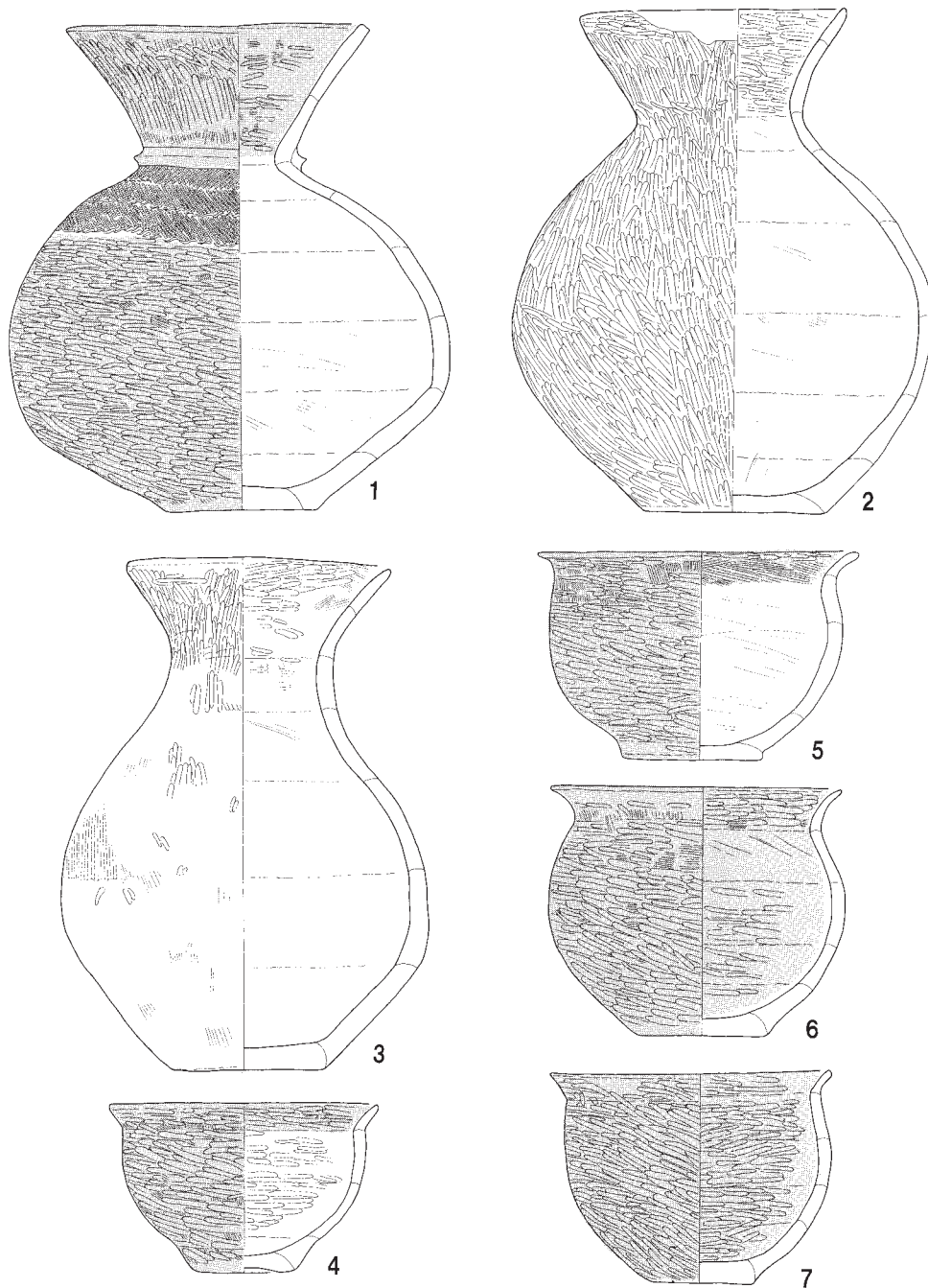
22は体部破片。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。

21・22は覆土中からの出土。

535号住居跡 (第492図)

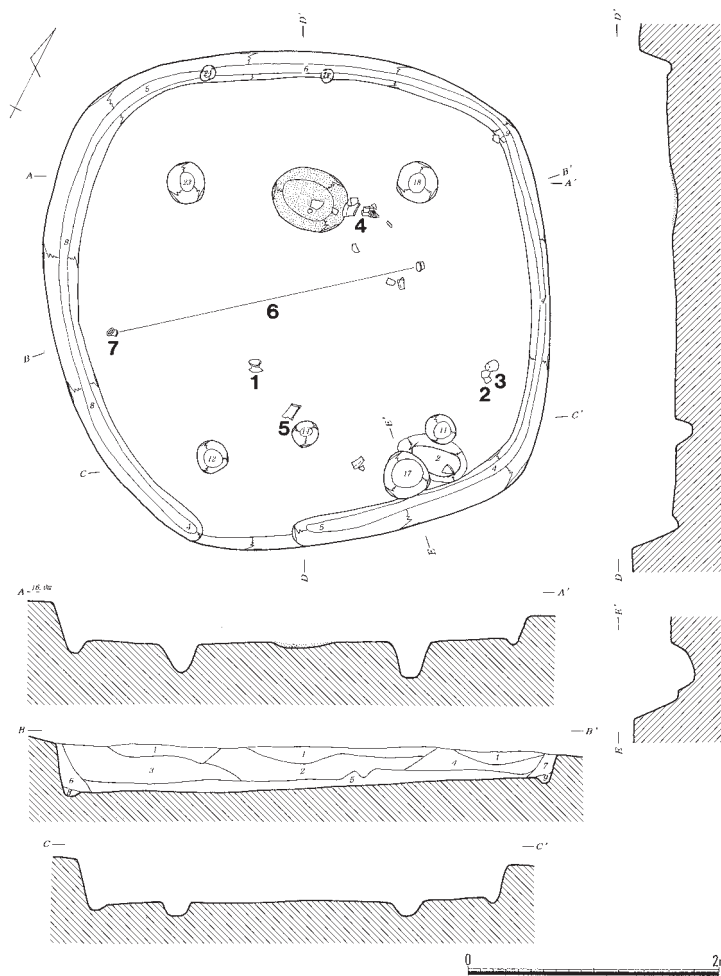
〔位置〕 130地点。

〔構造〕 154 J を切る。(平面形) 隅丸長方形。(規模) 375×320cm。(主軸方位) N-50°-W。(壁高) 21~32cmを測り、70° 前後の角度で立ち上がる。(壁溝) 上幅10~30cm・下幅5~15cm・深さ5~7cmを測り全周する。(床面)

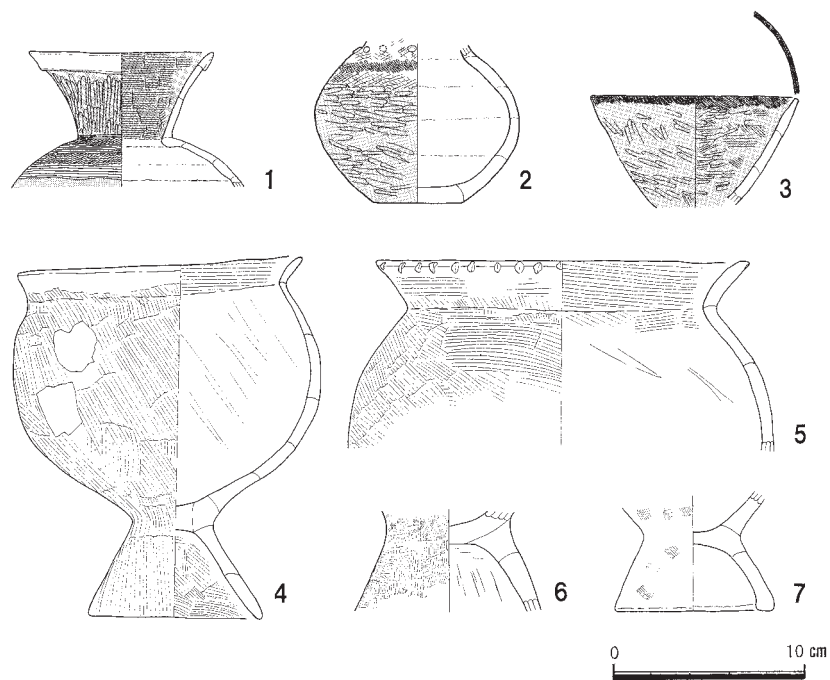


第493図 535号住居跡出土遺物 (1/4)





第494図 536号住居跡 (1/60)



第495図 536号住居跡出土遺物 (1/4)

壁際、炉周囲を除き硬化面を残す。(炉)住居中央から北西に偏って位置する。75×55cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ4cmの掘り込みをもつ。(柱穴)南東壁下中央に位置する1本は入口施設と思われる。(貯蔵穴)東コーナー近くに位置する。50×45cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を含む。焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒色土(10YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 褐灰色(10YR4/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 6層 褐灰色(10YR4/1)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 7層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 8層 暗褐色土(10YR3/3)。ローム粒子を僅かに含む。焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 9層 にぶい黄褐色土(10RY4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 10層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

東コーナーには砂粒混じりの暗赤褐色土が堆積している。

〔遺物〕床面上と貯蔵穴付近から多く出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

535号住居跡出土遺物(第493図、第496図23～26)

壺形土器(第493図1～3、第496図23～25)

第493図1はほぼ完形。口径16.8cm・底径8.4cm・器高31.7cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部下半に最大径を持つ偏球状の体部を作出する。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。頸部外面には断面三角形の凸帯が一周する。肩部文様帯の2・3段目はRLの単節の端末結節縄文を施文している。1段目には同じ原体を縦方向に回転している。1段目と2段目の間には、2段目の原体の上端がループ状に残っているのが確認される。口縁部外面は縦方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。体部外面と口縁部内面は横方向にヘラミガキされる。体部内面はヘラナデされる。口縁部内外面と体部外面の縄文帯以外は赤彩される。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)、赤彩部はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー寄り床面上から出土した。

2はほぼ完形。口径15cm・底径10cm・器高27.5cmを測る。底部は平底。体部は最大径を中位にもつ球状を呈する。頸部はくびれて口縁部は外反する。外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされる。内面の口縁部は横方向にヘラミガキされ、以下ヘラナデされる。体部外面中位から下半にかけて、縦横10cm程の黒斑がみられる。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)、黒斑部は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。貯蔵穴北西側の床面上から出土した。

3もほぼ完形。口径9.7cm・底径8cm・器高28.2cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部下半に最大径をもつ球状の体部に至る。頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外傾する。外面は丁寧に縦方向にヘラミガキされるが、頸部以下は表面の剥離が激しく僅かにヘラミガキ痕が観察できる。おそらく化粧土が剥離したものではないかと思われる。内面口縁部は横方向にヘラミガキされるが、頸部以下は剥離が激しく不明瞭。体部中位には直径12cm程度の黒斑がみられる。色調は化粧土が残る部分は浅黄橙色(7.5YR8/6)、化粧土が剥離した部分がにぶい黄橙色(10YR7/4)、黒斑部分が黒褐色(7.5YR3/1)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。貯蔵穴西側床面上から出土した。

第496図23は単純口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は

にぶい橙色（7.5YR7/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

24は複合口縁部破片。頸部は屈曲し、複合口縁部は外反する。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

25は体部破片。外面はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。南コーナー寄り床面上から出土した。

鉢形土器（第493図4～7）

4は全体の1/3程度が残存する。推定口径14.8cm・底径5.7cm・器高9.3cmを測る。平底の底部から立ち上がり、半球状の体部を作る。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。体部内面以外は横方向にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）、赤彩部分は赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選され堅緻である。炉内部から出土した。

5はほぼ完形。口径17.7cm・底径7.5cm・器高11.5cmを測る。平底の底部から立ち上がり、あまり張りの無い体部を作出する。頸部はくびれて口縁部は外反する器形である。外面は横方向にヘラミガキされるが、頸部外面にはハケ目痕が残る。口縁部内面は横方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁寄り床面上から出土した。

6は口縁部の一部を欠くがほぼ完形。口径16cm・底径7.2cm・器高13.7cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部中位に最大径をもつ球状の体部へ至る。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。外面は横方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。底部以外は赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）、赤彩部分は赤褐色（5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。貯蔵穴西側床面上から出土した。

7は口縁部の1/3を欠損する。口径15.5cm・底径5.5cm・器高11.5cmを測る。底部は平底で、体部は球状を呈し、最大径を体部中位にもつ。頸部は「く」字状に屈曲し、短い口縁部は外反する器形である。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。体部外面中位には焼成時の黒斑がみられる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）、赤彩部分は赤褐色（2.5YR4/6）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。南コーナー寄り床面上から出土した。

甕形土器（第496図26）

口頸部破片。口唇部外面には刻みが施される。頸部は屈曲し、短い口縁部は外反する。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

536号住居跡（第494図）

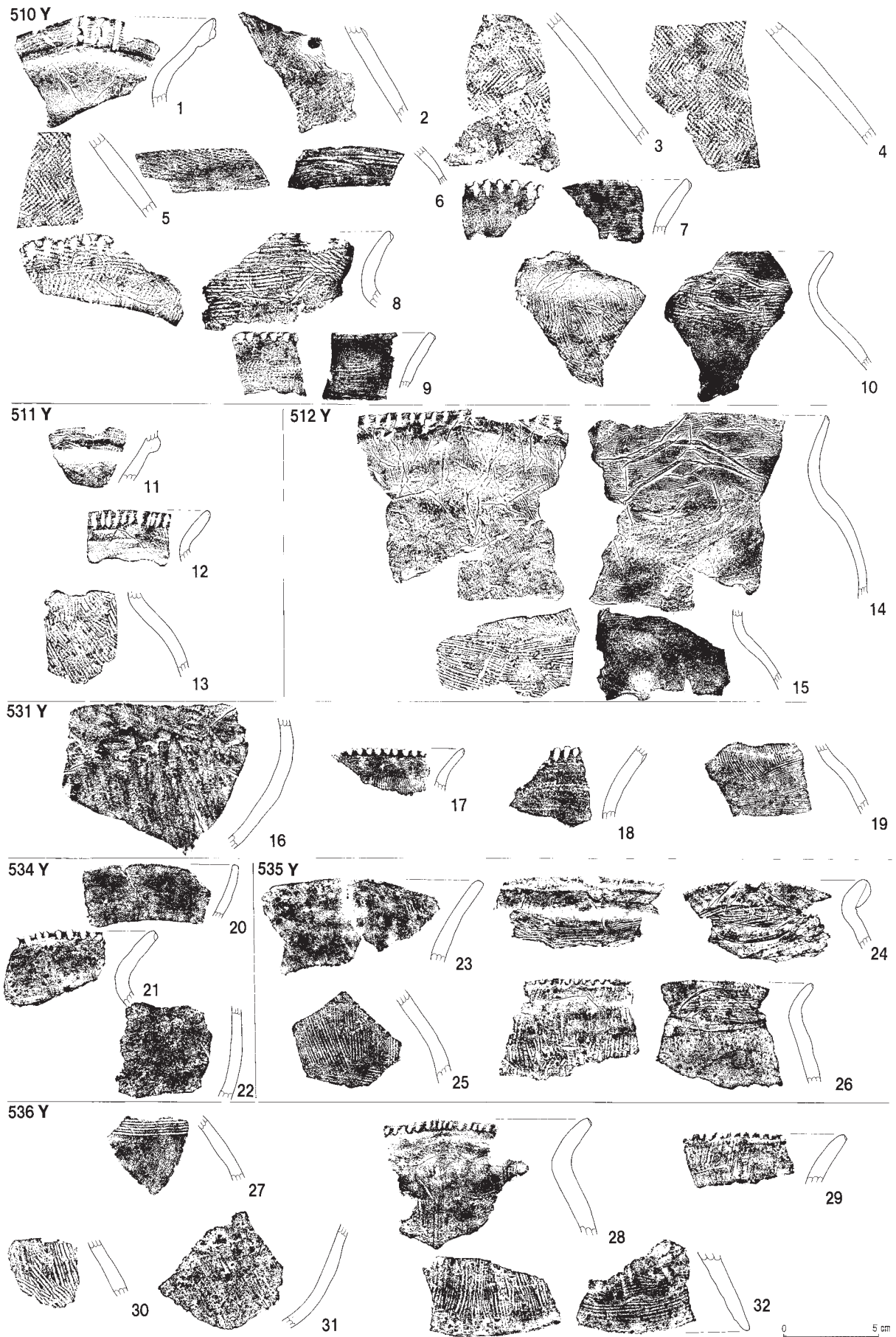
〔位置〕 130地点。

〔構造〕 156 J を切る。（平面形）隅丸長方形。（規模）400×390cm。（主軸方位）N-30°-W。（壁高）20～40cmを測り、80°前後の角度で立ち上がる。（壁溝）上幅15～30cm・下幅5～10cm・深さ4～8cmを測り全周する。（床面）全体に軟弱である。（炉）住居中央から北西に偏って位置する。65×50cmの楕円形を呈する地床炉で、深さ10cmを測る。（柱穴）各コーナーの4本が支柱穴である。南側の2本の支柱間に位置するピットは入口施設と思われる。（貯蔵穴）南西壁下、中央から北東に偏って位置する。40×35cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。東側に幅40cm前後・高さ3cm前後の凸堤が直線状に構築されている。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒色土（10YR2/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。



第496図 510~512・531・534~536号住居跡出土遺物 (1/3)

- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を含む。やや硬質。
- 5層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・炭化物粒子・炭化材片を多く含む。やや軟質。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。

堆積状態が不整合で、埋め戻された可能性が大きい。

〔遺物〕床面上、覆土中から比較的多くの土器が出土した

〔時期〕古墳時代前期。

536号住居跡出土遺物 (第495図、第496図27~32)

壺形土器 (第495図1・2、第496図27)

第495図1は小型壺の肩部より上の1/2程度が残存する。口径9.8cmを測る。球状を呈する体部から頸部は「く」字状に屈曲し、折り返し口縁部は外反する器形である。肩部文様帯は7段で構成される。まず1・2・5段目に5条一単位の横線文を施し、次に2・4段目に同一工具による櫛描波状文が施される。2段目の文様内には円形赤彩文が2個一単位で施される。体部内面と文様帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は浅黄橙色 (10YR8/3) で、赤彩部分がにぶい赤褐色 (2.5YR4/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央付近覆土下部から出土した。

2は小型壺の口縁部を欠損する。底径4.7cm。平底の底部から立ち上がり、球状の体部を作る器形である。頸部外面には直径約5mmの円形浮文が一周すると思われる。肩部には上から網目状撚糸文・LRの単節縄文・網目状撚糸文の順に施される。縄文の撚りは緩い。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) で、赤彩部分はにぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁寄り床面上から出土した。

第496図27は肩部破片。櫛描の横線文がみられる。文様帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい黄橙色 (10YR7/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器 (第495図3)

台付鉢とでもいおうか。坏部のみ残存する。口径11cmを測る。体部は直線的に外傾する。口縁部内外面と口縁端面には無節Rの縄文が施される。その上に不規則な配置で円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩されるが、内面には消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3)、赤彩部分は (2.5YR4/6) を呈する。胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北東壁際床面上から出土した。

甕形土器 (第495図4~7、第496図28~32)

第495図4は小型台付甕の甕部1/2程度を欠損する。口径15cm・裾部径9.2cm・器高19.2cmを測る。球状の体部から頸部が「く」字状に屈曲し、短い口縁部は外反する。外面はヘラナデされるが外面には不規則で粗いハケ目痕が残る。口縁部内面はヨコナデされるが、粗いハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが工具痕が残る。脚台部内面はヘラナデされるが、細密なハケ目痕が残る。色調は内面はにぶい黄橙色 (7.5YR7/4)、外面がにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含む。炉の東側覆土中下層から出土した。

5は台付甕形土器の体部より上1/4程度が残存する。推定口径19.8cmを測る。球状の体部から立ち上がり、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部内面には粗く不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色 (7.5YR5/4) を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。住居跡中央から南東寄り覆土

中の下層から出土。

6は台付甕形土器の接合部のみ残存する。脚裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央からやや北東寄りの覆土中下位から出土した。

7は台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径8.5cmを測る。脚裾部へかけて直線的に広がる器形である。脚裾端部には粘土のみ出しがみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北西壁際の覆土中下層から出土した。

第496図28・29は口縁部破片で同一個体。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色(5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。炉付近覆土中からの出土。

30・31は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は32が灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。33はにぶい褐色(5YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。いずれも覆土中からの出土。

32は脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。住居跡中央から北東寄り覆土中からの出土。

第2節 掘立柱建築遺構

2号掘立柱建築遺構(第497図)

〔位置〕130地点。

〔構造〕図右側の3本は平成14年度の調査による。392・535Yに切られる。柱穴の配列は六角形を呈し、柱穴間の距離は230～270cm・深さは76～94cmを測る。柱穴の覆土はロームブロックを含む黒褐色土を基調にする。覆土に柱の痕跡を残すものはなく、柱の抜き取りが考えられる。

〔遺物〕検出されなかった。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

第3節 方形周溝墓

1号方形周溝墓(第498図)

〔位置〕7Ⅱ・8Ⅰ地点。

〔周溝の構造〕西溝及び北溝は昭和63年度に調査を行っている(尾形 1990『志木市遺跡群Ⅱ』)。18J・58Yを切る。

(東溝)大部分が調査区外にあり、確認された部分では上幅180cm・下幅140cm・深さ34cmを測る。溝底は平坦で、断面は逆台形状を呈し、70°前後の角度で立ち上がる。

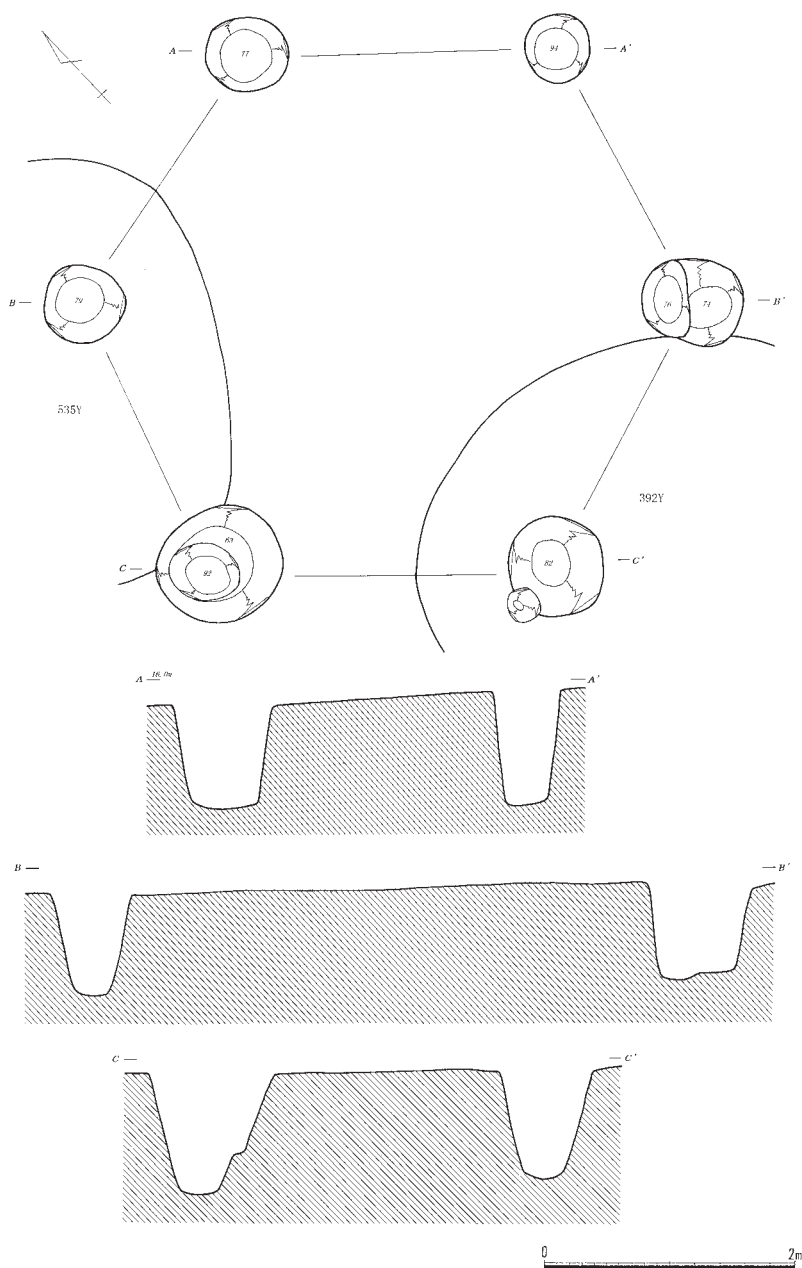
(西溝)外側が一段高くなっている。覆土の堆積状態から、溝の拡幅の可能性がうかがわれる。長さ1,200cm・上幅300cm・下幅240～260cm・深さ54cm前後を測り、70°前後で立ち上がる。拡張前の溝は、下幅110～130cm・深さ83～95cmを測り、70°前後の角度で立ち上がる。溝底に2基の土坑が検出された。

(南溝)中央部が掘り残されていてブリッジを形成する。東側は大部分が調査区外であるが、確認できた範囲では深さ9～60cmを測り、70°前後で立ち上がる。西側は一部調査区外にあるが、上幅580cm・下幅460cm・深さ22～58cmを測る。立ち上がりの角度は方台部側が急斜で70°前後、外側が35°前後を測る。

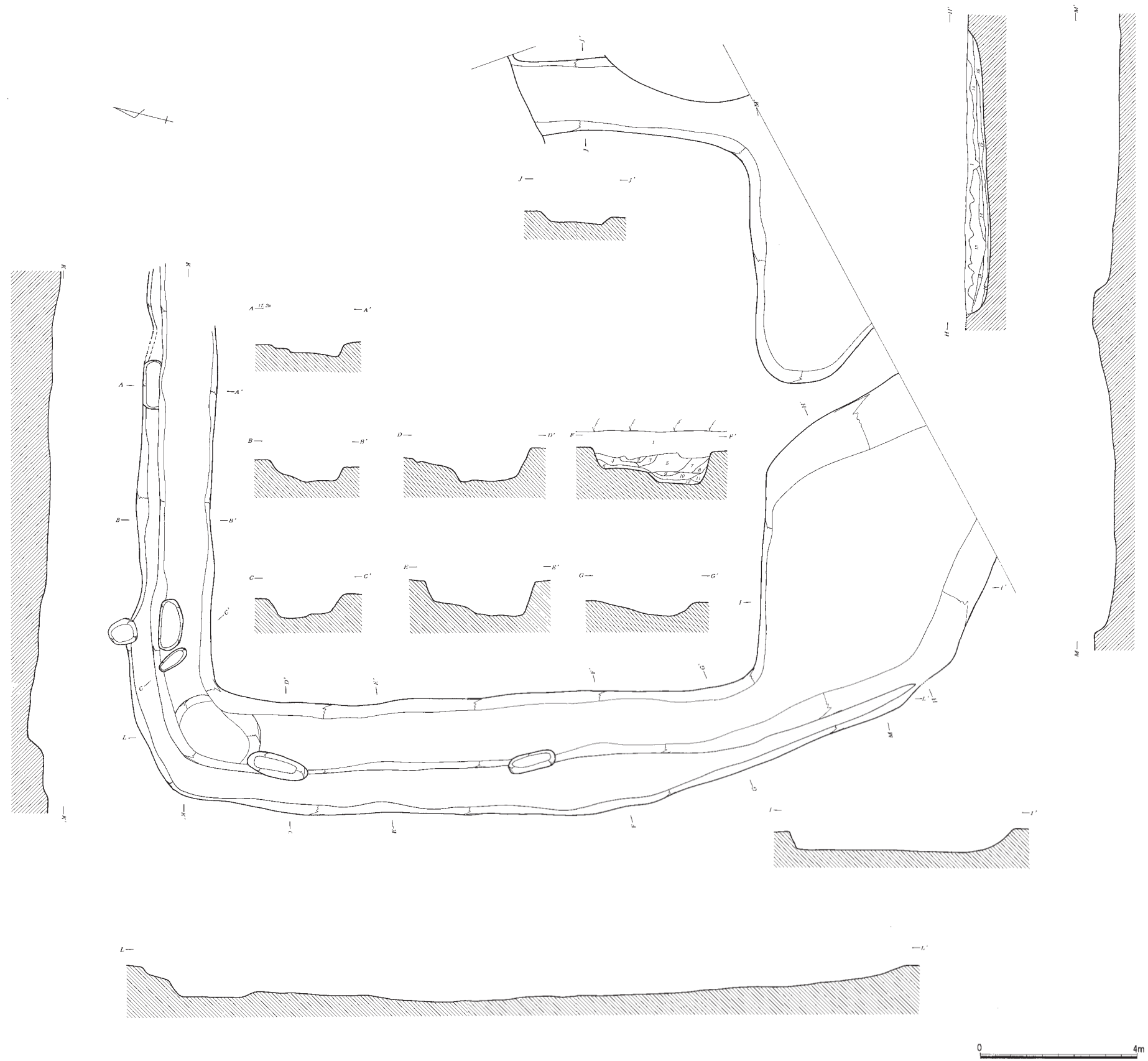
(北溝) 東側は調査区外にある。西溝からの延長で外側が一段高くなる。上幅180~200cm・下幅140~160cm・深さ21~44cmを測る。立ち上がりは方台部側が急斜で65°前後、外側で45°前後を測る。拡張前の溝は、下幅90~120cm・深さ50~80cmを測る。溝底から3基の土坑が検出された。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土。ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子・焼土粒子を含む。
- 6層 明黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 7層 暗褐色土。やや大きめのロームブロックを含む。



第497図 2号掘立柱建築遺構 (1/60)



第498図 1号方形周溝墓 (1/120)

- 8層 暗褐色土。やや大きめのロームブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 9層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。
- 10層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む（9層より暗色）。
- 11層 暗黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 12層 暗黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む（11層より明色）。
- 13層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 14層 黒褐色土ローム粒子を僅かに含む。
- 15層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 16層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

1号方形周溝墓出土遺物（第499図1～4）

壺形土器（1～3）

1は口縁部破片。口唇部外面は僅かに肥厚している。複合口縁を意識したのであろうか。口縁部内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

2は頸部破片。外面には無節の結束羽状縄文が施される。羽状縄文の境目には円形浮文が貼付され、直径1cmの円形赤彩文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

3は肩部破片。頸部は「く」字状に屈曲する。外面は丁寧にヘラミガキされる。内面はナデられる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。

甕形土器（4）

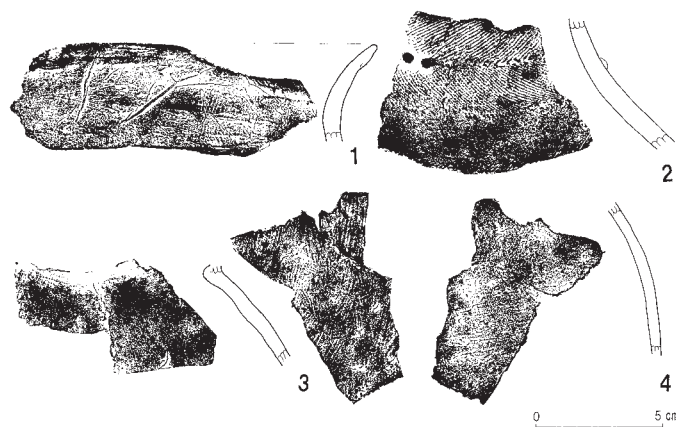
体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には不規則なハケ目痕が残る。色調は黒褐色（5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。

すべて覆土中の出土。

4号方形周溝墓（第500図）

〔位置〕 22地点。

〔周溝の構造〕 一部は平成6年度に調査。



第499図 1号方形周溝墓出土遺物（1/3）

(北東溝) 長さ1,100cm・上幅120~150cm・下幅45~60cm・深さ65~100cmを測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側が急斜で65° 前後、外側で55° 前後を測る。

(南西溝) 長さ1,050cm・上幅90~120cm・下幅40~50cm・深さ45~65cmを測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側が急斜で80° 前後、外側で60° 前後を測る。

(南東溝) 長さ1,050cm・上幅100~165cm・下幅70~120cm・深さ50~80cmを測る。溝底は一部外側が低くなる。断面はほぼ逆台形を呈し、立ち上がりの角度は70度前後を測る。南コーナー部及び東コーナー部では段をなす。

(北西溝) 長さ1,030cm・上幅100~110cm・下幅35~70cm・深さ60~75cmを測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台側がやや急斜で70° 前後、外側で65° 前後を測る。

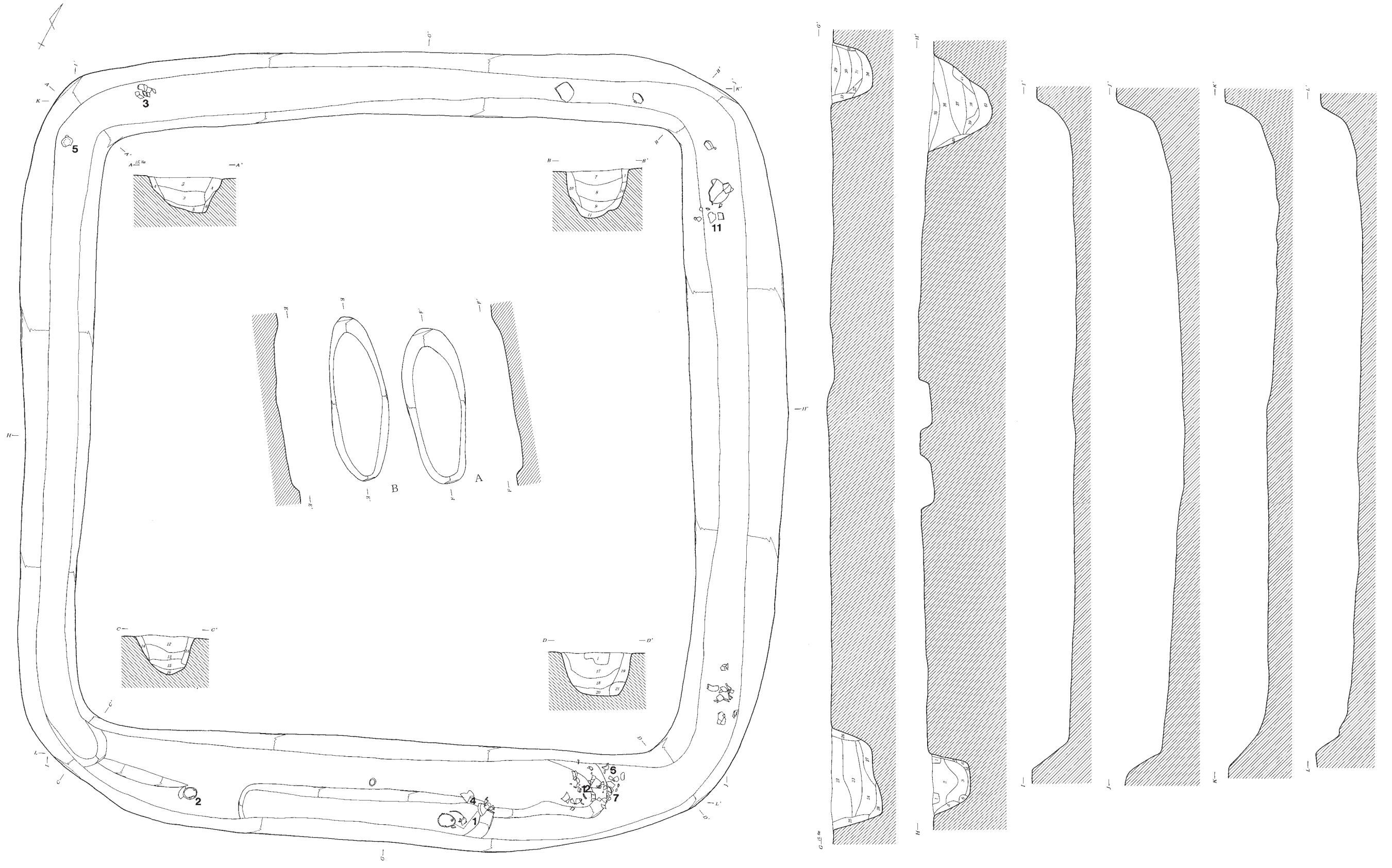
〔主体部〕 周溝内、ほぼ中央に2基検出された。

主体部A (平面形) 長楕円形。(規模) 240×90cm・深さ18cm前後を測る。坑底は平坦で、70° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-40°-W。(覆土) ローム粒子を僅かに含む、やや軟質の黒褐色土。

主体部B (平面形) 長楕円形。(規模) 255×80cm・深さ20cm前後を測る。坑底は平坦で、70° 前後の角度で立ち上がる。(長軸方位) N-40°-W。(覆土) ローム粒子を僅かに含む、やや軟質の黒褐色土。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 6層 黄褐色土。ロームブロック。
- 7層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 8層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 9層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 10層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 11層 黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 12層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 13層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 14層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 15層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 16層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 17層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 18層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 19層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 20層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 21層 黄褐色土。ロームブロック。
- 22層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 23層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 24層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 25層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 26層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。



第500图 4号方形周溝墓 (1/60)

- 27層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 28層 黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
 29層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
 30層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
 31層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
 32層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
 33層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 34層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 35層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
 36層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
 37層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
 38層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
 39層 明褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 40層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
 41層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
 42層 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕主体部Aからガラス製小玉が出土した。土器は東コーナーに近い地点に集中して出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

4号方形周溝墓出土遺物（第501図1～5、第502図6～16、第539図2・3）

壺形土器（第501図1～3、第502図6～14）

第501図1はほぼ完形の複合口縁壺形土器で、体部下半1/2程度を欠く。口径18.5cm・底径10cm・器高32.5cmを測る。最大径を体部下半にもち、玉葱形を呈する体部からくびれ、複合口縁部は外反して広がる。口縁部外面下端には柁目の板の小口部分で刺突された刻みが巡る。口唇部は平坦である。底部は穿孔された可能性がある。口縁部内外面はヘラミガキされるがハケ目痕を残す。頸部内面には指頭痕が観察される。口唇端部には3条のS字状結節文が施される。複合口縁部外面にはLRの単節縄文が羽状に施される。肩部は3条のS字状結節文により上下を区画され、LRの単節縄文が羽状になるように5段施文される。体部外面はヘラミガキされるが一部にハケ目痕を残す。体部内面はヘラナデされるが工具痕が残る。体部外面縄文帯以外と内面口縁部は赤彩される。体部下半には黒斑が見られる。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・軽石と推測される白色粒子を含む。南東溝内から出土した。

2は口縁部と体部1/2程度が残存する。口径16cm。球状の体部から頸部は強く屈曲し、口縁部は外反する器形である。口唇部内外面は横ナデされる。外面は縦方向にヘラミガキが施されるが、口縁部には消しきれないハケ目痕が残る。内面口縁部は横方向にヘラミガキが施され、以下ヘラナデされており、頸部には指頭痕がみられる。体部下半には黒斑が見られる。色調は内外面共ににぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には1～4mmの細礫・粗砂・軽石と思われる白色粒子を含むが堅緻である。南コーナー付近から出土した。

3は口縁部と体部の1/2程度が残存する。口径16cmを測る。球状の体部から頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。頸部には断面三角形の凸帯が一周する。外面は横方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残り、特に頸部付近には顕著である。口縁部内面はヘラミガキされるが、ハケ目痕が残る。以下ヘラナデされるが工具痕が残る。体部下半には黒斑が観察される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含み、白色粒子を多く含む。西コーナーに近い北西溝内から出土した。

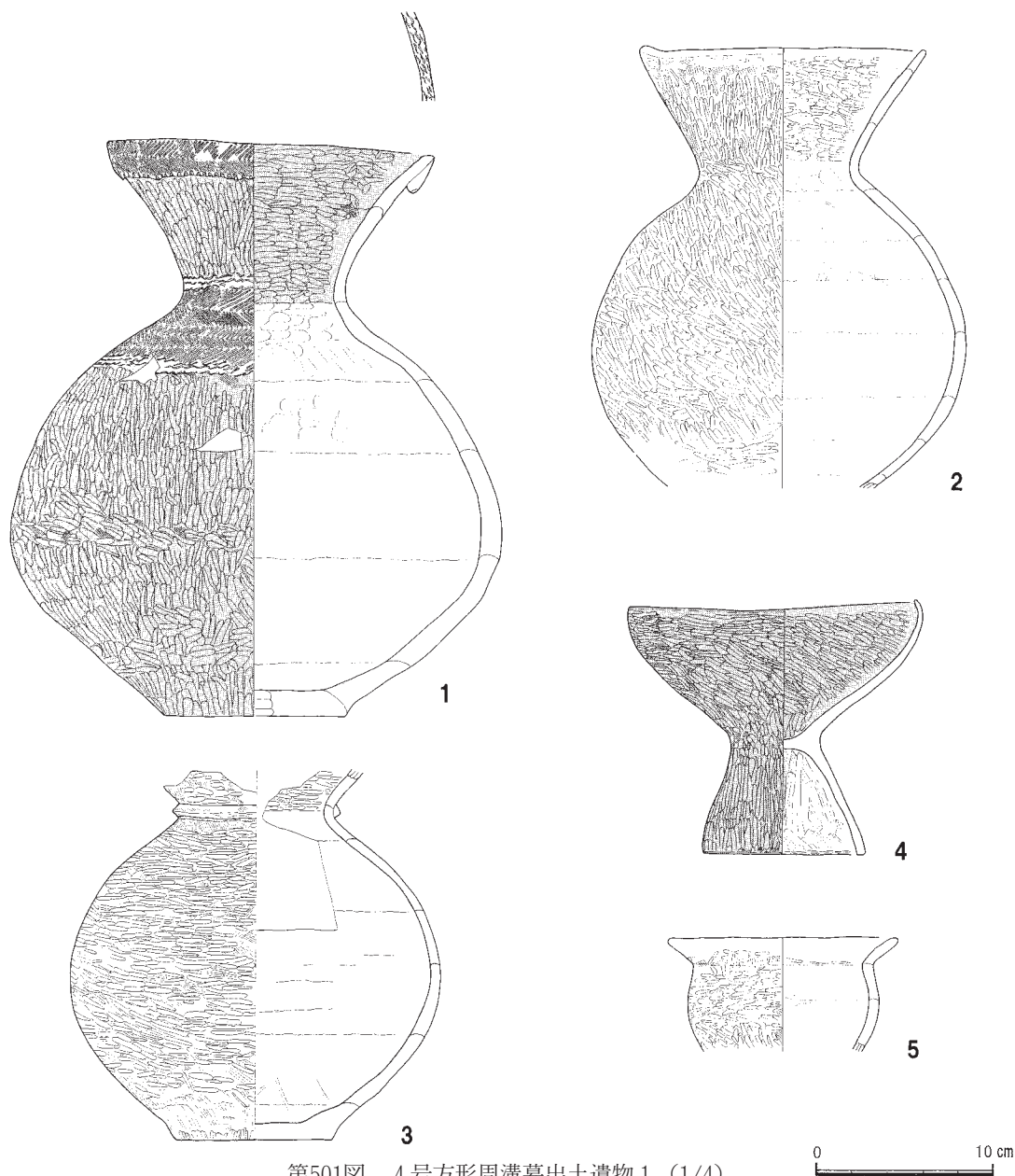
第502図6・7・12は同一個体で、超大型壺の破片である。口縁端部と複合口縁部外面にはLRの単節縄文が施

され、3条のZ字状結節文が施される。口縁部下端には刻みが施される。肩部外面には3条のZ字状結節文が施され、その下にはLRの単節縄文が施される。Z字状結節文の上には円形浮文と円形赤彩文が施される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈し、胎土には礫・粗砂を含み、軽石と思われる白色粒子を多く含む。東コーナー付近から出土した。

8・9は同一個体の単純口縁壺破片。口縁部外面と肩部には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、2条のS字状結節文が縄文帯と無文帯の境目に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR4/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。東コーナー寄り北東溝内覆土中からの出土。

10は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。下端には2条のS字状結節文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。縄文帯内部には赤彩痕がみられる。色調は褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。北西溝内覆土中からの出土。

11は超大形壺の肩部破片。1段目に10条程度のS字状結節文が施される。2段目にはLRの単節縄文が施される。



第501図 4号方形周溝墓出土遺物1 (1/4)

縄文帯下端は鋸歯状文で区画され、磨り消される。S字状結節文の内部には円形浮文が貼付される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）を呈し、胎土には礫・粗砂を含む。北コーナー寄りの北東溝内から出土した。

13は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端にはS字状結節文が施される。色調は褐色（7.5YR5/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。北東溝内覆土中からの出土。

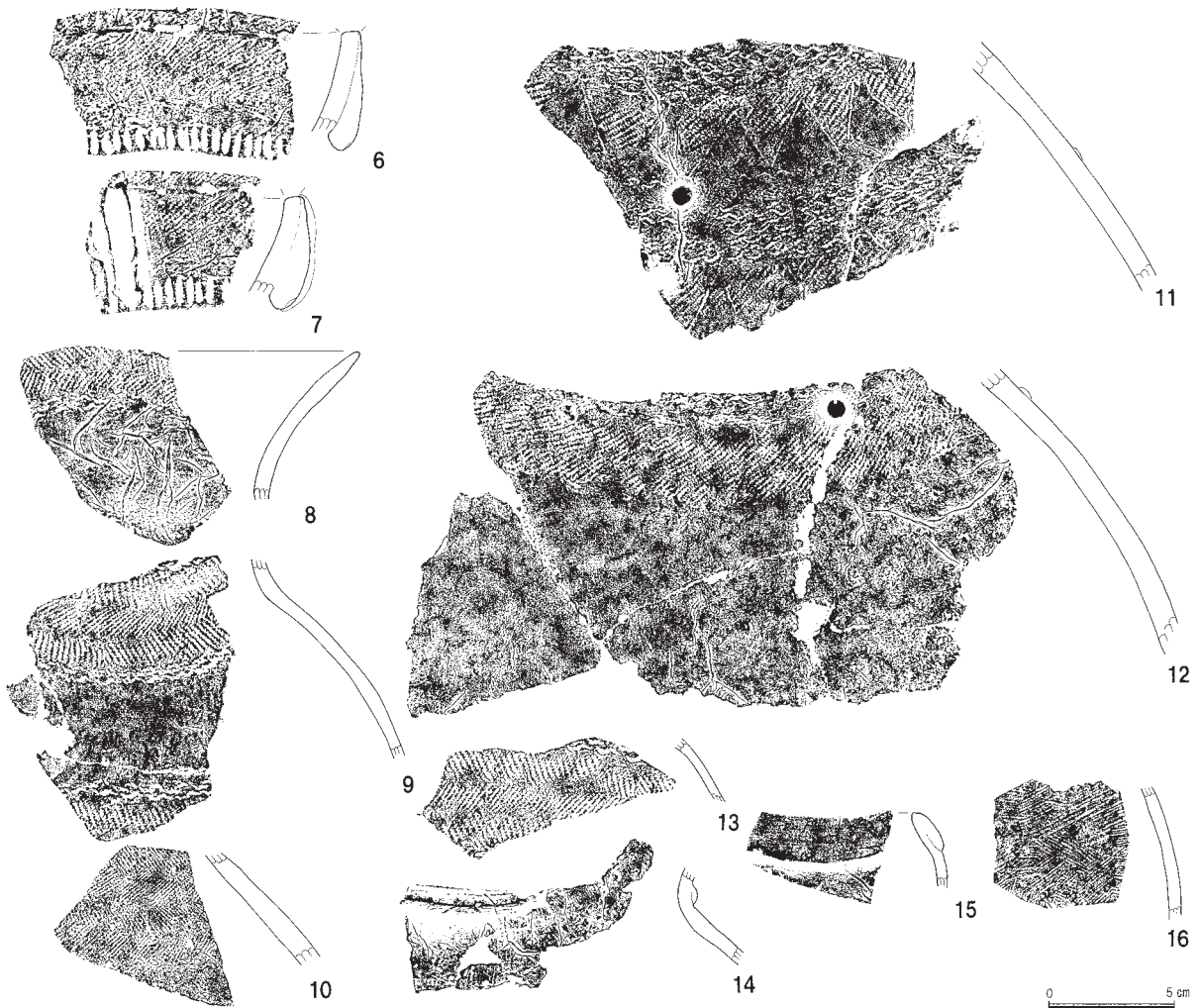
14は頸部破片。頸部は「く」字状に屈曲し、外面には断面三角形の凸帯が巡る。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。西コーナー付近覆土中からの出土。

鉢形土器（第501図5、第502図15）

第501図5は1/4程度が遺存する。口径13cm。小型で球状を呈する体部から頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は大きく外反し口唇部は丸みを帯びる器形である。口縁部内外面共にヨコナデされるが僅かにミガキ痕を残す。体部外面はヘラミガキされるが一部にハケ目痕が残る。体部内面は丁寧にヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。西コーナーから出土した。

第502図15は複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（2.5YR4/3）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器（第501図4）



第502図 4号方形周溝墓出土遺物2 (1/3)

完形。口径17cm・裾部径9.5cm・器高14.5cmを測る。坏部は深く、内湾気味に立ち上がり碗状を呈する。脚台部は直線的に広がる。坏部内外面、脚台部外面は縦方向に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。脚台部内面はヘラナデされる。色調は赤褐色(2.5YR4/3)を呈する。胎土は細礫・砂粒・軽石と思われる白色粒子を多く含む。南東溝内から出土した。

甕形土器(第502図16)

体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色(5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南東溝内覆土中からの出土。

ガラス製小玉(第539図2・3)

2は長さ0.6cm・径0.8cm・穴径0.3cm・重量0.4g、3は長さ0.8cm・径0.8cm・穴径0.35cm・重量0.7gを測る。色調は濃紺色を呈する。主体部Aから出土した。

7号方形周溝墓(第503図)

〔位置〕 24 I 地点。

〔周溝の構造〕 大部分が調査区外にあり、東コーナー付近の調査に終わる。

(東溝) 上幅45cm・下幅22cm・深さ48cmを測り、コーナー部は上幅60cm・下幅35cm・深さ30cmを測る。

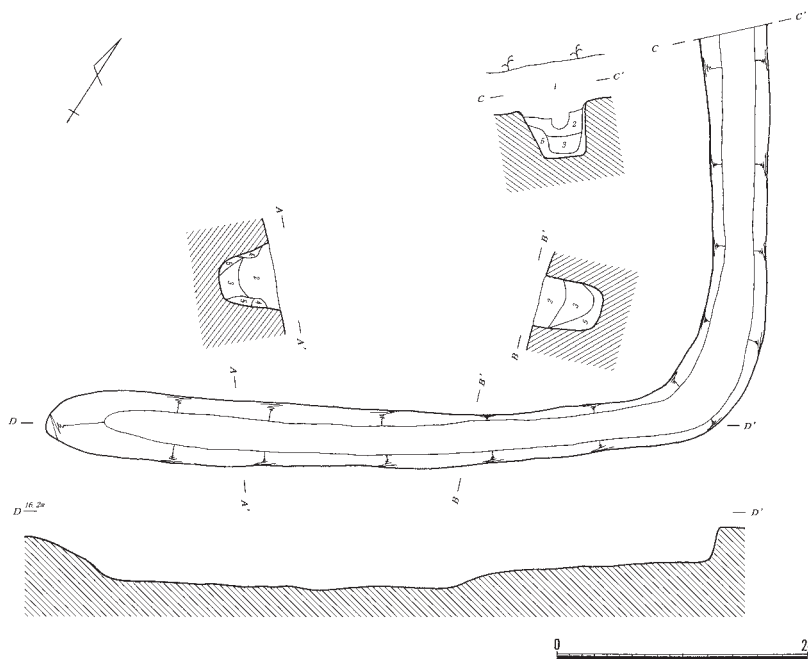
(南溝) 上幅45cm・下幅24cm・深さ50cmを測る。

(断面形) U字状を呈し、70°前後の角度で立ち上がる。

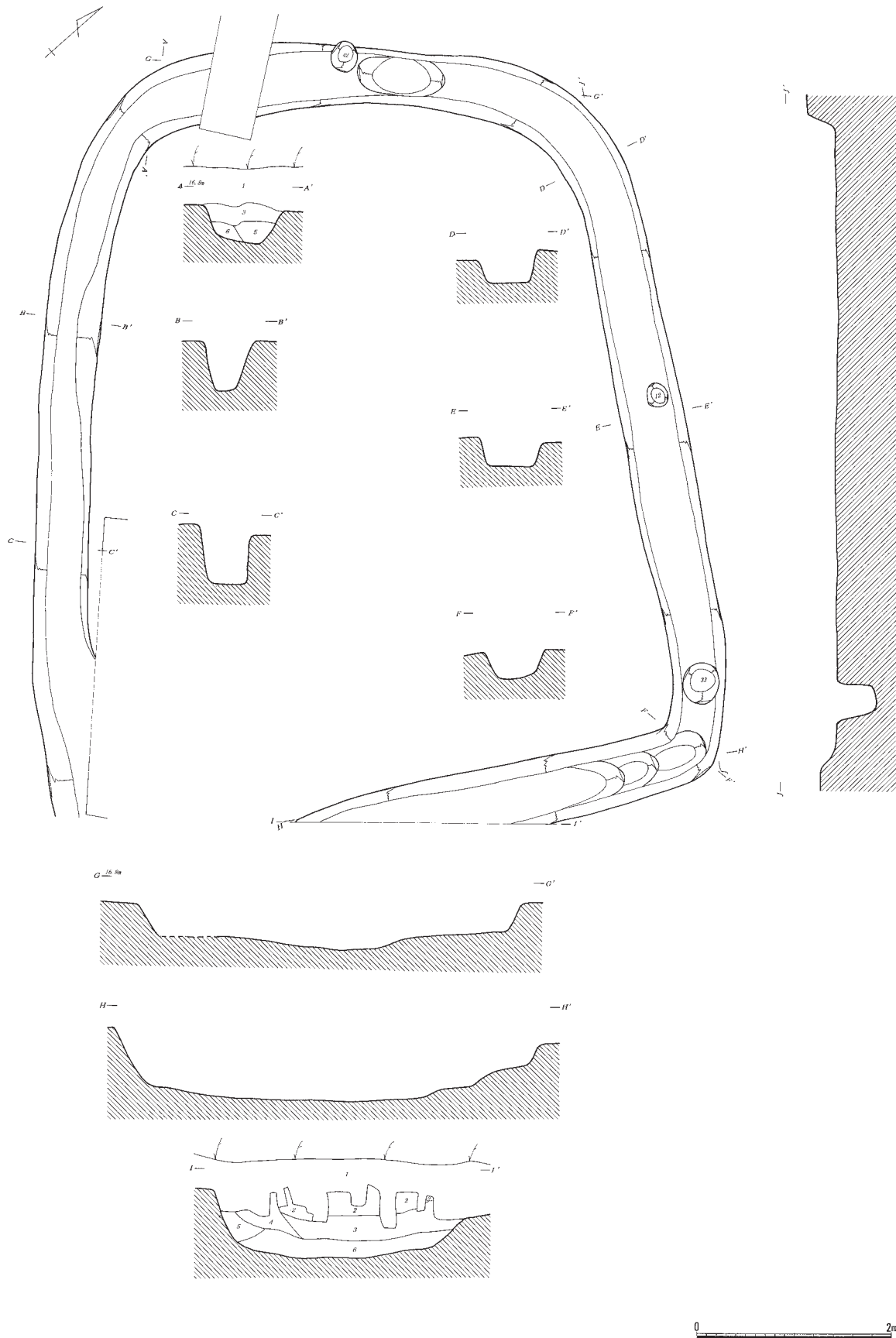
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 5層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。



第503図 7号方形周溝墓(1/60)



第504图 8号方形周溝墓 (1/60)

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

8号方形周溝墓（第504図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔周溝の構造〕 44・46 J、164 Y を切る。南コーナー付近部調査区外。平面形は略長方形を呈する。

（東溝）上幅67cm・下幅40cm・深さ68cmを測り、東コーナー部に近い部分が段をもつ。

（西溝）長さ500cm・上幅60cm・下幅48cm・深さ34cmを測り、中央に段をもつ。

（南溝）長さ700cm・上幅60cm・下幅30cm前後・深さ58cm前後を測る。

（北溝）上幅67cm・下幅50cm・深さ28cmを測り、溝底は比較的平坦である。

（断面形）逆台形を呈し、70° 前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。

3層 暗褐色土。ローム粒子を含む。

4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

5層 黒褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

6層 暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土したが、図示できる遺物は1点のみであった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

8号方形周溝墓出土遺物（第505図1）

壺形土器（第505図）

1/3程度が残存する。口径13.5cm・底径5.9cm・器高13.5cmを測る。平底の底部から立ち上がり、張りのない球状の体部を作る。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する器形である。外面は縦方向、内面は横方向にヘラミガキされる。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

9号方形周溝墓（第506図）

〔位置〕 25 I 地点。

〔周溝の構造〕 45 J を切る。西溝を欠き、平面形は「コ」字状を呈する。南東コーナー部を掘り残しブリッジとする。

（東溝）長さ680cm・上幅63cm前後・下幅42cm前後・深さ13～17cmを測る。

（南溝）西側は攪乱されている。上幅67cm前後・下幅55cm前後・深さ25cm前後を測る。

（北溝）長さ620cm・上幅76cm前後・下幅55cm前後・深さ25cm前後を測る。

（断面形）逆台形を呈し、80° 前後の角度で立ち上がる。

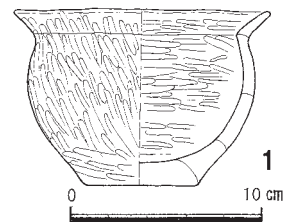
〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。

3層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。



第505図 8号方形周溝墓出土遺物（1/4）

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 古墳時代前期。

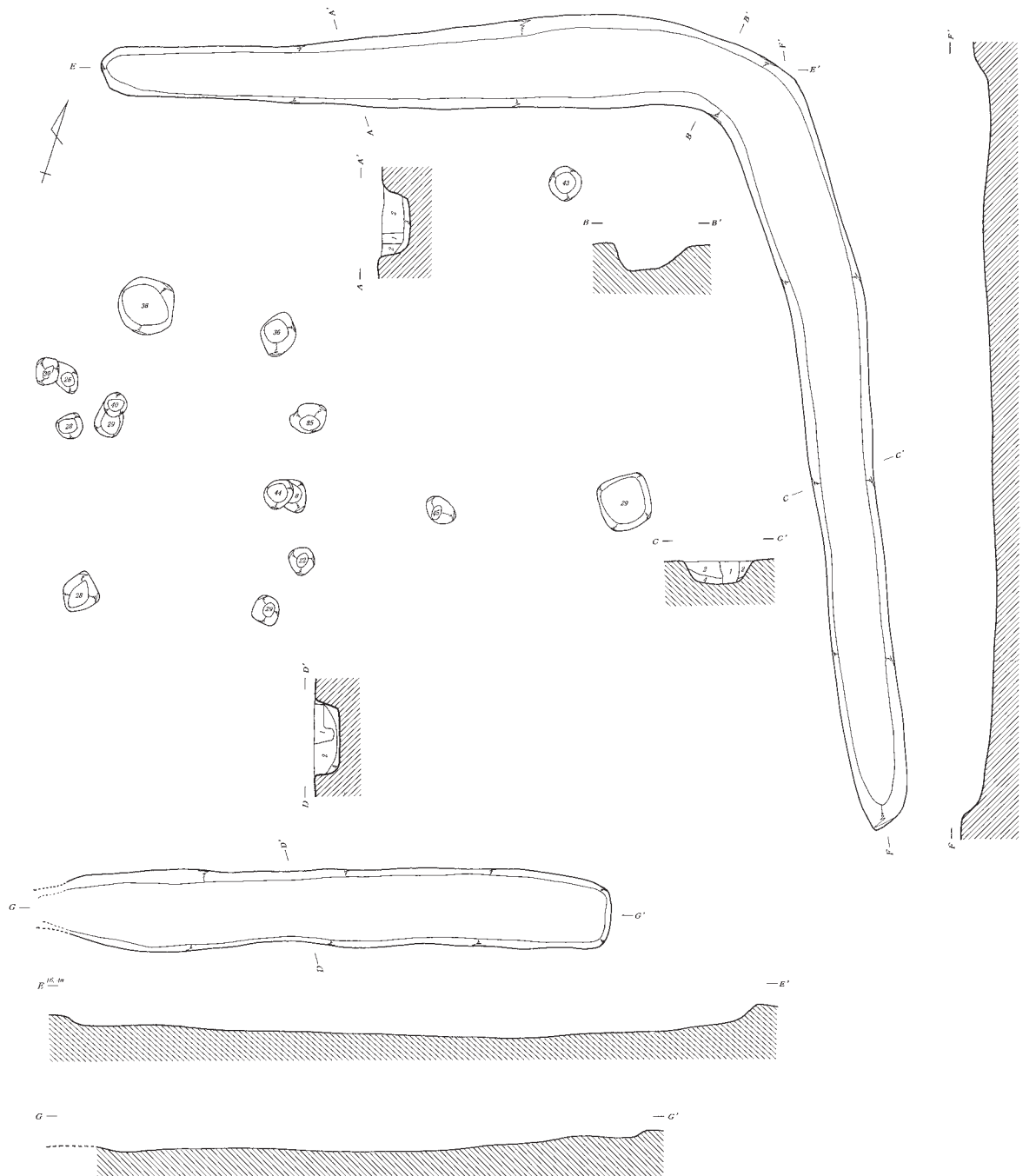
10号方形周溝墓（第507図）

〔位置〕 25Ⅱ地点。

〔周溝の構造〕 南東溝と北東溝の一部のみの調査である。

（北東溝） 南側の一部のみの調査である。上幅300cm前後・下幅140cm前後・深さ100cmを測り、80° 前後の角度で立ち上がる。溝底はコーナー部が一段高くなっている。

（南東溝） 中央部を掘り残してブリッジを形成している。北東側は長さ1,000cm・上幅450cm前後・下幅150～250



第506図 9号方形周溝墓 (1/60)

cm・深さ110~150cmを測る。溝底は僅かに起伏があるがほぼ平坦で、コーナー部は階段状をなす。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側が急斜で60°前後、外側で40°前後を測る。西側は確認できた部分で長さ800cm・深さ60cm前後を測る。溝底はやや傾斜をもち、55°前後の角度で立ち上がる。溝底に5本のピットが検出された。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 3層 黒色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 4層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕ブリッジ東側から東海西部地方に系譜を持つ多数の土器が出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

10号方形周溝墓出土遺物（第508図1~10、第509図11~15）

壺形土器（第508図1）

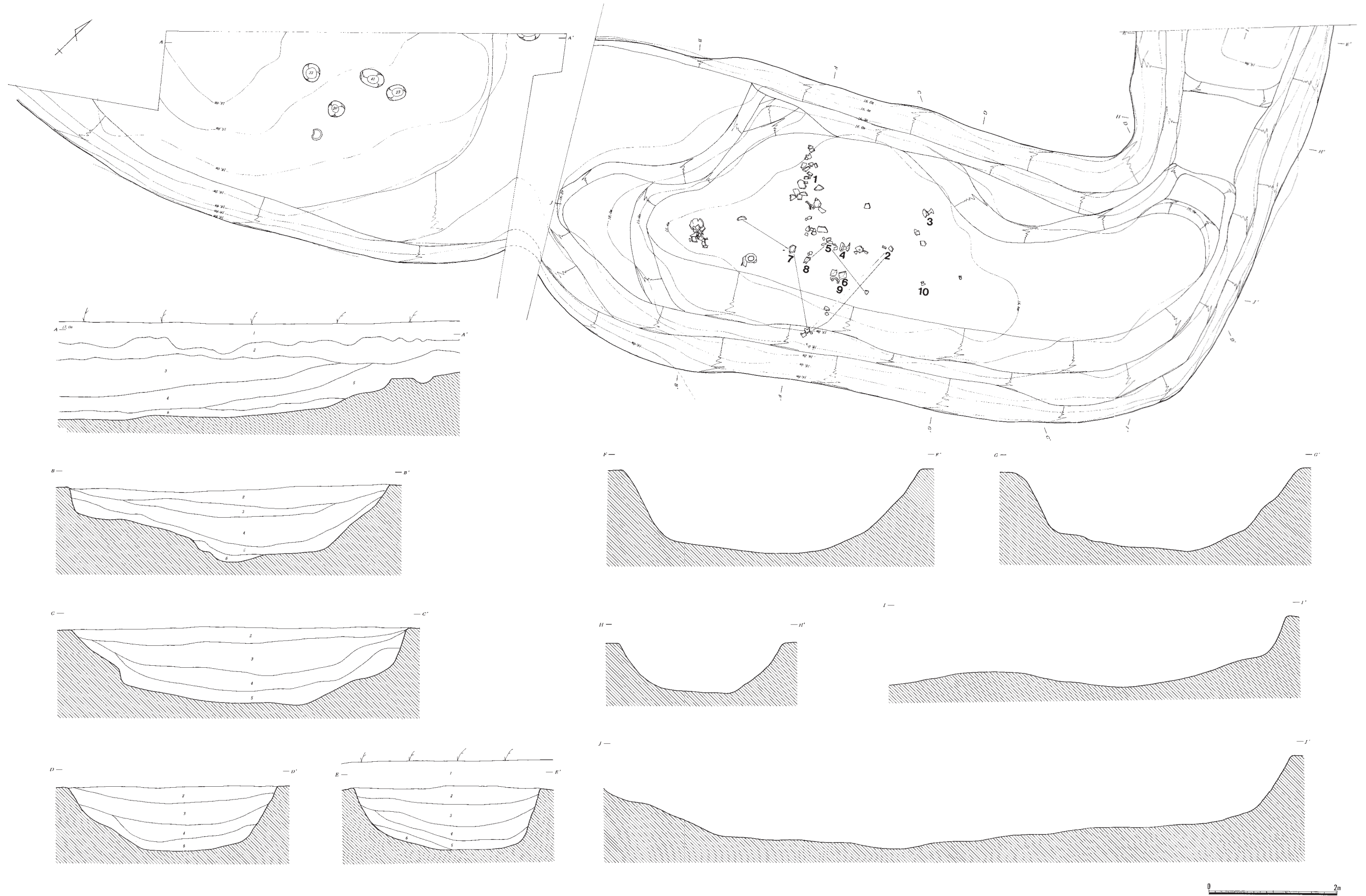
1は体部下半に最大径をもち、つぶれたような偏球状を呈する。完形である。口径16.5cm・底径10.5cm・器高24.5cmを測る。頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は僅かに内湾気味に開き、内側から外反する口唇部に至る。口唇部はヨコナデされる。口縁部外面には粘土を貼り付けたと思われる僅かな稜がみられる。外面と口縁部内面は横方向にヘラミガキされ赤彩されるが、ハケ目痕が残る。体部内面はヘラナデされるが、一部にミガキ痕が見られる。色調は赤褐色（10YR5/4）を呈する。胎土は細礫・砂粒・白色粒子を含むが堅緻である。焼成前に赤彩されていたと思われる。ブリッジ東側、南東溝内から出土した。

高坏形土器（第508図2~6）

2は伊賀地方の系統のものとして認められる土器で、坏部の器厚は極めて薄く、非常に丁寧な作りの土器でほぼ完形である。口径19.5cm・裾部径10.5cm・高さ14.5cmを測る。口縁部は大きく外反しながら開き、口唇部に段をもつ。坏部下端には稜をもち、脚部は柱状を呈し細身で長く、裾部はラッパ状に開き、途中3孔が開けられる。口縁部は横ナデされる。体部内外面共に縦方向にヘラミガキされる。脚台部外面は上部が横方向、裾部が縦方向にヘラミガキされる。脚台部内面は上半が縦方向、下半が横方向にヘラナデされる。色調も在地の土器とは大きく異なる黄褐色（10YR6/3）を呈する。胎土には細礫が僅かに含まれるが、精選されきめ細かく堅く焼き締まっている。ブリッジ東側、南東溝内から出土した。

3は2の土器を在地の粘土で模倣しようと試みたと推測される土器である。坏部のみ遺存し、口径20cmを測る。口縁部は大きく外反しながら開き、口唇部に僅かな段をもつ。坏部下端には僅かに稜をもつ。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケメ痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土は細礫・砂粒を僅かに含むがきめ細かい。ブリッジ東側、南東溝内から出土した。

4~6はいずれも坏部が塊状を呈する高坏形土器である。4は脚部の3/4を欠損する。口径14cm・裾部径16.5cm・器高11.2cmを測る。坏部はゆるやかに内湾しながら開く。脚部は末広がりに開き、先端が僅かにはね上がる。途中3孔が開けられる。口縁部と脚部内面はヘラナデされる以外は縦方向に丁寧にヘラミガキが施される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/3）をする。胎土には細礫・砂粒を僅かに含むが、非常に精選されており堅緻である。5もほぼ完形。口径13.5cm・裾部径16.5cm・器高10cmを測る。6は全体の1/2程度を欠く。口径14cm・裾部径16cm・器高11cmを測る。5・6の器形・調整・胎土・色調の特徴は4とほぼ相似するが、口縁部が僅かに外反する。ブリッジ東側、南東溝内から出土した。



第507图 10号方形周溝墓 (1/60)

鉢形土器（第508図7）

比較的大型の土器である。口径20cm・底径7cm・器高20cmを測る。頸部はゆるやかにくびれて短い口縁部は外反する器形である。体部外面と口縁部内面にはヘラミガキが施されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい橙色（7.5TE5/3）を呈し、胎土には細礫・砂粒・白色粒子を含むがきめ細かい。ブリッジ東側、南東溝内から出土した。

甕形土器（第508図8～10、第509図11～15）

第508図8は小型の台付甕形土器の甕部である。口径11.8cmを測る。球状の体部から頸部で屈曲し、口縁部は僅かに外反する器形である。内外面共に丁寧にヘラナデされるが体部外面には僅かにハケ目痕が残る。外面はスリッパをかけたと思われ、平滑で薄く色がついているように観察される。色調はにぶい橙色（5YR6/4）を呈する。胎土には若干の細礫・砂粒・白色粒子を含むが、精選されておりきめ細かく堅緻である。ブリッジ東側から出土。

9は叩き調整甕を模倣しようとしたと推測される甕形土器である。全体の4/5程度が遺存する。口径15.5cm・底径4.5cm・器高22.5cmを測る。2の高坏と共に伊勢地方の影響がみられる土器である。球状の体部から頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は「ハ」字状に外傾し、内面の接合部には粘土を押圧した痕のはみ出しがみられる。底部は輪台をつけたような平底である。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕を残す。色調はにぶい橙色（7.5YR7/3）を呈する。胎土には細礫・砂粒・白色粒子を含むがきめ細かい。ブリッジ東側、南東溝内から出土した。

10は脚台部のみ残存する。裾部径5.7cmを測る。接合部外面には粘土帯が巡る。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい黄橙色（10R6/2）を呈し、胎土に粗砂・赤褐色粒子を含む。ブリッジ東側、南東溝内から出土した。

第509図11は口縁部破片。頸部は屈曲し、口縁部は外反す。内外面はヘラナデされるがハケメ痕が残る。色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂・褐色粒子を含む。東コーナー寄り覆土中から出土した。ブリッジ東側、南東溝内から出土した。

12～15は体部破片。内外面ヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は12が褐灰色（7.5YR4/1）、13がにぶい赤褐色（5YR5/4）、14がにぶい褐色（7.5YR4/2）、15が灰褐色（5YR4/2）を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂を含む。南東溝覆土中から出土した。

11号方形周溝墓（第510図）

〔位置〕 25Ⅲ・25Ⅳ地点。

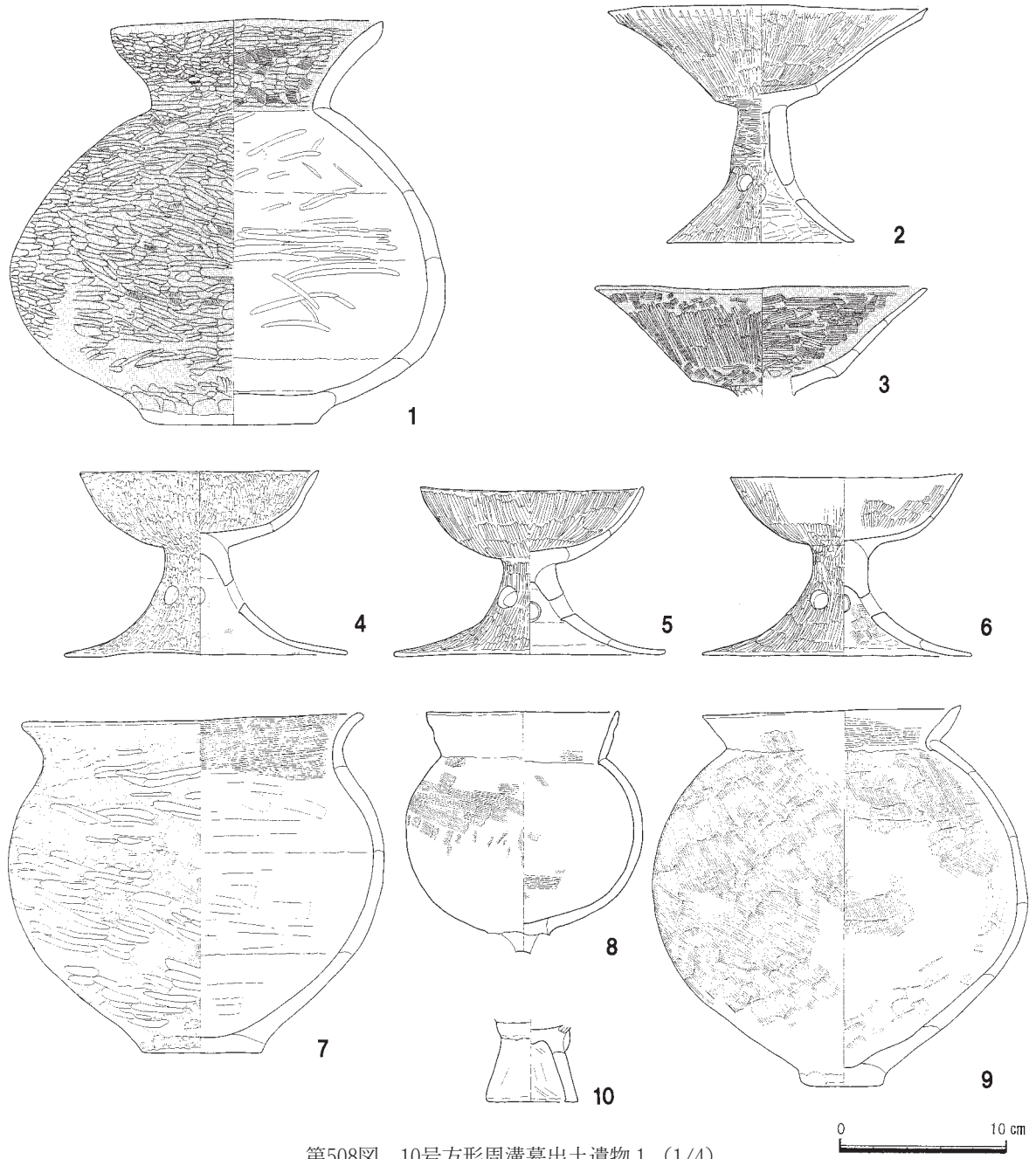
〔周溝の構造〕 大部分が調査区外である。東コーナー付近は道路があり調査できなかった。

（南東溝）上幅237cm前後・下幅145cm前後・深さ96cm前後を測る。

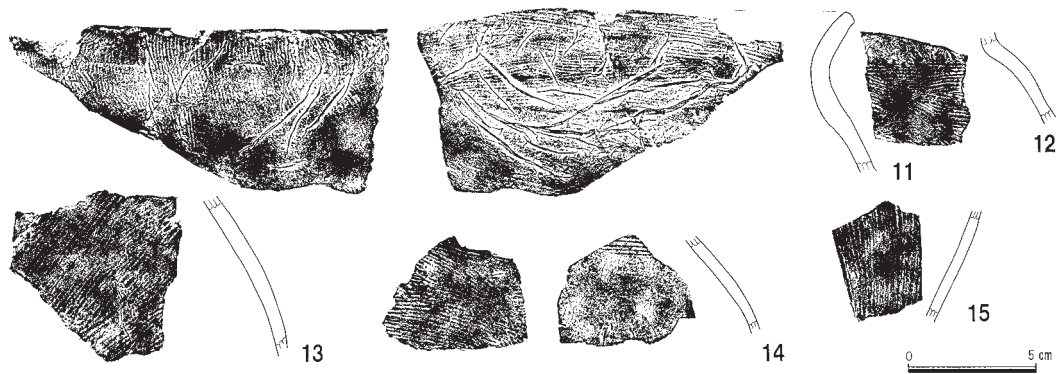
（断面形）逆台形を呈する。溝底は平坦で立ち上がりの角度は方台部側が急斜で80°前後、外側は60°前後を測る。

〔覆土〕

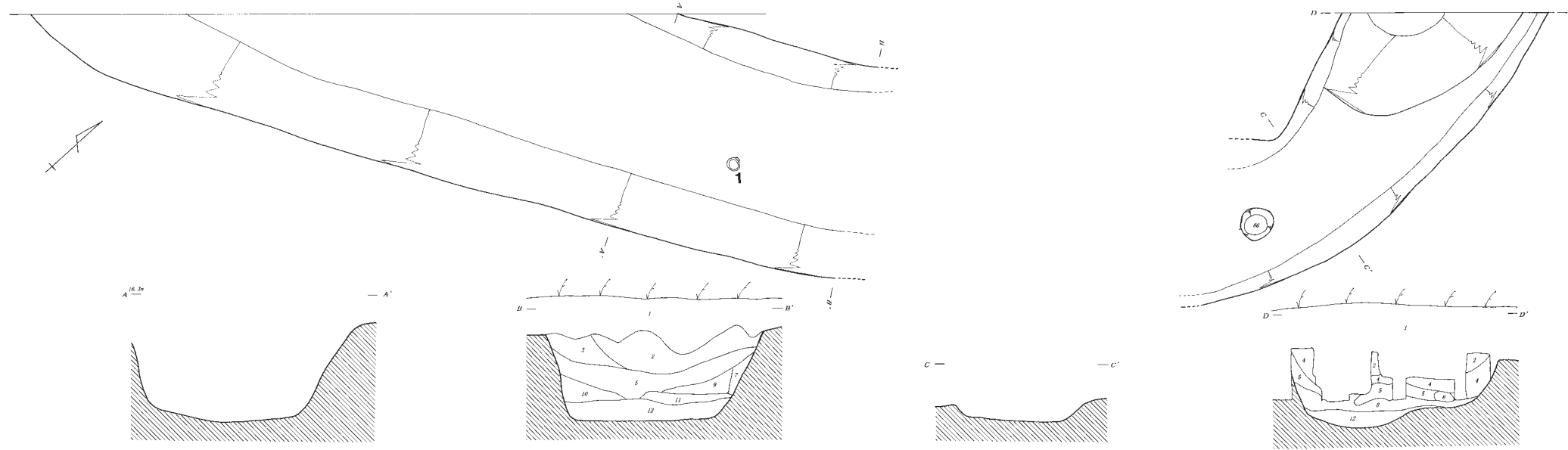
- 1層 耕作土。
- 2層 黒色土。ローム粒子を含む。
- 3層 黒褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子を含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 6層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。
- 7層 黄褐色土。ロームブロック。
- 8層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 9層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。



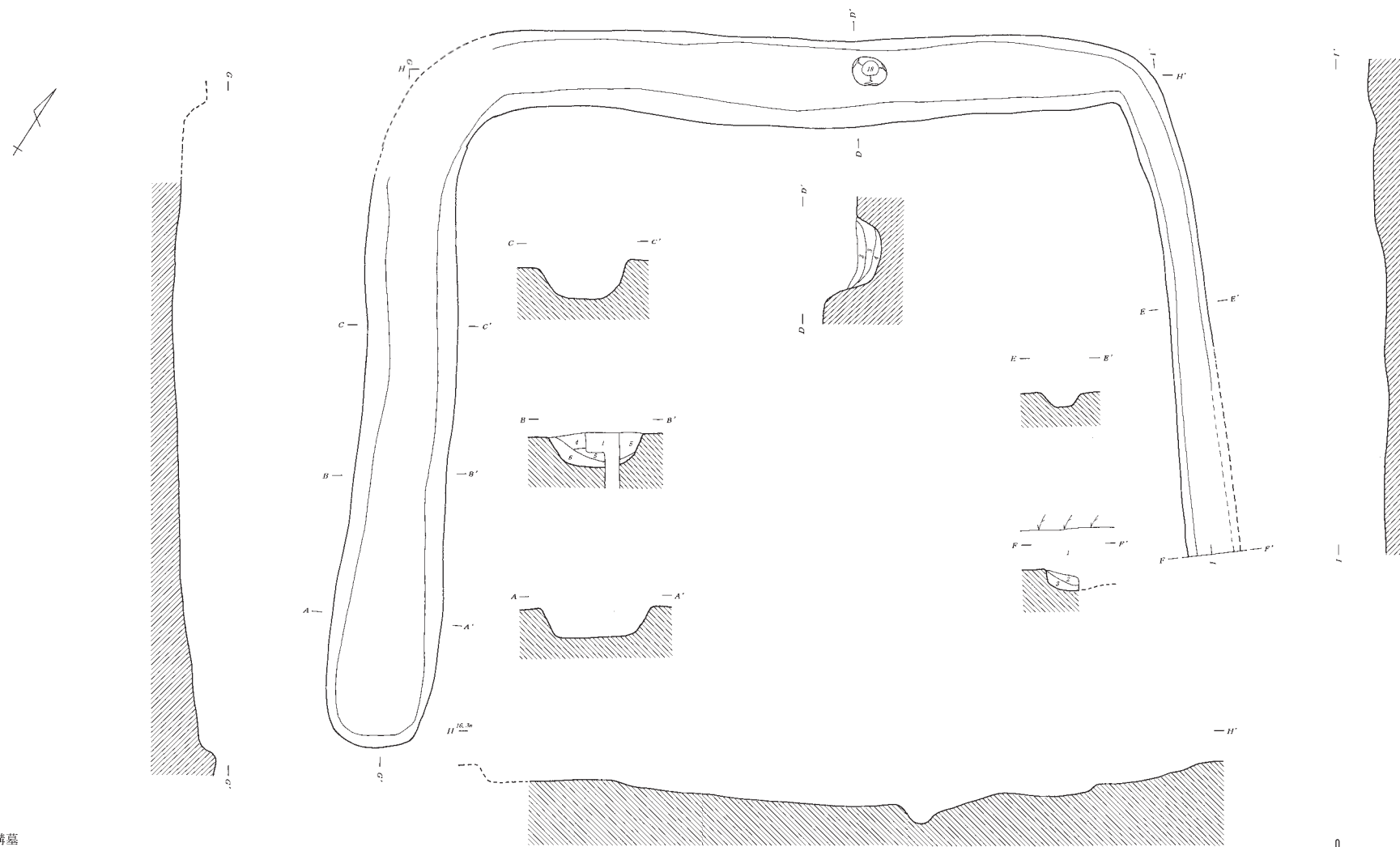
第508図 10号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)



第509図 10号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)



11号方形周溝墓



12号方形周溝墓

第510图 11・12号方形周溝墓 (1/60)

10層 暗褐色土。ローム粒子を含む。

11層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

12層 暗黄褐色土。ローム再堆積。

〔遺物〕南溝内から高坏形土器が出土した。

〔時期〕弥生時代後期～古墳時代前期。

11号方形周溝墓出土遺物（第511図、第512図2～5）

壺形土器（第512図2・3）

2は頸部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。覆土中からの出土。

3は肩部破片。外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施される。1段目のLRの単節縄文の下端には2条のS字状結節文が施される。色調は灰褐色（7.5YR5/2）を呈する。胎土には礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器（第511図1、第512図4）

第511図1は坏部のみ残存する。口径17.5cmを測る。坏部は単口縁でゆるく内湾しながら立ち上がり、半球状を呈する器形である。頸部には刻みの入った凸帯が巡る。口縁部は僅かに内湾する。口縁部にはRLの単節縄文の端末結節を羽状に施す。縄文帯の境目には縄文の端の痕がみられる。外面は縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈し、胎土には礫・粗砂・白色粒子・赤褐色粒子を含む。南溝内から出土した。

第512図4は坏部破片。碗状を呈する器形であると思われる。口縁部外面にはRLの単節縄文が施される。色調はにぶい黄橙色（10YR7/2）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（第512図5）

口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされる。色調は灰褐色（5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

12号方形周溝墓（第510図）

〔位置〕25Ⅲ地点。

〔周溝の構造〕南東溝と北東溝の一部は調査区外。

（北東溝）上幅39cm前後・下幅28cm前後・深さ18cm前後を測る。断面はU字状を呈し、立ち上がりの角度は50°前後を測る。

（南西溝）南東側で途切れる。長さ710cm・上幅89cm前後・下幅50cm前後・深さ44cm前後を測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は55°前後を測る。

（北西溝）長さ730cm・上幅87cm前後・下幅61cm前後・深さ18cm前後を測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は70°前後を測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

5層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。

6層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

13号方形周溝墓（第513図）

〔位置〕 26地点。

〔周溝の構造〕 西側・北側調査区外。54 J を切る。314・317D に切られる。

（東溝） 上幅56cm前後・下幅36cm前後・深さ32cm前後を測る。

（南溝） 上幅63cm前後・下幅46cm前後・深さ23cmを測り、南東コーナー付近で段をもつ。

（断面形） 逆台形を呈し、立ち上がりの角度は80° 前後を測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗褐色土。ローム粒子を含む。

3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

4層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

14号方形周溝墓（第514図）

〔位置〕 26地点。

〔周溝の構造〕 西側調査区外。329・331D に切られる。東コーナーを掘り残し、ブリッジにするようである。

（東溝） 上幅70cm前後・下幅50cm前後・深さ36cm前後を測る。

（北溝） 上幅40～90cm・下幅30～60cm・深さ25～50cmを測る。南溝とのコーナー部は331D に破壊されている。

（断面形） 逆台形を呈し、立ち上がりの角度は80° 前後を測る。

〔覆土〕

1層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。

2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。

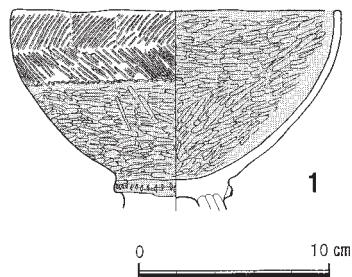
〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

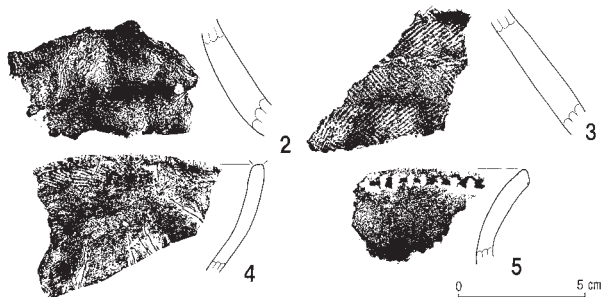
14号方形周溝墓出土遺物（第515図）

甕形土器（第515図1）

台付甕形土器の脚台部のみ残存する。裾部径11cmを測る。裾部へかけて直線的に広がる器形である。内外面共にヘラナデされる。色調はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの



第511図 11号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)



第512図 11号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)

出土。

15号方形周溝墓（第516図）

〔位置〕 26地点

〔周溝の構造〕 大部分が調査区外。南コーナー部のみが検出された。

上幅102cm前後・下幅60cm前後・深さ25cm前後を測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は70° 前後を測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 3層 暗黄褐色土。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
- 4層 暗褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を含む。
- 5層 褐色土。ローム粒子を多く含む。

〔遺物〕 図示できる遺物はなかった。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

16号方形周溝墓（第517図）

〔位置〕 25Ⅶ・30・71地点。

〔周溝の構造〕 138 J・467 Yを切る。既存の道路により南東部を帯状に破壊されている。

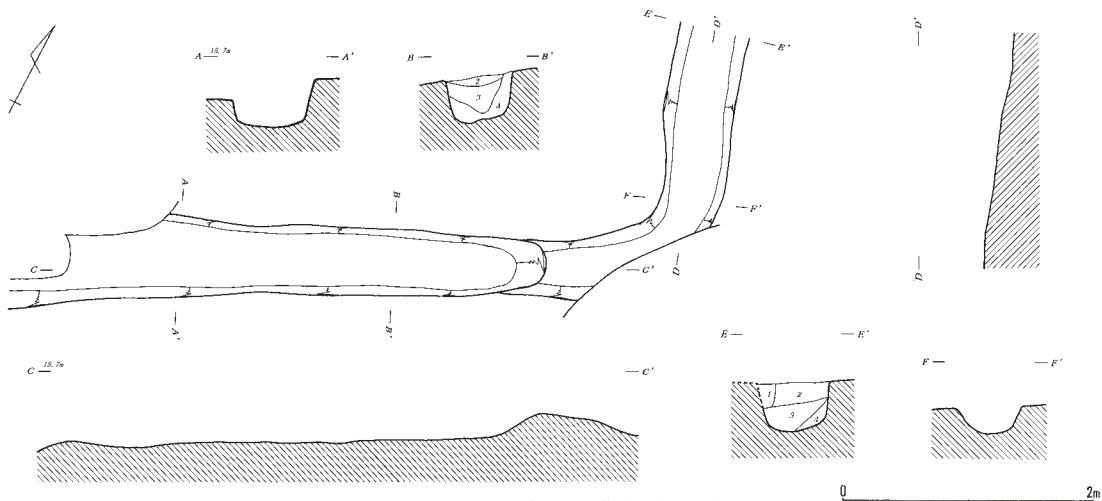
（北東溝）長さ1,100cm・上幅96cm前後・下幅56cm前後・深さ57cm前後を測る。

（北西溝）長さ1,150cm・上幅80cm前後・下幅50cm前後・深さ31～54cmを測る。

（断面形）逆台形を呈し、立ち上がりの角度は70° 前後を測る。

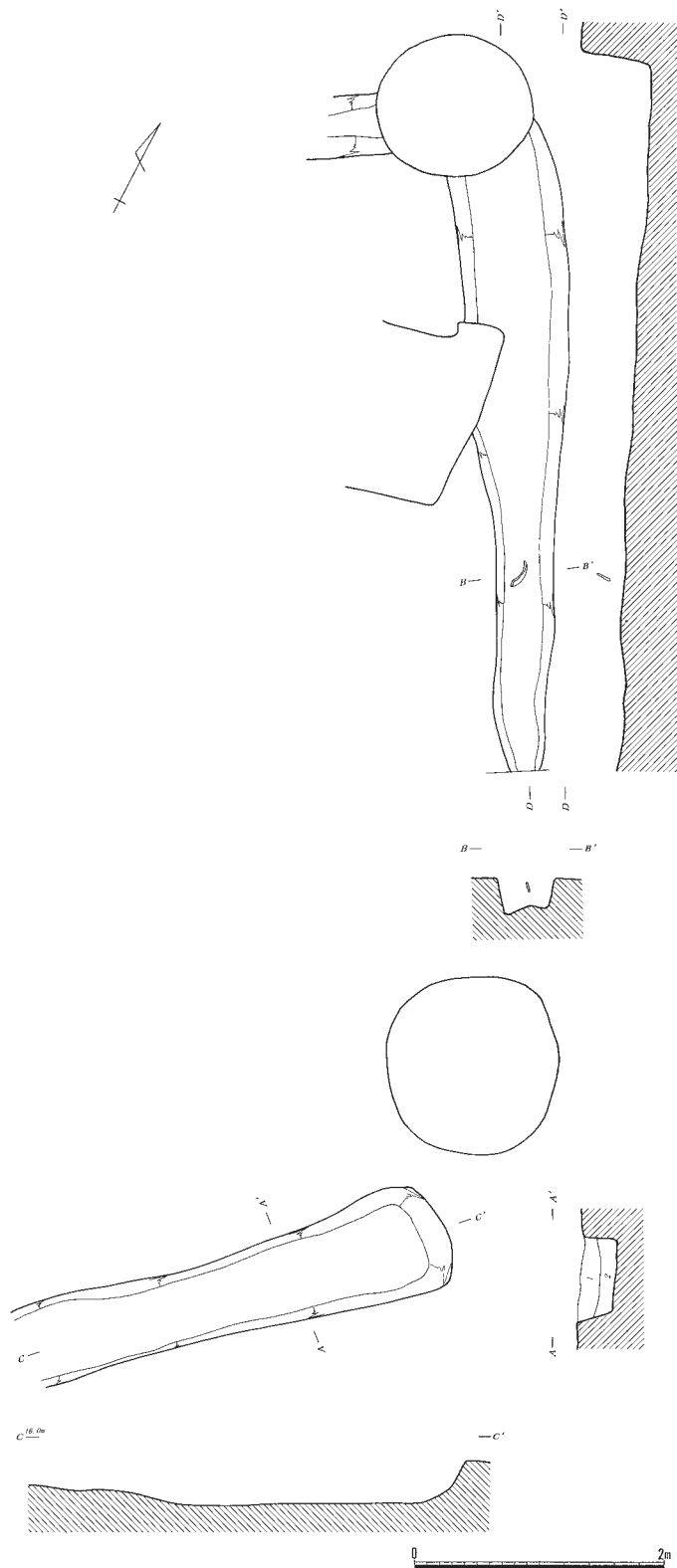
〔覆土〕

- 1層 盛土。
- 2層 耕作土。
- 3層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 4層 灰黄褐色土（10YR4/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。壁の崩落。
- 5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。

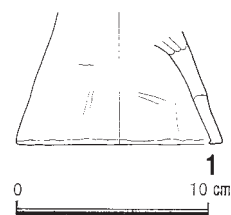


第513図 13号方形周溝墓（1/60）

- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや粘質。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。
- 9層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。



第514図 14号方形周溝墓 (1/60)



第515図 14号方形周溝墓出土遺物 (1/4)

- 10層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
 - 11層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
 - 12層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。
 - 13層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
 - 14層 黒色土 (7.5YR2/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
 - 15層 黒褐色土 (10YR3/2)。ロームブロックを多く含む。やや軟質。
 - 16層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
- 〔遺物〕 南東溝内から完形の鉢形土器が出土した。
- 〔時期〕 古墳時代前期。

16号方形周溝墓出土遺物 (第518図1)

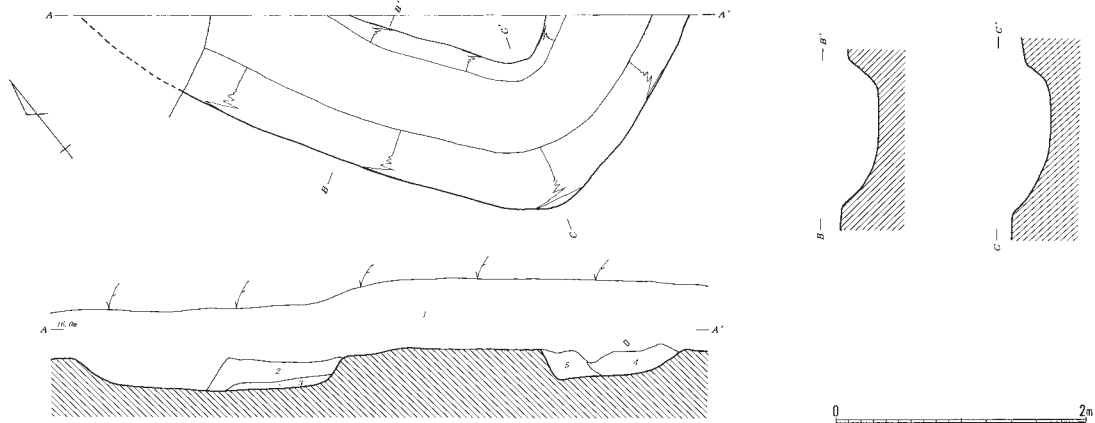
鉢形土器 (1)

完形で出土。口径13.5cm・底径6cm・器高8.8cmを測る。壺形土器を途中で切断したような碗状の器形である。ややくぼんだ底部からゆるやかに開きながら立ち上がり、体部中位で内側に角度を変え口縁部へ至る。口縁部は内湾し、口唇部は面取りされる。内外面共にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は灰黄褐色 (10YR6/2) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。南東溝から出土した。

18号方形周溝墓 (第519図)

- 〔位置〕 36地点。
- 〔周溝の構造〕 南西側の大部分が調査区外である。北西—南東溝間で1,130cmを測る。
- (南東溝) 上幅120cm前後・下幅70cm・深さ30cm前後を測る。
 - (北西溝) 上幅170cm前後・下幅130cm・深さ20cm前後を測る。
- (断面形) 逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側60° 前後、外側が80° 前後を測る。
- 〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。サラサラした感じ。
- 6層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。硬質。



第516図 15号方形周溝墓 (1/60)

- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 9層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。軟質。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

18号方形周溝墓出土遺物 (第520図)

壺形土器 (1・2)

1は複合口縁部破片。口縁部外面には3本の棒状浮文が貼付され、直径1cmの円形赤彩文が施されると推測される。口縁部内面はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

2は肩部破片。外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、縄文帯内部には沈線による鋸歯文が2段施される。1段目の縄文帯内部には円形浮文が4個貼付される。色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

20号方形周溝墓 (第519図)

〔位置〕 46・47Ⅱ地点。

〔周溝の構造〕 東側は調査区外。北西側は既存の道路により破壊されている。345Yを切る。北一南溝間で1,440cmを測る。

(西溝) 方台部側は破壊されている。深さ40cm前後を測る。

(南溝) 上幅220cm前後・下幅130cm前後・深さ53cm前後を測る。外側に段をもつ。

(北溝) 上幅160cm前後・下幅100cm・深さ65cm前後を測る。

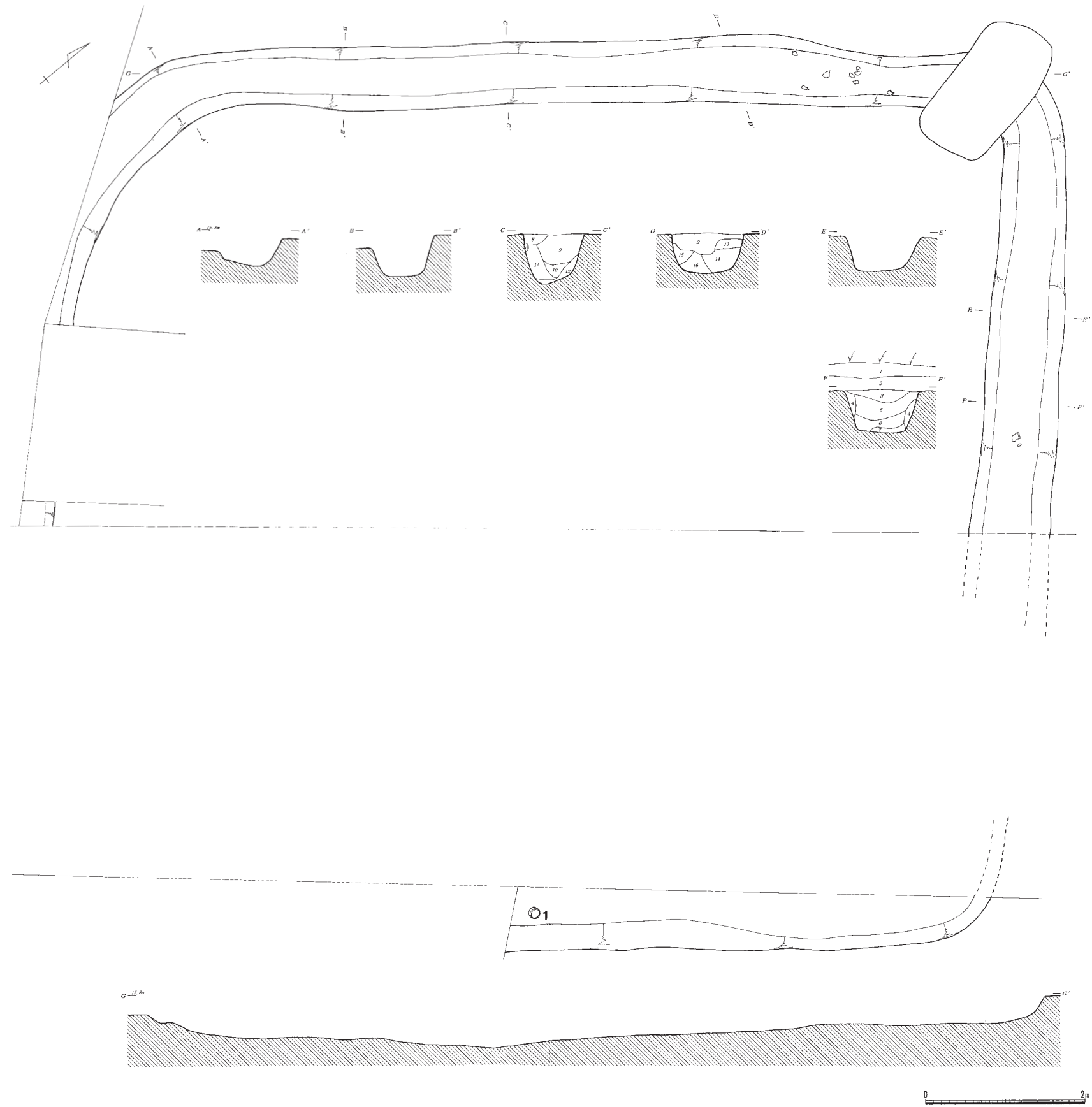
(断面形) 逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側が急斜で80° 前後、外側が60° 前後を測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 7層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 9層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや軟質。
- 10層 黒褐色土 (5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を含む。硬質。
- 12層 黒褐色土 (2.5Y3/1)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 13層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 14層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。軟質。

〔遺物〕 覆土中から破片が僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

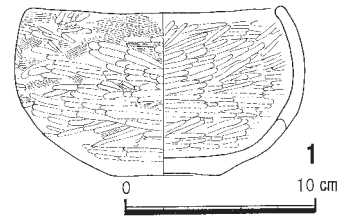


第517图 16号方形周溝墓 (1/60)

20号方形周溝墓出土遺物（第521図1～5）

鉢形土器（1）

口縁部破片。外面はヨコナデされるが、ハケ目痕が残る。内面は横方向にヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。



甕形土器（2～5）

すべて口頸部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。2の色調はにぶい褐色（7.5YR6/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。3は灰褐色（7.5YR4/2）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。4・5は同一個体と思われる。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。すべて覆土中より出土した。

第518図 16号方形周溝墓出土遺物(1/4)

21号方形周溝墓（第522図）

〔位置〕 12Ⅱ地点。

〔周溝の構造〕 南東溝は大部分が攪乱で破壊されている。南コーナーは掘り残されていて、ブリッジを形成する。

（北東溝）長さ465cm・上幅39cm前後・下幅27cm前後・深さ17cm前後を測る。

（南西溝）長さ340cm・上幅76cm前後・下幅35cm前後・深さ48cm前後を測る。

（北西溝）長さ490cm・上幅47cm前後・下幅29cm前後・深さ22cm前後を測る。

（断面形）逆台形を呈し、立ち上がりの角度は70°前後を測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 暗赤褐色土（5YR3/2）。焼土粒子を多く含む。炭化物粒子を含む。やや軟質。

3層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子を僅かに含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

4層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。

6層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

8層 黒褐色土（7.5YR3/2）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

21号方形周溝墓出土遺物（第523図、第524図2～5）

埴形土器（第524図2）

複合口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（2.5YR4/9）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。

器台形土器（第523図1）

脚台部下半の1/2程度が残存する。裾部径12.2cmを測る。裾部へかけて末広がる器形である。脚部の下位と中位に交互に円孔が空けられている。外面は縦方向にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には粗砂を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。

甕形土器（第524図3～4）

3・4は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は4は黒褐色(7.5YR3/1)、5は暗赤褐色(5YR3/2)を呈する。4の胎土には細礫・粗砂・白色粒子を、5の胎土には細礫・粗砂を含む。すべて覆土中からの出土であった。

22号方形周溝墓(第525図)

〔位置〕25VI地点。

〔周溝の構造〕北西及び南東側は調査区外。また、攪乱により破壊されている部分が多い。431Dを切る。

(東溝)上幅60cm前後・下幅50cm前後・深さ34cm前後を測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側で60°前後、外側で75°前後を測る。

(西溝)上幅80cm前後・下幅30cm前後・深さ49cm前後を測る。コーナー部分で途切れる可能性がある。断面は「U」字状を呈し、立ち上がりの角度は方台部側で65°前後、外側で60°前後を測る。

(南溝)上幅55cm前後・下幅35cm前後・深さ30cm前後を測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側で60°前後、外側で70°前後を測る。

(北溝)上幅70cm前後・下幅25cm前後・深さ50cm前後を測る。コーナー部分を掘り残し、ブリッジを形成する。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は65°前後を測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土(10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。

5層 灰黄褐色土(10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。

〔遺物〕東溝内から壺形土器が出土した。

〔時期〕古墳時代前期。

22号方形周溝墓出土遺物(第526図)

壺形土器(1)

東海西部地方に系譜を持つ小型壺。口縁部を欠損する。底径8cmを測る。平底の底部から外傾し、体部下半まで粘土を積み上げて一度止めて、ある程度乾燥してからさらに頸部までを作り上げたと推測される器形である。頸部はやや直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。肩部外面には5条一単位の櫛歯状工具により、櫛描波状文が上から1・3・4段目に施される。2段目には同一工具による横線文が施される。外面は縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。口縁部内面は横方向にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。内面は頸部以下ヘラナデされる。内面体部下半以下にはハケ目痕が残る。底部外面には木葉痕がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。東溝内坑底から出土した。

23号方形周溝墓(第527図)

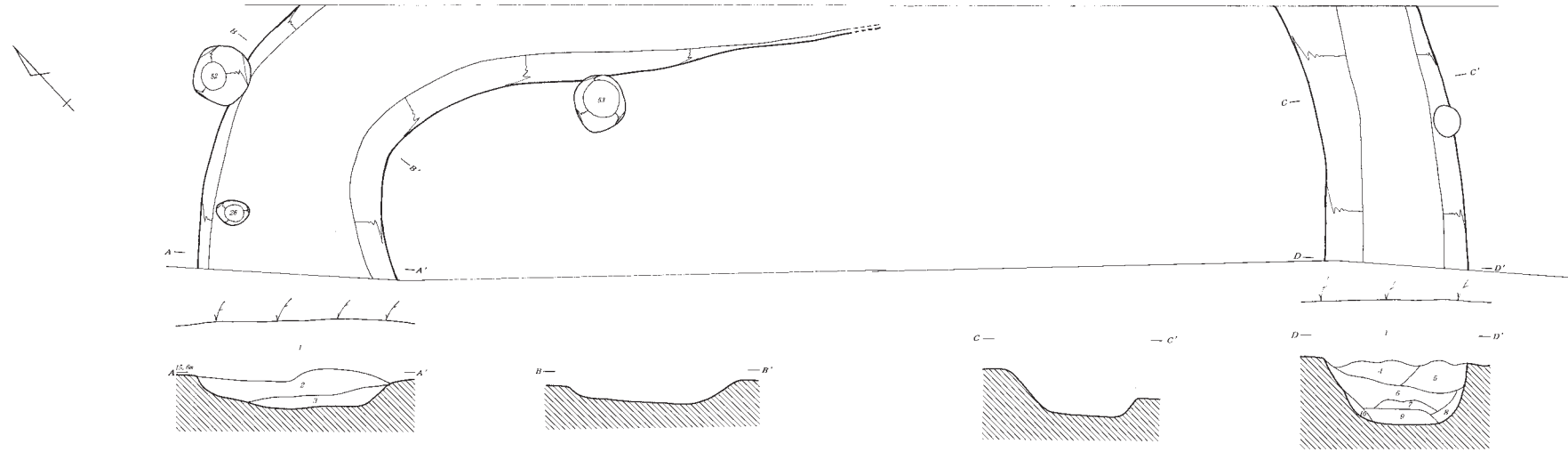
〔位置〕25VII地点。

〔周溝の構造〕東側は道路により破壊されている。123・124・126J、468Yを切る。

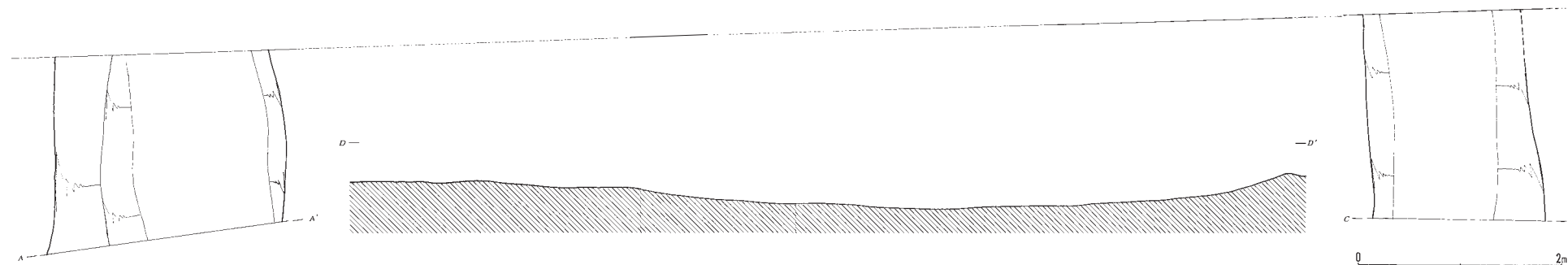
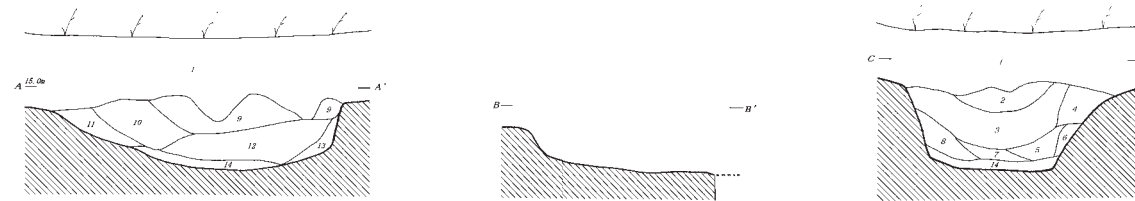
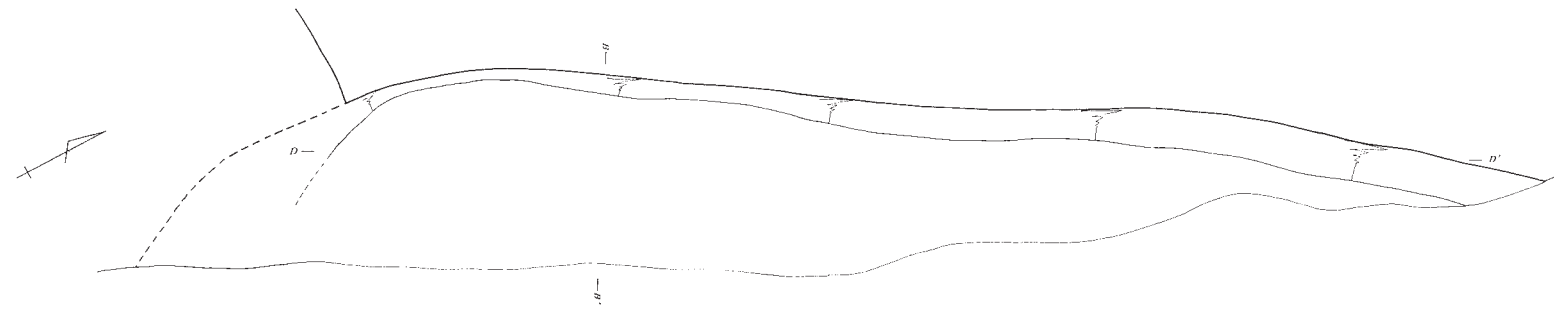
(北東溝)上幅150cm前後・下幅110cm前後・深さ40cm前後を測る。

(北西溝)上幅100cm前後・下幅65cm前後・深さ50cm前後を測る。

(南西溝)上幅115cm前後・下幅65cm前後・深さ65cm前後を測る。



18号方形周溝墓



20号方形周溝墓

第519图 18・20号方形周溝墓 (1/60)

(断面形) 逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側が急斜で75~80°、外側で55~60°を測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
- 6層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 8層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。硬質。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子を含む。やや硬質。
- 10層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 11層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 12層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 北西溝から西コーナー付近に土器が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

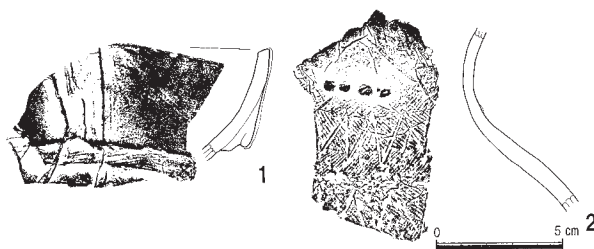
23号方形周溝墓出土遺物 (第528図)

壺形土器 (1~4)

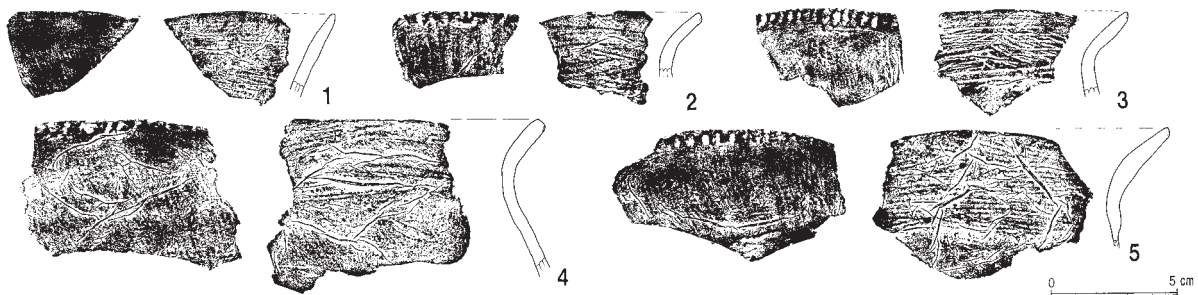
1は複合口縁部破片。口縁部外面にはLRの単節縄文の端末結節が2段施され、棒状浮文の代わりに沈線が施される。口縁部下端には刻みが施される。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (2.5YR4/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

2は短い複合口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラミガキされる。色調はにぶい黄橙色 (10YR6/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。西コーナー寄り北西溝内から出土。

3は肩部破片。撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、文様帯内部には鋸歯文が施される。直径1.2cmの円形赤彩文がみられる。色調はにぶい褐色 (7.5YR5/3)を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻であ



第520図 18号方形周溝墓出土遺物 (1/3)



第521図 20号方形周溝墓出土遺物 (1/3)

る。北コーナー寄りの北西溝内から出土。

4は体部破片。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色(5YR4/4)を呈する、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。西コーナー付近の北西溝内2層覆土中からの出土。468号住居跡の遺物である可能性がある。

甕形土器(5~11)

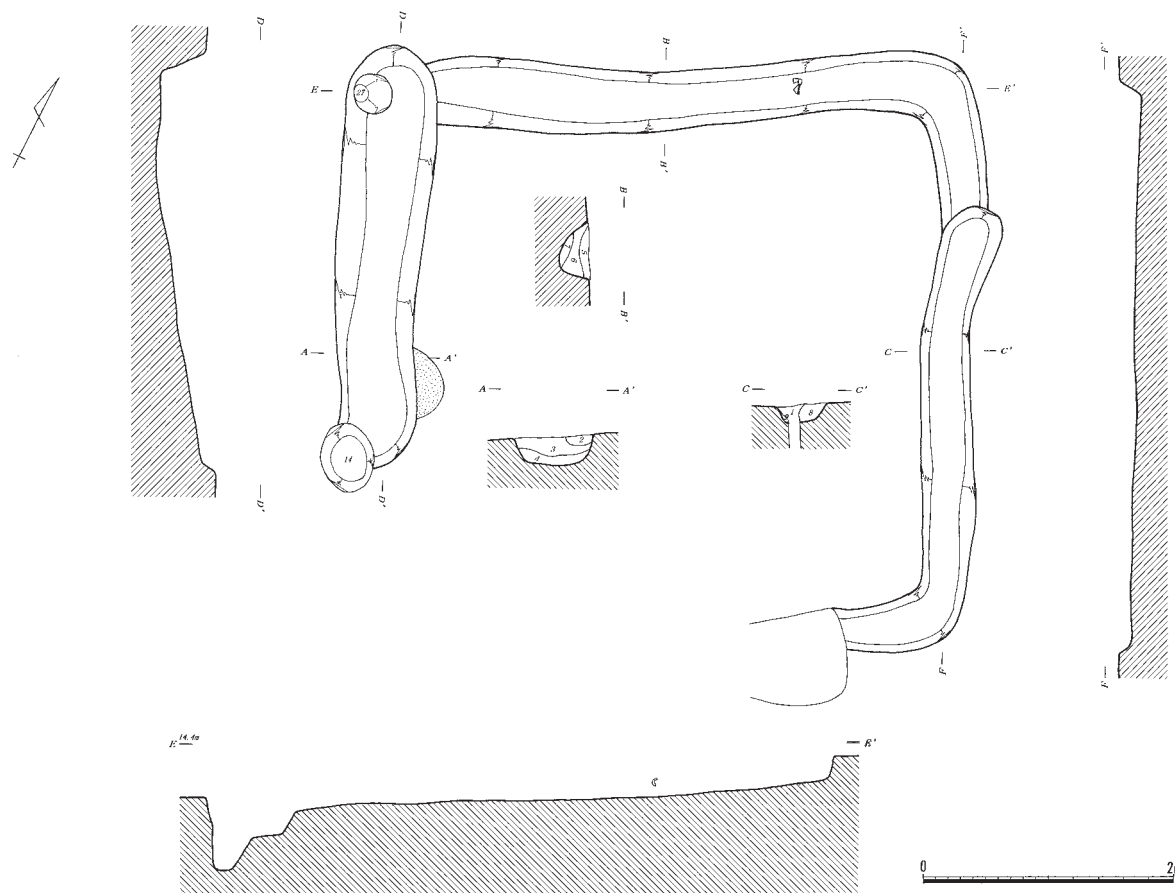
5は口頸部破片。頸部はゆるやかにくびれて口縁部は外傾する。口唇部外面には棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。西コーナー寄り南西溝内から出土した。468号住居跡の遺物である可能性がある。

6は口縁部破片。頸部はくびれて、口縁部は外傾する。口唇部外面は刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。西コーナー寄り南西溝内から出土した。

7も口縁部破片。頸部は屈曲し口縁部は外反する。口唇部外面には右方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされる。色調は褐灰色(7.5YR4/1)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。西コーナー寄り南西溝内から出土した。

8・10は同一個体の体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面には粗いハケ目痕が残る。色調は灰黄褐色(10YR4/2)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。西コーナー寄り南西溝内から出土した。

9・11は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。9の色調はにぶい褐色(5YR5/3)、11はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈する。いずれも胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含み、西コーナー付近から出土した。



第522図 21号方形周溝墓 (1/60)

24号方形周溝墓（第532図）

〔位置〕 71地点。

〔周溝の構造〕 西側は調査区外。138 J・495 Yを切る。

（南東溝） 上幅85cm前後・下幅65cm前後・深さ17cm前後を測る。

（北東溝） 上幅110cm前後・下幅80cm前後・深さ24cm前後を測る。

（断面形） 逆台形を呈し、立ち上がりの角度は80° 前後を測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子・ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。

3層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

4層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ロームブロックを多く含む。軟質。

5層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。

6層 暗褐色土（10YR3/3）。ロームブロックを多く含む。軟質。

7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

8層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

9層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を多く含む。やや軟質。

10層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや軟質。

11層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。硬質。

〔遺物〕 東コーナー付近と、北東溝中央付近から土器が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

24号方形周溝墓出土遺物（第530図、第531図3～9）

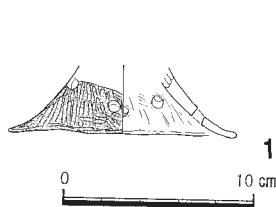
壺形土器（第530図1、第531図3・4・6・9）

第530図1、第531図3・6・9は同一個体。超大型壺の体部の1/4程度が遺存する。底径8cmを測る。平底の底部から立ち上がり、体部中位に最大径を持つ張りの強い体部を作成する。肩部には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、下端には4条のS字状結節文が施される。外面はヘラミガキされ、内面はヘラナデされる。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を多く含む。東コーナーから出土した。

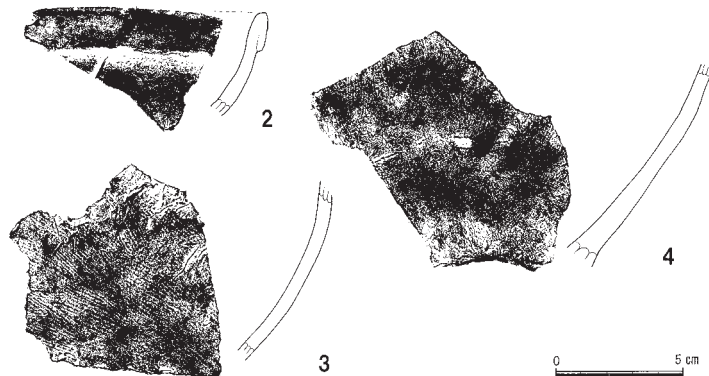
4は肩部破片。LRの単節縄文の端末結節が2段施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂を含む。東コーナー付近から出土した。

高坏形土器（第531図5）

脚台部破片。脚台部下位で一度屈曲して広がる器形である。外面はヘラミガキされるが、消しきれないハケ目痕

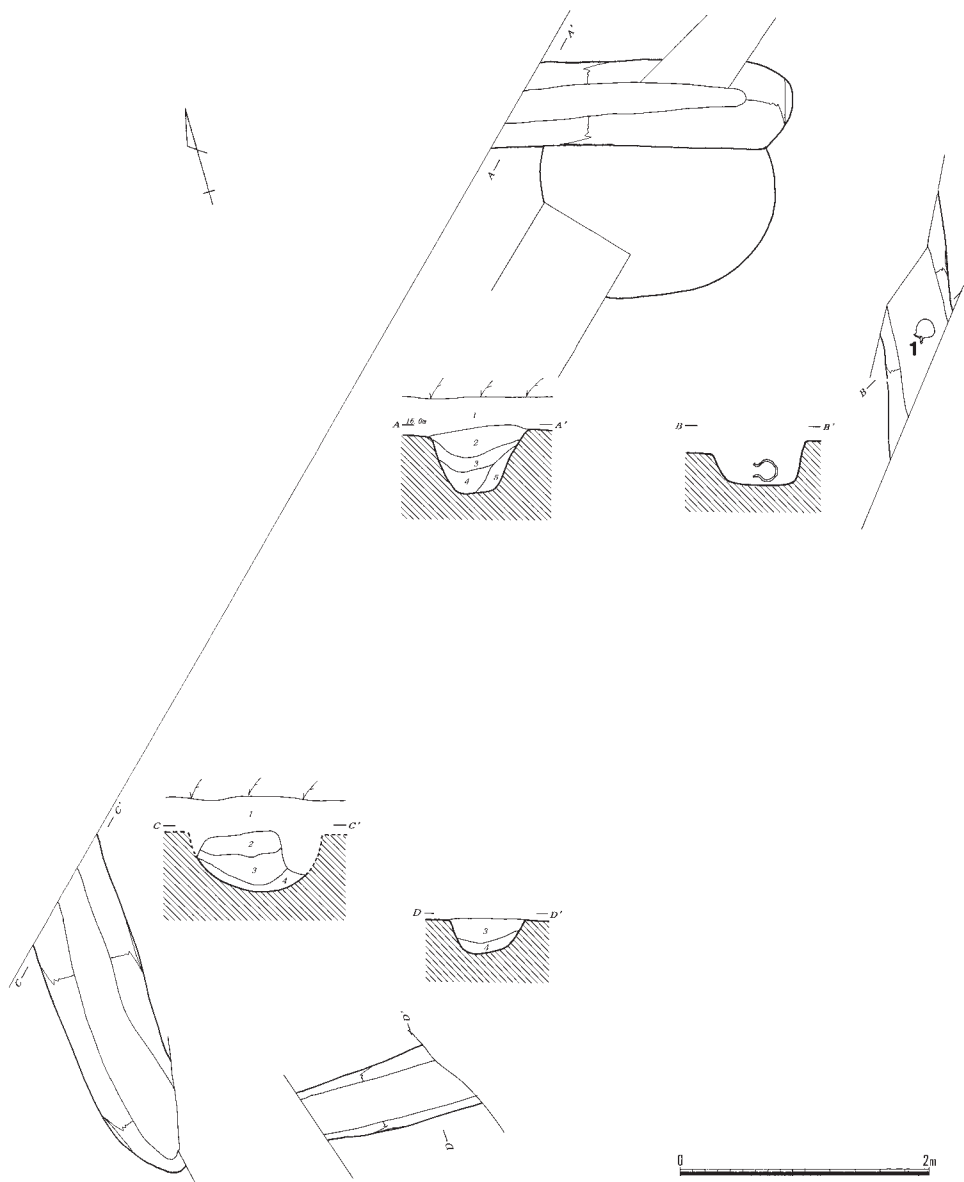


第523図 21号方形周溝墓出土遺物 1（1/4）

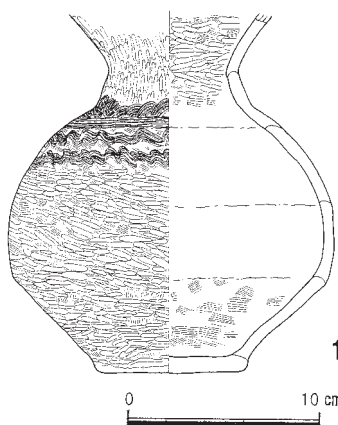


第524図 21号方形周溝墓出土遺物 2（1/3）

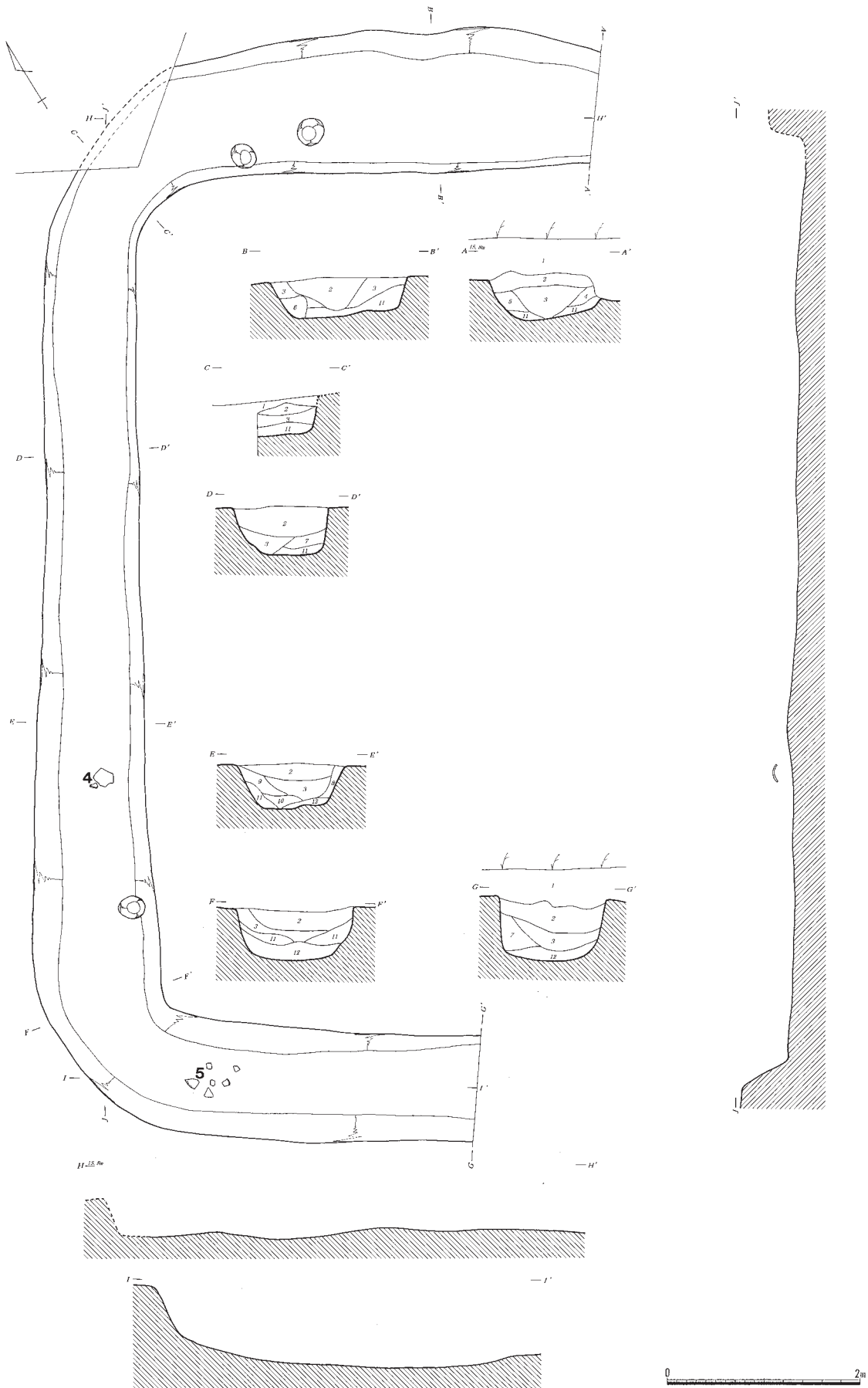
が残る。色調はにぶい赤褐色（2.5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。北東溝内から出土した。



第525図 22号方形周溝墓 (1/60)



第526図 22号方形周溝墓出土遺物 (1/4)



第527図 23号方形周溝墓 (1/60)

甕形土器（第530図2、第531図7・8）

第530図2は台付甕形土器の甕部破片。口径23.5cm。最大径を体部中位にもつ球形の体部から頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部外面には左方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面には僅かにハケ目痕が残る。色調は浅黄橙色（7.5YR8/6）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北東溝内から出土。

第531図7・8は体部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面にはハケ目痕が残る。いずれも色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。北東溝内から出土した。

25号方形周溝墓（第532図）

〔位置〕 70地点。

〔周溝の構造〕 26方の拡張部分とも考えられる。東側は調査区外。

（南溝） 上幅80～110cm・下幅25～45cm・深さ98cm前後を測る。

（北溝） 上幅110cm前後・下幅40cm前後・深さ88cm前後を測る。

（断面形） 逆台形を呈し、立ち上がりの角度は80° 前後を測る。

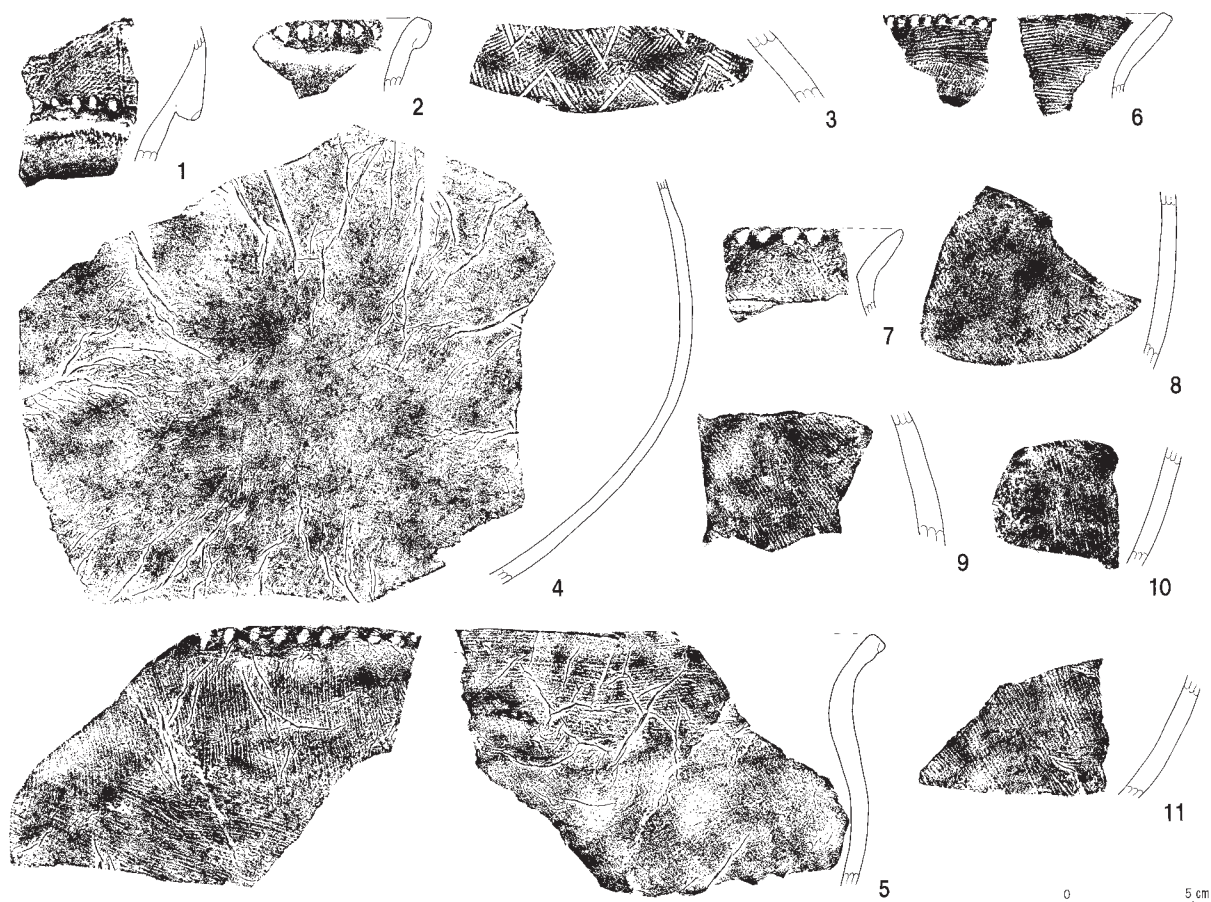
〔覆土〕

1層 耕作土。

22層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

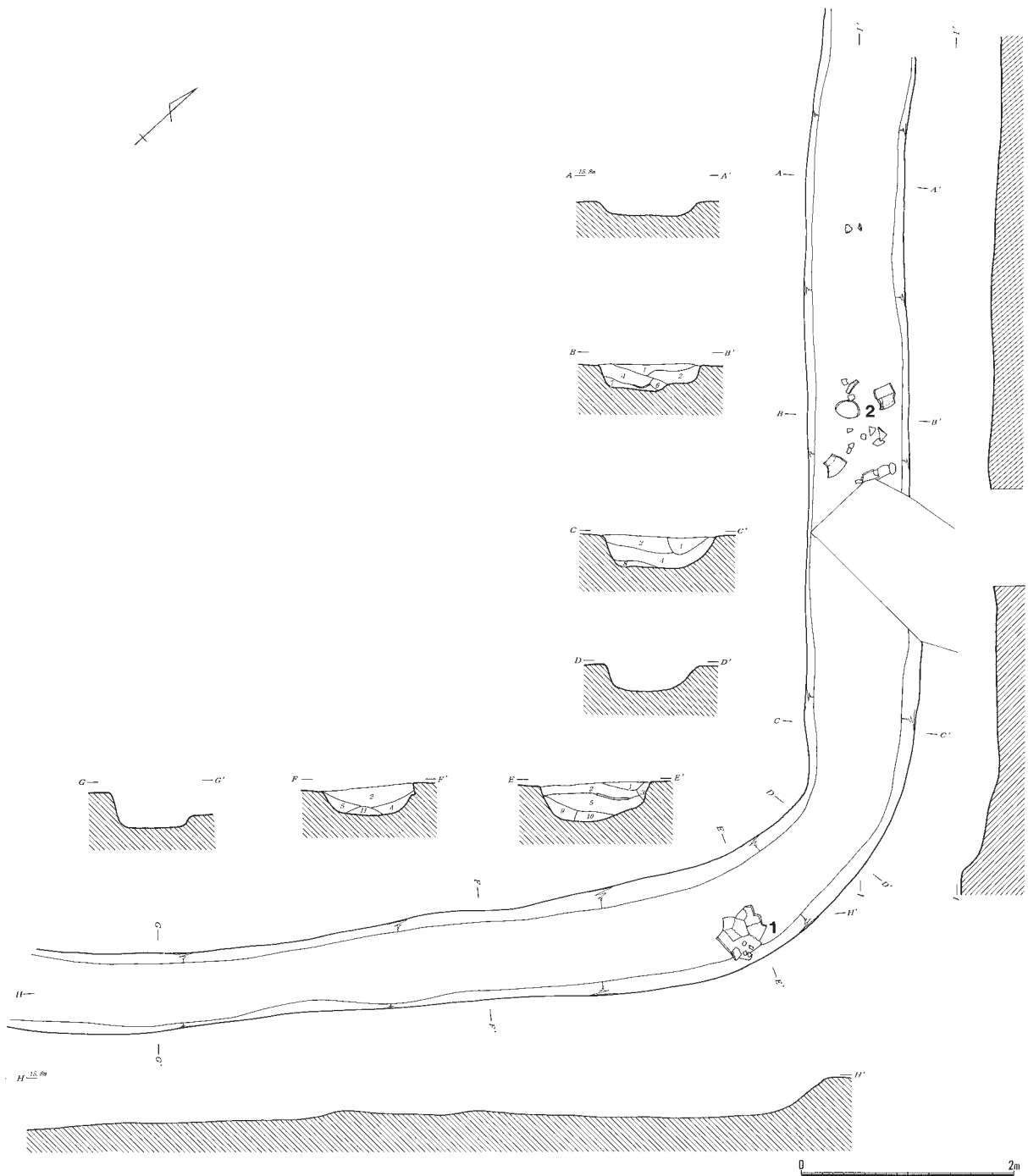
23層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。

24層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。

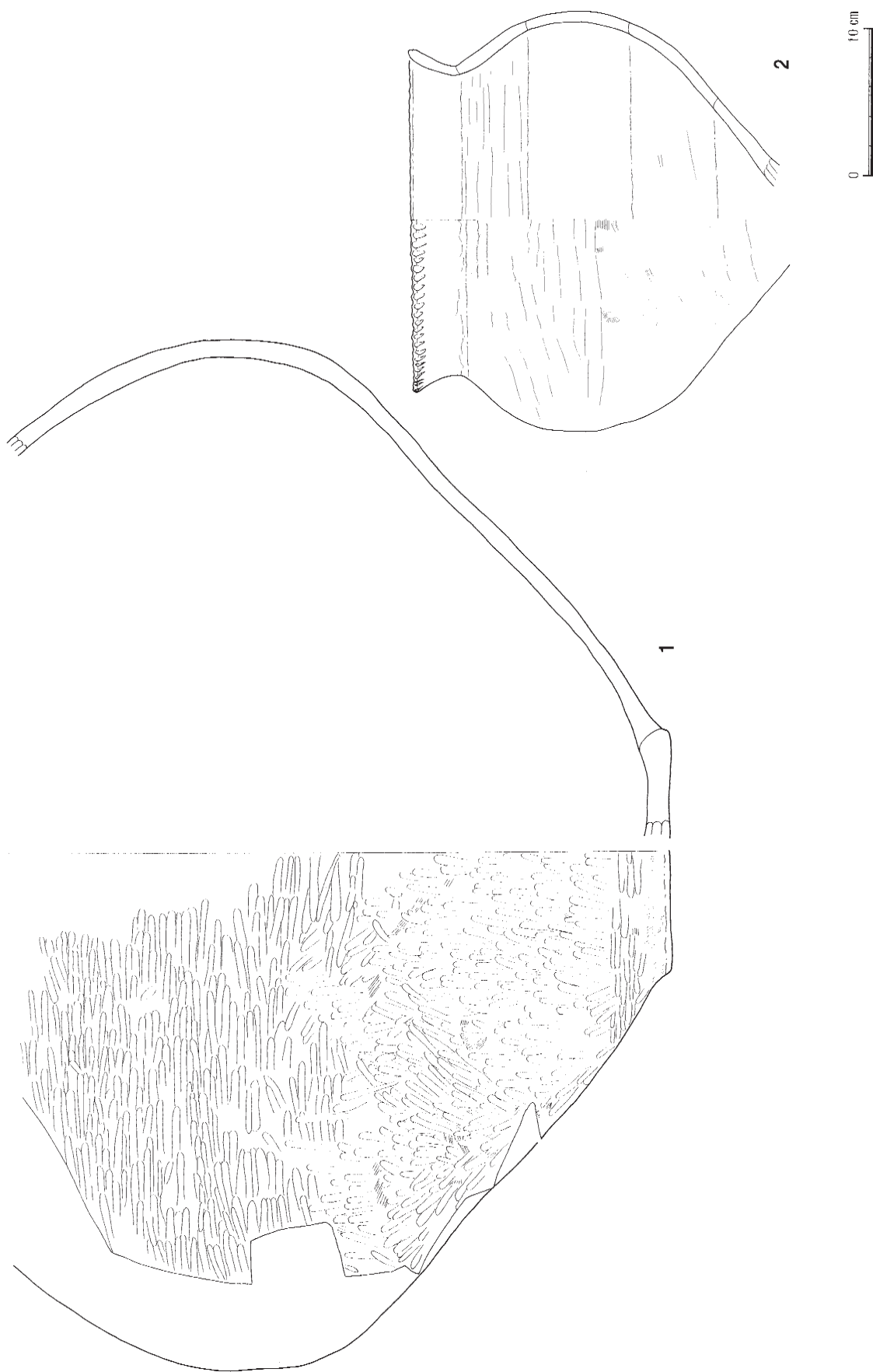


第528図 23号方形周溝墓出土遺物（1/3）

- 25層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
 - 26層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
 - 27層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。硬質。
 - 28層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや粘質。
 - 29層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ローム粒子・ロームブロックを含む。硬質。
 - 30層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- [遺物] 東コーナーから大型の高坏形土器が完形で出土した。
- [時期] 古墳時代前期。



第529図 24号方形周溝墓 (1/60)



第530図 24号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)

25号方形周溝墓出土遺物（第533図、第534図）

壺形土器（第534図2）

複合口縁部破片。口縁部外面にはR Lの単節縄文が施され、棒状浮文が貼付される。口縁部下端には刻みが施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器（第533図1）

中部高地地方に系譜を持つ鐮状口縁高坏で、ほぼ完形。口径17.5cm・裾部径14.2cm・器高13.5cmを測る。体部は僅かに内湾しながら開き、口縁部は外反する。脚台部は直線的に開く。坏部内外面共に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。脚台部外面は丁寧にヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされる。脚台部内外面共に黒斑がみられる。色調は明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。東コーナー下層からほぼ完形の状態で出土した。方台部から転落した状態とみられる。

甕形土器（第534図3・4）

3は口縁部破片。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが、ハケ目痕が残る。色調は（2.5YR5/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

4は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈し、胎土には細礫・粗砂・橙色粒子を含む。覆土中からの出土。

26号方形周溝墓（第532図）

〔位置〕70地点。

〔周溝の構造〕西・南コーナー部分は掘り残されてブリッジが形成され、南西溝は独立する。北東側に向けて拡張（25方）している可能性がある。

（北東溝）長さ600cm・上幅65cm前後・下幅40cm前後・深さ34cm前後を測る。

（南西溝）長さ540cm・上幅60cm前後・下幅40cm前後・深さ45cm前後を測る。

（南東溝）長さ730cm・上幅80cm前後・下幅55cm前後・深さ40cm前後を測る。

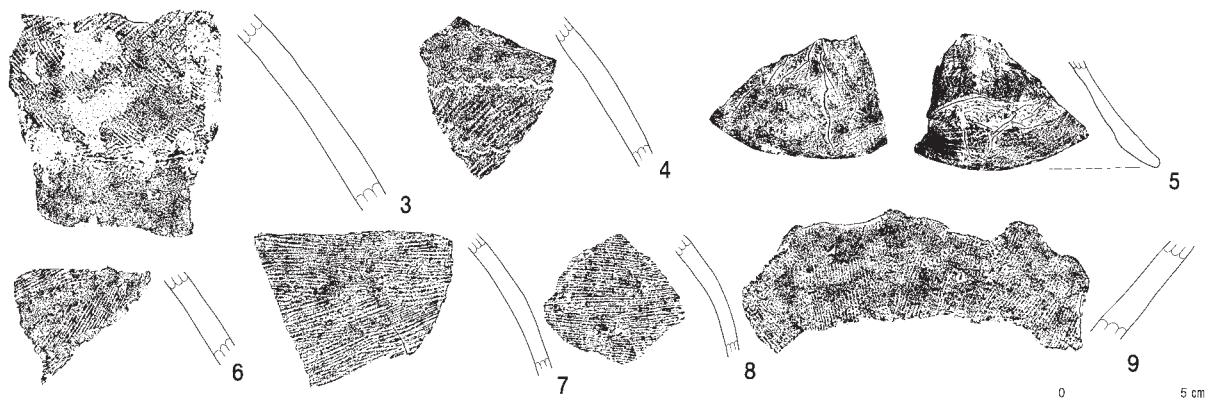
（北西溝）長さ790cm・上幅70cm前後・下幅50cm前後・深さ40cm前後を測る。

（断面形）逆台形を呈し、立ち上がりの角度は方台部側が僅かに急斜で、80°前後の角度を測る。

〔覆土〕

1層 耕作土。

2層 黒褐色土（10YR3/1）。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。



第531図 24号方形周溝墓出土遺物2（1/3）

- 3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。硬質。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 8層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 9層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや粘質。
- 12層 黒褐色土 (10YR2/3)。ローム粒子を多く含む。やや軟質。
- 13層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 15層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 16層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 17層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 18層 灰黄褐色土 (10YR4/2)。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 19層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。ローム小ブロックを含む。やや軟質。
- 20層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。ローム小ブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 21層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。

〔遺物〕 土器細片が僅かに出土したのみで、図示できるものはなかった。

〔時期〕 古墳時代前期。

27号方形周溝墓 (第535図)

〔位置〕 9地点。

〔周溝の構造〕 北西側の過半と南東コーナーは調査区外。70・71Yを切る。

(東溝) 上幅70cm前後・下幅40cm前後・深さ40cm前後を測る。

(南溝) 上幅100cm前後・下幅60cm前後・深さ50～90cmを測る。溝底は段をもち中央部分が低くなる。

(北溝) 上幅は確認できなかった。下幅65cm前後・深さ50cm前後を測る。

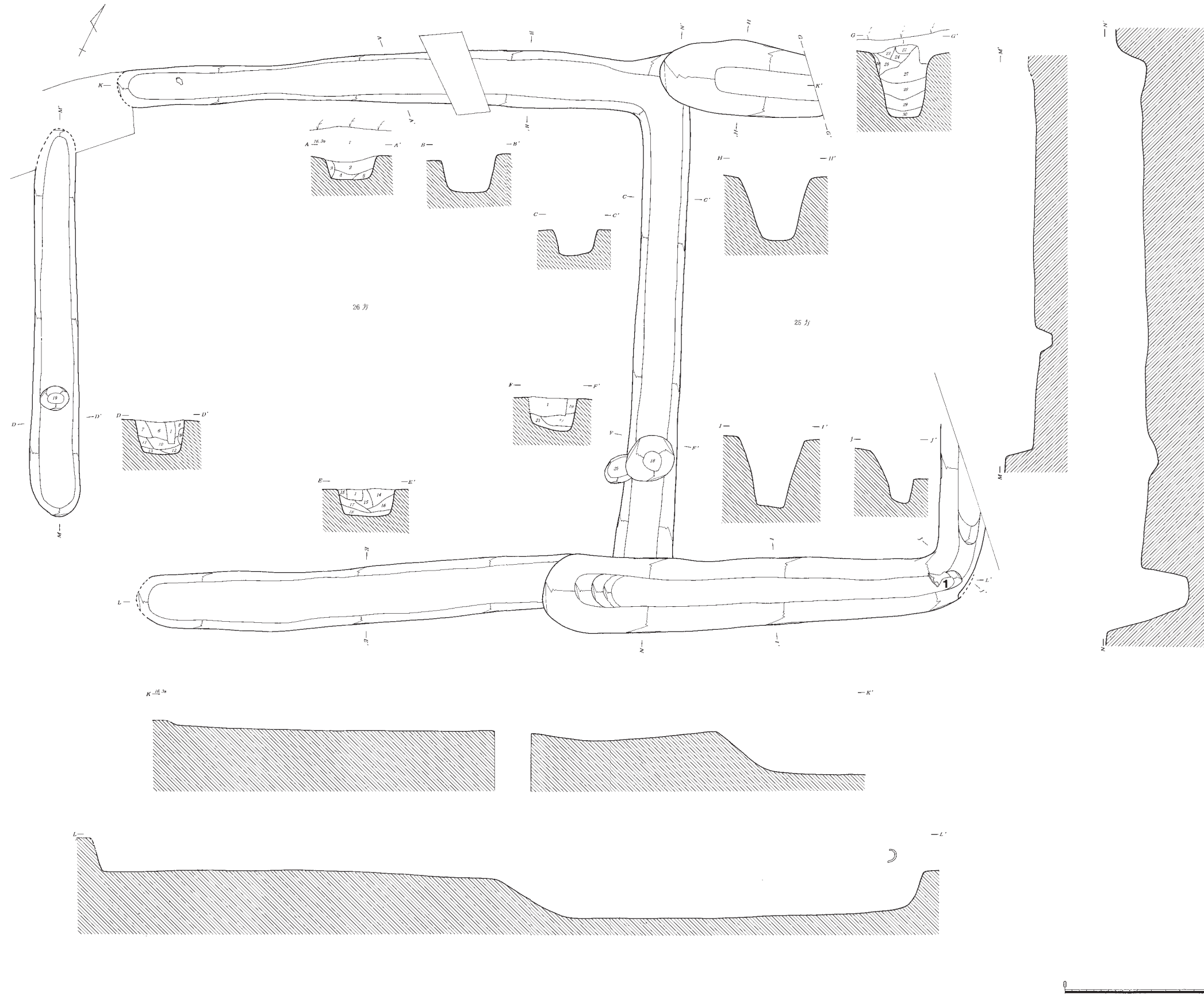
(断面形) 逆台形を呈し、立ち上がりの角度は70°前後を測る。

〔覆土〕

- 1層 暗褐色土。ローム粒子を僅かに含む。
- 2層 黒褐色土。ローム粒子を含む。
- 3層 褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 4層 明褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 5層 黒褐色土。ローム粒子・炭化物粒子を多く含む。
- 6層 暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。
- 7層 黄褐色土。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。
- 8層 黄褐色土。ロームブロックを多く含む。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。



第532図 25・26号方形周溝墓 (1/60)

27号方形周溝墓出土遺物 (第536図)

甕形土器 (1・2)

いずれも体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は1がにぶい黄褐色(10YR 5/3)、2がにぶい赤褐色(5YR5/3)を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。南溝覆土中からの出土。

28号方形周溝墓 (第537図)

〔位置〕 57 I 地点。

〔周溝の構造〕 東・西は調査区外。中央部は耕作により破壊されている。直線部分のみの検出であるが、溝跡の断面形や遺物の出土がみられることから方形周溝墓として取り上げた。

上幅40~80cm・下幅20~55cm・深さ10~20cmを測る。断面は逆台形を呈し、立ち上がりの角度は60°前後を測る。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土(7.5YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 東側の溝底から2個体の土器が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期~古墳時代前期。

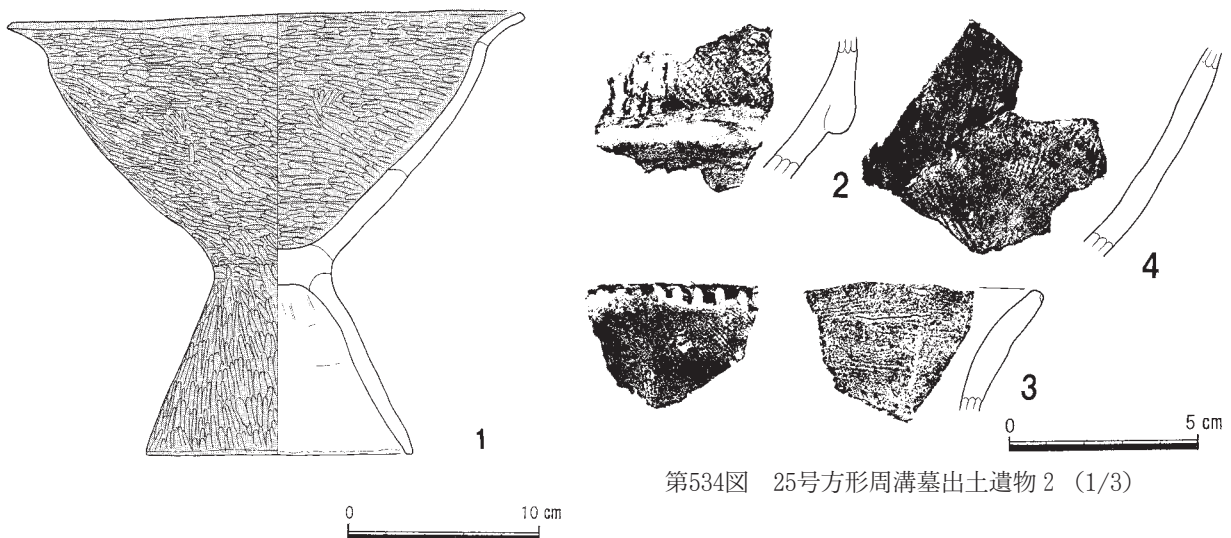
28号方形周溝墓出土遺物 (第538図)

壺形土器 (1)

体部の1/2程度が残存する。底径5.7cm。平底の底部から立ち上がり、やや下膨れの玉葱状の体部を作出する。外面はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされるが斑点状の剥離が顕著である。底部には木葉痕がみられる。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈し、胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含む。東側の溝底から出土した。

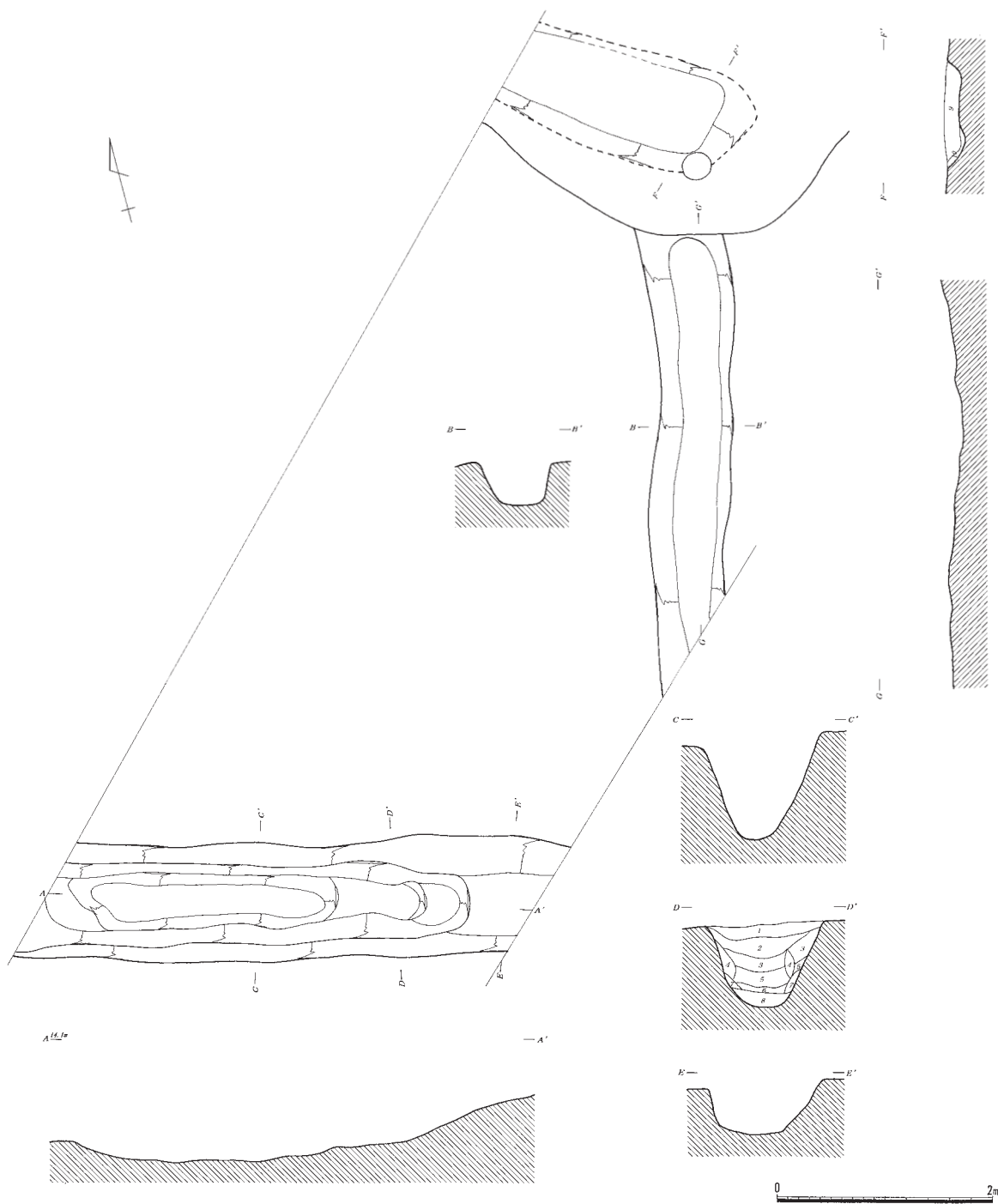
鉢形土器 (2)

小型の鉢形土器。ほぼ完形。平底の底部から立ち上がり、内湾しながら開く器形である。内外面共にヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色(2.5YR5/4)を呈する。胎土には粗砂、白色粒子を含むが、精選されきめ細かく堅緻である。東側の溝底から出土した。

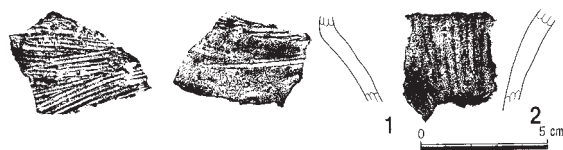


第534図 25号方形周溝墓出土遺物 2 (1/3)

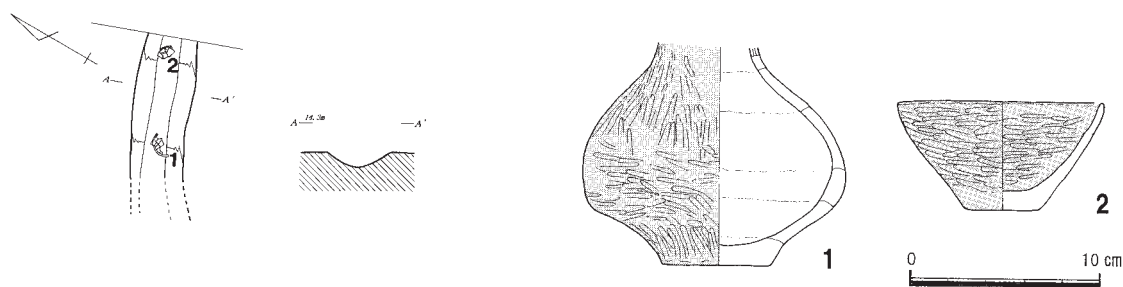
第533図 25号方形周溝墓出土遺物 1 (1/4)



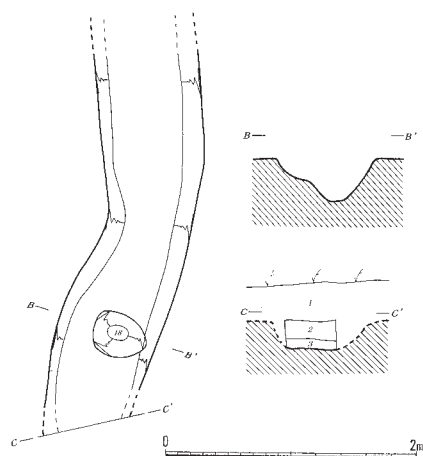
第535図 27号方形周溝墓 (1/60)



第536図 27号方形周溝墓出土遺物 (1/3)



第538図 28号方形周溝墓出土遺物 (1/4)



第537図 28号方形周溝墓 (1/60)

第4節 溝跡

13号溝跡 (第540図)

〔位置〕 36地点・130地点。

〔構造〕 未報告であるが、両地点の間の調査を実施して、それぞれの地点で検出された溝跡が同一の遺構であることが判明している。

36地点では、ほぼ南北に走行する。上幅100cm・下幅50cm・深さ55cm前後を測り、断面形は逆台形を呈して、溝底は平坦である。溝の立ち上がりは、70°前後の角度である。

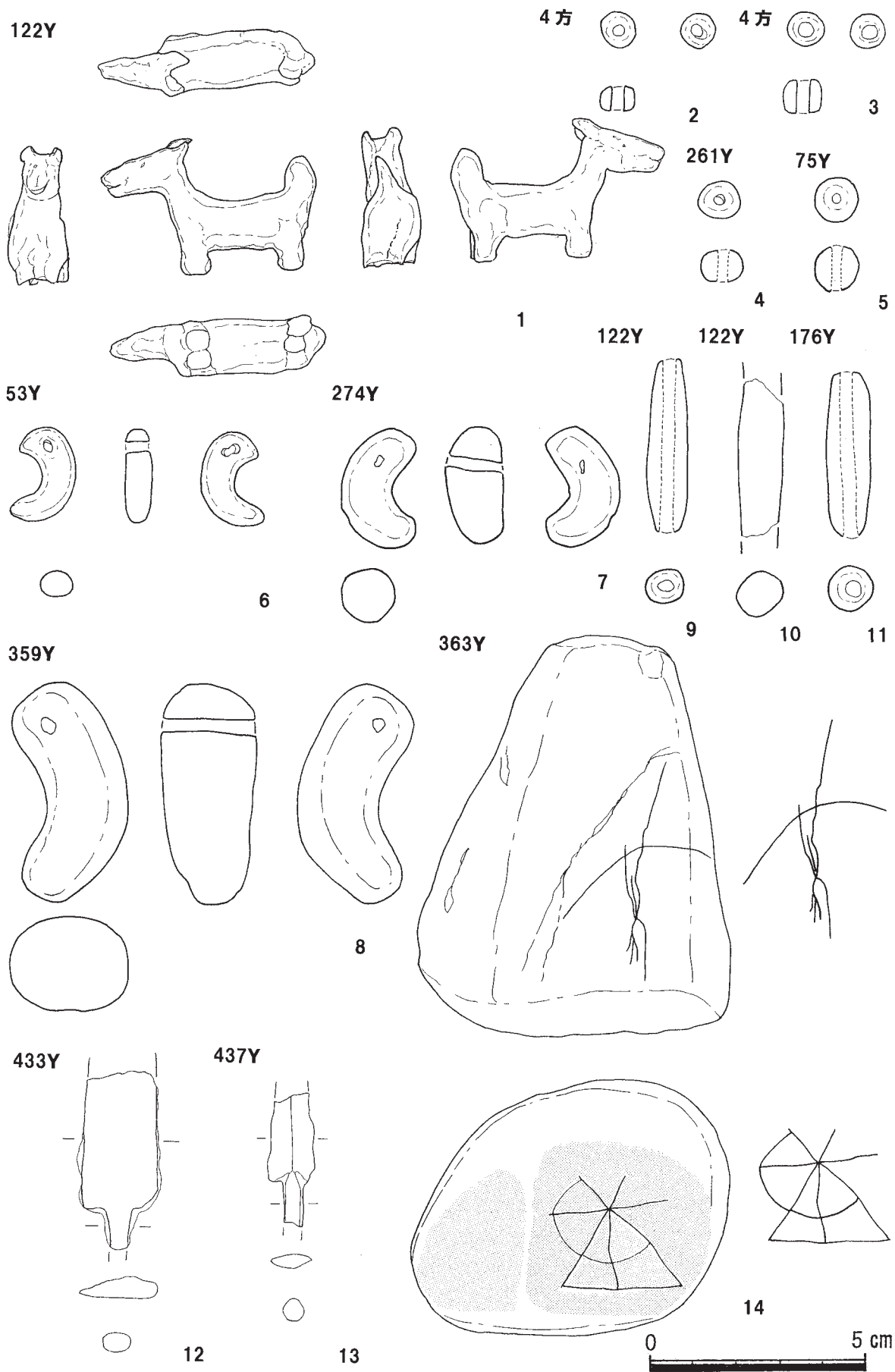
〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子を含む。軟質。
- 3層 黒褐色土 (5YR2/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)。ローム粒子を多く含む。軟質。
- 5層 黒褐色土 (5YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 6層 黒色土 (7.5YR2/1)。ロームブロックを含む。やや硬質。

130地点では、走行方向N-30°-E。上幅55~80cm・下幅35~50cm・深さ9~12cmを測る。断面形は逆台形を呈して、溝底は平坦である。溝の立ち上がりは、70°前後の角度である。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。軟質。



第539図 4号溝跡・方形周溝墓出土遺物 (4/5)

3層 黒褐色土 (7.5YR3/1)。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。

〔遺物〕 覆土中から僅かに出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

13号溝跡出土遺物 (第544図 1・2)

壺形土器 (1)

体部破片。外面はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

高坏形土器 (2)

脚台部破片。外面はヘラミガキされ赤彩される。内面はヘラナデされるがハケ目痕が残る。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中から出土した。

24号溝跡 (第541図)

〔位置〕 341地点。

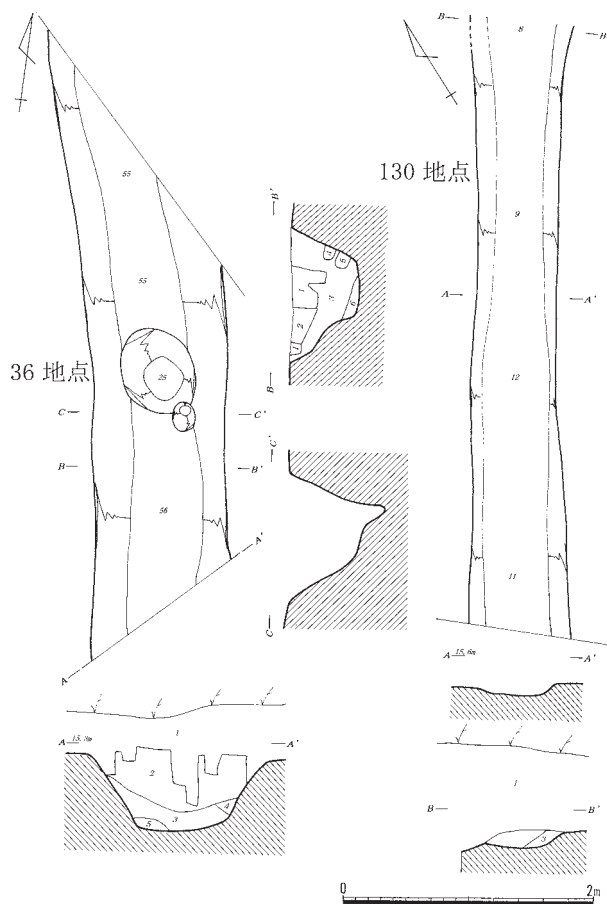
〔構造〕 ほぼ南北に走行する。確認できた部分で上幅200cm・下幅85cmを測る。溝底は段差があり、中央部で72cm前後、南側で95cm前後、北側で61～92cmを測る。

〔覆土〕

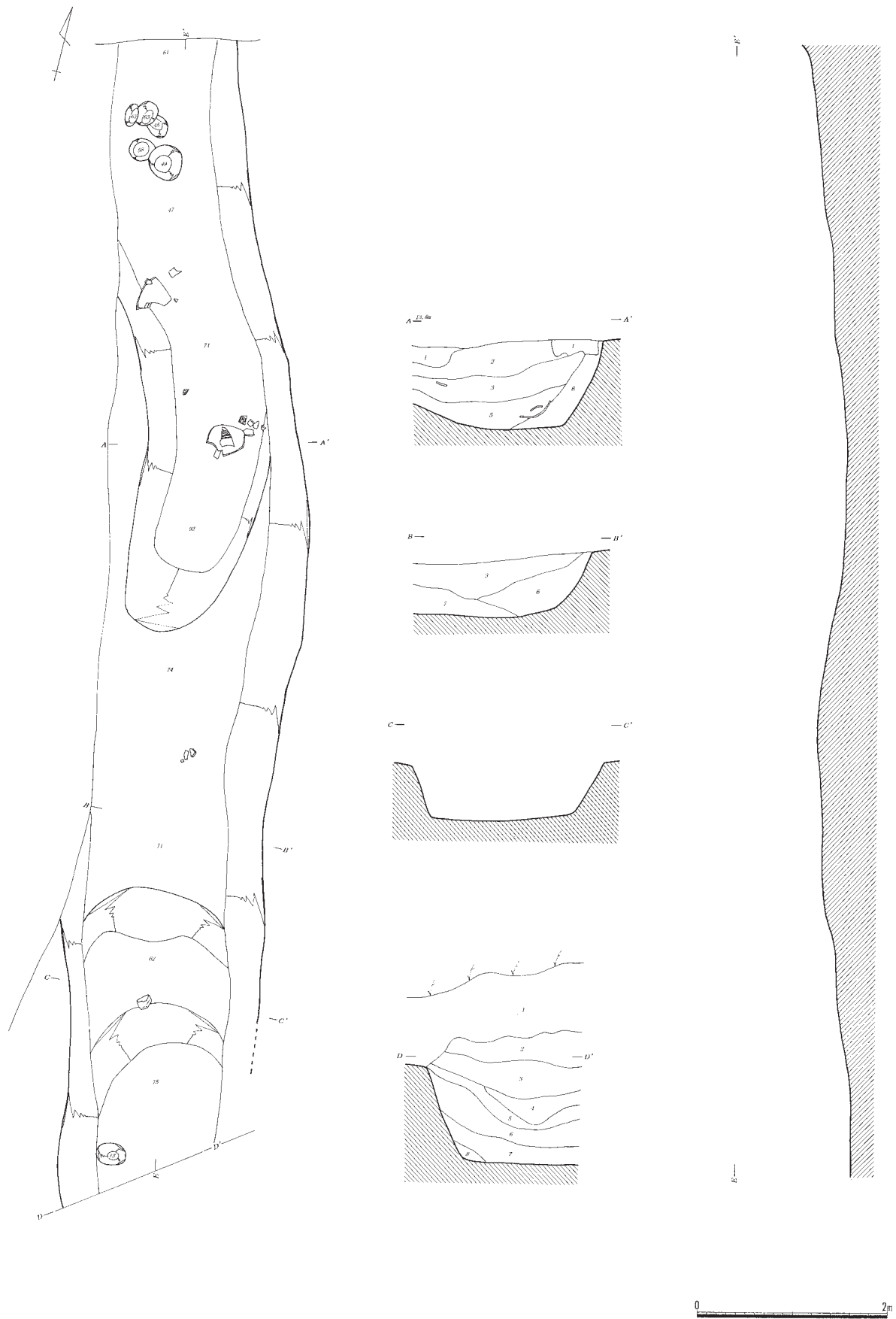
1層 表土及び耕作土。

2層 黒色土 (10YR1.7/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや軟質。

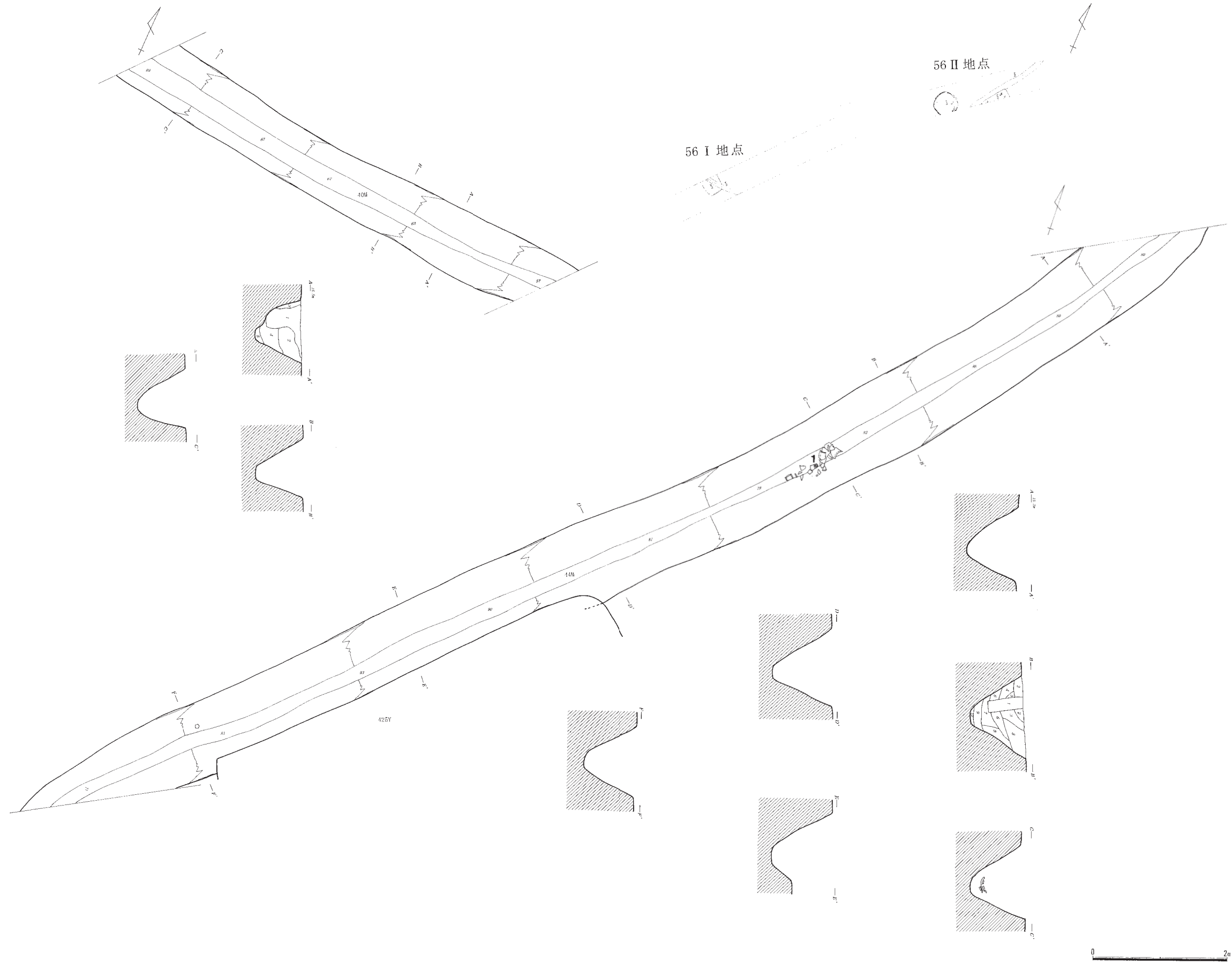
3層 黒褐色土 (10YR2/2)。ローム粒子を含む。やや軟質。



第540図 13号溝跡 (1/60)



第541図 24号溝跡 (1/60)



第542図 40・44号溝跡 (1/60)

- 4層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
 5層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。
 6層 暗褐色土 (10YR3/4)。ローム粒子を多く含む。やや硬質。粘性あり。
 7層 暗褐色土 (10YR3/3)。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや硬質。粘性あり。
 8層 黒褐色土 (10YR3/2)。ローム粒子を含む。やや硬質。粘性あり。

〔遺物〕 溝底近くから図示できなかつたが、超大型壺と思われる破片が出土した。

〔時期〕 古墳時代前期。

24号溝跡出土遺物 (第544図3～12)

壺形土器 (3～7)

3は口縁部破片。内外面共にヘラミガキされ赤彩されるが、消しきれないハケ目痕が残る。色調は赤褐色 (2.5YR4/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

4～6は同一個体の体部破片。撚りの異なる単節縄文の端末結節が羽状に施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい橙色 (5YR6/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

7は肩部破片。網目状撚糸文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調はにぶい赤褐色 (5YR5/4) を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器 (8～12)

8・9は同一個体の口縁部破片。口唇部外面には刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調はにぶい褐色 (7.5YR6/3) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

10は頸部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は灰褐色 (7.5YR4/2) を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

11・12は体部破片。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。色調は11が灰褐色 (7.5YR7/4)、12がにぶい褐色 (7.5YR5/3) を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。

40号溝跡 (第542図)

〔位置〕 56 I 地点。

〔構造〕 367Yを切る。ほぼ東西に走行していて、上幅85～100cm・下幅15～30cm・深さ70cm前後を測る。断面形は「V」字状を呈し、70°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
 2層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子を僅かに含む。やや硬質。
 3層 褐灰色 (10YR4/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。ボロボロした感じ。
 4層 黒褐色土 (10YR3/1)。ローム粒子・ローム小ブロックを含む。やや硬質。
 5層 褐灰色 (10YR4/1)。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。やや粘質。

〔遺物〕 覆土中から破片が出土した。

〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 44Mと連結する可能性が大きい。

40号溝跡出土遺物 (第544図13～15)

壺形土器 (13)

複合口縁部破片。内面には無節Lの縄文が施される。縄文帯下端と口唇端部には直径3mmの円形浮文が2cmおき

に貼付される。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（14・15）

いずれも脚台部破片。内外面共にヘラナデされるが、外面と内面下端にはハケ目痕が残る。色調は14がにぶい褐色（7.5YR6/3）、15は灰褐色（7.5YR6/2）を呈する。共に胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中から出土した。

44号溝跡（第542図）

〔位置〕 56Ⅱ地点。

〔構造〕 425Yを切る。走行方向はN-50°-E。上幅110~120cm・下幅13~25cm・深さ80cm前後を測る。断面形は「V」字状を呈し、70°前後の角度で立ち上がる。

〔覆土〕

- 1層 耕作土。
- 2層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや軟質。
- 3層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を多く含む。ロームブロックを含む。やや軟質。
- 4層 黒褐色土（7.5YR3/1）。ローム粒子を含む。やや硬質。
- 5層 暗褐色土（10YR3/3）。ローム粒子を含む。炭化物粒子を僅かに含む。やや硬質。
- 6層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子を含む。ロームブロックを僅かに含む。やや硬質。
- 7層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。やや硬質。
- 8層 にぶい黄褐色土（10YR4/3）。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 9層 黒褐色土（10YR3/2）。ローム小ブロックを含む。やや硬質。
- 10層 黒褐色土（2.5Y3/1）。ローム粒子を多く含む。やや硬質。

〔遺物〕 覆土下層から台付甕形土器が出土した。

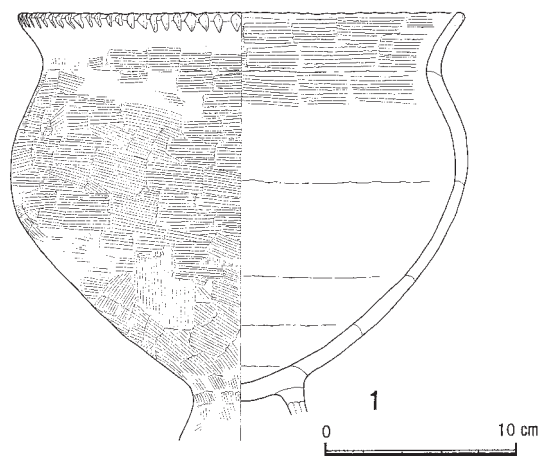
〔時期〕 弥生時代後期～古墳時代前期。

〔所見〕 40Mと連結する可能性が大きい。

44号溝跡出土遺物（第543図1、第544図16~21）

壺形土器（第544図16~19）

16は複合口縁部破片。口唇端部にはLRの単節縄文が施され、直径1cmの円形赤彩文が3mm間隔で施される。口縁部外面には撚りの異なる単節縄文が羽状に施され、複数の縦位の沈線が加えられる。縄文帯中には直径1cmの円



第543図 44号溝跡出土遺物（1/4）

形赤彩文が、5mm～1cmの間隔で施されている。口縁部内面は横位に丁寧にヘラミガキされ赤彩される。色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈する。胎土には粗砂を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

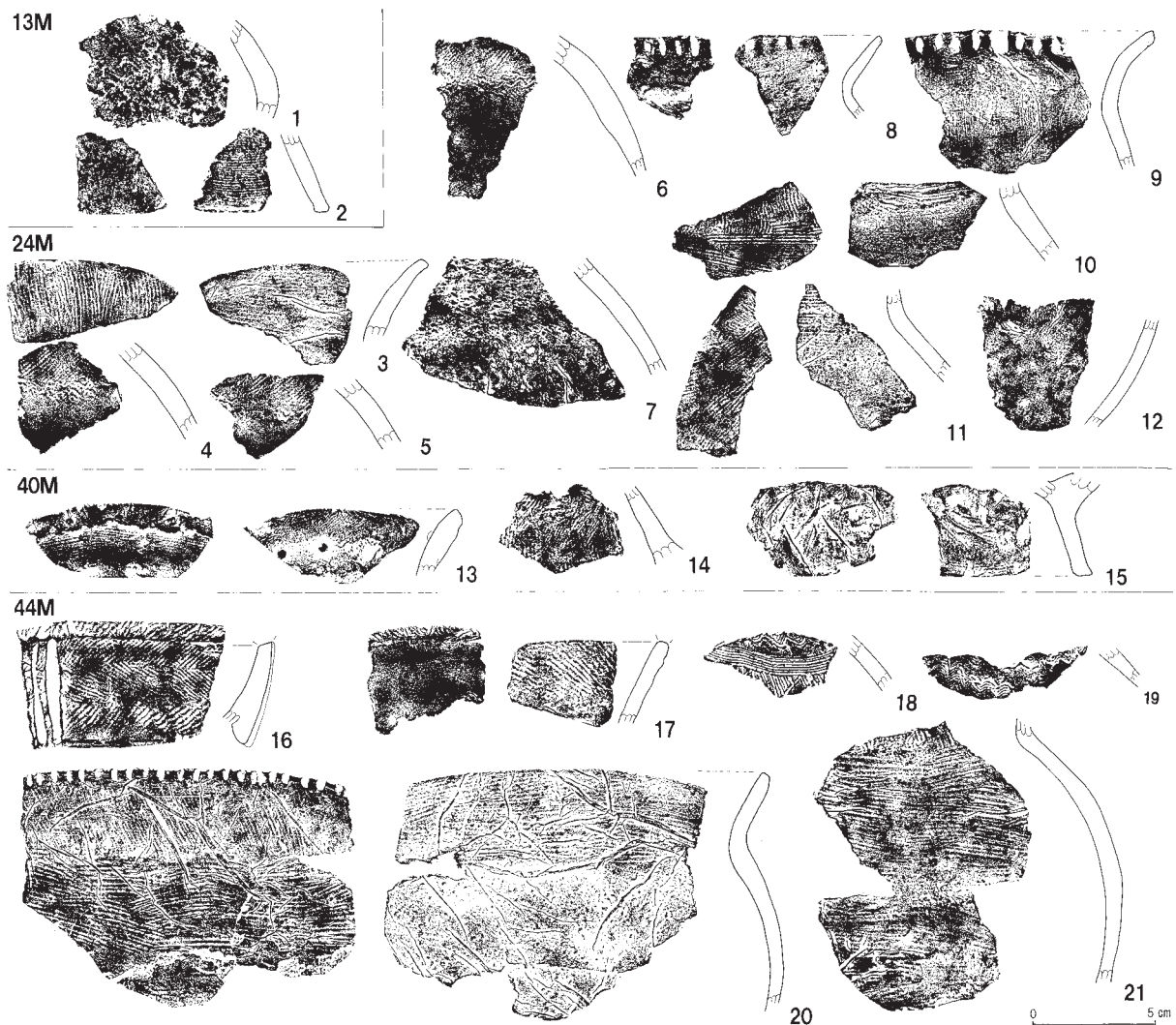
17は単純口縁部破片。口唇端部と内面には無節Rの縄文が施される。外面はヘラミガキされ赤彩される。色調は明赤褐色（5YR5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

18・19は同一個体の肩部破片。上から順に櫛描波状文・櫛描横線文・沈線による重鋸歯文が施される。縄文帯以外はヘラミガキされ赤彩される。色調は赤褐色（10R5/4）を呈する。胎土には細礫・粗砂・赤褐色粒子を含むが、きめ細かく堅緻である。覆土中からの出土。

甕形土器（第543図1、第544図20・21）

第543図1は台付甕形土器の甕部のみ残存する。口径13.7cmを測る。体部上半に最大径をもち脚部へかけてすぼまる器形である。頸部は強くくびれて口縁部は外傾する。口唇部外面には左方向から棒状の工具により押捺された刻みが巡る。内外面共にヘラナデされるが、外面と口縁部内面にはハケ目痕が残る。体部内面には炭化物の付着がみられる。色調は浅黄橙色（7.5YR8/4）を呈し、胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土9層内から出土した。

第544図20・21は同一個体の甕部破片。球状の体部から頸部は屈曲し、口縁部は外傾する器形である。口唇部外面には刻みが施される。内外面共にヘラナデされるが外面にはハケ目痕が残る。外面には炭化物の付着がみられる。色調は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する。胎土には細礫・粗砂・白色粒子を含む。覆土中からの出土。



第544図 13・24・40・44号溝跡出土遺物（1/3）

表1 弥生時代後期～古墳時代前期住居跡一覧表
 (弥後=弥生時代後期、弥～古=弥生時代後期～古墳時代前期、古前=古墳時代前期)

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
26	1	古前 (前)	楕円形	不明×374	25～34	N-23°-W	
27	1	弥～古	不明	不明	32～37	不明	
28	1	弥～古	隅丸長方形	395×296	15～20	N-12°-E	
29	1	弥～古	不明	不明	33～39	不明	
30	1	古前 (前)	隅丸長方形	不明×450	50～54	N-65°-E	
31	1	弥～古	不整円形	420×415	27～35	N-66°-E	
32	1	弥～古	不明	不明	38～49	不明	
33	1・110	弥～古	隅丸長方形	不明×625	5～40	N-40°-E	遺跡調査会調査報告第9集掲載
38	3	弥～古	隅丸長方形	373×340	10～15	N-60°-E	
39	3	弥～古	隅丸長方形	525×513	36～45	N-29°-W	
40	3	弥～古	隅丸長方形	494×462	25～33	N-35°-E	
41	4I	弥～古	隅丸長方形か	不明	9～15	N-36°-W	
42	4I	弥～古	楕円形	623×528	10～17	N-48°-E	
43	4I・12I	弥後	隅丸長方形	673×530	21～28	N-44°-E	
44	4I	弥～古	不明	不明	12～31	不明	
46	4II	古前 (後)	隅丸長方形か	不明×458	30～41	N-48°-W	
48	4II	古前	不明	不明	15～35	不明	
49	6I・12I	弥～古	隅丸長方形か	不明×450	10～12	不明	
50	6I・12I	古前	隅丸長方形	654×573	33～38	N-43°-E	
51	6I・12I	古前	不明	不明×435	27～34	N-12°-E	
52	6I・12I	古前 (後)	隅丸長方形	600×545	22～53	N-29°-W	
53	6I・6II	古前	隅丸正方形か	不明	55～58	N-36°-E	
54	6I・12II	古前 (前)	隅丸正方形か	不明×580	51～57	N-42°-E	
55	6I	弥～古	不明	不明	55～58	不明	
56	6I・12II	古前	不明	不明×392	49～59	N-46°-W	
57	8I	弥～古	不明	不明	不明	不明	
58	8I	弥～古	不明	不明	45～60	不明	
59	8I	弥～古	隅丸長方形	340×314	11～19	N-35°-W	
60	9	古前 (前)	隅丸正方形	不明	16～22	N-85°-E	
61	9	弥～古	隅丸長方形か	不明×517	44～51	N-51°-W	
62	9	古前 (前)	隅丸長方形	428×358	10～13	N-86°-W	
63	9	古前 (前)	不明	不明	48～67	不明	
64	9	弥～古	隅丸正方形か	不明×270	11～19	不明	
65	9	弥～古	不明	不明	51～56	不明	
66	10I	古前 (後)	隅丸長方形	不明×520	40～54	N-14°-E	
67	10I	弥～古	不明	不明	46～50	不明	
68	4I	古前 (後)	隅丸長方形	580×547	37～55	N-27°-W	
69	4I・11I	古前	隅丸長方形	640×591	46～58	N-68°-W	
70	9	古前	不明	不明×387	41～52	N-50°-E	
71	9	古前 (前)	不明	不明×570	48～53	N-43°-W	
72	9	古前 (前)	不明	不明	不明	不明	
73	8IV	古前 (前)	隅丸長方形	490×460	17～24	N-73°-E	
74	8III	弥～古	円形	径355	9～16	N-15°-W	
75	8III	古前 (前)	隅丸長方形	505×455	25～40	N-60°-E	
76	8III	弥～古	不明	不明	22～25	不明	
77	8I	弥～古	不整楕円形	465×380	8～18	N-78°-E	
78	8III	古前 (前)	楕円形	505×473	28～31	N-82°-E	
79	8IV	古前 (前)	楕円形	414×365	23～33	N-13°-W	
80	8I	弥～古	不明	不明	40～48	不明	
81	11	弥～古	不明	不明	16～32	不明	
82	11	弥～古	不明	不明	5～11	不明	
83	8I	古前	隅丸長方形	不明×575	7～14	N-13°-W	
84	11	弥～古	隅丸長方形	296×238	4～12	N-S	
85	12I	古前 (前)	隅丸長方形	460×438	11～45	N-48°-W	

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
86	12 I	弥～古	楕円形	388×349	1～17	N-45°-E	
87	12 I	古前 (前)	隅丸長方形	不明×479	0～29	N-51°-E	
88	12 I	古前 (前)	隅丸長方形	487×440	2～16	N-52°-E	
89	12 I	古前	不明	不明	8～17	不明	
90	12 I	古前	隅丸正方形	486×477	12～33	N-60°-E	
91	8IV・21	弥～古	隅丸長方形か	不明×480	2～19	N-60°-E	
92A	8IV	弥～古	不明	不明×380	3～11	N-60°-E	
92B	8IV	弥～古	不明	不明×530	3～9	不明	
93	8IV	弥～古	不明	不明	46～48	不明	
94	8IV	弥～古	隅丸正方形	320×310	8～13	N-23°-W	
95	8IV	弥～古	隅丸長方形	284×230	13～21	N-30°-W	
96	12 I	弥～古	不明	不明	24	N-53°-E	
97	12 I	弥～古	不明	不明	17	N-41°-W	
98	12 I	弥～古	不明	不明×397	1～5	不明	
99	12 I	弥～古	不明	不明×590	4～10	N-45°-W	
100	12 I	弥～古	不明	不明	0	N-40°-W	
101	12 I	弥～古	楕円形	684×606	4～33	N-40°-W	
102	12 I	弥～古	不明	不明×490	2～4	不明	
103	12 I	弥～古	隅丸長方形	不明×503	12～18	N-27°-W	
104	12 I	弥～古	楕円形	506×463	4～26	N-40°-W	
105	12 I	弥～古	不明	不明	0	N-35°-W	
106	13 I・	弥～古	不明	不明	40	不明	
107	15 I	弥～古	不明	不明	不明	不明	
108	17	弥～古	不明	不明	不明	不明	
109	17	弥～古	不明	不明	26～33	不明	
110	17	古前	隅丸正方形	370×369	10～15	N-30°-W	
111	17	弥～古	隅丸長方形	585×509	2～9	N-28°-W	
112	17	弥～古	隅丸長方形	不明×455	8～25	N-39°-W	
113	19	弥～古	不明	不明	23～28	不明	
114	18	弥～古	円形	径375	2～7	N-25°-W	
115	18	弥～古	隅丸長方形	626×480	20～25	N-28°-W	
116	18	弥～古	楕円形	660×584	19～23	N-63°-E	
117	18	古前 (前)	隅丸長方形	490×440	35～46	N-54°-W	
118	18	弥～古	隅丸長方形	663×612	1～21	N-70°-E	
119	18	古前 (前)	隅丸長方形	不明×567	50～57	N-56°-W	
120	18	弥～古	隅丸正長方形	363×347	21～26	N-32°-E	
121	18・67II	弥～古	楕円形	不明×410	20～23	N-64°-E	
122	18	弥～古	隅丸長方形	不明×468	36～42	N-64°-E	
123	8V	弥～古	不明	不明	68～83	不明	
124	21	弥～古	隅丸長方形か	不明×631	54～59	N-65°-E	
125	7V	弥～古	楕円形	不明×350	20～26	N-62°-E	
126	7V・25II	弥～古	隅丸長方形か	不明×655	42～48	N-55°-E	
127	7V	弥～古	隅丸長方形KA	不明	46～52	N-48°-W	
128	22	弥後 (後)	楕円形か	不明×400	12～17	N-30°-W	
129	24 I	弥～古	隅丸長方形	392×364	1～23	N-33°-W	
130	24 I	弥～古	不明	不明×285	5～29	N-40°-W	
131	24 I・(43)	弥～古	楕円形	490×450	26～52	N-38°-W	志木市遺跡群11掲載
132	24 I・(43)	弥～古	楕円形	520×435	29～36	N-38°-W	志木市遺跡群11掲載
133	24 I	弥～古	楕円形	不明	20～22	不明	
134	23 I	古前 (前)	不整正方形	459×450	1～13	N-45°-W	
135	23 I	弥～古	不明	不明	11～18	N-48°-E	
136	23 I	弥～古	隅丸正方形	300×297	8～12	N-43°-W	
137	23 I	弥～古	不明	不明	23～28	不明	
138	23 I	古前 (前)	隅丸長方形	550×484	20～28	N-57°-W	
139	23 I	古前 (前)	隅丸長方形	不明×524	39～42	N-47°-W	
140	10II	弥～古	不明	不明	3～10	不明	

第4章 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
149	23 I	古前 (前)	不明	不明	25~32	不明	
150	10 II	古前 (後)	隅丸長方形か	不明×276	17~20	N-58°-E	
151	10 II	弥~古	隅丸長方形	370×318	42~53	N-23°-W	
152	10 II	古前	不明	不明	14~18	不明	
153	10 II	弥~古	不明	不明	47~50	不明	
154	6 II	古前 (前)	隅丸長方形か	不明×300	9~22	E-W	
155	6 II	弥~古	隅丸長方形か	不明×300	8~23	N-40°-W	
156	6 II	弥~古	不明	不明	24~41	不明	
157	6 II	弥~古	不明	不明	34~38	不明	
158	6 II	古前 (前)	隅丸長方形	不明×428	52~57	N-68°-W	
159	10 II	弥~古	不明	不明	11~16	不明	
160	6 II	古前 (後)	隅丸長方形か	不明×690	38~45	N-52°-W	
161	6 II	弥~古	隅丸長方形	不明×336	29~37	N-29°-W	
162	6 II	弥~古	不明	不明	35~45	不明	
163	25 I	弥~古	隅丸長方形	438×400	46~49	N-57°-E	
164	25 I	弥~古	隅丸長方形	420×402	3~5	N-37°-E	
172	25 II	弥~古	不明	不明×558	33~44	不明	
173	25 II	弥~古	不明	不明×474	2~18	N-47°-W	
174	25 II	弥~古	不明	不明	35~40	不明	
176	29 I	弥~古	隅丸長方形か	不明×435	12~16	N-43°-E	
177	30	弥~古	不明	不明	30~42	不明	
178	28 II	弥~古	不整正方形	260×258	22~27	N-9°-W	
179	28 II	古前 (前)	隅丸長方形	330×295	29~33	N-41°-E	
259	35	弥~古	不明	不明	42~46	不明	
260	35	弥~古	不明	不明	35~44	不明	
261	35	古前	不明	不明×744	35~38	N-38°-E	
262	35	弥~古	不明	不明×484	18~27	N-22°-E	
263	36	古前	不明	不明	16~21	N-60°-W	
264	36	弥~古	隅丸長方形か	不明	26~32	N-38°-E	
265	36	古前	不明	不明×516	26~35	N-42°-E	
266	13 II	古前	隅丸長方形	不明×403	40~48	N-70°-E	
267	38	弥~古	楕円形か	不明×435	18~24	N-25°-W	
268	38	弥~古	隅丸長方形か	不明×265	27~31	N-40°-E	
269	38	弥~古	隅丸正方形	338×332	38~42	N-44°-E	
270	38	弥~古	不明	不明	22~28	不明	
271	38	弥~古	隅丸長方形	307×263	4~7	N-7°-W	
272	38	弥~古	不明	不明	8~19	不明	
273	24 II	古前	円形	径410	21~24	N-30°-W	
274	39 I・67 II	古前	隅丸長方形	760×660	5~15	N-39°-E	
275	24 II	弥~古	隅丸長方形	326×295	6~11	N-32°-W	
276	39 I	弥~古	隅丸長方形	380×353	20~25	N-50°-E	
277	24 II	弥~古	不明	不明	45~48	不明	
278	39 I・67 II	古前	隅丸長方形	874×632	8~20	N-21°-W	
279	39 I	弥~古	不明	不明×504	32~35	N-42°-E	
280	39 I	弥~古	不整円形か	不明×446	18~25	不明	
281	24 II	弥~古	隅丸長方形	不明×380	0~1	N-31°-W	
282	39 I	弥~古	不整楕円形	500×430	4~28	N-30°-W	
283	39 I	弥~古	隅丸長方形か	不明×270	5~11	N-S	
284	24 II	弥~古	不明	不明	56~57	不明	
285	39 I	弥~古	隅丸長方形か	不明	9~23	N-18°-W	
286	24 II	弥~古	不明	不明	47~53	不明	
287	13 III	弥~古	不明	不明	1~24	N-33°-W	
288	13 III	弥~古	不明	不明	36~38	不明	
289	13 III	弥~古	隅丸長方形	584×480	25~38	N-57°-E	
290	13 IV	弥~古	不明	不明	35~39	不明	
291	13 III	弥~古	隅丸長方形	886×676	39~50	N-50°-E	

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
292	13Ⅲ	弥～古	隅丸長方形	不明×570	30	E-W	
293	13Ⅲ	弥～古	不明	不明	54～61	不明	
294	13Ⅲ	弥～古	不明	不明	41～44	不明	
295	13Ⅳ	弥～古	楕円形か	不明×720	14～20	N-24°-W	
296	13Ⅳ	弥～古	隅丸長方形	不明×403	40～49	N-56°-E	
297	13Ⅳ	弥～古	不明	不明	15～22	N-40°-W	
298	13Ⅳ	弥～古	隅丸正方形か	不明×390	6～11	N-29°-W	
299	13Ⅳ	弥～古	隅丸長方形か	不明×400	18～35	N-79°-W	
300	13Ⅳ	弥～古	不明	不明	16～20	不明	
301	13Ⅳ	弥～古	不明	不明	27～29	不明	
302	13Ⅳ	弥～古	不明	不明×382	16～23	N-31°-W	
303	13Ⅳ	弥～古	隅丸長方形か	不明	4～9	N-62°-E	
304	13Ⅳ	弥～古	隅丸長方形か	不明×432	28～39	不明	
305	13Ⅳ	古前	不明	不明	28～33	不明	
306	13Ⅳ	弥～古	隅丸長方形か	不明×670	10～22	不明	
307	13Ⅳ	弥～古	不明	不明	23～33	不明	
308	39Ⅱ	弥～古	不明	不明	20～25	不明	
309	39Ⅱ	弥～古	隅丸長方形か	不明×300	15～24	N-76°-E	
310	39Ⅱ	弥～古	不明	不明	15～20	N-30°-W	
311	39Ⅱ	弥～古	隅丸長方形	329×282	4～10	N-51°-E	
312	39Ⅱ	弥～古	楕円形	不明×357	3～6	N-55°-E	
313	40Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	505×436	11～20	N-64°-E	
314	40Ⅰ	弥～古	隅丸正方形	322×318	13～17	N-62°-E	
315	40Ⅰ	弥～古	不明	不明	17～26	不明	
316	40Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	不明×215	2～5	N-47°-W	
317	40Ⅰ	弥～古	不明	不明	25～29	不明	
318	40Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	不明×500	35～41	N-65°-E	
319	40Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	297×275	20～28	N-57°-E	
320	40Ⅱ	弥～古	不明	不明	38～43	不明	
321	40Ⅱ	弥～古	隅丸長方形か	不明×373	21～25	N-45°-E	
322	43Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	494×423	36～41	N-35°-W	
323	43Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	不明×458	12～22	N-29°-W	
324	43Ⅰ	弥～古	不明	不明	7～15	不明	
325	43Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	326×287	24～34	N-57°-W	
326	43Ⅱ・43Ⅲ	古前(前)	不明	不明	29～33	不明	
327	39Ⅱ	弥～古	不明	不明	不明	不明	
328	39Ⅱ	弥～古	不明	不明	不明	不明	
329	48	弥～古	不明	不明	18～29	不明	
330	49Ⅰ	弥～古	不明	不明	24～31	不明	
331	49Ⅰ	弥～古	不明	不明	24～27	不明	
332	50Ⅰ	弥～古	不明	不明	28～31	不明	
333	50Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	330×274	14～19	N-28°-W	
334	50Ⅰ・50Ⅱ	古前	不明	不明	18～24	不明	
335	51	弥～古	不明	不明	49～53	N-61°-W	
336	40Ⅲ	弥～古	略円形	径407	17～30	N-7°-W	
337	40Ⅲ	弥～古	不明	不明	19～25	N-S	
338	40Ⅲ	弥～古	不明	不明	43～53	N-11°-W	
339	40Ⅲ	古前	隅丸長方形	358×346	39～45	N-84°-E	
340	42Ⅱ	弥～古	不明	不明×370	50～55	N-54°-E	
341	42Ⅱ	弥～古	不明	不明	38～42	不明	
342	42Ⅱ	弥～古	不明	不明	18	不明	
343	42Ⅱ	弥～古	隅丸長方形か	不明×520	53～57	N-68°-W	
344	47Ⅱ	弥～古	隅丸長方形か	不明×300	28～29	N-70°-W	
345	47Ⅱ	古前	不明	不明×300	23～29	N-70°-W	
346	12Ⅱ	弥～古	隅丸長方形	不明×648	14～50	N-18°-E	
347	12Ⅱ	古前	不明	不明	33～41	不明	

第4章 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
348	12Ⅱ	弥～古	隅丸長方形	不明×345	7～17	不明	
349	12Ⅱ	弥後(後)	隅丸長方形	不明×640	57～64	N-11°-W	
350	6Ⅰ・12Ⅱ	弥～古	隅丸長方形	500×440	39～41	N-22°-W	
351	12Ⅱ	弥～古	不明	不明	12～37	不明	
352	12Ⅱ	古前	隅丸長方形	470×420	31～40	N-69°-W	
353	12Ⅱ	弥～古	隅丸長方形	341×318	15～31	N-42°-E	
354	5Ⅱ	弥～古	不明	不明	1～7	不明	
355	5Ⅱ	弥後	隅丸長方形	不明×730	33～38	N-41°-W	
356	5Ⅱ	弥～古	不明	不明	13～22	不明	
357	5Ⅱ	弥～古	不明	不明	13～20	不明	
358	5Ⅱ	弥～古	不明	不明	13～22	不明	
359	5Ⅱ	古前	隅丸長方形	不明×395	18～22	N-15°-W	
360	5Ⅱ	古前	不明	不明	4～10	不明	
361	5Ⅱ	古前	隅丸正方形	640×640	32～37	N-55°-W	
362	5Ⅱ	弥～古	不明	不明×650	37～49	不明	
363	5Ⅱ	古前	隅丸長方形	不明×285	28～34	N-57°-W	
364	5Ⅱ	古前	不明	不明	5～12	不明	
365	5Ⅱ・5Ⅲ	古前(後)	隅丸正方形	538×534	2～29	N-55°-E	
366	25Ⅵ	弥～古	隅丸長方形か	不明×400	23～36	不明	
367	56Ⅰ	弥～古	隅丸長方形か	不明×397	26～32	N-48°-W	
368	57Ⅰ	古前	不明	不明	6～9	不明	
369	57Ⅰ	古前	隅丸正方形	351×346	58～66	N-25°-W	
370	57Ⅰ	古前	隅丸正方形	436×405	9～20	N-34°-W	
374	57Ⅰ	古前	不明	不明×547	37～42	不明	
375	57Ⅰ	古前	隅丸長方形	452×438	30～36	N-20°-W	
376	40Ⅳ	弥～古	隅丸正方形	301×290	29～34	N-54°-E	
377	40Ⅳ	弥～古	不明	不明×388	11～19	N-46°-E	
378	59Ⅰ	弥～古	不明	不明	42～48	不明	
379	59Ⅰ	弥～古	不明	不明×618	26～31	不明	
380	59Ⅰ	弥～古	隅丸長方形か	不明×438	56～64	N-18°-E	
381	40Ⅴ	弥～古	不明	不明	15～19	不明	
382	40Ⅴ	弥～古	不整楕円形	不明×315	15～23	N-43°-W	
383	40Ⅴ	弥～古	隅丸正方形	360×360	37～50	N-S	
384	40Ⅴ	弥～古	不明	不明	26～33	不明	
385	60	弥～古	不明	不明	3～7	不明	
386	60	弥～古	不明	不明	52～58	不明	
395	130	古前	隅丸長方形	690×580	8～25	N-40°-E	
410	74	古前	不明	不明	55～62	不明	
411	74	古前	不明	不明	40～60	N-1°-E	
412	74	古前	不明	不明	0	不明	
413	74	弥～古	不明	不明×408	31～44	N-60°-W	
414	65Ⅲ	弥～古	不明	不明	32～39	不明	
421	10Ⅲ	弥～古	不明	不明	23～53	不明	
422	64	弥～古	不明	不明	51～56	不明	
423	64	弥～古	隅丸長方形か	不明	54～56	N-67°-W	
424	56Ⅱ	弥～古	略円形	径412	22～26	N-110°-E	
425	56Ⅱ	弥～古	不明	不明	50～52	不明	
426	56Ⅱ	弥～古	隅丸正方形	530×522	39～46	N-61°-W	
427	65Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	不明×687	57～63	N-33°-W	
428	34Ⅲ・34Ⅳ	古前	隅丸長方形か	不明	30～33	不明	
429	43Ⅱ・43Ⅲ	弥～古	隅丸長方形	不明×490	7～23	N-55°-E	
430	34Ⅳ	弥～古	不明	不明	25～26	不明	
431	67Ⅰ	古前	隅丸長方形	535×460	31～37	N-42°-E	
432	67Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	547×460	20～34	N-61°-E	
433	67Ⅰ	弥～古	不整楕円形	不明×455	11～13	N-65°-E	
434	67Ⅰ	弥～古	不明	不明	25～31	N-5°-E	

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
435	67 I	弥～古	隅丸長方形	483×466	18～25	N-78°-W	
436	67 I	弥～古	不明	不明×294	24～29	不明	
437	67 I	古前	隅丸長方形	不明×450	35～45	N-62°-E	
438	67 I	弥～古	不明	不明	35～38	不明	
439	44 III	弥～古	不明	不明	40～44	不明	
440	43 III	古前	隅丸長方形か	不明×440	47～50	N-39°-E	
441	43 III	弥～古	不明	不明	22～28	不明	
442	67 II	弥～古	楕円形	556×505	27～33	N-32°-W	
443	67 II	弥～古	隅丸長方形	不明×525	11～15	N-70°-E	
444	67 II	古前	楕円形	498×485	5～18	N-18°-W	
445	67 II	古前	隅丸長方形	512×446	50～56	N-18°-W	
446	67 II	弥～古	隅丸長方形	343×3023	30～35	N-4°-W	
447	67 II	古前	隅丸長方形か	不明×355	20～24	N-72°-E	
448	67 II	弥～古	不明	不明	21～28	不明	
449	67 II	弥～古	隅丸長方形	572×4932	45～59	N-35°-W	
450	67 II	弥～古	不明	不明×287	30～35	N-72°-E	
451	43 III	弥～古	不明	不明×373	16～21	N-43°-W	
452	43 III	弥～古	不明	不明	47～53	不明	
453	43 III	弥～古	隅丸長方形	563×452	47～53	N-29°-W	
454	43 III	弥～古	不明	不明	36～39	不明	
455	67 II	弥～古	不明	不明	0	N-25°-W	
456	67 II	弥～古	不明	不明	0	不明	
457	43 III	弥～古	不明	不明	11～24	不明	
458	67 II	弥～古	隅丸長方形	250×200	22～30	N-63°-E	
459	67 II	弥～古	隅丸長方形	335×308	19～22	N-48°-E	
460	67 II	古前	隅丸長方形	不明×380	37～40	N-38°-E	
461	67 II	古前	隅丸長方形	不明×678	34～37	N-43°-W	
462	67 II	弥～古	楕円形	318×250	22～29	N-62°-E	
463	67 II	弥～古	不明	不明	4～13	N-55°-E	
464	67 II	弥～古	不明	不明×320	6～12	N-61°-E	
465	67 II	弥～古	隅丸長方形	不明	6～10	N-46°-E	
466	67 II	古前	隅丸長方形	不明×690	20～30	N-35°-E	
467	25 VII	弥～古	不明	不明	26～30	不明	
468	25 VII・71	弥～古	隅丸長方形	不明×698	7～10	N-55°-W	
469	67 II	古前	隅丸長方形	748×665	30～34	N-53°-E	
470	67 II	弥～古	不明	不明	22～30	不明	
471	67 II	弥～古	隅丸長方形か	不明×362	3～7	N-72°-E	
472	67 II	弥～古	円形	径455	10～12	N-17°-W	
473	67 II	古前	長方形	478×388	13～20	N-8°-W	
474	67 II	弥～古	円形	径348	11～19	N-67°-W	
475	67 II	弥～古	隅丸長方形	576×503	39～42	N-15°-W	
476	67 II	弥～古	隅丸長方形か	不明×425	17～23	N-28°-W	
477	67 II	弥～古	隅丸長方形	505×475	26～28	N-67°-E	
478	23 II	弥～古	不明	不明	39～42	N-45°-W	
479	67 II	弥～古	隅丸長方形	346×335	14～20	N-53°-E	
480	67 II	弥～古	隅丸長方形	397×380	20～23	N-50°-E	
481	67 II	弥～古	隅丸長方形	不明×610	29～34	N-47°-W	
482	67 II	古前	隅丸長方形	684×572	30～35	N-50°-W	
483	67 II	弥～古	楕円形	362×346	11～12	N-84°-E	
484	67 II	弥～古	円形か	不明×335	2～15	N-10°-E	
485	67 II	弥～古	隅丸長方形	不明×650	2～9	N-50°-E	
486	67 II	弥～古	隅丸長方形	350×322	22～30	N-62°-E	
487	67 II	弥～古	隅丸長方形	不明×340	15～21	N-55°-E	
488	67 II	弥～古	不明	不明	23～27	不明	
489	67 II	弥～古	隅丸長方形か	530×488	26～34	N-69°-W	
490	67 II	弥～古	不明	不明×360	2～12	N-40°-E	

第4章 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

番号	調査区	時期	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	主軸方位	備考
491	67Ⅱ	弥～古	隅丸長方形	715×633	41～43	N-60°-E	
492	67Ⅱ	古前	隅丸正方形か	不明×436	15～23	N-50°-W	
493	67Ⅱ	弥～古	不明	不明	17～28	不明	
495	71	弥～古	不明	不明	8～11	不明	
496	5Ⅲ	弥～古	不明	不明	13～19	不明	
497	5Ⅲ	弥～古	不明	不明	3～6	不明	
498	5Ⅲ	古前	隅丸正方形か	不明×565	5～26	N-60°-E	
499	5Ⅲ	古前	不明	不明	10～12	不明	
500	5Ⅲ	古前	不明	不明	1～10	不明	
501	5Ⅲ	弥～古	不明	不明	19～21	不明	
502	5Ⅲ	古前	不整長方形	430×380	6～7	不明	
503	69Ⅰ	弥～古	不明	不明	24	不明	
504	69Ⅰ	弥～古	不明	不明	9～14	不明	
505	69Ⅰ	弥～古	不明	不明	30～33	不明	
506	69Ⅰ	弥～古	不明	不明	10～16	不明	
507	69Ⅰ	弥～古	隅丸長方形	不明×330	22～23	N-33°-E	
508	65Ⅱ	弥～古	不明	不明	32～33	不明	
509	65Ⅱ	弥～古	不明	不明	29～30	不明	
510	69Ⅱ	弥～古	隅丸長方形	不明×600	29～57	N-60°-W	
511	69Ⅱ	弥～古	不明	不明	17～26	N-67°-W	
512	65Ⅲ	弥～古	不明	不明	33～42	不明	
513	65Ⅲ	弥～古	不明	不明	40～55	不明	
516	5Ⅳ	古前	隅丸正方形か	不明×530	29～42	N-40°-E	
531	130	弥～古	隅丸長方形	400×375	23～31	N-15°-E	
533	130	弥～古	不明	不明	不明	不明	
534	130	弥～古	楕円形	450×430	29～32	N-13°-W	
535	130	古前	隅丸長方形	375×320	21～32	N-50°-W	
536	130	古前	隅丸長方形	400×390	20～40	N-30°-W	

志木市遺跡調査会調査報告 第13集

西原大塚遺跡 第2分冊

西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 平成21(2009)年2月27日
印刷 株式会社白峰社